尾崎久彌著

増訂江戸軟文學考

東京　文修堂版

序

序と自ら名づくる程のものではない。實は、今度（此の本）に限つて、序文などゝいふやうな、一寸誇示的調子の加はりさうな（動もすれば）物を書くには氣が進まぬといふだけである。が、さりとて、やはりかうした機會に、一々その著の成る動機、心持を書いておくのも、惡くはなからう。すなほに、それが受け入れられたら、讀んで頂く人々にも、都合よからうといふ心はある。それがための此の執筆である。何だか大風な物言ひのやうであるが、自分としては、然りではない。その反對、案外翼々とした心持である事だけを、諒して頂きたい。

此の機會に、唯、此の本成るの直前、自分の本著に對する心持、著者としての心組だけを、極めて一ぱいに物言はぬ程度で、述べさせてもらはう。

私の舊著「江戸軟派雜考」は、今から考へると、誠に慚愧の書である。著者の自分からいへば、一種の彷徨の書であつたのである。元來、「江戸軟派」といふ此の自分の造語も、思へば、中核の

ない言葉である。今日では、これが大分世間に平氣で唱へられてゐるが、實をいへば最初自分が考へ、云ひ出したはなから、その傍ら變な氣はあつた。慥かに新様の語を以て内容より先に賣らんかなの不純な心持があつた事を白狀する。情勢あつて、未だに自分の個人雜誌は、この語を入れてゐるが、これも早晩改題する積りである。唯、廣汎的な意味で一括したやうな名稱が欲しい、といふ自分として當初の要求はあつた。その新味と雜駁と、悦樂味と、彷徨味とあるのは、即ちあの舊著であつて、これが標語の江戸軟派といふ物の持つ概念（確としてゐさうで、漠たる）とよく似てゐる。

それよりは、稍々範圍が狹まつたせゐはあるが、それだけ穿貫的に、多少ましか、否々自分としては、誠の此の種の著作上、眞の處女著作かと思ふのは、本著である。即ち、前上自分の自白でお分りになつたであらうが、彷徨味がやゝうすれて、凝視佇立の狀となつたかと思ふからである。のと、あの當時は、まだ先人の業蹟に依りたい一方であつたが、（それも、獨斷が多いといふ好意的御批判はあつた。）昨今は、貧しい乍ら書庫も相當の量を原本を以て埋め、足らざるは、他氏の秘庫に求めてゐる。和本味に徹したことは、淫に近く、無論あの當時の比ではない。文學、

主に小説（それも今後は、主に洒落本を中心としたいと思うてゐるが、）と自分の渉索を凝縮してきた、それにまた本著のみに始めて現る丶逸文献や、自分の少くとも個性的な考證（又獨斷といふ批評を買ふかも知れないが、但し獨斷なりの理由を擧げない漫然たる心持批評は、私に於て從來からも念としなかつたが、）もある。これらは、慥かに、退一歩か進一歩か、それは批評に俟つとして、舊著よりの自分としては一變であると思ふ。

綜合的記述と部分的探究とは、どちらも難である。綜合も、堅確なる部分の集積に據らなければ、駄目である。此の意味で、自分は、まだどちらにも自分の態度を固めてゐない。否、固める事が出來ぬのである。羨しきは、らく／＼と大ざつぱに物を言はる丶人々の態度である。勿論「考異」と命題にもある以上、本著に綜合的（汎論）記述のみを求めらる丶のではなからうが、自分としては、此等考證が（部分的探究が）、やがて自分の道を拓く基であると思ふ。それがための一過程である。勿論、一般にとつては、すべて考證は、その論證の道程よりも單に結論のみでい丶のであるが、道程、また個々の現象を示してゐるから、以 その斷決以外、個々の現象に關する説明、又は自分考證の據點順序を示すのも、同學に與へる、參考（裨益とは考へないが）にはな

らうと思ふ。それがため、迂餘の記述を平氣でやつてのけた所もある。

たゞ、自分の最近に於ける、淺薄ながらも學業の結果として、これを公刊し得た、その著者としての歡びはある。さうしてそれが、凡て隨時の當初、執筆體裁と事かはり、補筆又は按排工夫を加へ、且つ自由な口繪挿入、(しかも自分の著としての舊著の數種に勝る多量である。)殆ど新生面を齎し得た事を、我子の迂鈍を知る自分には、まだしもの喜びである。それを迂鈍と知り乍ら、喜んで世に出すのは、これも親馬鹿の一種であらうか。

纒りないものになつたが、とにかく自分は、我自分、舊著「江戸軟派雜考」の類を、今日の此の本あらしめた師父とし、これを崇め、さりとて其系統を承けながら、稍異色ある此の不羈なる末弟子を愛してもやりたいとも思ふのである。以上、そこはかとなく。

昭和三年八月二十九日夜九時半　尾張、古見海岸、龍雲院にて

著者誌

増訂版の序

今度、舊著「江戸軟文學考異」が增版せられるに就いて、舊版全部に亘る誤植の訂正と、舊版末尾の浮世繪に關する二篇を削り、代ふるに其後の執筆「江戸時代小說女見立、並ニ評」「稿本（主に戯作もの〻）に就て」、「『きつひむだ枕春の目覺』の作者發見に就て」、及び「稀覯本概論」の四篇を以てした。此の程度の增訂に止まつたのは、遺憾であるが、然し舊版の誤植を永らく苦に病んでゐた自分にとつては、正誤せられたといふ一點だけでも、再び世に出す意義はあらうと思ふ。

とにかく「江戸軟派雜考」（春陽堂版）と、本著と「江戸小說研究」（來春刊、弘道閣版）とは、私のこゝ十年以上の、おぞましくも獨自研究なるもの〻集積、その三部作である。その三の一、こゝに新裝增訂せられて世に出づることは、嬉しからぬことはない。

昭和八年八月十日

著　者

凡例

一、本著は拙著「江戸軟派雑考」（大正十四年六月發）以後の隨時執筆に關はるもの丶中、主に長篇を集む。考異の名を入れたるは、比較的此の種の材料が多きにあるからである。

一、各篇、執筆年月を記しておいたのは、強ち新説、發見の優先を爭はんとに非ず。著者自身記念のためのみである。但し凡ては今次新著に方り、加筆、著しきは、補筆數十枚に亘つたのもある。例へば「膝栗毛物の研究」及び「増井山人著作考」の如きである。

一、本著配列の順序は、概ね、類聚の形式によつた。洒落本に關するものは、本著所收以外、なほ數編を數へ、今後執筆意中のものもある。此等は、他日、一括「洒落本の研究」として、世に問ひたい。

一、本著の挿繪は、當初は、口繪、挿繪、本文刷込挿繪などと樣々に分けたのであるか、印刷の都合上、口繪として、全部一處に集めた。

以上

江戸軟文學考異目次

二　「金草鞋」の編次に就て　…………………………………………二〇四

以上

口繪目次

二七、合卷「甲州道中膝栗毛」本文（芳盛畫）
二八、滑稽本「播州廻り膝栗毛」挿繪（藍月畫）
二九、滑稽本「四編之綴足」後編下の挿繪（墨僊畫）
三〇、滑稽本「三時行脚」下挿繪（素清齋爲樂畫）
三一、合卷「橫濱久里毛」上口繪（芳幾畫）
三二、合卷「橫濱久里毛」下の本文（芳幾畫）
三三、合卷「花土膝栗毛」本文（芳宗畫）
三四、合卷「金草鞋」廿一編本文（國信畫）
三五、増井通人の圖（不詳畫）
三六、滑稽本「津島土產」上の序文署名
三七、花山亭笑馬筆跡（狂歌短冊）
三八、洒落本「歌妓酒戲」の本文
三九、準酒落本「鸚鵡返」凡例と本文
四〇、東里山人畫く雀
四一、東里山人畫く蝶

四二、人情本「花街櫻」下挿繪（國芳畫）
四三、滑稽本「釜身鏡」序末
四四、合卷「磯鳥囀」見返しと叙
四五、合卷「磯鳥囀」本文（國丸畫）
四六、滑稽本「逢夢石」二編本文（初代豊國畫）
四七、滑稽本「戯言句合」本文（國芳畫）
四八、黄表紙「大客唄句」本文（重政畫）
四九、合卷「江戸水幸噺」本文（國直畫）
五〇、合卷「江戸水福噺」本文（初代國貞畫）
五一、吉原本「吉原天秤」挿繪第一（不詳畫）
五二、吉原本「吉原天秤」挿繪第二（同）
五三、吉原本「吉原天秤」挿繪第三（同）
五四、浮世草紙「遊女懐中洗濯」鄙の卷挿繪（不詳畫）
五五、洒落本未刊本「驛客娼穿」口繪（不詳畫）

以　上

口繪略解

○第一圖より第三圖まで

右は、本文第一、西鶴孫東鶴の著作參照。卷三表紙は、卷三と限ることはないが、卷三の表紙が一ばん綺麗だつたからである。題簽の文字は、各卷により多少書體を違へてゐるが、圖案は、全く同樣である。此本、後摺本の表紙は、青一色の稍厚つぼたい表紙。題簽は、初摺本と同じ。第三圖は、本文と挿繪との一斑で、これは、卷一の五ウ六オである。第二圖のもの、卷一序のオ（裏は、目錄）である。

○第四圖より第五圖まで

第四圖は、「俗說辯」卷一、目錄のウ、本文一のオであり、第五圖は、卷五の目錄のウ、本文一のオである。云ひ添へておきたい事は、本著本文「艶道俗說辯の完本に就て」を執筆當時は、此の卷五が、影寫本であつた。平出本は、元來、卷五影寫の五冊本であつた。然るに其後その年十一月、東京在遊中、偶々北野博美氏に逢つた所、同氏は、此の卷五の刊本一冊のみを所有せられてゐた。それが、鶴岡氏たちのいはれる頒布謄寫版本の底本だつた。それを同氏より自分が乞はない先に、快く私に贈呈する意を謂はれた。でお禮を申したが、歸來、間も

なく、お造り下さつたものである。即ち同氏の好意により、刊本五冊を揃へ得た譯である。で記念として、本書には、同氏の藏書印のあつたその本文例ぶぶ、口繪にしたのである。即ち此分、半出の影寫本でない事を明らかにしておく。

第六圖より第十一圖まで

本著本文「娼妓絹籭」と「仕懸文庫」の正版と僞版、參照。

○第　十　二　圖

右、婦人龜遊作とある「世之助噺」、清長畫と稱するもの〻五のウ六のオ。本文九一頁あたり參照。

○第十三圖より第十五圖まで

右の中、第十三圖は、「茶唐」に存在する鼻印の實物。第十四圖は、初版本「廓の癖」序のオで、これが、一のオである。第十五圖は、その大尾、四十九のウであり、卽ち跋のウである。この首尾を有するもの、純初摺本と信ずる。なほ一二七頁——一二九頁參照。

○第十六圖、第十七圖

第十六圖は、「蕩子筌」本文の一オ。第十七圖は、始衣抄挿繪で、「始衣抄」ロの四ウ、ロの五オである。小倉山の定家もじりの描畫、此の繪の擬定家は、無論山東御自身の意であらう。

○第十八圖より第三十三圖まで

これは、凡て、膝栗毛物の研究（本文一三九頁――二〇三頁）の挿繪である。他に載せるべきものもあつたが、先づこれだけにした。また所載したものも、その本の一部分だけに止めた。無論他に同じ本でも、載せるべき數多の挿繪を割愛したのである。唯、見た眼の變つた物の羅列を圖つた。今その原本、所揭丁數を揭げておく。第十八圖、津島土産は、初編上の十四ウ十五オの挿繪で、梅樹逸人といふのは、日本畫家花鳥畫の大家、名古屋の生んだ逸才、梅逸の事だと思ふ。梅逸に、この隱號あること、自分は最近に知つた。大梅逸とても、當時は、左程の名聲でもなかつたらう。また作者、增井とも親しかつたらしい。かうした片々たる滑稽本に、挿繪してゐる所、中々に面白い。第十九圖は東海道中繪本膝栗毛、五編下の赤坂、同書の十一ウ十二オである。第二十圖は、栗毛彌次馬初編の七ウ八オである。此の繪柄に就ては、本文にも一寸觸れておいた。第二十一圖は、身延道中滑稽華鹿毛、輕業の體は、二篇下の三十一ウ三十二オである。第二十二圖は、臍磨毛、その上の一ウ二オのヒラキ。第二十三圖は、膝すり木、その上の廿九ウ三十オ、右は本文の續き、左が繪。第二十四圖は、井中水で、その上の十ウ十一オであり、市姬の宮附近の妓家の店先、東寺へ行く道を敎へてあげるとだまして、引張つてゐる所である。第二十五圖は、膝栗毛面白草紙の初篇上の十二ウ十三オ。橋錢をとる番人は狐なり、往來の人を狢なりとは、の狂歌を詠んだからのいきさつで、怒つてゐる爺は、橋の番人である。第二十六圖は、有馬紀行の上、十七ウ十八オ。第二十七圖は、甲州道中の十一ウ十二オである。こゝに、猿橋の由來に就て、桃太郎傳説にこじつけ

た本文がある。上欄の文字。即ちこの附近に、鳥澤、猿橋、犬目、とあつて、これが桃太郎の犬鳥猿に交渉ありと、尤もらしくいうてゐるのである。第二十八圖は、播州廻り前編上の十三ウ十四オ、淀屋橋筋を越えて兩名、大名の藏やしき邊を通るのである。第二十九圖は、四編之綴足後篇下の三ウ四オである。色狂ひの女と兩人の體で、場所は、名古屋七ツ寺の境内である。第三十圖は、三時行脚下の十八ウ十九オ。第三十一圖は、横濱久里毛上の二のウ三オ、即ロ繪のもので、原畫は藍摺である。第三十二圖は、同、下の十ウ十一オで、横濱遊廓、外人素見の體である。第三十三圖は、荏土膝栗毛の末尾で、十九ウ二十オ、兩人の江戸出立。

○第三十四圖

「金草鞋」の體裁を示すため、その初摺本、廿一編の五のウ六オである。見らるゝ如く、すつかり合卷の體である。但し合卷の純粹物の如く、物語的小說ではない。各地の案内樣式で、正系膝栗毛物よりも、更に土地紹介本位になつてゐる。この體裁を更に幾分か小說的內容を加へたが、一見樣子の似てゐるのは、魯文作の諸種膝栗毛物である。例へば、その日光道中、甲州道中など。殊に地名を掲げ、毎丁、挿繪をそれに應じて描いてゐる所など。

○第三十五圖

增井の傍系の曾孫渡邊氏に殘つてゐる增井の肖像を載せようかと思うたが、此の方が面白からうと、これにした。これは、本文にも紹介した大惣貸本用寫本の　野晒玉子（本文二三五頁以下參照）の扉繪になつたものであ

る。畫家不詳であるが、幾分增井の風丰に似せて、輔助に拵へたものだと思ふ。

○第三十六圖

これは、增井の筆蹟を紹介するためである。序の本文も然りであるが、これは、無論彼の自著、その明らかなものだと思ふ。上卷序三のウに當るものである。

○第三十七圖

笑馬は、增井と密接な關係にある男だと思ふ。いづれ、他日、更に材料を蒐め、綜合して、「笑馬」の輪廓を明らかにしたいと思ふが、今は、その前段として、家藏笑馬の短冊の中より、此の一枚を拔いておく。狂歌であるが、家藏短冊の彼の中では、「他になほ三枚あり」まだ感じのいゝ歌だと思ふ。すなはち心持の出た歌だと思ふ。

作年代不詳、天保頃であらうか。

○第三十八圖、第三十九圖

增井山人に關しての挿繪、本文「增井山人著作考」(二三五頁――二六四頁參照。)前は、彼の闌足改題本酒落本の「歌妓酒戯」の本文七ウ八オのヒラキであつて、右半丁は、新版木、左半丁は舊版木、即ち新舊版木の闌足の堺目を示したので、左は、「替理善運」と全く同一版木なのである。後のは、准酒落本「似口早指南鸚鵡返」の凡例二ウ本文一のオのヒラキの體である。

○第四十圖、第四十一圖

右兩圖は、東里山人の畫技を示したものである。（本文二八八頁參照。）前の雀は「お玉が池」上卷序一オ。後の蝶は、「心意氣」三編上序一オである。相當に、習つた腕だと思へる。落款の體も、これで本人中々得意らしく思はれる。

○第四十二圖

東里山人に關したもの。（二九〇頁以下參照）諸書目及び新修年表に缺く本で、國芳の挿繪である。「花街櫻」下の十六ウ十七オの挿繪で、殘虐畫といふ程でもないが、普通人情本の甘い風調の畫よりは、異つた氣分、しつかりもしてゐると思ふ。

○第四十三圖

本文三〇五頁以下參照。「岱身鏡」上口の一ウ二オのヒラキの體である。

○第四十四圖、第四十五圖

前は、「樅鳥囀」見返しと一オのヒラキ。後は、同七ウ八オの煙管道行の體である。本文三一八頁と三二三頁以下參照。國丸の畫も、また棄て難きものがあらう。及び道行のヒラキの體裁など、種彥としても、彼の合卷の見慣れた眼からは、珍らしからう。

○第四十六圖

[illegible]馬轉」の參考に、類似作、寧ろその先蹤と思はれる、京傳の「逢夢石」から、挿繪及び本文を見本として掲げる。圖は、その二篇の本文十六ウ十七オである。

○第四十七圖

「戯言句合」の二のウ三のオ。これも種彥物としては、一見珍種であらう。が彼の木卯としての川柳作家たるを思へば、これは寧ろ至當かも知れない。この國芳の畫、精細、描線よし。（本文三三八頁參照。）

○第四十八圖

本文三四三頁參照。その二のウ三のオである。

○第四十九圖

本文三七九頁――三八〇頁參照。

○第五十圖

小三馬の「江戸水福ばなし」の三ウ四オである。（本文三九〇頁參照。）

○第五十一圖より第五十三圖まで

本文「吉原天秤の體裁と全內容」參照。（三九四頁――四二九頁）

○第五十四圖

本文四四一頁以下參照。部卷三十三ウ三十四オの半丁圖である。座敷操の體の圖として、一顧の値はあらう。

〇第五十五圖

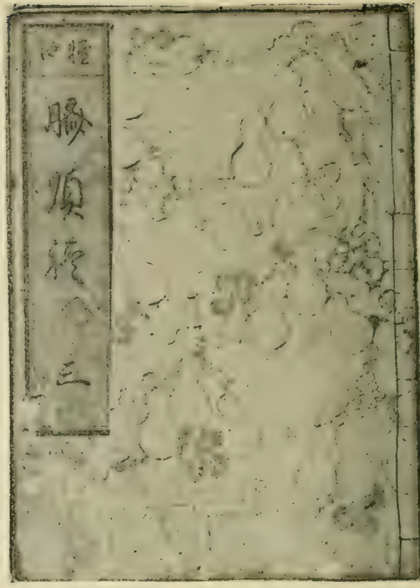
「宮のお龜考（四九五頁以下）の挿繪のつもりである。お龜には、一ばん近い、宮の洒落本、例の大惣寫本の「驛客娼穿」といふものゝ口繪である。此本三章づゝ上下二冊に分れ、作者は不詳、例の增井山人が跋を物してゐる。作年代は、文化元年。此の繪は、その上冊の本文始めのもので、原圖は、泥繪具のやうなもので彩りした、極めて稚拙な味の多いものである。妓の感じも、英泉などの「五十三次」物の、吉原的遊女よりは、當時の所謂おかめに近きものであらうと思へる。因みにこの作は、お妻八郎兵衛に人名を借りてはゐるが、名古屋男と宮女郎のいきさつで、自分の知る限りの寫本熱田遊里洒落本の尤である。（このおかめは、宮の當時の第一等遊里神戸のものである。）いづれこの作は、他と雜へて、稿本洒落本集として、發表する機があらう。

〇第五十六圖

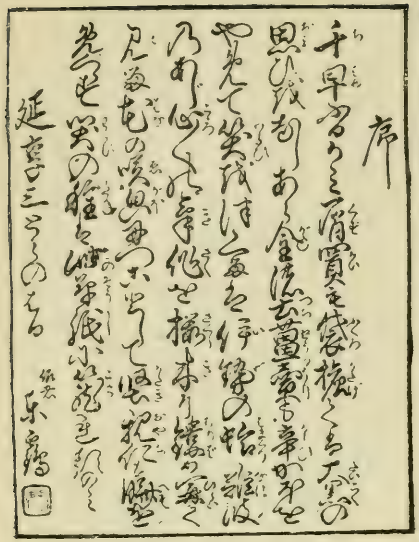
稿本「音曲神戸節」初丁表の體。（本文、五一〇頁參照）。

〇第五十七圖

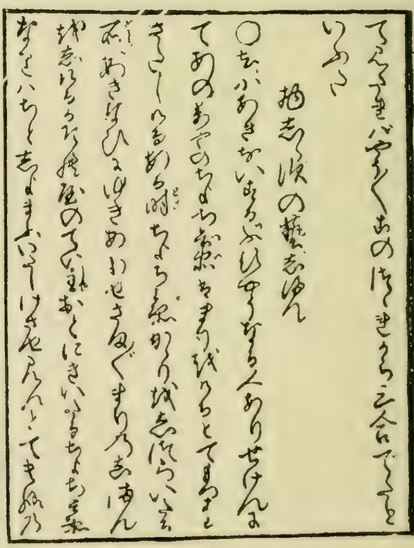
「錦之裏」序一のオ、極印の所在を示したのである。（本文五四三頁以下）なほこれは、本著前掲「娼妓絹籭と仕懸文庫の正版と僞版」の次、その七三頁以下にも交渉がある。併せ見られたい。

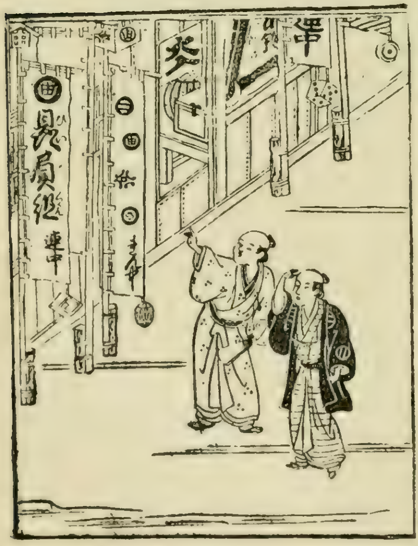


一


序

二





三

○偕老同穴と云説
○水あびせの説 付 礫打の説
○縁ひ女に夕の字を書説
○かま神の説　○三年の菓子説
○檻をおくりぬとのしく云説
○苑箆の説　○志ら蟇の説
○事に蟷螂おさへ鈎人見ずと云説
○かひなし云説　○おくれると云説

已上

艶道俗説弁巻之一

不知足　著

○男女年ふりしてハ嫁娶を殺すと云説

俗説に男女としつかくしそめるハ礼にそむくといへ内則に曰男子二十而冠三十而有室女子十有五而笄二十而嫁とこそ振もるゝは妹斎先生ノ云儒者又しては礼にりて男子三十ならずしてハめとらず(と)いへり我朝の古法とちがふなり戸令

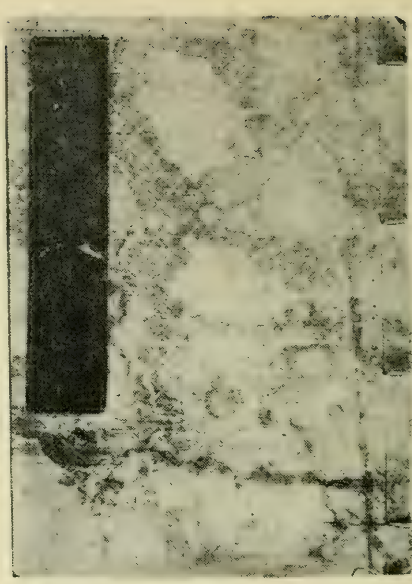
○堕胎の説
○春こ夏六れ説
○婦かりの説
○厭女ハ云説
○生下未分の説

艶道俗説弁巻之五

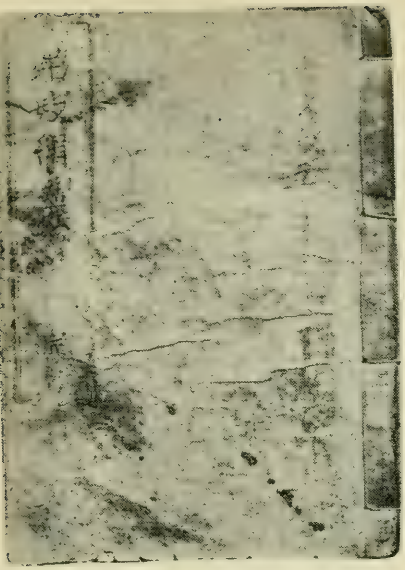
不知足　著

○枕絵を具足櫃へ入る説

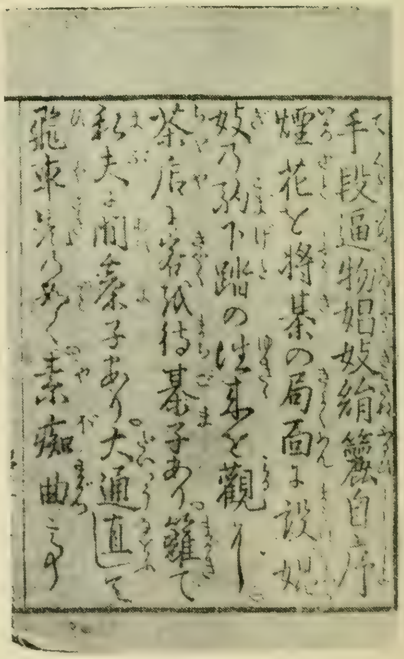
まくら絵を具足櫃にいれてよしといふ事を云伝へあり武家俗説弁に云武夫戦場に向ふ時ハ家を忘れ妻子をわすれ身をわするといへり何ぞかやうの穢ハしきものを軍中に持てゆかんやもし此をもて悪魔ハらふひろし時ハ未練のよりも知ざらん勇夫の法を



六

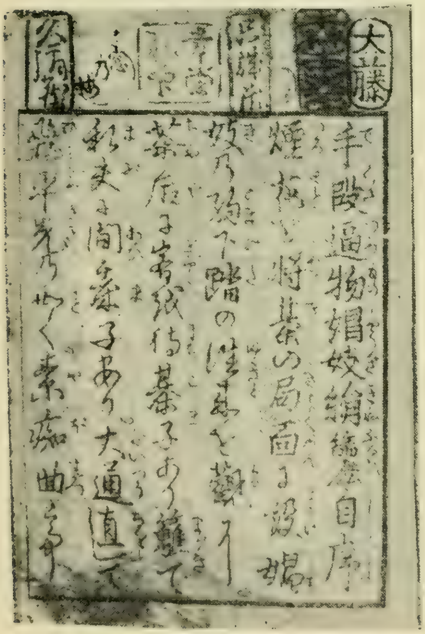


七



手段通物娼妓絹籭自序
煙花と将棊の局面に設え娼
妓乃形下踏の法事を観れ
茶店に岩紙倍棊子あり雛で
私夫に間象子あり大通直で
飛東洋の如く素痴曲にすり

八



手段通物娼妓絹籭自序
煙梅と将棊の局面に設娼
妓乃形下踏の法事を観れ
茶店に岩紙倍棊子あり雛で
私夫に間象子あり大通直で
飛東洋の如く素痴曲にすり

九



一十

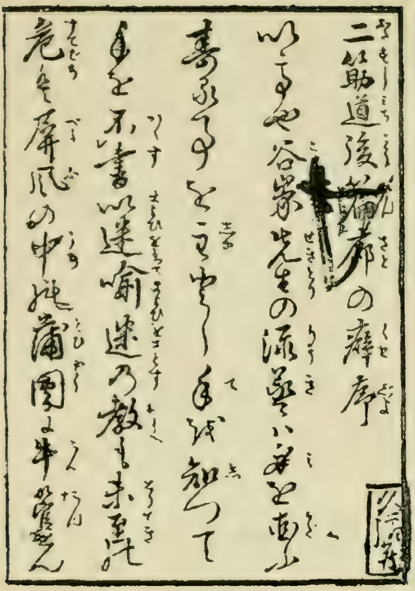


十



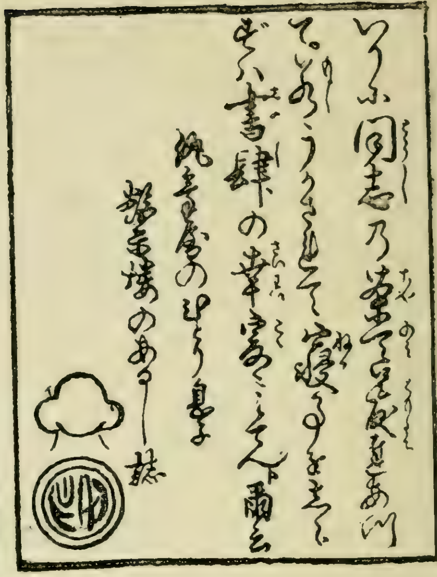


二十



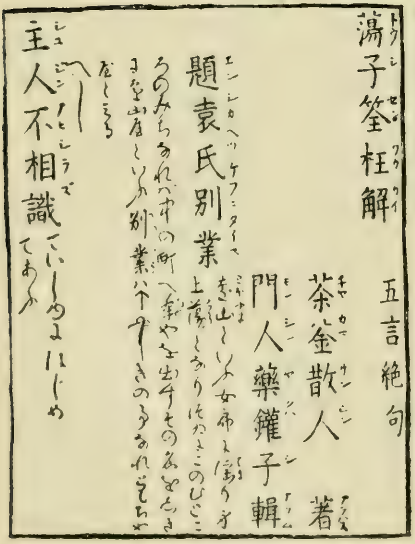
二筋道後篇の序
谷峩先生の流義

十四



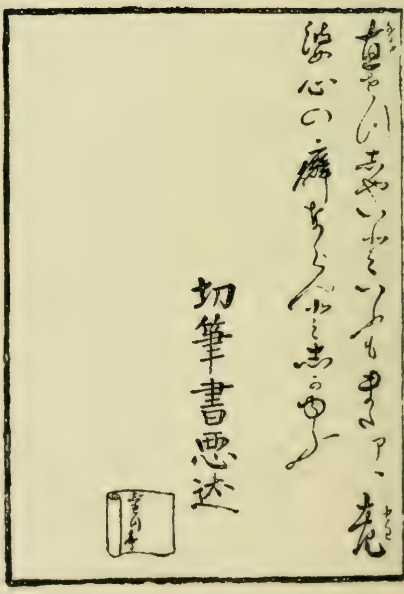
同志乃
書肆の

十三



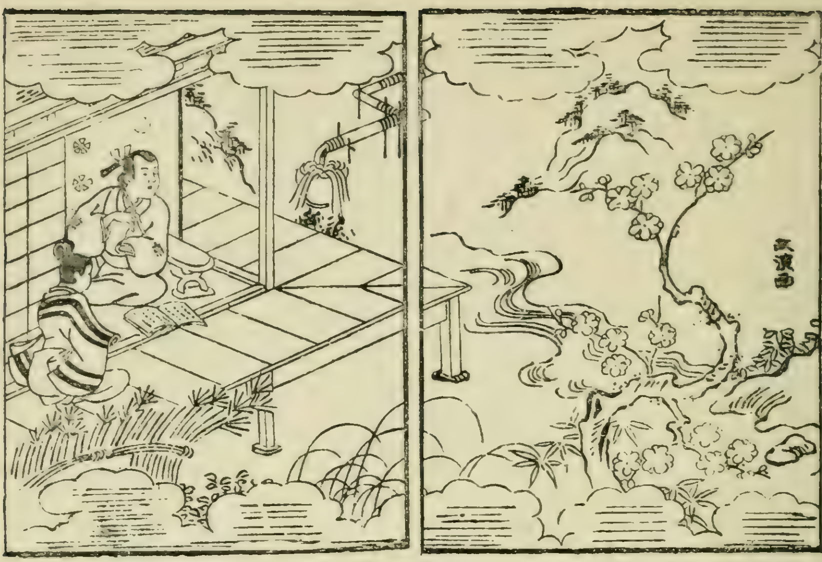
蕩子筌枉解
五言絶句
茶釜散人 著
門人藥罐子 輯
題袁氏別業
主人不相識

十六

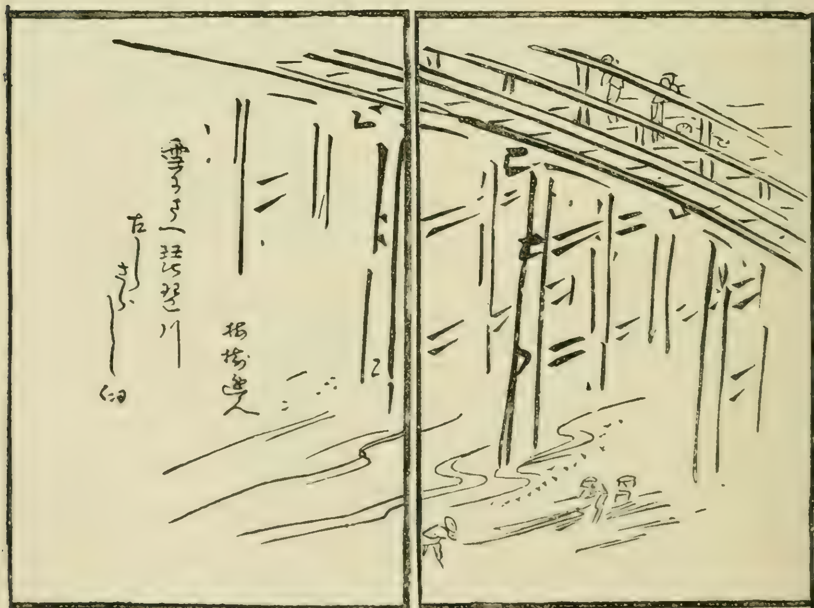


切筆書悪述

十五



七ト

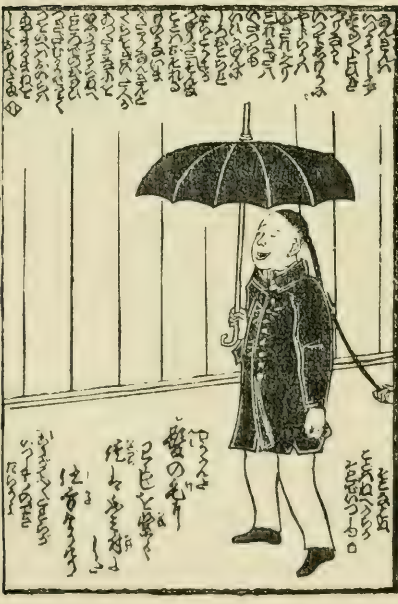


八ト

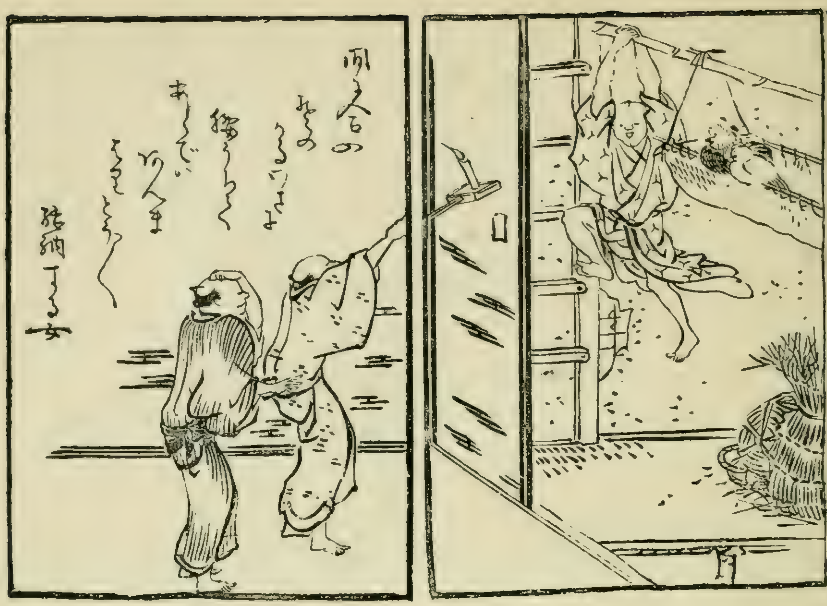




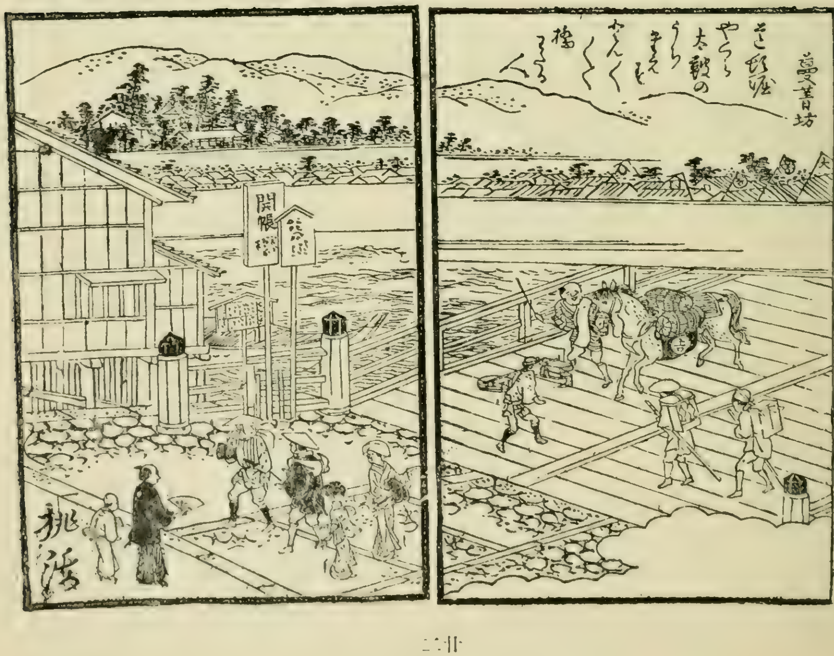
九十



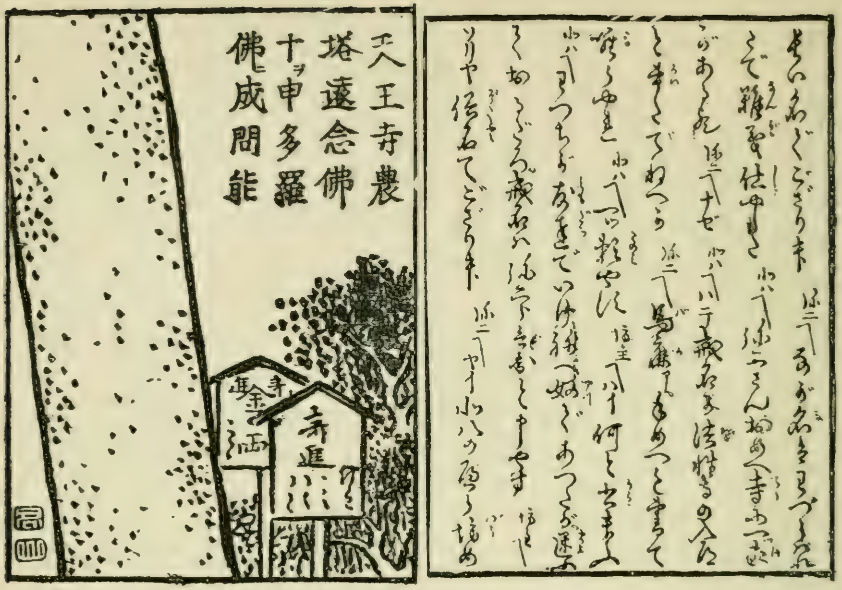




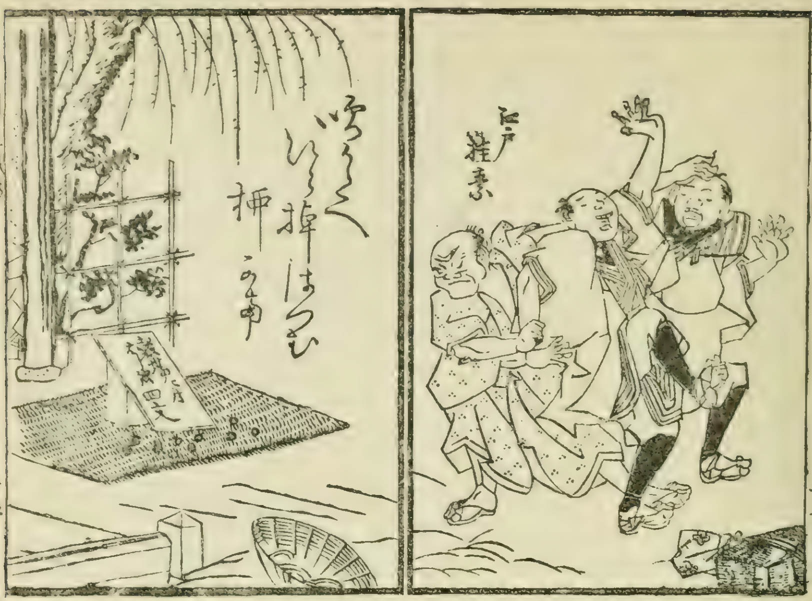
一廿



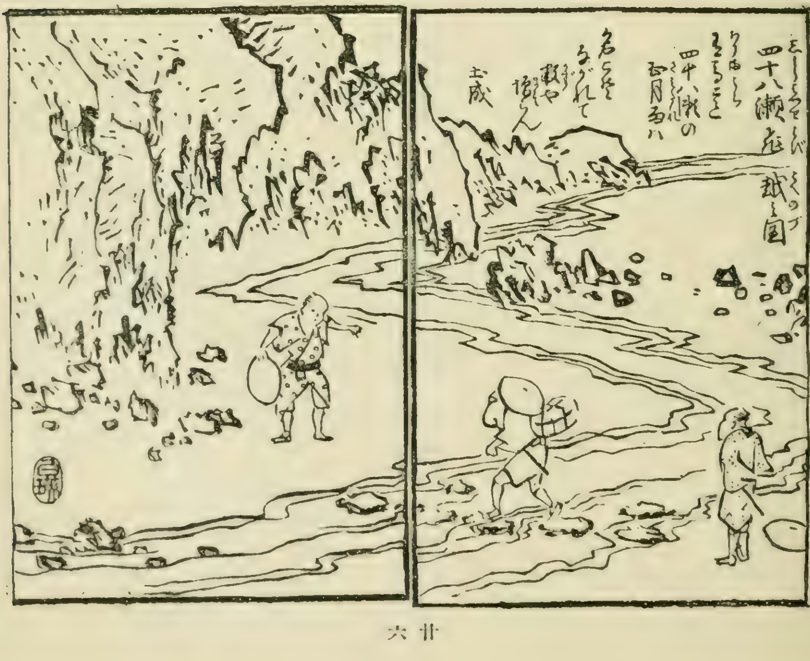
二廿


天王寺農
塔遠念佛
十ヲ申多羅
佛ヒ成問能





五廿



六廿


猿橋


鳥沢 二里







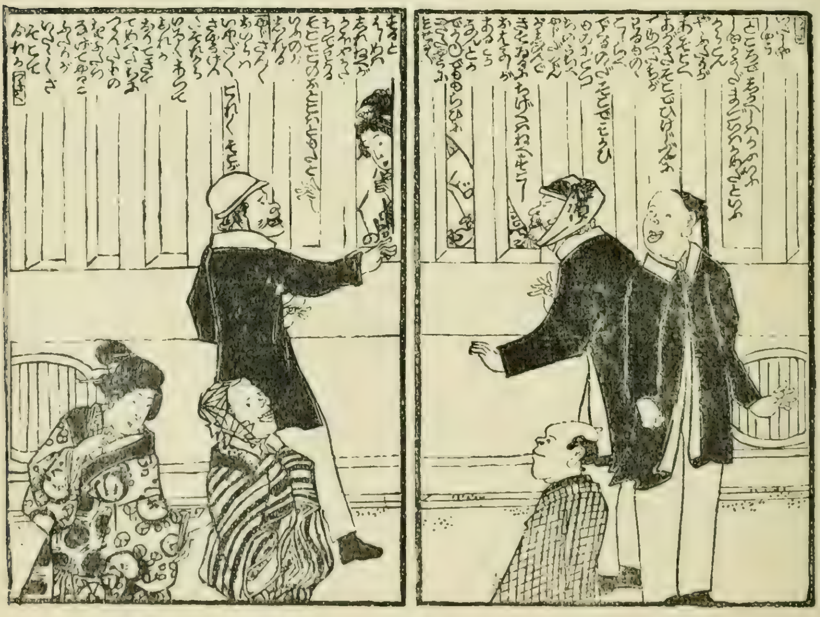
廿九



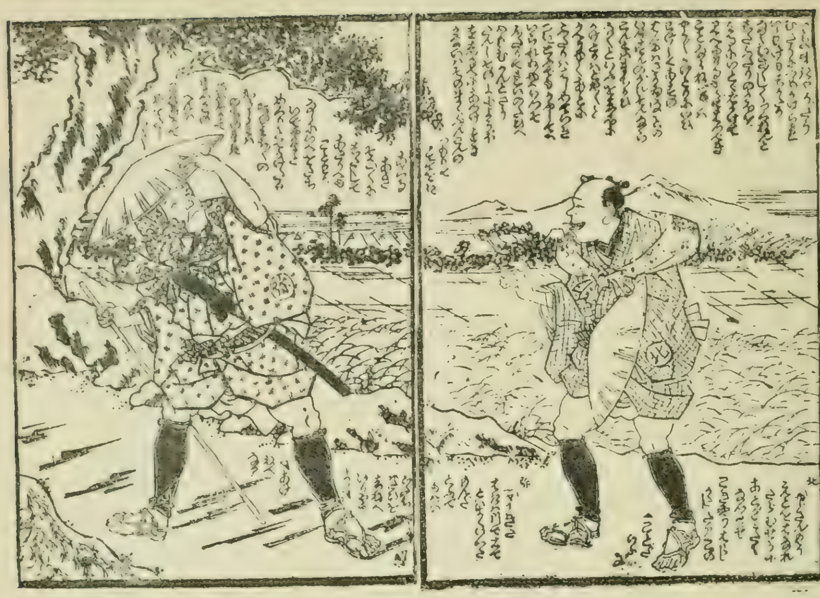
卅



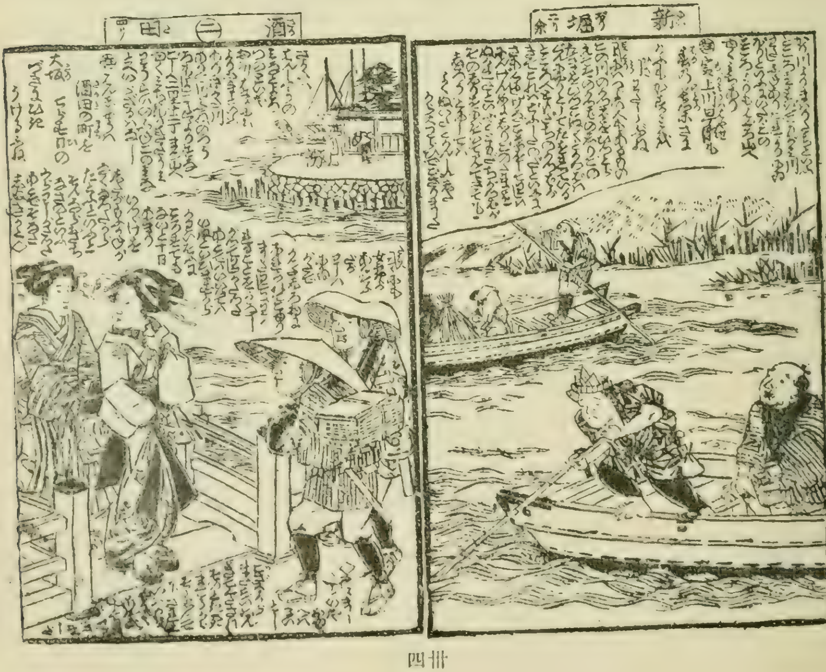
一卌



二卌



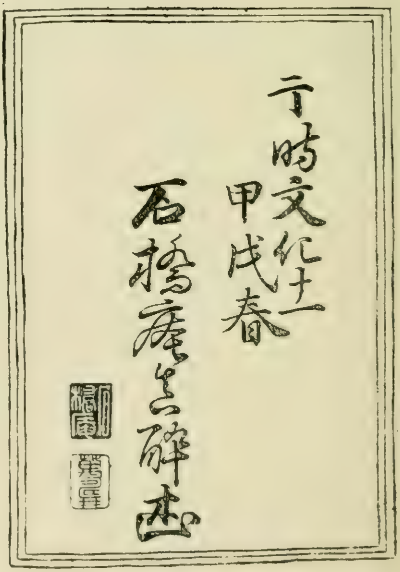
三卅



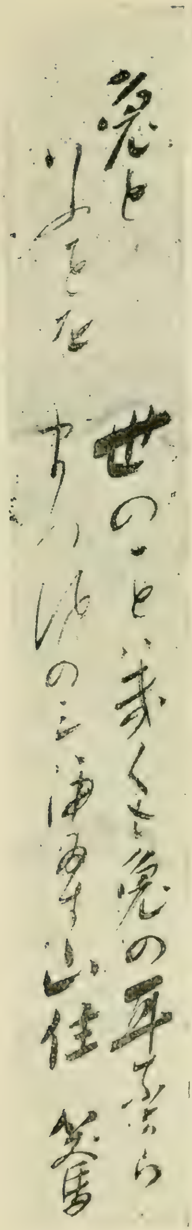
四卅



五卅



六卅



七卅

益なきことに益あるやうにいふハ此道の
ひとつのたがひにて己が詩にてもほめんとする
事多く又三弦箏相の節あるも怨
懟哀戚の節のとまれる通子もあるべし
通子とあるすがたいくらでも彼の青
べからしれ意味深長なる事にも
精覚なべからず顔に人情を知らずんバ思ひ
此所書とまた??行へし

の形ハ不恭祭属く佐立屋のは踏次に此
高き三勝と語れをつけく音曲を案じ
も統一の楚古所あり此二揚が内ハ踏次
ゆへ分一?ぐさせるりてそ入ぬ?八絃を?
と打させられ揚達子ハ在々抱え?
の緒ふ??ぐらも老人に伝る家にて此
手近名りてこの形り?つるも今ハ?れ
ふをとらりじとんれらく父母の蒙無??

八卅

○其をとれはふべし
何事ふいきゝ?變ありたとへバ「いハしのかしら
らも信んから」「いわしのかぶも信んから」「隆
ふらしみハかずく「ござる」「隆ふらしとハかなく
おれど「さてくひくハでも言すじ」「ぶしハ
くハ添とる言すじに御?此れおうしく見へ?
双方を用ひぬれバ心自ら?あやまることなか
き

似口鸚鵡ふ屋し初編
古今混雑の部

イ 身を鶴行などゝたとへし娘く　多雄
ロ 遊興楽もうみをもられ　仝
ハ 花の上の扇紙も来てできもし　丁斎
ニ 麦ふむられて宿る荻原川　東??
ホ 松さがんきのわぶ文んせる花　仝
ヘ 毎ゝ紗女郎をとりまかり　仝
ト 不二を宝殿と一夜又??まひ　五六?

九卅



十四



一十四



真澄の鏡とハおのれ/\が姿を向ふ鏡の
曇なきにたとへて誠は花にまことなしと人の息
を常にみがきて清くすると是糠にて
顔をうつす鏡よりは清きの事は
さらなり姿の見えぬくらきうちをん
心むかふ人をこゝろ面見て是この妙宗を
文辞そかぎりにて唯今のおもむきをば

うつしてそ出てきたる悪むも善きこゝろ
心の僕なり善心の根をはりすてすゝむも
読書の舞台の肖像の内侍所の神鏡に
不恥して書林が掟を書くものなり
けらし

卯の春

教訓亭 春水誌

非情音介
檣鳥囀
全壹冊
栁亭種彦作
五彩樓國丸畫



叙

最近東の両國より。鸚鵡といふ名鳥渡り。非情
有情の物まね似せて。諸人の耳目を驚かせし無言
[illegible]



[illegible]



志かみ火鉢

埋火にかゝりけふせし〔〕かな

神叔

いてあるめいおを平濁り泥亀を袋のまゝ成まちうてどゞへ
持つゆけてくるかおゞポンゞんゑへ我雷と云を借りし笑の人といふ
〔〕其角ぞねとぬりしきまゝてふ斗のをぞおげくのそれに酒と添
とろておれがつて〔〕緑青ぞつけふ走や了ぞで。これまでこゝろ待しま
せりちこび待つてゐるおれもはいんきようえんにつられて酔たふんわん。
まつわさふちゆうくまで有ぎれいぞもつて今では数代の漢ふまぎれて
酒代おぐりたがりなくおびより。其愛屋の念ゆ浅の同揃の身のつくぞ。
これより数様の入り人にろて。それやの真似ぞせしだもく

○狼人成おくる

ある山家の女房旅中に乳のまぬいで山成越てゆく途中。

題 船

左 羽織を二枚あつらへ雪見船

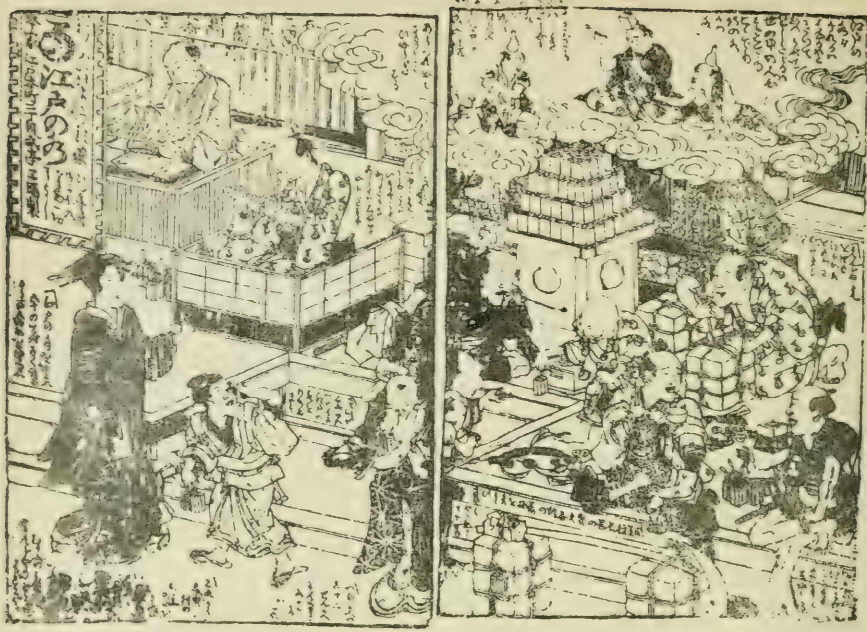
右 扇の蒲団を按えで涼ぶね

勝

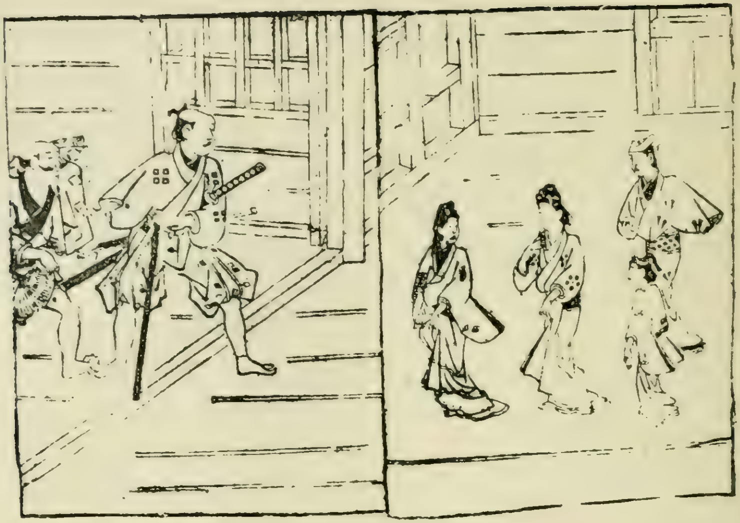
左羽織とみ女藝者の事なり二人りを二枚といふが通言なれば金持の雪見さもあるべし右中比の鯛子句なく様貫舟のいちもつとも流行なれるゆゑ不尋なる。この蒲団より唐本様の下細ありハおそうるゆゑて左の藝者に勝の字の花をおくる




有琴本檢脇
有銚子
知所先刻呑
則近部屋
自亭子以至於
諸人壹是皆以
身賣爲本手







一十五



二十五



三十五



四十五



五 十 五

[illegible]

増訂
江戸軟文學考異

西鶴孫東鶴の著作

東鶴の存在

嘗て雅俗文庫刊の「此花」第三枝に、東鶴西鶴南馬北馬、と題して左の記事があつた。

「(前略)貞享元祿の頃、大阪に井原西鶴といふ淫文家のあつた事は、誰でも知つて居やうが、東鶴といふ先生のことは、知らない人が多からう。明和七年版の勝川春章筆「繪本舞臺扇」の序に「攝陽西鶴孫東鶴」と署名してある。此外の本では東鶴といふ名を見ない。西鶴の孫東鶴とは、何人かの洒落か爲稱か、はた事實か否も判らない。(下略)」

以上、本題に交渉を持つた、東鶴に關する記述の全部である。此花記者は、是以上此の東鶴の輪廓を追求すべく止められたらしいが、同記者の氣づかれた「繪本舞臺扇」の序及び跋によれば、朧ろげ乍ら此の東鶴の實在的輪廓が分り、西鶴孫東鶴と自稱することが滿更の虛誕でもなからうと、自分には思はれるのである。以下、先づ「繪本舞臺扇」序跋に據つた、自分の東鶴身元の探究である。

「繪本舞臺扇」の序

書二文臺中之首一

(前略)夫東都勾欄之盛也冠二海内一(中略)余始覩二此壯觀一欲下寫二其眞一而齎二故鄕一而誇上二三友人一焉文調春章二氏者都轂畫工之逸品也乃爲レ余揮二通神之筆一畫二寸眸之明

「五彩煥發咄々逼レ眞而飾レ之以ニ誹歌一」（下略）

攝陽西鶴孫東鶴□□

これが、彼自身の序である。文壺とは、此書、（舞臺扇姿畫）ふみのつほと、識はいふが故である。此の自序を以て、既に東鶴が、自ら西鶴孫と稱して[illegible]であつた事。東鶴の故鄕は大阪で、一時この明和七年頃（舞臺扇刊行の年）江戸に來てゐた事。其の故鄕への土産として此の繪本が成つた事。春章文調とも交情の程度は不明であるが相識であつたらしい事。是等が肯ける。（此の自序の署名の下の印章は、上が象の形で、始見全象と四文字があり、下は角で、右の陰に山が白ヌキ、左の陽に高不貴とある。）

「繪本舞臺の扇」の跋

尙、次にも示すが如く、同書下卷の、磔川散人菊堂の跋には、東鶴に關して緊要な記事を含んでゐる。

「難波の東鶴古鄕へ歸る錦繪をもゝあまり集てみづから序をつくり草明自在の言葉を乞てこの草子の魂とせんことをおもふ（中略）編者東鶴はとしころ予が交通の俳友ことし六そじの老つ波また逢ふべくもはからざればとしきりに抜（跋）を望むにまかせ行先にほふ梅の句をそへて此本の末を壽く也

この花の江戸畫分根や難波人

磔川散人

普通觀菊堂」

次に(此の跋の次)、今昔發句が三丁半ばかり記されてある、筆頭は、芭蕉、軸は菊堂である。一丁表終り、芭蕉より六句目に、西鶴の「雪空と鐘にしらるゝ夕べ哉」といふ句が載つてゐる。その古今發句の中、今人の所々に、詞書があり、それに東鶴に因んだ文字がある。「月雪の外に見るものは何、難波の東鶴子古郷へ飾る錦畫の一集に發句せよとひたすらに好れければ」といふ蕪志といふ男や、「東鶴子の需いなみがたく三子顔見せの句を送るとて」といふ在轉といつた男などの名が見えてゐる。とにかく當時在府の發句名流(?)の附錄である。以て東鶴が此等と相當に交誼のあつたことも肯けよう。(尙、附錄の古今の發句では、畫者春章・文調の作も載せてゐる。)

卽ち以上によつて、更に、東鶴は、明和七年(舞臺扇上梓の年)頃は、齡六十であつた事。舞臺扇は、東鶴の編であり、東鶴の編著の一として數へてよき事。江戸の俳人と時々文通あり、來府以前、浪花にありても、東により名の聞えた事もあるらしき事。などが斷じられるであらう。

卽ち、以上を綜合すると、西鶴の孫東鶴と稱する男が浪花にあつて、俳人として相當に名が響いた。師系は不明である。明和六七年頃、(或は尙その以前)江戸へ來て、故鄕への土産に、春章・文調の繪師に役者似顔を描かせて、「舞臺扇姿畫ふみのつぼ」(一に繪本舞臺扇)三冊となし、知友の句に古人の句を混へて附錄とし、尙、知友の跋を附して出版した。(版元は、小石川傳通院前、雁金屋伊兵衛)生

西鶴に子孫ありしや

歿年は不詳であるが、明和七年に、六十歳であつたことは、確からしい。といつたものになるのである。

といふのは先づよいとして、此の東鶴が西鶴孫で事實あつたか、或は詐稱であつたか、これは何とも斷言が出來ないのである。それに普通の西鶴に關した記錄、研究の凡てに、自分の探した限りでは、西鶴に子孫のあつたことは書かれてあらぬ。妻はあつた。外骨氏の「浪花名家墓所記」によると、西鶴歿の前年(元祿五年)にその妻が身まかり、法名を光含心照信女といふといふ事が分る。然し子供があつたか否かは分らない。弟子の團水等の「置土産」、「名殘の友」の序を探しても、遺族の事が分らない。都の錦の「元祿太平記」には、西鶴の私行上、殊に家庭——妻子には、一向觸れて居らぬ。妻があつたならば、子もあつたらうとも思へる。また無くとも、長い五十二年の生涯には、一人や二人の女に子の出來たことも、正しい考への中に入つて來る。すると、此の東鶴が、若し本當に西鶴の血筋の孫であるなれば、西鶴の妻の子の生んだ末か、又はそれ以外の私生子か、何れかであらう。然し妻の子なれば、遺族として團水等よりも扱ひを受けねばならぬが、一向それが見えぬ所を見ると、内々の子であつたかも知れぬ。即ち妻以外のである。その子の生んだのが、東鶴かと思へるのである。但し東鶴は、西鶴の果して孫であるとしても、西鶴の血が、その父にあるのか、母にあるのかは斷言出來ぬ。それは、お歷々——唯、西鶴の孫といふことだけは、十の中七八分は本當らしくも思へるのである。

の連中に附錄の發句をさせ、相當の連中と永い交りもあり、殊に、出版物の「舞臺扇」に、公然「西鶴孫」と書く大膽さのある以上、滿更「西鶴孫」と稱して、江戸下りをなし、江戸の連中を西鶴血統の名に於て煙に捲かうとした、一種文學上の詐欺漢であるとも思へない。卽ち友人ども一二の詞書によつても、西鶴孫といはれても別に咎めず、をかしくも思はなかつたらう程度に、卽ち彼等も亦無論それは信じて疑はなかつたらうと、その語氣によつて思へるのである。若し果して東鶴の西鶴孫が詐稱であるとするなれば、彼は餘程舊くから此の詐稱を用ゐてゐた。無論大阪に居る時からと認めねばならぬのである。

東鶴の身元に就て考へた最後に、彼の所謂祖父西鶴に遺子があつたかなかつたかに關して、唯一の觸れた記事がある。それは、木崎愛吉氏の「西鶴研究、金の卷」であつて、それに、「西鶴には遺子がなかつたであらう。」(同書、四七頁)と、僅かに見えてゐる事を云添へておく。

×

東鶴著の端本

以上は、「舞臺扇」から見た、自分の東鶴の描摩であるが、扨、自分が如此き模糊たる架說を敢て爲した理由は、東鶴に尙一種の著述ある事を披露したいが爲の、序說であつたのである。「此花」にもある如く、「舞臺扇」以外に東鶴を知らぬと云はれてゐるが、幸ひ、自分に東鶴著の別本がある。無論此他にも東鶴著はあり得るであらうが、人々の注意を惹かぬか又は埋沒かであらう。とにかく西鶴孫東

「輕口臍順禮」の序

鶴といふだけ（眞稱僞稱は先づ別として）、滿更面白くもないことなからうと、紹介に及ばうとした譯である。それは、「輕口臍順禮」といふもので、半紙本一、二、三、四、五の五冊である。（此の外題のもの、一切の書目に見えてゐない。）板元は、卷五の奥附によると、京の二書肆の合梓である。内容からいふも、無論上方本である（卷二に、國太夫節といふ詞がある、江戸なれば、ぶんごと謂ふべきである。卷一に、四條の芝居、或は祇園町などゝいふ說話がある。）刊行年代は、奥附及び序により、延享三年春たる事が知れる。明和七年に假に六十歳であつたとすると、此年彼は、三十六歳の壯年である。さて左は、その卷一の序である。

序

千早ふるかみ屑買も袋擔ては大黑の思ひをなしあら金の土董賣も辛かほをやめて笑をつくるは伊勢の蛤難波のあじ心〳〵の氣作を櫻木に鏤め開て見る花の咲貌につことして堅親仁も臍をめぐらす笑の種は此草紙に籠れるのみ

延享三とらのはる　作者　東鶴□

見らるゝ如く、此の序には、西鶴孫とはしてゐない。以下は、五卷の全目錄である。（一卷毎に各々、その目錄を載せてゐる。）

「輕口臍順禮」五卷の目錄

卷一　目錄

卷二　目錄

卷三　目錄

卷四　目錄

六　遠慮ぶかいあいさつ

巻五　目　錄

一　病人は狂人
二　もんもうなさん用
三　じまんものゝとんさく
四　りうぐうのゆふらん
五　あきんどの名法
六　粋惘たあいさつ

以　上

同じく本文抄記

各卷、挿繪二三葉づゝ、拙ではあるが、頗る古雅な感じである。左に、各卷より代表的なもの、一話づゝを拔萃しよう。

有ルものがない

○河原にこじき二人居ける。そのそばをさるうとく人のいんきよとほりけるが、一人のこじきいふやふ、あのいんきよはかねもちそふな、先百貫めより上はいくらあらふもしれぬといゑば、今一人のこじき、いやそふいやるな、このぢう町の人があのこじきには頭が

一升もあろふといわれた、それでおれもはかつて見たれば、やう〳〵このつどれから三合でたといふた。(巻一)

心中に似合ぬ外題

○若者よりあゐしに、その中に小むづかしき者一人ありて、いづれもがたは、とうせいはやる國太夫ぶしをかたらるゝが、ことぶきになるぜうるりは、うをづくしか、しんたかだちより外はなきかととへば、いや〳〵まだ外にめでたいぜうるりありといふ。それはなんといふぜうるりといへば、高砂相生初旅といふのがあるといふ。それはどうした文句だととふ。かの者いふやう、高砂より住の江までの道行ぢやといふ。さてもめでたいぜうるりじや、さぞきりはおもしろかろふ、どうした事じやといふ。ハテぜうとうばの心中じやといふた。(巻二)

間に合ぬきれい好

○去ルきれい好をする人ありけるが、つね〳〵用心きびしく、手鑓小太刀などを家のうちにたしなみおきしに、ある夜ぬす人はゐりけるに、ていしゆやがて見付、かけたる鑓をおろし、つきころさんとおもひしが、両手のゆびさきにて、やりの柄をつまみながらゐる。そのうちにぬす人おもてへにげていでければ、内儀生合てていしゆにむかひいふやう、

さて〳〵今の達人はざんねんなることをなされた、なぜつきとめはなされいでといゑば、ていしゆぬからぬかほにて、この柄のほこりを見よといわれた。（巻三）

名香の聞ちがひ

〇四條なわてへんの茶屋にて、去ル人がらなる者、たゞ一人あそびゐけるが、おりふしよぶゐにて、てうしのかんをかゑにやり、ちよと懐中より香をとりだし火入にくゆらしければ、なかゐなをしたるてうしをもちながら、二階へあがりながら、かのかほりにおどろき、ハテどこやらよきおとがするといゑば、かの女ろういふ、どこぞで、もちをつくであらふといふた。（巻四）

じまん者のとんさく

〇あるものいふやふ、あまりことりもおほいが中に、ほとゝぎすといふもの、さとにきてなかぬもの、あれはすくなきものかといゑば、いや〳〵ほとゝぎすはたくさんなるもの、こちらのうらへはまい日きてなく、ことにつがいづゝおりてなくといふ。これはめづらしゝ、さてなんとなくぞととゑば、ハテしれた事ほげんかけたかとなくといふ。今一人のいふやう、おん鳥はそふじやが、めん鳥はなんとなくといゑば、かのもの、ハテしれた、かけなさんしたとないたといふた。（巻五）

といつたものである。卷五の奥附は、

延享三丙寅正月吉日

京三條通寺町西え入町北がわ

菊　屋　利　兵　衞

京御幸町通ゑびす川上ル東がわ

笠屋半右衞門板行

更に、臆説乍ら、作者東鶴の年代を今少しくいふと、明和七年に六十歳（六十路といへば、或は正六十とは限らず、六十一二歳か。假りに六十歳としておく。）であるとすると、彼は、正德元年の生れである。正德元年は、西鶴の死んだ元祿六年（八月十日）より十九年目である。西鶴孫東鶴と署名した明和七年は、更に七十九年目である。すれば、故老の一二は、無論これが西鶴の眞の孫であるか否かは、慥かに知つてもゐた筈だ。かうした西鶴歿後、年代が割合に淺い點から考へても、此の孫といふのは、滿更詐欺一點張でもなささうに思へる。如何であらう。唯、彼が何時頃から東鶴と稱したか、又、姓は同じく井原と稱したか、名は何と。是等が一切不明である。又、西鶴墓所の誓願寺（八丁目寺町）にも、その遺族系統が何ともないらしいのが、可笑しくも思へる。とにかくぼんやりしてゐる。唯、自分の此の記述は、此の東鶴――西鶴孫と稱する――に興味ないでもないのと、古く「此花」で「臺

東鶴に、尙一著あり

舞扇」序を示されただけで、(これも、「舞臺扇」を、彼の編著とは見てゐられぬらしい。) 他に云はれてゐるものがないから、此の紹介に及んだ譯である。

(尙、東鶴編、春章・文調畫の「繪本舞臺扇」三冊が、春章等自身の俳優肖貌繪として有名であるばかりでなく、一般浮世繪師役者繪技能の發達上からも一期を劃してゐる名品であり、その半身描きは、やがて寫樂・豐國・國政等の大首役者繪を生む先蹤ではあるまいか、といつたことも述べたいが、迂路に亙る嫌を避けて、此には略くことにした。)

——大正十四年九月二十日夜。

(補記)東鶴の著作に、尙一個を發見した。即ち八文字屋本大形本浮世草紙「歳德五葉松」(五冊本)の第四卷の終りに、左の廣告やうの文字があるからである。

繪本池の蛙後編
繪本鸚鵡返　近々出來　全部三卷
撰者　東鶴

といふのである。これによると、假に繪本鸚鵡返は、出版濟か否か(即ち存否未詳)としても、こ

の前編繪本池の蛙は、多分東鶴の撰で、無論刊本がある譯である。尙、此本の年代を略知るが爲には、「五葉松」の刊行年次を知れば可であらう。卽ち此の「五葉松」、寶曆三年正月吉日、版元は、京、八文字屋八左衞門である。

——昭和三年三月補。

餘談

「艶道俗説辯」の完本に就て

小松百龜作と、私の認定した半紙本「艶道俗説辯」は、本來は五冊本であるが、從來家藏には卷一の零本のみ、が此の零本によりて、嘗て月刊「江戸軟派研究」誌上に紹介、(拙著「浮世繪と頽廢派」に收錄)作者に就ても百龜である事に言及した所、鶴岡春三郎氏より、此本卷五の内容を云ひ越された。結句、卷一と卷五とは、世上に略發表せられ了つたけれども、その間の卷二卷三卷四は、その内容不知であつた。それを今、その完本五冊(卷五は、影寫本)を手にし得たのである。

餘談であるが、此の完本入手の徑路をここに述べておく。此の本、元、名古屋平出文庫本である。昨秋十一月、此の平出本の賣立が當地(名古屋)に於て行はれた。その下見の當日、同業者間に混つて自分らもあつた。丁度東京から石川巖老も來てゐた。石川君と話しながら、自分は、その前日來刷られた目錄(賣立の一部目錄)によりて、此の「艶道俗説辯」を發見、その所在を探した。知れなかつた。勿論あの無數の下見陳列であるから、隅から隅までは、行き亘らなかつた。恐らく隨筆物の中に、一括、紛れ込んでゐたかと思ふ。到頭知れなかつた。世話役の本屋に聞くと、印刷した目錄は、書目の記載によつて、目星しい物を拾つたといふから、恐らく有名無實で、先代以前に散佚したものかとも

思うて、諦めた。それが今春一月の其中堂目錄に現れた。艶道俗說辯五(一冊寫本)といふのである。てつきり平出本と直感した。それは、此の本は、內容はとにかく、本として割合に稀本の側に屬するとも考へられてゐたし、その證據自分の卷一發表以後、絶えず心掛けてゐたが、つひぞ何處の書目にも現れなかつた。その稀本の中である事と、內一冊寫本といふのが、平出文庫の賣立一部目錄と的中するからであつた。で飛立つばかり喜んだ。其中堂の家憲を破つて元日の朝、家人をして其中堂に電話をかけさせた。返事には、まだあるとの事、さうして取除けおきませう、との事。さうして、二日の朝私の所有となつたのである。寫本の分は第五卷目であつた。此の卷五は、嘗て鶴岡氏の謂はるゝ如く、割合にひどい內容である。それがため平出家に於て、此の一卷だけ以前に散佚、他の藏本によりて影寫したものか、又は平出家に於て購入のをり、此の卷五だけ賣惜んだためその賣主に乞うて、寫本として完本としたものか(が、此の五冊本、第四卷目の題簽の所に、大尾とある落書より推せば、卷五は、アトよりの副足し寫本かとも思へる)とにかく此の第五卷の寫本は、影寫本であつて、且つ四冊と間もなき折の影寫であると思はれる。

後日、尙、其中堂主人から聞く所によると、此本は、私を始め、朝倉無聲氏、さては坪內逍遙先生、其の他數氏の注文を受けたさうである。元來、此本、私の想像してゐた通り平出本であつたが、其中堂氏のいふ所には、平出賣立から直接彼の手に入つたものではなかつたさうである。東京の村口の賣

「艶道俗説辯」卷之二の紹介

立が其後にあつた。その當日、村口から買つたのであるさうな。其中堂主人もいうたが、結局奇緣といふものか、此の本、何かと一括されてあつたのを、賣立のをりは誰も氣がつかず、（また他に比べては氣のつく筈もない本だが）、村口に買はれて東京へ行き、東京で何がしかで賣立に出たのを、そのをりの朝倉氏はじめ何人も氣がつかず、勿論其中堂主人は、朝早く行つたさうだが。其中堂に買はれて、また名古屋へ舞ひ戻り、幸ひ私の手に入つたのである。平出から村口、村口から其中堂、から私と、名古屋東京を一廻りしてゐたのである。それを私は、元來平出の賣立下見當日探してゐたのである。それにしても、其中堂が私に賣つた値は、村口の賣立の値より、高い筈である。すると、私の買値よりもより安いものとして村口氏は扱ひ、それをまた彼、其他も氣がつかずにゐたのだ。本などといふものは、かうした妙な廻り合せを作るものである。——以上此の本に就てのいはれ、冗言多謝。

○

以下、「艶道俗説辯」卷二、卷三、卷四の内容紹介である。

「艶道俗説辯」卷之二。品目

○戀する人を夢見れば其戀叶はぬといふ説○惚（ホレ）藥の説○下紐の説○傾城といふ説○太夫といふ説○白人といふ説○野郎といふ説○悴といふ説○シャラ臭（クサイ）といふ説○忘八（クツワ）の説○水揚の説○衆道の説○姫はじめの説。以上

其の中の一二三。

○惚くすりの説

俗説に云守宮のつがひをとらへ竹のふしを隔てゝ入れおくに一夜のほどに竹の節をくひぬきてつるむなりこれを引はなして山をへだてゝやくに其けぶり自然とひとつにあふといへり此いもりの黒やきをおもふ人にのますればかならずこゝろのまゝに成るといへり

按ずるに惚くすりの事所見なし灑々子といふ書に見へたるよし云傳るごとく守宮の交たるを生ながら霜となし是を妍尼の　取て煉りなびけんと思ふ女にしらせずしてこれをつくれば其人忙々と成りて付たる人をしたふと也此事崎陽の人の説なれども信じがたししかも尼の　漏　などえしれぬ求がたきものを藥法に加へたるは虚説のしるし也但し守宮のしるしといふ事和漢ともに沙汰有張華が博物志に曰守宮以レ朱飼レ之滿二三斤一殺乾末以塗二女人身一有レ事便脫不レ爾如二赤誌一とあり古詩にも

臂上守宮何日消

鹿葱花落涙如レ雨

と作れり和哥には

ぬぐ履のかさなる事のかさなれば

いもりのしるし今はあらじな

ぬぐ履の重るといふは人の妻のみそか事すれば沓のおのづからかさなるといへり又

わするなよたぶさに付し虫の色の
あせては人にいかゞこたへん

これはしるしの汗すべければあひがたしといへる也此返哥に

あせすとも我ぬりかへんもろこしの
いもりの守るかぎりこそあれ

三才圖會に鼠印の事みへたり因に記ス

○鼠印卽外腎也令ニ人婦悦一鼠の外陰上に文あり印に似たり正朔端午七夕十一十二月子の時を以て北にむかつて刮取陰乾青嚢に盛り男は左り女は右臂の上に繋る人見レ之權悦せざる事なし求る所心の如くなりとあり

○粋といふ説

色道にくらからぬ者を粋といふ俗説にものを推量りて能くしるものをいふとしかれば推とも書べしといへり

按ずるに非なり粋の字睟に作るべし孟子に君子主レ色睟然見ニ於面一不レ言而喩といへる

より出し俗語なり粹の字はあざやかと訓ず米のしらげたるをいふ也睟の字は萬物に至て能其理を明らめいわずしてしりわくるをいふ也推の字いよ〳〵非なり悪推などいふに用んか

○しやら臭と云説

俗間に子細らしき僣上ものをしやら臭といふ

按ずるに長崎丸山にて遊女の事を唐人詞にシヤラといふたきものを身にふるゝゆへにしやらくさいとはいふなり

○男傾城といふ説

俗に冶郎かげ間にかぎらずすべて美男をさしておとこけいせいといへり

按るに男色の事伊訓を引て上古より已に此事有と五雜俎に見へたれば漢土にも久しき事也衞ノ靈公は珍子瑕を愛周ノ穆王ハ慈童にたわむれ漢の高祖は籍孺に迷ひ惠帝は鄧通哀帝ハ董賢いづれも僻愛によりて政を妨世を亂りぬ男色の道女色にまさりて益なし是天地和合の謂にあらざれば也抑傾城傾國の事女色にのみいふべきにあらずかるが故に戰國策ニハ美男破レ老ヲと記せりしかれば男けいせいともいふべきにや

○ひめはじめの説

暦ににひめはじめとあるを暦家の説には妃目始と書て何事にてもすべて女のしよさをいふとなりべにおはぐろはり仕事などの事なるべし　俗間此説によりて夫婦の交りをもしそむる事と心得たるもの多し

按るに非也貝原好古の云馬のり初を飛馬始といふひめはじめとありて又馬乘そめとあるは暦のあやまり也といへり是を以て俗説のあやまりをしるべし

「艶道俗説辯」卷三の紹介

艶道俗説辯卷之三品目

〇結ぶの神の説〇娘に伊勢源氏をよませざる説〇起請誓詞の説〇男女相生の説〇丙午の女を嫌ふ説〇庚申の夜忍びあへば顯るゝと云説〇心中の説〇三十二相の説

已上

〇娘に伊勢源氏をよませぬ説

俗説に云むすめをおしゆるに伊勢源氏の物語をよますればいたづら心いでき物かゝすれば文にものをいわせていたづらのなかだちとなるなり女は縫はりの外いたらぬものぞといふて手習さへさせぬものあり

按るに非也伊勢源氏は好色の事を書キたるものと聞て制するとみへたり愚なる事也男女ともによみかきは幼少よりおしへざれば叶はぬもの也そのうへ婦女のよみもの源氏狹衣

いせ物語にしくものなし師につかす共常にもてあそばしむべし伊勢けんじの二語は好色の事を書たるものなれども容易に解するものにはあらずしかるに當時の娘の親かぶき芝居豊後ぶし等のひたゝけたる風のいたづらの道びきたるをしらで寵愛の餘り遠慮なくゆるして見ものとしみだりに男になれまじへてじだらくにそだて十二三才よりうわ氣に成たるむすめに筆とることを制したりとて何の益かあらん却てかの無筆なるやつが文などのまはりどをきをおかしく思ひ打つけにあつかましきわざをするもの也おや／＼のあやまりとしるべし

○丙午の說

俗說にひのえ午の年に生れたる女を娶ればかならず夫にたゝるといふて大にいみ嫌へり按るに丙午の說いにしへはなかりしことなり江戸にては八百屋お七火刑に行れし比より言出しけるとかや丙も火午も火に相當する故きらへるならんお七吉三郎ともにひのへ午の生れにてありし故其比忌けるよしきけり今の世もはらいひふらして緣邊のさまたげとはなりぬ知りたる生れこそあらめ媒人は年をかくして午をば丑といひおとこもしらずしてつれそへばわざわひもなくて過ぬかやうの諺は大かた用ひぬぞよからん

(是れ、すでに丙午の妄說否認である。百數十年以前、すでに此卓見(?)を洩してゐるの

である。丙午の黒妄信徒、此の百龜の言に着ずて可なりと、大に彼の爲に提灯を持つてやらざるを得ぬのである。）

「艶道俗説辯」卷四の紹介

艶道俗説辯卷の四品目

○井手の下帶の説○のしゆくの哥の説○新枕の説○常盤を貞女といふ説○鹽谷が妻の説

○弓削道鏡大淫の説○櫛をおくれば緣きるゝと云説　已上

○井手の下帶の説

近比印行の在原竹といふ草子に夫婦の圖を書て一首の哥をそへたり

とけかへし井年の下紐ゆきめぐり
あふせうれしき玉川のみつ

按るに在はら竹の作者哥の心をも辨へずして思ひづるまゝに書しと見ゆ又井手と書べきを字の似たるにあやまりて井年と書たるなるべし此事は大和の國井出の里へむかし御幣使に内舍人なる男選にあたりて下りけるがやどりし家に八九才成女のわらはありていとやさしく見へければ末はわが身に添寐せよなどゝたはむれて紅絹のきぬとり出し下帶にせよとてとらせける扨てわかれて七八年を經て共ほとりをとをりけるにおとこは井出の里さへわすれたるにある家よりおとこの名をよびて出あひふかくうらみて後のちぎりを

なしけるとぞこれを井出の下紐と云也哥に

解かへし井手の下紐行めぐり

あふせうれしき玉川の水

又おなじ草紙に艶文論。女志論等を述たり其意を見るに律氣なる好色者と見へたり愚盲の僻説論ずるにたらずといへども初心の爲に殆害となるべき事もあり長ければしばらくおく我黨の諸生これらのつたなき說を用ゆるものなし嘉尙すべきかな

○新　枕　の　說

俗に處女のはじめて男と寢るをにゐ枕といへり

按るに男女はじめて相逢ふをば幾度も新枕といふにや

あらたまのとしの三とせを待わびて

たゞこよひこそ新まくらすれ

これははじめ逢たるおとこの年をこへてこざりければ異男にやくそくして逢ける夜はじめのおとこ來りければよみて出しける哥也令にも夫他國へゆきて歸らざるに其女。子あるは五年子なきは三年を限りて他人に嫁してくるしからざるよし見へたり定家卿の哥に

わするなよみとせの後の新枕

さたむはかりの月日なりとも

これらを以て考へしるべし

〔岡ほれの說（此の章、最後にあり、品目に脫せり。）

紬縫山人の仙藤優劣辨に云かぎやのお仙は天のなせる麗質地物の上品みがゝずしてきれいに容つくらずして美也櫛笄の長きを用ひずべに白粉の粧を假らず八百八町に佳人と稱す衆人涎をながし床机に鼻毛をのばして團子を買ども共價をとはず茶をのめども共味をしらず茫然として見とるゝことおせんが貌に祭のわたるがごとし爾のみならず細路場をふさげおし合ふて合見る者市のごとし近所のだんご化してやき餅となる不言の桃李みづから道をなす哥舞伎に赴をかり錦畫に姿をうつすと云々

按るに笠森のだんご娘は文朝が似貌に起り淺草のやうじ娘は路考が狂言に名をなし各世に鳴る今始メて出るにあらねども文につくり哥に唱ふ皆一時の興にのりて人情を引也人情いろを好ぬものなく茶店にかぎらず土弓も矢取に集りうり物も女房ではやるが故に祇園豆腐に女を重とし神樂巫女にも娘をゑらむ是を好して足をはこぶ空人は誠に人ぞよめきのあだ惚なり卑俗これを岡ほれといふ澳ゆく船を岸にてのぞむがごとく及ばざるを云なるべし思はぬ人をおもふさへ水ニゑをかくにたとへたり能はぬ戀に身をやつすは畫にかく餅に咽をならすがごとし喰んと欲れども能はずむなしく心を勞するのみ益なき主に

なづみて人の嘲(アザケ)りをしらざるはたわけの根元不敵のいたり也かくいへばとて一向に見じ聞じといふにはあらず人目ばかり／＼しからぬ様に心得あるべし又人の家に行ても女あるじの顔打まもりてなれ／＼しく物いひたるいとなめげに見ぐるし又顔も見まじ物もいわじとひすみ居たるも世なれぬ人とおぼえてわろし茶など持(モチ)いづる女の良見とれたる道を過(スグ)る女をふりかへり／＼て見る人などみな見ぐるし女もおとこの良きろ／＼みたるはすき／＼しくていやし又おのぼれとてすまし顔なるも心根はかられてあさまし

「艶道俗説辯」巻五の紹介

次ぎに、嘗て鶴岡氏により輪廓だけ紹介せられたる第五巻の二三につき、掲げてみよう。巻五は他の巻に比して、稍性事に關する記述多く、憚るべきものがある。その比較的、穏當な二三である。尒品目をも左に載せておく。

艶道俗説辯巻之五　品目

○枕繪を具足櫃へ入ル説○脚布(キャフ)の説○新嫁(ハナヨメ)血なきを疑(ウタガ)ふ説○産神(ウブスナ)の抓(ツメリ)し跡といふ説○双子(フタゴ)の説○墮胎(コヲツシ)の説○春三夏六の説○ふたなりの説○石女(ウマズメ)と云説○生下(セウケ)未分(ミブン)の説

○墮胎の説

俗間に月水流の法有て婦人の虚實(キョジツ)をも窺(ウカヾ)はず月わかきものに服薬を用ひ大に脱血して命にあやまちあるもの多し

按に墮胎さする事不仁のいたりにて人のすべき事ならずされ共（以下十七行略）

五不男、五不女といふのは、五不男、天、漏、怯、變、犍。五不女は、螺、紋、角、脈、鼓、である。

（凡て解は略す）

此の卷五は、惣じて性事に關するもの多く、がさりとて全く挑發的ではない。一種の性事教科書の觀である。

○

凡て此の艶道俗說辯全五卷、全內容は提示しなかつたが、がそれ程に名の如き「艶道」ではない。寧ろ世俗男女の迷信、風俗に對する辯駁である。教誡である。「艶道通鑑」が名の如き（勿論聯想する我らが惡いが）軟本ではないと、同樣である。

が、小松百龜は、有名な艶畫家であり、家は藥種屋であつた。その男の作としては、學者めいた、硬いものである。藥種屋らしい點は、此の俗說辯にもちよい〱現れてゐる。とにかく一種の軟雜學者であつた。彼の全著作を總べていふのではないが、とにかく記錄には足りる男であると思ふ。さうして形式が、井澤蟠龍の「廣益俗說辯」に似てゐるも面白い。（無論年代からいうても、百龜がこれを摸したのである。）

疑問の繪本と洒落本

疑問とはいふものゝ、その內容に依つて性質は違ふ。前者は、繪本であるが、年代も外題も版元も分つてゐて、さてそれが在來の普通記錄、書目とは、全く年代が合はないもので、すれば今度發見のものゝ方が純初版であり、從つて從來の記錄を書き直さねばならぬか、それとも他に何か理由があるのか、(そこが疑問の疑問とする點であるが。)といふものである。後者は、洒落本の一種であるが、作者名も年代も、また初版か改題本かも的確には分らないもの、無論版元など分らないものである。今此の二者を拉して、本稿と爲し、大方の示教を得たいと思ふ。

○

「繪本江戸櫻」に就て

繪本といふのは、北尾重政の畫に成る「繪本江戸櫻」である。從來此本は、享和三年版といはれてゐる。それに大本一册と普通にいはれ、序文も十返舍一九(初代)といはれてゐる。それが、自分の今度觸目した原本によると、大本といふ點は一致するが、册數も上下二册(分册、各々題簽がある。)であり、年代が、序によれば、寛政七年になるのである。それに、序文も、いふが如く一九の署名ではない。が、一九らしい所はある。(武埜樵夫と署名す。)版元は、蔦屋であるが、まづ、寛政七年といふ證

據の、序文體裁のものを舉げる。（これは全文採錄）

繪本名所江戸櫻

あか駒のはらばふ田ゐ水鳥のすたくみぬまも神にしませる大君のみとくに野なかなるふゐ道あらたまりて市ひめの神のひろまへより大寺の墻のしりへまで人どよまぬ所もなきはめさましき都のさまならすやまいてあそびわざをきの家のあたりいか□□（ばかりカ）（此二字位、手スレ不明）かはそもかくのごとくならされば都（といふにカ）（以下、三字位手スレ、不明）たらむと謝在杭がしるし置けんもうべなりけりいまやその名所のみつがひとつをゑがきて櫻木にうつしものせるは遠きちさとのゐなかまでも唉にほへとのしわざにこそけにも盛りの江戸櫻あたし艸木は物ならすとふところなる筆とうて丶都めぐりの道のついでに此ふみのはしにかいつくるになむ

寛政卯正月　　　　武埜樵夫書

といふので、以上で表裏計一丁分、題と署名などを一行に見て、半丁が八行、一行が二十二字位の大きさである。次ぎが直ちに、本文の繪である。さて、右の序文にもある如く、寛政卯とあることである。卯は、寛政では、一、即ち同七年よりしかない。即ち此の本、寛政七年版と見るべきであらう。假りに一歩を讓つて、序は寛政でも版行は後の享和三年であるとしても、其間約九年の距りがある。

これがをかしい。寛政の序のまゝ保留して、九年後に(享和三年)出る筈が、普通から考へて無論ないと思ふ。卽ち、果して他本に、享和三の年代記入があるなれば、此の他本こそ、此の寛政七年本の再摺又は改刻と見做すべきだと思へるが、如何。それに、序文も武埜樵夫の匿名であることである。記錄によれば、(主に「物之本江戸作者部類」)丁度此の頃、卽ち寛政六年秋頃から、恐らく八年頃まで、彼一九は、蔦屋に奉公して、版畫版本用の紙に礬水をひいてゐた、卽ちまだ作者名としても、一九は、左程響いてゐず、處女作の出るか出ぬか位ゐの頃である。その時分に、能文を見込まれて、主人から、賴まれ、當時繪師としての大家の此の重政の繪本に、序をものしたのであらう。從つて、尤もらしく老大家めいて、武埜樵夫(武藏野にかけてゐよう)とひねつたものであらう。それが、或は、享和版には、一九と明らかにしたのかと思ふ。とにかく、右の武埜樵夫の序文そのものは、頗る一九ばりである。一九の「旅眼石」(享和二年版)などの序文とよく似て、亂調ではあるが、五七又は七五を追つてゐるやうに見える所、よく似てゐる。寛政末又は享和の彼の洒落本などの叙とは、今對照してゐないが、恐らく風韻に於て似てゐよう。若し享和三年版(これは、小生は未見)なるものがあつて、兩々比較し得て、全く同一序文であつたならば、無論、此の武埜樵夫署名の物の寛政七が、此本初版の年代たることが肯づけよう。

假りに、此の「江戸櫻」をどこまでも享和三年初版とするなれば、此の小生所見本の「江戸櫻」は全く同名異本と見るより仕方がない。結局、享和三年版のものと兩々相並べたら、直ちに分る問題である

が、それが出來ないから、仕方がない。今、小生所見の内容を更に概括的に述べておく。

繪本江戸さくら、（表紙題簽の文字、如斯）上下二冊。大本（半紙に非ず）。

上卷に序一丁あり。武陵樵夫の署名、寛政卯正月の記入あり。

上卷所收の繪組、左の如し。

淺草寺○寛永寺○不忍池辨才天○湯島天滿宮○飛鳥山の櫻花○日暮里の遠望○王子之兩社頭○染井之植木屋○雜司ケ谷法明寺○目白臺不動堂○新吉原の景色○兩國橋。（以上、一圖が半丁、二圖にて一丁分。計、繪のみにて六丁、序とも七丁。）

下卷所收の繪組。

龜井戸天滿宮○本所五百羅漢○待乳山遠望○眞崎稻荷之景○洲崎辨才天社○富賀岡八幡宮○隅田川木母寺○千葉山秋葉社○愛宕山の遠望○芝神明宮之景○品川口高輪圖○目黑不動。（以上同じく六丁。）

下卷の終りに、蔦屋出版の主に堅いものゝ廣告が貼られてあつた。重政とは、何處にもない。唯、畫樣は、成程重政かと思はれるのである。半丁分の繪柄をいふと、大抵、草と紅と他二三色の多色摺で、人物は極く細かく、主に雜踏の體裁である。上を雲形にしきり、その雲形の中に、その下の繪の場處に關する名所案内式の詞書が、細かく書き綴られてゐる。その詞の初めに、淺草寺又は寛永寺と

あつて、下の繪がそれと肯づけるのである。

表紙は、靑。題簽は、白地の紙。

以上で、繪本の方は、片づけて、次ぎは、不明の洒落本。

○

「娼客四十八手」に就て

娼客四十八手といふものである。零本、その中卷の一冊である。中本型、一重の輪廓をとり、半丁、八行。一行は、十九字位。句讀點には、一切○を附してゐる。丁數が、稍變態で、第六丁から第二十二丁に終り、計十七丁である。初丁（實は第六丁）の表に、

娼客四十八手卷之中

と、二行分を取つてあるが、一寸怪しいと思はれることは、此の一行の文字、その娼客四十八手の五字が、卷之中の三字に較べて、稍小さいことである。それに文字の間も、押詰めてある。それが、埋木の跡（卽ち再摺改題の證據）ではあるまいかといふ疑問が起るのである。とにかく、輪廓はもと〳〵、中本の大きさであるが、これが初摺本であれば文句なし、再摺本としても、その元本は、外題は不明にしても、中本の體裁たることは、論はないのである。恐らく上中下の三卷に分けたのは、此の再摺の時のさかしらで、初摺本は、計三四十丁の本のものであらうか。（此の所見本、再摺改題本として、まづ詮索するのである。）

とにかく、再摺改題本としても、若一初摺原本としても、いづれにしても年表・書目の類に見當らない。が洒落本たることは、明白である。內容、書體、其の他の直感的の感じからは、大阪本らしくも思へるが、例の「花街風流解」三冊物（文政七年版）あたりと同じとも思へるが、然しさうでもないらしい。それに、鄭臺は、とにかく江戸らしいからである。といふてゐるだけでも判然しないであらうから、此の中卷だけの大體の輪廓を述べよう。

先づ初丁あたり、若干を引いてみよう。

「金谷千樹の春の花、瑤池玉樓の秋の月。ごしやうでざんすの完爾は、更に桃李のこびを欺く。つぼみの花のあどけなく。氣隨は里の常ながら。わきて春宵一刻もの。價千金のうちかけに。上草履の塵もいとわず。籠入五匁の南京鼠は掌中の玉とのみ大切なり。霞にしづむ上野の鐘には。花の薫りを枕につたへ。うたゝ寢にきく土手の翳は、越路にかへる翼かと。けしき調ふ折からに

「女郎　たゝんだ夜着にこしをかけ。みす紙で顏をあふぎながら。くすりゆびで耳たぼへつわをつけ南氣にのほせたといふ見へ。そのわきに十ばかりのけしほうずの「かぶろ、深草やきの手あぶりのはいをかきまわしながら。めそ〳〵ないてゐる。

「客　てうづからかへつて來て。手をふきながらせうじをあけるト。さつさとふきこむ

南風に。いけ花の八重梅が。ざしきぢうへちりっはんがけのほつれへついて。ひら〳〵とさがつてゐる。

「女郎　エ、もふつよい風でおつすトびんななでつける

（以上、初丁表裏の全部、並びに次丁表の二行目まで。）

といつたもので、純洒落本である。以上などいろ〳〵話の筋があつて、一節の終りに、本屋と他の雲（雲の字かと思へるのである。）と稱する男、――通人らしい者との合評を示してゐる。例へば、

「本や　なるほどこいらは。まだあどけねへにもいたらねへ。かわいらしいせけへでござへやす　「雲　このくらいなときは。たがいにあくがねへから。しぜんとおんかぢ。いりくんだおもしろい事はあるめへが。實に戀の情はふかいのさゝるおいらんが。客人と向じまへ出たときに。もしへ。あんまりくさのなかへおはいりなんすな。なにがばけておりいすかしれもいたしいせんといゝやしたが。ちよつとしたことだが。こゝいらが女郎の情にかなつていやす　「本　さようさね。金魚をもちあそびにして。かわいそうにさぞくたびれたらうから。ちつとやすませてやりいせうと盆のうへへならべてねかしておいたと同日の論でございやす　「雲　この次はわつちがよみやせう

と、本屋と雲とが、代る〳〵讀んで、讀んでは批判するといつた形になつてゐる。

このあと、〇茶かした取組

内は小みせ
客はちよつとした所のわかいんきよ
女郎は部屋もち
尤なじみ

といつた說話が、約十丁分ある。

偖、此の娼客四十八手の名前から、京傳の傾城買四十八手（寛政二年版）の改題かと、不用意に思はれようが、全く似ても似つかぬものである。扨、此の再摺改題（？）の正體は、何であらうか。

「穴學問」と「驛者三友」と

〇附たり、「新宿穴學問」と「金の利良路」につき

知つてゐらるゝ方もあらうが、自分としてはまだ、こゝ二三ヶ月前自らの發見である。まだ書かれたものはないらしいから、をこがましくも――此の餘白に書いつけておく。それは、酒落本秩都紀南子作の「穴學問」は、「驛者三友」と全く同一のもので、自分の判斷では、寧ろ原名が「驛者三友」で、改題が「穴學問」だらうといふのである。

それは、自分の耻をいはねばならぬが、最近自分が編纂校訂出版の緖につきつゝある「酒落本集成」

（春陽堂版。但しその第一卷は、既に昨年九月上旬、四校了なるも、內閣等のため未だに出版發行の期に至らない。）の第二卷の內容校正を爲してゐた所が、此の第二卷には、「驛者三友」を全然別物と見做して收載、その校正に從事してゐた。此の第二卷の編輯は、すでに昨年九月第一卷校了の間もなくであつたが、その當時、自分の旨意は、もと〲未飜刻ばかりの洒落本をとあつたので、此の「驛者三友」を入れた時も、無論其の積りであつた。で爾後その校正を爲しつゝある最近に至つて、ふと校正中に、作者名が相同じい所から、對照のため、（同一とは思はないで、）「穴學問」と照り合せてみたのであつた。「穴學問」は、原本がない。で、國書刊行會本の德川文藝類聚第五の洒落本所收の飜刻本「穴學問」と較べた。と直ちに、序からして、本文は無論同一と發見したのである。比較どころの話ではなかつたのである。然るに、をかしい事は、關西の洒落本通たる忍頂寺君も、これには氣がつかれなかつたらしい。それは、自分が此の第二卷所收の「驛者」を原本と對校中、二三の虫食ひがあり、判讀が不安であつたので、同じく此原本所有の忍頂寺君の所へ問合せた。その折、忍頂寺君としては、自分の此の新編が未飜刻物斗りを擇つての事といふのは、かねて知つてゐられる筈であるから、「穴學問」と同一と知つてゐられたら、その通知がある筈だ。それを、一々此方の不審の箇處を敎へてくれられた。それによつて、自分も安心して、虫食ひの補充をしたのである。それが、四校を終つてから後、ふと例の「穴學問」と對校して、その虫食ひ補充の箇處もその通り活字には現はれ、且つ其他、その「穴」の

活字本と一句の相違もないことを自ら、——甚だ晩蒔ながら發見したのである。未翻刻を標榜してゐた自分としては、第一の失策であつた。餘談はさておき、此の動機から「穴」と「驛」とは全く同一と氣がついたのであるが、然らば、「驛者」が初摺の原名で、「穴」は後摺の改題であらうといふことに、左の理由による。

「驛者三友」が原名か

今、「穴學問」の序を調べると、違ふ點は、序の一行目の

紀南子穴學もんを著して、雛妓に見せびらかす……

云々とある。その「穴學もん」である。殊更に問をもんとする。これ、驛者三友の四字の跡に、そのまゝ埋木した、歴然たる證據ではあるまいか。でなければ、わざと「もん」とあるのが、をかしい。自分の初摺再摺、原名、改題の論據は、この四字の跡によつたのみであるが、恐らく誤りはなからうと思ふ。

倩、從來、とにかく此の「驛」と「穴」と同一の物とは、恐らく誰人からも謂はれてゐないだらう。現に自分が、「洒落本集成」第二卷編纂後に出版せられた「新修日本小説年表」には、この「驛」と「穴」とを別物に見做してゐるらしく、（卽ち故朝倉氏の如きもである。）左の如くある。（同書、一四〇頁の上）

○驛者三友　一　秩都紀南子　安永年間版

○新宿穴學問　一　同　作　同

一名馬糞夜話。秩都紀南子は、平秩東作の假號なりといふ。

の如くである。偖、これで思ひついたが、成程馬糞夜話の名も、古くから知られてゐる。現に、享和二年の「戯作評判花折紙」（洒落本百七十一種の評判記）には、馬糞夜話として、上の位附をものしてゐる。此の「馬糞夜話」とした原本を直接見ぬから、何ともいへないが、此の「馬」と「穴」と同一、原名が「穴」で、改が「馬」とするなれば、その原の「穴」は更に原々名が「驛者三友」といふ事になるのである。即ち、「驛者三友」が原名。改題して「穴學問」、再び改題「馬糞夜話」となるのである。（或は、原名が、「馬」、再が「驛」、三が「穴」といふのかも知れない。）さうして、結局、秩都紀南子（平秩東作）の洒落本作は、「驛者」の唯一作あるのみといふ事になるのである。

昨年出版の「洒落本評釋」（山崎氏著）にも、「穴學問」は入つてゐるが、此の點には、少しも觸れられてゐない。で、すでに一部には、自ら分つてゐることかも知れないが、知つて言はざるは不可と此の代辯を爲したのである。

「面美多通身」と「金の和良路」と

倘、洒落本、今一書に就ていふ。

それは、嘗て拙著「江戸軟派研究」（月刊のもの）にも一寸觸れておいたが、なほ繰り返し、其假的にいふと。

面美多通身（タモヒタツミ）　完　（外題のまゝ）

東海道金の和良路　全（同）

とは、全く同一のもので、無論、原名が「面美」であり、その改題、改作者本が、「金の和良路」である。これも、一書二本のやうに、時々世間ではいはれ、現に年表類にも明記がないから、誤解も尤もであるが。「面美多通身」は、飜刻もあり、（國書刊行會本、江戸時代文藝資料の第一）よく分るものであるが、今、自分の兩者原本によつていふなれば、「面美多通身」では、序の終りが、面美多通身と題することしかり、とあつて、次行に衎々山誌とあり、通交の印がある。第四丁表（本文の初め）題名の下は、

撰　者　廓通交　同集交

とある。それが、「金の和良路」本では、序の終りの、面美多通身（オモヒタツミ）と題（ダイ）するとしかりのその。面美多通身の五字の代りに、稍平（ひら）たく、大きく、金の和良路と五字があるのである。それが、埋木の證據は、和の字などは、摺の墨つきが悪くて、容易に尻尾を現してゐる。次の行、衎々山誌の代りに、山旭亭主人著、とあり、次は、丸形の中に旭、下に角形の中に、間波行とある。成程間婆（波）行は、山旭亭の別號である。（山旭亭署名の他の洒落本にも、此の間婆行はある。即ち旭の緣語の昡の意であらう。）次の異同は、本文初丁（實は第四丁表）の最初が二行分を取つて、（この取り方、「面美」の通り。）

金の和良路

とあるだけで、下は白くあけてある。

其他は、全くの同一版木で、その再摺たる事は、比較一見して分明である。丁數一切、兩者同一。本の體裁も共に小本裁である。これは、山旭亭個人の發意か、又は書肆(求板か、否かは不明)の請求か、何れにもせよ、山旭亭の良心を怪しとする資歴である。但し、山旭亭と通交とが同一人で、後に改號といふなれば文句はないが、然し山旭亭は、別に山旭亭の名の下に寛政末の版と思へるものに、洒落本「孔雀染勤記」と「五臟眼」の二本(共に捌編「集成」に所收。)と、寛政八年版の小咄本、「しんのはなし鄭壽賀喜」(豐丸畫)の一冊とがある。によると、通交とは、別人と思へる。自分の推定では、無名作家に終つた通交(此名に於て、他に作なし。但し此名は、無論洒落名であらう。)の版本をそのまゝ使用して、恐らく寛政八年頃(小咄本の八年と同時代に、彼の洒落本作があらう。)に、「金の和良路」として出したものではなからうか。

「金の和良路」の年代

とにかく、「金の和良路」は、このまゝで獨立の出來るうぶな名ではない。必ず「面美多通身」の改題、改作者本といふ事を概念に置かねばならぬ。寧ろ、「面美多通身」で、云々すべきものと思ふ。

倘、山旭亭は、小金あつ丸と同人かといふ自分の疑問もあるが、これは、嘗て「江戸軟派研究」(此稿、本著に修補收錄。別掲、「洒落本雜記」、參照。)にも述べたから略く。

とにかく、以上の中、確定は、「驛者三友」は、「穴學問」の原題であり、「面美多通身」は、「金の和良

路」の原題であることである。

（新修日本小說年表の、洒落本の項、面美多勤身は、面美多通身の誤り。尙、二者別樣の如く取扱はれてゐる事、見らるゝ如しである。）

――昭和二年十月。

補記

（補記）最近、「穴學問」原本一冊を見た。これと「驛者三友」と、原本同士對照することが出來た。得た結論は、前揭予の推定と寸分違はなかつた。卽ち、「穴學問」と「驛者三友」とは、全く同一版木、しかも、「穴」は、摺が粗、卽ち後摺の證である。且つ二本の相異點は、唯一個、卽ち、「驛者」は、の口繪半丁分が、序文に挾まり、卽ち序第二丁の表にあるのが、「穴」では、全くなく、（卽ち「穴」には、口繪等繪畫一切なし。）「驛者」の序第二の裏の、序文の殘りが、「穴」では、序第二の表（卽ち「驛者」の口繪のある處）に來て、その裏（序第二の裏）は、全くの餘白といふだけである。序文の「穴學もん」、また、校訂本の通り。

――昭和三年三月。

洒落本改題本の新記錄

洒落本改題本の目睹二三に就ては、既に述べた。（本著別掲、「疑問の繪本と洒落本」「洒落本雜記」及び別著既刊「軟派漫筆」所收「洒落本改題本の一異例」等。）がそれ以後の分、しかも「新修日本小說年表」等にも無論記載なきものは、卽ち次の四項である。

一、「言葉の玉」と「廓の種」。二、「傾城買四十八手」と「夜廓話」。三、「野良玉子」と「通子遷」。四、「傾城買花角力」と「娼客四十八手」。

「言葉の玉」と「廓の種」

一、「言葉の玉」は、小說年表の類を見ると、寬政六年（年表等には、五年とあるが、跋に同年霜月とあるから、出版は六年であらう。）版、春光園花丸の作である。「廓の種」も作者は華廓で、年次は文政六年である。此の「廓の種」は、石川氏の謄寫版複製本もあつて、相當に知られてゐるが、「言葉の玉」は、餘り原本を見かけない。自分は、京の小山源治氏藏の原本を借覽して知つてゐた。が、知つてゐたとはいひながら、二本（言葉の玉と廓の種）が同一だとは、知つてゐなかつたのである。卽ち一々別物に扱つてゐた。白狀すると、拙編「洒落本集成」（未刊）の原稿にもと、小山氏から、「言葉の玉」を借り出したのであるが、その折は、何の氣なしに原稿を作り終つた。「廓の種」は以前から原稿になつてゐた。

それが最近末期大阪の洒落本に就ていふ必要があつて、右原稿の「言葉の玉」などもひなくつてゐて、ふと(若しやと)兩方對校したら、容易に二者同一であることが分つた。唯、序文と插繪の點だけが違ふのである。本文は全く相同じいのである。序文が、「言葉の玉」では自序であり、「廓の種」では不詳氏の序(但しこれが、「言葉の玉」の跋。)である。

言葉の玉序

海士龍宮に至りて。採得し玉は。面向不背の玉。我又靑樓に遊びて。拾ふて戻りし玉は。言の葉艸の露の玉。新造禿の心を磨く。世理分の玉の數の玉章。されば彼玉の德とおなじく。何處から見ても微塵も違はぬ生根玉。四方八方のお子達。目玉をとゞめて。とつくと見玉へ。

あら玉の春日　春光園花丸書　［華○］

その次、序歌の如きがあつて、(廓の種では、これが、句となつてゐる。)色と酒これにつきては錢かねもふるほど雪と月華の友、とあつて、池のへ鷺見がいふ、とある。この裏、皿に鯛、鉢、銚子に杯

うしろ衝立、といつた圖が半丁ある。この衝立に、竹を描いて、勝川春童と落款してゐる。以上で序が二丁、序歌と口繪とで一丁、計三丁。尚挿繪としこ、第十七ノウ•第十八ノオのヒラキに、一圖がある。これは無落款であるが、これも春童のものであらう。右、妓の甲、鏡に向ひ化粧。左、乙、鐵漿つけ。丙、文をよむ。背景は、部屋の體、簡素な筆であるが、生活がよく現れてゐる。最後に跋があつて、それが「廓の種」の序文と稱するものと、全く同文である。唯、そのをはりに、寛政五癸丑霜月廿八日とある。(この年月の記入は、無畫「廓の種」では文政五年に變へてゐる。)署名のなき事は、「廓の種」の序と同樣である。その次に左の如き廣告一丁がある。

燭光西郭記　近刻　華磨作

新町書夜のけしきあげやのもよふおきやりありさまきやくのあそびかた太夫のせりふ天神のまぶぐるひげい子のいろ事までいまめにみるやうにかきたるおもしろきよみ本なり

うきふし雅話　花丸述　近刻

とあるが、これらが、刊行せられたか否かを知らない。尚、此當時既に、華磨、花丸、共用してゐた事が知れる。(右の豫告の例によつて)此の「言葉の玉」は、小本、(廓の種もである。)序二、序歌と口繪一、本文跋とも三十一、廣告一、計三十五丁である。

二、「傾城買四十八手」は、京傳の作、寛政二年版たる事、誰しも知つてゐよう。「夜襲話」は、今昔

「傾城買四十八手」と「夜慶話」

物語と角書があつて、宇田樂庵婿丸の作である。然るに此の婿丸は、享和元年に「比翼紫」（品川本）の作もあるから、此の「夜慶話」も創作かと思ふと大間違ひ。全く「四十八手」の再摺改題である。唯、四十八手とは、序と口繪とを變へ、且つ四十八手の初丁、題と名（京傳著の）の部分、二行までを改刻、以下は（第三行目）四十八手を再摺してゐる。滑稽な事は、最後の丁ウラの「西行も」云々の句までもが同じである。尚、「夜慶話」の序と口繪に就ていはう。

「夜慶話」の叙

夜慶話叙

女衒女を見るに法あり。一に目。二に鼻すじ。三に口。四にはへぎはっ。膚は凝る脂のごとし。歯は瓠犀のごとし。家々の風。好々の顔。尻の見やう。親指の口傳。刀豆臭橘の秘術ありてこれを撰らむこと等閑ならねど。牙あるものハ角なく柳の翠なるハ花なく智あるハ醜し美しきに馬鹿あり。静なるハはりなく。賑なればきやんなり。顔と心と風俗と。三拍子そろふもの。中座となり立者と呼る。人の中に人なく。女郎の中に女郎まれなり。貴かな得がたきかな。或は骨太毛むくじやれ。猪首獅子鼻棚尻。虫喰栗のつゝくるみも。引ケ四ツの前後にいたれば。餘つて捨るは。一人もなくひろいところがア、夜慶話。

五年ぶりにて

宇多樂庵

嬉　丸　述

文化三つのとし

寅の春日

と誠らしく書いてゐるが、殊に「五年ぶりにて」は、比翼紫の享和元年から數への事であらう。誠にこれが、食はせものである。そのうら、ヒラキの口繪で花魁道中、若い息子客とその作らしきものと二人が、これを見る圖即ち一丁分。そのうら、半丁分やはり口繪で、茶屋の提灯二つ、一個に仲之町とある。次ぎ本文の一丁分、四十八手になきものがあつて、これが書き出しである。その全文は、

「夜慶話」本文の初め

今昔物語夜慶話

嬉　丸　著

物言へば口びるさむし秋の風實に翁が秀句の通りとかく人間は此大門口の出入を愼べきところなり口から彌陀を吐れし祖師あれば又虚をいはれし曾呂利どのあり虚から出た實でなけりや根はとけんとは大星が名言におかるが心を喜せしも宜哉されば口よりして似而客だヨト囁かれ初心に當る息子有女郎も又然なりあどけなくておもひつかれきやんにて流行皆好々にて我身を忘れ一生を苦愼べし〳〵と序ぶんを述るも夜慶の御咄〳〵不

俵行拆のゑもんをなをし茶を一口のみて口なめずりをして高座より御見物さま方をずらりつと見わたしエヘン〳〵とせきばらい二ツ三ツいたし大分大入だな又三日の日のべを出そうことハ客だねのよい席だと一人りよろこびて扨今晩は初心で當ると申ス御噺より無粋にして女郎の穴を見出シ悪遊の段と客の心を見抜大」の男を口先にて自由にする話大詰に至れば眞のいろ男の御話不殘御聞に入升る永口上は御退屈先最初申上ル其御話ハ

として、以下、〇しつぽりとした話云々であるが、これは、「四十八手」の本文第一丁表よりと全く同一、同一な譯、同一版木だからである。唯、變り物と見せかけるため、「四十八手」のそれ〳〵、……手といふのが、…………話とある。手の字を話に彫り直してるるばかりである。然るに馬脚を露はすといふのは此事か、四十八手の版木を使用した悲しさ（不便）には、この前に引いた文の、最後の方、即ち今自分が、右に」をつけた所までは、全く餘分のもの（これだけが、嬉丸の僞作、及び序と）だから、舊版木とくつつけ合はせるため、この分までを製本の上では全部序として取扱ひ、現にこの引用の本文冒頭の一丁分（新しく書き足しの分）は、綴目の丁附には、序四とあるのである　で次の」以下若干の續きは、四十八手本の、「傾城買四十八手、山東京傳著」の二行分にあたる（これが夜慶話下は、本文冒頭のつゞき三行分）のである。

三、「野良玉子」と「通子遷」

「通子遷」（ママ）といふのは、小本に仕立て四冊物である。嘗て大阪鹿田書肆からの賣物が來たが、落丁本だつたから返品した。で今作者には記憶がない。たしか、五柳亭德升あたりの末期合卷か讀本作家の名だつたと思ふ。（此本の揃本藏の方は、御教示が願ひたい。）この名が、第一冊にあつたと思ふ。今茲では、その後に得た第二第三の端本二冊によつてこの報告であるが、此の通子遷第二第三の二冊は、この中に、一九の「野良玉子」が殆どそつくり入つてゐるのである。（唯、序と末尾の若干を削るゝ入るといふより、如例「野良玉子」の舊版木をその儘繼ぎ合はしてゐるといふより外いへない。

第二卷は第二章から始まるが、此の第二章以下が「野良玉子」である。が、版木重用の都合上、初め少しだけは、「野良玉子」の筋と人名を追つて作り直してある。それが野良も通子も共に初二丁分である。その分、「通子遷」の方を引いてみる。

青樓新話　通　子　遷　卷之二

第　二　章

名花傾國兩相歡といへども誠は彼遊里にしかず日本づゝみの春げしき。野草芳菲たり紅錦の地。大門の見かへり柳は青柴をくけ出す。りうかう花街金谷千樹の仲の町の茶屋のけつこう酒池肉林。歡樂をこゝにとゞめし廓のぜんせいっあるが中にも半まがき。世界はべつな二丁目客っ春狂亭青黛と。狂名のついた男。としのころ廿八九っちとお

そまきながらまがい唐棧にちゝぶぎぬのうら。おなじ羽織に帯は上州のまがいの博多。つれは定次郎廿二三。結城の小袖に下着は新唐のさらさに。帯はお納戸ごはくの一寸八分に仕たて。羽織は納戸がへしの龍門の黒うら。いま一人ハ太助とて。年の頃廿八九。結城木めんのやわらかに。ふとりじまの下着納戸つむぎの紋付の羽織。いづれもあきんど風にて。仲か間のより合よりむふんべつをいだしてぶら〳〵出かけ。奥山をひやかしまだ日ハたかしと青黛か。なじみの土手の水茶屋に。腰をかけていろ〳〵なむだばなし「甫」ときにおかみさんもふ七ッかね「女房」たゞ今うちました太そふでもあらう観おんさまへ参つたはてうど九ツ半。それから奥やまの濱藏を見たり楊弓を引たりして宮戸川へよつてはなしをしてゐたうちもひさしいあいだゞどふでもはるは日が永い「甫」それでもまだ早いちつとのこと。

こゝまでが作りかへ(ではない手入れ)をした跡である。この次からは、全く「野良玉子」の版木である。所が、その繼ぎ足し方の大膽さは、平氣で、二ノ二(以上所引の分)から、九(斷りなしの九)に飛んで、文句は續けてゐる。即ちこれ以下が野良の第九丁になるからであるが、それを此の丁附さへも改刻せずに、そのまゝである。卽ち、以下は、野良の第九丁オ(本文に序などを加算しての數である。くはしくは、本文の第三丁目オ)の、

で晝夜をくらつちやアあやまるぜ。ノウ定公
に續いてゐるのである。以下、そのまゝ續いて、野良の第二十五丁ウラ、この半丁分丈が全部彫り直され、但し文句は野良の通りであるが、漢字を多くし、字を詰めて、野良の二十六丁表の一行目、いふことだ」までが七行に彫り縮められ、その次ぎ本文の一行分の處に、狹つくるしく、通子遷卷之二終とあるのである。

舊版木利用の極端なる例

次、通子遷卷三であるが、これには、冒頭の青樓夜話通子遷卷之三(以上で一行)〇 (これ丈更に一行)、此の二行分入用の餘裕を作るため、この卷三の初丁表(野良では第二十六丁オ)だけを彫り直し、但し野良の文句は、其儘うけて、一句も違はぬが、漢字を多くして、卽ち野良第二十六丁表の末行「アノねどうぞねんが」までを、彫り直し、以下野良の版木(第二十六丁ウから)に續けてゐる。卷之三、本文の初めの一行分の〇などは、この伸縮のやりくりのため、その胡麻化しである。以後、ずん〳〵野良のまゝで摺つて、野良の第四十丁裏の五行目、「…………べし。此内主」が、丁度、通子の第四十丁ウ(この丁數は、出たらめ、但し卷之二よりの追丁。凡て野良の版木のまゝ、手を入れてない)の五行目終りである。然るに滑稽な、舊版繼ぎ足しの場合の過失といふのか、粗漏といふのか、ヅボラか大膽か無心か、「此内主」で、以下野良は、尙ほ次丁の表に亘つて數行の文字があるに拘らず、これで中斷のまゝ、通子では、第五章と、章をかへ、(これで一行)「よしはらの春の夕暮…………」と、以下は

全く見知らぬ版木、書體も、漢字假名の使用程度も違ふ、これまでと違つた(野良とは違つた)漢字の多いのが、眼につく。さうしたもので、更に人物と事件を變へ、これが以下四十の丁數を追うて、四十八で、この卷三は終つてゐるのである。さて此の第五章以下が何であるか、卷四が如何であるか不明であるが、恐らく以下も創作ならず、舊版木の同じく流用か、それとも或は此の第五章からが、本當の創作(新版本)であるのか、それも不詳である。が卷二と卷三の大半との筆跡に見て、これも舊版借用だらうと思はれる。さて此の「通子遷」は年代不詳であるが、恐らくは文政末か天保のはじめか、或はまだ初代一九(野良の原作者)の生きてゐた時であるかも知れない。(此通子遷、無論、天明年間刊の通志選とは別物である。雲泥の差、内容體裁の上からも。但し共に小本。)

「傾城買花角力」と「娼客四十八手」

四、「娼客四十八手」は、最近自分が「早稻田文學」に書いた通り、疑問の洒落本として、何の改題舊版應用本かと尋ねたが、まだ誰からも教示がない。が、それは筆者自身にすでに答解を得たのである」それは矢張り洒落本(但し大ごんにやく)の文化元年版「傾城買花角力」(雲裡作)の舊版使用本である。頃日、この花角力を見つけて、容易に分つたのである。

即ち此の花角力は、中本、序以下丁を追うて、序、口繪、發端で計五丁を數へてゐる。その次ぎ第六丁目表の一行目に、あどけない取組云々と二行分を取つてゐる。唯この標題やうのものを取り除けて、その代りとして娼客四十八手卷の中と彫り直したのである。その次、金谷千樹の春の花云々以下

本文、すべて花角力の版木のまゝである。すなはち、四十八手本は、その中卷は第六丁から始まつてゐるのであるが、この第六だけは、丁の所を(舊版にあつたのを)削り、次から七とそのまゝ摺り出してゐる。さうして、此の卷之中は、花角力の第二十二丁裏の七行目、「………。そんなものかね」までゝあつて、「本や」云々の以下は削つてゐる。恐らく、卷之下が、花角力の次ぎの第二十三丁から、依例舊版應用といふのであらう。で、下卷は分つたが上卷が分らない。花角力のまゝの僅か序とも丘丁だけでは、いくらにもなからう。何かそれだけ、他の版木を持つて來てくつつけたか、又は新たに作して彫つたかとも思ふが判然はせぬ。さうして、此の「娼客四十八手」本の作製も年代不明であるが、これも文政末か天保の初めであらう。版元も江戸か否かゞ分らぬ。

僞作者心意の忖度

以上、自分が最近自ら發見した洒落本改題舊版應用本の例であるが、第一の例は共に同一作者であるからまだ恕すべし。第二以下は、全く剽窃であるが、然しこれが、全く大びらに、甚しいのは、第二の例の如き、原作者僞作者共に共存の狀だから驚く。文化三年頃は、京傳、一方に合卷などを盛んに作つてゐる時代だからである。假りに「嬉丸」が、京傳自身享和から文化へかけての洒落本の上での作名だつたらまだいゝ。若し別人だとすると、全く人を馬鹿にした話。これが餘り秘密の裡に賣買されたのでもなからう、とすると、原作者僞作者兩個の立場は如何であつたらう。京傳は、假りに舊版借用・名儀書更へ、つまり著作權讓り渡し、(今のと較性質は違ふ)さうした料を取つたらうか。また世

間もである。京傳の「四十八手」からこの「夜慶話」までには、十五年許りの年數の經過である。此の間にこんな喰はせ物を賣りつけられて、よく平氣でゐたものだ、それ程に「四十八手」(京傳作)が、少部數摺出しだつたらうか。但し洒落本騰貴の今日、四十八手が、まだ割に廉いのは、此の「四十八手」本の摺出の多かつた事を證明してはゐないか。とにかく、今の常識では不可解な事だ。(現に自分も此の二本を時を違へて買ひ、無論「夜慶話」の方が、年代は後でも稀本だから、四十八手の倍額以上を拂つた。アトで、氣がついてオヤ〳〵と思つた事を白狀しておく。)殊に、今、「四十八手」本と「夜慶話」と較べると、表紙までが同じである。普通の茶表紙とは違ひ、墨で電光つなぎのやうな模樣があつて、全體が鼠色である。この同じ表紙である事もをかしい。(買つた時、京傳の四十八手と同じ表紙だなとは、漠然思つた。)十五年の間、四十八手に使用した表紙の殘りが殘してあつたのか、それもをかしい話。さりとて、數ある洒落本元表紙の中、自分の藏本及所見では、此の二である。が共に更へ表紙ではない。同時に、(つまり此の家藏本「四十八手」を文化はじめの再摺本とし)出版されたとしたら、どちらか一方で、それこそ二本の生れる譯がない。此の同じ表紙である事は、それが兩三年ならいざ知らず、十五年の年月を隔てゝゐるからをかしい、譯が分らない。何とか理窟がありさうで、見當がつかぬ。

第三の通子と野良の場合も、恐らく作者僞作者共存の事であらうと思ふ。

○附たり一、舊版使用の他の例

舊版使用の他の例（「咄の綺有多」の跋）

一部分に、舊版（同一版）をそのまゝ使用した例を發見した。それは、「咄の綺有多」の跋が、「内所圖會」の卷頭（跋といへど、共に卷頭の中）に使用せられ、結局「咄の綺有多」と「内所圖會」とは、序の所と作者名とを少々變へたばかりで、本文はすつかり（及び此の跋も）同一版木である。その舊版の再摺である事は、既に知られた事であるが、その跋の版木が、この跋だけが、三度使用せられて、その儘「孔雀染勤記」に使用せられてゐるのである。此の「孔雀染勤記」は、寛政版、山旭亭主人の作になつてゐるが、その作の末尾に、表の丁一行ばかりを新たに彫つて、直ちに丁度工合よくこの跋の版木に繋いでゐる。（この跋だけ、嘗て「野暮と通の論」として、江戸軟派研究に紹介した事がある。）これにも驚かされた。即ち「南蛇加紫蘭」（霍俊滿）の安永版、作中の版木を、天明で小金あつ丸（此男は跋以外九分九厘借用、即ち「内所圖會」と改題しての作者。）が、寛政で山旭亭が、皆借用してゐるからである。ヒドイ例である。これからも、私の頭には、あつ丸と山旭亭とが同一人ではないかとの疑ひが、本當らしく思はれてくる。

（この同一人歟の疑ひは、本著、別掲、「洒落本雜記」中にある。）再び此の疑問を提出しておく。

花山亭笑馬に就て

（附たり二、「青樓玉語言」の作者笑馬と、稿本「南驛夜光珠」）

「南驛夜光珠」は、增井山人の文化二年成の稿本である。これと、文政五年版の花山亭笑馬作「青樓玉語言」とは、殆ど同一作である。唯、夜光珠が名古屋、宮の神戸(がうど)遊廓に材を借り、地名などそれにしてゐるに不拘、玉語言では吉原にしてゐる。その他は、人物の言葉、時には文句の末までも、また一篇の趣向もそのまゝ、最後、色敵(いろがたき)が息子の件頭だと知れる事もそのまゝである。これに私は疑問があつた。それは、「玉語言」の笑馬を初め江戸作者と考へて、江戸作者のものを地方が竊(ぬす)むならいゝが、その反對、先の地方作者のものを後に江戸作者が竊むのであるから、さつぱり譯が分らぬとしたものである。それが最近、剽竊は剽竊（或は原作者承諾の上かとも思へる。）であるが、尤もな筋だと思へてきた。それは、笑馬を三馬系かと思つたが大間違ひ、三馬の門人は馬笑であつて別人である。この笑馬に就ては別に傳記はないが、「慶長以來小說家著作目錄」には、單に、尾張藩士だとのみある。唯、これだけである。これにヒントを得て、「玉の語言」を調べると、その例言に、笑馬は、數年來江戸新橋の近くに假住居してゐて、此の本の年（「玉語言」の文政五年）からいうて過ぎつる夏（文政四年の夏か）、江戸から西百里の田舍に留る云々の意味の事が書かれてある。この江戸より西の百里とは名古屋の意味であることは勿論、これが尾張藩士の一方の說を裏書もする。江戸は、假住ひだつたといふからであ

る。然るに此の「玉の語言」の例言によると、彼は、先に同じ洒落本で、新宿本「角雞卯」の作の合著があるといふ。所が、此の先にが、此の文政五年から數へて、餘程の昔である。卽ち天明四年だからである。天明から寛政、文化、それから文政、卽ち、三十年以上の隔たりがある。（此の天明四年の、間違ひない事は、「角雞卯」にそれに相當する干支を記入した笑馬（花山道人と署す）の叙があるからである。卽ち此の干支、甲辰、これを天明四年に見ないと、文政五年以後になるからである。）すると、尠くとも、此の男は天明から文政の四年頃まで江戸にゐた。尾張藩のお留守居役ともいふべき役柄だつたのか。「玉語言」の例言を見ると、合著のやうにあるが、「角雞卯」を見ると、月亭佳笑編、花山道人閲となつてゐる。（月亭佳笑の佳笑は、花山亭の花、笑馬の笑と卽ち花笑と音が似てゐて何とかいひたいが矢張り別人だらう。）此の花山道人が無論笑馬である。佳笑といひ、笑馬といひ、此の笑は何處から來たか。月亭佳笑の笑から來てゐるなれば、笑馬が閲といふもをかしい。とにかく、笑馬の尾張者たる事は事實らしき事、並に、天明四年の「角雞卯」にも關係のある事、三十年以上江戸に寓居してゐた事だけは、以上から見て確實である。唯、これだけの作の上の先輩たる笑馬が、如何して增井の稿本の筋並に文章を丸抜きにして、吉原の地名にした「玉語言」を再現させたか。增井生存中（殊に、當時、增井の名に於ても二三の出版物があつた。）の事であるから、增井は知つてゐた事であらうか。或は、增井が、笑馬の古い稿本（未出版だつた）を借りて、そのまゝ丸抜、神戸の洒落本にしたのか、それを再

び笑馬が、もとのものにして出版したのか、その間の事は何とも分らない。が、唯笑馬は、金（かね）でもやつて代作させたり、又は、校閲の名を取つて、嬉しがつてゐた男のやうにも思へてならない。現在・「玉話吉」も、氣がさしたか、あれには作とせず編としてゐる。（勿論、此當時は、編も著もごつちやにしてゐる例が多いが。）以上、疑問のまゝ。

「教訓竅學問」に就て

○附けたり三、一九の「教訓竅學問」

これは「倡客竅學問」の再刻本であつて（中本であるからである。輪廓も、中本の大きさに變つてゐる。倡客竅學問初版は、小本。）その奥附に、此本の後へん青樓女庭訓（東里山人著）が既に賣り出されたともあるから、卽ち文政六年（青樓女庭訓の年）以後のものであらう。或は、このなほ後、天保初期のものかも知れない。とにかく、これだけは、東里の名ではない、一九である。教訓とした所にも、時代の關係（上司の壓迫もあらう）が窺れて面白い。が中はすつかり倡客である。これなども、改題本の異例。（但し、教訓本は、口繪だけを、拙なものに更へてゐる。）何を教訓するのか、分らないから面白い。尚、爲念、「教訓竅學問」本の奥附（豫告）を載せておく。

穴學問後編　青樓女庭訓　完

先達而うりいだし有之候

通客假宅文章（つうかくかりのたくぶんしやう）　全本三冊　狂訓亭主人、楳山人　合作

とある。この狂訓亭は、春水である。すれば、春水の狂訓亭の存在その最初は、今自分としては、不確ではあるが、天保三年頃であらうと思ふ。卽ち此の頃の、此の教訓外題本は、再刻、又は再刻再摺本（初刻本からは、三本目）ではなからうかと思へる。尙、教訓發學問の丁數を述べておく。序が細字にて半丁、そのウラ口繪にてヒラキ、その裏が、本文の初まり、こゝに倡一と丁數が打たれてある。全本文卅五丁、卽ち序の一とも全丁數は、三十六丁である。

—昭和二年十月。

○補。再び笑馬と増井山人

増井の著作に、笑馬の贊あるものを發見した。それは増井の洒落本型「似口早指南鸚鵡返」小本一册（文政五年）の口繪、華溪の筆であるが、それに、笑馬の贊がある。（口眞似をまた口まねやあふむ鳥、笑馬とある。）それに依つても、此頃増井とは、とにかく交友關係のあつた事證にはならう。なほ此の笑馬は餘程正體の不明な男で、後天保六年版の「東海道中滑稽譚」（これは、種彥門人の尾張熱田出の笠亭仙果が名古屋へ來るを迎へる爲の作、中本一册。二編以下未見。初編には、英泉の口繪がある。一種の噺本で、連中——恐らく名古屋の素人作者連中であつて、名前からは笑馬の門人と思はれるのが多い。——の東海道各驛に因んだ小咄を集めたもの。）は、笑馬の編の名儀、仙果の閣の名に於て板行され

てゐる。此の彼より見れば、文壇的閲歴の後輩たる仙果の閾を仰ぎ、又仙果を迎ふる冊子を編んでゐる所など、却つてをかしい。（但し、此の「東海道中滑稽譚」の凡例には、江戸風調戯作者、花山亭笑馬と堂々署してはゐる。）其他、彼は、中本の「日本婦女鑑」（?）といつた一冊物の繪本教訓物に、序文を物してゐる。恐らく彼の編であらう。なほ、中本型六丁の讀販風の「深川二上り新内」といふのも、笑馬撰とあつて、存在する。かうした赤本類似のものも作つてゐる（?）變な男である。（此本などすべて、名古屋版である。）

再び「傾城買四十八手」に就て

○補。傾城買四十八手（京傳作）に就て

洒落本は、元來、舊版木以外、當時間もなくの新版木本（再摺本ならず）も間々見受けるが、それが寛政二年以前の京傳作に多い。卽ち京傳を洒落本の宗として、卽ち舊版木押收（幕吏によつて）又は磨滅などの故障により、多々益々賣らんが爲に新刻した。が舊版木を版下に用ゐたのであらう、外觀は誠によく似てゐるが、一點一劃は違つてゐる。無論これは、洒落本などの好色本禁のしばらく綏んだ寛政八九年頃又は享和に入つての事であらう。一九にも多いが、これは、その存在が多く享和であるから、卽ち末期洒落本の流行作家としての增刻であつたらう。その京傳の寛政末又は享和度の再刻本に、「傾城買四十八手」もある。さうして、右稿の底本とした「四十八手」は、其後、異本と校合すると、全く此の再刻本であつた。再刻初刻の目に著く相違は、終りの西行も云々の句の署名、「京傳」の二字

が、再刻本には無い。且つその丁裏の末行が、再刻本では、單に、四十八手畢とある。（初刻本は、傾城買四十八手畢。）なほ、初刻本では、別に此次に、自跋二丁分あるのが、再刻本では全く削つて（恐らく未刻のまゝに）無い。其他、初刻再刻、その口繪の鯉魚美人は、描線は同一であるが、細微には、無論違つてゐる。——倂、此の再刻本（右稿の底本）が、夜慶話と全く同一の版木であるのである。これ丈の、誠にやゝこしい事實を歸納すると、「四十八手」はとにかく賣れた本、初刻の再摺三摺本も多い。又それでも足りなくて、寛政末か享和に至つて、再刻本が、現れてゐる。それでも足りなくて、その版木を嗣ぎ合して作つた僞作「夜慶話」が、作者名を變へて、これこそ新作らしく見せかけて、文化三年に生れた。以上は、疑ひない事と思ふ。さても厄介なる「四十八手」なるかなだ。それにしても再刻本「四十八手」が、刷り出しを止めたにしても、當然多くまだ流布せられてゐる當時、臆面もなしに「夜慶話」を作り出したのは、本屋の大膽か、嬉丸の大膽か、どちらであらう。（云ひ忘れたが、右稿底本の「夜慶」と「四十」とは、共に、表紙は、菱形のやうな模樣を薄墨で刷り出した薄鼠色の表紙、二本同一のものである、これによつても二本の刷出年次の近い事が思はれる。）

「夜慶話」の叙も剽窃

尙、「夜慶話」の叙に就て。これは、右本稿發表以後、飯島花月翁から指摘を受けた事であるが、成程、この叙も、嬉丸の創作ではない、剽窃である。即ち風來山人の細見嗚呼お江戸序（風來六々部作所收）と殆ど同一である。末尾の「ひろいところがア、夜慶話」が、風來では「ひろいところがア、お江戸なり」で、それ迄は、全く同文。最後の年月と作者名は、無論更へてゐる。これで見ると、彼の眞の創作（？）は、嗣足の本文初一丁位だけといふ事になる。思へば、人を馬鹿にした本ではある。

——昭和三年三月補。

「娼妓絹籭」と「仕懸文庫」の正版と僞版

京傳作洒落本の三作

寛政三年春正月の山東京傳作洒落本の三作、「娼妓絹籭」と「仕懸文庫」と「錦之裏」、これに就て、正版と僞版と二種あり、今日殘存の多くは、僞版本のそれであり、且つ飜刻（活字）本の底本も、此の僞版に據つたものであることを明らかにしたいと思ふのである。但し以上の二作の中、「錦之裏」だけは未だ容疑すべき箇處もあるのであるが、前二者に就ては、これが的然謂ひ得る證左を攫んでのことである。無論、此の事實は、非文獻の間に、我々の先覺（現に、以下述ぶる如く、大久保葩雪氏の如き）に依つて存知せられてゐるのはあらう、が此の僞版のしかも三部全部に出來てゐる事は、まだ文字の上には書かれたことがないと思ふ。――。

三作は禁令以前に脱稿

偖、「娼妓絹籭」と「仕懸文庫」と「錦之裏」とは、出版は寛政三年春正月であるが、この作執筆は、前年七月頃である。普通に、京傳の此の三作は、禁令が出てゐるのにも拘らずそれを冒してとあるが、事實は然りではなく、禁令以前に、脱稿はしてゐたのである。（脱稿後、卽ち寛政二年十月二十七日禁令出づ。しかも此の禁令は、洒落本と限定はしてゐない。一般好色本に就てである。洒落本を包含した意味ではあるが、が、此の禁令を洒落本「と特に限定して」の禁令と謂ふのは、穩かではない）さうし

行事、許可す

販元作者行事の處分

て禁令發布後、禁令の趣旨に循つて、版元の蔦屋は、行事(依托検閲者)の検閲を乞ひ、立派にその許可を得て、出版してゐるのである。だがその間の事情を謂へば、蔦重(版元)では、禁令以前の贈稿であり、且つ出版準備(版木等)も出來てゐたことであり、且つ営業の傾向は、なほこの洒落本類好色物に向つてゐることを察し、奇利も博し得られると思ひ、行事に鼻薬をかませたか、或は、行事自身、嚴しい御禁令の出たはなでもあり、それに上包の教訓讀本としてあるのに、(この上包まで検閲したか否かは分らぬが、でなければ、教訓讀本の意を、版元は、口頭で強調したらう)すつかり安心して、許可の極印(きはめ)を捺したものに相違ない。で翌三年正月出版、それが出版間もなく、三月に絶版、版木押收版元作者、並びに行事共の失體とあつて、それ〴〵版元は身上半減、作者は手鎖五十日、行事の二人は、商賣お構ひの上追放、とそれ〴〵處分せらるゝ所あつたのは、無論上司が自發的に、その内容に氣が附いたのではなからう。或は、蔦重(版元)の奇捷的なやり方を嫉んで、密告する所あつた、それによつての司法權の發動といつたものであらう、即ち同業者の密告に依るかと思ふ。たとひ禁令以前の脱稿、行事の許可がありといへ、その内容が洒落本であることは、作者版元は夙知の筈、即ち行事の疎漏を利用した奸策と、判斷せられたのである。が正當を以て爭へば、事情が右の如くであるから、全然、禁令を冐しての出版ではない。寧ろかくの如くしても、京傳・版元が罰せられたのは、罰した方が酷に過ぎる。今ならば、直ちに控訴すべき性質のものと思はれる。――これが一般に、京傳

寧ろ京傳に同情すべし

は、此の三作を、禁令發布以後、悪いと知り乍ら脱稿、書肆また奇利を博するための秘密出版かの如く傳へらてゐるが、眞相は、全く反對、禁令以前の脱稿、形式は立派に取つて檢閲官の許可ずみ、といつたものであつたのである。

が、とにかく、此の京傳作の洒落本三部の筆禍は、洒落本歷史の大事實の中の一、しかもこれが京傳が、洒落本作家として、文才驥駿並び適せるに不拘、讀本合卷などに移らしめ、晩年は却つて後輩に押され氣味のやうに思はれる、その動機となつたのである。が、この寛政三年以後の出版、作者不詳の洒落本「房情記」の序文は、署名は明らかにしないが、いかにも京傳であり、その京傳が、暗に洒落本の未だに尻押しをしてゐるやうな皮肉な語氣の見える、自分の筆禍に對する鬱憤ばらしとも見えるのは、（足を洗ひし老込作者、などと自分を稱してゐる）寧ろ同情すべきである。

三作に僞版あり

閑話休題、此の寛政三年春の版、京傳の三作に、僞版があつたのである。無論此の僞版は、三月絶版を命ぜられ、原版木押收の目に會つた以後である。――但し此の僞版の作製せられた年月は、明かではない、禁止直後の寛政三年下半期の中か、いかに大膽でも然りではなからう。此の時の禁に懲りずに、ぼつ〳〵再び洒落本の出かゝつた同五・六年頃の事か、又遲くとも寛政十年頃からの洒落本再興――出版成績の上から見て――ともいふべき頃に、複版作成、いかにも禁止以前の正版顏をして或は摺り出されたものであらう。

僞版の年代

倍、以下は、此の三部の正版（絶版以前のものに行く）と偽版との異同の説明である。最も異同の烈しいのは、その中の、「娼妓絹籭」である。

「娼妓絹籭」の正版と偽版

偽版本の體裁と内容（序二丁、跋三丁を全く缺く）

第一、「娼妓絹籭」の正版と偽版

「娼妓絹籭」そのものゝ本文内容に觸れることは、姑らく措く。本文は、偽版本正版本同文であり、帝國文庫「京傳傑作集」其他にも活字本があつて、周知のものであるから。序、目錄、跋などの有無又は異同のみが、正版偽版に於て烈しいのである。普通に見る「娼妓絹籭」本は、栗表紙、元題簽は白に子持輪廓あり、中に、稍小さく、隷書體に、「娼妓絹籭　完」とある。次ぎ、自序二丁半（署名は、山東京傳）、口繪（京傳肖畫像らしきもの、將棋の盤面に對す、盤面より煙だちて傾城の見ゆる圖）半丁。次ぎの口繪（將棋盤面の如きもの、上に解説があつて、右　惣傾城とあるもの）半丁　目錄半丁　計四丁である。以下本文が、三十七丁。跋は無いのである。但し、序の分が、四丁であるに不拘、數は、五になつてゐる。即ち序ノ一の裏が、「可恐巧計のために郛遁（ふかさ）と」で終り、序ノ三の表が、これをうけて「ならんとを」云々となつてゐるのである、即ち序の二を缺き、文は續いてゐるのである　これだけの事實を以てしても、此の序の四丁、跋を缺くものは、再版（又は再摺）本かといふことは、容易に起る疑問であらう。さてこれが、帝國文庫などの飜刻底本であるのである。然るに、最近、序五が完全に在

り、且つ跋三丁を有するものゝ一本を寓目した。

正版本の表紙と題簽

此の一本、流布本とは表紙からして異る。更紗模様のやうな表紙で、題簽も、帯黒の黄色に、太い子持の線で圍み、文字は、流布本より更に硬く、なほ大きく、「娼妓絹籭　完」とある。此本こそ、慥かに絶版以前のもの(卽ち絶版を命ぜられたその原本)と思へるものである。(此の一本、元、大久保葩雪氏・市島春城氏藏本。)その見返しに、大久保氏の識語(朱書)がある。先づそれを擧げる。

寛政三年

此書は原版なれど、直に絶版となり、其後に重刻(僞版)せり。序末巴山人の印を白字になし、挿畫にも駒子の箱なく、盤の四足を黒色にて筋を白く出し、盤上の駒子は三箇のみにて、圖の上部に居る妓の帶も逆らしく見ゆ。又柳浪館の序と跋の全部と目錄(久彌曰、蔦屋の賣品目錄の謂也。)と、蔦重出版の所を闕けり。巴山人の印章を劃を誤り、且白字とせしにて、僞版なることを感じたり。

葩　雪

といふので、一々列擧せられた項目は、流布本(僞版)に就てゞある。「僞版なるを感じたり」と、まだ大人しくいうてゐられるが、これは紛れもない僞版、爾く斷定して構はないのである。卽ち以下、此の一本(原版、卽ち正版)に就てのみいはう。

正版本卷初

正版本は、序五、その中の序一は、西江月云々の柳浪館主人の序がある。その次、白序二丁半、以

下流布本の通りである。即ち目星(めぼ)しい異同は、流布本に於て柳浪館主人序一丁分を全く闕く事である。自序以下は、大體に於て、原版(正版)の字劃を眞似(まね)て、作られてはゐる。細かい相違は、自序の山東京傳の下へ來る例の巴山人の印が、正版本は、二線の圓の中に、巴山人が、黑く、普通のまゝに、但し篆體で、傾(かたむ)き乍ら收まつてゐる。流布本は、外の圍みの二線も、極細いもので、しかもその中の巴山人は、正版と似て居ながら、全く文字を白ヌキにしてゐるのである。さうして、巴の第一劃の曲げ目が、彫り違へて、開(あ)いてゐること、及び山の形も正版よりは拙くなつてゐる。

次ぎ、例の盤面に向ふ口繪(半丁分)は、これも小部分には相違が烈しい。即ち左に列擧する。

箇處	正版本	僞版本
柱にかゝつた拂子(ほっす)の柄	白	黑
右の柱の色	白	黑
人物の羽織の紐	有	無
人物の帶の色	黑	白
京傳　鼻	鼻柱が太い	鼻柱が細く長い
將棋の駒の箱	有	無
盤の側の散つた駒の數	三つ	四つ

盤面の駒の數	七つ	三つ
煙　　管	雁首細く、全體に長い。	雁首太く、全體に短い。
盤の足	白	黒
妓の帶の結び方	正	逆
妓の裾模樣	菊	形だけ似て、菊には見えない。
煙の描き方	畫の上部へ巾狹く	畫の上部へ巾廣く、右の線は、柱まで至る。
妓の笄の數	四本	畫面に現れた數は九本。
妓全體の描き方	襟のあたりなど凡て丁寧。	粗雜

などゝ違つてゐるのである。（正版僞版の存在を明らかにはしてゐないが、外骨氏著「筆禍史」中の「娼妓絹籭」などの插繪は、此の正版本の原寸大である。參照せられたい。）殊に、滑稽なことは、正版本では、此の煙から出た妓の裾模樣が、菊の花を三輪描いてゐる。これは無論彼の昔の狎妓今（いま）の宿の妻菊園を意味した（菊園は寛政二年二月から京傳の妻、同五年秋病歿した。）お安くない所であるが、その折角吹聽も、僞版本では、何（なん）だか譯の分（わか）らぬものにされてゐる。其他、人物の羽織を後（うし）ろへ撥（は）ねた部分が、正版本では見えてゐるのが、僞版本には無いとか、拂子の毛の垂れ加減だとか、眼鏡の緣だとか、人物（京傳）の襟の描き方だとか、跪坐（きら）をかいた左脚の線のうねりだとか、一々細く詞へは、凡てが違つてゐる。凡て

に於て僞版本では、胡麻化した筆使ひである。

次ぎ、將棋盤の部分の半丁、目錄の裏半丁は、正版僞版、大體に於て似てゐる。本文も然りで、嚴密にいへば、一點一劃凡て違ふが、見た眼は同一である。唯、第一回が、正版本は、第一回と振假名のあることなどゝである。なほ、丁數の打ち方は、僞版本では、凡て綴ぢ目の裏半丁分の下にあるに拘らず、正版本では、本の柱の下にあることである。なほ、正版本では、丁の打ち方が、一寸繁雜に打つてある。卽ち、柳浪館主人の序が序一、自序が序二序三と序四の表まで、口繪の人物はその裏。將棋盤面の圖と目錄との表裏が一、(卽ち正版本では、これが本文の一)肝腎の本文のはじまりは、二よりである。以上順に追うて、第廿六丁に至つて、これが、廿六の卅とあつて、卽ち四丁分を飛んでゐる。それが四十一丁に至つて、再び三丁分を飛んで、四十一の四とある。で、本文の終は、四十五とあるが、正味を數へたら、盤面の圖から、三十八丁、純本文は三十七丁、卽ち僞版本と異りはない。尙、本文の字詰、大小、凡て正版本僞版本類似で、一行一字も間違はない。正版本、その後に、跋一跋二跋三があり、蔦屋目錄が二丁分あり、最後に奧附半丁分、例の「珍らしき新板云々、書林　蔦屋重三郎」があるのである。

正版本の丁の打ち方

よつて、流布本に全く闕く序一、跋三丁分を、原文の儘、左に載せておく。

（一）

正版本のみの序

西江月　（以上第一行）

莫レ羨ニ歌樓妓館一。休レ貪ニ（以上第二行）美色嬌聲一。分明是箇（以上第三行）陷人坑。可レ嘆愚人不（以上第四行）レ省。樂處易レ生ニ愁怨一。笑中（以上第五行）眞有ニ刀兵。等閒失（以上裏の第一行）脚入ニ他門一。便是蝦蟆（以上裏の第二行）落レ井。

（以上裏の第三行）

柳浪館主人

○

正版本のみの跋一

跋娼妓絹籭　後

山東京傳。金馬門にあらぬ。牛糞橋の（以上表、第二行）傍に世を避て。性氣の拔き事。牛（以上、第三行）の小解のごとし。上ハ天人の尻を摘。（以上、第四行）下ハ閻羅の鼻を撮。滑稽虚を以（以上、第五行）て實を獲。好て著述をなす。中に（以上、第六行）娼妓絹籭あり。嫖客と娼妓の風（以上、第七行）情を細砕て。恰も飛切の糝粉の（以上、第八行）ことし。僕一たび味て其美なるをしる。（以上、裏の第一行）嗚呼京傳子が筆頭の渣。奇とする（以上、裏の第二行）に堪たり。須評而求。

寛政辛亥孟陬

飯顆山　曼鬼武識　[鬼][武]

○

後叙

花炮家も身揚をして點（第二行）して不覽ば不買。膏藥（第三行）も脚を創て不覽ば不賣。（第四行）況 賣 情 娼 妓においてをや。（第五行）應馬呼牛なくんばある（第六行）べからず。娼妓に替への季（裏第一行）指なく。自行の盟章も（裏第二行）なし。彼に救り。是に誓（裏第三行）は、身をたつるの業可憐。（裏第四行）高飛の鳥も美食に死。（裏第五行）深泉の魚も芳餌に死。（裏第六行）娼妓も亦孺安の爲に（表第一行）謬ことあり。豈虚のみ（表第二行）ならん乎。雖然 未きかず（表第三行 娼妓に正札附請合賣（表第四行）のあることを。余以爲其（表第五行）實を信ぜず其虚を（表第六行）惡ざるが輙是識趣人（裏第一行）歟（裏第二行）

京―傳―艸―廬ノ食―客

煙―花 浪―子跋　[有名無人]　[瀾蕩三昧]

次の洒落本類目錄は、「傾城買四十八手」以下、計二十種。別に山東京傳戲作として行を更へて、「彌郭」以下計七種の外題と下に略解題とを擧げてゐる。(此分二丁分、僞版本になし。最尾の奥附半丁、これもない。)

×

「仕懸文庫」の正版本

第二、「仕懸文庫」の正版僞版

此の「仕懸文庫」は、同じく同時の出版、三部とも禁を食つたその中の一でありながら、正版本と僞版本とは、「娼妓絹籭」の如き異同が、全くない。二本全く同樣、但し、版木は別である。かるが故に二本を綿密に對照すると、字劃は、悉く細部に違ひがある。が口繪の如きは、正版本僞版本似てゐて大した違ひがない。相違は、正版本には、例の末尾、洒落本類目錄が二丁分あり、此分正版「絹籭」と全く同じ物である。最尾、奥附半丁、正版「絹籭」と同樣同版木のもの半丁ある。此の二丁半分(目錄と奥附)が、僞版本には、全く闕くのである。及び表紙を違へてゐる。僞版本は、此の記事の底本としたもの、元表紙ではないから何ともいへないが、恐らく僞版「絹籭」と同じく、茶表紙であらう。正版本(と私が認めた)の「仕懸文庫」は、正版「娼妓絹籭」と全く同一な、同模樣、唯色ざしが違ふかと思ふだけの更紗表紙。題簽も、正版「絹籭」と同樣、帶黒の黄色な地紙に、太く大きな楷書體で、仕懸文庫

全(この振假名あり。)とある。

第三、「錦　之　裏」

「錦之裏」に就て

これは、家藏本と他本との二本對照からである。が家藏本が強ち、正版本とも斷言出來ないやうにも思ふ。即ち、此の現在二本は、慥かに異版本本であるが、さてその表紙が、正版「娼妓絹籭」、正版「仕懸文庫」と同一の更紗表紙ではないからである。(此の更紗表紙云々は、私の正版判定の大部分の根據であつたから、ここで何ともいへないが、しかし比較的、家藏本が正版本かと思ふ。それは、此の二本全く同じやうである。が、販木を異にしてゐる。即ち一點一劃を嚴に調べて來ると、二本異種である。唯、似てゐるだけである。但し、終りの挿繪人物畫のみに於て、部分的には、異同がある。が、これも「娼妓絹籭」の如き、格別の異同がない。唯、違ふのは、他の二本(「絹籭」と「仕懸文庫」)とにない特殊の異同が一點だけある。其は即ち極印の有無である。他本の「錦之裏」にはこれを闕く、家藏本の「錦之裏」には、これを見るのである。

極印の有無

即ち私が嘗て(大正十五年八月、新小説、「浮世繪趣味號」)、極印の使用期を、寛政二年十月末頃に遡るべしの論據としたその極印で、即ち京傳の此の作を行事が檢閲した、その許可の印で、但しこの洒落本は、十二月二十日頃に之を捺したとしても、同一の極印が既に、禁令發布の十月二十七日以後存在してゐたと見て、極印の使用が、寛政三年ではない、以前の二

「錦之裏」正版本の題簽如何

年十月末としたものである。その極印がある。即ちそれは、序の第一丁表、青樓晝乃世界錦之裏自序の、「裏自序」(二行目)の下の、餘白に、捺されてある。上に文字二個(不詳)の長方形の印、下に丸形の中に極、即ち極印があるのである。私が、此の家藏本を正版かとしてゐるのは、此の極印があるからである。が、表紙は、此の本(家藏本の分)、茶表紙で、題簽は、「辰巳婦言」などの寛政末期に多く見うける大きな方形のもの、(作者又は貸本屋と、買主のあるじとの對話、中に大きく外題を現はすといつたもの)である。此の方形大形の題簽は、自分の知る限りでは、寛政六年の「北廓雞卵方」にこれを見るが、此の「錦之裏」の家藏本は怪しい。が果して寛政三年頃に、すでに此の方形大形の題簽が現れてゐるなれば、此の家藏本は、更紗表紙(他の二部の正版と同樣な)ではなくとも、正版かといふに近いが。(補、其後發見の智識に、寛政三年以前既に方形題簽あり。現に、天明四年の「角雞卵」然り。即ち家藏本、更紗表紙ならずも、正版本といふに近し。)さてどうか。若し、更紗表紙子持細長題簽「錦之裏」が現れ、これと家藏本と較べ、若し同一版木であつたならば、家藏本は、正版の異種、若し異版木であつたならば、家藏本は、僞版本の第一、さうして此の執筆のため借り出した家藏本と異版の「錦之裏」は、僞版本の第二といふ事にならう。

尙、後叙の少部分に於て、家藏本と他一本とは、異る點がある。今それを列擧しておく。(此の他一本と「徳川文藝類聚」第五所收の「錦之裏」とは、同一のやうに思はれる。)即ち此の二本、左の異同があ

る。

後叙の第二丁表、四行目、ましやう（一切の衆生身の用心。さつしやい「ましやう」。）までは、二本同一であるが、その下に、尚、一行半、他本には文字がある。即ち、「亦人間の渡世利は心氣の一住。」とある。これが、家藏本では、此一行半、余白になつてゐる。その裏、第二行目、春正月（時寛政三年辛亥「春正月」。の下が、他本には、食二雜煮一之日とある。家藏本は、余白である。さうして家藏本と他本とは、製本の順序に、左の如き異同がある。これは、或は家藏本が、綴ぢ誤りかも知れない。（但し家藏本は、綴糸元のまゝ。）

家藏本。自序――口繪――後叙――本文――附言。

他　本。自序――口繪――附言――本文――後叙。

○

以上、京傳洒落本、絶版三部の正版僞版の對校であるが、此の發見――自分として――の動機は、自分の「仕懸文庫」が異つた更紗表紙であり、題簽も異種であつた。爾來此の共表紙の「仕懸文庫」に出會はず、さりとて同時異裝本ぐらゐに輕くこれを思うてゐた。一方、絶版本の殘る二部、「娼妓絹籭」も「錦之裏」もありはあるが、「仕懸文庫」の更紗表紙ではない。が共に、ひつ括めて、漠然、同じく絶版本で、絶版となつた版本で摺られたもの、即ち原版だと輕く思うてゐた。まさか僞版があるとは、

僞版本の橫行

氣が付かなかつた。「作觴史」には、「娼妓絹籭」の原版挿繪があり乍ら、氣も附かなかつた。それが最近、「娼妓絹籭」の蘆雪氏書入市島氏舊藏本を見るに及んで、はしなく先づその共に更紗表紙である事、及び蘆雪氏の書入を讀んで、家藏一本の「娼妓絹籭」(この僞版家藏本は關根只誠氏幸堂得知氏舊藏本)と對校、成程と思へた。蘆雪氏の詞を更に强めて、正版僞版と明らかに謂うてよいことを知つた。同時に、共表紙の家藏「仕懸文庫」と、他の「仕懸文庫」とを求めて、對校、これも全く異版二種たる事を知つた。「錦之裏」は、右に述べたやうに、稍不確ではあるが、これに少くとも右に述べた二版本ある事を知つた。即ち凡ては、更紗表紙の「娼妓絹籭」(序跋計四丁多きもの)のお蔭であるのである。――このやうに事實が明らかになつてみて、さて分つた事は、現在洒落本騰貴拂底の世の中でも、此の京傳絕版の三作は、絕版でありながら、まだ割合に平凡である。賣出しと禁とで三月の間があるとしても、余りに本が平凡である。その理由が、釋然分つたのである。即ち、僞版本が平然として橫行してゐるからである。しかも落丁の如くにして落丁に非る別本「娼妓絹籭」如きが存在し、これをして僞版なりと氣づかしめないからである。

偖、此の僞版は、いつ頃出來たものか。それは不明であるが、前にも謂うた如く、禁の直後は、まさかやりかねた事であらうから、やはりほとぼりの冷めた寛政五年か、或は遲く三馬・一九などの後進作家群出した寛政末・享和初め頃の事でもあらうか。

偽版「娼妓絹籭」の序と跋削除の理由

なほ、最後に疑問一つ。少くとも「仕懸文庫」と「娼妓絹籭」とは、絕版後の僞版の存在が明らかになつたが、然らば、一方「仕懸文庫」を正版僞版同樣になしたに不拘、「娼妓絹籭」だけは、正版の序一、跋二を僞版にはなぜこれを削除したか、といふ疑問である。これは、この序一、跋第一第二、共に京傳以外であり、某の他に及ばんことを恐れて、他人の此等は、これを僞版時には、惜しみ乍ら削つたのではなからうか。「仕懸文庫」には、此の他人の序跋を混へてゐないからでもある。恐らくこれだけの理由であらうかと思ふ。

なほ、本考、「錦之裏」に就ては、自他の後考に俟つて、一層明らかにしたいと希つてゐる。

——昭和二年十一月六日夜。

（補記）「絹籭」本に就て。

その正版本の後摺もある事を、その後一本に據つて知つた。僅かに、更紗表紙本とは、全く同じでも摺が悪い。卽ち此の正版本も、相當に刷り出されてゐたものと思ふ。（此の後刷本、元表紙不明）或は、版木を隱匿してこれが刷出に力め、寬政九年頃、愈々正版本版木押收、よりて僞版本は、その以後の製作といふのではなからうか。

——昭和二年十一月廿七日夜。

艶示樓に就て

一、艶示樓は京傳門人也

艶示樓は京傳門人

洒落本作家の一人に、艶示樓主人といふのがある。「曏昔の茶唐（殼）」（寛政十二年春梓）一冊の署名者であるが、これは、疑ひもなく山東京傳の門人である。現に此の「曏昔の茶唐」は、京傳の天明八年春「夜半の茶漬」を摸し、其の糟粕を嘗めたものと自序にある。卽ち「我師何がしが夜半の茶漬」云々とあるのである。全文如左。

「曏昔茶唐」自序

遊ふべの茶がら自序

夫屁はころしてひるにしかず、金はいかして遣ふにしかず、いきた金とてものをいつたるためしもなく、死だ金とて幽靈にもならねど、たゞころすといかすとはかの屁玉と金玉ほどのたがひあるなり、とは我師何がしが夜半の茶漬の筆勢にして、たれかは是をあまんぜざらんや、爰に予が著述なせるは、すべて彼書にもとづくといへども夜半の茶漬のあまり茶の二番せんじにも至る事なく、馬の小便にもならざれば、其名を夕べの茶がら

といふ、一斤百茶の謎しといへども女の中の豆いりに同志の茶呑友達あつて若うかされて寝事をしらずば、書肆の幸愛にみてんト爾云

仇氣屋のひとり息子

艶示樓のあるじ誌

鼻印と巴山人印の使用

とありて、最後に印があつて、上に京傳鼻その儘の形、下は京傳の例の丸に巴山人の印である。(此の仇氣屋云々は、無論京傳の名作「樺焼」から來てをり、又、艶示樓は、其主人公艶二郎のもじりである。)正直いふと、自分の穿鑿も、この二個の印から來たのである。先づこの印の疑問から片づけてゆくが、此の京傳鼻を捺したのは如何なる意味か、第二世京傳を許された話も聞いてゐない、從つて艶二郎鼻の己惚を意味したものであらう。が巴山人の印までがあるに於ては、可笑しい。(無論これに京傳の作とあれば、事は終り問題は起らぬ。)明かに文中、我師とあり、がそれも京傳と明示しない所はをかしい。強いて解すれば、京傳が洒落本の禁に遭つた(寛政三年)それを再び記憶せしめない爲の、婉曲なる筆法でもあらうか。

巴山人印に就て

が、この巴山人の印は、京傳が、終生此れを愛し、且つその歿後、寡婦のお百合と弟京山とが此の印を渡す渡さぬに就て爭ひ、京山は僞印を造つて自己の書畫に押捺した形跡がある(外骨氏「山東京傳」)といふのであるが、それ程の印をこの艶示樓に許してゐるのが怪しい。殊に、此の印の使用(この「遊ぶべの茶唐」)は、京傳歿前の寛政十二年であるに於てをやである。(尙

目、仇氣屋六さかこいの照應としても、特に此の鼻印を許してゐるのはをかしい。(が無斷使用とはいかにも思へぬ。)

此の艶示樓と京傳と、いかなればそれ程の關係の下に、この印の別使用てふ事實が現れたのか。茲で、私は、最初直感したと同じ疑問が、チラと腦底をかすめる。それは、此の艶示樓とは、京傳の別名、隱號ではないか、と。然し此の茶唐が既に寛政十二年版と、跋によりて(申の春の意がある。後掲)殆推せられた以上、(この本の寛政十二年といふ事は自分の發見、導ろ推斷である。從來は諸書、刊行年不詳に置いてゐる。)寛政十二年頃に、彼がこの變名で再び洒落本をものするといふのも可笑しい。假りに、この跋の申といふのを十二年繰上げて、天明八年とすると、「夜半の茶漬」と同年であり、しかも同時の新春といふ事になる。且つこの時は別に洒落本がまだ嚴禁にもなつてゐないから、彼が何を好んでかくの如き變名を用ひ、且つ「我師何がし云々」とするかも分らない。且つ糟粕を嘗めるの意味を殊更斷らなくともいゝと思ふ。(尙、此本插繪畫家は、豊丸である。彼は、豊春門人、寛政末の洒落本や小咄本に多く描いたり、小咄の稿もある男である。壽亭とも號した。それからも、此本は寛政十二年に間違ひはないと思へる。)結局これは京傳の作ではない、すれば、著者自らのいふ如く、京傳の門人と見ていゝ。それには、この京傳鼻と牡丹餅印(巴山人印の事)との使用が珍妙である。如何。が、何としても、最後は、艶示樓主人は、京傳の門人といふ結論になる。

二、馬琴の誤謬

「江戸作者部類」の誤謬

と來るし、並に、馬琴の（蓑笠）名にて蓑笠散人の名にしものした「江戸作者部類」には、この「醇著の茶唐」を明かに、京傳作と誤り傳へてゐる。これは無論、原本に據らずの、馬琴の記憶のまゝの執筆に成つた點からの誤謬であらう。それは、同書洒落本並中本作者部の中に、

山東京傳

天明中より洒落本の新作、春毎に出て評判よからぬは無く、小本（洒落本の謂也——久）臭草紙共に滑稽洒落第一の作者と稱せられたり。その中にゆふべの茶殼、京傳予誌、ムスコビヤ（息子部屋、令子洞房とも書す。久）、傾城四十八手などいふ洒落本あり。四十八手尤行はれたりと云。かくて寛政二年官命ありて洒落本を禁ぜられしに、蔦屋重三郎（書林並地本問屋）其利を思ふの故に、京傳を唆かして又洒落本二種をつゞらしぬ云々（温知叢書本に據る。）

その以下は、「仕懸文庫」などの作によつて、彼が手鎖の刑を受けるに至る記事である。偖、これによると、勿論年代順には記せられてゐない事を初めから知つてかゝれば何でもないが、でないと、この書名の順で、「ゆふべの茶唐」は、彼の最初作であり、少くとも寛政二年以前の作の如く考へられる。

特にこれには京傳作と明記してゐる。が、「茶唐」の跋によりて、中蔵寛政十二年の作であり、一巡以前の中蔵は、天明八年で、「夜半の茶漬」と同年、すれば「夜半」を踏襲した意味が全く立たぬ。即ち是は寛政十二年の中蔵であり、同年版と見るを正しいとするならば、馬琴の記述は全く誤謬である。彼は洒落本などの誨淫の書は、手にとらぬからと、この誤謬をうまく云ひ遁れるかも知れない。

「花折紙」の正確

三、花折紙の評判

そこへ來ると、「花折紙」は確かにえらい。間違へてはゐない。(「花折紙」は、享和二年版の洒落本評判記である。)曰く、

㊞(この印は例の京傳鼻)噂昔茶唐　　艶示楼作

右の評語に、「頭取、ゆうべの茶唐丈は、師匠の夜半のちやづけ丈のしうちをしたひ、それを増補いたされての仕うち、」とある。その通りである。

艶示楼と艶二とは同人か異人か

四、艶示楼と艶二は同人か異人か

一方、洒落本寛政末期享和初期の作家に、例の塩屋艶二がある。この塩屋艶二と同人か異人かの問題である。艶二と紫の色主とは同人らしい。「南門鼠」(寛政十二年版)には、現に塩屋色主著ともある

からである。即ち此の紫色主と艶二とは、決定的に同人と見てよい。艶二及び色主の署名の著作如左。

艶二の著作

酒落本、南門鼠、寛政十二年（紫色主。又は璽屋色主と云ふ。）〇五大力、享和元年（艶二といふ。北溪畫）〇句嚢、同年（艶二といふ。國長畫。）〇後篇句嚢、享和二年（艶二といふ、北溪畫）〇南門鼠跡、同年（艶二。北溪畫）〇嫖客三體誌（同、同）〇白狐傳、文化元年（同、同）。

青本。男一面髭抜龜鑑　三、（寛政十二年、紫の色主といふ、豊國畫）〇夫京都是京都見物左衛門　三（同、同、同）

他に艶次郎生日記、怪談富士詣の二著のあること、「小説字目錄」に出でゝゐる。

「酒落本目錄」の混同

が、「茶唐」を艶二の作（艶示樓、艶二を同人と見て）とは、嘗て何ものにも現れてゐない。大久保氏の酒落本目錄には艶二樓主人とある。これではてんから混同してゐるのである。併、同一人か異人か。

二者別人ならん

自分は異人と見たいのである。何となれば、示と二とも違ひ、且つ、艶示樓は其外何處にも見當らず、且つ同年同時の「南門鼠」には、些とも艶示樓とも京傳とも何とも見えないからである。それは、「花折紙」の記述上の體裁に於ても、異人別人の如く記述されてゐる。即ち花折紙には、句嚢と南門鼠を載せて、句嚢は、「近年の作ではよい中である。然しとんと人氣が上らぬが、頭取などは感心してゐる。」の意を揭げてゐるが、然し色主として取扱ひ、一方艶示樓の「曉昔の茶唐」とは全然沒交渉、名も一方は色主、一方は艶示樓である。さて自分の此の二者別人説は、當時璽屋並に艶二郎が自惚れの意を現し、一時流行つた語である事を知るからである。（即ち艶示樓又は艶二は、京傳作「浮氣樺焼」から起り、璽屋は、是より

艶二、艶示樓の意義

先安永七年頃から起つた通語、自惚の意で、しほやないふとは、自惚をいふの意味である。)即ち自分の論據もまだ不十分ではあるが、このゑんじらう(これが凡て、京傳の「樺焼」に起源したものである事は無論。)に當てた同時の異人暗合であらうと思ふ。一方は艶二とし、一方は艶示樓としたのであらうと思ふ。(が色主の艶二は、一年後の享和元年かららしい。がさりとて、艶示樓が翌年艶二と改名した、即ち同一人といふのでは、まさかあるまいと自分は信ずる。)さうして此の一方の艶示樓の方が京傳の門人であり、艶二の方はでないと見たい。(曙屋艶二の方は、唯、「南門鼠」にもある「染物屋にゆかりある紫の色主」といふにより、染物屋か又はこれに關係はあるとは未だに信じてゐる。倘、傳ふる處に據れば、彼は書に巧みであつたといふ。品川に住すとある。)

五、疇昔の茶唐の後序と跋

「茶唐」の後序と跋

參考に、「茶唐」の後序と跋とを擧げておく。

後　序

佛に方便あれば聖人に權の道あり、艶示樓主人が茶唐の筆勢虛にして實あり、艶にして儀あり、戯言(たはごと)に似て然も勸善懲惡の語なり、御如在はあるめへが、四方(よも)の遊子淺く買(あそん)で深く味ふべしといふ

淺草深ろ

（この深ろは、振鷺亭でもあるか。）

跋

夫雪は飛んで散亂すといへどもいまだふらず嵐に木の葉の散る頃、柳原の土手を通り懸りしに茶店の隣に端書(はほん)共取散らし商ふものあり、傍には茶のせんじがらうづ高く積(つみ)、さもきたならしき店有近々？泥中に蓮あり、須原出雲寺に無きものもかやうなる處にあるらん、呉服やに無き小切店(や)に有が如し、おいらんのおよばざる風味二十四文の辻君(よたか)にあるまじきものにあらずと立寄見れば、此草紙あり、捨置んも心(こゝろ)なしと、嚋昔の茶唐と題して、中(つゝつ)の初春御きげんに備ふものなり

柳塘山人誌

（此の跋の柳原云々は、或は自分の異人艶示樓の住處を斥(さ)してはゐないか。即ち艶二の品川住とは別人だ、爾くこれを利用出來ないかとも思へる。）

六、追記

艶示樓に就て

京傳門人の一として入るべし

繰り返していふが、此の「茶唐」は、天明八年の中ではない。若し天明八年とすれば「夜半の茶漬」も同年春、この茶唐も同年春となつて、踏襲作が原作と同時に出るなどといふ矛盾は無論背はれぬ。尙「花折紙」では、「廓通遊子」（藍江作、寛政八年）と一括して評語を物してゐる。とにかく色々述べて來たが、外骨氏著「京傳」などの京傳門人數輩の中に、此の未發見の艶示楼を新たに入れてよろしい。然し例の自惚の表徴たる京傳特有の鼻と、彼の寡婦が京傳弟の京山にすら繼承を拒んだといふ程の牡丹餅印と、此の二個の使用を「茶唐」に見、しかも京傳存生中（京傳の歿は文化十三年九月七日、五十六才）であるといふ事がをかしいのである。尙、艶示楼、艶二同一人と見るのに、朝倉無聲氏あり、（德川文藝類集五、酒落本の解題）が、その解題に成れる「南門鼠」も「茶唐」と同じく中春（寛政十二年）の出版、しかも兩者の跋序に、共通點なき事を更に念を押しておく。若し「花折紙」などの傍證を叩き破つて、艶示楼卽ち京傳と見るなれば、鼻と牡丹餅印とは濟むとしても、それでは、寛政十二年に、末輩洒落本作家の眞似をして、大先輩の身が（京傳自身が）匿名で物した、とはまるつきり、思へぬからである。それに、自家の舊作の踏襲といふに於て、無論これは度外において可いと思ふ。

――大正十五年六月二十二日夜。

再追記――馬琴の筆といふ別著「伊波傳毛乃記」を見ると、「茶唐」を京傳作とせる誤を「作者部類」と同樣の筆意で繰り返してゐる。同一人の筆に成つたもの故、此の重複錯誤は尤としても、然し餘り念入

である。序でに、「伊波傳毛乃記」から、京傳の牡丹餅印に關する項を抜載する「毎編用ゐる所の巴山人の印章は、其父母と共に、深川木場なる曲物舖に在りし時、質物の中より出たり。其質流るゝに及んで、父これを京傳に與ふ。于時年八九歳、これを愛玩すること云々。天明の末に始て草冊子を著すに及で、此印を用ふ、云々。其生涯巴山人の號を用ひずと雖も、印は此の人に依て見はれ、此の人は其印をもて名をなせり云々。」

巴山人印の出處

——大正十五年七月。

補記

朝倉氏の同人説

(補記)艶示楼と艶二とは別人、艶二楼は存在しない事は、前記述で明白、且つ決して自分の單なる論斷ではないと思ふ。尚、此稿以後に發行された「新修日本小說年表」(故朝倉氏著)は、惜しや此の「𠹭昔茶唐」では、從來の如く艶示楼艶二同一人の謬說を繰り返してゐられる。而も念入に註として謬りたる概念の下に細記がある。が、後出「洒落本雜記」(拙稿)中に現れる艶示楼は鼻山人かといふ自分の說は臆說としても、とにかく艶示楼と艶二とは別人であり、しかも艶示楼は京傳の門人で、鼻印を使用し、且つ此の作名の下には、「𠹭昔茶唐」の洒落本作、一個あるのみを力說したい。

——昭和三年三月補。

蓬萊山人考

蓬萊山人に數人あり

我等の知る限りに於て、此の蓬萊山人と稱したもの、數人を見受ける。先づ、黄表紙作家としての蓬萊山人龜遊、同じく蓬萊山人龜遊女、洒落本の初期有數の作家としての（後は黄表紙二部の作家としての）蓬萊山人歸橋、及び二代目焉馬事蓬萊山人、以上の四名である。中、比較的、昔から分辨に誰しもが困つてゐるのは、第一第二の、龜遊と龜遊女とである。即ち同人なりや異人なりやの問題である。そしてそれが未決の問題である。が、自分は今それを何とか斷決して見ようといふのである。是れ、此の稿の成る主なる動機である。乃ち此の考、順序として此の難問たる龜遊、龜遊女に就て先づ愚見を述べ、更に歸橋以下に及ばうと思ふ。

蓬萊山人龜遊と龜遊女

蓬萊山人龜遊として署名せられた黄表紙は、「青本年表」等に據ると、例の「黄表紙百種」にも收められた「敵討女鉢木」（安永六年。自畫）と、「江戸贔屓八百八町」（同。自畫）と、「古々路の鬼」（同八年）の三部を見るのである。然るに、こゝに迷はされて來るのは、「青本年表」安永六年作者の項に、大久保氏ならん附記に左の如くある。その龜遊、龜遊女同一人説からである。曰く、

大久保氏の說

蓬萊山人龜遊　此の作者の名稱に就ては大に疑はしき點あり。幵は此以外に蓬萊山人龜遊女とい

へるがあり。(中略)龜遊と龜遊女との二人に就て考按するに、予は同一の作者なるべしと想像す。其所以は、龜遊の作は、本年に始まり、翌々安永八年に一作あり。又龜遊女の作は、安永八年より一年を隔て天明元年に始まり、同四年には喜三二門人として署名しあるを見ても、殆ど同時代に此兩名の作者ありとは思はれず、全く同一の作者たるべく、其人は蓋し後の喜三二即ち二世喜三二なるべしと信ず。併し、二世の喜三二は明和五年出生なれば、本年は僅に十歲著作し能はざるは勿論なれど、世に持囃さるゝ本阿彌光悅の愛兒なれば、所謂丹那藝にて此作者は蓋し喜三二其人なるべしと想像せらるゝも、別に確證なく又牽强附會の嫌なきにあらざれば、玆には予の臆說となすに止め(下略)

といふ項である。さて弱つたものである。龜遊即ち龜遊女、それが喜三二の、後の二代喜三二(本阿彌の忰、後狂歌判者として有名な芍藥亭長根と同人。)を引立てる爲の、それも十歲の小兒の爲にの強いての代作といへば、何が何だか分らなくなるのである。殊に、天明元年以後現はれる龜遊女は、事によつたら本當の女性で、且つ初代喜三二の誠の弟子であつたらしくも思へるからである。(後說)

龜遊は初代喜三二の說

今、自分は、此の龜遊女ならざる安永六年以後安永八年に亙る龜遊について、全くの偶感を披瀝したい。大久保氏流の臆說よりは、まだましとひいき目に思はれるもの。それは、龜遊は全く初代喜三二、無論二代喜三二の爲にする代作ではなくして、初代喜三二自身の假號の數多の使ひ分けと見たい。

現に洒落本「娼妃地理記」は、安永六年初代喜三二の作であるに拘らず、名は道陀樓麻阿と洒落てゐると同じく、一方同じ安永六年に、喜三二の名で「鼻峰高慢男」其他を發表、同時に別の假名の蓬萊山人龜遊で、「敵討女鉢木」以下、三部の作が(安永八年に亘つて)あつたのであるまいか、といふのである。それには多少の自分の憑據もある。即ち喜三二の別號龜山人といふ事からの自分の思ひつきである。龜山人、その龜遊ぶ處は蓬萊ではないか、即ち蓬萊山人龜遊と。若し別人ありて、しかもそれが弟子身分のものであつて、師の初代喜三二から此の名を貰つたといふなれば、餘りに此の龜山人と龜遊と間違はれ易く、且つ似よつた名をそのまゝに與へる、喜三二のまだ賣り出し當時としては、頗る可笑しいとも思へて來る。それに彼の戯作の發途は、安永六年であるらしいから、(「作者部類」では、安永四年の不詳「吉原饅頭」二を實は彼の作で、即ち其の處女作としてゐるが、どうか。尙、滑稽本の「古朽木」は、安永五年の稿であるが、出版は後れて同八年である。即ち彼の正確な戯作界の活躍開始は、やはり此の安永六年の衆說に歸しよう。)同年直ちに弟子が生じたといふのも考へ物である。(「名成した後の、讓渡なれば、いゝかも知れぬが。即ち自分の臆測(後說)の如く安永八年(已に喜三二として賣り出した頃の)に、蓬萊山人歸橋と、喜三二自身の蓬萊山人龜遊との交渉の如く。」とにかく道陀樓麻阿の例もあり、且つ處女作頃の事ゆゑ、何の名で當るかも分らぬといふ商賣上の意味もあつて、〔これは然し大分臆說であるが〕一人にして二個の名(洒落本其他では數個)で黄表紙を書き同年に發表してゐるのではなからうか。さうして

安永八年に、尙龜遊の名に一作あるのは、自分の前段の解釋からは、尙この時これを別用した、然しこれを最後にして、喜三二一方に移つた、と見るのである。チン說として參考に資せられたい。

龜遊女署名の作

次の龜遊女の正體如何。正體というても枯尾花よりも尙一層分らぬ朦朧たるものであるが、先づ龜遊女の名の下に發表された黃表紙をいふと、

鳴呼不借世之助噺　三　清長畫(天明元)　龜遊書草紙　二　歌麿畫(天明四)

の二部である。他には出でなかつたものらしい。此の天明元年、四年の龜遊女(悉しくは蓬萊山人龜遊女)は如何の出自にあるであらうか、此の問題である。大久保氏は前揭の如くこれも初代喜三二の二代喜三二引立の意味の代作のやう說かれてゐるが、これは可笑しい。といふのは、どうも初代喜三二ではなく、(二代喜三二の代作の意味では無論ない。)別人で、全く初代喜三二と師弟關係にあつたものらしいからである。それには、天明四年の「龜遊書草紙」にある喜三二門人といふのを見るまでもなく、

「菊壽草」は喜三二の女弟子とせり

それより以前、天明元年出版の草双紙(黃表紙)類四十七部に就て、評話を綴つた「菊壽草」(蜀山人の作)の中にも、すでに、きつぱり別人として、しかも女性に取扱はれゐるからである。初代喜三二事手柄岡持(喜三二の後の狂名。恐らく淺黃裏成を木阿彌氏に讓つた後、卽ち天明末の改名であらう。)とも親しい交友關係にゐたと思はれる蜀山人が、(天明三年版「飛花落葉」に、蜀山、喜三二、菅江等と共に序し、又、喜三二の遺稿「平荷集」に、蜀山人親しく序してゐる。以て知るべし。)若し喜三二の他に龜遊女なく、或は二代喜

三二の爲の代作ともいふべきものならば、これ程にまで一個の別人實在的に書かぬであらうと思はれるからである。曰く、「世之助噺」の評で、

「……喜三次門人、婦人龜遊初舞臺の新下り、……(中略)しんの婦人の氣取ありがたヱ、師匠はよし、段々ひいきも出來ますは今の間」

とある、これである。初舞臺とある點も、これが龜遊の處女作であり、且つそれが女性である事は、再三念を押してゐるのでも分る。全く二代喜三二の代作などとは意味が違ふと思ふ。卽ち龜遊女は、女性で、喜三二の弟子で、天明元、天明四年頃には明かに存在した、と自分は見るのである。(尙、以後に其の作を見ないのは、天分これに作はなかつたか、又は何らかの事情であらう。)然らば前の蓬萊山人龜遊と、此の蓬萊山人龜遊女との名の上の交渉は如何。これには、私としての答は斯うである。曰く、初代喜三二卽ち龜遊と見て、喜三二は、別號の蓬萊山人龜遊(それも一時シャレに何が當るかと思うて、二三回使用したに過ぎぬペンネーム)を、今度新入の弟子の或る女性に其儘讓つた、卽ちこゝに龜遊女が出來たといふのである。卽ち蓬萊山人龜遊は初代喜三二自身、卽ち龜遊の別號からも初代であり、蓬萊山人龜遊女は初代喜三二の門人、蓬萊山人龜遊の號からは二代目と斯う見るのである。〔尙、龜遊、龜遊女同人說の、「青本年表」と同樣なものには、「小說家著述目錄」(中根氏)の如きもある。〕

以上で、厄介物の龜遊と龜遊女とは擊退である。次は第三の、蓬萊山人歸橋の蓬萊山人號である。

蓬萊山人歸橋が事

此の歸橋は、洒落本初期の作家として、我等の敬慕する名作家の一人ではあるが、さてその作としては案外尠い。これも初代喜三二などと同じく士分の出身、昔くが商賈となつた京傳以後の純戲作とは、素地徑路を異にしてゐる爲と思ふ。然し同じく士分でも初代喜三二の方が黄表紙洒落本等、まだ多作である。が後年、殿から戲作の筆を禁められた事は、喜三二・歸橋同樣である。が、歸橋の擱筆は、天明六年(?)であるに拘らず、喜三二は、以後の天明八年猶「文武二道萬石通」の名作を出してゐる。が其の喜三二も翌寛政元年には既に絶え、二代目喜三二の戲作を見てゐる。畢竟以て境遇相似たりである。)

歸橋の著作

朋誠堂喜三二ほど通俗化せられてゐない歸橋のため、その洒落本及び他の戲作書目を試みに爲してみよう。(年代順)

〔洒落本〕 安永三年刊、婦美車紫鹿子(天明再摺本による。初摺本には、歸橋の名なく、浮世過歴齋道郎苦先生とある。)(安永八年、仕賀越谷将之説〇同、家暮長命四季物語〇同、美地の蠣殼〇天明元年、通仁枕言葉〇同二年、富賀川拜見〇同三年、居續借金〇同、遊婦里會談(以上、八種)

〔黄表紙〕 天明五年、間似合噂言會我、満長畫〇同六年、見名細身之御太刀、政美畫(以上、二種) 計十種。

即ち彼自身、後期は黄表紙に移り、しかも二部の作のみで他は絶えた。これは彼の創作力の涸渇で

は無論ない。前にも謂うた藩侯の禁に由つたものであらう。洒落本から黄表紙に移つたに就ては、これは洒落本の軟中軟を避けて、諷刺の黄表紙に入つたと見るべきよりも、安永天明へかけて折角洒落本作家有數として賣り出した彼も、(「作者部類」に曰く、「この作者の洒落本春毎に出て、小本作者の巨擘と稱せらる」とあり。)後進京傳等の活躍に遭つて自知の明があつて、即ち方向を轉じたと見るべきではなからうか。その折角方向を轉じて、しかも一時相當以上の評判を得た「嘘言曾我」の作あつたに拘らず、筆を此の世界に絕つたのは、是は、御同樣彼以上の意志の結果と見るのである。

我等は今歸橋の數種の洒落本が如何に京傳等を生む搖籃であり、殊に「通仁枕言葉」や「居續借金」などは、西鶴などの昔の浮世草紙よりは更に進んだ、如何にそれが體驗を基礎とした露骨なる遊蕩描寫、情癡描寫の元であるかは此に略く。唯、此の二者を飜刻編入した自分の未刊「洒落本集成」によつて見られたいことを僅かに述べておく。(「居續借金」の實感等については、かつて、朝倉無聲氏も「江戸趣味」で、幾分紹介せられた事もある。)

其の蓬萊山人歸橋の此の蓬萊山人の雅號である。これに就て詮索して見たい。これには自分の臆斷を加へておく。それは、彼歸橋が、初世喜三二とも、藩は違へ、(喜三二は秋田藩、これは高崎藩。然し共に戲作狂歌に遊ぶ。)趣味から、或は直接間接に、當初何らかの緣故にて、(歸橋は、赤良や菅江や燕十や、當時の半戲作の通士(案外ビンボウ通士であつたらうが」とは懇意であつた。それは「居續借金」

喜三二と蓬萊山人歸橋とは、交遊あり

にも現れてゐる。)卽ち彼の交友たる赤良(蜀山人)や燕十や菅江を通じて、また喜三二とも歸橋の河野某は知りあつたらう。卽ち平澤平格の秋田藩士たる戲作名朋誠堂喜三二狂歌名淺黃裏成と、高崎藩士たる河野某後の戲作名蓬萊山人歸橋(彼の狂歌名は、大の鈍金無だつたといふ。)とは、交遊上にも容易に握手の機會があつたらう。卽ち嘗て浮世遍歷齋道郎苦先生の假號に戲作を內々ビク〱もので始めてゐた彼は、恰も安永八年(此の年、喜三二と同人と見る蓬萊山人龜遊の名の「古々路の鬼」出づ。)、知りあつた初世喜三二の別假號と同樣の蓬萊山人を受け、(又は進んで用ゐ)名だけは龜遊と紛らはぬため、歸橋と名づけたのではあるまいか。一個の文獻的確證もないが、歸橋は當時初世喜三二に私淑、又は直接之を淑しとし、從つて其の別號を共儘受けた。或は、最少限度、交友の彼喜三二の別號にヒントせられて自分もこれを使用したらう。といふのが、自分の臆斷である。(が、一方に於て之を打消す考へ方もある。卽ち變名ではあれ已に安永三年に一作をものした彼は、寧ろ作過程に於ては、喜三二の先輩である。私淑も兄事もクソもない。蓬萊山人號は全く暗合ではあるまいか。卽ち喜三二のは龜山人から起り、歸橋のは、居住の地其他の意味から來てはゐないか。然し蓬萊とは、何の地點を斥したかは未考。唯、安永八年頃には、歸橋は「龍の腮」に住んだとは、自著の序にあることにかく、安永八年においては、一方、蓬萊山人龜遊の名の下に黃表紙の作、一方蓬萊山人歸橋の名の下に洒落本(伊賀越、四季物語等)があつて、歸橋の洒落本界に於ける大當りは、忽ち、彼をして蓬萊山人の本家たるか

の如く、しかる觀を持たしめるに至つたのではあるまいかと見るのである。然し此の蓬萊山人龜遊（自分が初代喜三二と同人と見た）と同歸橋との、此の蓬萊山人號の類似については、まだ二考も三考も之を必要とする餘地がある。が何がなし、自分は、此の二者、全く偶然の類似又は、没交渉とは何としても見たくない、また見させない。さうした或る見えざる暗示を自分は與へられてゐるのである。

二代蓬萊山人（二代焉馬）

第四の蓬萊山人事二代焉馬、これには問題は起らない。立派に、蓬萊山人歸橋を嗣いだと諸説一致の如しであるからである。一ばん確かと思へるのは、蠻衍散人（馬琴なるべし）著の「近世物之本江戸作者部類」の中に、後の烏亭焉馬と題して、

「作者部類」の二代焉馬傳

八町堀に住す、武辨の人也（寄騎の弟也と云）名弘會觸の折、初めて對面して實名を聞しかども忘れたり。（通稱山崎賞（イ貰）次郎、父を助左衛門といふ、町與力なりと、「久補」）はじめは松壽堂永年と名のりて狂歌を旨とし、後に六樹園の社に入りて古人蓬萊山人歸橋の名號を嗣て、蓬萊山人と號せしを、文政の末古人焉馬の名號を焉馬の門人鱗馬賣馬に乞受て、又烏亭焉馬と改めたり（下略）

とあるが、之が定說の元を爲してゐるらしい。とにかく六樹園が、どうした關係で故人歸橋の名を預つてゐたか、（或は芝居道の如く、預つてゐたのではなく、六樹園の單なる諒解か、又は二代焉馬勝手の襲名かも知れない。）或はどうした緣故で此の男（後の二代焉馬）が歸橋の蓬萊山人の名を特に嗣いだか、それ程この後嗣者たらんとしたか（或は當初彼は、此の名を受けて、軟本の大家たらんとしたも

猿猴坊紅月成

蓬萊山人(二代)の號は、焉馬なる襲ぐより古し

のかも知れないことは、不明であるが、がこの鯉橋の後嗣を欲して、これを果した事だけは、同時代、面晤のあつた馬琴の記述ある以上、事實である。さうして二代焉馬の山崎氏が、蓬萊山人を稱したのは、すでに二代焉馬とならざる以前の事で、一方猿猴坊紅月成として盛んに和印本を書きつゝあつた文政頃、すでに蓬萊山人と別稱してゐたらしい事は、その彼が作の丁度此頃(自分の知る例は、文政八年)の和印本に、蓬萊山の麓に永年(彼の狂歌名松壽堂永年と何處かに共通があらう。永年と永年。偶然の一致では恐らくあるまい。)をおくると稱して紅月成と署名してゐるのによつて知れるのである。焉馬となつて以後は、相當合卷物其他に作を見受けるが、此の蓬萊山人署名の時代は、一二の校合物の他は、文政十一年に自作として二點を年表に見るのみである(尚、此頃蓬萊山人名の下に狂歌本も物した。即ち文政九年「狂歌百將圖傳」(國直畫)の、西來居未佛との共編物がある。)當時は、彼自稱の如く、主に和印本百餘種の濫作と及び、例の土器お傳の秋波を受け又は受けようとして、當夫番附の一人に書かれたりした時代である。文政末焉馬と改めた。(初代焉馬は、文政五年六月二日年八十で死。)その時期は不明であるが、馬琴の言及び、其他に照すに、文政十二年頃であらう。(青本年表は、文政十一年としてゐるが、まだ此の時は、蓬萊山人の作名であつた。即ち年表には、蓬萊の名で、文政十二年に校合作の一がある事を示してゐる。)即ち焉馬となつての公然たる戯作は、年表の示す如く「相撲推古傳」(初・二・三編)の文政十三(天保元)年といふのが最初であらう。但し蓬萊山人號はこれで捨てゝ了つた

「青樓心得草」に就て

のでは無論ない　彼は遙か後の安政四年に、「青樓心得草」の中本洒落本形一冊(署名は、序、蓬萊山人)を出してゐるのでも知れる。

○餘分な事であるが、此の「青樓心得草」は、自分に散々厄介をかけた物である。初め原本を見ないうちは、この本序に丁巳孟春とあると聞いて、洒落本様といふ以上、それが、丁巳といふのは、無論寛政九年の丁巳と考へた。殊に蓬萊山人と聞いて愈々。然し蓬萊山人歸橋は、寛政初に筆を絕つたとあるが、さて面妖なとも思つた。處が原本を見るに及んで、本の體裁に繪(芳幾カ)の樣子、凡て末期本、矢張り六十一年違ひの安政かと思はれてきたのに、搗てゝ加へて、內容をよく見ると、

「息子部屋」を剽窃す

京傳の「息子部屋」(令子洞房)と全く同一、唯序文だけが新しく、本文は、目錄から何もかも全く同樣、否剽窃、と知つて、呆れたものである。從來紅月成で、相當に敬意を表した末期軟派の一雄星二代蓬萊ともあらうものがと、當時の不道德、藝術的良心の欠陷には呆れさせられたものである。然し此本、序に蓬萊山人(印に三闲人)とあるのみで、何處にも著とは斷つて居ないから、彼は或は辯解する積りかも知れぬ。

が、とにかく安政四年に、尙彼、蓬萊山人と稱した一證左である。卽ち彼の極晚年で、(彼は、文久二年七月廿三日、七十一歲歿)、芝居細見の「三藥草」などを出した天保初めとは、雲泥の落魄時代である。

以上で、略々、自分の蓬萊山人考は盡きたのであるが、尙、序でに、折々間違へられてゐる猿猴坊

猿猴坊月成は、二代喜三二ならず

紅月成が、二代焉馬(二代蓬莱山人)である事の自分斷案をきつかけ述べておきたい。事は、初代二代の喜三二にも拘り、又初代焉馬にも交渉はあり、本考の附尾として當然と思ふからである。

○附り、猿猴坊紅月成が事

紅月成を二代喜三二(芍藥亭長根)だと見る一説は、「増補青本年表」の寛政元年、作者二世喜三二の項から來てはゐないか。それには、「(前略)明(朋)誠堂喜三二の門に入り蓬莱山人の號あり (此の蓬莱山人の號ありし事既に誤。これは「青本年表」氏の、蓬莱山人龜遊、同龜遊女を初代喜三二が爲した二代喜三二のための假號と見、結局この號は二代喜三二を意味するとした推定から來た錯誤であらう。芍藥亭——二代喜三二の全著作刊行物を見ぬ以上は斷言は出來ぬが、恐らく此の「青本年表」以外の示す如く、二代喜三二には蓬莱山人の號はなかつたものと自分は思ふのである。久彌。)今年「寛政元年」二世喜三二を襲ぐに及び淺黄裏成の號を讓らる。(これも誤りで、淺黄裏成は、寛政元年の喜三二襲名以前既に讓られたものである。) 狂名を芍藥亭長根と稱し狂歌の判者たり。(然しこれは、戯作に失敗してからの、轉換後の事である。久彌。)別に花咲乙女猿猴坊月成等の號あり。(下略)」とある。これが俑を爲したものと思ふ。此の折の筆者は、恐らく、猿猴坊月成の存在を知つてはゐたが、それと、初代喜三二の俳名の月成(これは諸説一致、事實である)とを結びつけ、月成——紅月成、同樣の單なる雅

號と見て、二代喜三二（芍薬亭）また初代月成の號を受くとして、即ち紅月成を二代喜三二の事にしたものであらう。でなくば、何處までも蓬萊山人の雅號を二代喜三二に認めて、一方蓬萊山人即ち紅月成の存在を知り、以て二代喜三二即紅月成と混じたものかも知れない。とにかく初代喜三二の俳名月成と、和印本其他作者の猿猴坊紅月成とは、無論、全く彼此繼承の意味なく、別物である。語尾の類似に過ぎぬ。即ち後者の雅號は、是れ雅と名づくる事も憚るべき、例の婦人月經から來た假名である。

猿猴坊紅月成の意義

猿猴坊すでに其の隱語、まして紅の月成と來て、其の意を加層、徹底させたものである。即ち此の二代喜三二即紅月成說は、恐らく月成――紅月成、此の類似から來る混同錯誤たるに過ぎぬと思ふ。（勿論自分の見た限りでは、芍薬亭に此の紅月成の別號があつたといふてゐるのは、「青本年表」の他には一個もない。）（尙、傍證として謂ふならば、二代喜三二は、寬政元年に黃表紙の初作あり、同三年迄に六部の作があつて、以後は絕えてゐる。即ち戲作を諦らめて狂歌專門となつたのである。隨つて以後の文政天保期のあの紅月成の無數の和印本は、狂歌三昧の、當初戲作に失敗した男の作とは如何にしても思はれぬ事また當然であらう。念のために記す。（馬琴も「作者部類」に、「早く戲作の筆を止めて」と芍薬亭に關し明記してゐる。）

猿猴坊は、初代焉馬ならず

第二、初代焉馬かとの錯誤である。これは紅月成即焉馬だといふ說を鵜呑にして、その焉馬が二代焉馬（否、嚴密にいふと紅月成の存在は、焉馬の襲名以前既に數年よりである。故に正確には、二代蓬

猿猴坊は、初代喜三二にもあらず

猿猴坊は、二代蓬萊山人（二代焉馬）也

萊山人卽ち、後の二代焉馬と謂はねばならぬ」である事の詮索を遺れた說である。卽ち初代焉馬死亡後に紅月成は猶存在するからである。（文政八年の明記ある紅月成（略して月成ともいふ）の和印本ある事前述）假に一歩を讓り、初代焉馬も同樣紅月成の此の隱號があつたとしても、初代焉馬の生存中は、何ら二代蓬萊山人の山崎氏とは師弟の交涉もない。然るに初代焉馬の歿年たる文政五年以後、中間の文政八年に於て、同年號明記の紅月成署名の戲作がある。然るに二代蓬萊山人の山崎氏が、初代焉馬の門人に乞うて、二代焉馬となつたのは、文政十一年以後の事である。卽ち此の中途に於て、紅月成の隱號が既に存在する以上、この隱號は、初代焉馬には沒交涉、唯二代蓬萊の當初よりの假名と見るは、言を俟たないと思ふ。

第三、初代喜三二を紅月成と見るものもある。此の說、初代喜三二の俳名月成を、直ちに紅月成と混じたもの。且つ、一方初代喜三二は、その戲作者過程が、安永天明間の短期のみに限られてゐる。卽ち此の年代の相違のみからも、直ちに了知せらるべき程の、是は自明の事柄と思ふ。

第四、二代蓬萊山人卽ち後の二代焉馬が紅月成だとする自分の說である。これは、前に繰返した事によつて、自然と歸結せられる事である。卽ち紅月成は、蓬萊山人の本號を有した男の艷本上の假名たる事。文政天保、遙かに降つて安政頃に至り、蓬萊山人と稱する戲作者は、所謂文政十二年後の二代焉馬の一個である事、例の安政四年版の「靑樓心得草」一個の存在からも容易に直感される事と思ふ。

（尙、「靑本年表」二代蔦馬の項に、「文政十一年作者の項」彼が初代蔦馬の門に入り、遂に二代蔦馬を嗣いだやう書けるは、是も亦誤と思ふ。馬琴の記述其他の如く、師弟關係なく、死後其名跡を乞うた者と自分は見るのである。とにかく、此男は余程氣が多くつて、蓬萊を乞うたり蔦馬を乞うたりしてゐる。折角初めに得た蓬萊でなぜ通さなかつたか。間もなく更に蔦馬を乞うたのは、これは、恐らく蓬萊の名が名跡ではあつても既に世人の耳に疎く、其よりも印象の新しい蔦馬の方が、かうした考から更に蔦馬を乞ひ之を得て、以後この名を以て戲作名と決めたのであらう。が蓬萊山人も別號として終生使用した。然し歸橋は用ゐなかつた。卽ち蓬萊山人事二代蔦馬と、慾の深い事をしたものと思ふ。從つて彼が六樹園に蓬萊山人の名を乞うたのは、初代蔦馬歿前の文政五年以前の事と思ふ。）

以上で、紅月成考を終る。

最後に、本稿に關係した初代喜三二及び、二代喜三二、蓬萊山人歸橋、二代蔦馬の小傳を、正確と思はるゝ程度に諸說を綜合してものしておかう。婆心に外ならぬ。

○初代喜三二。平澤平格、名は常富、通稱平角、致仕剃髮後平荷と改む。秋田藩御留守居役にして、下谷三味線堀の邸内に住す。龜山人又齡山人と號す。戲作及び狂歌を嗜み、狂名は、初め淺黃裏成後に手柄岡持、俳名は月成、戲作名の中、黃表紙は朋誠堂喜三二、洒落本類は道陀樓麻阿、及び早春知久良、其他狂詩に韓長齡、尙、天壽、虎耳窟の別號あり。千蔭、蜀山、菅江等と相善し。享

保二十年生。安永六年以後天明八年に亘り、黄表紙等約三十種、（署名、喜三二）名作多し。洒落本「娼妃地理記」（署名、道陀樓麻阿）及び同系本遊里小唄風を輯めたる「柳巷訛言」（署名、早春知久良）。滑稽本「古朽木」（署名、喜三二）及び隨筆本「後昔物語」（署名、手柄岡持）狂文「我面白」（同）等あり。天明末、藩侯の命によりて戲作の筆を絶つ。文化十年五月二十日歿す、享年七十九、深川淨心寺内一乘院に葬る。

二代喜三二

○二代喜三二。菅原氏、通稱本阿彌次郎右衛門（作者部類は、三郎兵衛）、幼名三太郎、光悦七世の孫。湛亭、別に三橋亭、三橋山人等の號あり。蓋し下谷三枚橋邊に住せるが故也。朋誠堂喜三二の門下に入り戲作狂歌を學び、狂名淺黄裏成を讓らる。寛政元年二代喜三二を襲名、以後同三年に亘り黄表紙數種を出す。（一作、三橋山人の別號を以てす。）間もなく戲作に筆を絶ち、芍藥亭長根となり、狂歌判者として斯界に鳴る。明和五年生、弘化二年二月十日歿、壽七十八。黄表紙「新吉原埋賢語圖」、「擬從淺黄裏」等六種、他、狂歌人物志、芍藥亭文集等。其他、同判に成る狂歌本十數種を數ふ。〔其の最初は、文化十年版「關東百題狂歌集」（京傳、三馬、一九等畫）なるが如し。〕

蓬萊山人歸橋

○蓬萊山人歸橋。河野某、上州高崎藩士、江戸に住す。安永天明の間、洒落本八部及後に黄表紙二部の作あり。天明六年以後、戲作に筆を絶つ。蓋し藩侯の命に由るといふ。生歿年不詳。

二代焉馬

○二代烏亭焉馬。山崎氏、通稱を營（イ賞）次郎といふ。江戸の人、町與力なり。深川古石場に居り、

居、七國を遠望するとにて七國樓と號す。初め伯樂舍に就き松壽堂永年と號せしが、後宿屋飯盛(六樹園)に從ひ、故人蓬萊山人歸橋の名を嗣ぎ蓬萊山人と號す。當時すでに猿猴坊紅月成の隱名を以て、傍ら和印本の作編頗る多し。自稱する所によれば、文政八年にすでに此種百部に上るといふ。文政十一年及び同十二年に亘り、合卷の自作二、校合作一を出し、未だ蓬萊山人を名のりしが、文政十二年頃、初代焉馬の門人に乞ひて、二代焉馬となり、翌年より、焉馬の名に於て合卷類數種刊行。別に劇に關する雜著あり。即ち三座繪入の評判記ともいふべき「芝居細見三葉草」、及び「俳優畸人傳」「返咲難波裏梅」其他。及び角力茶屋に關する雜著、及び狂歌本、更に「常盤津外題考」、「常盤津年代記」の如きものあり。角力に關するものは、彼一時角力に興味を持ち、現に吉田追風に随つて行司となりし事もありといふに由るならん。又弘化三年十二月には、近松門左衞門と改名、中村座の淨瑠璃作者となりし事もありといふ。要するに野心ありて藝之に伴はず、最後安政四年には、京傳の「息子部屋」を其儘改版飜刻、自著を裝ひたるが如き惡德あり。唯彼は、一個末期夥多なる和印本の作者として、作名猿猴坊紅月成(或は紅を略す)の下に不朽なりと謂ふべし。文久二年七月歿、壽七十一。

―大正十五年五月。

○補、喜三二と蓬萊山人龜遊・同女に就て

これは自分の前稿蓬萊山人考に於て、喜三二と蓬萊山人龜遊とは同人、龜遊女は實在の異人ならん

蓬萊山人龜遊女は、喜三二の變名なりの說

と推定しておいた。最近朝倉氏編「江戶趣味」を繰つてゐると、これには既に天明四年「龜遊書草紙」の跋によつて、龜遊女また喜三二の變名だ、卽ち同人と見る說が、同氏によつて發表せられてゐたのである。卽ち左の如くである。

喜遊女は、喜三二門人との肩書付きで、天明元年に、靑本の「嗚呼不儘世之助噺」を初作として、同四年に「龜遊書草紙」を著してゐるが、其實は烏有の女で、朋誠堂喜三二の假名である事は、「龜遊書草紙」の卷末に、

右上下二冊は、門葉の婦人龜遊が作れる靑本の淸書双紙なるが、予共むだの多きをはぶき、又增補するに▲印を以てし、批判するに△印を以にして、再び龜遊に返さんとするを書林が無心の無理無たいに持て歸りて、有の儘龜遊書草紙と題せしは、地口とも片言ともいざ白黑三角印、それなりけりにふりつけつゝ、蔦の唐丸さくら木に花咲く春の新板とはなしき、ト申すが則ち趣向にて面白くも無御座候へ共、世之介咄の御評判にすがり入御覽申し候間、御ひいき奉願候以上

喜　三　二

ト申すが趣向にてと作者の白白が、何よりの證據である。（大正六年七月――江戶趣味、二ノ一。江戶女流小說家。朝倉無聲）（單に、龜遊女、喜三二の同人といふだけは、是より先、「風俗圖說」二ノ二〔大正四年六月〕の澤田氏「戲作者に就て」の〇榮女の項にも輪廓は出てゐる。）

此の無聲氏の根據とせられた「卜中すが趣向」にては、取りやうによつては、唯、「卜中すが出版の經過、次第にて」といつた意味に取れぬ事もない。が先づ、無聲氏のいはるゝ通り、仕掛、からくりの意で可からう。それに仍て、龜遊女則ち喜三二とすると、例の評判記「菊壽草」も若し本當に固く思つたといふなれば、自分と同じく一杯喰つた譯である。よつて、自分の考も加へて、蓬萊山人龜遊、同龜遊女、凡て一括、喜三二なりとすると、殘る處、歸橋の蓬萊山人と二代蓬萊山人の二代壽馬とのみになつて、問題は餘程簡になる。（無聲氏の此の記述では、蓬萊山人龜遊（女ならず）と喜三二とには、觸れてゐられない。）

尙、これは其後氣づいた事で、あの蓬萊山人考には書入れなかつたが、龜山人は無論その發音キサンジンが喜三二と共通、卽ち喜三二を芽出度く更へたものと思ふ。よつて、喜三二の場合は、この同音別號の龜山人のその龜に因んで、蓬萊山人を生んだと附加したい。

喜三二と歸橋との親善

〇喜三二と歸橋との親善

尙、歸橋と喜三二と、直接も知りあつてゐたであらうと類推しておいたが、やはり道樂仲間であつた事は、その「居續借金」（天明三年春版）の中、「歸橋屛風の中」に、おたよと歸橋の對話で、

（た）せんどあつちに居つゞけをなすつた時、兄さんや内のしゆびが、とんだ惡かつたそう

だね（歸）そんな事をどのやらうがいつた（た）かめ山のばけものが（歸）おもひつき所じやアねへ、おれがくるを内でもしつているか（た）（以下略）

の龜山のばけものは、龜山人（喜三二）を指してゐる事無論である。

——大正十五年八月。

一、作家に就て
イ、艶示樓は鼻山人也
鼻山人は京傳門人也

洒落本雜記

一、作家に就て

イ、艶示樓は鼻山人也

拙稿「艶示樓に就て」(本著、前掲)で、艶示樓と紫色主(艶二)と別人である事、及び艶示樓が京傳門人である事、「曙昔の茶唐」(寛政十二年版)の外には洒落本を見ぬ事等を列擧したが、更に此項の冒頭に於て、此の艶示樓の正體を明らめてみよう。事はあの稿校正の時ふとの思付である。其後考慮を加へたが、どうも的確に近い。即ち艶示樓は鼻山人也といふのである。といへば既に明らかである樣に、例の鼻の印の捺されてある事(「曙昔の茶唐」自序)、及び京傳を除き、此の鼻を使用したは、後來の作者たる特り鼻山人(東里山人に同じ。鼻山人としては人情本の作が多い。)のみであるからである。それに鼻山人が、何年頃かは明らかにしないが、とにかく京傳の門人であつた事は、古來諸書の一致する點である。(作者部類。戯作者小傳など。)外骨氏著「山東京傳」所載の同門人には、如何してか、此の東里山人(鼻山人)を略いてゐるが、とにかく、鼻山人が京傳門下たりし事は問題はないと思ふ。即ち、他に

珍らしき鼻印の「嘘昔」使用と、東里（鼻山人）の京傳門人たりとの諸說一致、これ丈ですでに此の類推は肯定される事と思ふ。すれば諸書に明らかにしなかつた鼻山人が、京傳に仕へた最初は、或はこの「嘘昔」の寬政十二年又はその前間もなくの事ではなからうか。然るにその鼻山人、文化十四年に人情本內容の洒落本「籬の花」、文政元年に「同後編廓宇久爲壽」の作、其後に至つて漸く主に人情本（同系の洒落本作を含む）の作あり、又主に東里山人としては、文化に靑本の作あり、（「靑本年表」では、文化四年廿三歲が最初なる如し。）が、寬政末享和文化初めに於て、純洒落本としては、この「嘘昔」の一冊になぜ止まつたか。（其他文政元年かと思はるゝ「由佳里の月」の如き、人情本內容の洒落本類はあれど今略く。問題は、享和文化頃猶在つた純洒落本に就てである。）これには私の答は斯うである。即ち彼が師の「夜半の茶漬」を眞似て「嘘昔」を著した。（此時彼十六歲、頗る早熟である。或はこゝらから、「嘘昔」を京傳だとの訛說も出はしなかつたか。無論師の加筆が多かつたらう。）が、案外不評（？）であつた。それに當時なほ此方面には三馬・一九などの多士儕々で、彼の活躍の餘地がない。でこれが爲一時洒落本に筆を絕つたといふべきであらう。といふのである。

鼻山人の作名たる洒落本作

ロ、三多樓主人に就て

三多樓主人（三多樓戲家主人ともいふ。）といふのがある。作としては、寬政十一年の「仲街艷談」と、

年代不詳(イ寛政十一年)の「女肆三人酩酊」の二作がある。「仲街艶談」は、「江戸文藝資料第一」にも翻刻せられて、人の知る所であらう。私の氣がついたのは、最近、此の「三人酩酊」を拙編「洒落本集成」第一卷に挿入、その解題に當つての事である。三馬ではないかとの(内容からも)疑問である。念のため諸書を調べると、「戲作者評判花折紙」(原本、三冊の合本に據る。)には、此の「三人酩酊」が出てゐて、これには明かに三馬とある。但しこれは三多樓とあるべきものゝ、誤筆だといへばそれ迄であるが、原本筆耕者の粗漏とも強ちにいへないかとも思ふ。(此の花折紙、國書刊行會本、德川文藝類聚第十二、評判記に所收あり。)「江戸趣味」誌上、朝倉氏が物せられた洒落本分類の類は如何。矢張りそのまゝ三多樓主人とあるだけである。結局、「花折紙」の三馬とあるのが、從來唯一の文献である。朝倉氏などが、此の三多樓三馬説の「花折紙」に氣づかれぬ筈はない。「仲街艶談」の翻刻、その解題を物せらるゝ時に方つても、一言これに觸れてゐられないのは、氏等は三馬説を信じないのか、氣がついてはゐての事であらう。

「戲作者評判花折紙」は、三多樓戲家主人を三馬とす

「花折紙」の評語

「花折紙」から、此の三多樓作の二作を摘記すると、「上上　女肆三人酩酊　三馬作、どれ〳〵も生醉ならくだを卷紙」。「上上ナ(此のナの形、白ヌキなり。假りにナを以てす。)　中街艶談　戯家作、ようしをはらつてみじまいの紅ごうぜい」とある。一方は同じ三多樓を三馬、一方は作に現れたそのまゝの戯家、ちよつと怪しいとも思へるが、とにかく多少の典據にならう。作風(三人酩酊の)からいへば、

三馬なりと予が見る論據

無論三馬かと思へる事既述の如し。卽ち此作、吉原。深川。品川の三に分ち、それを泣。笑。腹立の三上戸に書き分けてゐるのである。三馬の中本作を聯想させるに十分な作風、會話の如きも流石に巧い。唯、自分の疑點は、一方同じ三多樓主人戯家の作「仲街艶談」に、山東息子（京傳か）が序を掲げてゐる。その中に、「作者は當春突出し演籠、譯も白箇の新狂言」とある事である。さうしてその序に寛政十一とある。が、若し三馬とするなれば、三馬は此春が突出しでない。前年に「辰巳婦言」があり、他の作（青本）に於ては、すでに寛政六年からある。然るに「東邊木」といへる男の跋には、「今戯家の襯玉が著述なす所の………近ごろ山人辰巳仲街に至り、神をぶら提燈と供にぶらつかせ云々」と約してゐる事である。滿更の突出し新妓でもなささうである。がかゐどもを供にぶらつかせる大きな氣どりには、三馬としては少々可笑しい。

一方、三馬と思へるのは、作風もさうであるが、戯覧の三多樓の三が三馬の三と同じく、且つ三多樓は三太郎のもじり、戯家はたはけ、卽ち馬鹿、これ三馬の名を二つに割つたものではなからうか。卽ち三を三多樓と現はし、馬を馬鹿、たはけ、戯家、と現はしたのではなからうか。「山東作息子」の序の「當春突出し」は、三馬だとすれば、この當春は、板行の前年寛政十年（「辰巳婦言」の年）を意味し、（序の寛政十一は、あとよりつけたもの。出版が十一の春であるから、序の內容は、その前年の十年に出來てゐたとも考へられる。）無論寛政十年以前にも、三馬には青本等の作があるはあつたが、（青本作

は六年に二。七年に一。八年に一。九年に二。十年に四種を數へ得る。これらは問題にならず、辰巳婦言でわづかに存在を認められたといふのではなからうか。

三馬の別號

然し本來の三馬號は、無論、衆說の如く三和と式馬との一字づゝから成したのであらう。がこの三多樓戲家は、更にその既成の三馬から、ふとした思ひ付と思ふ。此間の事情に通じてゐた「花折紙」は、三馬と直ちに爲したのであらう。（參考として、三馬の別號を列擧しておく。本町庵、四季山人、洒落齋、遊戲堂、哆囉哩樓など。此の中、遊戲堂とたらり樓は、どうも此の三多樓戲家とも亦通ずる所あるやうに思ふは僻目か。若し予の謂ふ如く、果して三多樓戲家を三馬とするなれば、彼の洒落本作に、「三人酩酊」「仲街艶談」の二を加へる事となる。（文化頃の洒落本中本仕立「吉原帽子」は、煙花浪子とあるが、その印に遊戲山人とある。これも疑へて來る。）

八、山旭亭に就て

八、山旭亭に就て

山旭亭の洒落本作

山旭亭といふのがある。山旭亭署名の下に成された洒落本を列擧すると、「孔雀染勤記」、「五臟眼」外に、「金の和良路」（この本、寬政二年（カ）版の「面美多通身」の改題本、刷直し本である。著者名を削り、序に山旭亭主人とし、題を金の和良路と入木したまでである。悉しくは他の折に說く。）の三本を有するのみである。中、純創作と見るべきは、「孔雀染勤記」と「五臟眼」の二である。共に寬政末又は享和

神田あつ丸の洒落本作

かとも思へるのである。（なほ他に、小咄本に數種を此期頃見うける。新群書第七、書目、「笑話書目」を參照。）然るに此に疑問が起るのは、例の神田あつ丸と同人か否かの問題である。成程、此の神田あつ丸と山旭亭とは、偶々相隨作して洒落本に現れてゐる。まづあつ丸の洒落本を擧げると、

〇仇手本（北齋畫、不詳、〔イ享和元〕）〇佳妓窺（不詳）〇廓臍競（天明頃と云ふも恐らくは誤り、享和元年ならん。）〇通神藏（北齋畫、仇手本後編、年代不詳、〔イ享和二〕）〇內所圖會（政演畫、天明六年）〇闇の明月（北齋畫、不詳）

の六種である。「內所圖會」最も古く「通神藏」最も新しいやうである。（が、此の「內所圖會」は、安永九年版羅俊滿作政演畫の「噺のやうだ」の改題補修本、內容とても純洒落本ではない。寧ろ略本「繪入吉原大全」ともいふべきものだ。よつて問題にはならない。）洒落本類二度の禁を窺つて、洒落本作後期にとにかく數作を殘したのは、注目すべき作家の一である。そのあつ丸は、神田なべ町に住み、（從つて彼の印章のなべの意が分る。）狂歌師で、黃金厚麿、（洒落本でも小金あつ丸と稱した。）「武江年表」によると、文政十二年十月、享年不詳で死んだとある。彼の正業は紙問屋であるが、（伊勢屋吉兵衛と通稱した。）とにかく相當有產階級の戲作遊びといふのであつたらうかも知れぬ。彼また畫をものしたと見え、（誰に學んだか、北齋か。）咸三樓鳳雨の「鄽數可佳妓」に口繪を描いてゐる。左程描くはない。北溪風の繪、或は北溪の代作、虛名を賣らんが爲にあつ丸としたのかも知れない。そのあつ丸が、山旭亭と洒

山旭亭とあつ丸の交渉

山旭亭とあつ丸と同人か

落本作に於て序を交換してゐる。あつ丸山旭亭の全部を見てゐないから何ともいへないが、今、「五臟眼」と「仇手本」とを比較すると斯うである。

あつ丸名の「仇手本」には、山旭亭が、山旭亭間葉行述として、「（前略）………の世界を小金あつ丸なるもの穿、予仕懸の穴より閲するに………其本文の淸書に習ひて仇手本と名づく。此後編の通神藏はのちほどおめにかけましやう　さらばだア」とあり、いかにも綜の口調は、自分の事のやうである。（この仇手本が、享和頃である事は、北斎畫の落欵、畫狂人北斎筆からも確實である。）其反對に、あつ丸が山旭亭名に序してゐるは、「五臟眼」である。「………こゝに間婆行（山旭亭の名、無論山旭に縁んだ假名であらう。現に山旭亭署名の印に、間婆行とよめる。）なるもの、野狐の回々國よりひとつの玉を得たり、名づけて五臟眼とす………、お手にとつてめがねごろふじろと金玉もつり方に序す、神田あつ丸誌　なべ」とある。これである。然るに、此の兩者は同一人かとの疑ひは、此の序の他に、居所の同一からである「五臟眼」には、自序の終りに、藍水北居山旭亭演とあり。かと思へば、「廓臍競」には、「千早ふる神田の八町堀のひんがしらん水のほとり濱荻樓上において　小金あつ丸　なべ」とあり、「佳妓窺」にも「八丁ぼりのひんがし羅ん水のほとり濱荻樓上において　小金あつ丸誌　なべ」とある。藍水北居といふに於ては同一である。が話は逢ふが、千蔭と春海のやうに同じ巷に住んだ例もあるから、同一居處というて、強ち同人とも斷言出來なからうが然しをかしい。山旭亭の洒落本三種の中、

「五臟眼」にあり、他の「孔雀染勤記」になく、飄窗本の「金の和良路」（これは、無論本屋の無理すゝめであらうが）にも無い。これも却つて、同人說を强うする材證かと思ふ。

山旭亭は一九ならず

山旭亭には尙異說がある。それは「風俗圖說」第二ノ二に物された澤田氏の說で、文化三年の靑本「鳳凰染五三桐山」と同後篇とから初代一九の變名といはれてゐるのである。がこれはをかしい。といふのは、「仇手本」に山旭亭が序を物してゐるが、當時すでに一九は洒落本作家として多作し、相當に名を爲してゐた。（色講釋、惠比良梅、野良玉子など享和元年作。）で寧ろ一九の名に於て序すべきであらう。（山旭亭が一九であるといふならば。）好んで聞えない山旭亭を以て、あつ丸の洒落本に、（現に「仇手本」に）序する必要がない。且つ藍水北居の反證もある。少くとも一九ではない。此の類の類推は極めて危險である。結局、自分も前二者のやうには、此の山旭亭あつ丸の問題は判然せぬ。唯材料だけを並べたに過ぎぬ。尙一考したい。

二、振鷺亭（關東米）の作期

二、振鷺亭の作期

大抵洒落本作家は、初期、中期、後期（初期は草創期より天明初まで。中期は、天明後半と寬政三年まで。後期を寬政五年以後文化頃までとする。種彥の天保、他作家二三の文政の例外もあるが。）と定つて、各期に跨がつてゐるのは尠い。殊に中期の末、寬政三年の洒落本類の禁、翌年の京傳體刑を受

けてからは、後出のものもあるが、これで京傳はじめ凡そ中期作家は一先づ止んだ譯である。然るに例外がある。それは振鷺亭である。先づ彼の作を擧げる。（關東米、振鷺亭同一人と見て、一括しておく。一括の上、年代順とする。尙、純洒落本だけに今は止めたい。）

振鷺亭洒落本作の期別

A、○自惚鏡（天明九「寛政元」）○格子戲語（寛政二年）。

B、○取組手鑑（寛政五年）○意妓口（寛政末カ）○翁曾我（同カ）○見通三世相（文化に、永代談語と改む。享和初。「花折紙」に載りをれば、元カ二）○玉の幉（同初カ）。

AB不詳、○客衆一華表（或は、Bの寛政カ）○品川海苔（寛政末カ。序等一切、年次の記入見當らず。）○傾城人相鑑（不詳）。

（他に、「鳴子瓜」などを、「洒落本書目」では載せてゐるが、これは准洒落本で、滑稽本とも謂ふべきもの、即ち除外する。）

主に後期の作家

右の大體でも分るやうに、彼は主に後期に榮えてゐる。京傳などの繼承者の觀がある。なぜ自分がこゝにこんな分りきつた事を繰り返したか。從來の諸書に、振鷺亭は中期の作家、或は寛政九年頃迄の洒落本作家で、以來他に移つたやうな語氣で書かれてゐるからである。現に馬琴の「作者部類」にも、

「作者部類」の誤

「振鷺亭　洒落本を禁ぜられし後、此作者のつゞりたる中本多かり」として、「いろは醉話傳」（寛政五年版）などを擧げてゐる。が豈圖らんや、同年、「取組手鑑」などの、京傳のにも見ぬやうな猛烈な洒落本

を作してゐるのである。かと思へば、同じく「作者部類」の洒落本作家の項には、振鷺亭に關して、

「(前略)寛政のはじめ(寛政二年をいふならん)洒落本を禁ぜられたる後も、なほ其利を思ふ書賈等、行事の檢定を受けずして私にかの小册を印行せしもの尠からず。此時に當りて振鷺亭が新作の洒落本、日本橋四日市なる書賈上總屋利兵衞、上總屋忠助(利兵衞に仕へて分家せしもの也。――原註)等多く印行したり。そが中に深川神酒の口(?)といふ小册は深川の洒落也と聞にき。此餘も宣淫の作あり。そは書名を忘れたり。寛政三四年頃より淺草寺隨身門外なる水茶屋の水汲娘那波(難波)屋喜多、兩國藥研堀なる高島屋のひさ、(を)初として所々の煎茶店に美女を置事流行せしかば、振鷺は、此茶店のをもむきをつゞらんとて、日毎に處々の茶店に憩ひて、水くみ錢を費す程に、其書未だ成らずしてありける內、官禁ふたゝび嚴重(これ九年ならんか)にて、振鷺が用意いたづらになりしとぞ。」

これでは結局、享和期の彼の活動を知らぬやうである。殊に、自分は、「意妓の口」の如きは、(馬琴のいふ神酒の口と同本ならん)寧ろ寛政九年以後とも見たいから、(この獨斷は、「洒落本集成」第一卷解題に讓る。)とにかく彼は法網を窺つての作家、寧ろ禁以後享和にいたる中心作家と見たいのである。何れ未定本も見極めての上、再說したい。(朝倉氏も、振鷺亭を享和期に多く作したと見てゐられる。現にその校訂本の刊行會「資料本」では、玉の牒を寛政二年などに見てゐられるが、後の「江戸趣味」で

は、これを享和に改めてゐられる。恐らく「富岡八幡鐘」（かはきち作）を享和に見直されたその影響でもあらうか。）

――大正十五年八月。

三、洒落本の禁に就て

三、洒落本の禁止に就て

有司の手心如何

改つて謂ふ程のものではない、普通在りふれた事を唯、纏めたといふ迄のものである。最初、自分の疑問、嘗て抱いた疑問を述べる。洒落本は何回禁を受けたか。寛政二年の禁といふが、それは、洒落本のみか否か。寛政三年の京傳の被罰は如何。寛政五年以後ぼつ〳〵洒落本は復活し、寛政十年以後、享和へかけて再び昔日の大量出版を爲してゐるが、これに對する有司の手心如何。これを知りたかつたのである。

寛政二年の禁の內容

寛政九年頃の版元處分と絶版

御同樣の疑問抱懷者に、自分の諦らめた限りを述べる。先づ簡單にいふと、寛政二年の禁は、洒落本單獨ではない、好色本類一括の事である。其後、表面に現れた禁令なるものは見當らぬ。唯、寛政九年頃、奉行吟味に於ける版元處分と絶版とがある。卽ち寛政二年の好色本類の禁（從來本の絶版は斷行すべくしなかつたらしい。）、寛政九年頃の洒落本（特に洒落本と限られ）版元處分と絶版（從來のものも全部）と此の二回である。さうして個人として處罰せられたのは、先に京傳の寛政三年、一個あるのみである。寛政九年頃の版元處分と絶版以後に於て、特に眼ざされた絶版本（著者には被罰はなか

寛政九年以後の絶版本

洒落本の禁は、九年頃の一回

作者としての處分は、京傳一人

五年より九年迄は、秘密出版

つた)は、同十年の「辰巳婦言」(三馬)、同十二年の「南門鼠」(艶二)、享和二年の「婦足謡」(成三樓)の三種くらゐである。(その中、「南門鼠」の他は、後摺が幾らもある。「辰巳婦言」など口繪無彩のもの、最も平凡。即ち版木が押收せられなかつた證據であらう。)

即ち總括すると、洒落本が獨立に取扱はれて絶版と處分(版元)を受けたのは寛政九年頃の一回のみ。好色本の禁令に引つかゝつては、作者としては、前に京傳の洒落本作者、しかも彼一個體刑を受けてゐる。(版元として、蔦重また處分を受けた。)絶版は、寛政九年頃の古今のものと、寛政十年以後享和二年頃の三種斗り。作者に對する直接の處分は後期に全く無い。即ち洒落本作者として處罰せられたもの、前期後期を通じて京傳一個のみといふ事になる。(此の前期後期とは、寛政二年の好色本類の禁までを前期とし、寛政五年以後を後期とする。)

即ち、此の前期の禁と、後期の處分(版元のみ)と絶版とに引かゝらなかつた寛政五年から九年迄の洒落本作は、全部秘密出版といふ譯である。(云ひ落したが、寛政二年五月の好色本類の禁の折、奉行伺上、同九月の厲行達しには、行事改めを命じてゐる。これを顧慮に入れねばならぬ。)尚、寛政十年以後享和文化頃に至る末期洒落本は、また數に於て夥しいものがあるが、これらは無論行事改を經ず(即ち秘出)、唯その中の三種程が犧牲的に引かゝつたのだといひたい。

以下はその數衍である。

寛政二年五月の令

新規物は內閲を乞へ

同九月に、行事改厲行の令あり

一、寛政二年の禁は、二回に亘つてゐる。さうして第一回が、此の禁の正の物である。第二回は、その厲行を迫つたものである。即ち第一回は、同五月の町觸、五ケ條に亘つてあるそれである。これが嚴密にいへば、寛政二年の禁そのものである。その全文を擧げるにも及ばないが、大體に於て、「新規に仕立候儀無用」、已むを得ざれば奉行に伺出でよといふのである。その主眼點はこゝで、且つ「新板書物其筋一通之事は格別、猥成儀異說を取交、作出候儀、堅可ㇾ爲二無用一候、只今迄有來候板行物之內、好色本之類は、風俗之爲によろしからざるに付段々相改、絕版に可ㇾ致、又は書物によらず、以後新板之物作者並板元之實名、奧書にいたし可ㇾ申旨」といふこの第一ケ條である。即ち今後猥本無用、從來の好色本類も絕版にさせよ、尙奧附を明瞭にせよ、尙、新規仕立物は、凡て內閲を乞へといつた出版物に對する高壓である。此の好色本類の中に、無論洒落本は含んでゐる。がこれとて、此の令と共に、(有司自ら)絕版を斷行してゐなかつたらしい。

茲で疑問を感ずるのは、行事改がいつから始まつたかといふ事である。此の時の令では、內閲の强要であつて、行事改を指してはゐない。或は、奉行へ內閲伺上といふのが、九月に變じて行事改となつたのか。とにかく、此の五月の令には、行事改は見えてゐない。

第二回は、九月の町奉行への達しである。「三奉行ェ」の達しの中の、一つ、その第五箇條目にある。これは行事改を述べたものである。曰く、

京傳等の處分

一、書物類之儀、前々ヨリ嚴重ニ申渡候處、イツトナク猥ニ相成候、何ニヨラズ行事改候而、繪本草紙之類迄モ、風俗之爲不ニ相成一、猥リガハシキ事等、勿論無用ニ候、（云々）

右ニ付行事ノ改チ不用モノ候ハヾ、早々可ニ訴出一候、又改方不行屆歟或ハ改ニ洩候儀候ハヾ、行事モ越度タルベク候。

といふのである。これに引つかゝつたのが、京傳の二洒落本（正しくは三）と、其版元の蔦重と其の折の行事である。これは、知らるゝ通り、二年の十二月末、行事の改めを經たものである。それが、翌年春出版、三月になつて、奉行初鹿野河内守からの京傳五十日手鎖、蔦重は身上半減、行事御咎め（二人が輕追放）を受くとなつたものである。これは、他の同業者（出版者）の密告か、又は奉行側の發見か何れかであらう。然し此時の吟味始末書にも、洒落本とは、特にいうてゐない。讀本と名づけてゐる。此の時の京傳等の處分も、前年の五月に町觸あつたにも拘らず、同七月中に作者と版元との取引濟み、（卽ち脫稿は、五六月頃、作者は、この町觸を見てゐるであらう。）十二月年末のドサクサマギレに行事改の不十分、通過、さうした作者版元の意識的犯行、及び行事の粗漏、それを痛しめ、延いては他に對する懲らしめ、且つは前年二回の令の厲行效能を裏書する爲の、苛酷處分であるといひたい。勿論、この寛政三年には、京傳以外、少數ながら洒落本作を見受ける。然し、京傳は當時名作家、影響普及の烈しさを顧慮し、且つは作者版元の態度を特に卑劣と認め、（教訓讀本と表袋にしたのなど

特に感情を害したのであらう。)即ち彼等の心證を餘程の不良に認めての事であらう。即ち或意味で、京傳等の處分は犧牲である。しかしこれで以て、出版界及び世間に、洒落本(特に)の出版危險、讀者には秘密出版的のものたる事を印象せしめた筈である。これが惡く(奇利を狙ふ商賈には善く)影響して、同五年の振鷺亭の「取組手鑑」などとなつてゐると思ふ。無論此等は秘出である。以後またほつ〳〵出だした。凡て秘出であつたらう。

寛政八九年頃の大量出版

それが積つて、寛政八九年頃には、新板一年に四十二種となつた。全部秘密出版、行事改もなかつた筈である。これが發見せられて、奉行の吟味、版元處分、(作者は・左記の事情により、却つて有司自ら忌避した。)及び從來當時の洒落本絕版の實行(寧ろ寛政二年の令の實現斷行)となつたのだといひたい。

猥の徹底

とにかく、例外はあるが、概ね、前期よりも、寛政五年以後の物の方が、猥さも徹底してゐる。(我等の前期本後期本の內容の比較からである。)それは、秘密に出て、愈々奇利を博したせゐもあらう。益々前期の令と處分(京傳らの)とが煽つた反動的、寧ろ自然的の出版的良心の墮落(若しくは窮極)であるといへよう。

「作者部類」の洒落本禁の記事

寛政九年頃の處分といふのは、明文ではないが、馬琴の「作者部類」に現れた記述である。同書の洒落本作者、三馬・一九の條中に、

「(前略)寛政八九年の頃、當年洒落本の新版四十二種出たり、此故に板元を穿鑿せられしに、多くは貸本屋にて、書物屋は二人あるのみ。町奉行所へ召出されて吟味ありしに、其洒落本の作者は、武家の出なるもあり、其家人さへ有ければ、中立事に及ばず、皆板元

が自作にて、地本問屋の行事に改正を受けず、秘に印行し、不調法の由をひとしく陳申しゝかば、件の新板の小本四十二種はさら也、古板も洒落本と唱ふる小冊は、此時皆町奉行所へ召拿れて、遺りなく絶版せられ、そが板元の貸本屋等は、各過料六貫文にて赦れけり、そが中に(云々)。こは根岸肥州の裁許にてありける。是よりして臭草紙はさら也、都て作り物語も稿本を兩御番所へ差出して、伺の上行事等、其板元に賣買を許すべしと命ぜられしかば、像の如く取行ひしに、未幾何もあらず、御用多ければとて、町年寄二人に其義を掌らせ給ひしに、町年寄も亦御用多くして事不便なりと申により、文化の年に至りて肝煎名主四人(………今は七人也)に草紙類の改正を命ぜられし也。(下略)

以上によつて、よく經過が分ると思ふ。唯馬琴の記憶のまゝの記述、これ以外正確な日時、四十二種の外題名などを缺くのが殘念であるが、不思議と此の第二回處分と眞の絶版斷行とは、他の明文にこれを見ないから止むを得ぬ。(尙、この馬琴の記述によれば、圖書の檢閱方法は、寛政二年九月存在の行事改が、此の九年頃、奉行所差出、後町年寄、後更に名主と變じたのである。さうして此の名主制が、幕末まで續いてゐた唯一の檢閱方法であつたのである。)

此の第二回の處分と絶版以後に於て、懲りずまのものは、而して其の中處分を受けたのが、「辰巳婦言」等の三種である。

——大正十五年十月。

四、洒落本絶版に就て

寛政十年以後の盛行

再刻三刻あり

再摺三摺

四、洒落本絶版に就て

洒落本の絶版に就ての疑問である。幕府は、寛政九年頃に、當時の四十二種斗り並に從來の絶版、以後の禁止を斷行嚴命したといふが、それが直ちに裏切られるのは、翌十年以後の末期洒落本の盛行である。三馬・一九・谷峨など凡て此期以後の活動に屬する。此の夥しい出版、新作の頻出は、何を意味してゐるか。當然上司の監督の寛、又は法令の弛廢を意味してゐると思ふ。殊に、谷峨作の如きは、當り作多かつたせゐか、その三部作の二筋道・廓の癖・宵の程などは、再刻否三刻(？)まで、明治以前に行はれてゐる。京傳作のものも、又再刻本存在の實例を多々知つてゐる。(傾城買四十八手、繁千話、娼妓絹籭、仕懸文庫など。)一九の作にも、再刻本(疲學問など)を屢々見受ける。再摺の例も多い。絶版本と稱する三馬の「辰巳婦言」の如きも、今日現存せる本の體裁よりいへば、再摺再々摺を企てゝゐる。これらは、全部秘密の行跡であつたらうか。殊に此の再摺三摺は、文化頃に多いかと思はれる。

再刻は、京傳作の如きは、寛政末に行はれてゐよう。寛政九年を距つる近き此の年代に於て、此の現象は、一方新版頻出より見て當然とは思へるが、寛政三年、同九年の上司の處置から見て、思へば滑稽である。(が、享和頃、二三の物に絶版を命じてゐるといふが、然らば他は何とこれを見たか。又は他の數十種の存在を知らなかつたのか。現に、當時一九などは、宛字ではあるが、序文などに左禮本

といふことゐる。殊にをかしいのは、所謂享和の絶版本などより酷きを、一九などの作に見受けること或は、此の文化頃の、前代の名作（或は群衆に喝采せられた作）の再刻又は再摺の再販は、當時、まだ人情本の形式整はず、洒落本の新作家漸く退び、その間の楔として、當然の書肆の思ひ付であつたのであらうか。

殊に、をかしく思ふのは、寛政九年頃の古今の洒落本類板木沒收、絶版斷行といふのが、これがまた實施せられたか否か、怪しいものである。其の證據をいはう。それは、寛政三年以前の京傳作の洒落本の再摺、――それがその現存ををりをり見受けるからである。（再刻本もまたあるが、今は初刻の再摺のみに就ていふ。）現に同三年に絶版を命ぜられ、作者は體刑まで受けた三冊（仕懸文庫と組覗と錦の裏）のたしかに再摺と思はるゝものもある。（此の三冊は、寛政末頃に、又再刻本を出してもゐる。）この再摺は、いつ行つたものか。これは、三年の絶版が事實に於て實現せられてゐず、隱匿せられてゐる版木を持ち出して、ほとぼりの冷めた頃（同五年以後に）摺つた、又その版木が、九年に愈々押收（事實行はれたと見て）せられ、再びこれが僞版を拵へて、刷り出したと見るべきであらう。無論、寛政三年以前の他の作者のものにも、再刻がその以後にある。「遊僊窟煙の花」など然りである。（尚、再摺の例の確實なものとしては、前第一項作家に就ての中、山旭亭の項で述べた、寛政二年頃の「南美多通身」と、山旭亭と著者名義だけを彫りかへ、外題も「金のわら路」とした小本一冊も、擧げられる。これ

は、全く序文本文とも、同一判木である。即ち此の山旭亭本は、彼の年代から見て寛政末である。）

誠に、當時の幕府の態度は、怪しいものだ。寛政九年頃に斷然絶版を命じたといふが、その以後の板行に係はる「婦足嚚」（成三楼著）は、筆禍に觸れたといふに拘らず、今日、小本、或はそれを中本に刷り直したものや、又は、「雪の梅」と改題した文化本や様々ある。此の通りである。（尙、盛行した享和期本例へば「二ッ蒲團」の如きも、文化に改題再摺してゐる。此例他にも多い。）尙、寛政三年以前の例では、自分は、また京傳の「吉原楊枝」などを知つてゐる。此本元來は、天明八年の版であるが、現に自分所藏の本は、慥かに再摺である。これなどの再摺は、いつに起つたか。或は、その天明當時に、初摺賣出し後間もなくの增刷とも思へるが。（事實、この初版當時の增刷で、現存してゐるものも多からうが。）自家本の如きは、どうも寛政三年以後、文化頃に至つての隆々たる京傳の聲名に顧みての、舊版增刷としか思はれないものである。（即ち版木によつては、寛政九年頃に、また隱匿したものがあつたらう。）

寛政五年頃より同九年頃へかけて再刻又は再摺

或は、寛政三年の體刑處分は、あるにはあつたが絶版は行はれず、寛政五年頃から九年に至る間に於ける、當時一年に四十二種の頻出と同時に、前代のものも爭つて再刻又は再摺にかけたのだともいへるが、（これで寛政三年以前の本の、再刻又は再摺本現存の理由は證明出來るもの丶、）然らば、以後の斷然禁止絶版の舌の根の乾かぬ同十年以後の盛行を何と見るか。殊に「婦足嚚」などは如何に。が

年月又は奥附を缺くもの、秘密再摺本也

五、「廓の廓」の初版

當時と雖も嚴に行はれたものもあるらしい。例へば、同じく筆禍に罹つたといふ「南門鼠」(艶二の作)などは、成三樓の「姉足髷」に比しては稀本で、又再摺も見ない。

最後に、自分の知りたい事は、寛政九年頃の一年に四十二種とは、蓋し何々か。これは、殆ど現存しないか。尙、所謂年代不詳本には、此の當時のものも多きにをりはしないかといふ事である。が要するに當時の上司、頗る不得要領の取締を講じた事は、以上を以ても知られると思ふ。

(尙、右の稿では、自分は、嚴密に、再刻と再摺とを區別した。卽ち再摺は、舊版使用の謂である。此稿、再版なる言葉を避けた、それは、再摺再刻どちらにもとれ易いからである。なほ、右の書き方、頗る七面倒な筆であるが、それだけ、洒落本絶版の事實上の徑路そのものも、七面倒であると逃げておく。尙、一言、現在洒落本に、奥附を缺き、又は年月等の序記入を削りたるものあるは、是れ明らかに、少くとも寛政三年以後の秘密再摺本たるの證據である。)大正十五年十一月。

五、「廓(さと)の癖」初版の序跋

(洒落本の絶版に就て述べた序でにその重版様々ある一例として、此の「廓の癖」純初版の儀に及んだのである。)

洒落本傾城買二筋道の二編「廓の癖」――谷峨作、國政畫――の初版には、流布本に見ぬ序跋が附い

てゐる。此の二筋道、廓の癖、宵の程の三編物は、餘程歡迎せられたと見えて、その中の「廓の癖」だけでも、改刻本が自分の見ただけでも二種、且つ製本形式に於ては樣々である。本文には異同を見ぬが、書體、又は輪廓の大小等色々ある。甚しい例は、再刻以後は、谷峨以外の序一、跋一を全く脱してゐる事である。從來初版(純初版)を見なかつた自分としては、流布本を信じてゐた。帝國文庫の飜刻本も、此の流布本のまゝである。今度、純初版と思はるゝものを發見、これによつて凡ては氷解せられた。此の初版本中本、更紗表紙、題簽等は流布本に同じ。但し流布本とは無論版木を異にしてゐる。(本文は同じ。但し、書體一點一劃を相違す。)それに、全くこれのみに見る序と跋とを見受ける。今それを流布本の補足として揭げておく。帝文本にも補足せらるべきは無論である。

「廓の癖」初版の序

○

二筋道後篇廓の癖序

いてや谷峨先生の流義は身を直ふする事を主とし手を知つて手を不レ書以迷喩迷の教も未至の危は屛風の中の蒲團に手管せんと或は足羅あかい四つたとへ合臥になるともひきわけらるゝのおた骨折に親父の腹立付る種となるを患ひ其手ハ喰はぬと身かまへさせんと計はいかにとも權幕甲親方は能人のこゝろに通し能善に導事側觸の詐判にも是を大關とやいはむ予彼が褌しを脊負へば衆人廓の遊興に怪瑕のなき事をとしほ花に一寸きよめて序ス

文虫軒

帯利述　［東鳥］

（此の次に、谷峩の自序がある。此の自序は、初めに單に序とある。此が再版以下は、この代りに、二筋道後篇廓の癖序と入木してゐる。此の谷峨の序、流布本に同じ。）

跋

廓の癖の書たるやまわり廊下のごとしひとつゝきにて二筋の道に野夫あり粋あるを舛子が例の書寐癖ゆめにすら其癖を見て此一冊をあらはす四方の君子氣を附て直（なを）さつしやいといふもまたア、老婆（せわ）心の癖ならんとしかゆふ

切筆書悪述　［じれつ亭］

「廓の癖」初版の跋

○

鹽屋艶二は染物屋主人か

艶二は染物屋か

洒落本「南門鼠（なんもんねずみ）」、「南門鼠歸（なんもんねずみがへし）」等の作者鹽屋艶二は、染物屋の主人でなかつたらうか。勿論、「鼠」といひ、「鼠がへし」といひ、すべて染色から來てゐるが、此の題からのみの類推ではない。紫色主の別

號からのみでもない。（これは、寧ろ傍證の一にはなる。）享和二年版と稱する「鼠歸」を見ての事である。其序文を淸々老人、例言を自身物してゐるが、その序と例言などから來るのである。これに處々染物を述べ、且つ例言には、染物屋云々とある。題名からの思ひつきとしては、餘りに煩瑣、重複である。寧ろ題名は、此の家業からの思ひつきではないか。その二三を要約して擧げる。

○序（淸々老人）

……（前略）今や鹽屋主人の好には、袖ヶ浦の蒼海を下染として、總房の霞る黑に糊豆墨を載、小紋は上代にかへる八ッ山の櫻ほうぶり乃是を鼠歸といふ、近頃の出來なり、派手にして浮氣ならず、おとなはしくして淋しからず、染地の丈も能みじかからず、工みにして魂膽有（中略）此趣を予に序せよと畳さい足、明後日迄の言延も聞ず褊急故、無是非早染の間に合を上畫の筆を採て細々とするす。

○例言（作者。但し例言と斷りをらず。）

前にみなと鼠有といへども、染あがりのはな／＼敷いさゝかさはりありて、既にとめ形（幕禁を斥せる也。）となり、其反物世に甚まれなり、今又鼠がへしをそめ出して、是が跡をおはしむ、しかれども云々、おかしみを專らにして、すごきことをあらはしたるは、染物屋の手がらならん、どなたも一反づゝめしてごらふじろ。

といふのである。

即ち鹽屋は、當時猶流行してゐた自惚の意。艶二は、頭の鹽屋に相應した例の「樺燒」(京傳作、黄表紙)の主人公の艶二郎からの思ひ付きと見ても、紫色主は、家業から思ひついた戯作名だとの類推如何。

但し住居は不明であるが、同書跋に、葵丘之寓居とある。一說には品川に住すともある。現に淸々老人の序にも、品川らしい氣振は見えてゐる。(前掲)

(補記)「鼠歸」の跋の葵丘とは、葵が岡、赤坂溜池、「堤の北の方、辻番所の脇、堰の傍に葵を植ゑたる地あり。土俗葵が岡と」呼んだといふ(江戸名所圖會、卷三)のではなからうか。參考とする。

——大正十五年六月。

枉解物の二著

江戸文學、主に小説を内容上から綜合的に區別すると、創作と摸擬作(飜案を含む)の二個になる。勿論創作の中には、怪しい糊塗せられた剽竊や、前代又は同時代の名著に對する摸倣もあらうけれど、摸擬作とは、前代又は外國(主に支那)の諸書諸作に假り、その趣向を受けて内容を當世風にしたり、又はその裏を行かうとしたり、(彼等はこれを風流と名づけ、當世と稱し、又、眞實と名づけもした)様々である。創作側(摸倣を含む)のものは姑らく措き、摸擬物には、その摸擬せられた原著が様々ある。和漢であることは前にも述べたが、その内容は、經書・詩集、歌集、小説・隨筆類等、古今に亘る。我が國の古典では、竹取、源氏、伊勢、落窪、枕、徒然草、方丈記、平家、曾我物語、太平記、以下雜多。支那のものでは、水滸傳、遊仙窟、剪燈新話、棠陰比事、西遊記、(猥書では肉蒲團、和尚奇緣の類)甚しきは、經書の四書の類、飜案には莊列の類、詩集には唐詩選が最も用ゐられてゐる。この風、同じく小説類の猥的なもの即ち和印本には最も多く、それらは露骨にして滑稽皮肉なる摸擬、即ち如上の古典、經書類を初めとし、時には女今川、女大學の類にまで、又は實語教の類に至るまで、巧みに摸擬したものもある。今、我等が一々その書名と原著とを比較列擧するには及ばない程、こは周知の事

實であらう。今槩說を略くが（が、時ありて此等の綜觀的分類を作りたいとも思ふ。）こゝに、一個、最も滑稽な、しかも皮肉、前掲の創作•摸倣にもあらず、摸擬飜案にもあらず、寧ろその中間をゆくもの、即ち狂解と名づくべきものを見る事である。是れ誠に江戸時代ならでは生れさうもなく思へる程、時代放れのしたものである。迂曲な、今日我らの思ひもよらぬ所に興味を持つた所のものである。がさすがに此類は、我等の觸目としては稀である。或は寡聞淺識のせゐかとも思へるが、即ち此の狂解物、二著を先づ我等は座右に發見した。いまその解說に及ぶのである。

共に洒落本型、寧ろ變態的洒落本とも目すべきもので、勿論純小說側ではない。寧ろ花街に關する漫筆贅言の類ではあるが、また以て當時の好郎、自稱通客どもを喜ばせ、刺戟を與へたものには違ひない。それが一は詩、一は歌であることも面白き對照である。

一、蕩子筌狂解　明和七年六月版　茶釜散人著　門人藥罐子輯

二、百人一首和歌始衣抄　天明七年孟陬の序　山東京傳著（自畫）

「蕩子筌」は「唐詩選」であり、「百人一首」は「小倉百人一首」である。「始衣抄」は、狂解と斷つてゐないだけ、一層横著である。「蕩子筌狂解」は、小本、序二、本文五十七、跋二。「始衣抄」は、中本、序五、本、文三十四跋一。狂解は挿繪なし。「始衣抄」は政演畫と別號を署名せる自畫の口繪がある。

「蕩子筌」は、陶鐵房の序にも謂へる如く、「吾友茶釜先生頃日以二吉原辭一解二毛唐人之詩一」とある如

く、「唐詩選」の本文をその儘に、たゞその解を吉原辭といふべきよりも、寧ろ花柳の巷の事實典例にこれを附會してゐるのである。著者の茶釜散人とは、無論何人かの匿名であらう。序にも只見えてゐる通り當時流行の「トンダ茶釜」の俚謠に受けたものであらう。跋は自跋、即ち茶釜散人、卷尾に明和七庚寅六月、日本橋通二丁目京屋與兵衛とある。內容、五言絶句(五言絶句のみに始終してゐる。)題袁氏別業より答人まで七十五首。次に一例を擧げよう。

（五）子夜春歌

子夜は女郎の諱名なり、此女郎の一客何がしとやらいふ人、とかくうたがひふかく、そこらぢうをくひちらしあるくゆへに、はるは人の氣のうきたつものなれば、あだしこゝろをうらみてつくるあわれふかし、女郎の眞情とみゆ

陌頭楊柳枝

どてのやなぎのえだもそろ〳〵あをみかゝりてくる、わがおもふ人もそろ〳〵わきごゝろが出て來る

已被春風吹

はるのかぜのあたゝかなるにあちらこちらへふきまはさるゝやなぎをみるにつけても、おもひがます、いとゞこゝろのおほいものを、いぢのわるいひくてあまたがあつて

妾心正斷絶

かれにつけこれにつけ、おもひたえなんとばかりしとふてゐるに

君懷那得知

此こゝろもしらず、よその色めとくさりあふてゐるもしらずふかきうらみ言外に見ゆ

○評に曰まぶがあるか年がちかいか、ねどうぐがふるいか、きをつけべし

といつたものである。扨、此の「蕩子筌枉解」は、小說年表新修本等、洒落本の部に入れてゐるが、小說でない事は、見らるゝ如くである。此の明和、延いては安永頃の、洒落本の初期、此類漢詩文に借りた戯著の類が多い。即ち明和五年の「閑居放言」（玩世道人）、明和七年の此の「蕩子筌」、安永四年の「東都靑樓八詠並略記」（愽臥山人）、同五年の「瓢金窟」（烏有先生）などの如しで、これらからも、洒落本が唐本を眞似た事は、單に體裁ばかりではないと思へる。

百人一首和歌始衣抄

却說、歷然この「蕩子筌」類を摸倣したと思はるゝは、以後十八年目の「百人一首和歌始衣抄」である。始衣抄、老人でもない癖に、京傳老人識と記した自叙、及び擬古文的の復序。本文は、中納言家持の「かさゝぎの」の歌以下、崇德院の「瀨をはやみ」に至る數十首、無論、百首ではない。跡著衣抄として後篇を出すべく跋にはあるが、未刊に終つたものであらう。各首、作者名の次に、牽强附會はげしい作者の系圖を記し、以下原歌、次ギ枉解といふ順序、尙、上欄に處々略註補記をものしてゐる。此の中、落語に用ゐられて平凡化してゐるのは、「からくれなゐに水くゝる」の歌、豆腐のからをくれないにひつかけた業平の歌である。此の落語は、我等も嘗て耳に馴れてゐるが、これは、無論京傳の此著より何人かが應用踏襲したものであらう。京傳の奇才の最もその脫線的、荒唐無稽的、人の意表に出づる事縱橫無盡なるは、此の類の著であらう。次に一例を擧げる。

源俊頼朝臣

俊陰｜事は詳ニ｜うつぼ物語｜ニ也
｜俊頼

一説ニ此人百人一首ノウチニテ、イツチ年寄ユヘ名トス（マヽ）

うかりける人をはつ瀬の山おろし
はけしかれとはいのらぬものを

やまとのくにしろがみのほとりに、ひとりの女あり、せいじんのむすめ子どもを、うちへ置はこゝろならぬとて、母すこしのつてをもとめて、かまくら右大将けのおく御てん、まさご御前のおすへにいだしける、此女いたつてきんぴらな生れつきで、もちろんたんきものゆへ、母一しほあんじ、三月の宿下りを幸ひ、うぢ神へ身のうへをいのりのため、母もろとも娘をともなひまふでける事をよめり

うかりける　○ともにつれし男、うつかりとかの娘のすそをけたる事なり、

｜風土記｜ニ云
泊瀬山和州在ニ城上郡ー
此女の名より山の名とす
うぢ神と云は龍田ノ社ナルベシ

それをうかりけるとよめり

人を ○そのともの人をなり

はつ瀬の ○その女の名を初瀬といふ、おすへはみな此やうな名をつくなり

山おろし ○はつせはきんぴらた女ゆへ、ともの人をいけどんな男だなど〻

おもいれおろしたる也、山とはうぢ神のお山での事也

はけしかれとはいのらぬものを ○そのやうにはげしく生れつけ

とは、此うぢ神へもいのらぬものをと、母のじゆつくわいを下の句によめり

［女今川］ニ曰

人なめし仕ふ事、日月のこくごをてらし給ふごとく、心をめぐらし、その人々

にしたがひて、めしつかふべきことなりト云々

「これらも此はつせがごとき女を、いましめのけいしよなるべし

草双紙

［馬鹿文盲圖彙］中之巻

書入ニ曰

せつちんのまへでをろすは、

くそおろし、

［和歌八重垣］ニ云

はつせの枕言をこもりくといふ

「此女うちにゐたるときは、こもりをしたるゆへ、子もり子のはつせといふなるべし

「くとことは五音相通

八文字自笑作

［世間娘氣質］ニ云

此むすめはげしき生れつきにて下略

儀同三司母

［泊瀬紀行］

げすぢかなることちして、けおとり

しておぼゆ
[illegible]かのはつせなき
げすみていふ

たてにおろすは、
たておろし卜云々
「山おろしも此たぐひ也

○

短かいものをと選んだから、こんな物になつて終つたが、中には、もつと複雑な、長い架空的文学がある事を云ひ添へておく。但し「枉解」も「始衣抄」も共に、拙編「洒落本集成」最終の巻に、變態物なのみ集むる中に、收載の豫定である。悉しくは、それについて看られたい。

——大正十五年五月二十三日。

膝栗毛物の研究

第一、膝栗毛物のいろ〳〵

初代十返舎一九の「東海道中膝栗毛」を振り出しに、之に類似の作類出した。延いては明治初期にまで及んだ。また一種近世小説史壇の偉観、奇観であらう。本記述は、これが類似作の一斑目錄と、並びに、自分の藏本又は一見した二三に就ての解題である。先づ、膝栗毛の類似作を、朝倉氏の「日本小説年表」（初刻本）及び新群書類從「書目」の二者及び其他現品に據つて、順序に拾はう。足らざるは、最後に補ふこととする。（以下の目錄中、外題の上の●印は、飜刻物「活字本」あるものゝ意。）

一、初代一九作の膝栗毛

外題	冊數	作者	畫者	刊行年代
●東海道中膝栗毛初編	一	初代一九	榮水口繪	享和二年

（但し此の初編、本文冒頭外題は「浮世道中膝栗毛初篇」とあり。序には「道中膝栗毛」とあり。）

●同　後編　二　同　自畫　同　三年
●同　三編　二　同　同　文化元年
●同　四編　二　同　同　同　二年
●同　五編　二　同　同　同　三年
●同　追加　一　同　同　同
●同　六編　二　同　同　文化四年

○此の文化四年すでに、「夷國滑稽膝栗毛　一」「旅枕裏青海　四」などの摸倣作出づ。尙、後を看よ。

●同　七編　二　同　同　文化五年
●同　八編　三　同　同　同　六年

○此年、同作の「江の島土産」出づ。後を看よ。

●續膝栗毛初編（金毘羅道中）　二　同　月麿口繪　同　七年
●同　二編（宮島參詣）　二　同　北齋口繪　同　八年
●同　三編（木曾街道）　二　同　月麿式麿口繪　同　九年
●同　四編（同）　二　同　月麿畫　同　十年

●同	五編（同）	二	同	月麿 式麿 口繪	同十一年
●東海道中膝栗毛發端		一	同	式麿口繪	同
●續膝栗毛六編	木曾街道	二	同	同	同十二年
●同	七編（同）	二	同	二代歌麿口繪	同十三年
●同	八編 従木曾路至善光寺	二	同	二代歌麿口繪	同
●同	九編 善光寺道中	二	同	二代北齋口繪	文政二年
●同	十編 上州草津温泉道中	二	同	春亭口繪	同　三年
●同	十一編（同）	二	同	春亭口繪	同　四年
●同	十二編（同）	三	同	自畫	同　五年
●續々膝栗毛初編		二	同	自畫カ	天保二年
●同	二編	二	同	同カ	同

○此年一九死す。此の「續々膝栗毛初、二」の四冊は、寓目稀なるもの。に就ては、予が既刻校訂本「續々膝栗毛、乾之卷」（江戸軟派叢書第五編）にくはし、參照。

初代一九自身の膝栗毛擬作

二、初代一九自身の膝栗毛擬作

●滑稽江の島土産　一　初代一九　春亭畫　文化六年
●同　二編　二　同　同　同　七年
●同　三編　二　同　同　同
○右にて完結。
●串戯教諭六阿彌陀詣初編　二　同　同　八年
●同　後編　二　同　月麿畫　同　九年
●同　三編　一　同　同　同　十年
●滑稽喩言大師めぐり上編　三　同　春好畫　文化九年
○右、未完のまゝ。
●方言修行金草鞋　初編より貳拾貳編　同　月麿及び國丸等　自文化十年至天保三年
○右、合卷物、一編約六卷（三十丁）。
●滑稽俳語堀の內詣　三　同　文化十三年
●堀の內詣後編雜司ケ谷紀行　三　同　文政四年

三、一九以外の、一九作追補のもの

名古屋見物 道中膝栗毛 上下二冊 東花元成 畢僊口繪 數者畫 文化十二年

○一名「四編之綴足」、（この本の事、後に細説せん。）（この本、他目錄類に一切なし。）

●續々膝栗毛三編 二 二代一九 國直畫 天保六年

○此の二代一九は、例の絲井鳳助の改名せるもの（初代歿後間もなく）。春馬改めの一九（實は三代）ならず。

●奥羽一覽 道中膝栗毛初編 三 二代（實は三代）一九 國芳畫 嘉永元年

●同 二編 三 同 同 同

●同 三編 三 同 一信畫 同 二年

●同 四編 三 同 國芳・一信畫 同

●同 五編 三 同 一信畫 同 三年

●方言修行 金草鞋り貳拾參編より貳拾四編（完） 二代（糸井）一九カ 天保四年

雜司ケ谷紀行後編王子紀行 三 梅亭金鵞 年代不詳

初代一九以外の膝栗毛物擬作

四、初代一九以外の、膝栗毛物擬作

夷國滑稽羽栗毛　初編　一　嬉丸　北溪畫　文化四年

旅枕裏青海　前編後編　四　彥玉作　藍月畫　同

〇右、文政七年「播州廻り膝栗毛」と改題。(書目)

足毛の識　初・二・三編　四　翠川子　希榮畫　盛田小鹽　歌川豐秀畫　文化五年　同六年

〇右、初一は翠川子。貳一、參二は小鹽の作也。京都永壽軒版。

身延道中滑稽華鹿毛　三　一九校　河間亭主人　永曲畫　同　六年

諸國無茶修行　一　山赤亭川々　等琳畫　同

〇右、疑はしけれど。

成田道中黄金駒　二　赤須賀米　北岱畫　同　九年

王子土産　一　一九閱　長二樓乳足　不詳　同　十年

〇洒落本「世界諸事花の下物語」(乳足)(文化十年版)の改題又は同一本ならん。「花の下物語」は、予之を藏するが、形式は洒落なるも、內容、王子參の二人の滑稽にして、宛然「膝

栗毛」の摸作なり。姑らく疑ひて記す。尚、「書目」には、花の下物語を中本の中に擧げ、一名王子道中膝栗毛とせり。（久）

樂屋道中記 芝甌栗毛 二 濱松歌國 文化十一年

日本物社 津島土産 二 石橋庵眞酔 數治畫 文化十一年

津島土産後篇 滑稽祇園守 二 同 同 同 十三年

○右、二者、名古屋版。（此本、年表・書目共に記入なし。）右の解題、本著別揭「增井山人著作考」參照。

●大山道中 栗毛後駿馬（しりうま） 初編 二 鯉丈 國直畫 文化十四年

○後改、大山道中膝栗毛。

●同 二編 二 同 同 文政元年

●同 三編 二 同 同 五年

芝甌土產 滑稽道中雲助噺 三 曉鐘成 自畫 同 三年

ぬ、しにひかれて善光寺參詣 二 岡山鳥 貞房畫 同 四年

滑稽臍磨毛 上中下 三冊 晴天狗作 曉鐘成校 桃溪・藍江等畫 文政四年 同 六年

（右、此本、年表、書目等に洩れたり。大阪見物もの也。）

博勞便談 旅壽々女　三　鯉丈　文政八年
滑稽 有馬紀行　三　大根土成　自畫　文政十年
道中 役者三升栗毛　二　濱村輔　重春畫　同十二年
●溫泉土產 箱根草 初二編　六　鯉丈　英泉畫　弘化元年
●同　三編　三　二代春水　同　弘化二年
●同　四編　三　同　同　同　三年
滑稽驛路梅　三　石橋庵增井　華溪　天保三年

〇右、名古屋。京版。

滑稽道中 宮島土產　六　十方舍一九　自畫　嘉永四年

〇無論大阪版か。（久）

滑稽富士詣　十　魯文　芳虎畫　萬延元年
談合膝栗毛　三　十方舍一九　自畫　年代不詳
道中 芝翫膝栗毛　二　藤山人　同

〇右、芝翫栗毛と同本カ。

近江道中膝栗毛　九　　狂訓亭主人　英泉畫　　同

（但し初・二・三編三冊は、弘化三年出來）

旅中滑稽脚栗毛初・二・三編　九　　翠川子 盛田小塵　　同（文化頃カ）

（右、一に「足毛議」と同本なりとも云。不詳。）

女膝栗毛　三　　同

松山道中膝栗毛　六　　同

滑稽千社參　八　　椎亭金鶴　鶯齋畫　　同

○以下、「年表」「書目」以外より補。

浮世膝栗毛　二　　一九閲 乳足作　　年代不詳

甲州道中膝栗毛　一　　魯文　　同

筑波道中膝栗毛　一　　不詳　　同

秋葉參詣一九記行　二　　同　　同

伊勢道中三方廣人　不詳　　鯉丈　　同

五、初代一九「膝栗毛」の改刻本又は増補本

繪本膝栗毛　初編より七編　一九原稿再鐫　英泉畫　第五編　弘化五年　第七編　弘化七年

○右、合卷の形式。一編二冊、一冊は十丁、毎丁挿繪入。此本、「年表」及び「書目」共になし。

●**滑稽五十三驛**　初編より十編まで　初代一九稿　畫者不明　文久二年

○右、舊版「東海道中膝栗毛」全八編の改版也。表紙貼外題は、東海道中膝栗毛とあり。是れ、本文は全く舊版本と同樣なれど、編次、挿繪を改めしもの。（編次も舊の八を十に改めたり。）「滑稽文學全集」に飜刻せる東海道中膝栗毛は、此の版也。畫者不明なれども、頗る拙なり。（此事、「年表」、「書目」共に記載なし。）

東海道中栗毛彌次馬　上下二冊　初代一九稿　岳亭春信寫　芳幾畫　文久二年春カ

○此本、「書目」、「年表」共に、刊行年代未詳にせり。予に藏本あり。その上卷序に文久元酉年初秋とあり、且檢印も酉九改也。卽ち文久元也。下卷の檢印また同じ。卽ち翌二年春の出版と見る也。形式合卷、毎丁挿繪あり。文詞は、僅かに面影を殘すのみにして、全く野卑、且つ短篇に改竄、毎丁一驛の描寫にして、猥雜なる挿繪よく之に伴ふ。神奈川の次に、橫濱といへるありて、蝙蝠傘を挿せる支那人の辮髮に、古草鞋を附けんとする喜多の惡戲如きを描けり。表紙極彩色摺。（尙、此本の事、後にいふべし。）

增補東海道膝栗毛　自初編至七編　狗々山人　芳年畫　自慶應三年至明治三年

○一編上中下三卷。合計七編二十一卷也。中本（合卷式ならず）東京松林堂梓。文詞、原

本(初代一九稿)の物を所々切り縮め、狂歌も一を取りて二を捨つるの體に出でたり。編者の狗々山人は、例の笠亭仙果也。此本、本文冒頭には、「道中滑稽談」とあり。(尚後說を見よ。)

以上を以て、明治以前の膝栗毛、及び類似作、及び改版本等の一斑目錄を終る。錯誤、脫漏また尠からぬであらう。補正を俟つ。次に、今自分の藏本にあり合せた、比較的聞見の尠からんものに就いて述べ、最後に、明治以後の「膝栗毛」と命ぜるものゝ一斑を、各書目類によりて補記しておかう。

○

名古屋見物道中膝栗毛(四編之綴足)の解題

(目錄)第三の、一九作追補の中、

名古屋見物 道中膝栗毛　上下二册　東花元成作　文化十二年

都々一ぶし文献の傍證として遺るべからざるもの。即ち此編上に、宮驛の描寫と共に、すでに「どゝいつぶし」の名を記入し、その一首を記せり。即ち此本、文化十二亥の春と序にあれば、當時以前に此のどゝいつぶしが、名古屋及び宮驛に行はれたる證左である。勿論小寺玉晁の「どゝいつぶし根元集」現れたる今日に於ては、寧ろ當然にして平凡なれど、また多少の傍證と做すに足る。(尚、此等については、本著別掲「都々一節起原考」を見よ。)さて、

此本中本二册、表紙青、貼外題「名古屋見物道中膝栗毛」上又は下。本文冒頭には、「名古屋見物四編之綴足」上又

は下と出づ。初代一九の東海道が、宮驛より直ちに桑名に便船して、名古屋を見物なさゞりしを遺憾に思ひて、綴足とは洒落れたる也。而して此の著、東花元成といふ。

この東花元成に就ては、色々な意味での疑問を抱いてゐるが、自分は、今はその概念だけに止めて、餘はより多くの考査の他日に讓りたい。即ち此の元成は、一九の系統(門下又は准門下)たることは無論であるが、元は江戸の者、暫らく(此の文化十二年前後)此の名古屋にゐた。雅號の類似から、例の江戸京町大文字屋の南瓜と何かの緣由はないかといふのである。(下卷の跋には、「……の南瓜にあらず雅友冬瓜の元成……」とはあるが、)南瓜に冬瓜、奈邊かの交渉ありと見たいのである。左に、材料として序、跋の二三を拔萃する。

「(前略)乘懸ッては是非もなく、手綱抱繰四編ひざ栗毛の驥尾に附。(中略)鐙ふんばり大音あげ。關東兵衞九代の强飮。冬瓜の元成、名古屋の筆陣なりと。(下略)

文化十二亥の春

名古や僑居に
おゐて誌之

荏土たね
東花元成

(以上、上の序)

「(前略)(予生れて江戸なれば水道の水を飮んで馬鹿氣强今は金のしやちほこをにらんで僑居すること光陰矢の如し。はや春秋五ヶ年を經ぬ。さるによつて宮重大根のあま

みたおぼえ、尾州味噌の鹽からきをあじわへ、くはず貧樂にまかせ、名所舊蹟もあらましたづねあるきぬ。（下略）」（以上、上巻凡例の中）

「爰に京丁大文字屋の南瓜にあらず雅友冬瓜の元成、膝栗毛の宿引をして、（下略）」（以上、月光亭墨僊。下巻の跋の冒頭）

本文は、彌次郎、喜多八として、此の兩人の名古屋見物の件。次編の滑稽追々出板、稿成るの意味が下巻に書かれてゐるが、刊成らずして此の二冊のみと思はれる。上巻の凡例には、「前編二冊とはなりぬ」と作者自ら記してゐる。上巻口繪、北亭墨僊（例の北齋、名府滯在中の弟子。名古屋浮世繪師の雄、門下に玉僊等あり。）宮の濱、高燈籠の、頗る例の北齋張り（その九段坂の横繪の如き）遠近畫を描き、額縁の如き輪廓などとれることも、その摸倣といふべきである。黄、茶褐、薄墨などの淡彩で、西郊川樂（椒芽田樂(きのめでんがく)）の狂歌の賛がある。さて上下二巻中の挿繪は、墨山（僊）及び其他。各畫に當時尾人の狂歌の賛を掲げたること、初代一九の東海道本と體裁同樣である。文詞、後者「津島土産」よりは、まだましかと思はれる。

（目錄）第四、一九以外の、膝栗毛擬作の中、

「津島土産」と「滑稽祇園守」

日本物社 津島土産、後篇滑稽祇園守の計四冊の增井山人作である事、及びその增井の略傳、著作概目錄、並に此の「津島土産」その物についての解說は、既に記す所あつた。よりて略く（別稿、「增井山人著作

考」參照。)

(目錄)第五の、初代一九本の改刻本其他の中、

繪本膝栗毛、一九原稿、英泉畫といふのは、藏本零本、その五編二冊と七編二冊とである。表紙、普通合卷物の如く、一編上下の二冊にて、畫が左右に續くやうになつてゐる。此の第五編表紙は、英泉の畫、バックを額縁やうにして天龍川の景、上編の右下に、(卽ち畫面二冊ツヾキの右下のふち)御兩人の旅姿を描いてゐる。英泉の風景畫として面白きもの。着色は、遠景の赤と、樹蔭のうす墨、水の藍、他の茶と此の四色。第五編上冊の見返しは、如左。

故人十返舍一九原稿　溪齋英泉狂畫　每篇二冊續而發兌

東海道中　繪本膝栗毛　第五編

書肆　文盛堂　本所相生町一丁目　紙屋利助版

本文冒頭には、「繪本道中膝栗毛」とある。以下此の第五編、荒井より御油(上冊)つゞき赤坂より池鯉鮒(下冊)まで。每丁挿繪、草双紙體なる事前述の如し。文詞、初代一九を多くそのまゝ、唯、合卷風の假名書きと改め、序を文盛堂円などゝ作り替へたるのみ。第七編二冊は、追分より松坂雲津(以上、上冊)、つゞき山田宿まで、(以上、下冊)。

以上二編の零本ゆゑ、此の本何編まで出でたるやは不明であるが、とにかく、此の第七編の終りに下の如くある。

繪本膝栗毛八編　伊勢外宮より妙見町内宮相の山古市の滑稽、續いて出版いたし候。京、大阪、金毘羅參詣まで差出し申候

とあるが、その中英泉も死ぬ頃(嘉永元年)であるから、若し續いてゐるなれば、畫者が代つてゐよう。然し此の本殆ど英泉の編畫と見て可なりであるから、(文詞は初代一九を纏承してゐても)英泉の歿年を以て中絶したのであらうと思ふ。

滑稽五十三驛

滑稽五十三驛　初編より十編まで　改刻本　文久二年

これは「滑稽文學全集」にも、一々挿繪(舊版とは異る)を入れて飜刻されてゐるから、解説を略く。唯、此本原本の體裁をいはゞ、舊版(但し舊版本に初、後摺の二種あり。初摺は、青表紙に竹熊手の例の一九印を一パイに摺れるもの。黄表紙は、後摺本である。)後摺本よりは、稍厚つぼたい、黄味の勝つた表紙。本文の文字も太く、拙。挿繪も勿論、太い線の、以前の野卑乍らも飄逸の氣分のあつたのとは、比べ物にならぬ。文詞は、全く舊版本(初代一九)と相同じい。

東海道中栗毛彌次馬

東海道中　栗毛彌次馬　上下二册　岳亭春信寫　芳幾畫　文久二年

例の讀本作家で浮世繪(始め北溪、後に北齋に學ぶ)も描いた岳亭春信(定岡)の寫といふのである。(上册見返しには、岳亭記、十返舍一九作とある。)畫者の芳幾も、一惠齋芳ー九などゝ洒落れてゐる。

藏本その上卷と下卷。下卷の口繪には、原作者一九夢中に現れて、春信芳幾に示すあり、面白し。上卷の本文は、鹽井川まで。下卷本文は、京に終る。上卷、全二十丁、下卷三十丁。江戸人形町通り品川屋久助版。挿繪頗る幕末氣分を漂はし、文詞も亦初代一九の迹を改悪すること甚しく、一丁多く一驛として、各丁に猥雜な挿繪を掲げてゐる。

增補東海道膝栗毛　自初編至七編　狗々山人編

芳年の畫である。文詞增補とはいへど、多く初代一九の筋をその儘繼ぎ、唯、各驛の書き出し結び等に改悪の迹あるかと思はれるものである。この本、寧ろ芳年の畫に於てとりえあるもの。初代一九の原本を摸し乍ら、又彼の自在なる、豁達なる、しかも簡素な筆を廻らしてゐる。其他に於て別に謂ふべきはないが、唯此の狗々山人といふ者である。魯文も狗々と稱したやう(書名、失念)傳へられてゐるが、それはこの仙果の誤りではなからうか。「江戸時代戲曲小說通志」や、「慶長以來小說家目錄」などにも、狗々山人を仙果の別號としてゐる如く。(小說家目錄は、狛々山人と誤植してゐる。)とにかく此の狗々山人、仙果であらうと自分が見たのは、左の此本三編序によるのである。

「(前略)十返舍翁諸國の方言に精しといへども、微細の所に至つては訣なしともいはれず。余は昔無餘國の俗語に疎けれど、尾州は生國なれば、此書にも彼邊ばかり少しは其誤りを訂しつれば、原本とはやゝ異る所これかれあるべし。(云々)

狗々山人は仙果也

仙果の歿年如何

明治以後の膝栗毛物一斑

明。治。二。巳夏　　狗々山人

これで狗々山人は、熱田生れの仙果（本姓高橋、初代種彥の門人。嘗つて二代種彥を名のる）であることは肯づけて、且つ彼れ晩年窮餘の著作たる事が分るが、唯可笑しいのは、この序の明治二とある事である。從來の諸說、凡て仙果を慶應四年二月九日歿、本所中の鄕東盛寺に葬る、享年六十三としてゐる事である。すると、此の明治二は、幽靈が書いたかといふ事になるが、これは、恐らく、（自分の仙果―狗々山人からは）明治二は書肆のさかしらで、仙果生前に既に纏められてゐたものと思ふ。强ひていへば、狗々に二人あつて、此の後の方は、仙果の弟子かと思へるが、そんなに熱田生れが都合よく二人もある筈はない。唯、仙果の歿年が、明治二年否此本七編の三年になり下らぬ以上は、遺稿と見るを普通としよう。しかし妙な現象ではある。

○

以上、略自分の目下の所期を書き盡したから、最後に、明治の膝栗毛物を、唯その書目のみ、左に見當りたるまゝを記さう。（二三の他は、殆んど未見本。唯賣立目錄等による自分の記憶である。）

○明治以後の膝栗毛物一斑

西洋道中膝栗毛　十五　　魯文　　明治三年（同九年完結）

○中本、表紙絲、外國旗を打出しにしたるもの。嘗て峯本を家藏してゐて、子供の時、そのエキゾチツクな書詞に胸を轟かしたが、今は散じてしまつた。

東京開化 膝栗毛　三　笑門舎福來　四代豐國畫　明治七年

昇平鼓腹 三府膝栗毛　三編九卷　松村春輔　同　十四年

民權膝栗毛　二　木田清三郎　曉齋畫　同　十五年

花街膝栗毛　一　矢尾彌一郎／イ大久保常吉　同　十六年

○此本の事、早稻田文學「明治文學胎生期續篇」（大正十四、七）、に生方氏の記述として委しく出づ。

猫狐 豐川詣笑談膝栗毛　三　菅沼左膳　明治十七年

○此本、三河岡崎、伊藤小文司（環翠堂）發行人。著者又同町の人。菅沼氏、雅號を桂林舍一枝といふ。畫、口畫とも數葉。（判、中本和裝）

笑談滑稽 淸佛（せいふつ）船栗毛　初編二編二冊　伊東橋塘　明治十七年

○右、三編より五編まで續刊（川上鼠文作）。

二十三年國會道中膝栗毛　一　名倉香夢亭　同　二十年

彌次郎兵衛 喜多八 再來膝栗毛 三　　夢外舍主人　　明治廿三年

○此本、中本、(洋紙和裝)、發兌、東京いろは、山口藤兵衛、大川屋。著作者、本名を宮川勝五郎といふ。挿繪面白し。人物は丁髷の兩人にて、背景は明治の洋館人力車等也。再來して一々勝手の狂つた所が興味か。場面は、東京也。下女の轉がり落ちる所など、隨分猥雑な繪がある。畫者不詳。

其他尚多かるべし。今は、唯その一斑のみ。以上を以て、姑らく本記述に筆を擱く事とする。幕末類似本に、原本觸目のたび、隨時増補する所あらう。(尚、例の吾妻男一丁(金鵞)の撰本臍磨毛八編十六冊の解題は、故意にこれを略いた。唯何處までも形式(見返し。序まで)及び筋、一切初代一九の東海道を摸して、而も猥になり切つてゐるだけを述べておく。蓋し一種の珍であらう。」

――大正十四年九月。

第二、身延道中 滑稽華鹿毛と「滑稽臍磨毛」

「膝栗毛物のいろ〳〵」の補遺である。一は、年表等にあり、平凡なるもの。一は、下作なれども、夫等に一切見當らぬものである。卽ち第一、華鹿毛。第二、臍磨毛で、共に「膝栗毛」摸擬作として特色の著しいものである。

○

身延道中滑稽華鹿毛の解題

以下、その解題である。

「身延道中滑稽華の鹿毛」は、中本全六冊　初二編各三冊物である。初編三冊は、一九の序に文化巳孟陽とあり、即ち文化六年。二編は、同一九の序、文化庚午春とあるにより、文化七年たることが分る。初代一九閲、甲陽　河間亭主人著である。命題、各様になりをる。即ち初編の見返しには、上に横長に囲みをとつて、甲州道中滑稽十返舎一九閲とあり、下に華鹿毛初編［全三冊］とある。次で一九の序の冒頭には甲府道中華鹿毛とある。本文冒頭は、身延道中滑稽華の鹿毛とある。即ち三様の外題である。

作者、甲陽の人、河間亭主人とは誰人であらうか。甲州在とは分るにしても、素性は如何、全く存知する所がない。唯、一九に遙かに謁を執つた、直接の門人ではなかつたらうといふ程度である。丁度、名古屋の増井山人の「滑稽祇園守」に一九が序をものした如く、門人ならざる親昵關係に於て（寧ろ著者よりは一九の聲名を利用の關係に於て）生れたものと思へる。全六冊（「年表」所載は、三冊とある。誤り）、所々挿繪のヒラキがある。感じは、普通の膝栗毛物と同じ、狂的寫生畫である。調子が稍硬いが、全體に於て、御丁寧に初代一九の東海道などを摸したものである。（狂歌の贊あること亦同じ。）先づは、左に、初編の一九序文と凡例とを（全文）載せる。

同初編序文

甲府道中華　鹿　毛　敍

河間亭のあるじ。予が膝栗毛に道をかへて。甲府道中に筆を走せ。此一集を編る。そ

れし月花は都會に有て。是を賞するに。酒食の美を好で備ふることをもはらとなせば。却て其感情うすく。邊土寒地には。其事疎なるが故に。おのづから實景を得るの樂み深し。今や此書も東海木曾の兩道に異にして。往來も偶身延詣富士參の外。旅客を見ざれば。凡而事の足らざると。ものゝおくれたるとを。何だら發智の柿の種本とし。葡萄棚の下行水に墨摺ながして。打栗のうちも捨ず。饂のいとぐち操出し。郡内綺のおりよく仕上し三冊もの（此の意、初編全三冊の意である。久）予にわたりをつけて。兄貴たのむと投かけられ。そこで呑込。龍王多葉粉の吸口をたゝく事しかり

文化巳孟陽　十返舍一九誌

（次に、永曲畫の半丁、口繪あり。川、兩岸、此岸に花咲く。遠見、旭。駿足の栗毛のあとにたち出ておかけるもながき花の下鹿毛　河間亭と賛あり。）

凡例並附言

○此續編ハ四ツ谷新町に始り。甲州身延山參詣まで。左次兵衛喜七兩人が旅中の滑稽及び旅人飯盛女其處〳〵の人物の下情。茶屋の動靜渡船歩行渉並風土の佳勝共あらま

しを穿てしるす

○此初編三卷は武州小佛驛に到て畢る。が此次郡内通り一瀬越の轉倒より。上野原川留の功拙。夫より道中筋の洒落。笹子峠の危難。甲州石和鵜飼川に〻。經行を尋るおかしみよりして甲府一見のあらまし並鰍澤より川船にて下る趣向。身延山參詣まで。大槩草稿出來あれども。帖數の多きを厭ひて。後編にゆずつて雜客の僅倪をまつ

○俚言。方語の通稱に異なる事あり予多年この道中を往來なすといへども。俚俗の訛言悉く聞知するにあらず。その大槩をいさゝかきゝおほへたる而已。殊更東都の方言は邊鄙に住る身にて委しからねは。その誤りあらん事を怖る閲る人笑ふ事なかれ

○卷中府中泊飯盛買の滑稽　予その妓臺に遊戲したる事なければ。如推量のまゝをしるす

○卷中の夾曲哥は。筆をとつて口から出次第なる排諧なれば。只一笑を求る而已。可否を論ずべからず

○此冊子は只兒輩の讀やすからん事を純とし。かなの誤り等改糺すにいとゝあらず。讀人是を咎る事なかれ

（以上、凡例並附言終）

（書出しの二三丁を摘んでみよう。）

身延道中滑稽華の鹿毛　上巻

甲陽　河間亭主人著

五風十雨時をたがへず。弓は挑灯と共に袋に入り。太刀は大山講中の肩に擔はれて。石尊の廣前に納る御代の有がたさは。生醉となつて大道一はいに大手を振てあるけども。道をゆずつて咎る人なく。嚢中自錢次第で西國東海の果迄も足を労せず。往來自由自在にて。辨當持ずに腹のへる氣遣ひもなく。旅は憂ものなどいひ傳へたるも。今は保養ながらに旅立して樂みとする世の中。斯る有がたき御代に生れ合せたるは。八百や見せよりも冥加ある事になんおもほへける。爰に江都神田八町堀なる。とちめんや彌次郎兵衛居候の北八兩人が。伊勢參宮より京大坂讃に遠慮も長旅の滑稽を膝栗毛てふ册子に著し普く世上に流布を見て。かの彌次郎兵衛が住居たる。ひとつ長屋の左次兵へといへるハ其むかし四國を廻りたるものゝ悴にて。親の名を其儘に。二代目の左次兵へと名乘れども。いまだ四國は扨置て箱根を越た事もなく。年の程は猶平殿より二ツ三ツも増りけれ

ど。何ひとつ取しまりたる事もなきぬらくら者。しきりに彼兩人が族中の洒落を羨み、日比無二の朋とする是も同じく役者にて。酒と女は飯より好物。貧乏なれども名斗は福七といへるなまけもの。渠を伴ひ（以上、初上の三表まで）

以下は、貳編上中下三冊の解題。貳編になると、更に「身延詣花鹿毛」（一九序）と代つてゐる。先づ貳編上の序。

身延詣花鹿毛序

深草の元政法師が身延記行は。孝に據て其聲高く。今河間亭うしの身延記行は。誹諧によりて其稱弘し。渠は法花經の壹部八卷を原旨とし。これは花の鹿毛一部三卷を戲編とす。視者隨喜の念をなし、聽者批謗の徒にあらず。作意の妙法はこれ。堀出しもの丶堀の内ッ千部も萬部も賣るハく。そこへも本がデゞブデブく。爰へも本がデ丶ブデブく。日蓮宗かしらねども。酒には信心堅固の版元。髯題目の鬚撫して。予が方にきたり。是に序せよと徒は投ず。上戸弘通の柄樽を見せて。予にも亦信心を發しむ。こ丶において。ものいはずにかくのごとし

文化庚午春　十返舎一九識

身延詣滑稽花の鹿毛二編

凡例並附言

此編ハ武州小佛驛より。甲州郡内上野原驛に至て終る。此間道法纔（マヽ）六七里の間なり。三巻に綴りたるは。身延山迄の道法四十里に足らざる所なり。悠然と悪延し。追々後篇を著さんと。初篇の世に行はれたる僥倖に乘が來て。鼻の下と共に長く〳〵と。筆を挽たる趣向なれば。好士の閑に倦ん事を恐る。希くは只身延山までの道中筋驛々。及び風土山川の道しるべと而已見給へかし

卷中相州津久井縣より。甲州郡内迄の方言わかりがたきは。あらまし側に其意をしるす。されど事多ければ。悉く記すにいとまあらず。こは其言葉つゞきにて監察し給へ

東都の俳諧並俚俗の方言等は。そのことはり前篇の凡例に述たるが如し

此次三編は。速と掃衣て。都留川の川明きより。郡内道中の滑稽をしるし。夫より甲州休息山立正寺へ詣。且石和鵜飼川にて。經存をひろふ趣向までを。書集めて。爰にて筆をとゞめ。其次四編に至て。甲府より身延山までを。こと／＼く書著し。此篇にて滿尾せしめんとす

凡　例　終

○

ところが、此の初・貳編の六冊で、あとは未刊に終つたらしい。版元は、貳編も初編とも同じく、大阪心齋橋通唐物町　河内屋太助。江戸通油丁　村田次郎兵衞。同市ケ谷田町下二丁目　上州屋仲右衞門、同梓とある如しである。

同二編下卷末尾の全文

わるふざけの一例として、二ノ下の卅一より同卅五(大尾)までを全文載せておく。甲州郡内上野原驛宿に於ける描寫である。凡て此類の、一九ばりの隨分下卑た滑稽のとり〴〵である。

(前略)男「コレ／＼手めへ。晝の約束ダアからさつきにから忍んで來て待あかしタアに。あぜそんなに手間がとれた。早く爰へ○○○痱なさろトふく七が手を引ばる。これはかの下女このふたりともにはぐらかして、おのれははづしてほかの所にねたるとみへたり。このときふく七はいよ／＼おとこのこゑなれば。あいさつもなりがたく。むごん

にてにげのかんとするに。此おとこは下女とこゝろへふく七が手をしつかりとらへて。ねまへ引こまんとする。こはたまらぬともぎどうにふりはなし。はしごのかたへにげゆくに。かのおとこも追かけいでとらへんとする。この時ふく七は。やう〳〵二かいの口までさぐりより。やにわにはしごへあしをふみかけたるに。いかゞはしけんこのはしご。ずつとすべりばたりとはづれければ。このとたんにふく七も二かい口よりまつさかさまにおちんとす。これはたまらぬと。二かいくちに両手をかけしつかととらへけれど。是とまりなくぶらさがりけるに。此あたりに。にはとりのすをつるしてありければ。やう〳〵これにあしを引かける。これにおどろきすにいたるにわとり。三四羽ばた〳〵と羽だゝきして。まいたちければ。このそうどうに。ていしゆも目をさまし。何事やらんと。あはたゞしく。手しよくをともして。たちいでながら　ていしゆ「ヤアヤアコリヤア。あに事だ〳〵トかのまいたちたるとりのすを。すつと見あぐるに。ふく七は二かい口にぶらさがりゐたりければ。ていしゆ「ヤア〳〵。そこに居たは。だれだ〳〵ト手しよくをさしいだし。ヤアこんたア泊りの旅人衆か。イヤハヤとひようもない人だ。そこへあがつておにやうさつしやるのだトいわれてふく七ぬからぬかほにてハリトウ〳〵〳〵〳〵さこ〳〵〳〵〳〵扨。此度のかるわざは。二かいの口を腕にてたもち。其たいこたたへさ

がりますれば。これを名付て野田のさがり藤でゴウザアリイマアスウルウデエ。ござアいていしゆ「こりやアあにようぎやアる。此人ハ氣でも違たそうだ。たまげ果タアトていしゆハきもをつぶしゐる。左二兵へハさいぜんよりのそうどうを聞耳たてゝゐたりけるが。いまていしゆがたちいでたるをきゝて。おのれもおきいで。ひそかに此やうすをみて。おかしさをこたへて有りけるが。もう出てもよきじぶんと。ていしゆのそばへちかく立より。ぬからぬかほにて　左二「もし〳〵御ていしゆさん。あの男はぜんてへかるわざ師で。こんど甲府の善光寺に。開帳があるといつて。やとはれて行やすが。久しく休んで居ちやア。たいがくづれてやりにくいといつて。さつきから。やつてみたがつて居やしたが。爰じやアやかましくて。お宿へ氣の毒だと。わしがやう〳〵おさへて置たを。いつのまにかかけ出して。地取のけいこをするのでござへす。ていしゆ「イヤハヤお前迄が。おんなじ様にばかべいいわつしやる。どこの國にか輕業の地どりといふがありますべい。左二「そりやアおめへが。何も御ぞんじないからさ。惣ていかるわざでも。地取をせにやア。場所へかゝつてへこみやす。ハテ角力とりのは。けいこにとるのを地どりと云ふ。また輕業師なんぞのは。拍子を地へとつて合せるのでそこで地どりといひやすのさ。ていしゆ「それもそうだんべいもしり申さぬが。とひやうもない夜る夜中とんだア所へかけ上つて。

栄返

にはとりをさはがせたり。はしごをおつぱづしたり。イヤハヤおきれけへつて。物がいわれ申さぬトていしゆふくれかへつている　左二「そこはあの男も。久しくけいこを休んだから。あんなすこたんをやらかしやす。これが又おめへの所だから忝ゝが。人中であんなしそこないをすると。外聞をかきやす。したが夜中にお宿をさはがせたは。あの男の不調法。そこはわたしが御詫いたしやすから。おめへ御了簡なすつて。いつておやすみなさへし。はしごはわたしがかけて。おろしやしやう。てい主「ホンニあにが。あんだかにがにがしい事ダアに　左二「どうぞはしごをかけるうち手しよくをちよつとおかしなさへトていしゆより手しよくをかりうけ。はしごをかけながら。サアしつかりと。とらまへておりたおりた　ふく「ア、またつし。あぶねへあぶねへ。左二「ハテぶてうほうな。かるわざ師だトいふうちふく七はそろそろはしごをおりかゝる　左二「ソレソレ洞庭の秋の月じやアなくて。〇〇〇〇からも野田のさがり藤がみへる。　ふく「エ、しやれ所じやアねへ。兩の腕がいたんで。はしごもとらまらねへから。しつかりおさへて居てくんなトようようはしごをおりれば　ていしゆ「イハハヤおめへがたは。本氣じやアないそうだ。左二「あいさぜんていふたりながら癇氣もちで　ていしゆ「あにようぎやアるだか。さつぱりうらにやアわかり申さぬ。サアサアはやくいつてつつぷして。あすの朝はそうそう立てもらひま

しやう」左二「わしらアこん夜にも立てへくれへだが。川留でしかたがねへ。川さへあいたら。じつきに立やしやう。そんならお休なさいやせト左二兵へハふく七をともなひ。ざしきにかへりてわらひをもよほしながら。口ずさむ

二階からおもひがけなきかるわざに
落のこざるも時のしあわせ

ふく七もこれをきゝて

立居にもよく氣の廻る下女としらで
口車にぞかゝる難澁

彼これ興じて。夜もいたく更たるまゝ。夜着うちかぶりてふしけるとなん

身延詣滑稽花の鹿毛二編　下卷終

——大正十四年十二月。

○

滑稽膝磨毛の解題

吾妻男一丁の膝磨毛の類ではないが、普通公刊の性質のものであり、現に公刊のものであるが、此作『滑稽膝磨毛』は、朝倉氏の日本小說年表にも、新群書の中本書目にも見當らぬ。半紙本全三冊、浪花、嘴天狗百癡著。同、曉鐘成校とある。嘴天狗は本名不詳。鐘成(見返しには、鐘鳴とある。)の交友の

一人にてもあつたらうか。年代、文政四年ー同六年。鐘成の序に、別に卷頭、馬琴の序を附してゐる。(馬琴の序には、此の書名を西國膝磨毛としてゐる。)版元不詳(見返し、それらしきものに、長蔵房とある。)挿繪、ヒラキ罫摺、一卷に數枚づゝ。桃溪、徹山、宜哉、藍江、松年などの『浪花名家』の畫。下之卷の尾に、眞間野川成といへる男の、跋一丁を附してゐる。

全三卷、殆ど大坂の背景を以て終始してゐる。與太郎、萬八といふ二人の江戸者が、大坂見物の滑稽さ。江戸見物の田舎者の不様さを描いた江戸版本の逆を行つたものである。大坂刊行で、大坂の爲に氣焰を擧げた、頗る故意的なもの、それ丈、江戸版本の(滑稽本や洒落本に現れる)江戸贔屓、江戸ッ子優越の自矜觀念と對比して頗る妙である。梗概は、上之卷は、二人の大坂町内の見物、失策滑稽。道筋は、日本橋ー芝居側の繁華ー島の内油町邊を過ぎて藥店ー長堀橋の詰の角力の組合せー船場の北寄り東側の療治看板ー松や町ー天神橋ー天神境内ー料理茶屋ー堂島米市場ー(中略)ー順慶町の夜店(下略)といつたもの。中之卷は富島邊へ辿りついて、船宿の和泉屋作右衛門に於いての其夜萬八の失策(夜這の失策)、この描寫、約一丁ほど猥雜を極め、宛然此種大坂版の讀和の如きものである。下の卷は出帆、兵庫までの船中である。主に、初代一九の東海道膝栗毛類の手法筆致を摸してゐることは謂ふ迄もない。唯、江戸者が、大坂の本場で赤恥掻く所に、大坂本のお國びいきが現れて、注目するに足ると謂はるゝのである。左に、馬琴の序、鐘成の同、川成の跋と、その全文を紹介しておく。

同上卷馬琴の序

西國臍磨毛序

なべて茶家者流の語は。優にして俗ならず。古作に象りたる器物を。贋と唱へず寫しといふ。渚浪花の嘴天狗が手づくねの一九賽を鑒定するに。所謂十返舍の寫しにて。しかも上出來なり。別に西國臍磨毛と銘をつけ。戯部の大名物に加へて可也。著作堂の江戸究如作

文政四年小春　　山亭馬琴【琴】

同上卷曉鐘成の序

百千鳥囀る春の朝。嘴天狗のうしの著せる。旅の恥てふ冊子を閲するに。鳥が啼吾妻男の洒落にして。飛だ趣向に翎をつけ。言葉は鳬のはぎの短かく書なし。鶴の脛の長きおかしみ侍るに予が校みん事は。雉子と鷹との違ひあれども固辭がたく。友囀りに囀りて。いすかの嘴の齟齬たる言の葉を。旅の恥にならひて書捨ることになん

曉鐘成　誌

同下巻、眞間野川成跋

文政四のとし

巳の春

睦まし月

×

（以上、上之巻）

跋

米屋巷の情痴史は漢文做にて頗る上上黒吉の領袖なりいつの頃よりかまた日末所作の稗官あるハ滑稽の戯書を做らる其伎ハ二ノ替の新劇を待ち玉へ先顔見世ハ此狂言

評判たのみ

ますぞ〳〵

文政六

癸未のとし

正月

眞間野川成 ㊞

（下之巻）

如上の中、鐘成の序、馬琴の序に参照すれば、此の『滑稽臍磨毛』は、一名西国臍磨毛、一名旅の慰とも様々にいうたと見える。尚、著者嘴天狗は、當時米屋町住、一個の町人通士であつたらうことが、前掲川成の跋に據つて知られる。

（大正十四年十月廿一日夜稿）

第三、膝栗毛物のいろ〳〵（續）

前々稿「膝栗毛のいろ〳〵」前稿「華鹿毛と滑稽臍磨毛」に續くもの、新增補の外題、並びに既出のもの其二三寓目の解題である。前々稿以來、膝栗毛物（即ち一九の膝栗毛に對する摸擬作をいふ）の價値に就て自から考ふる所あり。即ち此の膝栗毛物が、作者としては二番もの、又は地方無名の徒、作も東都文壇の雄たる且つ原本提供者たる一九（初代）には及ぶべくもないが、自から又別個の風格あり、稚拙の所却つてその天眞さを酌むべく、且つ作が、初代一九の遍歴實見、想像聞知交々混へてのものとは違ひ、地方生えぬきのもの多く、從つてその描寫も少くとも眞は描いてゐる、たとひそれが子供の自由畫的に描くとも猫ではない、犬は犬だと見える如く、その眞實さだけは、描寫の拙を掩ふに足る程の、我等鄕土誌並に風俗研究の上に、好資料を數多く與へてくれるものであることは、斷言に躊躇しない。まして中には、名筆、玄人を避けしめる體のものもあるに於てをやである。即ち我等は、近き將來に於て、此等の數作を網羅した「膝栗毛擬ひ物集成」を刊行、以て膝栗毛物愛讀者並に、鄕土地誌・古風俗に興味を有せらるゝ諸賢の一粲を買ひたいと思ふ。却說、以下の解題は、最近寓目の二三に就て、その僅かなる輪廓である。

一、膝　摺　木　上一冊中本　　文化四年版行

（此本、前々稿「膝栗毛物のいろ〳〵」に無。即ちあらゆる書目にこれを闕くものである。）

中本一冊、三冊物なりや、又果して以下の刊行を見たりしやも不明。が恐らくは、上中下三巻既刊ならんか。作者不詳。叢勢天騰隠士濁々山人の序には、「浪華市上に一仙人あり、名づけて一九といふ。常に雑話を為して人の塵腸を洗ふ。尤も府に知るす虚話客也、適東武一九の膝栗毛を見て、嘆て曰く、嗚呼世に是の如き與話客有りや。豈に後世の虚に怕るべし。然りと雖も是説続けずんばあるべからず、則ち住吉街道紀行を戯作て名づけて膝摺木と曰ふ」（下略）（元漢文 石揩風）とあるが如く、大坂、攝津の一九、即ち逸名の士の余業であらう。此の濁々山人の次ぎ、戯作（この下に花押、可一の形。）とした る自序あれど、作者の輪廓には觸れてゐない。以上計六丁。以下本文、（上之巻三十一丁。主人公は彌次と北八、當時「足なし」となつて、葭や橋築地の貸座敷に窮迫の體より、天王寺参詣に至る。富山の印、君山の落款ある挿絵数葉。挿絵の賛（狂歌又は句）、凡て體裁原本初代一九本を倣つてゐる。本文中ところ〲狂歌ある事、また同じ。版元不詳。（無論大坂本か。）（補―其後、摺木を見た。上下の二冊本で、下は堺の参詣の話が終であつた。）

二、奥九旅人井中水　上下二冊中本　文化五年三月販行

これも、前々稿の書目には脱したが、新群書類従洒落本書目には見え、自分の洒落本年代順書目に載せたものであるが、原本を看るに及んで、洒落本とは目し難い。中本、寧ろ膝栗毛物の一たる事を知つた。仍てこゝに挿入するものである。上一冊、序。発端。本文とも二十七。下は、三十丁。上巻序

は、寐覺亭道人識。發端　悦然堂夢曉補寫、（コノ次口繪として、奥州東方風俗、九州南方風俗等あり。）第七丁目、奥九旅人 井中水（ゐなかのすい） 上　頭陀藥雲水戲作、以下本文である。奥と九州の二人の旅客相互に知つての京見物、以下下卷に亘りての處々の滑稽である。本文には、此の二主人公をきうしう、おうしうとし名は示してゐない。（但し上の口繪には、奥州萍士　喝坊外濱左衞門、九州萍士　智晴沖右衞門とある。）挿繪上下にて數葉、原始的稚拙。本文の中、狂歌のあること、また初代一九本に同じ。販元、皇都書林永田調兵衞、木村八郎兵衞と、下卷奥附にある。

三、滑稽有馬紀行初編　三册半紙本　　文政十年亥春版行

三册とはあるが、製本上の都合で、卷數は二である。上の製本二十丁、中（實は同じく上）の製本、上より加算して三十五丁、下の卷新たに本文跋とも三十一丁。上卷製本の分、序文、無着舍のあるじ誌、凡例。第四丁表、滑稽有馬紀行初編卷之上、平安大根士成著、以下本文。下卷尾の跋は、書肆文暉堂、半丁分。版元は、同奥附によれば、京　本屋宗七、同山城屋佐兵衞、江戸大坂屋茂吉、尾州美濃屋伊六、大坂　河内屋長兵衞、堺　住吉屋彌兵衞。白暎畫數葉。「すべて有馬道中より入湯男女の客又大湯女小湯女をはじめ旅舍の奴婢に至るまで、其情を穿て、新しき洒落をあつむ」るものである。（此本、中本型のものもある。何れが初摺なりや。此の半紙本は、表紙凡て有馬筆の圖案にして、半紙の大きさである。色は黄、題簽は白紙、文字黄摺。）

「膝栗毛面白草紙」解題

四、膝栗毛面白草紙　中本初篇上下　嘉永四年版行

草双紙體ではあるが、内容は中本である。（表紙彩色摺、芳盛畫。作者は、東都　永樂舍一水とある。此本、また前々稿の書目に脱かしたものである。初篇上は、序附言とも二十丁。初篇下は、二十丁、次篇以下ありや不詳。序、作者の一水、「（前略）彼の彌次郎兵衞喜多八が子供のあらまし聞ければ、親に劣らぬ大だわけ、筆にあらはす其馬鹿を四方の君子は讀で見たまへ」とある如きものである。さうしてその道中は、「千住の驛を眞直に草が越谷打こして、粕壁より右へとり志すは筑波山、裏へくだりて椎野山、夫より下館結城へ行址のかきあげなしたるを」云々とある如し。（が内容は、崎房まで、即ち未完である。）處々、狂歌を挿み、挿繪の體裁、また一九本に同じ。主人公は、加二郎と仁太八。此本、新群書「書目」の「中本書目」に初篇記載を見るのみ。次篇以下不詳。版元又不詳。（尙、此本、表紙外題は、右の如くなるも、序、及び本文は、凡て、草履は長刀草鞋は蝿人眞似目覺旅路とある。）

「滑稽富士詣」解題

五、滑稽富士詣　中本　初篇以下十篇十冊　萬延元年より文久元年版行

各篇上下二卷通計二十卷十篇十冊である。作は魯文、畫は芳虎。從來の類似本と異り、本文挿繪の體裁、精密。文字も細字にて、十五行、主に假名、漢字は振假名つき。第一篇は、序とも上下にて三十一丁。序（富士山開闢起原概略といふ）は、作者自身。二篇、序　作者、全丁數三十二。三篇は玄魚の序、三十三丁。四篇は、岳亭春信、三十三丁。五篇は序　秀賀、魯文の凡例、三十二丁。六篇は、序

春亭京鶴、三十一丁。七篇は、序種彦（二代）、口繪狂齋、三十三丁。八篇は、序、小田原人吉岡信之、三十二丁。九篇、序　作者、三十二丁。十篇、序は有人、三十六丁。本文、虛々狂歌を挿む。凡て膝栗毛物を追へど、幕末の雰圍氣そのまゝ、橫濱岩龜樓の洋人素見の姿、さては、洋人道中の姿、さては支那人など描かれ、且つ富士詣往返の描寫、猥雜なるあり。挿繪も温泉の入浴、さては種々の醜態など、隨分エロチックなり。中には、立小便をせる山出し女の群を描ける谷川の流もある。此本、江都照降町錦昇堂惠比壽屋庄七版、表紙の體裁、本文用紙等、從來に見ざる精巧さ也。表紙の如きも、地色は緑、下に松原、上に降り來る寶の小槌さては寶珠の類をカラ押にす。題簽は黃、文字は墨。主人公は、呑好子（のんかうし）、我樂（がらく）等の數人、蓋し魯文交遊の實寫ならん。

「日光道中膝栗毛」解題

六、日光道中膝栗毛　中本一冊（二十五丁 合卷風）　安政丁巳（四年）序

魯文の作。膝栗毛物の一である。此本の存在、「草雙紙書目」にも「中本書目」にも「魯文著作目錄」（列傳體小說史の）にも見えてゐない。草双紙風一冊讀切、中本全一、十五丁ものである。國綱の畫である。草雙紙風といふた通り、毎丁挿繪、假名文字の文を添へてゐる。表紙は、彌次喜多の旅立の樣子を描いた彩色摺。見返しは、日光土產の意であらう、「ひこ卷とうがらし」などがある。本文、その第四丁から始まる、多少此の摸倣作に氣が引けたか、第一丁は、垒亭愚文作とし、卷尾は鈍亭魯文校合と逃げてゐる。序は、魯文として此の作自作の由を明らかにしてゐる。此の序に、既に、東海道、木曾、甲州、

成田、大山、江島、鎌倉、在土栗毛と編次けた摸擬作のある由を白狀してゐる。「今又日光道中を一編增て七部の小冊」とある。第二丁裏ヒラキには、夢に原作者の一九や彌次喜多を、閻魔冥官立合の下に、引ばり出したりしてゐる。尙、此本によると、他に「兩國八景江戸栗毛」(芳幾畫)、「房總めぐり膝栗毛」(國劍畫)などがあつたらしく、現に本文中に廣告してゐる。凡て彼の作であらう。尙、此本、日光、出立から歸宅まで、挿繪は時に、猥褻なひどいものがある。

(以上、大正十五年五月廿三日夜)

第四、膝栗毛物のいろ〳〵(續々)

前稿及び第一稿と重複するもの、または新出のものである。重複のものは、重複ではあつても、單に書目だけであつて、全く概念を缺いたものである。それを今、原本の新渡によつて、その概念を明らかにしようといふのである。

まづ、その書目を擧げる。年代順である(中、書名の右に、圏點を打つたもの、前稿・第一稿に、その書名すらなかつたものである。)

○東國滑稽行栗毛　初編　宇多樂庵婦丸　文化四年春
○滑稽有馬紀行　初編　平安　大根土成　文政十年春
○膝栗毛餘興讀而未來記　初編　東里山人　弘化三年春

○同　同　二編　同　弘化四年春

○甲州道中膝栗毛　鈍亭魯文　安政四年春

「夷國滑稽羽栗毛」解題

以下其の解題である。

○夷國滑稽羽栗毛　中本一冊

狂蝶子文麿の序があり、それに文化第四丁卯のとし孟春とある。(此の文麿は、東都の作家で、文化頃洒落本の作もあり、現に「替鬘禿筆」といつた、人情本形式であるが、とにかく洒落本作もある男である。(其他に文化九年版「淨瑠璃姫物語」(これは大阪版であらう。)文化十一年版「五大力後日物語」といつた讀本もある。)文麿は、狂歌も詠んだとみえて、現に羽栗毛の口繪、北溪畫の淺草觀音の遠景の賛に、「うめわかがゆかりにあらぬ觀音も江戸むらさきの雲の上人　文麿」とある。)

さて序の次、目次であるが、此の目次の切り方、頗る洒落本を思はせる。即ち、此の當時、洒落本・中本(滑稽本)が、頗る接近してゐたことを思はせるものである。

目次、左の如し。

第一回　世中の盛衰田助無間の話
　　　猿をついてさいはひを得る

第二回　雷門の飛んだり先生田助に　話
　　　あざむかれて空中を白眼

第三回　田助飛行を得て空腹に遊　話
　　　秋葉の森浮世天狗參會の

第四回　田助呪文をさづかり初て　話
　　　夷國に遊覽する

第五回　老翁田助を古石場に　話
　　　ともなふ仙女の閨中に入る

後編　第六回より十回にいたる

以下、本文。扨、此の著者の字多樂菴嬉丸、これも、別に洒落本作のある洒落本作家で、出自は不詳であるが、とにかく、文化三年版の「夜慶話」―此の羽栗毛より前年の作、但しこれは、「四十八手」(京傳)の改刪本。また其には、享和元年の作「假廓比翼紫」(南渚)の二作がある男である。成程、そのせゐか、此本、頗る洒落本臭味の多き中本である。略筋は、

第一回、怠惰者の田助、梅ゲ枝の手水鉢の故事に倣つて、淺草觀音に詣で、手水鉢から金が生れぬかと柄杓で敲くゝと金にはあらで、ひらくゝ虚空から舞ひ下りるもの、何かと見ると、鳩の羽である。

はねとかねとは飛んだ茶番だと、觀音樣を怨んでゐる處へ、觀音の御告があつて、その羽で羽衣を拵らへ、飛行なせ、面白き事あらうといふ。で先何にもせよ觀音の教にまかせん物をと、こゝに三枚かしこに五枚、拾ひ集めて引括り、わが家をさしてぞ歸りたる、といふのである。

第二回は、さて田助、羽衣の製作にハタと當惑したが、幸はひ隣り裏の雷門の内へ出る、はねたり飛んだりがはつたりの親父に頼む」が上分別と、これに頼み込む。こゝに一寸、一九の膝栗毛との比較話がある。飛んだり跳ねたりの親爺の言葉である。

「おや父 是／＼もう皆まで聞に及ばず、夫は何よりの思ひ付サ。近年一九が膝栗の大當り、是ハ又其上をこす羽栗毛、おまへの御あんじ、きめう／＼トむしやうにほめられ」

云々とある。さて「かの羽衣に連尺をつけ、羽根のあがきは、紐にて使ふやうに拵へ上げ」、早速試飛行、そのお蔭で、親爺に仕拂ふ駄賃もごまかしてしまつた。第三回、田助は、飛び續けたが、餘つ程來たらうと松ゲ枝にチヨイと留つてみたが、それがまだ待乳山と知れる。こんな飛行のぬるさでは、諸國飛行は迚も覺束ないと、悲觀。それに腹は減つてきた。此のあと、屋臺店の婆さんの團子をさらつてみると、間違へて看板の土の團子。下界では大騷動。田助は便通を催してきたが、マヽよと尻を捲つて、空での心まかせ。鳥類に糞をかけられると、運が直るといふ。通りかゝつた慾深爺が「ハテ何だか、今の鳥はとんだくさい糞だ、つねの鳥より匂ひが諸い／＼。其かはり又運も多からうかしらん

トいひながら、欲どうしさに臭きをこらへ、糞をもふかすに行くのもをかし。」田助、漸く秋葉の杜へ来た。腹はまだ滿ちない。堂の緣の下へ這こんで、鼻高大先生の御出を、今やおそしトまつ所に――以下の描寫、頗る逹者、空想と實感とを綯ひ混ぜて、且つ名文だと思はれる。見らるゝ如く、酒落本臭味の烈しいものである。こゝの件、要文を擧げる。

いづくともなく大風さつと吹來る、「すはや先生はお出ならんトこわ〴〵やうすをうかゞへば御堂の内には、あまたの先生たちのお聲にて何やらんおはなしなさるゝ故、緣の下より、そろり〳〵とはひ出して聞所に、「一人の先生、すこし黄いろなる御こゑにて、なんと夕邊の公が世界はどうだの、「今一人、ほんにあいつア大間違よ。仲の町の樣子とは格別さ、なぞといふのなきゝて「田助おもふやうハテ不思議な事を聞物かな。たゞしは廓中の女郎の天に背きし者ありて、先生がたのお出ありて、おたゞしなされしか。夫にしても、お聲からおはなしの樣子、とかく此方どものやうすなり。何にしろかう隱れて居てははじまらず、思ひ切つてお目見へをしやう、ト椽の下からはひ出してこしをかゞめて(中略)

「田助も少は心おち付、まづ先生方のやうすをながむれば、こはいかに、天狗さまのやうなれども、御形りは皆々當時流行の短羽織に、ふとき紐をむねのあたりで、引つめてむすんだる御すがた故、「田助、まず〳〵心おち付、龔せのなさためて、ハイ別な事でも御座りま

せん、私は淺草觀世音の敎によりまして、羽衣をこしらへまして、此お山までは參りました物の、甚飛にくう御座りますゆゑ、何とぞあなたさまがたのおあはれみ御世話を持まして、モチット早う自由に飛ばれます御傳授を、サ、、、どうぞおさづけ下されませうならばなどゝねがひかくれば惣座中殘らず御笑ひにて、「一人の先生、扨々おめへもまだ正直なもんだの。そんなに苦勞にする理窟にもあたるめへ。どうするもんだ、隨分共自由に飛所の傳授さづけてあげやせうが、すべて凡俗をはなれる迄に、夜三度晝三度の行が御座りやす。それをどうだといふに、先當に山屋あたりの名酒を取よせておきの、ソレなんぞちよつぴらとした物か、又は近所だから武藏やあたりで吞かけの、とゞつまる所が北國の魔界サ。其魔界の大門へ足をいれる所がむづかしゝサ。サアかの七軒のあたりで、むしやうに呼こまれサ、どうもならねへの、大門に入りて事ごとに問ふとやら、ソレ論語よみの一物おや父せへいさゝか洒落やしたアな、マア〱しづかに聞ねへト一ぷくはたきながらサアそこで馴染のよしみのありがた迷わく、むげにもならずで、チヨツト寄ると、かゝアがなんだのかだのといやみをいふから、腰をかける。するト煙草をつけて出すのを吞で居ると、天の岩戸ヂヤアねへが、神どもが直に見付てのがしやせん、むりに押付實サ。仕方なしに坐をきめて見ると、サア段々と聞つたへて、同勢がまんとふへやす

から、そこを切りぬけの大げへにして、歸なんいさトいふと、娘やかゝアやみんなが、モシこの間のも、あれを打すてゝお置はあんまりむごいの、おいたはしいの、アレヂヤアおかれません、罪でござへますの、何のとむしやうにすゝめるから、どうもうるせへけれど、仕方なしにかの高樓へ上りやすのさ、勿論其大勢どももドヤ／＼トおしかけるト、見せで見付るのがありやア廊下であうのがあり、かの傾々がとり／＼に、チヤよくお出なんしたネ、かわいさうにさうしなんしたがようざんす、定て外のお樂しみに義理合もわるうざんせうが、あんなに思つて居なんす物を、せめて此廓へお出なんしたお歸りがけにでも、時々はおよんなんして、おいらんにも私どもにも、うれしがらしておくんなんしなどといふから、それをなんとかかとか、ゑゝ加げんにまじくなつて、座敷へ行つた所が、しらせにやつてから、あんまりあひがあつたによつて、カノ傾のやうすがちつと思はせぶりにふくれの形よ。そんなら又直に新か自分でも迎ひに出さうなもんだと、詮を入れて見た所が、定めし自ぶんは飛立つやうにおもふだらうが、さうしねへでせへ、内中で、わつちが行と、なんだのかだのとなぶられるから、はたをはゞて居るだらうと、こつちが推量してやりさ。サアそれからが大さわぎよ、みんなはむきに色々と愛敬をとりたがつて、いやもう氣のほせがしさうさ。それから程よくしてみんなけへし

て往まつて、鎭所を定めやす。是からが其行をいたといつまぬにあつて思ひ〳〵の名言を
うまくいはうといふやつさ。まづ一寸から聞くと何のざうさもねへやうだが、此修行がた
りやせんと、どうも自由に飛ぶ事が出來やせんのさト口へつばをためて鼻たか〳〵とのおは
なしなり○定めて此先生たちも、下界にては高慢のあまりに此お仲間へさそひ入れられ
たると覺ゆ。

ちよつと挿話といつた形である。

按、然し此の天狗共では、役立たず。

第四回、立去つた通人天狗共の食物のお餘りを、ガツ〳〵食つてゐると、悠々然たる一個の先生が現れる。で此の先生から、早飛行の呪文を授かる（其の呪文、トンビヒイトロロウヤレトヘトヘヨ、スマンギソハカ、といつた、ふざけた物である）で以後、田助、しぜんと隱身の術も會得と見えて、人間どもにその姿を見られぬやうになつた。さて、日本ならぬ女人崇拜の島らしい處へ來たとあるが、其の實は、深川を斥してゐるらしい。傾城を子供衆といふなど然りである。黑き小石やうなものを籠に入れて賣歩くとあるのは、蜆賣であらうか。第五回、田助、すつかりいゝ氣分で、一個の古石場へ來、仙女に御目見え、そのお氣に入つて、閨中に入る、とで終つてゐる。此の古石場は、深川の一區

調たる事、無論である。それを外國めかして書いてゐるのが、洒落である。

右、膝栗毛の摸擬といふよりも、風流志道軒傳(風來。寶暦十三年)和莊兵衛(遊谷子。安永三年)などの亞流といふべきか、がそれらよりは、寧ろ洒落本的だともいひ得られる。とにかく、膝栗毛物の中では、作者の御本人は、自ら膝栗毛の摸擬のやう謂うてゐるが、とは全く受取れぬ程の、異色ある物だと思ふ。(但し、馬琴の「夢想兵衛胡蝶物語」よりは先である。夢想兵衛は、これより三年目の文化六年、その前編を生んでゐる。)(扨、此の羽栗毛、桃陣房太郎藏(藏版)と奥附にある。」

○滑稽有馬紀行　初編三冊

半紙本三冊(但し中本仕立のものは、嘗て見たり。毎丁輪廓は稍、半紙本に比しては小さければ、兩樣に製本可能也。半紙本、初摺なる如し。)三冊とあるが、上中下ではない。上が、二冊に製本せられ、結局卷上卷下の二卷である。表紙は、黄で墨で有馬筆を五本組ませてゐる。題簽は、白、黄摺。凡例の第一に曰ふ「此書は、すべて有馬道中より入湯男女の客、又大湯女小湯女をはじめ、旅舍の奴婢に至るまで其情を穿て新しき洒落をあつむ」とある通りのものである。主人公は、これは、膝栗毛の本筋を追うて、都五條邊りに住居する惠來屋太郎助と、東國方より出たる食客才六との二人である。挿繪は主に白瑛の畫。作者は、大根土成といふが、無論變名であらう。平安の士たることは、自ら標致するによつて知られる。別號、しやれて無着舍主人というたらしい。此の名で、序をものし、又篇中の挿

繪に、此の名で贊(狂歌)をものしてゐる。恐らく土成、無着舍、同人であらう。所々對話の終りに、狂歌を挿める事も、膝栗毛の本格通り。上の前半、京よりの道中、後半、有馬。下は入湯記事である。描寫、相當に方言を混へ、實感多きものであらうと思はれる。合幕（あひまく）男女入込湯之圖などは、下卷にある。版元は、跋にある文暉堂であらう。但し奥附には、京の本屋宗七、同山城屋佐兵衛、江戸大坂屋茂吉、尾州美濃屋伊六、大阪河内屋長兵衛、堺住吉屋彌兵衛の合梓形式である。上卷の見返しの有馬湯女之圖(白瑛畫)の上欄説明を抜いておかう。有馬湯女の懷古資料である。

大湯女　一名かゝ湯女

年四十才斗ゟ五十四五才までかゝ湯女と呼ぶ

小湯女　一名娘湯女

亦名おふじお光の類、其宿の前々ゟ通名を受つぐ、年十二三才より廿二三才まで、但し十二三才の湯女にても眉を取齒にかねをつけ、帶を前にてむすぶ、酒の席に呼ば有馬節をうたふて太皷を打舞ふ、其さま古雅にして興をますなり。

因みに、此本三冊、本文は墨の一版。彩色なし。

○膝栗毛 餘興讀而未來記　初編。二編

東里山人(鼻山人)の著で、玉蘭齋貞秀の畫。東里山人としては、晩年の作である。貞秀は、國貞門

「讀而未來記」解題

下の新進である。板元、錦森堂（森屋治郎兵衛）。中本、合巻風で、各編上下の二冊づゝ。作の動機は、作者の序にある如きものであらう。

（前略）されば浮世に滑稽を拾ひし膝栗毛の彌次郎兵衛北八も鶴亀の齢を貪ること能はず終に黄泉の旅に亦々可笑味を盡せしこと朝比奈が地獄巡の記行に誌せしを獨りともし火のもとに寫しとりて夜をふかしぎの種本となし今年書肆錦森堂の主人へ贈りて販とすること爾也

弘化三丙午初春　　東里山人識（鼎印）

膝栗毛の本格（地方の見聞）からは離れた、非實感も甚しいものであるが、また趣向に窮したら、當然此の冥途の主材も生れねばならぬ筈だ。丁度、一九。二代一九の「續々膝栗毛」を承けて、その拾遺、御兩人の局を結んだものとしては、適當で、生るべくして生れた思ひ付であらう。處が、此の弘化になつて、東里山人によつて爲されるまで、天保年間に、いかな他の多くの滑稽本作者も、此の趣向を思ひ付かなかつたのが、不思議である。

「同」初編梗概

彌次が先へ死んで、北八、焦れて追死の形。冥土で出會はす。で豫定の如く、冥土の膝栗毛と來たのである。茶店へ寄る。そこでは、角の生えた額は美しい茶店娘が給仕してくれる。物は、まくらだんご、百ヶ日牡丹餅などが、名物だといふのである。三途の渡、奪衣婆の住家など。婆に、着物を捧

げてこゝがほんのはだかのせきといふのだ、」と洒落てゐるので、腹掛と股引だけになる、途中出會つた六鬼と、極樂行の賄賂として「ときに親分に一ぺい上げてへもんだが、そこらに酒屋はねへかしなどゝあつて、地獄の内田屋へより、うまい物のありたけと酒を飲みかはす。鬼がふら／＼に醉つて、歸りは、北八が金棒を擔ぎ、浮れた鬼を彌次が介抱する始末。やう／＼鬼の住處へ連れ戻つたが、此樣に醉つては亡者の番人もつとまらぬといふのを、彌次と北が、これになり代り、番人を勤める。かけがへの虎褌を締め、借り物の金棒を突き、角は、鰹節か薩摩芋でごまかす。とんだ茶番だといふのである。と通りかゝつた大風呂敷を背負うた婆さん、「ソラ三途川の板の間稼ぎか、晝鳶」と騒ぐと、婆が婆から念佛を一杯背負つてきたといふ。「年寄には重たくて、いかう困りますから、お前方にわけて上げませう。」婆の言葉に、背負つてきた念佛を三つ割にし、婆の通行を許す。アト、鬼右衛門(例の醉つた鬼)の醒めるのを待つて、念佛を婆から分捕つたとはいはず、鬼に案内されて、閻魔の廳へ行く。ナントいゝ智惠じやアねへかといふのである。色々あつたが、地獄の沙汰も酒次第で、鬼右衛門の執成で、業の秤にかけられ、そのあと、手形を貰つて、一百三十六地獄の見物ときまつた。血の池へ來て此のまゝ捨てゝおくは勿體ないと、猩々緋染上所といふ看板を上げて、五六日逗留、諸處の注文があり、儲ける。次ぎ、くらやみ地獄、北八機轉をきかして、餓鬼道から飯の椀を取り來つて、提灯の代りにする。さうしてこゝで、因果話　うそつき彌次郎兵への看板をかけて興行する。八寒地獄では、

氷餅氷豆腐、氷蒟蒻の製造を思ひたつ。焦熱地獄では、干瓢雷干(かみなりぼし)の類の製造にかゝる。かくて後、焦熱からの思ひ付で、此の大熱を追拂ふため、彌次はかねて醫者心(ごゝろ)もあつたから「もし間違つた所がどうで死んだものなればあぶなげもなし」と大聲になつて、つひには地獄の藪醫者と呼ばれるやうになる。など錢儲けに腐心、慾ばるも、十萬億土といふ極樂の道中のためだと胡麻化す、

以上などが、初編の上下である。

「同」二編梗概

次ぎ、大王の勅命で、五道の冥官より六道輪廻の有様を見すべしとの沙汰で、獄卒共に誘はれて諸處見物。此篇、稍趣向を變へて、因果を說き、それ〴〵の地獄に、娑婆の樣(さま)を却つて述べてゐる。ひつてん地獄は、ひつてん(窮迫)の娑婆の樣を描くといつたもの。さうして終りに、ひつてん地獄も、「やつぱりその憂目を見ることかくの如し」といふのである。ひつてん地獄、餓鬼地獄、畜生道、修羅道、人界、これなどが、凡て人間娑婆の事にして、其樣を御兩人(彌次と北)が見る事にしてゐる。從つて以下、彌次と北との直接の行爲に關係はないのである。二編下は、天道の見物を終つて、一休み。次は、鬼と名のつく物の鬼の說明に託して、鬼やらひ、姑の鬼、正月三日の目黑不動尊愛宕大權現に行はるゝ鬼の神事などの話に續けてゐる。

〔「每年正月三日目黑不動尊愛宕大權現に鬼の神事といふ事あり。その出たち嚴めしき鬼の姿にて錦の陣羽織を着し、小手脛當に身を固め、大組板の上にて生大根を無二無三に

切り散らし、獅子奮迅の勢にて、不動尊へ參詣なし、見物の中若き婦人を見たてゝ抱きつかれる時は、必ずその年身持になると恐をなして東西へはしる、愛宕さんもこれに似たる祭なり」。)(二編下。第十五丁裏の上部)

次ぎ子供の子を捕ろ、などにかけ、次ぎ、六道地獄の朱引(しゆびき)の外なる、のつぺらぼん地獄の說明を鬼から承る。すたこん地獄、虫けら地獄、魔道地獄などの說明がある。但し凡て娑婆界を映したもの、即ち眞人間姿に作爲、描破してゐる。最後の丁は、兩人は何處へやらけし飛んで、「さてこれ迄の地獄の有様は娑婆界にさのみ異ることなし。これ地獄遠きにあらずの本文なり云々。この地獄の苦みを見るにつけても、善根功德の菩提心を起すべし。さすればいかばかりかめでたし〳〵〳〵。」とて、五道冥官そのための口上さやう引といふのである。此の口上によれば、三編四編續刊のやうであるが、恐らく此の二編のまゝであらう。

表紙は、錦繪摺。初編は、上下で續繪をなし、女客と娘の馬子、富士の遠見。二編は、同じく上下の續き、高輪あたりの茶店の景、右は親方と供、左は茶屋女。

「甲州道中膝栗毛」解題

○甲州道中膝栗毛　中本一冊

拜文の「日光道中膝栗毛」(前、第三に說けるもの)と類本。身延參詣と角書がある。芳盛の畫で、合卷の體裁、二十五丁一冊である。が、口序には、膝栗毛街道茶漬とある。「(前略)成田詣大山詣に引續

甲州道中より身延參詣の卷迄編述仕候（中略）古人一九の風味を假、地口秀句の小書等、成丈美味大安賣仕候間（下略）」とある。一九本格の膝栗毛といふよりは、内容體裁、「金草鞋」を摸したらしく見える。毎半丁づゝ宿の名があつて、兩人（彌次と北八）の對話など。繪もそれに伴つてゐる。江戸から、「新宿」「高井戸」など順路を經て身延山に到り、歸宅「住家」に至つて終つてゐるのである。挿繪稚拙、末期赤艶本の如きもの、現にしかる卑陋なる描寫も、チョイ／＼見受ける。此本、安政四丁巳初春發兌と口序にある。無論、如何なる名にあつても、新修日本小說年表などに洩れてゐる所のものである。（尙、此類俗文の作に、此の「甲州」の口序にも謂ふが如く、成田・大山等があらうが、但し未見である。「日光」の類本あること。前に謂へるが如しである。）

――昭和二年八月。

第五、膝栗毛物のいろ／＼（新續）

第五、膝栗毛物のいろ／＼（新續）

「播州廻り膝栗毛」解題

其後の入手本で、前書目には見えたるも、内容に觸れたかつたものゝ解題である。年代順、一、播州廻り膝栗毛。二、名古屋けん物四編之綴足、後編。三、三時行脚。四、花土膝栗毛。五、横濱久里毛。の五である。

一、播州廻り膝栗毛　中本　前篇後篇（各上下計四冊）　彥玉作　藍月畫　文化四年

右は、新修日本小說年表には、八とあり、一名旅枕裏青海、文政七年に再摺といふ。此の八といふのが

分らない。入手本は、此の文政七年再摺のものでもない。恐らくこれ以後の三摺、しかも名古屋求版のものである(名古屋美濃屋伊六版)。この三摺本(カ)は、各冊とも緑色表紙、葵の葉を打出してゐる。題簽は、紅唐紙やうの色で、播州廻り膝栗毛　前篇上　などゝある。前篇上には、文化よつのとし季秋、欄花堂の署名ある序二丁分、次ぎに一枚摺で櫻間の繪と賛。その裏、彥玉の例言やうのもので、それに戯作　浪華脊市漣　彥玉とあり、河豚が、印のやうに描かれてゐる(この例言やうの中に、旅枕裏青海と題する意が書かれてある)この前篇の上、以上より追丁にて、全三十一丁。ところ〴〵麁畫の挿畫がある。前篇の下、全廿七丁半、挿繪ある事同じ。後篇上は、欄花堂の序一、口繪一(その表は、島臺と賛、その裏は、脊屋風の男と、符牒と言葉。この脊屋風の男は、作者の積りかも知れぬ)この口繪を丁數に入れて、本文(第二丁より始まり)とも三十二丁、序一を入れて三十三丁。後篇下は、全三十丁。挿繪ある事、前篇に同じ。筋は、江戸麴町の二西川屋八郎兵衛と相貸家ののんだ屋彥介の兩人が、大坂を出立して、播州廻りを爲すの滑稽で、大坂から尼ヶ崎まで船、それより徒歩で西宮、御影、住吉を經て兵庫に入る。更に明石、加古川、石の寶殿、曾根、高砂、尾上を巡る、凡て到る處惡じやれと之に狂歌をもてこじつけになり、正系膝栗毛(初代一九)の摸擬作たる事、明らかである。

別に記する程の事はないが、唯、後篇上の口繪に就て更に述べておく。此の口繪、表は、島臺が描かれ、それに、仙鏡詠として、左の如くある。

西使例皆之尼亘敷能末都乃四萬駄五十母妹背之難架破古連雜八自萬里、

元來、訓み假名を附してゐないが、今、自分が附した如く訓ませるのであらう。其裏には、肴屋の男を描き、上に、これは振假名を振つて、左の如くある。（原、五行と一字）

逸爾贊詩碁鹿質發玖恩近月作馬似天母逸節賭瓜塚松浦壽揃

これは、下半は、御近付樣にても一切掛賣不仕候であるが、初めは、何か。これは、當時、大坂囃喉場の符牒だといふのである。（以下、飯島花月氏の示教に據る。）「卽ち此の漢字は、一より九を同音の多劃文字を以て示したので、振假名は、右數字に關する符牒である。卽ち大阪囃喉場の通り符牒にて、江戸藏前の通り符牒と共通の語あり。素より他人に解し難きやう作りたる暗號故、語源は詳にし難し。私が人より聞き、又は雜書より抄し置きたる兩種符牒を對照せられば、略ぼ了解せらるべく思ふ。卽ち左に、

大阪囃喉場用

一（ヨツ）、二（デン）｜、三（チカラ）、四（ミス）｜、五（イカリ）｜（お手とも）、六（カイ）｜、七（クマヤ）｜、八（ウタ）｜、九（ケガ）｜、

藏前札差用

一（ソク）｜、二（ブリ）、三（キリ）｜、四（ケリ）、五（ガレン）、六（ロンジ）、七（サイナン）、八（バントウ）、九（キバ）、

｜は、播州廻り所載と一致する語。（ウタトコタは、いづれにか誤あるべし。）」

といふのである。

借、此の「播州廻り」、某氏藏本によれば、半紙本四冊、四冊同一表紙にて、いづれも題簽は「旅枕浦青海」とあり、年代と版元は、前編は、文化四年七月中旬、一九膝栗毛の版元と同樣に、大阪心齋橋唐物町河内屋太助、江戸通油町村田屋治郎兵衛の合版である。(恐らくは、一九膝栗毛の流行を當込んで、此の地方素人作家の作を、快く引受けたのではなからうか。)但し、後編の出版は、それより十七年後の文政七年七月、版元も江戸を除いて、河内屋の外に大阪江戸堀二丁目今津屋辰三郎が加つてゐる。此四冊本、恐らくは、文政七年、初編の再摺と共に同時出版、或はその折の改題(「旅枕浦青海」と)ではなからうかとの事である。

家藏本の三摺本(カ)は、名古屋版(しかも明治摺であらう。)であること前にいうたが、奥附は、後篇下にあつて、左の如くである。

文政七申年七月求板

畫工　像豊月寫(印)

大阪心斎橋筋唐物町

河内屋太助

尾州小牧町
美　濃　屋　伊　六

とあつて、更に、裏表紙裏には、名古屋本町六丁目美濃屋伊六、同十一丁目美濃屋文次郎とある。即ち文政七申年七月求板といふ文字が何の事だか分らない。これは本を古く見せるため、文政七申年七月の元の板木に、その儘に求板の二字だけ、彫り嗣いだものだと思ふ。摺の上でも、その痕跡は殘つてゐる。

「四編之綴足」後編の存在と、その解題

二、名古屋けん物四編之綴足　後編　中本　上下二冊　東都　冬瓜元成作　墨　僊　畫　文化十三年春

これは、新修日本小説年表にも洩れてゐる所のもの、無論あらゆる書目に闕くものである。例の名古屋けん物道中膝栗毛と同じもので、その後編である。即ち此の本、やはり後編が發兌せられてゐる。即ち前後四冊となるのである。普通に見かけるのは、その前編二冊であつたのである。さうして、此本外題に就ても、自分も小説年表も誤つてゐた。即ち今度得た後編二冊の中、その下に題簽が殘つてゐて、それに、名古屋けん物四編之綴足とよめる。さうして、本文の摺刷、用紙の程度、無論坊間折々見うける前編二冊の道中膝栗毛本の比ではない。立派な初摺本である。即ち此外題が初摺本であつて、名古屋けん物道中膝栗毛の名にある上下の二冊本（實は、前編の上下）は、全部、此の後編出來のはるか後前編の版木だけを重用して、（前編だけ人氣を博し、その割後編は、持てなかつたのであらう。で、後編は、再摺しなかつた。）此の部分を増刷し、それに獨立の形をとらし

た、後摺本の外題であると、しかく判定が出來る。即ち普通見うける青表紙ものは再摺又は三摺本であつて、前編後編とも初摺本は、うすい茶のかゝつた表紙、題簽は、一重の太い輪廓付で、濃い茶をかけた地色なのである。

さて此の後編、その上一冊は、序一半、墨僊醉畫賛の梅と奴凧と蛤が半。本文三十二、計三十四丁、挿繪ところ〴〵にあり。下一冊は、廿五とあれど、七ノ八一丁あれば、誠は廿四丁。その奥附は、

文化十三子の春出板

江戸田所町　霍屋金助
大坂心齋橋　秋田屋太右衞門
尾張本町通　永樂屋東四郎
同　松屋善兵衞
同小牧町　美濃屋伊六

とあり、此の美濃屋が、靜觀堂であつて、これが誠の板元である。筋は、當時の名古屋の本町筋を北へ、山王權現あたりの滑稽から、東本願寺御懸所雜沓など(上卷)、七ツ寺から大須、同附近の清壽院の芝居など(下卷)で終つてゐる。作は左程でもないが、前編と同じく、當時の地方色を出してゐる

所が、唯一のとりえである。左に、後編上の自序を載せておく。

自序

忍冬酒のからき世を糸瓜とも。思はず閑居冬瓜の元成。ことしも静観堂の主が需に應じ後篇の献立を萬屋ほど買出さむと。夕に八七ッ寺懸所の花に酔倒れ。旦には大須観音の澁茶に二日酔をさまし。もとより宮重大根のふとつ腹眞桑瓜の厚皮なれバ。尾州味噌の赤恥を。行先々で大野蛎。彼彌次北八におとらぬ津島麩のぬらくら徒。鼻の下は大高菜よりながく。智慧は岐阜の若鮎よりも短し。さるによつて知多米の一ッ生涯首をひねつても。海鼠腸のふつぼに入る趣向もなけれど。乘かゝつたる桑名ぶね。曳もどしての滑稽なれバ。半途ニ廃するもほいなしと。犬山昆蒻のふるえし筆に。予が棚おろしをありのまゝにしるす而已

文化十三子の春　　荏土種　冬花元成（印）

三、滑稽三時行脚　中本　上下二册　山路庵棋目作　素清齋篤樂畫　天保四年秋

大和郡山の誹人の梅日と霞石との二人が、郡山から奈良附近の社寺行脚の記文、それを小説體にも

のしたもの。地方誹人の戯作としては、序など虎澤山で、且つ挿繪なども土産を中心に描いてよし。特に、作者自ら、本名を以て作中に入れてゐる所も風變りである。奥附には、天保四巳歳初秋、和陽 冠山 山路蒿棣月戯述、浪花 桂窓杜枝韓校、和陽 素清齋爲樂畫工、書房浪花本町 西澤鳳堂上梓 とある。上は、題と序計六、本文廿五。下は、廿七丁である。

「荏土膝栗毛」解題

四、荏土膝栗毛　中本　一冊　東海堂大河作　一松齋芳宗畫　安政五年晩秋序（同六年春版カ）

合卷風、上下十丁づゝのもの。が作者の積りでは、第一編第二編で、あと第三ぺんに讓る意味が書かれてゐる。彌次と北との、江戸に於ける滑稽で、トヾ二人が、借金取に責めたてられて、分散同樣になつて、大和巡りに逃げ出すことになつてゐる。まだ岳亭春信などの燒直し物よりは、此方がましだ。（表紙は、錦繪表紙、兩人、日本橋の高札の前、遠見に富士である。）序は、上の一表にあつて、鶴亭秀賀誌、第一行目下に小さく、鈍亭魯文校訂とあり、下の第二十丁目裏にも、魯文校合の意味がある。

尙、此本、叙によれば「此の腮の鏁と題する稗史は」とある、即ち別名、腮の鏁か（尙、此本、明治に至つての、再摺改題「東京膝栗毛」といふのがある。表紙外題以外、同版木本也。）

「横濱久里毛」解題

五、彌次北八横濱久里毛　中本上下二册　岳亭春信作　芳幾畫　文久元年版

中十改の檢印あれば、則ち萬延元年十月の改、版行は翌文久元年の一月であらう。合卷風、栗毛彌次馬と同體裁、但し内容は、全く二であつて、これは、横濱に於ける兩人の滑稽で、「彌次馬」が元祖

一九の筋を追へると反對に、これは、殆ど創作に近いのである。自序に、「前髪とれた青僕、滑稽物の初舞臺、一九の紋を假衣裳、」などゝある。表紙は、錦繪摺で、鏡面の洋裝金髪美人、下に日本の婦女。口繪二面、藍摺やうに出來て、攣來(若龜)樓の遊女手鞠と喜太八との姿などがある。上卷十五丁。下卷十五丁。版元は、江戸人形町　品川屋久助である。上卷は、「續々膝栗毛」の筋を眞似たか、妙貞といふ尼が、髮を被つて、前垂を頭に冠つて北八の嫁に來る。婚禮の翌朝、此の妙貞を留守居に頼んで、兩人横濱見物に出かける(上卷)。横濱での滑稽(下卷)であるが、此の下は、格別繪組がいゝ。横濱遊廓、店先の體があつて　それには、格子先に、南京や外人が描かれ、外人の一人は、横濱と記した手拭を、帽子の上から頬冠つてゐるなど。讀ませるための、彌次と女郎との悪ふざけなどがあるが、とにかく横濱の文久頃の或る、描いながらも寫生面として一顧の値はあらう。此本、新修日本小説年表、其他に存在を缺くものである。(たゞ此の上下、上は柱に、旅日記、下は柱に、彌次ドとある。)

——以上、昭和三年三月十一日夜補。

左の一文、本稿の第一、「膝栗毛物のいろ〳〵」發表當時、飯島花月氏より寄せられたもの。「一九記行」は、僞作なりとの一說もあるが、飯島氏紹介のその一九自序を見ると、さうでもなささうである。名古屋滯在中の旅費につまつてといふのは、尤もらしい　且つ最も信じていゝのは、津島土産(増井山人作)にも觸れ、現に年代、己が序詞を加へたる事、艸稿閲覧の機會ありし事、凡て津島土産と照應して

その誠なる事が肯づける。(さうして此の「一九記行」の版元の、一九に貸金のあつた書肆とは、「津島土産」を出した名古屋本町十丁目の松屋であつたらう。) 即ち左に、飯島氏の記文を複載して、「一九紀行」の解題がはりとする。特にその末節の、梅亭金鵞に關する數項の逸話は、また同氏によりて始めて爲される生きた資料である。

一九の「秋葉山鳳來寺一九の記行」其他につき

飯島花月

(前略)膝栗毛に關する御記述、特に興味を覺え申候。其内愚見一二。

秋葉山鳳來寺一九の記行　上下二册

之は飜刻か又は原版の新摺かは知らず、明治二十年頃、東京日本橋書林わんや伊兵衛より相求め、所藏す。此店は、明治十五年頃、江戸軟派本いろ／＼飜刻出版致候故、コレモ其中の一とすれば、飜刻せしものと思はれ候。繪は一九自筆で、其序文によれば名古屋には緣故深き著述なるを知る。依て煩を厭はず、序の全文寫しとり入貴覽候。

自序(關防印、陰文兼五味三字)

風月の才ありて。松風蘿月を翫び。心の儘に杖ひきたらんは。さこそ樂しかるべきに。予

はずも無く。財も無く。元より無風流にして。何ひとつ覺えたる事は無ければ。古歌に名だゝる名所舊跡など。婆娑で見し與次郎程にも思はず。旅中日にとむるは。唯飯盛おじやれの。髮の毛の縮れたるこそ好ましけれ。たま〳〵女馬の乘心地よきに。氣を惡するも。又おかしかりき。頃は文月の末つかた。烏が啼。あづま街道に杖をはせて。山烏いゝいゝいゝの尾張の名護屋に。年頃親しき書肆を訪ねて。心無くも十日餘りを喰潰したれば。其雜用の代にとて。秋葉山鳳來寺の記行を編みよと。書肆頻に攻もとむ。そこで予が思ふやう。五右衛門は生熟の時一首をよみ。忠度は腕のあるうち。書置れたればこそ。其歌千載集に撰ばれたり。予も置土産に筆を揮つて。喰にげの譏りを免がれんと。行がけの駄賃。たつ鳥跡を濁さずとは啌の皮。赤耻をかき殘してすこしはお茶を濁すにあたれり。嗚呼旅はうきものにあらずや。かゝる義理とふどしの長口上を。序の言葉に結びぬ。

文化亥晩秋　　東都　十返舍一九識

（例の熊手の花押と、「一月二十九日醉」の陽文の印あり。）

文化の亥は其十二年、名古屋の書肆は永樂屋にても可有之歟、御取調下され度候。又秋葉山と鳳來寺との口繪あつて、其次の附言の末に、左の識語がある。

此書にひとしき尾陽津島みやげといへるは、石橋庵増井なる人の著述なり。既に刻書行はれて、ことし其次編にいたる、予草稿を閲せしに、俳諧滑稽倶に妙を盡せり、予序詞を加へて近刻す、高覽の君子宜しく評し賜はらん事を願ふのみ、（トシテ「貞一」の款識あり）

書中の挿繪はみな一九自筆と信ぜられる、但附錄如く原版の書肆不明なり、書名上編の初には秋葉山鳳來寺一九記行、末尾には秋葉山鳳來寺十返舍自身記行上冊終。又下編の口には、秋葉山參詣一九之記行、末には秋葉山參詣一九之記行下卷終と、斯く不統一なるは、飜刻者が賣行を謀つて私しに付けた名と思はれる。

梅亭金鵞の逸話

尚、梅亭金鵞の膝磨毛の類本は幾通り出たか、私は三種も四種も見た記憶あり。妻戀淫士の假名垣魯文にも類著ありしと覺えをり候。梅亭は明治になつても晩年まで、切付表紙の猥書を澤山出してをり、明治二十年頃かと覺ゆ、信州漫遊の途次私の家へ立寄つた時の話に、猥書は書くに骨が折れず、同じ樣な事を幾度でも繰返し〳〵書いていけば宜いので、其上原稿料は割合能く出して吳れるから、若い時分から何時でも錢が無くなれば書いたものですと云つた。膝磨毛の話も出たが、今は委しい記憶がない。此老人、天窓はテラ〳〵光つて、如何にも幕臣らしい偉大な軀幹であつたが、談話は大口を遠慮なく放言して、頗る快活な面白い人であつた。世間に寫眞の存否を知らぬが、團々珍聞第五十二號に團々社中一同の漫畫式肖像が出て居る。洋畫家本多錦吉郎筆の亞鉛版で、其內、迂流蕩人（金鵞の本名は瓜生政和）とあるのがそれで、いかにも能く似て居る。幕末小說家滑稽本の作者、殊には猥本の著者として、明

治に殘存した作者中、鉻文は寫眞が存して居るが、金鶴の寫眞は、恐らくは無いであらう。さすれば、此團珍の漫畫は彼の風貌を偲ぶべき唯一の資料と考へるのである。梅亭は後に化三とも號した。此漫畫中に化三とあるは、別の社員で、梅亭が此名を稱へたのは、其後の事である。（大正十四年九月十四日）

久頓補記。飯島氏の此の記述後同氏より追補として、金鶴の寫眞が、文藝俱樂部の第十號あたりに載つてゐることを云ひ越された。因みに飯島氏は、金鶴當時よりの、古い團珍の寄書家で情歌の作家で、現在は上田の銀行頭取で、しかも當今唯一の柳樽學者で、我々軟派學徒の宗として崇むるに足ることは、贅するまでもなからう。

（膝栗毛物補遺）其後の分を、こゝに書目だけ擧げておく。滑稽本の「天王寺まゐり」三冊（文化十年版・一九閲、作者は大坂の登天館生洲といふ名。大坂版で、跋は、彌次喜多の名も其儘、即ち膝栗毛の依與である。噺本の「驛路馬子唄」前後編四冊（文化十年と十一年版、二代春町即ち二代歌麿の自畫作。人物名は變へてゐるが、膝栗毛の各宿を小噺にしたもの、着想も踏襲。）なほ、「膝栗毛面白草紙」は、三篇まで刊行されてゐる。「滑稽道中雲助噺」は、三卷、大坂版、鐘成の自畫作で、半紙本。芝翫土産と角書のある通り、芝翫が江戸から大坂へ歸府までの道中で、五十三次を追ひ、一種の芝翫贔屓物である。これは、原本を見るに及んで、一寸補記。

——昭和三年七月廿九日。

「金草鞋」の編次に就て

「金草鞋」の體裁

寧ろ猥小咄集

初代一九作の方言修行金草鞋は、合卷の形式で、内容は、膝栗毛式を行つたもの。但し大凡そ一宿づゝに小咄やうのものが附いてをり、そのまた小咄が、折々伏字なくては發表不能のやうな、ひどい物を含んでゐる、寧ろ猥小咄集ともいふべきもの。合卷の形式であるから、毎編上下に錦繪表紙があり、本文は毎丁ヒラキの挿繪あり、文字は凡て假名である。以上の事などは、寧ろ平凡化せられた軟派常識である。が、最近、私は、此の「金草鞋」ほど、厄介な本は無いと思ひ至るに及んだ。諸書目の示す所、其の編次區々である事にである。

「江戸時代戲曲小說通志」や、「慶長以來小說家目錄」では、同じく此本十八としてゐる。即ち十八編を止りと見てゐるらしい。此の兩つの錯誤は、中根氏の「小說家目錄」が元、「戲曲小說通志」は、その誤謬を其儘襲いでゐるものと思はれる。

此の「金草鞋」、續帝國文庫の、「一九全集」並に「續一九全集」の二冊に亘つて、登載せられてゐる。それには、初編より二十四編まである。(その中の第七と第二十とは全く同一のもの。即ち重出。この錯誤は、後說。)即ち「一九」に、初より第十三編まで、「續一九」に、第十四編より第二十四編までをであ

る。帝文本は、即ち二十四編本に據つたらしい。(内、第七編欠。この事、後說。)で二十四編ものかと思ふと、今度新しく出た朝倉氏の「新修日本小說年表」には、その三二〇頁(合巻の部)に、二十五編までを列擧し、その編次も明示せられてゐる。さて二十四編ものか、二十五編ものか。それに、帝文本と朝倉氏「年表」本とは、編次の順序も、三分一ばかりは、相異してゐる。

それに引合に出させるものに、自家藏本の「金草鞋」全二十四編がある。これは、全部再摺本、半紙に製本せられてゐる。元の板木を其儘に使用したものである事は、一見して肯づける。唯、此の再摺に至つて、所々編次の名を、(即ち數字を)彫り更へてゐるらしい痕跡はある。若し果して、此の「金草鞋」が二十五編ものであるなれば、家藏再摺本は、一編欠である筈であるが、或る一編(第七編)を除いては、大凡そ帝文本と順序を同じうしてゐるのである。

三本の異同

事は、年表の指示と、「帝文」飜刻本と、家藏再摺本と、この三種であるが、今、先づ其の異同を左に記してみよう。各編に亘りて、初より順次に吟味することにする。

(以下、年は、年表。帝は帝文本、家は家藏本の意とする。)

初編

金　草　鞋　初編

(年)六卷(三十丁)月麿畫。(帝)江戸見物。(家)六卷(三十丁)鼻毛延高像より增上寺に至る。柱

は、五丁ゝ異り、即ち一より五まで、ふとこ見物上。六より十、同中。十一より十五、同下。十六より二十、同後上。二十一より二十五まで、同後中。アト同後下といつた風に。即ち此によれば、江戸見物の前後二編三十丁、六卷である。月麿畫。然るに可笑しい事は、年表には、「初二編六冊宛江戸見物（月麿畫）」とある、是である。これによると、貳編も、江戸見物で、六冊（三十丁）物であるやうであるが。誤記か否かは、自分の斷定の限ではないが。（或は、是れ、初編だけに、江戸見物前後と分れてゐることの誤解ではなからうか。家藏再摺本によりて。）

二編

金の草鞋　第二編

（年）前述の如く、六冊、江戸見物なりといふ。不詳。○（帝）東海道。○この帝文本は、實は、第三編かと思ふ。（家）では、大坂京の卷を第二編にしたい。否、帝文本第二編（東海道）第三編（大坂京）の序を見ても分る通り、稿出來の順序からは、明かに、東海道は、大坂京のアトである。現に帝文本第二編東海道の序にも、「東都より伊勢參宮して、京師に至るまでを著したる序なれば…………」とある如くにである。（家）の大坂京本は、あいのやま内宮、（大坂）道頓堀より、（京）内裏御外曲輪に至る三十丁（六卷）―但しこれに限り、丁數は前編よりの追丁である。―月麿畫。柱には、三十一より三十五、大坂見物上、三十六より四十まで同中、四十一より四十五まで同下。その終りに、「大坂の名所

ことくくせずあらましにして、この次篇に京都見物の事を委くあらはす、仍全部四巻不殘出來」一とあつて、月麿畫、十返舍一九戲作と、こゝで篇が分つものゝ如くある。四十六より五十、京見物上、五十一より五十五まで、同中、五十六より六十まで同下、六十丁とあり、其裏にも、月麿畫、十返舍一九編とあり。「三ケ津見物の滑稽東都六冊(五丁一冊と見て、即ち三十丁の意。久。)京大坂とも三冊(とも三冊なれば計六冊、即ち三十丁の意。久。)不殘出來有之候、猶東海道之記引續き差出申候」ともある。さうして、此の再摺本、埋木のあとか否かは不詳であるが、大坂上のハジメ(即ち三十一丁の表)には、金草鞋三編とあるにはある。

金　草　鞋　第三編

(年)六冊大坂京見物(月麿畫)○(帝)大坂京の卷。○(家)東海道の三十丁を以てこれに宛つべきか。この東海道も初編江戸見物と同じく、文化癸酉(十年)の出版である。がこゝに、疑へて來るのは、大坂京の卷(帝文は第三編)に、その序に左の如くある事である。

東都行脚の趣は前編に記すが如く、今又此の伊勢參宮より大坂見物を爰に記して、東海道驛々名所見物の滑稽は追て歸路に委しくすべし。猶四編に至りては、京洛中洛外のことを記す。帖數わづかの冊子なれば…………。

といふ事である。即ちこれによると、自分の思ひなしか、金草鞋は、元來は、十八編又は二十四（或は二十五）と書きつぐ計畫とでなく、即ち初摺は、丁數も後の平均三十丁一編よりは少く、寧ろその半數、即ち後の初編と名づくる江戸見物が、實は初と二編で、即ち江戸見物（十五丁）が初編、同後（十五丁）が貳編、後の第二編（又は第三編）が二つに分れて、大坂見物の十五丁分が、三編、終り京が四編といふのであつたらうか。即ち、その理由は、この二個の編が、六十丁と丁數の續いてゐる事からで、即ちまだ純粹の合卷形式を追うて、六十丁（即ち十二卷）が、十五丁づゝ四編に分れてゐたのかと思ふ。それが、後、書き足すやうになつて、この本來の十五丁一編の分け方が、滅茶々々になつたものと思ふ。即ち、私は、此の東海道を、補足の部分であると見做して、これ以後（この東海道の編から）三十丁一編の形式が成立つたものと思ふ。然し、この（家）本の東海道の終りに（第三十丁裏）「……京、大坂を一見したれより歸りは木曾道中のおもむきつゞゐて出版いたし候」とあるから、何ともいへないが。これは、著者版元のさかしらで、内容の都合上、江戸と大阪京の間へ強ひて入れようとしたためである。が出來は、序の如く、その後（大坂京見物の後）と思はれるのである。（柱は、五丁づゝ。初めの十五丁が、東海道の上中下、後の十五丁が　同後の上中下である。）

金　草　鞋　第四編

四編

(甲)此の四編に二種ある。年表には、四編六冊(三十丁の意)西国道中(美丸画)とある。丁度これに匹敵するものは、(家)本の、西海道(杜に西かいとあり)の三十丁、よし信画である。緒言にも、「去年……既に伊勢参宮より京大坂に至りたるに、この両子(主人公の鼻毛延高と千久良坊を斥す。久)……逆もの事にいざや讃州の金毘羅山へ参詣し、序なれば藝州の宮島……」といふによりて、この本、前の大坂京を承け、翌年文化十一年の出版だと思はれるのである。

(この編は、家本によると、その巻尾第三十丁裏には、例の雪麿の「卑史通」の訛謬を罵つた一九の文が載つてゐる所のものである。尚、この西海の三十丁分は、全文、帝文本に缺けてゐる。どうして缺けたか、恐らく編次の錯雑から来た誤りであつたらう。其の上、御叮嚀にも、第七と第十の重複同一といつた不體裁を氣づかずに行つてゐるのである。)

(乙)は、帝文本の第四編で、これは木曾路である。これが、年表では第五編になつてゐる。が、帝文本で、これを第四編と、誤つたも無理はない。即ち此の序に、

「……東都より伊勢参宮の記つゞめて京大坂見物の紀行、續に編集して竝びに行れたり。今亦其歸路を木曾街道にあてて綴よと書肆の需るを固辭難くて此卷を著す。……干時文化癸酉初春長閑なるあした「通油町草橋上」十返舎一九戯著」

とあるによつてである。(家)本も、その初丁に、金草鞋四編木曾路巻とはあるが、この四だけいやに

五編

太く、埋木の迹が著しいのである。即ちこれは本來の（初摺では）第四編ではなかつたものかと思ふ、或は、これは、本來年表のいふ通り第五編で、即ち前上—江戸が初と二編、大坂が三編、京が四編、その次ぎこの木曾が第五編、その間へ、後の書足しの東海道と西海とを入れたが、西海は、例の事隣の事に觸れた記事があつてか、又は何らの事情で、絶版、で、江戸の二編分を改めて一編の初、大坂京を合して第二、東海道を第三、又は東海道を第二、大坂京を第三とし、この木曾を第四と埋木して、編次を整へたのではなからうか。

即ち、東海道と西海との共に三十丁づゝ、即ち二編分は、編籍のはつきりせぬものなのである。（がとにかく、家本西海道によると、その卷尾に「これよりきこくの道すじこのつぎ五へんは木そかい道のみちのきつゞいてうり出し申候云々ともある。即ちこれだけ見てゐれば、四編は、無論西海道といふ事になる。）

金草鞋　第五編

（年）は、木曾路である事既述の如し。○帝文本では、「鹿島より筑波山、日光の御山へも參詣せんとて、」……本所扇橋から奥州街道郡山、福原までである。○（家）本には、これと同様のものはある。その初丁表に五編とは明かにある。が何ともいへないと思ふ。記事の順序からいへば、大坂—京—

木曾路の次である。即ち問題は簡單である。前の第四編の木曾が、年表のいふ如く五編(初版の)であるなれば、これはその次ギ、無論第六編であらねばならぬ。とにかく疑ひだ。この分、三十丁、柱は、奥州とある、

金　草　鞋　第六編

(年)奥州路之卷、とある事は、前述。一編づゝ繰り下がる意味で、尤もだ。〇(帝)は、仙臺道で、檜皮より鹽竈七森(なゝつもり)あたりである。〇(家)本にも、これはある、即ち帝文本と同様のものが、且つその序(初丁の表)には、

……書肆の需るに任せ、木曾道中のおもむきを四編とし、それより鹿島香取生栖の三社詣、併に筑波山日光の御山に至るまでを五編とし、其余奥街道仙臺にいたる迄六編となし、都合四五六の卷を當年出版し畢んぬ……

一五編は奥海道編はら驛に終る、其次六編は檜皮宿より仙臺の國府町にいたる……(下略)

とあるに仍てである。然しこれは、自分のいうた如く、この序は凡て、新たに編を編み直した以後のもので、従つて、初摺本よりも一編づゝ編次を繰上げたものかとも思へるのである(が斷言は出來ない。)此(家)本、三十丁、國丸の畫である。柱には、仙だいとある。

七編
帝文本の重出

金草鞋　第七編

（年）の七編、鹿島生栖鏡淺日光（國丸畫）とあるのは、これは年表の誤りであらう。即ちこれは、（年）第六編の奥州路と同じ物と思ふ。〇（帝）では、この第七編は、どういふものか、前にも度々いうた通り、第二十編（翻刻上）の羽黒山道と同様、同文である。即ち諸君は、「一九」の第七編と、「續一九」の第二十編とを對比せられたら、一切合切同一に氣がつかれよう。異るのは、「一九」で遠慮なかつた小唄の猥的が、「續一九」で略けてある位である。これは、如何なる間違ひか、これまで誰人も氣づかずにゐたのもをかしい。〇（家）本では、その第七編に當るものを直接には見かけぬが、前掲、仙臺道の三十丁分が、或は本來、此の第七編かと思ふ。即ち（家）本の仙臺道の最尾に、豫告めいて、

方言執行　金のわらじ
右は、此次より南部津輕、ならびに出羽秋田庄内、ゆとの山月山さんけい（云々）

とある。それが（家）本第八編と思はれる會津越後道の序に、

「凡て……七へんには……これより津輕南部のかた行脚のおもむき跋文にあれども、
今年は仙臺より會津に出、それより越後路一見のおもむきをあらはすものなり（云々）

とあるによつても、證據だてられる。即ち初摺にあつては、この仙臺道が第七編であつたらう。そ

れが、再摺で第六編らしくなつたので、第七編が行衛不明となり、うつかり帝文本の如きへ、ヽ、重複をやつたのであらう。

八編

金の草鞋　第八編

(年)は、八九編九冊(四十五丁の意)西國順禮(國直畫)とあつて、西國順禮一つを二編なみに見てゐる。これは、誤謬とも何ともいひえないが、妥協をつけると、これが、純初摺で、或は、次掲(帝)(家)の會津越後道が、後に嗣足されたが、その以前は、この(年)のいふ通りであつたのかも知れないといふ事になる。(帝)は、會津越後道である。(家)本にも、この帝と同様なのは、あつて、即ち會津若松から越後高田まで、三十丁。柱には、凡て越後とあるのである。國丸畫である。

九編

金の草鞋　第九編

(年表)の、八九編を西國順禮と爲すこと、前述の如し。(帝)では、西國順禮道である。即ち(家)本の四十五丁分である。即ち(帝)は、(年)の二篇分を一篇に見てゐるのである。(家)の此分、(年)のいふ通り四十五丁、柱は、西國一より同九に至る、即ち五丁づゝ。最尾(第四十五丁裏)に、金草鞋九編大尾とある。國直畫である。

十編以下廿三編迄三本同じ

第十編以下第二十三編までは、年表と帝文本と家藏本と、凡て三樣一致である。編次然り。唯、年表には、挿繪畫家の名に於て、家藏本と對照するに二三の誤がある。今それを訂し乍ら、左に一括して示さう（主に、家藏本内容に據る。）

第十編、坂東道。三十丁。（よし丸畫）〇第十一編、秩父道。三十丁。（國丸畫）〇第十二編、身延道。三十丁。月麿畫）第十三編、善光寺道。三十丁。國丸畫（コレヲ年表ニハ、月麿トイヘリ。）〇第十四編、四國遍路道。四十五丁（九卷）、（月麿畫）〇第十五編、東都八十八ケ所道。三十丁。（美丸畫）〇第十六編、二十四輩道。三十丁。（美丸畫）〇第十七編、房總紀行。三十丁。（國貞畫。コノ畫家、年表ハ、國直ト誤植セリ。）〇第十八編、越中立山道。三十丁。（國安畫）〇第十九編、加賀白山道。三十丁。（重政畫）〇第二十編、出羽羽黑道。三十丁。（國安畫）〇第二十一編、南部道。三十丁。（國信畫）〇第二十二編、伊豆紀行。三十丁。（畫家不詳、但し年表は、國信畫とせり。尙、此の編卷尾、一九著署名の左に、小さく、淨書金水とあり。是れ、或は、例の後の人情本作家松亭金水の、初期例の筆耕を爲したその一例ではなからうか。）〇第二十三編、箱根江ノ島廻。四十丁（八卷）。（美政畫。年表ニハ、國安畫ト誤リヲレリ。）

二十四編

第二十四編以下が厄介である。即ち帝文本と家藏本とは一致で、第二十四編で完尾を告げてゐる。しかもそれは、共に西陸道、長崎より大坂着までの四十五丁（九卷）分、二代重政畫である。然るに、

二十四編物か

年表の記述には、

〇二十四編、讃州金毘羅(美丸畫)〇二十五編長崎宮島(重政畫)

とある。この二十五編、長崎宮島といふのが、帝・家の第二十四編といふのに近い。(但し、家藏本に據れば、長崎より廣島までが丁度三十丁(六卷)分である。)愚測を廻すに、年表の第二十四編といふのは、金毘羅の内容から考へて、これは、第四編(年表でいふもの。この編帝文には缺く)の所謂六冊西國道中—大坂より金毘羅を經て長崎に至る—ものと、同一ではなからうか。即ち年表自身重出、の錯誤ではなからうか。とにかく性質上、此の第四編の大坂—金毘羅—長崎は、家・帝本の第二十四編(年表の第二十五編と同じ物ならん)の長崎—大坂と、併せて前後を爲すものであらうと思ふ。

推定の順序

即ち、此の年表の二十五編は、今の處、信が措けない。(金毘羅が二度出て來るのもをかしい。)で自分としては、矢張り此の「金草鞋」は、二十四編かと思ふ。さうして、以上、列擧し來つた所の如く、此の作、初め二三編であつたのが、次から次へ書き足し、その間、既成編の間へ無理に補足し割込ませたものもあるし、從つて、初摺自身(再摺に至りても多少の修正)、同じ編次の重出、前後、かうした錯雜狀態を來したものと思ふ。今、各編の序跋文は、其他によりて、家本二十四編を順序だてゝ見よう。

〇初編、江戸見物(六卷)〇二編、東海道(同)(此編、アトよりの書足しならん。)〇三編、大坂京見物(六卷)〇四編、西海道(同)—この編帝文本缺く。〇五編、木曾路(同)—但し家本は、四編と埋木の

あとあり。○六編、奥州路(同)—但し家本、五編とあり。○七編、仙臺道(同)—但し家本、序跋には、六編の如し。○八編、會津越後道(六卷)○九編、西國順禮道(九卷)

十編以後二十三編までは、既述。

○二十四編、西陸道(九卷)〔此分、西海道ならず。家藏本によると、作者は、自分の西編豫定のまの柱は、西かい。これは、西りくとあつて、海と陸とを區別してゐる。〕

以上であらうと思ふ。

編次と其年代

尙、發行年代に就て、言及したい。(以下の、編數は、家本に與へた編次であると思うて頂きたい。)

その編次と、序跋其他によりての年代とを擧げる。

○初、二編は、文化十癸酉年。○三編、不詳、恐らくは、文化十年か。○四編、文化十一年か。○五編、文化癸酉初春長閑なるあしたと序にある。新群書「書目」には、文化十一年版とある。○六編、新群書「書目」同じ。○七編、不詳。序には「去年東都及び花洛浪華伊勢東海道の紀行を著し」とあり。○八編、文化十二年カ。(序に、去る癸酉甲戌春打續きて此金草鞋數編を梓行しとあり。)○九編、不詳。○十編、不詳。(序には、單に、文化とあり。書目は、文化三年と云ふ。)○十一編、同。(同、同)○十二編、不詳(或は、文政元年か。此の十二編の序に、「善光寺參詣それより……を十三編とし、來陽卯のはるの新板」とあるによる。)○十三編、文政三年。(序に、文政辰孟月とある即ち十二編の豫定より一年遲れである。)○十四編、不詳。○十五編、文政五年。(同年孟春と序あり。)○十

六編、文政六年(同未初はると序)○十七編、文政十年カ(同跋に、豫告ありて、來子春出來發行とあるから。)○十八編、文政十一年。(序にあり。又「書目」も一致。)○十九編、文政十二年(序にあり)○二十編、天保元年、(序に寅のとし初春とある。)○二十一編、不詳。○二十二編、天保三年。(序に同辰春とある。或は、天保二年のものが、三に延びたものか。此編尾の跋に次編を辰の春發行とせり。)○二十三編、天保四年(癸巳孟春出版と序にある。然るに、此編跋には、ことし廿四へんに至る、なにとぞ相かはらず云々の詞がある。)○二十四編、不詳。〔天保四年カ〕。(此編に至り、始めて、編尾に、故人十返舍一九遺稿と明らかにある。序にも十返舍一九遺稿とある。)

以上であるが、諸君も疑はれたやうに二十三編以下には、或は、糸井の二代一九の制作ではなからうかといふ事である。又、第二十四編に遺稿と明らかにしてもある、で全部或は初代かとも思ふ。或は、初代生存時の、末の方は代作かとも思はれて來る。が、とにかく公平に謂ふと、二十三編以下は、怪しい臭がしてゐると思ふ。

第四編の内容

次に、帝文本で、どうした譯か飜刻を脱した(その代り御叮嚀にも第七と第二十とは重出)自分のいふ第四編、西海道の略筋を述べておかう。

序。從大阪西國海路。(ヒラキ、其の里程表などがある。)攝津―播磨―室津―讃州丸龜―金毘羅山―劍五山彌谷寺―備後ふく山―備後鞆小松寺松―鞆之裏町(遊女屋店先)―阿伏兎海潮山―安藝―嚴嶋

明神ー周防ー長門ー宇佐八幡宮ー山國川急流ー筑前ー肥前ー崎陽園山町。

の順序で、三十丁、歌川よし虎畫である。

〔補記〕ー右の金草鞋は、第二十一編だけは、別に純初摺一本を有してゐるが、それを見ると、見返しに南部路記象潟と大きくある。（小說年表の南部路象潟は誤り）凡てが、此體裁（合卷形式の初摺）であつたらう。

——昭和二年一月。

十返舍一九の旅程

初代一九の「膝栗毛」「續膝栗毛」「金草鞋」の類の、彼の創作と彼の實際に各地遊歴した其の迹とを、對照して見るも面白からう。時々、彼は、その作中に於て、土地不案内を自白してゐる。中には、其の折の種本を讀者に明してゐるといつた、案外正直な所もある。今、創作に取扱はれた各地方を類別して、其地遍歴の體驗の有無を、確かめよう。土地不案内を作中に自白してゐる地方は、最後に一括して示すことにする。

（一）一九が遊歴の體驗ありし地方

（1）東海道方面。

これは、彼の遊歴體驗としては、寧ろ數回の往返、寧ろ平凡化したものであつたらう。府中に生れて、寛政の初めには、大阪に在つた彼の前期は、無論此方面には、明るかつたらう。でなくとも、此の方面だけは當時一般の常識であつた筈である。享和四年序のある「膝栗毛三編」にも「多年東海道を遍歴し」とある。

伊勢、京阪

（2）伊勢、京阪。

これも若い頃の彼の數度の體驗があつたであらうし、即ち（1）の延長として、尚、東都に於て、「膝栗毛」其他で文名確保の文化以後にあつても、旅行を重ねたらしい。現に、「膝栗毛五編」に、「予神無月廿日あまり六日の朝、東海道云々、伊勢路云々、歸着は雪見月の五日」云々の附言がある。即ち此の旅は、此の五編發兌（文化三丙寅の年）の前年、即ち文化二年冬に行はれたものである。

金毘羅方面

（3）金毘羅方面。

これは、若年の頃の體驗であつたやうである。恐らく。大阪に滯在してゐた寛政初め頃の事であらうか「續膝栗毛初編」序に、「予若年の頃、攝陽浪速にありし時、一とせ高知に所用ありて下りし船の序に、象頭山に參詣し、善通寺彌谷を遊歷したりしが、秀異勝景の地多くして、其感情今に想像するに堪へず。…………予彼地理行程のあらましは知得したれど、土人の通言凡ての風俗に疎ければと固辭すれども、再三のせめを防ぎがたくて、竟に此の二卷を編出せり。」云々とある、即ち此の續の初編が、金毘羅參詣である。

四國遍路

（4）四國遍路。

これは、（3）と一括すべき程度の、彼の體驗であつたかも知れない。とにかく、四國遍路の程度は分らぬが、「金草鞋第十四編、四國遍路の部」の最尾、作者の言葉の中に「此四國遍路は、予先年、豫州道後の

温泉にいたりし時、阿州徳島まで遊歴したりしが、其路寄よき靈場へは、こと〴〵く參詣して見覺たる儘をしるせり云々」とある。

熊野、那智 美濃谷汲

(5)熊野那智、播州路。美濃谷汲方面。

これも、(3)と(4)と同時か、そのいづれか、又は全くの異時かゞ分らぬ。がとにかく先年(文化年代から見ての先年であるから、無論寛政の頃でもあらうか。)の事である。即ち文化(年不詳)の「金草鞋第拾編、坂東道」の序の中に、「予西國順禮は、先年紀州和歌山に至りし時、熊野那智山にも參詣し、其後西國遊歴の歸るさ、播州路および丹後の[illegible]、天の橋立を一見して、近江美濃の谷汲まで盡く廻りし故云々」とある。

木曾方面

(6)木曾方面。

これは、東海道の次に、比較的數度の往返を繰返したであらうが、確かなのは、中期の文化九年の遊歴の事實である。即ち「續膝栗毛四編」(木曾街道の中。文化十年)の叙に、「去年此街道を通行せし時云々」とある。この去年は、文化九年の意であらう。即ち此の旅行は、「續膝栗毛」の資料蒐集のための、殊更の旅行であつたかも知れない。

善光寺方面

(7)善光寺方面。

これも屢々の事であつたらうが、現に文化十一年にの記錄がある。「續膝栗毛六編」(文化十二年)の序

叙の中に、「去年初秋云々、信州善光寺に參詣し、所々に遊歷して」とある。

洗馬、善光寺、稲荷山

(8)洗馬・善光寺・稲荷山方面。

年次不明であるが、「續膝栗毛八編」(文化十三年)の序に、「予一とせ此街道に杖をひきて、洗馬の驛より善光寺にいたるに、松本より糸魚川街道といふに出、栗尾松尾宮城などいへる靈場をへて、稲荷山に出たりし」とある。

善光寺草津

(9)善光寺―草津方面。

文政二年の夏かと思へる。即ち「金草鞋第十三編」(文政三年)の序に、「去夏越後を遊歷し、戻りがけ善光寺より仁禮街道大笹越といへるを草津に至り云々、悉く記行に書留歸りたれば」とある。

越後、會津

(10)越後行脚―會津。

(9)に示した「金草鞋」第十三編のいふ去夏越後遊歷といふより以前、別物の、初めの行脚かとも思ふ。「金草鞋第八編」(文化十二年頃)(但し此の八編は、朝倉氏、新修日本小說年表のいふ八編とは當らず。即ち會津越後道のもの。尚、別稿「金草鞋の編次に就て」を參照。)の序に、「去秋越後行脚」の文字が見え、且つ編尾作者曰くに、「予去秋七月京都をたちて信州善光寺に詣たりし序に、越後高田に出、それより柏崎・長岡・出雲崎・新潟・新發田を經て會津に出、歸國せり」とある。即ち此の旅行は、(7)の善光寺方面と同時、その續きで、即ち文化十一年秋の事實であらう。

不案内なりし方面

(11)身延山。

「先年當山に參詣したれども年久敷事故忘失して云々」(金草鞋第十二編の序)で尙、文化十二年秋には、僅かに名古屋に滯在してゐた記錄もある。增井山人著の「滑稽祇園守」(文化十三年、名古屋版)に叙してゐるが、それにその意味がある。

(二)土地不案内を告白せるもの

彼自らの告白によるもののみである。

(1)奥州路・仙臺方面。

これは足一歩經驗が無いらしく、色々な機會で斷つてゐる。即ち「金草鞋第五」「同第六」「同第八」(この編次、家藏本に據る)等である。

(2)羽黑山。

「金草鞋第二十」(天保元年)は、羽黑山の記事であるが、これは經驗なしに物してゐる。即ちその序に、「予未だ當山に詣ざればくわしからずと雖も、同國酒田、風間彥惣なる人より云々、草稿を送て此書を綴る」とある。

(3)坂東順禮。秩父道。伊豆方面。

これらは、凡てその經驗がない。「金草鞋」の第十は坂東、同第十一は秩父、第二十二は伊豆であるが、凡て他人の記錄、又は談話、道中記類を參考にしての事である。一々その折の種本を、正直に言うてもゐる。

不詳の方面

（三）　不詳の方面

一九の作品に現れてゐて、而も其土地が江戸より遠く、實驗の有無不詳なるを一括すると、「金草鞋」第十九の加賀白山道、同第十八の越中立山道、同第十六の親鸞聖人舊蹟二十四輩道、同四編の次と同第二十四編に現れる中國、長崎方面などである（唯、西國に就ては、若干の實感があつたかも知れない。金草鞋第四編の次の中に、周防あたりで、作者曰く「ひとゝせ西國へ上りし時、この久米村といふ所で云々」ともある。）

鹿島、香取

尙、鹿島香取方面には實感があつた。初期享和二年版の「旅眼石」（後、「馬士の歌囊」と改題）は、其の內容であるが、それに、「一とせ睦月の初めつ方、心願の事ありて云々」とある。房總方面も、「金草鞋第十七」などに取材してゐるが、此は江戸より近く、明かではないが、實感あつての事であらう。

×

以上が彼の作品に據つての大體の調べである。かう纏めて來ると、相當以上に、彼の足跡の廣い範

圍に亙つてゐる事に、感心させられたのである。（大正十五年十二月一日佗稿）

附記—右は、主に一九作の著作に據つての記錄であるが、中、「金の草鞋」を折々引いてゐる。さうしてその資料所在を示すため、その編數をも述べてゐる。が、此の編數は、凡て家藏本二十四編本に據つたものである事を述べておく。なほこれに就ては、前稿「金の草鞋の編次に就て」を參照せられたい。

一九の異本「反古張障子」

類本「反古張障子」の前後編

一九の中本作に、「反古張障子」といふのがある。現に、滑稽文學全集にも、此の名前の物、前編と續編と二編が收められてゐる。即ち「當世茶話反古張障子」（全集第三卷）と「當世茶話反古張障子續編」（同第五卷）といふのである。前編は、「濡れぬさきから年寄の冷水は首たけの慾　はまりこんだ後生願の浮世ばなし」とある通り、彼とうまのあうた或る老媼の浮世話の滑稽さ、中にしぜんと教訓を含んだといふもの。その年次は、序に文政午孟春の文字があつて、即ち文政五年である。續篇は、村間の萬八といふのが、田舍大盡に却つて爨弄せられて、中譯の爲に坊主となつた、見出しも「蛙は口から出放題の戲言に唯を月夜の釜　してやられた率頭持の俄道心」といふのである。前編も續編も同じく短篇、菊判に組んで八頁位のものである。それと違つた「反古張障子」を、最近發見したのである。

異本

元來、此の「反古張障子」は、命題の示すやうに、反古同樣、かき集めた小話であつて、作者自身も重きを爲してゐない。或は舊作の蒸し返しかとも思はれるものであるが、流石に當時の風俗を取り入れて、滿更の反古にはならぬ。既出の二篇は、共に文政五年版（續篇も）であるが、さて此の新出の「反古張障子」は、いつの版か。元來この「反古張障子」は、全部普通書目に之を見ぬものである。今度新發見

の「反古張」も無論である。

異本は比丘尼が材料

自分の發見したものは、比丘尼に材を藉りたものである。それも背て、自分が考證を營んだ賣比丘尼（私娼の一種）である。い丶旦那が見つかつて、やれ嬉しや、造作も立派な物を建てはじめ、とその最中旦那の身元に急變が起り、旦那は行衛不知、自分も吉原へ賣られる。果に或る期間にその素性を見現されるといふだけのもの。であるが、その書き出しが、當時・從來の比丘尼の分布を大體に述べて、なほその風流行であつた、自分の長い賣比丘尼考（「江戸文藝叢書」所收）を前にしたやうなものであるに於て、自分は北叟笑まれた。即ちこの前文をその儘原文を追うて發表したい。次ぎに、此の小篇の荒筋をも。

異本の解題

一寸解題に及ぶ。此本、中本一冊、元表紙不明。序等なし（或は落か）本文、第二丁より始まり、第九丁表まで。一行二十一字位詰八行半丁。振假名あり、〇の句讀點を打つ。年代が不明であるが、最尾の第九丁裏に、半面「太田道灌雄飛錄　全六冊」といふもの丶廣告を載せ、その終り、巳の秋、人形町通り双鶴堂梓とある。此讀本（？）の出版年次が巳の秋か、或は此の「反古張障子」が巳の秋か、判然しないが、「反古張障子」にかけて可からう。巳といふと、文化六と、文政四、天保四とある。此の本無論初代と見て、歿年以後の天保四年では無論無からう。すれば、文化六か文政四であらう。然るに、別本の「反古張」は、文政五年である。即ち此の本その前年の文政四年でもあらうか。但し、此の反古張は「禍福雜談」と角書があり、彼は「當世茶話」とあつた。全く異種であるから。強ひて年代を近邇させ

る必要もない。信用は出來ないが、此の本以前の藏書家某氏の書入には、文化六年巳年とある。が、異本ではあるが、篇の見出しが共に一個、しかも長短略々相似たり。（當世某話本と）即ち文政四年の巳であらうか。以下その要略。

異本冒頭の原文

禍福雜談 反古張障子

十返舍一九編

女色に迷ふ心は浮舟に法の導引

身代の回向前に掛取の貴念佛

むかし〳〵。小哥比丘尼といふものはやりて。都は建仁寺町の下。大黑町の邊浪花は高津の宮の北。高原の町はづれよりいでゝ。文庫に熊野の牛王。なぎのは。びんざゝらなど入れて持。身には淺黃黑。または茶染の布子に龍門の中幅帶前にむすび。黑羽二重のあたまかくし。つまをりの菅笠。前さがりにかぶり。絹の二布裾みじかく。様子なしにつか〳〵と歩行。勸進といふ聲も引きらず。はやりぶしをうたひ。うら店のひとり住。醫者がたの供部屋を心がけて。哥に氣をうつさせ。ぬれをしかけ。相手さへあればころりと×て。鳥目百文の定直段。何國もおなじ事にて。伊勢道中には。とよく野の取付虫

の長野のふる狸と異名して。道者にとりつき。あぶりな日つきし。壹錢の情をうけてよをわたる。明野がはらには。むしろ屏風をたてゝ。三四人づゝ居ならび。おしろいへげるほどぬすくり。口紅いやしきほどにつけ。齒は雪のごとくしろくみがき。紺の布子に齋宮笠かぶりて。哥うたひながら。あふぎにて往來をまねき。ゑみをつくり。參宮人の氣をうかし。とをし馬の馬奴褐かき。さては伊勢路へ商ひにゆくもの。頭をとるといふゑんにて。商ひの門出よしと。いづれも祝ひて。ひときれづゝは賞翫し通るといへり。江戸にては神田の田町。下谷竹町邊。または淺草の田町。牛込田町。赤坂のふろや町、芝四國町などに出るは。下職の若者。あるはおやしきのたけきやつこらさをなかせ。竹光の魂をとらかす。また堺町の東大坂町。いづみ町。さては八貫町山王町などには　名とりの上物ありて。客も勤番の侍衆。または商人の店あづかり。それ〳〵の念頭あるゆへに。強ちおし賣をせず。顏かたちも花者風にして賤しからず。其代り。花代もむつかし。雜用もよほどかゝりて。其ころ清林があみだ笠とて。名題ものもありしとかや。こゝに歷々の丹那株にて。諱名を酒好といひしもの。和泉町の妙貞といへる比丘尼にふとしやれそめて。喰付となり。坊主くさきも鼻につかず。次第にかはゆく。まるまここきあたまのぎり〳〵より。足のつまさきまで。此酒好が世話なれば。衣裳つき萬端。外に類て。其頃の評

判ものなりしに。酒好自身のはな毛とともに。妙貞の髪をのばさせ。すゑ〴〵は茶ともなし。わが手生の花とながめんと。妙貞が母ひとりあるをも。心添して不自由をさせざりければ。元来慾心房と異名のつきし持比丘尼。もの貰ふことには。人情をすてゝ。あつかましいの上なしといふしろもの。丹那へねがひて。何とぞむすめがつとめを。やめさせたきのぞみ。おつとまかせと。酒好さつそくのみこみ。かゝへ地面のうち。南向のあき地に家作し。親子ふたりを引とり。さしおくべしとて。急に普請の物好。繪圖面をもつてあつらへ。杉檜木のはしらごのみしてとりよせ。大工大せひに前金少々づゝわたして。作事をはじめ。何とぞ新宅にて正月をさすべしとて。極月の半頃より。番匠日雇に。増錢をつかはす約束にて。あしもとから鳥のたちまちにおつたてゝ。屋根ふく職から諸道具をはこび。ゆか(床)はりし所には。はや疊屋が備後おもてをとりまはし。寒中に汗をながしてさしいそぐ。酒好は萬事大たばに出かけて。かねは栃万雨入てもくるしからず。造作見ぐるしからぬやう。念入れよと。毎日普請場へきたりてのさし圖。よく〳〵の□分と見へ。親のことも子のこともかまはず。この妙貞にうき身をやつして。次第に鼻の下細長くなり。けふも出入の雨のみや風のみやを。引つれて來り。世間はいそがしき。師走の半過に。はや正月のこゝろ。さま〴〵の料理ごのみして。普請場のかんな屑おしの

け。薄縁(うすべり)しかせて。ゆふ〳〵とのさかもり。妙貞はや髪をのばすつもりなればつく〴〵ばへのいがぐりあたまを。手拭にておしつゝみ。身にはべんべらもの。裾長くひきづり黒じゆすの帯。しどけなくひきむすびて。丹那の機嫌をとり〴〵のもてなし。持比丘尼の欲心ぼう。くちから鼠いろのよだれをながしてよろこび。諸事丹那の御かけ〳〵と。追従たら〴〵。有がたいの八百程も。いひつゞけてゐる所へ。酒好の宿ぶり。下男の久すけ息きつてきたり」

以上が、本文第一丁より第五丁裏の第一行目までである。以下は全文の登載にどでもないから、梗概を以て更へ、所々本文を摘記しておく。

下男久助が來て、何をいふかと思へば、「只今弟御さま、寢の腸(わた)と泥鰌とをよごし(マヽ)にしてめし上られ大食傷にて。御宗内大騒動なり。はやく御歸り。とけはしき使」といふのである。流石の酒好も驚いて早々宿に歸つてみると、親類其外出入の者まで、大勢集まり、病人を取りまき、醫師の相談、藥の評議まち〳〵である。其中に才覺らしき人のいふには、毒消には、金を煎じて飲ますがよし。それ藥鍋仕かけよ炭火をおこさせ、小判一兩といへど、番頭返事もせず脇を向いてゐる。氣をいらつて、こゝの内には小判はないか、小粒なりとも出せ、といふ。戸棚簞笥錢箱探しても貳朱一つもないから、「隱居してゐらるゝ親仁の禪門。やくはん頭を打ふつて、酒好をとらへ。有金一萬五千兩渡したるは。未だ

五年にならず。其外諸方への貸金、戻りしもあまたあらん。此金は何として。壹分もなき身代には。いかゞしてなしけるぞと。此間着に病人はわきへなり。家内の騷動大方ならず」「女房は着類まとめて己が簞笥へ押込み錠おろし、手代共は、くすね物の仕末、三助も俄かに用心、草鞋の鼻緒をとをす、皆さあといへば逃げ出す用意。「家内ひつそり沈まり返りて。此の仕舞を案する所に。」隱居は天火のごとく怒りたつて、酒好を嚴しく吟味するに。云ひ譯一もなし。依りて其座より勘當。

勘當受けた酒好は、日頃末社につれて目をかけた誰彼へたづね行けば、皆逢へず。「それよりは如何せしや知らず」といふのである。處が妙貞親子、「酒好の樣子をきゝて。肝をひつくりかへし。普請半ばといひ。節季仕廻はいつとても酒好のかたより附屆あることなれば。それを當にして算用なしに買がゝり。今更拂ふべき當の樋ちがひて。ぎつちりつまり。大工日雇材木屋や疊やへも。この事を語れば。皆々呆れて。逆ちさうした事なれば……とかくは此家打壞し、百貫のかたに編笠一蓋。ねだ一本づゝなりとも分どりにすべしとて。節季の廿四五日頃。掛矢にて片はしより打壞し。時の間に元の明地となしたりける。」（その明地をどうしたとは書いてない）妙貞親子は、今此世へ生れ出たものゝやうにぐんにやりとなつて、詮方なく店賃の安い裏店へ引込んだが、今日食うて明日のあてもなく、それに買がゝりの尻が來て、着溜た着類も段々賣拂ふ。妙貞折角髮は伸びたが、今更比丘尼にならんも外聞あしく如何したらと吉原に遣手奉公の叔母を尋ねると、いつそ女郎になつたらとの事で、「早速目見え

させし所に。器量はよし風俗はしなやかなり」、相談出來て、突出し書三、あつぱれい掘出し物と親方も喜ぶ。果して評判、大繁昌となつた。或日、田舎大盡、末社に堺町の小詰(こづめ)役者共四五人附添ひ、中の町の茶屋に呑みゐたるに、妙貞今は浮舟と名を付けて二人禿に新造で例(れい)の如く花やかな道中姿、大盡眼を細くして云々。茶屋夫婦の盡力で、全盛、「前廣(まへびろ)にさしこみ置ざれば首尾のならぬ」所を、浮舟早速光臨、(以下全文)「茶屋の夫婦飛んで出。これはおいらん。少々お聞申たきことあり。まづ／＼これへと高貴の姫君にてもあしらふごとく。請じ入れて。上座になをせば。浮舟さも大様に構へて。長煙管に多ばこのみゐたる顔を。田舎大盡の末社のうちに。すゞめの忠吉とて。よく噂る男。浮舟をつく／＼見て。思はず知らずに。これは妙貞どのではないか。さても珍しやと。うつかり言つてしまつたあとで。口に手を當てしは笑止にもおかしく。これにておいらんは。つと座をたつて逃歸れば。折角大盡の思ひ込し女郎。取逃がせしと。忠吉の不首尾なりしも又おかし。」(以上にて大尾)といふのである。

こゝで想ひ起されるのは、一九の作に比丘尼は因緣淺からざる次第である。現に自分が最近飜刻し自家より出版した「續々膝栗毛」(その初二篇は、初代一九)の初代の中にも、この比丘尼が現れ、それが肴屋の口からうつかり洩れるといふ話。此の時の比丘尼も、還俗しきつてゐた。丁度髮を伸した花魁浮舟と同じやうである。但し「續々膝栗毛」に於ては、これに誤つて入夫した彌次も、蒼丹那の杢右も此の比丘尼上りのおりえも、發見した肴屋も凡て同國―作者一九と同鄉の駿河にしてゐる。此の「反

古張」の比丘尼が生國は何處とも分らず、丹那の酒好が江戸者といふ丈の差はある。要するに、この「反古張」の趣向を更にとり入れたのが、「續々膝栗毛」である。畢竟かうした賣比丘尼還俗に關した當時實事譚があつたのであらうと思ふ。それをそのまゝに記錄し、(多少の潤色は無論入つてゐよう。)小篇としたのが、此の「反古張障子」の異本といふのではなからうか。尙此類、探せば彼の作中に、三度び現れて來るかも知れぬ。

一九の無論主流的作物ではないが、遺作の一として、披露に及ぶ事如右。

——大正十五年七月二十三日夜。

補記

補記—「太田道灌雄飛錄」は、右稿以後出版せられた新修日本小說年表に據れば、文政三年刊、木村忠貞の著とある。すれば、此の異本「反古張」の卷尾の巳の秋は、此の反古張自身の出版年代であつて、卽ち推定通り文政四(巳)年秋刊なのである。尙、同年表には、滑稽本の部に、反古張障子文政五年のものがあるが、それは、三(三冊の意ならん)とある。或は、滑稽文學全集本の正續二冊に、更に此の異本を加へて、三といふのかも知れない。が疑はしい。記して後考に俟つ。

——昭和三年七月補。

増井山人著作考

一、寫本「野圃の玉子」に就て

一、寫本「野圃の玉子」に就て

目下、借覧中のものであるが、文化頃の宮(熱田)驛遊里(主に神戸)のお龜買ひに取材を藉りた洒落本がある。一は、南濱野圃の玉子と題して、初中後の合本。一は、南驛夜光珠下卷(この端本は惜しい)である。(共に寫本で)凡て丸に大の藏印があり、即ち名古屋舊貸本屋、所謂大惣の貸本用寫本である。南濱野圃の玉子は、増井山人なる男の著、序に文化二乙丑春とある。夜光珠は、作者楚齋子、年代は不詳である。(が同時代同一作者の物たることは、後に說かう。)何れその全篇は、自分の「洒落本集成」の中に差加へる積りであるが、問題は、先に述べた「宮のお龜考」(本著別掲)の一材證と思うて、先づそのお龜の資料らしい箇處だけを、こゝに抄しておきたいといふのである。主に「野圃の玉子」に就てゞある。

先づ、野圃の玉子の序 咬菜軒つら水の序の中に、「宮の根の長門屋、武の柳や神戸に店をはびこり、また傳馬町の縁風になびく云々」とあつて、娼妓の猫にかきのめされ云々とある。次で凡例に、娼門、妓などとある。目次によると、初の卷 増井土師丸がぶらつく本街の光景、中の卷 萬客のおやつく

「同」梗概

永樂亭の富鹿、後の卷　お花半七がいちやつく閨中の談謫とある。次に初の卷のはじめに、「お龜買夕べにいそぐ」とあり、初の終りの方に、ウタ「宮のおかめとナア茎でうちんはヨウとほすばかりでナアヤレ手がないにヨウハイ〳〵。おかめ〳〵とナアいわんすけれどナ龜にや手もある足もあるヨウ」とある。此の唄、誠に面白いではないか。

梗概をいふと、初の卷は、増井と土師丸が本町を神戸までのぶらつき、途上いろ〳〵な滑稽がある。中の卷は、二人が江戸者となつて登樓、（永樂屋は神戸の大樓であつた事、「どゝいつぶし根元集」にも出づ。）江戸辯まじりに中々上手に白つぱくれてゐる。下の卷は二人が、お花と半七なる男女の私語を立聽くの條である。作としては平凡であるが、處々當時の名古屋及び宮の色―言語・産物・名所などを打出してゐる所が面白い。

作者の増井山人とは、野圃の玉子の卷尾の落書によると、（滿壽井先生名伊兵衞、字豹惠、蘂齋子ト同）名は伊兵衞、字豹惠、雅號増井山人、又は蘂齋であつたことがわかる。とに角、此頃、名古屋にはかうした素人作家がゐて、その作を洒落本風に仕立て、（この本も然りで、頗る普通板本の洒落に、表紙、文字の書様など似せてゐる。）同好者の貸覽、批評に委したさうである。―（が此の貸本用のものは、大惣當雇ひの筆耕の業であつたと云。）仙果の如きも、東都に名を出すまでは、かうした回覽本で技を磨いたかも知れぬ。蘂齋が増井であるとすると、夜光珠も同じく文化頃のものであらう。

夜光珠は、端本ではあるが、出來としては此の方が洒落本らしく思へる。同じく熱田神戸廓内の、ある痴れ男がお龜に騙さるゝ件である。跋に、亞井山人（增井山人のこと、棄齋・增井同人であるとすると、此の跋は、增井が大衆氣どりで、自作に他人らしく跋をしたものととれる。）とあつて、そのうちに、度々居續着意の傲慢子弟云々とある。このどゞゐつどいゝも都々一の囃子詞から來てゐることは無論である。（然るに其後の發見によれば、此の「夜光珠」は、これより後文政五年版の笑馬編の名になる「青樓玉語言」と殆ど同じである。なほ後說に出づ。）

膝栗毛五上の畫贊は尾張作者

追記。前稿、野圃の玉子の作者增井山人が、東海道膝栗毛五編上に出てゐる。この五編は、殆ど尾張の狂歌師又は作者連の狂歌又は狂詩を以て、一九が畫贊にしてゐる。增井もその一人である。其他木の芽田樂、南瓜蔓人（これは、四編之綴足（一名、名古屋見物道中膝栗毛）前後四冊を作した東花元成の類ではないか。此の元成は、文化十二年頃、名古屋に僑居してゐた、江戸の產である。此の元成と、例のカボチャ元成（三代一九）との間に關係がありはせぬか。これは又他の機會。）蛙面水、（これは、「野圃の玉子」の序文者）棄齋時恭、（彼は時恭といふ名であつたと見える。）其他全部尾張の者である。皆一九の知己、又は門人系と見てよからう。

增井の狂詩

試みに增井の狂詩を例として擧げておく。

「追分名物饅頭多、日々蒸返皮慾和、莫怪價高少好味（ウマミ）、元是餡中砂半過（ヘンブン）。右題追分饅頭、尾陽 棄齋時

恭」といふのである。即ち此の膝栗毛五篇發兌の以前より、(文化三年以前)一九と師弟に近い交渉、又は相識の關係にあつたものであらう。田樂一人は、既に享和元年、馬琴の紹介で、東都で黄表紙も出してゐたから、例外であらうが。

——大正十四年三月。

一九との交渉

二、名古屋の洒落本

二、名古屋の洒落本

(前略)扨、名古屋の洒落本作者「増井山人」「椒芽田樂」等の御記事有益に拜見仕候。之に就て小生少しく愚考有之、御参考迄に申上候。

増井山人及び椒芽田樂の著書に、左の如きもの一見仕候。

南驛夜光珠

一、南驛夜光珠一冊、燕齋主人作、文化四年作

この書は、御説によれば、二冊本なるかの如くなれども、京都帝大圖書館所藏の筆寫本は、中本形一冊本にして唐表紙を附けたり。作者の自序、花林堂紫旦の畫並に賛あり。次にヒラキ二面の傾城の色彩畫あり、卷末に増井山人の跋を附す。(増井山人と燕齋との同一人なることは、御高説の如し。)

御説の如く、熱田の洒落本なり。

序によれば、文化四年の作なり。

輕世界四十八手

二、輕世界四十八手一冊、合作、寛政十二年作

中本形筆寫本、椒芽田樂の叙、大文字屋市息子の序あり。所々彩色にて婦容の畫を挿入す。數章に分ち、各その作者を異にす。

南畝　切れる手　有雅亭　光●代雛面　見抜かれた手　滿壽井約恵●大浮　不味な手　山賀翁齋
●邊利氣　忍の手　於仁茂十七●伊奈兵　端出な手　有雅亭　光●臺華　易ひ手　川東京傳●通
多田　捻つた手　木下山人●都他茂　眞の手　山賀翁齋

蓋し之等の作者は、皆名古屋邊の通がりの人間なるが如し。而して滿壽井約恵とは、勿論樂齋增井山人のことなり。最後に「青樓萬金職」とせるは、京傳作傾城買四十八手に倣く迄も摸擬せむが爲なるべし。

三、天岩戸一册　旭亭主人作、享和元年

中本形唐表紙。元大惣本なり。筆寫本。桂見繭、山西主人、椒芽田樂の各序文あり。ヒラキ二面の女郎の墨畫（田樂畫）を附す。著者旭亭主人は何人なるかを知らざれ共、想ふに田樂、樂齋等と同輩なるべし。內容は珍らしく古市の洒落本にして、玉州、有竹、有洲、如亭といふ連中が、古市備前屋にて遊蕩せる様をあらはせり。例の古市特有の「かいし」「すきじやいし」「ないじやいし」等の語を用ゐたり。とにかく古市資料として面白きものなり。

四、新織儛意鈔一冊　椒芽田樂作、寛政十三年（享和元年）

中本形、表紙、內容共に筆寫本。彩色等を施せる凝つたものなり。題簽は、横廣きものにて左の文あり。

「大かや惣八」モシこのごろきのめでんがくせんせいにおたのみ申て一冊かいておもらい申ました「客」フムこいつ名古やでの初のしやれとみへるさぞおもからう、なんでやモウこつちのせりふはよみにくいてや「惣八」あざやかにうつしてムり升「客」ちよつとよんで見やう「惣八」ごらんなされませトれいのわらいアハヽヽヽ

滿壽井豹惠の序、及び自序、並にヒラキ二面の「歌伎戲房之圖」とせる墨繪白畫あり。

第一回　唱行水あらば否とは謂まじ□第二回　未呑ぬ闇樓のうちぞ床しき□第三回　宛衍の間に誓髻の面可斗

の三章に分てり、最後に自跋あり。

名古屋の洒落本にして、大惣の舊藏本なり。

五、其　他

「儛意鈔」の卷尾に、椒芽田樂の著作目錄あり。

白徒教言　全●希有言茶理不調　三卷●抜粹俄開帳　三卷●妄言畫本兆燈藏　三卷●新織儛意抄

完●田舍獅子　一冊●春秋洒子傳　山川雨部●通哉是仙人　一編

右の中、「春秋洒子傳」は、中本形二冊の筆寫本にして、寛政五年の稿なり。作者は明に、唐來三和作とあり。曲亭山人の序、自序あり。各冊初めに二枚宛の口繪あり。春秋の二冊に分つ。

春の卷　春王三月躑躅大盛。諸公婦人如レ東山。

秋の卷　秋八月月清鯵大喰。通人乘二輪貫一斉レ沖。

春の卷は「東山の花見」、秋の卷は「堀川の舟遊」をうつせり。洒落本といはむより、寧ろ後の三馬などの寫實的滑稽本の臭あり。不思議なるは、唐來三和と板芽田樂とに同著あることなり。而も三和作とせるこの書は、會話等はすべて名古屋訛なり。想ふに田樂が殊更に三和の名を換せしものか。序者、曲亭主人も亦、馬琴に非ざるべし。

以上は、すべて京大圖書館本にふりしものに御座候。　（市場直二郎氏稿）——大正十四年五月。

三、増井山人が著作

増井山人のことは、既に二三調うたが、其後に得た彼の刊本著作　津島土産膝栗毛もあれば、更に綜合的に書いつけておかう。

○

嵜井山人傳」不詳を遺憾とする。文化頃、主にに忽貸本用の寫本戯著を書いてゐた一旦當時の通士、地方作者、暇人(ひま)の生活を送つてゐた。身元一切不明。士分の軽輩であつたか、又は、彼が見事した(?)椒芽田樂の如く一市井醫であつたか、又は町人出か。才は、(主に摸倣ではあつたが)相應にあり、文辭も猥雜ながらにあつた、とにかく當時文化文政頃の名古屋俗文學壇の錚々(此の讃辭は、やゝ滑稽な感じがするが)たるものであらう。初代十返舍一九とも相識であつた。(更揭、津島土産序を見よ)即ち當時江都文壇の覇たる此の一九と相識であつた。(寧ろ、師事に近きものがあつたと見るべきであらう。

名古屋俗文學壇の錚々

彼と一九との相識は、彼の作津島土産の文化十二年頃であるか否かは疑問であるが、古くより私淑(?)してゐた證は、彼の野圃の玉子は、明らかに一九の享和元年版「野良の玉子」を踏襲したものであり、倘、後に津島土産の、膝栗毛に倣へるものあるに於てをやである。(津島土産に就ては、倘、後に言ふべし)親しい交渉にゐた。これだけでも既に彼の位置を名古屋俗文學界に向上せしむるに足る、まして彼の一作(刊本「津島土産」)に、初代一九が序を成してゐるに於てをや。

世評の一斑

世評の一斑。蛇とは言へたいが、若干の材料としては、偶然、「野圃の玉子」(彼作の筆寫本)の表紙裏に、時人が落書した左の詞がある。

評曰、石橋庵主人(藁斎が事也　久漏)惜哉若而好善文、然博才早罷作、此后種(種々カ)作書至後年必可爲一

奇人。(早罷作は、早く作を罷むか。但し後に津島土産の如き作あり。決して早く罷めたるには非ず。惜哉とは、早く作を罷むるを惜んでゐるのであらうか。)

即ち高く評價されたものである 後年必可爲一奇人とある此の語の通り、大正の年次、自分の筆によつて此の彼の名が活字となり、現在日本文化の先覺たる諸賢の眼に觸れしめてゐるのである。即ちこの落書者、地下に已が偶筆、好戲を爲してゐることに驚いてゐるか奈何か。

尚、同じく「野圓の玉子」の卷頭に、高名雪丹樹兒下貫翠といへるの題書に、(正札請合とある角印を捺せり。)

遺些冊兒則貫首濱(熱田神戸傳馬の遊里の謂也、何の品川を擬したるならん。久蘭)遊春的諸小史中第一書也嗚呼增井鳴呼釣者千前無作者千後無作者而已(原、此の圏點なし)

とある、此の極讃辭は、無論樂屋褒めではあらうから大に割引の要はあるが、とにかく當時素人作者の雄たるものではあつたらう。「野圓の玉子」卷末の無名山人跋にも、

「(前略)奇也妙なり、先生は呼鳴文罪乃徒乎、扎子乎、主人迎曰、予を梅干トいふは我をしわくたにしたるか、予對曰左にあらず、主人曰如何、予寸子答ハ ア、スイナル哉」

とある。夫程スイか否か、小椊ぐらゐの諧味はあつたであらう、其他此類なほ、つら／＼の野圓の玉子の序(いさゝか趣向のすもりなく刳つて見せたる作意の妙。みる人是はと舌打すべし云々など、)如き

ものがある。

年齢。不明であるが、此の「野圃の玉子」當時、左程の年老ではなかつたらう。その證は、前にもあつた、若前好者次といへる逍り、當時なほ無分別者の仲間たるに相應はしい、客氣の年配であつたらう（即ち四代—九などよりは勿論年少、彼が此に師事したらうと謂うた譯である。）

彼の性格。　彼の性格とするものゝ常、多少の（否、或は大の）己惚氣はあつたらう。「野圃の玉子」の卷尾に、滿壽井先生名伊兵衛云々といへると同筆蹟のもので落書がある。即ち左の如きもの。

滿壽井山人年若キ時ヨリ行過甚シ、仍時人是己惚主人ト云

とある（註—此の行過は、ゆきすぎ、いきすぎと訓る。出しやばり者、臆面なし、輕卒、生意氣の感じに近き者をいふ方言也。）如此き己惚氣は無論彼にあつたであらう。臆面なきもの、それ自身は常に幸福也。彼も亦此の自己陶醉の幸福漢であつたであらう。

増井傳。　名古屋の戯作者。名は伊兵衛（「野圃の玉子」の卷尾、表紙裏の落書に據る。）諱は時恭（一九が東海道膝栗毛五編上の挿繪の題署名に據る。）石橋菴と號す。（寫本「野圃の玉子」の自序に據る。）増井山人（万壽井、滿壽井とも）、眞隣、塗齋子亦同じ。字は約惡（野圃の玉子の卷尾落書に據る。）、又時人、己惚主人とも綽す。（野圃の玉子の卷尾の落書に據る。）文化頃、寫本・刊本の戯著、（主に熱田娼女に關する一種の洒落本）の著述多し。生歿年不詳。

とでもいふべきであらう。その交友關係を擧ぐるに、初代十返舍一九（寧ろ、師事か。增井の野圃の玉子が一九の野良の玉子を摸せる事前にいへり。とにかく師弟に近かりしか。現に、一九、後進誘掖の意にて、刊本「津島土產膝栗毛」に序す。）、椒芽田樂（同時代の名古屋副業的戲作者の一。寫刊本の小說類あり。增井、田樂の著「鮮意鈔」（寫本）に序す。）牧墨僊（北齋門人。文化十二年版の刊本「四編之綴足」に挿繪し、中、椒芽田樂の口繪の賛あれば、墨僊、又、增井とも交誼ありしならんと思ふ也。）其他、燈臺元暗、南瓜蔓人、蛙面水、（以上、凡て東海道膝栗毛五編上の中に、その挿繪に狂歌を賛せり。即ち當時の狂歌師の亞流。尙、蛙面水は、咬菜菴つら水として、野圃の玉子に序せり。）なども、交遊ありしなるべく、且つ、「天岩戶」（寫本享和元年。田樂等の序あり。）の著者旭亭主人（、小木名古屋版噺本の作者旭文亭と同人か。）寫本「輕世界四十八手」（寬政十二年作。增井などの合作。）の合作者、在雅亭　光、於仁茂十七、木下山人など、或は花林堂榮貝（寫本、增井の著「南驛夜光珠」「野圃の玉子」に描く。）など、（此中一人にして何人をも兼ねたるもあるべし。）その關係の中に描くべきものであらうか。（以上、野圃玉子以外の據出については、市場直二郎氏の京大本涉獵の報告に據る所多し。」

○增井山人の著作目錄

一、（未刊本）野圃の玉子　初、中、後三卷合　文化二年作

二、(未刊本)南驛夜光珠　上下二卷　文化四年作

○此の南驛夜光珠は、予が先にものせる記述には、下卷一册也とせり。是れ予が記述の根據、該底本は、所謂大惣本の貸寫本の一にして、外題に明らかに下とあり、本文はじめにも下之卷と記せるが故也。然るに後に市場氏の謂ふ所は、京大藏書本にも南驛夜光珠の寫本あり、是れ一册なりとし、作者の序、及び柴且の口繪を附けたりと報ぜらるゝに據れば、即ち京大本は、此の夜光珠上卷にして、拙稿底本は、下卷なるべし。(或は、京大本は、別寫本の合本か。)現に、此の下卷、表紙、例の大惣の平假名分けの番號ありて、上欠と明記せり。當時、既に此の上卷散佚せしものならんか。殊に作者自ら下之卷と斷れるに於て論なし。即ち先づ、此本、上下二卷ならんと定む。

三、(刊本)津島土産膝栗毛　上下二卷　文化十三年

▽著作の眞僞疑はしきもの

一、滑稽考　(野圃の玉子後編)〔野圃の玉子の奥書に據る。〕

二、里鳥可愛のうら〔野圃の玉子の奥書に、來春出來とあり。〕

三、當世嘶の問屋〔「四方の好士の新しきおとしばなしを集め、書林大野や惣八へ出し申候」と同奥書にあり。尙　外題横に近刻とあり。〕

四、南陌翠楊柳　完〔夜光珠下卷の奥書に據る。〕

五、倡客融通一覧　完　（同　）

以上で、增井山人、個人の紹介は略終れりとして、さて次に最近獲たる彼の刊本の唯一（現在の予の智識なり。）たる津島土産藤栗毛の解説に言及しよう。一九が之に序せる點もあり、彼の名古屋酒落本系以外、滑稽本作者たる面目の紹介である。

津島土産藤栗毛上編下編二卷である。自分所藏のものは、明治二十二年四月求版、名古屋書肆山文三郎（和田屋）といふの發行に係る、洋紙摺一冊本。但し、序以下本文、活字摺ならず、全元木版なり、即ち再摺本也。したがつて一九の序文また彼の例の筆癖歴如たるものがある。作者名は、石橋庵增井著。丁數、上編、序二丁、本文廿九。下編、三十一丁。本文、うんつくや太郎兵衛と、其の棒組の孫太と兩人、名古屋より津島（元、尾張海西郡。素盞嗚を祀る。例の津島祭として世に鳴る。現、海部郡。）に至る、途次の滑稽、惡戯、洒落の數々を作爲せしものである。狂歌を挿める所、内容形式共に一九の膝栗毛を摸して遠からずのものである。左にその序（一九著）の全文を擧げよう。

津島土産序

つしまみやけあり、そは竹の皮にも入れず、藁苞にもせずして、唯ひとひらの袋入となし、書林松花堂の賣弘る所なり、本家は石橋庵增井なる人の製するにて、初編の帙をひらきしより、排設の美味口あたりよく、今歳後篇の跡仕込を、ちよつとつまみて味ひた

るに、奇妙な仕出しの滑稽方語、かのいやし坊の彌次郎兵衛も、舌打して顚を叩くへし
予感稱のあまりにかく
序することしかり

文化亥秋名護屋旅泊中

東都　十返舎一九題

に據ると、初摺本は、松華堂版。（さうして、この津島土産「此の再摺本」は、後編であつて、これより先、初編が存在してゐたやうである。が、これは後日の詮索に委ねたい。）さて、殊に好資料と謂ふべきは、文化亥（此年、同十二年）の秋には、一九が此の名古屋に來てゐたといふ、此の文末の記事である。文化十二年秋は丁度一九の木曾街道膝栗毛六編の板行せられた後である。無論永逗留ではなかつたらう。或は、例の體驗傳說の如く、自身木曾に行つた其の歸路又は往路でもあつたのか。「六編の再自敍に、前年の秋より善光寺に參り、以後所々遍歷の意が書かれてもゐる。」殊に面白きは、同年の春には「名古屋見物四編之綴足」前編二冊（尾張、靜觀堂版」）（東花元成作）が板行されてもゐるのである。とにかく此の間、增井や田樂、他の膝栗毛五編上の挿繪の贊をした（名古屋の）少壯連、或は四編之綴足の作者とも懇意になりつゝあつたのであらう。時に一九、五十二歲である。

此の序、三面、(一丁半)、附言半丁。著者の此の附言によれば、「津島土産の別號に、祇園の一字」を借りたとある。尚、「表題を祇園守とこそ付たり」ともある。別名、祇園守といふか。二卷ともところ〴〵に挿繪のヒラキあり、玉凰(或は玉齋)、華溪、の落欵がある。内容は、辛抱しい〳〵通讀したが、一九おん大の作の輪廓を忠實に摸して、彼よりより多く下卑たりといはうか。寧ろ方言、風俗の點に於て、該時代其方面の好資料。内容のヒントに就ては、おん大の膝栗毛もさることながら、一面大阪二輪加などの趣向(篇中の惡じやれに於て、上方系統のやうに思はる。)よりも來たか、さうした氣分の著しいのを認めるのである。

〔補遺〕尚、葦齋と別に號した所以は、彼の名伊兵衛の伊から來てゐよう。即ち同音に借りたのである。尚、椒芽田樂は、寧ろ彼の先輩、彼が兄事したことは、疑ひない。現に、田樂には、馬琴の紹介もて享和元年、東都版「挑燈庫闇の七扮(ななやく)」三卷(重政畫)の刊行あることから考へても。尚々、田樂は、名古屋の市井醫、本名は、神谷剛甫である。

——大正十四年十月。

四、著作の增補と「津島土産」初編

四、增井山人の著作增補と「津島土産」初編

最近、市場直二郎氏より左の書簡に接した。

「あの御稿中、增井山人著作目錄にまだ加ふべきものがある樣です。而も刊本です。或は津島土産と

「滑稽驛路梅」に就て

共に彼の乏しい戯作中の南大門(刊本として)かも知れません。即ち「滑稽驛路梅」といふ書です。名の如く、一九あたりの亜流らしいものですが、大分探しましたが、今以て入手致しませぬ。或は御地あたりには、ころがつて居はしますまいか。實はこの書は最初、「心學いろはいましめ」(天保四年巳春正月出板。尾張書林　玉野屋新右衛門、美濃屋伊六發兌)といふすこぶるカタイ本の卷尾の廣告で見ました。それには、

滑稽驛路梅　初編長春出板　二編巳春出板　石橋菴增井著

とあります。之によれば、初編二編と出て居り、確に增井の著の樣です。辰といふと天保三年、巳は翌年、即ち「いろはいましめ」の出た天保四年の樣です。で若しやと思つて、日本小說年表(初版本)を見ましたがありません。次に新群書書目(中本書目)を見ると、やつぱり天保三年の所にあります。

滑稽驛路梅　二　石橋菴增井作　梅亭華溪畫

所がどうもをかしいのは、天保三年に既に二冊とあることです。或は初編が上下二冊となつて居るのか、但しは初編二編で二冊なのか判りません。或は、二編は、實際には出板されなかつたかも知れません。これは現物が出れば、すぐ判ることです。

それからこの書は、「津島土產」の板行からは、十七年も後のことです。又「野圃の玉子」からは、二十七年も間があります。隨分永い間こんなことをやつた男と見えますね。初めは大に通人風をふかして

洒落本の様なものを書き、膝栗毛一派が盛行する様になると、この方へ移つたらしく思はれます。永い間ですから、この外にも色々な戯作をしてゐることでせう。」

成程、「新群書」の書目の中本書目中にも、天保三年度に、唯一つきり載つてゐる。これは増井として有益な發見である。次に、私も偶然の一致といふのか、又は氣をつける時にはおいそれと拾へるといふのか、刊本「津島土産」の初編上一冊の正のものを最近手に入れたことである。市場氏の此の書信は七月十一日出、自分が此の初編上を獲たのは、同十七日夜、不思議である。に就て謂はねばならぬのは、自分が先頃紹介した再摺「津島土産」(洋紙本)は、實は、正の物の第二編の上下二冊である事である。道理で、この洋紙本上の一九の序に、見らるゝ通り「今年後編の跡仕込」とあるのである。(前稿、參照)初編が存在するかの推定は、中つてゐたのである。即ちこの一九の序は二編の序であつたのである。自分の求め得たのは、右の初編の上一冊で、下は欠である。結局この最近入手の元本一冊と、洋紙本二冊とで、初編二編の四冊の中、元本の初編下の一冊が缺けてゐることになるのである。その中又この缺本を探し當てたいと思ふ。次に此の洋紙本を、一冊を上編とし一冊を下編として胡麻化したのは、元本初編の版木が當時缺けてゐたのか、或は求版に都合が惡かつたのか、何かの事情であらう。とにかく私の洋紙本の二冊も元本があつたに違ひないことは、洋紙本卷尾に、求板とあるからである。併、この最近入手の初編上の眞蹟(増井)自身の序と、凡例(共に全文)とを揭げておかう。因みに此本

蒟蒻本やうな土器色表紙。中本、敍凡例其他口繪で五丁、以下本文三十である。丁附は、上ノ一、上ノ二……とある。(挿繪。梅樹逸人(梅逸の捩り號也。)、花溪、玉僊(小寺玉晁の師)等數圖入。)

「同」自敍

敍(この下に、榜示杭を描き、是より埒井領と洒落れたり。)

鸚鵡よく物眞似をすれども口上をはなれず、お染猿よく俳優を眞似れども振附をはなれず、夫潘岳を眞似の彼醜男。西施を眞似たる醜婦等。鶴の眞似をする野暮烏鵜のまねする鷺坂伴内。其及ざるを學んは、泰山を脇ばさんで北海を越るがごとし。大陰嚢を引挾んで早飛脚に行がごとしと。たしなんで見ても情なや月をほしがる猿猴の。性は作者の趾しらず。終に道中膝栗毛に擬して。描き著述をなすといへども。彼書は古今の名馬にして。評判千里の外を走り。此作は駑才にして。恰も闇を曳いだす。しみつたれ牛に異ならず。角文字の國字をもて。冊子の首尾を補ふといへども。文面則涎に比して。其始末正しからず。鄙言亦小便に似て。其程にわる長し。一句一章益ある事を述ず。唯妄言のモウと吼出るまゝの口車を曳て。早牛も遲牛も。涎にはあらぬ津島まで。行程五里の道草を。くらわんと欲する而已。四方君子笑覽の後。牛を馬に乘かへたまふ事なかれと爾云。

于時文化十一

甲戌春

石橋庵眞醉述

次に日本惣社津島牛頭天王神傳の半丁。次は、ヒラキにて、津島祭車樂圖。次ウラの半丁、凡例。

「同」凡例

凡例

此書は名古屋より津島迄五里の間の滑稽なれば趣向の數々由鳥の尾張の洒落の長々しき故先甚目寺に筆を止めて前編の二卷とし、余は後編にあづくる物ならし。

卷中の言葉の尻に[でや]のかなあり是則國なまりにして東都の[だ]上み方の[じや]の類なれば、で。や。と切て讀むべからず、でやとつゞけてよむべし。

又詞の中に[するから]―[いふのさ]の類ひあり是又國の言葉にあらねども名古やなまりのしみたれたるをはしおらんが爲也、見る人其誤りを正して笑ふ事なかれ。

次に、本文、本文の始めは、日本惣社津島土産初編上卷とあり、次の行に、名古屋　石橋庵増井著

——大正十四年八月。

とある。

五、再び増井の著作と傳

五、再び増井山人の著作と傳

前數節以後、今日までに得た新材料、自分の其後に得た彼の刊本著作其他を以て、再び著作年表と

彼の傳をものしておく。傳は、殆ど正確に、彼の作品による論述より確實であり、直接憑く所あつての事である。無論生歿年月も判明した。先づ、著作年表。

イ、増井山人著作年表

一、刊本の部

種類	題名	册數	畫家	著作上の署名	刊行年月	版元
1、洒落本	新織歌妓洒戯	一	不詳	萬壽井山人	文化三年カ	不詳
2、滑稽本	津島土產	二	華溪	石橋庵眞醉	文化十一年春	松屋善兵衛（名古屋）
3、同	津島土產後編滑稽祇園守	二	同	同	同十三年春	同　（同）
4、準洒落本	假日早指南鶉鶉返	一	同	同	文政五年春	美濃清（名古屋）
5、滑稽本	滑稽驛路梅	三	同	同	天保三年	不詳　（同）

今日までの發見では、刊本としては、以上が全部である。中、自分未見のものは、5の滑稽驛路梅の一點。でこれだけは、詳說の資を持たない。他は、津島土產の下の缺本を除いては、凡て家藏本にある。以下略解題を繰り返しておかう。

1、歌妓洒戯（小本一册）嘗ては、「洒落本改題本の異例」（別著、「軟派謾筆」（春陽堂版）所收）として述べたものである。卽ち、洒落本「一向不通替善運」（江都出版。天明八年版、甘露庵蜂滿作、初代歌麿畫並に

作者の自畫）の版木補足し本、且つ改題本であり、なほ悉しくいふと、序二丁分、本文初め七丁分、末尾一丁分計十丁分を新作新刻し、他の本文第八丁より第廿八丁に至る部分は、全部、「替善運」の舊版木をその儘使用、摺出したものである。その再摺中に來る、うた麿落款の挿繪（十五ウ十六オ）は、うた麿筆の落款のみ削つて、あとはその儘である。別に、本文新刻の分の、三ノウ四ノオ。四ノウ五ノオにヒラキ二面の挿畫を入れてゐるが、無論これは「替善運」に見ざるもの、畫者不詳のものである、さうしてその版元も無論名古屋であり、どういふ都合か、江戸から此の版木を買込み、それを新物らしく見せかけるため前後を補足新刻したものである。序は萬壽井山人とし、作者名を明らかにしてゐないが、これは、万壽井も氣が咎めたのであらう。序には、「則ち此小冊は、何某が著述にして、色男の忍び駒、野暮なお客の調子はづれを、よく書(かき)とつたる奇作なれば、予も三絃の糸をもて其緒を綴にしるす　寅の春　万壽井山人」とある通り、自作とは言つてゐないのである。併、此の「歌妓評戯」の刊行年代であるが、序には寅の春とある。新修日本小說年表は、この寅の春よりの推定か、此本を寛政六年に置いてゐる。が、自分からは、増井その人の文壇的（それも名古屋といふ地方的の）出世の年代から、文化に至り自作の著作刊本あるに顧みて、寛政六の寅は、早きに過ぎると思ふ。即ち、自分が、文化三年の寅に置く所以である。（尙、此本、新作小說年表に據れば、相合傘と改題したとも云ふ。）

2、津島土產（中本。一冊）は、新修日本小說年表には、未見、所在に疑問を持つてゐるが、刊本として

存在する。此本、實践の零本一冊に據れば、日本惣社津島土産初篇の上卷下卷の二冊であつて、(家藏本にはその初篇の上卷一冊)初篇上の序によれば、文化十一甲戌春、の新板たることが肯づける。初篇下を缺くが故に、板元は不明であるが、此書の後篇「滑稽祇園守」と同一、即ち松屋であらう。即ち増井の創作物板行の最初としては、此の二冊であらう。内容體裁に就ては、既に述べたから略く。

3の篇「津島土産續滑稽祇園守」の上編下編の二冊は、明治に至り、單に津島土産上下二冊として、獨立的に扱はれ、再摺せられてゐる事は、前に述べた。さうして、此の後篇上に、初代一九の序が物せられてゐるのである。此の後編二冊の内容も、既に述べたから略く。但し、此の「祇園守」初摺本は、下に至り、石橋庵の自跋一丁分があり、更に、奥附の表には、三編豫告(これは未刊であらう)と並に、眞醉の本業の廣告が載つてゐる。これに據り、眞醉の平常生活が明らかにせられて、彼の傳記資料としては、最貴重なる事を思はしめる。それを轉載する。

印鈕彫刻
蠟石印
竹根印
棗心木印

御座舗間類
御好次第仕候

御ひろう申上候
石橋菴眞醉

彫工
みそい二丁目
つた屋伊兵衛

といふので、即ち彼の本業は、彫工、家號はつたや、本名は伊兵衛。（町人であるから姓はない）住所も判明した。倚、その奥附の裏は、板元の列擧で、それに左の如くある。

文化十二年亥春

大阪心斎橋唐物町　河内屋太助

江戸田所町　鶴屋金助

尾州本町十丁目　松屋善兵衛

七、の鸚鵡返は、小本一冊、晉醉書屋の書目では、洒落本の部に入れ、且つ安永二年の鸚鵡盃一冊、出放題夢中の後編の如く取扱はれゐるものである。が、今原本を見るに、鸚鵡盃の後編とも何とも斷つてゐない。且つ此本、元來が地口本（但口は、地口）であつて、當時中京に於ける地口の流行につれて、生れたものであらう。現にその序にも、作とはせず、撰者と眞醉自らが斷つてゐるからも分る。序の一節に「……上は天子の御製をはじめ、詩歌連俳音曲、及び涂噂が奏春唄まで、世の人の言

ひはやす通り文句を種として、かたちに影の添るがごとく（云々）故に似口とは呼ぶなり。されども五音の通ふ而已、意を似せていふにはあらず、彼物を言ふ鸚鵡にや比すべき」とあるにより、題名の意が明らかになる。題簽には、似口早指南と、肩に小さくある。此本、序二、凡例、ヒラキの口絵を中に挾みて二、本文二十九、計三十三丁のものである。凡例は、手ほどきやうの文字を陳ね、本文一ノ表より十五表までは、似口になつた句を載せ、（一行一句）十五裏より末尾までは、それに相應した本文を一行一句に載せてゐる　それと對照に便なるため、イ、ロ、ハ、又は、一、二、三の番號を附してゐる。さうして、似口と本文、共に古今混雜の部と新撰の部とに分れ、古今混雜の部は、イよりキまでの三十八吟ありて、その末に、「右三十八吟八、連中新古の句を集む尤前後混雜なれば席順を論ずる事なかれ」と撰者らしい注意を加へてゐる。即ち此の當時、此種言語の遊戯が、事實に於て行はれ、此本は、その撰集であらう。本文初めには、似口鸚鵡返初編とあるが、奥附にも、午年新版似口早指南　全　二篇三篇追々出來とあるが、恐らく未刊に終つてゐよう。板元は、奥附に、書林　傳馬町二丁目　美濃清板とある　無論名古屋のである（此本、原本、綠色の三方裁ち表紙。題簽は、茶の色をつけ中央に貼り、似口早指南鸚鵡返　全とある。）「穿當珍話」の如き口合本を洒落本に入れてゐるからは、先に「當話問答聞きはつり」の如きもの、後に地口本（京坂にての口合本といふに同じ。）たる此の「鸚鵡返」を洒落本に入るも、また失當ではなからう　體裁また、「穿當珍話」「聞きはつり」「鸚鵡返」、凡て同樣小本である。即

ち自分の此本を以て、准洒落本に入れた次第である。

「滑稽驛路梅」は、未見。略く。

二、未刊本の部

未刊本の著作

前稿、第二、名古屋の洒落本。第三、増井山人が著作の該項參照。未刊本としては、現に、「野圃の玉子」と「南驛夜光珠」(以上、全著作)、「輕世界四十八手」一册(合作本)の第二、見拔かれた手の執筆、以上の二種と他一とを知るのみである。年代、寛政十二年より文化四年に至る。(四十八手、寛政十二年。野圃の玉子、文化二年。夜光珠、文化四年。)唯、「夜光珠」の上下二册は、不思議な内容を持つたもので、

「夜光珠」と「青樓玉語言」

その下一册の自分通讀の智識より推して疑ひない事は、これが、後に花山亭笑馬編の名を以て、「青樓玉語言」の中本洒落本として現はれてゐる。それと殆ど文詞同一、唯地名を更へ、江戸の舞臺にしてゐるのみである。此の變な交渉は如何にすべきか、此の問題に就ては、既に本叢「洒落本改題本の新記錄」の附たり其他で述べてゐるから略く。結論としては、増井山人の文化四年の未刊本を、原作者承知の上で、文政五年に至り、笑馬編の名の下に、若干を變へ、江都出版(カ)に物したのであらう。がと

笑馬と増井

にかく、或は、後世、笑馬・増井を同一人と見誤る文學史家なきにしも非ず、此に別人たる事を明らかにしておく。増井は、名古屋在住の彫工師。笑馬は、尾藩士である。が兩者相識である事は、鸚鵡返の口繪の賛を笑馬が物してゐる事で明らかな事、既に述べた。(即ち「口真似をまた口まねやあふむ鳥、

笑馬」といふのである。)

次に傳記。

ロ、增井山人の傳

此の增井の傳は、其後增井の外曾孫たる名古屋市西區鹽町在住の渡邊鉦太郎氏より聞く所、其他彼の著作上に現れた所を綜合して、左に、その輪廓の確實なる所を示してみよう。

增井山人、名古屋御園町三丁目に住む、彫工にして戲作を兼ぬ。安永三年に生る。戲作の上の號を增井山人、万壽井山人、また父祖美濃の石橋村より出でたりの家傳により石橋庵と號し、石橋庵眞醉とも書く。增井は、姓ならず。別に、蘂齋の號あり。俗稱伊兵衞、諱は時恭、字は豹惠、又彫工としての家號をつた屋といふ。文化より天保に亘る戲作數種あり。俳諧及び地口などの社を爲し、その撰者たりしが如し。弘化三年丙午十一月二十七日歿、行年七十三歳。是より先、門人集りて成れる歌碑あり、(名古屋)東橋町榮國寺に建つ。大正に至り、同市東區覺王山境内に移す。女あり、同府渡邊氏に嫁す。

といふのが、その大體である。

なほこれに就ては、自分が、增井の外曾孫渡邊氏より聞いた話、及び、渡邊氏と同伴、覺王山の歌碑を寫したもの、及び渡邊氏に傳はる增井の遺文などを纏めたものがある。渡邊氏と相識るに至つたのは、自分が、「名古屋の戲作者 增井山人が事」と題して、大正十五年十一月十七日夜試みた名古屋放送局より

の放送が機縁となつたのである。その放送要領は、單に、「祇園守」下の與附其他著書によつての大體を纏めたものであつたが、それによつて、渡邊氏の訪問を受けたのである。增井山人著作考の補遺に方つて、重複ながら、渡邊氏と相議るに及んでの、放送談補遺の記錄を、左に載せておく。

○

（前略）以上が放送の要領であつたが、ラジオの效果の甚大なる事驚くに足りた。當夜放送し終つた直後に、局で自分に向け面會人があつた。誰かと思うて、逢ふと、五十前後の紳商らしい人物。話は簡單に進めるとする。それが今がた放送の主題であつた增井山人の傍系の子孫であつた。家に遺物もあり、その墓も分つてゐるとの事。次の日曜の午前、墓參を約して同氏に別れた。氏は、渡邊鉦太郎というて、名古屋では舊家の一、現在は肥料問屋をしてゐる。增井の娘の緣づいた渡邊家の孫、つまり增井からは傍系の曾孫といふ譯。

二十一日（十一月）約により來訪せられた渡邊氏と同伴、名古屋市東郊覺王山墓地に增井の碑を訪ねた。覺王山の墓とは新しいではないかといふ疑問も起らう。尤もである。それは、東橋町榮國寺（本願寺派）にあつたのを、渡邊家が覺王山へ墓を併せた時、共に換地せしめたのだといふ話。渡邊家は清洲の出である。その清洲傳來の古い墓も共に增井の碑の傍にあつた。

增井の歌碑だけ最も大きく、渡邊家の清洲傳來の小さい墓石や其他四五があつて、一廓を爲してゐる。增井の歌碑は、中央。

增井の歌碑

その表面には、

つねになき風にともしの消とても
彌陀の誓ひは在明の月

右下に、石橋庵無事老人と二行にある。無事老人、又は無事翁というた事が發見せられた。現に渡邊家に無事菴と書した額もあるとの事。

裏面は、

南無阿彌陀佛　　釋信西
　　　　　　　　釋信翠
　　　　　　　　釋尼妙泰
　　　　　　　　釋幻齡
　　　　　　　　釋知齡

天保七丙申歳建之

とある。此の信翠が、眞醉で、增井山入の事である。さうしてその左の妙泰といふのが、彼の妻君でもあつたか。渡邊氏の話によると、增井の直系は絶えてゐるらしい。それがため位牌の守も墓も多少の遺物も、渡邊家に傳はつてゐるのであらう。幻齡などは、夭折した彼の息でもあつたか。增井は、相當の財もあつたが、殆どこれを放蕩に費した。然し、門弟も可なりあつたと見えて、現に此の墓も、門弟が建てたとの事。

增井の家系

渡邊氏と別れた數日、今度は手紙で、家系其他によりて、調べられるだけ調べられたその手紙が來た。其の要點を書く。

伊兵衛の祖父は俗稱不明、美濃の石橋村の出生であるといふ。戒名釋道意、寶曆十二年壬午九月十八日歿。伊兵衛の父は俗名孫八、行年八十二歳、(釋玄淨)。伊兵衛は、石橋庵無事翁眞醉、行年七十三歳、弘化三年丙午十一月二十七日死。(すれば、前掲の無事老人の歌碑は、門弟發意の壽碑とでもいふべきものか。とにかく年號によりて生存時の

遺文「大根之記」

物である事がわかる。）

増井の妻は、果して釋尼妙泰といふのがそれであつた。俗名ヤウ、伊兵衛の妻、其父は、新橋（今の名古屋市南區尾頭橋上）島田屋新兵衛の娘であるといふ。

増井の娘うたといふのか渡邊家に嫁、その孫が當主鉦太郎氏である。

尚、遺文として「大根之記」（現、軸仕立）一篇がある。

大根之記

大根の尾張の國の名産は葉大根の青丹よし奈良漬大根のかすかなる宮重を最上として俳諧の會席には月の輪切りの美とし花に揚句の揚豆腐を安（あか）らひ作歌の友は短冊切三そ一トもじの汁の子にも倭こゝろの和らかなるを賛むそれもかゐわりの二葉より千大根の縷のよるまで女しら髪なる生酢にも齢ひ長根の千年を經千切ほしとなしてこそ春ふき大根の芽出度きためし是にはいかでまさるべき

大根引病氣の腰のあはれなり

右　石橋庵無事老
戯作

尚、一つ畫像がある。君溪といふ男の繪で、巻留の所に、天保十四年卯春、七十歳石橋庵眞酔
別名 無事翁眞像と
あつて 軸の賛、左の如し。

なむあみたの文字な
句のかしらにおきて

南無といへはむかいとらんとある願の彌陀こそ我はたのみなりけれ

石橋庵
無事翁

只上、渡邊氏より報知の要領、又墓碑一見の記錄である。

(尚、渡邊氏が、元より、文藝人として増井の齡廓を知らるゝ筈もなかつたが、それがどうして放送局へ直後逢ひに來られ得たかといふに、丁度自分放送の最中、何氣なくに聞いてゐると、兼て祖母さんなどから聞いてゐた祖母の親父の伊兵衞、御園町二丁目といふのも聞いてゐた通りだ。貫靜(マス井)といはれるが、私自分は貫靜(シンス井)と思うてゐたが、成程これもマス井と訓めぬ事もない、若し間違つてゐたら謝まるだけといふので半分聞て飛出し、丁度居宅から局へは三四丁であつたので一走りにやつて來たとの話であつた。誠に放送奇談の好例と思はれた。(昭和二年一月)

——只上第五ノ補、昭和三年三月。

「撰集樂」の初二編の刊行

再補記——増井の著作刊本尚一個を發見した。冠句の撰集本である。「撰集樂」の初編二編の二冊、枕本型。序文とも各十八丁づゝ。見返しに、石橋菴夫人評、狂俳冠句　撰集樂とある。序文に初編は酉の春。(卽ち天保八年)二編は、天保十二年丑の春の意があるゝ(卽ち、共に極の晩年の刊本である。)初編序には、石橋菴無事老とある。內容は、古卷混雜の部と、新撰の部とに分れ、新撰の部は、名古屋及び附近の投稿である。版元は、名古屋傳馬町五丁目菱屋久八郞(万卷堂)であつた。奥附によると、此類冠句、狂歌本の數種を出してゐた本屋である事が分る。

——昭和三年七月。

東里山人（鼻山人）の業績

東里山人、一名鼻山人の業績を尋ねてみようといふのである。傍流作家ではあるが、洒落本から人情本への推移期に於て、また文學史上その數頁を飾るに足る活動を爲した。彼は、洒落本又は人情本趣味を以て、殆ど終始したと思はれる。彼の著作全部に亘つての考察ではないから、何とも斷言は出來ないが、彼の滑稽本には動もすれば、洒落本と相似たり、分類の困難なるものを見うける。（例へば「驛路の鈴」など。）また彼は、業績、その著作の全過程よりいへば、合卷がその量の尤にゐるやうであるが、さてその合卷も、偶々は、滑稽本とも人情本とも又は、洒落本とも似通ひたるを見受ける。（「出放題無智哉論」や「傾城客問答」の如し。）決して、單なる古物語の時代化や、傳奇小説・童幼趣味・敵討物一點ばりに、合卷の筆を著けてゐたのではない。春水（初代、爲永）ほどには、術は賣らず（流行に武家出の素性は爭はれぬと賞めてやるべきか）且つ遊蕩卑俗の生活趣味にも比較的純な心持で徹底もしてゐたやうに思はれる。（當時一般の御家人らしくである。自己享樂が先づ第一で、賣らんかなの作者態度は二の次といふ意味に於て。）それだけ、今日からは、我々の同情が賭けられる。春水や其の門流などの目に見えた氣障さがないといふだけでも、殊に、その晩年落魄、世外に窮死したといふに於

てをやである。眞に自己閉僻の、戯といふ文字のふさはしい、戯作者らしい、憫れな生活、一生を送つた男として、私は先づ、彼の名を銘したいと思ふ。先づ彼の業績を語る、その總論として、小傳並びにその著作年表を、ものする。

○東里山人小傳

彼の傳は、諸書、大同小異である。唯、未だその精なるに至らぬ憾みはあるが、今姑らく、諸書の記する處を綜合して、左に、錄さう。

東　里　山　人

九陽亭と號し、又鼻山人と號す。「麻布三軒家に住す。公の典事たり。通稱を細川浪次郎(イ一)といふ。(鼻ノ圖アリ)如斯印章あり。俗に京傳鼻といふ、山東庵が門人なり。」(戯作者小傳)

イ麻布に居宅せる御家人(御勘定付御普請役)實名を忘れたり。(江戸作者部類)

イ元幕府の與力たりしが(下略)(增補續靑本年表)

「文化四五年の頃、和泉屋市兵衞に請うて、初めて臭草紙(當時合卷既に行はる)を印行せられしより、年毎に此の人の作出でたり。然れども抜萃(群なるノ意カ)なるあたり作なし。其作り狀南北と相似たることあり。前輩の舊作を剽竊して作れるもの多かり。」(江戸作者部類)

と、馬琴は、酷評を加へてゐるのである。強ちかうばかりでもないかと思へる。

「中本の作あり、書名は覺えず何にかありけん、三卷は見たることありき、忘れたればいふがひなし。」

（同）

馬琴の無視

と、人情本作家として、（馬琴のいへる中本は、此の意）彼東里を知らないやうな、無視したやうな口吻である。春水すら、「明烏」のみを擧げて、「此餘は耳に入るものなし」というてゐる馬琴であるから、東里山人の此の業績など、てんで頭になかつたかも知れない。或は、東里山人、鼻山人、同一者であることを知らなかつたのかも知れない。

春水の先蹤か

倂、東里山人の、中期に於ける業績、例の洒落本を人情本となして、後世の作者例へば春水などの價を爲したといふのは、古記錄には見當らぬが、彼の、著作年表の上からも、これを他人情本作者のそれに比べたら、尤もと肯づける話である。「戯曲小說通志」は、此の意味の事を書いてゐるが、藤岡氏講述の「近代小說史」も、またそのまゝこれを承認してゐる。即ち「後の人情本の價を作りて、爲永春水の先蹤を爲しゝ人なり。」とある。が、先蹤を爲した、價を爲した主動力であつて、決して唯一、その者ではないと、私は思ふ。現に、晩期洒落本に、猥的な筆を弄して多作した一九は、どうか。彼が、この種の洒落本から、鼻山人（東里山人）等に與へた所も多からう。殊に、「山佳里の月」（東里山人作）などを、人情本の最初に持つてゆくならば、（自分は、此の「山佳里の月」などは、人情本とも斷定は出來

晩年

ないやうにも思ふ。どちらかといへば、洒落本だと思ふ。)(此の「山住里の月」を人情本の最初におけるもの「新修日本小說年表」也。)すぐその翌年の、初代一九の「清談峯初花」なども、注目に足りると思ふ。唯、性質上、なる程、東里山人(鼻山人)の作は、一九などの初期人情本に比べて、比較にならぬ程、既に人情本形には出來上つてゐる。此點、人情本の發達を說かば、彼東里の名は、沒却し能はぬまでのものはある。

「活東子云、吾師無物老人話に、浪次郎晩年漂泊して、芝切通しにて傳授屋といひて、奇方妙術などを小さき紙に記して賣れり。而も流離して、曝書繪(イ倫)となり、俱に相隣りて活計せしが、後に江戶橋四日市の小店に移りてより、聲聞せざれば、其淵瀨を知らず、云々。」(「戲作者小傳」)

安政六年九月を以て歿す、享年七十四歲なりき。(「戲曲小說通志」)

此の歿年は、明治二十六年「小說家著述目錄」の著者及び同二十七年「戲曲小說通志」の著者の合致して謂ふ所である。とにかく後來の著書、これを踏襲してゐるやうである。次に示す著作過程からも、恰もこれは、眞實らしくも思へる。唯、享年に、異說がある。即ち安政六年七十四歲歿とすれば、天明六年生となる。然るに、「靑本年表」文化四年の項では、「天明五巳年に出生し、本年二十三歲」とある。これに、一年の相違がある。即ち何れが正しいか。假りに、靑本年表通り天明五年出生(したがつて安政六年歿、七十五歲である。)とする。によつて、左揭著作年表に年齡を附してみよう。

著作年表冒頭の「曉昔の茶唐」は、艶示樓の作名であるが、これは、鹽屋艶二の艶二とは別人。（新修日本小説年表は、混同してゐる。即ち艶二、艶示樓、この二と示、樓の有無に氣づかなかつたのか。御丁寧に同人だと駄目を押してゐる。とにかく予は、凡て己惚の意味に通はしての作名であつて、唯顔似といふばかり、全くの別人だと見るのである。しかも艶示樓は、京傳門人であつて、例の鼻印もある。）これが後の所謂鼻山人（東里）と同人であらうことは、嘗て述べた「本著、別掲參照」如く、？として附記しておく。（著作の外題には、「年表」を基とし、他に參看した。年表に洩れたるもの、他を以て補ひ、又全く何れにもなきもの、家藏本によつて、補足した。）

○東里山人著作年表

一○は東里山人署名、△は鼻山人署名のもの。●を頭におけるは、飜刻活字本あるもの。
種別。洒（洒落本）、合（合巻）、黄（黄表紙仕立合巻）、滑（滑稽本）、情（人情本）、噺（噺本）、讀（讀本）の謂也。

種別	署名	外題	冊（合巻ハ巻）數	畫者	年代	年齢
洒（小本）	艶示樓	曉昔の茶唐	一	豊丸畫	寛政十二年	二六
合	○	菊童子配盃	六	豊國畫	文化四年	三三

●黄〇復讐大全筆の山物語	六	春英畫（青本年表）	文化四年	二三
黄〇鄙舎者富多無禮話	三	月麿畫	同　六年	二五
黄〇清川文七元結濫觴	六	美丸畫	同　七年	二六
黄〇菅尾松秋葉樹照天姫黄昏草紙	六	春扇畫	同	同
◦右、文化十二年、再摺せるが如し。（久）				
合〇お伽歌之助念猫物語	六	同	同　八年	二七
滑〇田舎通言驛路の鈴	一	同	同	同
滑（合巻體裁）〇阿膀茶番口切のせりふ	三	同	同	同
合〇小町櫻花之面影	三	國丸畫	同　九年	二八
合〇梅若姫松若姫梅柳筆繼分	三	春扇畫	同	同
合〇敵討道成寺清姫太郎晴雨齒	三	美丸畫	同	同
合〇玉喜久全傳	六	國直畫	同　十年	二九
イ（玉喜久全傳天岩戸曙草紙）				
合〇玉屋新兵衛併光事跡室蛭花魁	六	春扇畫	同	同
合〇酒は燗酌は娘逸本氣戯作口開	三	同	同	同

合〇薬櫻姫卯月物語　六　同　同十一年　三〇

黄〇登客浮世元陽意氣　三　同　同　同

合〇六合雜劇樂屋雀　三　美丸畫　同　同

●右、青本年表は、文化十年。

合〇今昔宿直物語　四　同　同　同

●右、青本年表のみにあり。

合〇趣向は大帳振袖揚卷若衆助　六　國直畫　同　同

滑〇馬鹿多譯合鑑　一　豐國畫　同十二年　三一

●右、青本年表は、十三年。

滑〇片言雜話田舍講釋　一　歌川國信畫　同　同

●右、青本年表は、合卷に入れ、二巻(十丁物)とせり。無論誤り也。

黄〇人はみめよりたどころ教草戲言試筆　三　同　同　同

合〇よきことなきく累返すゞ壽草紙　六　同　同　同

合〇目出度かしこ二度目清書　六　國丸畫　同　同

合〇藤中將姬蘿絲織　六　春扇畫　同十三年　三二

合〇觀喜樂哀怒註文通書物語	五	美丸畫	同十三年	三二
◦有、一名、松浦佐與姫[illegible]奇談。				
合〇大當八卦開卷見通安部清明辻占帳	二	國信畫	同	同
合〇色と酒飲は散ぬ花の頃浮世何道敎連傑	三	美丸畫	同	同
合〇艸(分イ甑)浪花梅枝	六	同	同十四年	三三
合〇物見松女熊坂	六	春扇畫	同	同
◎洒(小本)△娼妓美談籬の花	一	北溪畫	同	同
黄〇節季夜行馬鹿物盡	三	春扇畫	文政元年	三四
黄〇寶船黄金俺	三	同	同	同
黄〇山吹長者欲物語	三	國丸畫	同	同
合〇註文通作滑稽多詰穫	三	美丸畫	同	同
•有、青本年表は「二[illegible]新形」として、文化四年に置く。				
合〇當意即妙出傍題無智戲局	四	門直畫	同	同
◎洒(小本)△蘆の花後編歸宇久爲言	一	白水(泉英)畫	同	同
情△雛卯角談晦日の月	二		同	同

・右、後の「春色由佳里の梅」第二編と同一ならん。

情〇廓中色情由佳里の月	二	英泉畫	同		同
・右、後「春色由佳里の梅」第三編全部として收録。—（後説を看よ。）					
合〇金玉櫻兜鉢植	三	春亭畫	同	二年	三五
合〇胡蝶夢幻物語	六	春扇畫	同		同
黄〇餘計の仕業	三	同	同		同
合〇よしの伊之助園花薄雪草紙	六	同	同		同
合〇畫組は京傳趣向は楚滿人其俤嫩丹前	六	同	同		同
合〇よみ本じたて敵討晴夜鳥	六	同	同	三年	三六
合〇虚實分解傾城容問答	五	同	同		同
●合〇聞道女白來也	六	同	同		同
合〇音曲情緒道	四	初代廣重畫	同		同
合〇去程に是は亦哀也女刈萱	六	二代春好（改春扇）	同	四年	三七
合〇十種香萩の白露	五	國直畫	同		同

・右、青本年表のみに見ゆ。

合〇安達原男一軒家　六　重信畫　同　四年　三七
合〇噓氣傳來開卷未來記　五　美丸畫　同　同
合〇高尾全傳若葉配羽傳　六　豐國畫　同　同
•右、文化四年「菊童子配盃」の再摺カ。
情〇生死流轉玉散袖　三　英泉畫　同　同
•右、安政四年再版。
噺〇仕形落語工風智惠輪　一　二代春好畫　同　同
•右、天保二年「仕形ばなし」と改題再摺、弘化二年三摺。
合〇其行衞白浪日記　六　同　同　五年　三八
合〇小町)()()(誂差込　六　英泉畫　同　同
合〇出放題無智哉論　二編　六　初代廣重畫　同　同
情△廓かゞみ　六　同　同
●玉菊全傳花街鑑　二　英泉畫　同　同
•右と同物異裝か。
讀〇源平外記壺分草　五　二代春好畫　同　同

合○大内山月雪花志	九	國直・英泉畫	同	六年	三九
合○童子教訓昔（むかし）製（じたて）誓近道	四	二代春好畫	同		同
合○東里一編海道茶漬腹内幕	三	英泉畫	同		同
洒○𤍠學問後編青樓女庭訓	一		同		同
情○仇競戀浮橋	三		同		同
•右、一名、仇比二世物語。					
情△契情意味張月	六	英泉畫	同		同
合○金•儲傳授書	三	國丸畫	同	七年	四〇
合○釣狐花面影	六	英泉畫	同		同
讀○夢の浮世白璧草紙	六	岳亭春信畫	同		同
●情△傾城此糸蘭蝶記（初より四）	一二	英泉畫	同		同
洒△傾城肝粒志	二	英泉畫	同	八年	四一
洒△青樓曙草	一		同		同
●情△風俗粹好傳	六	英泉畫	同		同
●△契情肝粒志（初より五編）	一四	泉壽・政信畫	同		同

・右、洒落本同名の再摺改装、補綴にして、初編二は八年、弐編三・三編三は翌九年、四編三・五編三は同十年の刊也。（此中の初編二冊六、洒落本の同名と同一版木、同内容也。）

合〇出放題 無智哉論 三編 六 英泉畫 同 八年 四一

合〇初役江戸立入 五 同 同 同

合〇三ヶ月お仙端唄おせん 其俤錦繪姿（青本六十三） 六 同 同 同

・右、翌年の「三日月お専物語」と同本カ否カ。〇小説家著述目録は、同翌年の「三日月太郎」と三者同一に認めをる如し。

合〇夫は豐前是は近江 彦山靈驗記 五 貞雅畫 同 九年 四二

合〇兒鑑東孝經 六 英泉畫 同 同

情△永明闇記廓雜談 九 同 同

情△三曲廓日記朝霧全傳 五 玉成畫 同 同

・右、年表・人情本略史等なし。

●情△廓鑑餘興花街壽々女 三 白水（英泉）畫 同 同

情△詩人孝經江戸花誌 前後編 八 同 同

・右、村上氏の「人情本略史」に出づ。年表になし。

噺〇流行噺安賣　初より三編　三　同　同

情△傾城胸中極秘傳　三　菱川政信畫　同　十年　四三

情△松操美談紫草子　三　同　同

•右、「人情本略史」は、十卷と云。

●情△珍說豹之卷　六　政信畫　同　同

情△廓雜談餘興北里通　六　英泉・泉壽畫　同　同

•右、一名、人情早引娘節用（廓雜談後編）。

讀△賢女全傳千代物語　一〇　英泉畫　同　同

讀〇足利持氏鎌倉小双紙　一〇　同　同

讀〇敵討繪本天下茶屋　一〇　同　同

合〇三日月お専物語　六　英泉畫　同　同

合〇みかづきおせんの後へん　三日月太郎物語　六　同　同　同

•右、松本幸四郎補助の名を入る。尚、此本「お專」の後編なりと叙にもいへり（六八）

合〇しほくみ第二番目面白妙須磨雪平　六　國安畫　同　同

情〇人情寄縁吉葉花　三　英泉畫　同十一年　四四

•右、文政四年刊「玉散袖」の後編。

合○千葉模様好新形　六　二代豊國畫　同十一年　四四

合○七種薺物語　六　英泉畫　同十二年　四五

•右、墨川亭雪麿と合作。

讀△都鄙物語　一〇　同　同　同

情△廓の意氣地　二　文政年間　不詳

•右、「人情本略史」は、文政十年と云。

情○恐可誌　六　國貞畫　同　同

情○お染久松艶の油屋　六　同　同

•右、鯉丈と合作。

情○傾城腹の巻　六　政信畫　同　同

情△孝貞婦鑑實の巻　九　英笑畫　同　同

情△春色起原花街櫻　三　國芳畫　同カ　同

•右、一切の書目になし。（家藏本による）

◉情△廓中餘情山住里の梅　九　天保元年（文政十三年）　四六

•右、春水序を加へて、「春色由佳里の梅」と改題。(天保十二年)

情△朧氣物語　三　英泉畫　同　同

合○出放題無智哉論(イ零)四編　六　廣重畫　同・二年・　四七

合○天津空村雨物語　六　二代豐國畫　同　同

合○大和假名懸想文賣(うり)　五　泉晁畫　同　同

情△人間萬事心意氣　一二　英之畫　同・四年・　四九

•右、「心意氣」、三編三。四編三は天保五年。尚、四編挿繪は、英泉カ。

情○光澤言語(イ春色合鏡)合せ鏡初、二、三編　九　同・五年・　五〇

•右、天保八年、三編にて完結。

情△さとのいろ花物語　六　同　同

•右、翌年完結せり。

●情△四季眺望恩愛二葉草　九　國直畫　同　同

•右、年表になし。

情△神田雜談お玉が池　九　英泉畫　同　同

•右、年表になし。

情△妙　塵　記　六　政信・國平畫　同五年　五〇

合○風俗伊勢物語（いまやう）初編　四　貞秀畫　同六年　五一

・右、天保九年、同六編にて完結。計二十四卷。

滑△浮世酒屋喜言上戸　三　同七年　五二

嘶○明増而目出度咄（あけましてめでたいはなし）　一　同十年　五五

情△風流脂臙綾（べにあや）　六　貞秀畫　同十一年　五六

情△綾　花　志　六　刊行年不詳　不詳

・右、「風流脂臙綾」の續編也。

情△春色廓の鶯　六　歌川國種畫　天保年間　不詳

嘶△緣取ばなし　一　胡蝶園春升畫　弘化二年　六一

嘶〇腹筋寄合嘶　一　貞秀畫　同三年　六二

合○膝栗毛餘興讀而未來記　四　同　同　同

合○膝栗毛餘興讀而未來記二編　四　同　同四年　六三

・右の二、年表等一切に無し。

嘶○放　生　會　一　嘉永三年　六六

▽僞作

合〇有職鎌倉山　三　美丸畫　文政二年

•右、寛政三年版、蘭德齋畫の同名のものを、東里山人として、且つ畫のみ更へて再刻。

滑〇浮世滑稽附會案文　一　英泉畫　刊行年不詳

•右、一九の文化元年版「附會案文」を改題、挿繪を更め再刻せるものといふ。

總計（概數百三十一種）

內譯

〇合卷（黃表紙風とも）七一　（僞作一とも）
〇滑稽本　六　（同）
〇洒落本　七　（疑「嘯昔茶唐」とも）
〇人情本　三五　（洒落本の改裝本一とも）
〇噺本　六
〇讀本　六

備考―勿論、此概數百三十一種の中には、合卷物などの初編、二編なども、刊行年代又は綺組の違ふものは、それ〴〵一種づゝに數へた。例へば「出放題無智哉論」の如し。

○存否未詳の部

「慶長以來小說家著述目錄」に據れば、右と重複せざるもの、なほ若干あり。試みに左に錄す。存否の次第は、凡て後考に俟つ。

○さて〱長物語　六　○高慢男物語　不詳
○黄金花作も陸奥　四　○滑稽奇談尾笑草　三
○大磯虎物語　三　○忠信芳野双紙　不詳
○天狗の話　三　○一夜源氏　三

•右、種類並に刊行年とも未詳。

尙、「讀而未來記二編」(弘化四年)の奥附にありて東里山人著なるもの、その中、右々に洩れたるもの、左の二あり。此類の雜本、他にまた多かるべし。

○川柳きな〱艸紙　二編　貞秀畫

•右二編とあれば、初編は、無論刊本あらん。

○風流謎の親玉　全二冊　同　畫

•以上の二本、「讀而未來記」と同じく、森治版也。

—以上、著作年表、完。

次に、二三の作品から得た彼の、傳記閲歴に關したものを、資料的に抜かう。

○「（前略）予多年滄浪のごん八となつて、餔其糟歠其醨而後に、卓槃の皓々の白よきを味ふ。（下略）」（敵討大全筆の山物語序。—此本、帝文「名家短篇」に飜刻があるが、これには、敵討筆山大全と外題がある。—）

文化四年版によれば、彼若うして、京傳に食客たりし如くである。

○「（前略）既に先師京傳翁も壯時、種々の小冊子を編んで、世に鳴る事最も大なりき。云々。」（珍説豹の巻後篇序。東里山人）

右は、東里山人、鼻山人別樣のやうに、しやれて書いた自叙である。これにきつぱり、先師と京傳を崇めてゐることも、注目に足りよう。

○東里の全盛期

東里は、右の著作年表にも知られる如く、その活動期は、文化・文政・天保へかけてであるが、その全盛期は、文政を前後してのやうである「籬の花」、「廓宇久爲壽」、「花街鑑」などの、人情本に刺戟を與へた諸作、「意味張月」、「蘭蝶記」、「肝粒志」などの人情本の名作。凡て此期である。年齢からは、彼の三十歳前後から五十歳前後の約二十年である。偖、この人情本界にも相當に刺戟を起し、合巻物にも

相當の量を殘した、その彼が、晩年の落魄、失意の位置は、どうしたものであらう。これに就て考へたい。それには、合卷に於て種彦などの蹶起、人情本に於ける春水の開祖の誇稱、これなどが祟つてゐるのかも知れない。或は、例の天保十二年の取締で、彼も睨まれた作者の一人であつたかも知れない。現に、文政頃の刊本和印本には、明らさまに、鼻山人を署名したものさへ見受ける。（此の本の畫、英泉ならん。）さうした大膽さは、他の彼編作の和印本にもなほ多く見られたであらう。さうして、前にも述べたが如く、彼の作は、たとひ合卷と雖も、人情本臭味、洒落本臭味のものが多い。忠孝一點張り、義臣貞婦の押賣は割合に少いやうである。それに、一「花街鑑」の作者としても、睨まるゝ事多かつたであらう。かうしたしぜんの壓迫觀と、一つは、後輩どもに彼の文壇に於ける地位を奪取せられたためとによつて、彼の晩年は、あの如きみじめな逼塞を來したのではなからうか。

和印本に鼻山人署名の物あり

性格の推定

彼の才が、永久性がなかつたのだとは、彼のために、いひたくはない。先輩の摸倣ばかりしてゐたのだから、思想枯渇は已むを得ぬ、とは、謂ひたくはない。先人の摸倣剽窃に耽つたのは、何も彼東里の一人ではないから。凡てが然りであつたから。矢張り私のいふ通り、最後まで時運に乘りえなかつたのと、性質がねばり強くなく、割合に聲聞利欲に恬淡であつた（力）のと、それに彼の遊里（延いてはこれを作物化した戲作）に、純な享樂心、陶醉感があつて、强ひてこれを賣物にしなかつたせゐだとしたい。丁度純洒落本作家の誰彼が、京傳の如きは例外として、多く割合に生命（作物の上の）が短かゝつたやうに

彼が合卷の多作、とにかく極の晩年まで作物があつたのは、文政當時の隆々たりし聲名（作家としての）の餘波、その末勢を示したものに過ぎぬと思ふ。恐らく、彼は彼の眞の文學的生命は、天保の終りに、その終焉を見たと、彼自身も考へてゐたらう。聲聞に恬淡であつたらう、或は、彼の文學的生命は、天保末に既にその終焉を自らも覺知してゐた、さうした私の推斷の根據を左に示さう。それは、人情本「春色由佳里の梅」の發見に就てである。

「春色由佳里の梅」に就て

〇「春色由佳里の梅」に就て

由佳里の梅は、初編三冊・二編三冊・三編三冊九冊揃の人情本であるが、年表によれば、文政十三（天保元）年、彼の名（鼻山人）に於て刊行せられ、それが更に天保十二年、春水の序を添へ、春色の二字を冠らし、（此時は恐らく鼻山人の名は削られて）刊行せられた、とある。その爲永春水の序のものは、帝國文庫「人情本傑作集」上卷に所收せられてゐる。今、それを見ると、校者は、全く春水の作の如く取扱つてゐる。がこれは、全くの誤りで、序が春水といふだけで、實は、初編は、初代一九の洒落本「廓の意氣地」を丸抜き、二編は未詳、三編は、鼻山人作の「由佳里の月」そのまゝである。帝文の校者も、後に、續帝文の「續一九全集」を編むに至り、その所收の「廓意氣地」が、すでに「人情本」に收めた「由佳里の梅」の初編なることに氣がつかなかつたのだと見える。とにかく全く同じといつてよい。（その末節

一九作を剽竊す

に、一二語の修正はある。)で、この由佳里の梅の初編は、一九の作を竊んだとは分るが、その二編は何を持ち來つたのであらうか。恐らく鼻山人作の「晦日の月」ではなからうか。これを此の二編に充てたのであらうと思ふ。三編は、これは確實で、予の藏本「由佳里の月」と、帝文「由佳里の梅」の三編とを照合すると、全く同じである。唯、序の鼻山人を、爲永春水に代へたのみである。(辛卯(兎の繪あり)のはつ春よい事を聞く耳のながき日しるす」といふ年月の暗示まで同樣である。無論これは、序者名だけを埋木したのであると思ふ。と、此の「由佳里の梅」は、全然春水に關係がない。唯、序をものしたといふだけである。さてこの春水の序のものは、「廓の意氣地」や「由佳里の月」からいふと、實は三摺である。(或は再刻か)。その前に、鼻山人の作名で、天保元年に「由佳里の梅」があると年表は敎へてゐるが、この「由佳里の梅」(天保元年版)と、天保十二年版の「由佳里の梅」とは、全く同一物であり、版も同じ物であらうと思ふ。と、鼻山人として、耻づべき、寧ろ彼の不德義を曝露した事實が、明らさまになされる。即ち天保元年は、まだ初代一九生存中の事である。然るにその當時、一九の「廓意氣地」をそのまゝ取り入れたものを初編とし、(二編、三編は、自分の作としても)以て、「由佳里の梅」と題したその不良心さがである。こんな、これ程露骨な場合が外にもあらうか。(一方、原作者生存當時に於て。)と、そこにまたをかしい事は、鼻山人作として、別に「廓の意氣地」といふのある事である。一九の外題と同樣である。これは、一九のものに、語句の二三を作りかへた位ゐのもの、即ち、これ

晩年春水に壓さる

が「由佳里の梅」の初編となつたものではなからうか。此の鼻山人の「廓の意氣地」(單行本として、「年表」の文政年間といふもの。)と一九の同名とを較べてゐないから、何ともいへないが、恐らくは、本屋からの注文が動機で、此の一九の「廓意氣地」の版木に、少部分の埋木をして、作名を更へ、鼻山人とし、後(天保元年)これを、自分本來の「晦日の月」「由佳里の月」と合編して、「由佳里の梅」としたのではなかつたらうか。さうらしく思へる。とにかく、惡くいへば鼻山人の不良心、よくいへば、以て當時の斯種作者としての彼の聲名を窺ふに足りる。それが、をかしいことは、因果は覿面で、自分の爲したと同じ事を、今度は、自分の物までそつくり、春水のものゝやうな風に拵へて、次期天保末に出版せねばならなかつた。すでに、此時、彼は、一九から奪つたものを、更に春水に奪はれた、即ち自己の文壇的生命は、蝕んだと見ていゝ。しかも、これも一九と同じく、自己生存中に爲された事である。彼は、無論、鼻山人の代りに春水と埋木せられた後摺「由佳里の梅」を見てゐたに違ひない。そこに、如何の悲哀があつたらうか。或は、三摺料(由佳里の月などの單行からは、春水序の物は、三摺目である。)を、しこたま取つたかも知れないが。

かうしたちよつとした事柄にも、一九―鼻山人―春水、此の三者の文壇的推移の跡が、窺はれると思ふ。

東里の畫

○東里、鳥蟲を描く

というても、鳥は雀、蟲は蝶の例を發見したばかりである。雀は、餘程本人得意であつたと見えて、二本に描いてゐる。黄本の中で、「於玉ケ池」上卷の扉、「心意氣」後編上卷の口繪終りの半丁分、此の二である「於玉ケ池」は、單なる雀で、此雀東里山人畫とある「心意氣」では、竹にとまつた、羽ばたきの雀で、此半丁、東里山人畫㊞（此印は、例の梟印）とある。共に拙ではない。蝶は、「心意氣」二編の上冊で、蝶一匹、此蝶　東里山人戲畫とある。見様見眞似で描いたものであらうが、人物よりも此種のものに、長じてゐたのか。

人情本の風格

○東里人情本の風格

「心意氣」三編の上の叙、ヒラキ一丁分の上欄に、秘傳の七ヶ條といふのがある。これなどは、東里の人情本が、洒落本の臭を未だ多大に包藏してゐた例證として好ましいものである。それを左に、擧げておく。

「秘傳の七ヶ條」

一すがゝきをひくは、新造の役なり、じゆん番にこれをつとむ、三味せん番といふ、よ

く日ばちこまをそろへておくり渡しする時、糸は内しやうよりうけ取なり、

一豆いりをくふて口中の匂ひを消すには、飴が妙なり、そく座にそのうれひをのぞく、

一空き請には、御ばつうをかうふるべきと書なり、これ文字に當らざれば、よし悶にならぬといひ傳ふ、

一空病キをおこす時は、糸にて二のうでをしつかと縛りおく也、萬一脈を見られても、ゐしやの心をまどはさんがためなり、

一内しやうのせはの禿と、おゐらんのせはの禿とは、髪結せんの高下あり、コレ拂ひの滯ふると、とゞかふらざるとのゆへなり、

一年明キまへと成、おのれと恥を知ツて、お針部やにいたりて、習ふもおかし、

一待人のまじなひ、いろ／＼あれども、先はうなぎの串を疊のへりの四ツ角へさすなり

○彼の逸作の三

彼の作物一斑（その合巻、洒落本。人情本。噺本など）に就ては、別に「東里山人の作物」に於て述べよう。今は、唯、年表其他あらゆる書目類に逸せられたもの、三に就て紹介しておかう。

一、三曲廓日記　朝霧全傳　中本五册　文政九年正月より
文政十年正月

これは、東の朝霧、都の花桐、浪花の夕霧、此の三人の傳といふので、現に此の朝霧全傳の第五卷の終りにも、三曲廓日記全部十五卷、二編京都の部、花桐全傳、三編浪花の部夕霧全傳とある。此の十五卷全部が刊行せられたものか否かを知らないが、恐らく刊本があらう。現に、讀本風に製本し直した、後に上方で再摺したらしい「夕霧全傳」といふのを嘗て見たが、(半紙本五冊物)此の續編のやうに覺えてゐる。此の朝霧全傳は、中本五冊で、畫は、瑞齋玉成、一向知らぬ名であるが、英泉の筆のやうに思はれる。然し英泉としても、いかなる理由で、かうした眼なれぬ匿名を使つたか、且つこの玉成といふのが、一向他に見はれてゐないのも、をかしい。後考に讓る。題名の三曲といふのは、「籬節繼節投節の三曲もその頃の事とかや、亦いふ衣紋坂より三曲にまがりて廓へいたれるちなみもあれば、外題に是を冠しむるもの也」と凡例にある。内容、「第一因果應報の道理を說」から「第五、解脫發心の出離を說」まで、主家の再興、惡人の跋扈、忠臣貞婦の苦節、孝女の身賣、などゝ寧ろ讀本の内容を具へたものである。朝霧の情客は、仙八といふのである。

二、春色吉原花街櫻　中本三冊　刊行年不詳

上中下三卷のその下卷一冊、によつての概念である。國芳畫であることが珍らしい。人情本の挿繪は、殆ど國直か英泉かであるにである。(國芳畫のもの、此の「花街櫻」の他に、天保元年「昔語土手編笠」(浮世山人作)、同三年「奇談和可紫」(喜久亭山人作)同年以後の「沈魚傳」(金水作)天保三年「須磨の

月」（風亭馬流作）の四種を「年表」に見るだけである。）其の口繪等の畫、下卷に一二葉を見るが、流石に英泉とは、違つた風格が見えてゐる。主人公の男女は、平藏といふ傾城、鎌之介といふ若者である。

三、膝栗毛餘興 讀而未來記　合卷 初編上下（二十丁） 二編上下（二十丁）　弘化三年春 弘化四年春

貞秀の畫で、賣出しの若手畫家貞秀と、老大家との東里とである。これだけ見てゐれば、晩年でもなか／＼東里は東里として文壇的に存在してゐたやうに思はれる。二編の上下續き錦繪表紙は、海岸茶見世の體であるが、それに吊した提灯に、一は貞秀、一は東里作とある。彼の晩年、貞秀に、此他にも畫かしめてゐる處から思ふと、貞秀と何か特殊な關係を生んでゐたのかも知れない。

此の作梗概は、「膝栗毛物の研究」に讓つて、今は說かない。

以上、ほんの東里に就ての一走りであるが、今回は、主に彼の業績の羅列のみに止めて、作品の品評、彼の作者としての價値論などは、凡てを他日、「東里山人の作物」に於て述べたい。

○東里の歌句

題春光景，七言。けさたつ春に鳥も縫てふさよ佐保姫も衣や著そめぬうす紅梅の一重ふたへに、山もかすみも帯をしめゆく（心意氣四編上）□咲花に心遣ひの朝な／＼來てみよし野のくらまさりけり（同後編上）□櫛の模様もいやな柳ごしはないの毛まりにはづむ客達（九陽亭、晝夜の鏡）□こゝろなき身

にもさかりはしられけり花のお江戸の春の夕ぐれ(東里山人。田舍講釋(国渡しまつ入よ朧のしるし笠(九陽。由佳里の月の上)など。

以上、餘白あるまゝ、見當りたる二三を載せておく。

――昭和二年六月二十三日。

雨の宮風の宮に就て

「かみ」といふ言葉

○雨の宮風の宮について

一九の異本「反古張障子」(本著、二三〇頁參照)にも、末社の意味で、雨の宮風の宮とあつた。これは、無論末社の意である。大盡を大神と見て、その取卷を末社。雨の宮、風の宮方、ふざけた一例である。此の末社をもて單に神とも「かみ」ともいうた。例は、寛政末享和頃の洒落本にざらに見受ける。茶屋女たちは、平氣で使つてある。普通、大盡客の取卷の謂である。然し、此の雨の宮風の宮の例は、始めてである。面白い言ひ方だ。(久)

作者生活の諸相

作者所謂戯作者としての、俗傳化した戯作者ぶりに就ていふのではない。作者（今の言葉では、作家）としての彼等の、その出途、並びに作者としての生命の長短、業蹟などに就ての、短評を下してみたいと思ふのである。無論、すでに諸家によつて言ひ古された事であり、別に新味とてはないが、彼等を一堂に集めて、總括的に物してみるだけのものである。

作者の意味

先づ私の謂ふ作者といふのは、これを營業的作者の意味に限定しておく。それ以前にありても、無論作者と稱し、彼等も自ら稱へたのであらうが、此等は、多くは半營業的、且つ出發點も余業であり後期純作者の如き、文學人としての全生活をまだ具備してゐない。殊に、京傳の如き、途中筆路を枉げはしたものゝ、前期喜三二などの輩に比べて、まだ文學に生き文學に死なん（寧ろ作に生き作に死なん）の心底が見えてゐた。喜三二や歸橋の輩、作者としてまた半面の偉大さがあり、嘗て、純作者に比し勝るとも劣らぬ―質的に考へて―作を殘してゐるが、が要するに、全的な努力ではなかつた、と見做して、除外する。即ち主に町人の手に作者の株を奪ひつゝあつた京傳の出現以後に、これを割りたいと思ふ。即ち今、紙上に上さうとする人物は、これを出世の年代から列擧すると、京傳・馬琴・

京傳以下の六家

三馬、一九、種彦、春水、の六華である。

先づ、その出世作、一般出途の形式に就て、比較してみよう。作者傳の如き、傳説まじりの說話は省く。唯、業蹟の上からの比較をしてみたい。先づ、出世の年月と死歿の年月とを、六家全部に就て示さう。

六家の處女作と生歿

	（處女作）	（歿）		文學生活年數
京傳。	天明二年	—文化十三年	（寛暦十一年生）	三五
馬琴。	寛政三年	—嘉永元年	（明和四年生）	五八
三馬、	寛政六年	—文政五年	（安永四年生）	二九
一九。	寛政七年	—天保二年	（明和三年生）	三七
種彦。	文化四年	—天保十三年	（安永九年生）	三六
春水。	文政四年	—天保十四年	（寛政元年カ）	二三

右のやうに表示して來ると、初代春水の案外、文學者としての生活年月の淺いことに呆れられる。馬琴の最も長いのは、彼の長壽のせゐであるから、例外として、他京傳と一九と種彦とは、似たりよつたりの數である。三馬が、春水に次ぐ少い數である。それにしても、黄表紙—洒落本—讀本と、一身によくその部類の名作を最も多く殘した、（此の他の五家に比較して）京傳は、その天稟の偉大であつ

たことが、京傳びいきならずも肯かはれはしないか。(自分は、京傳は、洒落本に於て特り偉大なりとは思ふが。)

以下、その出世作の考察である。

京傳は、政演(畫名)として、既に安永七年に、お花半七開帳利益札遊合　二(十丁)といふのがあるといふ。但し此本、政演畫ではあるが、政演作なりや否や不詳のものである。尚、天明二年の「御存商賣物」に移る以前、安永八、安永九、天明元に亘りて、畫一方のもの、又は畫作かと思はれるもの、書目年表等には見られるけれど、不詳なれば省く。がとにかく、京傳の出發點は、作家としては、黄表紙だつたらしい。天明五年に初めて息子部屋(令子洞房)を出した、これが洒落本の初作である。以後洒落本作として、十數篇を數へる。が同時に、黄表紙の作としても、名作「江戸生艶氣樺燒」以外數十篇がある。寛政三年の處罰以後、洒落本には手を絶りして、以後黄表紙、合卷、讀本と、漸く彼の天禀に背く(?)作が出で始めた。それは、洒落本作家としての彼自身の優秀な技倆が掣肘せられたため、さりとて作家生活を維持するために生じた已むを得ぬ現象である。が、彼は誰しも考へてゐるやうに、洒落本作家として、十數篇(現在の數)の洒落本作を遺してゐるといふ點のみに於ても、尠くとも文學史上の王者であると謂へると思ふ。(悉しい事は、外骨氏著の「山東京傳」などに、比較的悉しい年代別、作の年表がある。それに讓つて、今は省く。)

馬琴も、その初めは、黄表紙であつた。京傳門人大榮山人と署名した「盡用而二分狂言」は、丁度寛政三年の版である。即ち馬琴（しかも未だ馬琴の名ではないが）の擡頭は、京傳が洒落本に筆を絶つた、後世我等が、認めて、彼の眞骨頭が露はれたと觀察すべきその記念すべき年に始まつてゐるのである。がその馬琴とても、まだ、片々たる黄表紙作家であり、又その執筆の内容に於ても、時流の所謂戯作を追うたものが多い。彼が讀本作家として、斯界、否當時文壇の覇者を以て自認したのは、はるか後年文化期の事であり、即ち先是、享和期、曲亭傳奇花釵兒の如きは、（享和三年版）宛然芝居脚本に擬したもので、彼の讀本作家としての後世の自負には、これを裏切る事甚しいものである（その作をおとしめるのではない。私は、他の機會に於て、此等初期の彼の讀本類や黄表紙、又は他の編著例へば「戯子名所圖會」の如き類によつて、彼の初期俳優讃美、芝居贔屓などの事實を舉げてみたいと思ふ。）

〔なほ、馬琴には、「高尾船字文」五冊が、寛政七年版で、讀本としての第一作といはれてゐるが、此作、當時の振鷺亭などの先輩諸作に追うたもので、未だ、馬琴の眞個のものではないと思ふ。馬琴の讀本作家としての胎生は、享和期にありと思ふ。〕

但し、此の「花釵兒」もまだ中本型で、勿論一冊の讀切、未だ後年の八犬傳の著者の如き、空前なる傳奇小説の大家たる風丰を示してゐない。傳奇小説家としての過程を踐み來つたのは、文化三年の「椿說弓張月前編」に始まり、その地歩を愈々確實にしたのは、文化十一年の「南總里見八犬傳初輯」の發兌に

よつての事である。

三馬

三馬は、これも京傳などと同樣、その出發點は、黃表紙であつた。即ち寛政六年の「天道浮世出星操」三卷(十五丁)がその處女作であるといふ。間もなく寛政末には、五六の洒落本(戯家山人は、三馬に紛ひなしとの予の判斷により、「仲街艶談」及び「三人醉面」などを含む。)を生んだが、その洒落本も、多く次期の中本(滑稽本)に似かよつた內容、筆致を旣に孕んでゐた。が、まだしも彼は、他に較べて純一な道を歩んでゐたかと思ふ。即ち黃表紙―洒落本―滑稽本と道は異つても、內容には、殆ど一貫して、彼の作家的個性が純一に滲み出てゐるやうに思はれるからである。彼の本格は、無論事後から考へたら、中本(滑稽本)作家としてであらう。即ちその中本の初作は、內容の上から、文化三年の「酩酊氣質」であるかと思ふ。文政四年の「茶番早合點初編」に至るまで、作としては、二十篇內外、多作の方ではないが、よく彼の本領らしいものを殘して死んだ所に、彼の幸福さがあるかと思ふ。

一九

一九も、三馬と同じやうな道を歩んだ男である。即ちその處女作には、大阪に於ての丸本の補助作「木下蔭狹間合戰」がありはするが、(寛政元年)これは、小說物以外であるから省く。彼の小說壇上に於ける處女作としては、六樹園飯盛の趣向に據つての作だといふが、とにかく寛政七年の「心學時計草」三(十五丁)である。此歲他の二作の黃表紙作、同八年以後、每年十篇以上を數へる多作を黃表紙に殘してゐるが、これといふ程のものはない。以後文化年度に至り、合卷形式に移つてからも、彼は驚くべ

き多作を遺してゐる。酒落本にも、「見通し占」(寛政十年)を初めとして、享和期に至つて、十篇以上の作がある。まだしも、その作中「[illegible]」「素見數子」「[illegible]」。その後「[illegible]遊冶郎」「吉原談語」などは、酒落本作家としての彼の名を留むるに足りるものであると思ふ。が後の事後より見ての眞骨頂とも思はれるのは、享和二年版の、道中膝栗毛初編の類である。爾後その續編・並びに類似作が多い。が氣の多い彼は、この期以後と雖も、黄表紙又は合卷・時には讀本類にまで、筆を染めてゐる。駄作秀作とりまぜて、彼ほどの多作家は、この六家の中では、長壽にして而も精力家であつた馬琴を除いては、誰も及ぶはなからう。それだけ膝栗毛の作者・酒落本十數種の作者としてより以外には、彼は印象が稀薄であるかと思ふ。それだけ、彼は、場當り作家たるの隨一人だつたと謂へると思ふ。

種彦は、ちやうど浮世繪師の細田榮之と感じが似てゐるかと思ふ。勿論身分は、榮之は高く、種彦は低く、較ぶべくもないが、同じく俗文學俗畫の類に遊び乍ら、何處ともなく他の作者他の畫家に比して、氣品を保つてゐる點、さ程賣らんかなの態度にも出なかつた、と思はれる點など、二者相似であるかと思ふ。その種彦――、彼の處女作は、文化四年の「阿波鳴門」、讀本がその發途である。酒落本にも一作を存し、その「山嵐」は、翌文化五年の出版である。人情本にも、一作があつて、晩年期天保十年に「縁結月下菊」がある。が彼の本領は合卷(草雙紙を合む)の作者であつた。合卷としての初作は、「鱸庖丁青砥切味」であり、文化八年の作であるが、その長篇作家としての出途は、芝居狂言に借り根

本を草双紙形式で行つたと思はれる「正本製」(その初編は、文化十二年)であり、名作「田舍源氏」の初編は、文政十二年である。即ち彼は、文化四年の出遊以後、初期讀本の作數種、洒落本作一を除き後期人情本の一作を除いては、彼は全く合巻(黄表紙)に終始してゐる。それが、合巻作者としての、彼に活動の地を與へた天與の機會の、恩惠のせゐもあつたらう。加へて彼自身の天稟具備のせゐもあつたらうが、とにかく彼は、幸運兒であつた。唯、晩年、田舍源氏に由つたか、又は例の秘本「水揚帳」に由つたか、不明であるが、とにかく恐懼して命を縮めたのは、可哀想であるが、戯作者としては、比較的純一な途を歩んでゐたやうに思ふ。又、合巻(草双紙)に於て、今日いまだに彼の獨壇場であつたかの如き觀を與へるのは、それ丈まだ彼は瞑すべしだと思ふ。人情本に容れられず、洒落本不振、合巻に於て、彼の活路を見出したのは、強ち彼の利口さばかりとも謂へないかと思ふ。

春水は、初め二世振鷺亭を名のつたが、後、二世楚滿人となり、文政四年始めて鯉丈と合作になつた「明烏後正夢」の作があり、翌五年には、讀本「燕子草紙」の作があつた。即ち彼も讀本及び合巻に於て、(合巻には二十種近く)相當の作を殘してゐるが、その本領は、無論人情本であつた。洒落本を巧みに變形、一層その取材を豐富にして、社會百方を採り入れたのは、少々(或は大いに)興味はあるが、とにかく、それで天下の宗と自分も認め、人も許したらしい業績を殘してゐるだけ、えらいと思ふ。即ち人情本に於てとにかく出途し、これを以て畢生としたらしいだけ、彼もまた比較的、純一な道を

歩んだ、恵まれた作家であつたと思ふ（因みに、初代振鷺亭は、文化四年に歿したといふ「讀一戯曲小說通志」を信ずると、それ以後例へば、文化九年に、合巻「四月八日物語」三巻の作を初めとして、以後振鷺亭の名に於て、合巻又は滑稽本、人情本類などに、數種の作がある。即ちこれ等を、全部初代春水の初期作と見做さねばならぬが、それは、或は未だ信ずるに距離があるかと思ふから、今は、二世楚満人としてが彼の處女出版であり、二代振鷺亭當時は、現れた業績はないとしておく。尙此の問題は、今一度考へてもみたい。）

先驅者としての京傳

以上で、大體の觀察を終つたが、とにかく比較的純一な道を歩んだのは、此の六家の中、三馬・一九・種彦・春水であると思ふ。馬琴の後期は、順風に帆を孕んだやうな形跡である。唯これらの諸家の恵まれた機運（作家としての）を生んだ先驅者となつただけ、筆禍を受けたことは論外として、相當に焦慮しまた創作的に苦しんだのも、京傳であるかと思ふ。後進のために、凡ての道を拓いてやつたやうな所がある。洒落本に於て、三馬・一九の先鞭を（更には、人情本作家の春水に暗示を）垂れ、合巻に於て種彦の先鞭、また滑稽本に於ても、三馬・一九などの先鞭、讀本に於てまた馬琴の先蹤、即ち江戸後期、色々な戯作形式の元を生んでゐるだけ、（勿論彼と同期の他の傍流作家の功績もあるが、）彼は、恰も、文藝復興期のダ・ヴヰンチの如き地位にあつたかと思ふ。アンゼロであり、ラフアエルであつたものは、以下の三馬、一九、種彦、馬琴、春水の輩である。

とにかく、馬琴また京傳門人として名を出し、其他、春水のやうな自惚氣の强かつた男でも、楚滿人などの名を借りた中に於て、系統なくして、戲作界に飛び出し、凡この潮流を拓いた如く思はれるのは、彼の偉大さである。勿論、三馬・一九・種彥の三者は、誰の門人とも斷らず、又誰の二代目も名のらなかつたが、此等がまた戲作で立つてゆかれる基を拓いたのも、京傳であることは、無論である。

門人關係

門人關係を調べると、京傳は、天才的の所がより多くあつたせゐか、馬琴及び洒落本「睟書茶唐」の作者艷示樓(これを、自分は東里山人だと思ふが。)の外は、餘り大した人物は、生んでゐない。(關亭傳笑、感和亭鬼武も、京傳門人であつたともいふ。)三馬一九には、門人は多かつた。三馬は、浮世繪師の國芳と肌合が似てゐたかと思ふ。卽ち彼の肌合に惚れて、しぜんに門人が多く寄つたかと思ふ。(春水も、初めは三鷺と稱して、三馬の門人であつた。)一九は、彼の自己宣傳によつての取込法によつてである。殊に彼は、屢々旅行して步いて、その先々、江戶の大家を振廻したせゐか、彼の門人と稱する者が多かつた。勿論滑稽本の宗として、彼の名聲を利せんとする田舍作者も多かつたらう。春水にも、東都文壇の花形、人情本の宗たる偶像美に憧れて、門人となるものが多かつたゞが、傑出した作家は出てゐない。)一番弟子が比較して少いかと思はれるのは、種彥であるが、これとても、仙果の如き校合を受けた者は、相當に多かつたらう。絕無とも謂ふべきは、馬琴である。

貧乏の體驗者

貧乏の體驗者は、最も誰であつたらう。これも京傳ではなかつたらうか。商人七分で、鄙吝だつた

と謂ふか、それも貧の體驗からだらう。一ばん儲け出した、金にもけちなやうであつたのは、文献的にはいへないが、一九と春水かと思ふ。がその二人とても、今の流行作家の印税ほどには、無論無かつた筈である。まだ三馬の化粧品業(「江戸の水」など)は、確實な財を倅の小三馬に遺すだけのものはあつた。

此論、纏りないものに、なつたかと思ふが、以上、姑らく此の筆を措く。傍流作家であつた京山・東里山人・振鷺亭・金水などの論は、以上六家の補遺論と共に、後々の事とする。

——昭和三年一月。

天保改革と春水

天保十三年七月春水歿說

天保十四年十二月廿二日春水歿の說

天保十三年六月、例の水野越前守から春水が手ひどく痛しめられたのは、その宣告文と共に周知の事である。然るに、此に我らの疑點の起るのは、その春水の歿年である。壽は、五十四歳と一定してゐるやうであるが、その歿年である。普通は、同（十三年）七月十三日、手鎖中に歿した、とあるがである「戯作者小傳」などには、これを明確にしてゐない「天保十三壬寅年公より絶版仰付られ、重き御咎を蒙りしが程なく歿せり」とある。葬地は、諸書凡て一定、築地本願寺中妙善寺とある。（「江戸時代戯曲小説通志」の妙傳寺は、誤。）御咎め者であつたから、歿年等もわざと明確にしなかつたのか。それにしても、出版物に於て、これを裏切るものあるは、どうしたことであらう。

唯、自分の所見では、春水歿年を、翌十四年に繰り下げてゐるものが二個ある「増補清書本年表」に、天保十四年癸卯年の項で、その雜記に、「十二月二十二日爲永春水歿す、享年五十四、築地本願寺中妙善寺に葬る、法號釋龍普居士」とある。他の一個は、馬琴の「著作堂雜記」で、丁度或る本屋の世間話として、此の十四年十二月二十二日に死んだといふのである。恐らくこれが正確文獻の唯一であらう。天保十三年七月とするのと、天保十四年十二月とするのとでは、約一ヶ年半の相違である。藤岡作太

十三年說は種彥と混同

郞氏の「近代小說史」はじめ、近世の著述殆ど十三年說を取り、佐々氏の如きは、間もなくの笥晦流義である。唯一個、「著作堂雜記」に據られたか、何に據られたか不明であるが、十四年十二月歿として ゐるのは、村上氏の「人情本略史」(その二〇二頁)である。

偖、此の十三年七月(それも十三日說と翌年十二月說と、どちらが正しいか。私は、今、春水の過去帳其他を調べてゐないから斷言は出來ないが、これは、十三年說は、全く誤り、種彥の歿と混同せられた結果だと思ふ。二人共、幕府から責を受けた身である。種彥は、身分柄、又組頭の辯疏もあつて、直接の咄はなかつた。が暗々裏には、謹愼を強要したと見られる。つまり境遇が似てゐたのと、業蹟も略々似てゐる。で、種彥が、この天保十三年七月十三日歿して、十八日か十九日に發喪した、その種彥の死を、春水にまた混同したのではなからうか。(種彥の死を七月十三日とするもの、「青本年表」)その混同から、藤岡氏の如き、御叮嚀にも、左の如き二重の錯誤があつた譯と思ふ。

「(前略)種彥自らには何事も無かりしが、折ふし病あり、恐懼の余愈々身を害し、幾くもなく七月十八日年六十にして歿す。春水も痛心のあまりにや、同月十三日手鎖中に歿すといふ。嚴令一下して同時に二作者を殺せるなり。云々。」

「勸善美談敎身鏡」は天保十四年

偖、天保十三年歿說を裏切る著作といふのは、「勸善美談敎身鏡」の中本上下二冊である。從來此本刊行年代未詳の部に入れられてゐるが、(「新修日本小說年表」には、書名だけあつて、作者も畫家も刊

行年代も現れてゐない。）紛れもなく初代春水の作、天保十四年春の出版、英泉畫のものである。

上卷の作者自序を見るがいゝ、刊行年代も立證せられ、且つ上司の責に懲りて、鞠躬如、如何に春水が教訓屋に裏返らうとしたか、その苦慮の程が窺はれる。無論この署名の春水は、染崎延房の二代春水ではない（二代春水は、弘化二年頃からの存在である。）まづ、序の全文を抜かう。

勸善益身鏡の序

三人の行ひを思慮して見時は可否ともに我師となるべき教こそ古聖の金言なり、又他の風俗見て己風俗直せとは俚俗の諺、今やこの益身の鏡は古き物語の中より撰出して、幼稚のよみ看て身の益となりぬべき事をのみ記したれば其まゝに表題を益身の鏡とはなづけはべる、朝夕に向ふ鏡の塵をはらふて姿の花はうつせども心の曇を常にみがきて清くする事稀なり

我こゝろ鏡にうつるものならば
　さこそ姿の見にくかるらん

とは、むかし人のよみたりけん、是この神哥は文辭をかざらず、唯教訓となるおもむきをうつし出たれば、あしきを悪む心より善にうつるの便ともなりなんか、斯るはかなき筆のすさみも讀て勸善のはしとならば、内侍所の神鏡に不恥と、書林が梓に鏤ぐ事とは

なりけらし

卯の春　教訓亭　春水誌

「同」內容

教訓の押賣、彼の衷情尤なるかなといひたい。「内侍所の神鏡に不恥」とは、吐いたも吐いたり、然し「これでは、禁止も下されめへ」と皮肉に出たんもあらう。さて此の卯の春である。これは、紛れもない天保十四年の卯である。假りに今一廻り前に遡つた卯とすると、天保二年であるが、此頃は、これ程に、教訓や勸善の押賣をせねばならぬ事情にはない。と、狂訓亭を教訓亭とまで變へる必要もである。（倘、狂訓亭と稱したのは、天保三年の「梅曆」からだとの一說があり、果して然らば今更謂ふまでもなからう。）即ちこの本、恐らく初代春水の最晩期に屬するもの、しかも已むを得ずの作であつたらう。それにしても、よく上司の御示しを恪守したものと、今更感心せざるを得ない。

內容に及ぶと、まだ〳〵勸善や教訓の押賣はひどい。口繪の終りに、道歌やうの「曇りなき駒の鏡ぞ尊とけれ、心のちりを常にはらふて」があつて、それに、勸善堂（春水の、當時窮余の別號）とある。これでもかこれでもかといつた調子である。序でに、本文の內容、その目次だけを拾ふと、○雅俗の善惡○神靈の感德。○武士の信實。（以上、上卷）。○相者の陰德。○旅路の陰德。（以上、下卷）。末尾に、此本第二輯があるやうに書かれてゐるが、未刊であらう。

奥附、如左。

忠孝名譽 三十六佳撰	全本三帙 英泉畫 國直畫 春水著
勸善美談 益身鏡	第二編 全二冊 同著 同畫
江戸	教訓亭春水著
江戸	溪齋英泉畫
書林	京橋南左エ門町ニ側 大島屋傳右衛門版

とあつて、次に一丁、爲永春水精剤の、處女香一廻り百二十文の宣傳がある。

この「益身鏡」、かうした際物的のもので、内容は、却つて下らないものであるが、(彼の苦衷には同情はしても、)まだ英泉の挿繪に於て、とりえがある。なか／＼堅確な手法で、彼の版畫の美人などとはまた違つた、山水田野の描寫、なか／＼にいゝものがある。即ち、初代春水は、この一本によりても、十四年存在説が裏書されると思ふ。但し、十三年説を何處までも固執しようとすれば、十三年七月以前に、初代が書いたもので、それを翌年正月、出版したものだ。序の卯の春は、出版を見越して

作者自ら半年の以前に、かく記したのだと。かうした半歳以前執筆の變則もあるにはあつたかも知れぬ。かそれならば、出版時、春水遺稿とすべきである。この本第二輯のあるやうな豫告も、益々をかしいではないか。遺稿とすれば、物が物故、却つて上司からは責められようし、また問題の起つた、筆禍のために自滅した當時の一流大家の遺稿とすれば、賣行も倍加したであらう。即ち商業からも、果して事實死んでゐるなれば、遺稿とすべきではなからうか。今一つ、反證がある。即ち十四年に於ける彼の著作物が他にもあるからである。未見本であるが、「新修日本小說年表」に、その書名が現れてゐる。

天保十四年の他の著作

その合卷の部、天保十四年の項に、「教訓本と草双紙とを折衷せし左の四部も開板せられたり」とある中に、「意見早引大善節用　一冊、爲永長次郎、溪齋善次郎」とある此の一部である。雅號を斷たれて、爲永長次郎、溪齋善次郎としてゐるのが面白い。長次郎は、無論、春水。善次郎は、無論英泉である。これが十四年の生存中の作で、死後のもの、即ち遺稿と思はれるものには、尙左の二書がある。

○教訓ちかみち　四　狂訓亭春水　歌川貞重　（天保十五年）

○孝信開運日記　三　同　作　浮世庵國直　（同　）

遺稿出版

弘化元年とあるが、元來此の改元は、天保十五年十二月二日であるから、無論出版は、天保十五年中であらう。是れ紛れもない彼の遺稿出版である。

「修身鏡」見付の「三十六佳撰」は、たうとう未刊に終つたらしい。執筆の存否程度も、曖昧である。

とにかく、初代春水が、天保十三年六月(その十一日)の嚴しい處分には、大痛を感じ、但し作者としての彼の生命・地位は、苦しまぎれにも、此の「修身鏡」やうの妥協的著作を爲さしめた。その心情がいぢらしい。かねて彼の歿年を、十四年說に取る反證として、此の一眇作を紹介したまでである。

英泉の教訓作

(補) 當時、初代春水の相棒であり、畫家であつて戲作の才を兼ねた英泉にも、彼獨自の此種教訓的の繪入戲作があつた。無論彼の過程には、前後數十種を見受けるが、此の天保改革の直後の十四年十五年にである。即ち同十五年辰春は、名古屋永樂屋の江戸の出店から「白癡問答」、翌弘化二乙巳の十二月二十八日の序、出版は翌弘化三年の春であらう「道戲問答」(白癡問答の二編)。弘化二巳春賣出しの「教諭謎々春の雪」の如きである。凡て中本である。

― 昭和六年六月。

意見早引大善節用に就て

●●再補―最近、春水の天保十四年出版の他の一作を入手した。例の「年表」にもある「意見早引大善節用」で、內容、體裁、合卷ではない、寧ろ滑稽本である。中本型序共三十丁物であるが、(英泉の繪入)、無論名の如く教訓本である。如何に天保改革に彼等が恐縮したかは、これにも分る。口繪の書林店先の體にも、看板は、四書註解、增補早引節用集、經典餘師といつたものである。本文の說明は略くが、凡て教訓味である。唯、その奥附が、文獻的價値がある。即ち、天保十三壬寅十二月御免(一行)、同十四癸卯二月發行(一行)、作者　爲永長次郎(一行)畫工　溪齋善次郎(一行)東都書肆京橋南紺屋町三河屋甚助(其他の書肆計三行)とある。即ちこれに、また春水の天保十四年生存說が、裏書されよう。故人とも何ともないからである。

― 昭和三年七月。

尾張一ノ宮居住

春告鳥三編序

爲永春蝶が事

爲永春蝶は、爲永春水(初代)の門人、尾張一の宮にゐた男ぐらゐの事は、誰人にも簡單に知られてゐる事であらうと思ふ。

最近、一宮市史編纂の森德一郎氏から手紙を寄せて、此の春蝶に就て知る所なきやを質して來られた。成程、氣がついて、先づ普通活字本の類を探ると、先輩の誰人からも、此の春蝶に就ては何とも書かれてゐない。仕方がないから申譯にと、家藏少々の人情本をひねくり廻した。行き當りばつたり春蝶々々と探すのである。と、二三材料らしいものにぶつかつた。それを先づ御披露しよう。

一、春告鳥三編の春蝶が序。二、閑情末摘花卷之三の卷末廣告。三、玉兎壺の卷の口繪。以上である。

春告鳥三編の序なるものは、帝國文庫の梅曆。春告鳥にも無論ある。今、その序を、原本によりて、その儘記錄してみよう。

春告鳥三編序

來る春もまた來る春もいちはやく。おなじ音をなく鶯の。玉の聲よりうらゝかに。明る初春初日影。光りかはらぬはつ空を。珍しそふに見はやすぞ。賀太平の人ごゝろ。三都

はいふもさらなり。おくれがちなる片田舍。山里の侘住居も。心ざいさむ春の色。梢の雪の眞しろきも。いつしか梅の初花や。その立枝さへ佐保姫の。霞の袖の深みどり。操たゞしき姫小松。野邊も賑ふ若菜つみ。こほりも今日は解そめし。若水波や澤邊の水。四澤にみつる春水先生。御ひいき多きに人そばへ。幸ひ今度下りし序に。狂訓亭をたづねたれば稽古ながらに此本の。序文を綴りて見よかしと。いとねんごろなる言葉にあまへて。鈹鶯のさえもなき。音色を恥ず片言を。こわぐながらならべしにして。爲永大人の門に入たる。戲名を世に春告鳥。初音をやうく出すのみ。狂訓亭をひゐきの諸君。何とぞ予が名をも。呼せ給へと願ふになん。

江戸人情本の作者の元祖
狂訓亭爲永春水門人
尾州一の宮　狂花亭　爲永春蝶述

といふので、これによると、此の年春（春告鳥三編の年、即ち天保八年）又は前年（天保七年）末に江戸へ下り、かねぐ田舍で敬慕してゐた春水に逢ひ、入門を許され、早速此の序文の執筆となつたのであらう。また春水としても、始めて逢つた田舍出の當時の文學青年（又は文學中年）、普通だつたら

序文を書かすこでなからうが、才幹に見所ありと思うての事か、又は田舍者でも入門料の澤山も持參したので、內々添削し乍ら、春蝶の名の下に此の序文を發表したのか、そこの所は何とも分らない。氏名不詳の文學的田舍青年（又は中年）が此の天保八年から、春水門人、春水に因んで春蝶、更にそれに因んで、狂花亭と號した事は、事實である。

春蝶の狂歌と句

さて此の春蝶、狂歌又は發句をよくしたと見えて、（よくせずとも人眞似にやつたと見えて）此の春告鳥三編に、ところ〴〵狂歌の贊をものしてゐる。それを拾ふと、戀したふこゝろはともにつきそはん歸り木曾路の夢もうれしき、薄雲にかはりて狂花亭春蝶（春告鳥三編上の口繪）〇うき旅や泊り〳〵の枕にも高き山ありひくき山あり、尾州狂花亭春蝶（同）〇引浪になく音も遠し小夜千鳥、門人春蝶（同揷繪）〇氷烈たちまちに春暖（あたゝか）にいたるを艸紙の勸善懲惡に耻（はぢ）ずて、連（つれ）になる蝶も花見のうらゝかさ、尾州一宮の住　狂花亭爲永春蝶（玉兎堂の卷の口繪の中）。

右の玉兎の句、その下の款によると、此の玉兎當時は、故鄕へ歸つてゐたものらしい。すると江戸滯在は、天保八年だけの事かと思はれる。

「婦女八景」の作

閑情末摘花卷之三、これは無論松亭金水の作であるが、その卷末、新版物廣告の中に、この春蝶作の人情本の廣告がある。如左きもの。

吾妻名所婦女八景（はつけい）　全六冊　爲永春水校合　爲永春蝶稿本

尾張の國なる山鳥山人、東都(あづま)旅寢をなせしころ、つれ〴〵に戯作なたのしみ、狂訓亭の門人となり、中の郷偶居(かりずまゐ)のうち、つゞりならべし女八景、師匠もおよばぬ人情本の極意、古今稀代の新板なり。

と大分譽めあげてゐるが、これに據ると彼は、江戸にゐた一年位の間、中の郷に寓居してゐたと見える。すれば、此の「婦女八景」は、天保九年頃の新板であらうか。なほ、前號（狂花亭の他に、併用もしたか。）を、山鳥山人―これは無論尾張に因(ちな)んだものであるが、―といふたらしい。然るに、此の「婦女八景」は、新修日本小説年表に據ると、十二とあつて、靜齋英一（英泉の門人）の挿繪だとある。この冊數は、さてどちらが本當なのか（或は、上下合本の六冊、即ち卷は十二で、兩者の數は、共に正しいものかも知れない。）尙、此の「婦女八景」は、「春告鳥」「末摘花」などと同じく、小傳馬町三丁目東側中程の文溪堂丁子屋平兵衛が版元である。尙、此の春蝶は、春水の門人の中では、新米ながら相當に重んぜられたと見えて、この「末摘花」三の卷末、同じく廣告の中に、「春告鳥」の初編二編三編四編の出來うり出しの廣告があるが、これにも推奬の意味の廣告文を、狂訓亭門人爲永春蝶述として書いてゐる。（此文略）

中の郷に寓居す

右は、今差方つての人情本原本からの引抄、綜合であるが、市史の森氏から得た新材料には、一ノ宮在丹羽村の鷲津塾に春蝶が學んだらしく、同塾で大沼枕山と相知り、枕山、天保六年江戸へ歸り、そ

枕山、春蝶を春水に紹介す

の頃から春水に、春蝶を紹介してゐたらう。春水への入門は、かね〴〵鷲津塾で、同門の佐藤牧山や枕山などから聞いてゐた所によつたものか。(が、かねて春蝶自身、夙に春水に私淑はしてゐたらう。久蒲)及び天保十年春、春蝶は、「爲永春蝶情史題辭」を一宮の森春濤に依賴して居る、などの事があつた。倘、この森氏材料の最後の春蝶情史、これが所謂「婦女八景」の事をいうてゐるのではなからうか。とにかく其他分らぬ事が多い。御存じの方あらば、斷片記錄なりと、御教示を願ひたい。一宮市史材料の喜びばかりか、郷土を同じうする小生の喜びである。倘、「婦女八景」の所在これなきや、是非一度、その內容に觸れたいと思ふ。

春蝶作のどゞ一

附記——中本「どゝいつ圖會」(春水補綴、英泉戲畫)の初編に、此の春蝶作るの都々一が散見してゐる。これも師春水の眞似であらうが、とにかく彼の都々一作の例として擧げておく。(作年代は、どゝ一圖會初編の天保十三年頃の、その以前、春水に師事以後の事であることは、無論である。)

〔初編〕今さらに愚痴もいふまひなげきもせまひ、添はざ命がありやせまひ(尾州、春蝶)〇つらゐ悲しいとうげを越して、なんでたやすくきれられう(春蝶)。なほ、同二編、英泉畫の色摺口繪の中に、贊として狂歌がある。頗る優待の方である。曰く、鶯も音いろや恥ぢらん爪音に、梅が枝うたふ春のきむすめ(春蝶)とある。倘、此のどゝ一圖會初編の天保十三年頃、既に尾張に歸つてゐた事は、右どゝ一の署名に尾州とあるのからも、推定されると思ふ。

——昭和二年十月。

種彦の滑稽本

種彦の滑稽本の話である。彼の文化十二年刊「鶍鳥囀(かけすのさへずり)」といふものの事である。最近一寸した刺戟によつて、私も此の所藏本に價値を措くやうになつた。もと〳〵種彦としては、類の尠い滑稽本—合卷の形式ではあるが—だとは思うてゐた。その刺戟といふのは、

「高島藍泉は、人の知る如く、柳亭種彦の名を繼承せし人なり。同書(筆者の前文によりて、藍泉の藏せし寫本、洛東子編の戯作者傳に、藍泉の附記せしものといふ。—久彌。)に、

「手遊びの小冊に、▲茶番のいろは、▲浦島爺、▲キッチャントン〳〵、▲火焚婆などあるは、目下藏する者甚だ稀なり。又人情本に、▲縁結月下の菊、秘藏の書に、▲春情水揚帳、滑稽本に、▲百舌鳥の囀なぞいふ物あるは、知る者さへ稀也」

秘藏の書は別として、以上の稀本を探し出し、(云々)、然し探し出すのが、一難事なるべし。」(「典籍之研究」第一所載。樂雅言第一—精衛子)

といふのである。但し精衛子氏の此の引かれた藍泉の語が、全部が承認されはしない。今日の我々

「緣結月下菊」と「水揚帳」

の四迷には、此の中の「緣結月下の菊」や、秘藏本と稱する「水揚帳」などは、寧ろ平凡化してゐる「緣結月下菊」(三冊)は、種彥唯一の人情本として、(天保十一年刊、國貞畫)其の飜刻は、村上静人氏編の「人情本全集」第十一卷を飾り、「原本、家藏本にもある。挿繪國貞として、人情本の風變り也」と「水揚帳」は、これも秘藏稀本のやうにいはれてゐるが、案外寓目多く、現に自分は六度これを逢へて、其の原本を見てゐる。其の繪畫(不器用文平―國貞)を抜いた文詞のみは、既に數年前或る一社の刊行物の中に入れられ飜刻せられて、比較的流布されてゐる。他の茶番のいろは、浦島爺、キッチャントン〳〵(「列傳體小說史」には、此外題「昔話きちちやんとん〳〵」とある。)や、火焚婆の四本は、中、浦島は三冊、きつちやんは三冊、火焚は二冊、茶番は二冊、全部貞秀(國貞の門人)の畫で、年代未詳、以上の四種は、芥子形本とて愛らしき製本であつたといふ。此の四種、或は種彥の最初の作なるべしとの說あるもの(以上、「列傳體小說史」種彥著作目錄に據る。)といふのである。

此の四本は、成程、赤本として、或はそこらに轉がつてゐさうなものだが、まだ見た事がない。最後の精衞子氏所引の藍泉の記述にある「百舌鳥の囀」、これに就てである。私は、此の藍泉の記述を見た刹那、自分の藏本の「樬鳥の囀」を想うた。樬鳥を百舌鳥と誤つたか、又は、「かけす」の假名を「もず」と誤り、百舌鳥が生れたか。とにかく、從來の「種彥目錄」中に、此の「百舌鳥の囀」なるものがなければ、しめたものだと、急に思ひ立つて、あらゆる種彥の目錄所載のものを探してみた。或は自分の材

料の貧寒さと、自分の淺識とで、事實藍泉のいふ如き「百舌鳥の囀」が有るかも知れないが、私の見た範圍では、これを否定し、やはり「橘鳥の囀」の誤と見るべく凡て有力であつた。此の詮索はさておいて、とにかく此の「橘鳥囀」は、成程、よく讀みよく考へてみると、種彦としては珍らしい作であり、彼に對する我々の既成概念たる「正本製」や「邯鄲諸國」や、「田舍源氏」や、他の合卷物作者としての執筆とは、稍內容を別にした、異例だと思へるのである。然し同一作者であるだけ、同じくかゝる滑稽本にありても、他の京傳。三馬。一九は勿論、京山、其他の筆とは、別の風俗、艷麗典雅な氣分にあることは爭はれない。

然し此の「橘鳥」だつて、決して彼の逸品佳作といふのではない。唯彼にかゝる作あつた事が面白く、珍らしいのである。が、凡て彼等戲作者が、その初期にありては、時流を追うたり、先人の流行作を眞似たりといつた傾向が多く、獨創が少いと同樣に、彼の此の「橘鳥」にも、またその以前に、尠くとも二者の父、母はあつたのである。記述を分り易くする爲、以下先づ、「橘鳥囀」の解題及び本文一斑にうつらう。

「橘鳥囀」體裁

橘鳥囀　全壹冊

〇表紙（綠がゝつた壁土色）貼外題、種彦作 國丸畫 全壹卷　橘鳥囀、（此の數個の文字、一線の圍みをとり、白紙の藍摺）〇中本一冊、丁數、序本文跋込み十五丁。

（表表紙裏（見返し）非情有介　鵜鳥囀　全一册柳亭種彦作　五彩樓國丸畫。「紅葉齋大」の大きな角印を附してゐる（畫者の國丸は、初代豊國門人。文政十三年末、三十七歳歿。）

（鵜鳥囀の序）（此の序文、本文第一丁表より第三丁表まで。）

叙

先に山東の兩國より。鸚鵡といふ名鳥渡り。非情有情の物眞似にて。諸人の耳目を歡ばせしは。言ずと看官御ぞんじならむ。爰に書肆何某とて。欲心あふるゝ曲者あり。又何ぞあんなもので錢をもふける工面はないかと。篠網ならぬ筆先で。彼名鳥を。おつかぶせんとの計事。おつと承知と請合でも。鸚鵡なんどはおもひもよらぬ。烏かアノ〳〵鳶のとろゝ。愚意に鈍口。二ツ三ツ囀ならふ。鵜鳥をもつて外題とさだめ。序に似た物をやらかして。驚かけんと筆おつとり。抑。非情のものを云たる例。天竺にてはと書かけても。僕原來短才文盲。こゝらへ何ぞ切にある筆文はあるまいかと。さる主坊に尋ればば。頭をふつて白言。人の如くに鳥語す。舌たつ嘴は多けれど。非情のものをいふ事は。七千餘卷の經文に。未觀あたらずと進口上、ところがぬからぬ漢にて。おでどこでんの笊をも冠ず。机が化て鹿となり。開帳場の内陣ならねど。錢が飛で網にかゝる。其さま蝶に似たる故。蝶の異名を飛錢といふ。なんと一番多識かと。筆に隨する側に。かたく

まうせば童子あり。俗に申せば小僧が居て。くつ〳〵と吹出し。先生ねほけ給ひしか。それは非情が變化して。有情に成たばかりにて。其貌やその聲は何と口を利ましたと。問れてぎつちりゆきつまり。嚔に紛らして。又。日本の往古に。人の膝の上枕せんと。夢中に來つて玉琴が。歌を詠だる例もあれば。非情はものをいふまじと。强量にも云難し。されば口のさし出た手取鍋に。雜水焚と語るなと。禁られし人もあり。夫ハづんどのむかし〳〵。彼猿蟹の合戰に。臼杵摺鉢牛の糞。一味なしたる事もあり。こは赤本の赤虚言か。作者もしかと辨ねど。ちよつと煮立鑵子の湯にも。松風の聲色あれば巖波の身振あり。金が活て働けば。それ證文がものをいひ唐茶鐘が孝と鳴。燒火箸が忠といふ。忠孝自然の義理〳〵と。車の輪のなる音は、たれか鼾睡と聞かざらん吾も昔は戲場の遊客。近曾漸く老實となれど。雨の降夜のゆかしき折から。名聞利欲の小歌に。よび出されたる空文句つかひならひの非情の聲戲。わからぬところハそれなりに。役者〳〵と賞たまへ。

文化十二年

乙亥春正月

東都戲作者

柳亭種彥誌

類のない長文である。餘程いゝ氣なものだといひたくなる。彼の自分の口吻、昔も昔は戲場の遊客」それが近頃まじめとなつて、此の執筆だといふのである。おまけに序末には、堂々、東都戲作者と肩書打つてゐる。祿二百俵の高屋平四郎源知久といふより、戲作者樗亭が何んぼうにも嬉しかつたに違ひない。「戲場の遊客」とは、例の三代目坂東秀佳（三津五郎の事で、例の土器小傳の亭主）の藝に熱心で、素人狂言又は茶番所作事などにも、此の坂三津の眞似をして、茶番連中から三ツ彥（彥は彥四郎の略）と呼び慣はし、これが彼の三ツ彥の印の起りとなつたといふ說（戲作六家撰）などにもある、坂三津などの藝を漁り歩いたやうなことを意味してゐるか、「櫧鳥囀」と同年に刊行し始めた「正本製」の續物も、此等初期の戲場狂ひが有利な體驗を彼に與へての事であつたらう。

三ツ彥印の起り

閑話休題、以下は、「櫧鳥囀」序の裏、ヒラキになつた目次である。

「櫧鳥囀」目次

櫧鳥囀

目次

一　正の下駄、駒下駄と問答
二　小田原提燈、月を嘲る
三　接木、酔て鳥樟を罵る
四　炭團、老て少年を羨む

五　茶釜の多辨
六　延壽金、身を觀す
七　芒鞾、生長を願ふ
八　盃、酒筵に意を演る
九　鐵禪、武威の衰ざるを悦
十　烟草箱、舊を說
十一　年玉扇、萬歲を壽
　通計十一條
（目次條外　道行浮名の銀流

加計順漢名不詳或書曰北亞墨利加之西日既末縣有小鳥如雀於枯樹啄小孔千數每孔輙藏一栗爲冬月之儲是此物類今倣吾邦西國之方言云樗鳥」（以上、第四丁の表迄）

以下ヒチキ、國丸の挿畫每圖ありて、目次の順を追うて文詞を挿む。文詞は、漢字多く、振假名を施しあり。一見、合卷物とは見えず、即ち中本滑稽本の類也。

正の下駄駒下駄と問答

最初の「正の下駄駒下駄と問答」の全文を抄載しておく、

正「コウおこまほう。手めへもモウ赤鼻緒じるしハとつてもよからうぜ。砲頭釘を打

ておかねへけりやア尻もよつほどへるじぶんだ〔こま〕チヤかわいさうにまだちつともよごれめがつきまへヱん。こぞうでありますものヲ〔正〕そりやアしゆろ箒だから。垢がついても目だゝねへのだ。しかしおめへがたア。かるわざ師にはかれると。人を見くだすといふ手もあるから。たのしみだス「イヤ又下をみればほうずがねへ。くりまさのやらうも下卑たやつよ。此ごろ大わらひハ。あいつがだれかながつちりにはかれて。灸をすへられたそうだ。〔こま〕モシそれ名はなんとかいひなさつたつけ。色の白いきれいなおかたハ。どふなさいました〔正〕ヲヽあいつか。あいつハ目が通つてゐるかはり。さしばだアな　かわへそふに波銭の焼印をしつかりおされて。そして片方いぬがくはへてひとり身になつたそうだ。大かたせんたくの腰かけにでもされるだらう〔こま〕チヤ口のわりい。おめへさんもたしか。跡のほうがちつとへらしつたそうだ。〔正〕そりやアいはずとものこつた。おらアもふおひこヨ。これ見な。どらやきのせなかといふあんべへに指のあとが二本くぼくなつた　これからこつくひの□□(瓢箪の圖を描く。久彌)がふんぎになつて。ほかアり〳〵川ながれだ。なみ除杭へひつかゝつて。犬はきだめへほうりこまれたあとハ。いざりの手へはかれるか。歯が二本に。眼が三ツ。丹波のくにから生捕ましたと。持あるきの。みせものにでもなるだらう。おらがおち屑でこせへたげん

ば猿なんざア。今比どけへいつたかしらん。ア、鹿の角で穴をもまれたもっ はやむかしだ「きつい寒じだ。でへぶ道が凍たハエ、カラ〳〵ト笑ひてやミぬ。

(中に、「〇正の下駄人にたとはどこんな姿」として、襟巻、鳳箕の紋つけたる羽織を着、煙管を手に、立てる通人風の中年男。下に三味線傍に、盃をさしをる褄若風の中年増、「〇駒下駄人にたとはどこんな姿」とある。凡て墨摺、國丸の畫。)

かうしたものである。畫も割合に、文詞に伴つて其の氣分を出すに努めてゐる。例の種彦の事ゆゑ、下繪が隨分、念入だつたらう。

尚一つ、珍らしい煙草文學の一として、條外の「男煙管女煙管道行浮名の銀流」(第七丁表の半ばより第八丁表全部。接骨木醉て云々の次)この全文を紹介しておかう。

〽男煙管女煙管 道行浮名の銀流

あまのたくもしほならねどみな人の、たちゐのしほのけふり草。からきうき世とおもひきりつ みらいをたのむほつけ張。女きせるハすい口も。ほそき心の一トすぢに。男きせると二本づれ、しきゐのみぞをころげいで、ふんのいたばし打すぎて、世をしのぶ身ハ虎ねこの尾をふむよりもおそろしき所も名にしもゐこしが原にあらねどから草のっ ふ

とんのみねやこたつの山。木かげにしばしたてかゝり。女は泪のひまよりも〽ほんにおもへバわたしほど。いんぐわなものが又あろか。むかしハくるわのうきつとめ。咲付たばことれんじから。くどつて花をやつた身が。じやけんな人の手にかゝり。あたらを打とてらうたけをおられたお身の仇となり。ついすげかへのしたものと。なつてゐなかのわびするまる。男ハてゝらのこしにさし。のらあぐりするおしたもあり。女ハかうがいのかはりにして。鬘とりあぐる夕べもあり。のみもならわぬ松かはの。たばこをついでがふくびハ。三文判のかわりにおされ。子供たらしのぶつきりあめ。とつけへべへの手にわたらバ。たゝらのうちへ身をしづめ。つりがねとなるかねてのかくご。かハひとおもふてくださんせと。なげく涙のつたハりて。しろみをながすふぜいなり〽男ぎせるもうちしほれ。我とてもおなじ事。むかしハ龍門あつかいたの。袋へはいつた身なりしが。きせるとほしにをれこまれ。ほぢりいだすがめんだうとて。出いりのおさとうにくだされて。かれあがかんがわるいゆへ。つみなきわれをしばりなば。たこの糸にてむすびつけ。これこゐさしどうぜんの竹づつほうハかんきよの身。ついにハたゝきひしがれてがんくびぜにとなるならバ。いちもんいつ茶のつらよごし。いつそやすりにおろされて。しりをなくしたさほかけにさゝれてしまふがましならんと。いだきしめてハなくなみだ。くびと

「櫺鳥囀」自跋

くびとをあはせつゝ野がけに、火をかるごとくなり〳〵ア、まよふたりあやまつたりしどまのかねのたばこぼんゝきせるにとがはないといふあくめうきよめしそのうへにゝしんちうみがきにみがきなバ。ふたゝびはなさくさくらばり。しゆつせばりてふ身とならふ、たのむハむかふの火ばちのした。おちゆく道ハひだりかみぎか　おのれがこけてたゝみざん。びんごびつちうくにざかへ。火いれとうげのさくらずみ。それさへ白灰とちりすぎし。いけだのしゆくにぞつきにけり。

（とあつて、浦里時次郎もどきの道行姿の圖を挿む。）

〔最後に跋〕

不佞近會話說街頭に勸善懲悪の店を開。（合卷及び讀本の諸作についての自家吹聴か、而して故意か自然か、彼亦勸善主義たりし也　久彌。）現金ならぬ異見の安賣、元直をはづして教訓を。掛直なしに商ども。生ついたるいらくら者。十露盤とらず帳合せず、末ハどふなる事じややら。とんと言ずに居る方が、知者だといひながら、老子も常在下言、ものいふ爲の口なればいふのもよいか知らねども。つら〳〵我身を觀ずるに、野暮と意氣との口間に、犬の糞より無用の長物、東風菜にともなふて。壁に掛る團十郎、鼻ばかり高くなれど、（自矜の心萌せる、正直の告白也。面白し。久彌。）用心土の蚊ずす、如

何ぞ居風呂桶の嘆を知らん。知るも知ぬもあふ坂の。せきだのかねの音せはしく。掛取門に市をなす頃。でも先生につかはれて。

これもやつぱり　柳亭種彦書［柳亭］

〔奥附〕（前略）

文化十二年乙亥　孟陽發市

東都　丸屋文右衞門

加賀屋源助

先蹤の二個（腹筋逢夢石と腹佳話鸚鵡八藝）

以上で、「綟鳥囀」全壹冊十五丁の概観を終つた。さて次に若干、此の種彦の著述、その先蹤二個あることを述べて、種彦の新進作家として、未だ方向一路を占め得なかつた當時の狀態を幾分閑かにしてみようと思ふ。

先蹤の二個とは、（1）**腹筋逢夢石**三編京傳作（初編文化七年。貳・參編は、文化八年刊）初代豐國畫（2）**腹佳話鸚鵡八藝**一冊京山作（文化七年刊）初代豐國畫。前者は、滑稽本の一、後者は合卷物（草雙紙）の一である。腹筋逢夢石（列傳體小說史は、五冊として、一冊を京山作とせり）は、「蟲けだもの魚類身振こわいろ」と角書のある物。鸚鵡八藝は、「十二支介科口技」と角書あり。即ち此の綟鳥囀の「非情音介」と頗る似通へりではあるまいか。年代も、京傳の此作、文化七年より八年。京山、文化七年。種彦、同

十二年である。殊に、種彦が、此の二著、即ち京傳・京山に倣へることは、彼の自叙(前掲)にも明かである。即ち「最に山東の兩國より鸚鵡といふ名鳥渡り」云々とある、是である。兩國は見世物場の兩國にもかけてはゐるが、山東の兩國即ち京傳・京山を暗示してゐること無論である。(兩國にも事實鸚鵡に關した奇な見せ物が、或は文化六年頃あつたらうかと、武江年表其他の類を探してみたが見當らなかつた。)恐らくこれは、見世物らしく書いた筆の洒落で、誠は山東兄弟の意であらう。然るに、此の山東の兩國の中、京山は、兄京傳の類作を倣へる事、即ち左の如き「鸚鵡八藝」(此の外題だけは、當時流行の八人藝にかけてゐよう。)の自叙によりて知られる。

「(前略)前に家兄京傳が逢夢石あり、鳥獸魚蟲の口技をつかひて其物そこへ出たやう也。其版元文龜堂(云々)、彼書に類する戯作をかゝせて名代の新版に出さんと欲す。固辭すれども許ず。(云々)

文化六年秋月　　山東京山識

とある。是に據つて明らかである。即ち京山の八藝は、文化六年秋の稿、同七年刊。(然るに、京傳の逢夢石も文化七年。京山と同年刊である。これでは、京山の敍通りではないが、これは刊本の順序として、一は文化七年の孟春、これに遲れたのが京山と見るべきか。然し「前に家兄が云々」の口調、此の京山稿の文化六年秋月よりも少くとも以前の事と思はれる 何分、逢夢石は、原本を見ないことであ

るから、何ともいへない。唯刊行年代は、朝倉氏の「小說年表」、書目の「青本年表」や、水谷氏の「列傳體小說史」等、一切文化七年である。これは疑問ではある。)京傳の逢夢石はその以前として、即ち一、京傳、二、京山、三、種彥の順序を以て、此の形式が傳統されたものらしい。逢夢石は、原本を見ず(飜刻本なし)鸚鵡八嚢は、「京山全集」(續帝國文庫)や「繪本稗史小說第六」やにも收められて誰しも知つてゐるが、畫と文の形式、頗る此の「檮杌」に似てゐる。動物と非情(主に器具)との差はあるが、腹の中を想像して口拔たる事、及び挿畫の擬人の形式など頗る似てゐよう。尠くとも八嚢(京山)と此を對比するも、直ちに暗示作たることが首づけられよう。尙、この京山より種彥に至る間に、二三、原本を見ないから何とも斷言は出來ないが、外題からは、尙、類似作あることを述べたい。即ち左の如きものである。

(中本)二冊　己が聲色　一　(東民作)　文化八年刊

尙、鸚鵡の流行に關して、連繫あるらしきものに、

(合卷)鳥籠山鸚鵡助太刀　六卷　(馬琴作)　美丸畫　文化九年刊

といふのがある。

尙々、形式は全く異るが、內容に於て、多少の融通點―寧ろ第一の京傳、第二の京山等に彼此相照應しあつたかと見るべきものに、

（中本）早替胸機關　一　（三馬作）　文化六年刊行
（同）　四十八癖初編一　（同）　文化八年刊行
（同）　善惡表裏人心覗機關　二（同）　同　十一年刊

といつたものもあることを聯想しても可いと思ふ。

最後に、今一言、此の「橘鳥囀」を、彼種彦の文化四年より天保十三年に至る、三十餘年間の著作生活の上からいふならば、無論此作は彼の初期である　彼も初期は、讀本の作約六種、文化九年の「綴手摺昔木偶」を最後として、純合卷作者に入つたと傳へられてゐるが、たとひ合卷物の形式は負ぶるも、内容に於ては、醇たる滑稽本としての此の「橘鳥囀」の如きものがある。（合卷の形式を負びたことは、三馬・一九の專門家と異なつて、既に合卷の看板で賣り始めてゐたから、それに此の形式が毎丁挿畫があつて賑かであるからといつたやうな點からであらう。）即ち文化末、まだ彼は迷うてゐたのか、或は一路堅確ならなかつたのか。又は氣紛れ心地に（我々の考ふる程の作的動機からでもなく）此の「橘鳥」の擬作があつたのか。とにかく、讀本書き始めの文化四年、同時に合卷物に手を著け、（現に文化九年後の純合卷以前に、合卷の作數種を數ふ）文化十年からは專心これに向ひ乍ら、殊に一方名作「正本製」の如きを試みながら、（その初編は、橘鳥囀と同年の文化十二）此の「橘鳥」の輕い作品、擬作があつたのである。殊に、自叙して、山東の兩國に擬せるを暗にいふあたり、未だ作者としても若く、謙譲、

寧ろ卑下に、後年の「田舍源氏」の作者（「田舍」の初編は、文政十二年）としての隆々たる種彦の觀とは餘りに懸隔があると思はれるのである。即ち種彦の初期中無類の作、恐らく彼滑稽本の唯一（？）として、此の「楮島噺」あることを、彼の舊惡露見として、彼には稍氣の毒ながら、文學過程の公平な眼から、これを發表して、我人之を珍としたいのである。以上、偶々觸目した高畠藍泉手記の云々より刺戟された、自分の「楮島噺」の紹介である。　――尾張吉見海岸、龍雲院にて。大正十四年六月十七日夜。

再記

再記。

右、送稿後六日の今日、ふと氣がついた事であるが、京傳の「腹筋逢夢石」を、鸚鵡の見世物があつて、その流行に當て込んでかと見たのは、自分の僻目と思はれてきた。やはり、逢夢石は鸚鵡石の宛字ではあるが、さて此の鸚鵡石は、彼（京傳）が、聲色、物眞似の意味で、命題の上から考へついたので、鸚鵡の鳥には直接關係ないと思ふ。京山のだつて、やはりこの鳥名を入れてはゐるが、一寸も鸚鵡その物は出てゐない。種彦の眞似も、楮島その物の鳥は本文には現はれない。矢張り聲色物まねの義に轉用假借してゐる許りだ。で別に、文化六年の比に、鸚鵡の見世物があつて、それにヒントを得てと臆案して、見世物史の資料を探すに至らない事と思ふ。

鸚鵡石の故事

鸚鵡石は、伊勢宮川の水上とも伊勢志摩の國境とも所は判然しないが、とにかくその邊に生じた、物の音に相こたふる、丁度鸚鵡の眞似の如きより名づけた石だといふ。響石とも別稱する。それを假りて、物眞似の義にしてゐるのである。現

に、稗史以外、芝居の聲色を集めた、彩色摺表紙の、（幕末芳幾・國明の畫などの物夥しい數である。）「あふむ石」のあること、御存じの通りである。即ち、京傳が、思ひついて自分の戯作の題にしたといふに過ぎぬであらう。京山これを正直に眞似、種彦、陰に眞似といふのであらう。無論京傳には交渉ないと思ふが、以前の洒落本にも、出放題夢中作の「鸚鵡盃」（安永二年）及びこれを眞似て後編とした以後の「似口早指南鸚鵡返」（名古屋の増井石橋庵の作、刊本）（文政五年）といつたものもある。（補―但し此の二種、前者は原本を見ず。後者は、その後に原本を入手した。と、これは一種の地口本で、名の如く問に對して、答を列擧したものである。即ち一寸、こゝへ引用するには、派が違つてゐた。昭和三年三月、久）かうした例であらうと思ふ。これを的確に知る爲には、京傳の「逢夢石」の原物があれば、その序文くらゐで分るが、今持ち合せがない。以前安い値であつたが、その時は、振り向きもしなかつた。今にして殘念である。

○

補遺―最近、左の記事を發見した。成程これが、京傳・京山・種彦等の聲色身振本とも、多少の關係があらうか。謂ふ所の「滑稽雌黄」は、原本は見てゐないが、その飜刻としては、續帝國文庫「萬物滑稽合戰記」の中にも、亦「滑稽文學全集」第十二卷にもある。先づ見當つた記事といふのは、

滑稽雌黄　　四　　桂井蒼八作

器物に口を假りて教訓の意を表す、作意滑稽物といはむより、寧ろ教訓物と言ひつべし。されど馬琴の「質屋の庫」或は京傳の「腹筋鸚鵡返」(或は、逢夢石也ヵ)等に類する作風は、多少範をかゝる作より採りしかとも思はるゝなり。(新群書類從、書目。中に書目「寶曆九年の條」。)

その「滑稽雌黄」を飜刻本で見ると、成程、頗る種彦の「楮島囀」に似てゐる。非情といふ點で、寧ろ京山等の諸作よりは一層にである。全四卷、中に非情のものを拾ふと、短檠の教解、天紋の天機、屏風論直、下駄孝慈(卷一)。貧筅の徳、偏口論命、花蠟燭の廢、飯匙辨レ醫(卷二)、酒樽忠臣、松樹弘レ教、壺辨二眞友一、押入五常(卷三)。櫻鮫辨レ無、雨玉止レ争、插盆仙術、(外に、風蝶教レ蜩)(卷四)といつたもので、殆ど非情の聲色である。唯、教訓的であるだけが違ふのである。序に、作者の友人と稱して、積穗以貫等。作者の桂井は、不詳の男であるが、大坂の人か。挿繪は、春書に作者の多い例の月岡丹下である。以貫の友人といへば、蒹八も當時の學徒の一、通俗に藉りて、教訓の意を寫したものであらう。

尚、此の滑稽文學全集第十二卷の本書解題中には、此の「滑稽雌黄」にもとづけるものとして、當世不問語(明和元年板)。「花實都夜話」(寛政五年板)。質屋庫(文化七年)等を擧げてゐる。參考までに。

――大正十四年九月二十日。

「同」類作

(補記)
再び腹筋逢夢石に就て

臺所譚

「逢夢石」の内容

×

〔補記〕○腹筋逢夢石に就て

「繡鳥譚」の先蹤として、京傳作の此數編に就て、其後原本を求め得たから、此に略解題をものしておかう。所藏本は後摺本らしく、第一編第二編第三編が、京傳作、初代豐國畫。四編は、「一八鸚鵡臺所譚」といふのが原題で、京山作、初代國貞の畫である。臺所譚の一二編が、その第一編(即ち逢夢石の第四編に相當す)の卷尾に豫告はせられてゐるが、未刊であらう。猶・「逢夢石」の初編・二編・三編は、所藏本、序等の年月を削除したと見えて、板行年次不明であるが、新修日本小說年表に據れば、初編は、文化六年、(前稿には、初二三の凡てを文化七年とし、從つて、京山の摸擬を、同年だからとして、疑問にしてゐたが、これで事理明瞭である。即ち右記述以後の、朝倉氏新修年表では、初編だけを文化六年にしてゐられるのである。)二・三編が文化七年である。さうして、その四編は、別名を「一八鸚鵡臺所譚」初編といふも、家藏本、柱には、あふむ四とある。がこれだけは、別名の如く、家兄の作とは、猶、京材を違へてゐる。共に中本、合卷風ではない。本文所々に、ヒラキの繪がある。

初編「逢夢石」の叙を見るに、初めに、大國の狂言作者、笠翁傳奇の鸚鵡石を閱するに」云々とある。即ち此の命題「逢夢石」は、南國見世物の鸚鵡石でもなく、自分の考で揣摩した伊勢の鸚鵡石でもなく、(芝居の聲色本こそは、これであらう。)此の笠翁の支那小說からの思ひ付である。貴撰魚貫、貴作拌口技

なかられやと、一陽齋(豐國)を勸めての思ひ付とある。現に、内容もそれであるが、格別その目録は、笠翁もどきに、例へば、(丑)蝦蟇誇髯(評)蝸牛解悶などとある。一編は、蝦蟇誇髯から、(生淨)鶯子規口角まで、通計十九拵である。さうして、挿繪の風は、人間を用ひて、主材の蟲獸らしく描かれてゐる。(此の畫を眞似たもの、文の趣向もであるが、例の京山の「腹佐話鸚鵡八藝」である。名からして、腹の筋と腹の皮と似てゐる。)さうして、此の畫風は、繪本「百化鳥」や「續百化鳥」とも似てゐる。現に、作者も、二編の叙に於て、「其繪たるや、百化鳥のおもむきに似て」とある。二編は、男雛女雛の夫婦いさかひ・犬張子の昔語から、やぶ蚊昔の友にあふ。どぶ蚊の生醉に至る、十六拵。三編は、蜻蛉道に迷つて小兒を叱るから、鰻鮒鰌鯰犬がけ合に至る、二十拵。である。その四編(或は、「臺所譚」一編)は、臺所物で、石臼の長壽から破鍋に綴ぶたの婚禮に至る、十二齣(これを前編としてゐる。)但し此の編に至り、純合卷の體裁を追うて、毎丁挿繪入である。第二編には、豫告として、「隣から借りてきた切だめ、わが内のみそをあげる以下十二品を擧げてゐる。以上、誠に、「樒鳥囀」などの先蹤として、成程共通點の著るしいものである。

「臺所譚」の内容

(尚、この類型に、末期合卷物の一に、嘉永六年板行の「有情雜話夢之眼我寐」初編(五卷カ。即ち二十五丁物カ」瓢々亭作、芳虎畫といふのがある事を云ひ添へておく。但し、此の本、新舊「日本小說年表」に見當らぬ物である。)

「夢之眼我寐」

——昭和三年三月補。

種彦の「戯言句合」

「自問自答戯言句合」

天保乙未(六年)春刊の「戯言句合」に就てである。初代柳亭種彦自問自答の形式、畫は國芳、板元は、通油町鶴屋板である。中本で、表紙別、本文は、序とも十葉である。

種彦といふ男は、一九の衒學や、馬琴の道學者じみた所や、三馬の氣の荒い所や、さうした所は無いが、これたちよりも、一層小意氣な、さうして民衆的な、調子を下した所が、あつたやうに思ふ。此の「戯言句合」の小著――寧ろ誠の戯著など最も然りで、よく彼の市井の一通士たる俤が、仄見えてゐる所のものと思ふ。

「同」體裁

論より證據、此の小冊の内容、その一斑を左に書いつけてみよう。

體裁、中本一冊、本文は序共十丁。

表紙、錦繪摺。上に耕慶、下に小町姫を描く。左上に、題簽の如く園みを取りて、乙未新板 戯言句合 とある。右から左へ、繪の空地に、種彦自問自答、歌川國芳畫、下に鶴屋板とある

見返し(表紙裏の半丁分) 柳亭種彦自問自答 と二行。たはこと句合 全 歌川國芳狂畫 通油町鶴屋板 と文字がある。眞中に、蝸牛の角が伸び、その尖、右は意休、左は助六、互ひに思入の欄。

序文　初編二丁の表下　序文とも何ともいはずに、(以下全文)

其角が田舎句合　杉風が常盤屋句合は己が句に己が句を合せ、師に判を乞たるなり。山口素堂がとく〳〵の句合ハ判の詞もおのれが綴り。こゝろなぐさに書すてられしを。後年に刊行なしゝと、又寫本にて傳はるものとハ異同ありてどつちらが、よいかわるいか其事ハ。棚へあげたるしよい守り。腰元はした居候あぢな事から對にいふ小町辨慶なんでもかでも雙をたゞねあなたさがし。人をして笑する近年一風の俳諧あり。是を合せて判の詞を書まくおもへど乞人もなければ素堂がとく〳〵の句合を例として三ン役兼たる自問自答切字もなければてにはも揃はぬ　たゞ十七字のたは言句合、とばかり題しておくになん。

天保乙未春

種　彦　印

(以下、ヒラキ　左が題と句と判、右がそれに因んだ挿繪と、その挿繪の人物がいふ詞書を、合卷式の細字で物してゐる。左の句と判は、大字、二十字以上一行、振假名付、八行が半丁といつた體裁である。)

本文の題と句の全部を一括する。(判の詞は略く。)

本文の題と句

「船」の全文（繪柄とその詞書。句と判。）

○嫉　左　きりすぐ〳〵鳴とおさへる蝶手ばや
（持）右　聞猿の身振で髪を嫉直し
○船（勝）左　羽織を二枚あつたかい雪見船
右　肩の蒲團を投こんで堀だによ
○妻　左　馬鹿亭主女房とられてもらひ乳
（持）右　物喰がよくて下商がすはりかね
○餅　左　三布ぶとん二枚で櫻餅に寝
（持）右　智恵の板めく菱餅のたちッ屑
○三線（勝）左　寒びきも今日ぎり神楽獅子が出
右　ぺん〳〵草の虫除に持が付
○文　左　紋日前十かへりも来る桜花堂
（勝）右　前妻は吉様きゐるこがるゝ身
○忠臣蔵（勝）左　松の木を切ッたで公に縁が無シ
右　田楽で祇園に替る六段目
○聖廟法楽　左　茶筅にもならぬ誂りの天神記
（勝）右　女房の荒場に甘露梅がふり
○土弓　左　武士の矢並つくろふ愛宕下
（勝）右　富士の裾野を遣て行矢場娘
○大平（此は、第十丁の裏半丁分。此分に限り、題・句。判と挿絵と共に、半丁分にしるす。）
（持）左　十日目に風見の鳥行水し
右　五日目に巳名を見する風見草

以上であるが、見本として、「船」の判と、挿繪の詞とを全文示しておかう。

（繪は、船宿の女房、肩に蒲團、手に火縄箱。遠見は雪中の屋根船。）

「コウごしやうだ出羽屋のだうぐがあるから
つひでにゝめぐりへけへしてくんな

そのうちにやア日がくれやう
　火なはばこにつけぎはあるか
　　見ておきなヨ
いちがりゆくと見たかして
　　ふねか舟
「ふねめさせたまはずや
　やねぶねもさぶらふぞ

（こゝ繪。この繪、眉毛なしの船宿女房、國芳一流の凄艶な筆致に描破せられてゐる。頗るよし。）

題　船

左　羽織を二枚あつたかい雪見船
右　肩の蒲團を投こんで堀だによ

左　羽織とハ女藝者の事歟二人を二枚といふが通言なれバ金持の雪見さへもあるべし右ハ中比の調子句にて猪牙舟のいちはやくとも流行にハおくれたるやうにおもはる。この蒲團より唐木綿の下羽おりハあたゝかなり。よつて左の藝者に勝の字の花をあたふ

因みに、國芳の挿繪、全卷に亘りて精妙、特に精に於て他本に稀である。丁度、今日の銅版術に於けるが如く、人物衣裳の圖案など、精緻を極め、迚も木版の感じではない。無論描いた當の國芳より

も、彫りも彫つたりと彫師を推奬せずては濟まぬ。北齋及び北齋一派に、此の銅版の精緻な描線を見たが、此點、國芳も同一揆に出でてゐる。

種彥の珍らしい句合と判の詞とある事、國芳の精緻微細な挿繪の描線ある事、殊に「一葉柳」以外、同系と思はるゝ、此の種彥の逸作に、我等は已惚氣を抜いた掘出し物の感じある事を述べて、此の紹介の筆を擱く。本來いへば、彼が此著に成した判の詞、その全部を採錄、挿繪も國芳壯年時の佳作として、その精緻な描線の正直な所を全部お目にかけたいが、今は、此の片鱗に止めておく。以て我等に親しい種彥の、餘業の一を了知せられんことを望む。

――昭和二年一月十八日夜。

經書の普及

大學の摸擬本

德川氏治世期に於ける、民間普及に最も徹底した經書は、無論四書であらう。そのうちでも、此の大學だと思ふ。勿論、事は、江戸時代一般人と經書の親染味といつた問題で、やゝ我等の範圍を離れるが、とにかく、その短篇、且つ初歩といつた意味からも、この大學であらう。現に、女大學もこれから生れ、女大學に關する各種の繪本、出版、艶本の如きに及んでゐるは、周知の事實であらう。その女大學ではないが、この大學も、また一般、文字の稍辯へあるもの、恐らく商家の小僧番頭も、その時々の儒學奬勵で、此の類は、意味は分らずとも、一般の諳記、口癖に多くなつてゐたと思ふ。その大學に似せた戯著（主に、滑稽本の範圍）が、我等の眼に止る。その中の三種、一は黄表紙物、一は洒落本物、一は中本（滑稽本）である。そのこれを、左に先づ列擧して、その如何に、大學正文を摸して、別様に爲してゐるかを見ようと思ふ。（京傳の洒落本「京傳豫誌」の大樂の如きは、唯型を似せただけである。此類は除外。）

其一、寛政二年版、大客嘆句（本外題、遊妓寔卯角文字、全交作）三卷と、其二、洛東闘亭京鶴述、京都點轉堂發行の傾城情史大客（天保三年版）一冊と、其三、狂訓亭主人（春水）作、英泉插繪の「大學笑句」一

一冊とである。本の體裁、其二は半紙本、其一・其三は中本型である。

今左に、其の冒頭の數行を、三者對照させて、全文を載せる事にする。

大客

大古忠胆 今讀如字　意氣上戸

御亭子曰、大客格子先之虛言而、諸客入レ床之門也。於レ今可レ見二通人爲レ客次第一者、獨頼二此方之損一。趣向而文盲次レ之、客業必由レ是學焉。則庶二乎氣不一レ違矣。

大客道在レ明二表德一、在レ新レ髮、在レ止二知居全一。

大客

酒氣笑句

酒酊子曰、大客古之妓青而初客入レ通之門也。當時可レ見二通人爲レ客次第一者、獨頼二此篇之存一。而枕辰次レ之。客者必由レ是而遊焉。則庶二乎其不一レ溺矣。大客之道在レ通二廓中一、在レ察二妓情一、在レ止二於酒宴一。

心學捷徑 大學 評註

私意私欲

御亭主曰、勘略坊者意味屯角德入門於今。主人德取世帶可持者、獨此金不爲損彼。而匣毛是積。勝手必依之法、則不遠近。勘略道米穀不爲奮來信金、大事有爲於金遣止。

○

初め、僅かの對照である。これ以下の對照は、略くことにする。元來、春水の「大學笑句」は、平凡な本、容易に原本に見當りえられるから略き、「大客」も、左程の珍本ではない、唯、比較的年次の古

い全交の「大客」こそは、黄表紙名作二十三部の中としても、名だけは響いてゐるから、(が原本を見たのは、今度が最初であつた。)(此本の提供、市場直二郎氏の好意に依る)左に比較的くはしい内容紹介に及ばうと思ふ。(以下本文紹介の中、括弧内は、予の註である。元來、本文には無きもの。)

此の「大客嗅句」本外題は、遊妓窪卯角文字、十五丁(三卷)物である。畫は、重政と傳ふるが、見た所彼よりは、大まかで、彼としてならば、上乘の方で、寧ろ政演かと思はれる程である。寛政二年版、三馬の推薦によつて、名作二十三部の内に入れられてゐる事は、周知の如しである。以下その内容である。前に三部對照の見本とした「……不遂矣」まで、初丁表である。

「大客嗅句」の全文

上卷

大客道在ㇾ明ニ表徳一在ㇾ新ㇾ髮在ㇾ止ニ知居至一

「ひようとくをあきらかにするとは、きやく人のはいめうをよくしる人だぞ」

「かみをあらたにするは、まい日かみをゆひ、すりみがきをするといふことなるぞ」

「しりゐせんにとゞまるとは、なんでもしつたふうをせず、しよじしりいせん〳〵ですますことをいふたるぞ」

「おいらんへ、ひようとくとは火をとほすものじやアおつせんか(新造)

「おや此子はばからしい、ひやうとくとは、たしかとくがんじといふ御てらのある所だ(髷を結つてもらつてゐる花魁)(以上第一丁裏)

知止趣向而内有定定趣向而后客上

客上趣向而后能寐入能寐入而后能

追出追出而后能已

「しまひのよくうぬといふところが、かんじんなり、せつかくきやく人があがつても、むしやうにねたうへにたま〳〵めがさめるとをひだしたがる、そこできやくがはらをたつて、かさねてきてどうするかみろ、よくうぬといふこと也

「よくねるあしかのよふだ、あしかははやくおひんなればどふだろう(間中、寢てゐる妓と起きてゐる客。)(以上、第二丁表)

有琴本撥脇有銚子知所先刻呑則近部屋

「ことだのほんだのばちだのといふものが、とりちらしてあつたで、そのわきにてうしさかづきなどもあつて、せんこくこゝでのんだ所だとおもはゞ、いつでもそこがへやかざしきであるぞといふことなり

「しんざうのつまみぐひ、をきてはたらくのが三文〳〵といひそふな所だ

よくとりちらかつたのふ(とりちらした中の花魁と禿)(以上、第二丁裏)

自亭子以至於諸人壹是皆以身賣爲本手

「ていしをはじめちや屋ふなやどにいたるまで身をうることをかんじんだといふことなり、このやうにだん〳〵かいてゆくと、どうかおみくじほんをみるやうだけれど、どうもしやうことがなし

「むかふの人引、こいつもこふなせりふだ、(並んだ花魁二人、後ろ、桐に鳳凰の尾の見える襖)(以上、第三丁表)

其髪亂而結治者否矣其所レ厚白粉薄而其所レ薄白粉厚未レ之有也

「きやくとくぜ(カ)つがつのりてかみをむしられたといざこざとをゆひおさむるものはあらじといゝかけのことばにて、むつかしいせりふなり

有躰一生但功者言而笑止違之　せうしならだまつてゐればいゝに、これをのぶるもすさまじい、

又おしろいのあつひうすひといふは、つらのかはのことかもしらず(マヽ)(屏風にある文句)

「これへよくうなア下略

どふともなんし〳〵(閨中、髪を攫み、枕で打たんとする客、寄る妓、屏風外、のぞく朋輩の妓)

(以上、第三丁裏)

其點十兵衛若者事而判人記レ之給金頗有二借金一今因二亭子定一而更考返分別無所在如左

「わかひものゝ十兵衛は、きうきんのかりこしがあつたを、ていしゆがあんじをつけてとりたてたといふやつさ

モシていしゆもぢよさいのねへやつじやアごせへせんか

きさまがはん人だから、くめんのわるいときは又かしてやらアナ

わたくしもはん人ぶくろのをがきれました(主人と判人、畏る若者、その後神棚)(以上第四丁表)

香物曰克明澤菴。大食曰此點銘々買喰

「たくあんづけのかう〳〵に、とんだおいしひのがおざんしたから、とつてもらつておまんまをた

べんしたといふことなり

おまんまときいては、めしをじんじやうにくふよふだが、ようかしな、したゝかくつたそうだ

おいしひかう〳〵でおざんす、わつちやアおまんまをけさくつたまんまだよ

わつちもさ

わつちもさ

以上三人けさくつたまんま（一つの膳を圍んで飯を食べてゐる三人の花魁）（以上、第四丁表）

吉原俠銘曰苟日日荒日日荒又人荒

「けんくはこうろんをしやうばいのやうにするから、それむつかしふごせへす、又一名きやんといへど、此名いまだかんがへず、きをひといへど、のろ〳〵あるくこともあり、地まはりといふから、こめのやうなものかとをもへばさにもあらず、こゝがいしんでんしん、どうめいつたこうめいつたの所むつかしいだんなり

ヱ、くそがあきれら

あいつゥぶちのめしてやるべい

ヱ、うつちやつておけへ、きやん〳〵三ツくち

あとのきやんがさきへいつたら、かうろんしやうな（三人の俠客、一人は肌ぬぎ彫物を見せてゐる。」（以上、第五丁表）

右傳地主釋二峯頭一誤レ詩曰當季千作惟闇所レ不レ行也（右の中、峯頭をかいみと訓ませてゐる、注意すべしであらう。久）

「これはよしはらの地のものへしめすことばにて、このごろはせんじゆもだいぶぶつさうだから、くらいばんなどには、めつたにゆきやんなといふことなり

「古歌に曰
あふてもどればせんじゆも一里ア、なんとしやう、おきあがれ
「人のせんじゆをづつうにやみはどうだ〳〵
「とんだわるひぢぐちだ
「そんなら三人よれば、せんじゆのちえはどうだ
「これサ、もふあやまるぜい（三人寄つてゐる所。）（以上、第五丁裏）
詩曰毎晩庖丁止ニ料理一子曰聴ニ敲音一知ニ其敲音一。可ニ以レ鉈而不レ打レ鳥乎
「此だんはまいばんとゝんとたゝくをとは、りやうりばんがとりかなつとうをたゝくのだといふことにて、いはずともしれたことなり、
「せいじんといふものは、なんのやくにもたゝぬことをいつてをくものなり
あんばいはしれるが、きやくのくれるあんばいはしれねへ
此ゑびすこうには、ちともらひたいの（一人、爼に向ひ、庖丁を持つ。一人は、摺鉢を摺る）
（以上、第六丁表）
詩曰穆穆分散嗚呼序明店返止爲ニ人客一止ニ胥張一爲ニ人臣一止レ迎
百くはんのかたにかさ一がいとおもふて下され
みんなうりはたいた所がこれぎり、よひようにして下さりませ（小判少々と小粒三個、緡の錢三つばかり出してゐる。どらの父親か。その傍、煙草盆の灰吹に唉を吐く男。向ひ、老爺と中年男。皆、債主であらう。）（以上、第六丁裏）
爲ニ人子一止ニ居續一爲ニ人父一止ニ遊懐一與ニ闇雲一

中巻

交止レ貧

「やぼにくらひこんで女良かいをすると、いつでもしまひはしんだいぶんさん、あきだなにして、大屋へかへす、そこでおやぢがはらをたつ、アヽよんいやなと古哥にもみへたり

「論語にもしんだいはんぶん父母にうけ、あへてもうせんかぶらざるを孝のしるしといへば、こいつさうでなし

「なんだ百くはんおんこんりうに、かさをかぶつた、こいつはありさうなこつた（庭に兩手をあげて背のびをしてゐる若者、多分例のどら殿であらう。）（以上、第七丁表）

詩云瞻二狸寢間一墾草臥有二寢君子一。如レ着如レ脫如レ打如レ起食兮呑兮吐兮瀉兮有二寢君子一

なんぼこまものみせだとつても、あれ〳〵こはだのすしのこまくら、かんぴやうのひらもつとひ、そばきりのびんさしよりどり十九文〳〵大どうだといぬのしあはせだが、おれがほうへはむかぬものだ（これは猫の言である。久）（床で、金盥に瀉れてゐる客。仰ぎみる猫。）（以上、第七丁裏）

終不レ可レ忘 如レ着如レ脫者質言也如レ打如レ起者生醉也食兮呑兮者酒肴也吐兮瀉兮者反吐云也有二得君子一終不レ可レ忘者生得穢不レ能レ忘言也

「てつきりくらつたあげくのいつゞけ、うちへかへつてはくやらひるやら、こうしやくどころではなし、きたなくて手もつけられず

「だんなが久しいもんだ、又こまものみせなだ

しつた、エ、きたないへどをばかにした（右の
丁を見てゐる、階下の下り口、女中らしい。口を
袖で、掩うてゐる。（以上、第八丁表）

子曰聽二狼狽一吾猶レ人必也使レ無二狼狽一乎
無レ錢者不レ得レ盡二其辭一大畏二入主志一此謂レ
知レ事

つとめのすがたしばしかくれん、なんほせつな
ひとつて、ぢぐちまでが、せつなひやつさ（右
隅の障子に）

南一のことでかつこうがわるひ、今まで太郎が
ところで三兩ばかりおごつてきたから、あした
うちへとりにきてくださいな（第八丁裏と第九
丁表とに跨がつた障子に書かれた詞。但し「く
ださいな」は、左り第九丁表の方也。）（以上、
第八丁裏）

「此だんはあたじけないともだちどうしが、二し
ゆみせへふりこみにあがつた所が、ひとりのやつ
がをぶさつてあそぶきで、つとめをとりにくると
おめへそこからやつてくんねへといゝければ、む
かふのやつもかすりはくはず、おれがつとめばか
りでよけいはないといゝければ、此くらいなたて
ひきはしてくれそふなものだ、ぬしのこゝろいき
におそれ入と、たつた二しゆのつとめにうろたへ
たことなり、よくあるてんなり、つゝしむべし
〱

「もしそれはちと古風ないゝわけでござります、
さやうなことは二朱のうみへさらり〱、つと
めはらひましよつとめ（第八丁裏、第九丁表、綴
目のすぐ左、障子の中に）
きん〱なふうのきやく人だがのふ（その左、廊

下を歩く妓。右の一人の詞。上の障子に書かる）
「ひん〳〵だろうよ（妓の左の一人の詞。左隅の
障子の中に〻（以上、第九丁表）
笑止曰鳥目覩最後十手所二指切一其恐
歟乎
「ぜに金のあるきやくと見ると、ほれもしないで
いたひゆびをきり、もん日をしほはせるの夜具
をこしらへさせるのとは、もしへおそろしいじ
やアごぜへせぬか
「どうりでおめへはせいがひくうおつす、おや
の日にゆびをきつて、それでせいがひくいな
（相手の妓の指を、切らうとしてゐる妓の詞）
「わつちやアけふはおやの日でおつす、どふし
いしやう（指を切らせようとして、顔に袖、泣
いてゐる妓）

富潤レ屋見徳潤レ身心廣大夜渡散亭子
誠二其意一
「かねつきどうのよたかど、いゝけんとくがある
と、とみの札をひたものかつたら、どつさの百
兩とりやした、そこで今では子どもをかつて、
ていしをあんらくにすごすといふやつさ、よた
かにさへかういふたてひきがあるから、おいら
んかぶのたてひきをしらぬは、はおだといふこ
となり
「又きやく人は、あいだにとみの札をかつてみ
なといふしめし也
てつほうみせのあねさんが、つらがふぐのやう
だからいゝ（地廻りの一人）
「これからみかづきでもいくべい（同の他の一人）
（鐵砲店の體―店先の、鐘のやうな姐さん、左、

用心と書いた軒行燈の下に立つた二人の地廻り」(以上、第十丁表)

心不レ在レ焉 視 而 不レ逢 喚 而 不レ聞 暗 闇 而 不レ知二其 譯合一

「古語に内でせかれて茶屋ではあげずと云々、せかれたきやくが、まいばんこうしさきへいつて、ぶらつけども、どうもつうくつができず、ヱ、じれつとうおつす

「これきんこう、どうぞよびだすくめんは、あるめへか

「よびだすくめんより、むかふで十めんをつくつていらア

(格子先、右、息子。左覗くきん公)(以上、第十丁裏)

高聲 曰 如二杓 子 定木一心 誠 求レ山 雖レ不レ中

不レ遠 矣 未レ有二學レ養レ氣 而后 擠 奴一者 也

(也の字の下へ續けて)諸事ちよ〳〵らをいつていゝとみるともん日をうけやひ、女良のたて引こんなことばかりして、かみになつてあそぶやつをやましといふ、どこぞであたらずといふことなし、こんな人だから、だれもかするやつはないといふことなり

あの女良を、一ばんかいてみて下せいナ

あいつも手のあるものさ、なんでもいくがよしさ、ア、手のあるほうへ〳〵、これではめかくしのやうだ

(煙管を啣へた男と對ふ男。間に文二通などがある。孰れもかみどもか)(以上、第十一丁表)

一家 貧 一向 貧 男 一家 揺 言 一 國 揺 不 聞 一 人 田圃 拔 北 國 作レ亂 其 氣 如レ此 此

謂二一隨破一事一人定胸

つかひはたしてつまらぬやつ、やけになつて一け一もんをゆすつてみても、いつこくをいつてゆすりをきかねば、とてもつまらぬ女郎としんぢうでもしやうと、一人たんぼでぬいてみればかねのわきざしゆへ、しばゐのやうにはゆくま(マヽ)ひとしあんするさきは、ちつともきがなければしんぢうとはばからしふをつすよと、大ごへでいへば、うち中らんちきさはぎ、あんまりむしがよふおつすにくらしふおつすなどゝ、むしやうにおつすづくしで、ばかものになるといふことなるぞ

「おつすとは、だるまのもつてゐるものゝやうなれど、それとは大ちがひ

(第十一丁裏の右下、人物の足下の右左)おらがおやぢもきのきかねへ、もうちつといゝしんるいがありさうなものだ、どいつも一文もかさねへ、しんぢうでもしべいか、うまくしんでくれゝばいゝが、ほんのたんぼ八ツあたりだ

「きがせくかして、わからぬひとりごとをいふ、これとう人のねごとなりととる人あれど、さうみるはあしく、つう人のこどとゝみるべし

(遠見、廓内の屋根見ゆ。川、土橋架り、手前の堤を、裾を撥げながら、若者、振向いた形)(此の繪、第十一丁裏より第十二丁表に亘る)(以上、第十一丁裏より第十二丁表)

詩曰物能用足其筈錦錦此子于床這入宜二共客一人宜二共客一人而后可三以致二食呑一

いはゆるこれは手のある女郎にして、しよくわ

いのきやくでも、ざしきのうちから、しうちよくことがべんじ、とこへはいつたのちも、のみくひまでのつく女郎にて、これをきやくとりといふ(以上、呑の字の下、細字の三行)

ぬしはだれにか、よくにておいでなんす

さうだおろう、今ハこんなかほがはやる

(三ツ蒲團の上、妓と客、妓は煙管を持つ)(以上、第十二丁裏)

詩曰樂只君子蛸之疣蛸之所呑呑レ之蛸之所レ悪悪レ之此之謂二蛸之規摸一

「此段は前段のごとくこれほど手のある女郎なれば、さだめてこれは××ならんとせいじんもさとり給ふ語なり、この××と仰られたは、ゐみしんちやうなることなり、のちのくんしくふうあるべし

「すでにゆらどのゝ背に、手をだして足をいたよくたこざかなとよまれければ、九太夫の下の句に「わがころもでにゆきはふりつゝとつけられたとさ、アハヽヽ

(第十三丁裏とツヅキ繪にて、禿、火鉢に火をふく體)(以上、第十三丁表)

詩曰堰人(入カ)彼難題此意趣巖巖堰堰呑山神具難儀膽(マヽ)有二文章一者不レ可三以不二顧一僻則爲二山神生靈一矣

此段ハ女ぼうのあるもの女郎にはまつこむしやうにいく、そこで女ぼうがせきこんで、いろ〳〵なんだいをいゝかけて、やきもちをやくことなり、又女郎かいゆへしんだいもわるくなつたから、カヽアはともになんぎをみる、文などがきたなら、ずいぶんかくすがよし、ひよつ

とみつかるとぢきにつのがはへて、おんりやうとなる

「どふか此こうしやくは、だうじやうじのきりをみるやうだ

サア此ふみはなんだへ、これでもかくしなさるか、ヱ、ほんにむしのいゝ(女房)。その文はなによ、なにだからなんだア、なんだらほうしのかきのたね、どこぞのだるまのふんの下で、ひろつたな(亭主)。

「第十三丁裏より第十四丁表」亭主と女房、女房は、煙管を持つて、文を突きつけてゐる。亭主は頭を掻いてゐる)(以上、第十三丁裏より第十四丁表)

是故小言悖而言者亦逆而行、嫁悖而言者亦逆而行、

前段のごとくに、やきもちけんくはになつてくるとき、かゝあがことをいへばいふほど、ていしゆはかんしやくやけになつていさかける、そこでかゝあがさかんにいふ、ていしゆもまけずさかんにゆく、「これをさかんどうこなをしといふ、その心は雨ほうがあつくなつてゐる

いゝともどうともかつてにしなせへ、わたしもさとへ出てゆかア

そつちがおやざとへゆけば、こつちはいろざとへゆかア(拗ねた女房と出かける亭主)(以上、第十四丁裏)

唯人々放埒之逆惜與同中間此謂唯人々爲能茶人能悪人

これ此卷の惣くゝりにして、たゞ人々みちほうらつにして、おしひことだついにゐた所もし

りぞき、折介奉公同前の身のうへとなる、これといふも人のゐけんもちやにしたゆへ、いろにそやされ、こんななりにならねた、ツヽテンく、つゝしむべしく

おれもむかしハ女郎かいだが、今は百に四ツのよたかもかへぬ、それも百にもたゝぬむだをいふもんだ、これだから身がもてねへ

（木戸口、吠へる犬、風呂敷を背負ひて、油揚でも手に提げて、裾端折の折介の體）（以上第十五丁表）

芝全交戯作　駒

凡傳十章前四章糙論二手習指南一後六章細論二鳥目勘定一其第五章乃量レ米之要第六章乃出レ銅之本何歟彼乎尤爲二當務之者一阿房二讀者不レ可下以レ惡笑上レ之大客嘆句畢　（以上、第十五丁裏）

○

明和伎鑑との比較

右、「遊妓窟卵角文字」の大體である。黄表紙物としては、風變りなもの、恐らく後至の「傾城情史大客」や、「大學笑句」の模型となつたものでなからうか。三馬がこれを名作二十三部の中に選んだその理由は知る由もないが、恐らくは異樣な構想に感嘆しての事であらう。それにしても「明和伎鑑」が武鑑の形式を眞似たといふ理由で、發禁絶版、版元をして體刑（此の事項有名、周知の事なれば略く）にも

遭はしめるならば、此の經典の一たる大學に摸擬した、しかも經典をして一旦に漁色記事に書換へた此の「遊妓寔卯角文字」は、當然「明和伎鑑」と同樣の處分に遭つてよかりさうなものである。その間の寬嚴、又は差等にも出るのであらうか。或は、此の本、貼外題が、明らかに「大客嗅句」と顯れてゐないせゐでもあるか。さては、上司は、大名階級に對するその存意は、一經典の「大學」よりも重しと見たのであるか。であれば、經學の書の遊戲化を、一武鑑の遊戲化よりも輕く見たわけである。(勿論、これは事實であつたと思ふ。)

と理窟をこねて來なくとも、「明和伎鑑」は、餘りに模型的露骨である。此の「大客嗅句」は、摸擬の程度、寧ろ彼に胎を藉り乍ら第二となしてゐる。そこに、「伎鑑」ほどの直截の聯想がない。それが、妙趣向なりとして、拍案せしめるだけの價値はある。恐らくは、讀者(その中の上司も)此の心持にゐたらう。「大客嗅句」を紹介して、思はずも「明和伎鑑」との比較に及んだ。比較すべからざるものゝ比較かも知れぬ。が、それ程に「明和伎鑑」の出版禍を苛酷なりと思へばこそである。

——昭和二年二月・三月。

稿本 きつひむだ枕春の目覺

稿本黄表紙の一種

初春の一興に、此の稿本黄表紙をお目にかける。年次は明かでないが、文中の詞によつて、寛政八年春かと思はれる。作者不詳、艶好畫作とあるが、まさか京の西村定雅ではなからう。作中、名古屋の方言あり、且つ名古屋附近(鳴海・星崎・呼續)の地名ある所から、名古屋人かとも思ふ。すれば椒芽田樂階級の、同時代の男か。増井(棄齋)などは稍方面が違ふかと思ふ。それにしても、現在の靜岡縣に主に人物(名物の擬人)を定め、場所を三尾に持つてきてゐる。名古屋の作者にしても、すれば何故名古屋附近の名物にこれを決めぬか。他の郷土の名物をいふのは、どういふ譯か。それに竹原春朝齋などの名所圖會などにも交渉がありさうだ。とにかく分らぬだけ、餘計をかしく思へる本だ。以下その梗概であるが、上卷は、全文。下卷は、略筋を記すことにする。(原本中本、中味十葉)

○

序

春の色は東よりこそ赤本を。ひらくや梅がかば冊物今摺立のすりこ鉢。とろろにかけし。海苔やきぐし。さしも名高き京傳風。世におし茶飯の來た。作者が鼻毛も永き日も。あいに鮑の貝流行を。及ばぬ筆で野邊につむ。若菜上下の二誌ぬるを。紙くづの粉となさんよりはと。題し

できつひむだ枕。春の目覺とはいふものならし
(以上、序)

○(前略)實彌高き三國一の大山王富士の山の院と申奉るは世にいちじるき雲の上左右は端山芝山の袖をつらねし其中に右大じんあしたか卿欟間近くすゝみ出て申されけるは近比都名所圖會をはじめ諸州の風土を誌し或は地理の圖をなす事専世に流行せり其が中に東海便覽とやらんいへる道中記は上は勅撰の哥枕より下はくも助めしもりの穴迄さがせし細畫と言ひ又文談の野俗に通じ安きを以て此書を一見の輩は今迄名所に氣のなき人々迄もこれがために古跡を尋の端ともなれりされ ばおのづから名もなき地までも旅人に知られてほまれを得の一助たる事我々をはじめ末〲にいたり火打坂の姥嬶までも世に名をあげたる事ひとへに此本の恩恵によれりされば彼本の作者方へ何をもつてかこれに報ぜんやと詞もいまだおわらざるに田子の中將浦浪卿みぎわに打よりそうせられしは是ぞ名にあふ不死の藥並七寶榮滿の寶をあたへてはいかゞに候やとありければ例(列)嶽各頂をふりてそれはあまり大そうなり最そつと手がるき品はあるまいかとありければさん候是はちと山師らしふは候へどもつら〲愚按をめぐらし候に幸彼作者道中記全部せしを祝ひて來る正月福引を催由承りぬ其景物として海道筋の名物共を風流に出たゝせ作者が宅へ遣し家内中大笑をなさしめば則命のせんだく是不死の藥又笑門へも福も寶もかならず参ると萬歳の様な事を申されけり。

(田子の中將)とかくたゞいまのはやりは名所圖

會と水でつぼうでござります。

（右大臣愛鷹卿）うけたまわれば竹原春朝齋も東海道の名所圖會を書ますげなてまへが似がほほどのやうに書てくれるはやくみたいものじや。いつまでもきさまのかほつきはなんの本にもうつくしう書ます。

「右、第一丁より二丁裏。圖は、富士院、近侍の愛鷹右大臣、奏聞の田子中將、凡て擬人に描いてゐて、而も院と右大臣は山、中將は、凡て浪から出來てゐる。」

○爰に三保の守松原の景好公とて名高き名勝おわしけるがかねて富士御嶽の命によりて今度東海道筋の名物のうち面白き人品のものを撰まんためみだいどころ箱根のまへ若君清見丸家老興津鯛右ヱ門同女房富士野をも召加へて相談ありけるが凡道中宿々の名物數〳〵なれどもかくべつに大笑をさせそうなものハたれ〳〵をさし遣すべきなんぢよきには(か)らい候へと大將の下地にしたがひ家老鯛右衛門かうべをかたむけ居たりしがやゝあつて申上ける樣世の人のもてあそぶ品にうつくし好ありず異物ずきありたとへば大森の細工府中湯本等が一ぞくは調法とはいへども時の興を催しどつと笑の種にハ相成まじく候又なぐりの浮世ござなどはうつくしくかけ川のくず布は風雅にして是もおかしみなし或は小田原ういろうが類の藥からやくどもも人々を笑わせる功能は見へ申さず候とかく貴賤上下を論せず老若男女ともに用ひてにこ〳〵の出るはたゞのみくいの品にこへたるはござなく候さればのみ家くい家の輩へ仰ありてしかるべしとぞ申け

る。
（景好公）こんどめいぶつのしなのうちづいぶんとあごのをちるやうなおかしそうな人がらをぎんみいたせ。
（鯛右工門）はなのおちたそうなはあかさかへんにござりましやうが。
〔右、第三丁まで。圖は、凡て擬人、松原様のの烏帽子を被つた景好、御臺、梅の枝を頭に付けた清見丸、鯛を頭につけた鯛右ヱ門、銚子を頭につけ、盃の紋をつけた女房富士野〕
○かくて東海道の名物のうちへ三保の守の命ありてのみくい兩家の内を人別をもつてそれ〴〵の役を見立られしかば先浮島うな吉はさぶらい分の役目となりかけ川のくづの粉はをちうらうといふ様な役にてかけ川を名としさつたのあわびはこしもとのくらざわと名をあらためきく川のなめしもおつぎ衆といふ身に化してきく川と名のればまりこのとろろはおこしやうとなりてまりこ野と改名しわれも〳〵と東海圖器の作者方へと趣けり元來隨分おかしみを第一とし大笑をなさしむる事專とある故こゝをせんと（マヽ）思ひきりばからしくこしらへ浮島其日の出立にはめつた皮のきさんを著し富士沼の水色の羽織に兵衛内侍の東路や雪の下なると讀れし松の三紋を大通につけたる男ぶりにおこしやうの丸子が思ひ染しが人しれぬすりばちのふかき中とぞなりにけるそれゆへ道中にて浮島と外の女とならびゆけば丸子野大にやきもちにてりんきの角のすりこぎをふり廻してやかましくいふ
（くらざわ）なが〳〵のたびぢをつれだちてもま

りこどのがいおめるでうきしまのはらがたちます。

(かけ川) くらさわさんのやうにひつつかんしてもたゐのあわひのかたおもひであらう。

[右、第四丁表迄。圖は、右に、竹の皮に包んだ鰻を頭に付けた大小姿のうな吉と、鮑を頭に付けた腰元のくらざわ。左は、葛粉を載せた中老かけ川。後に木の芽田樂やうを頭に付けたきく川。摺鉢と當り木を頭に付けた鞠子野。]

○東街道の餅家の親玉かぶに安部川五文取の入道ゐろく齋と聞へしは唐土晋の七賢の跡をしたひて棲竹の林にのがれて天然の長壽をたのしまれける然るに此度の名物會に出ざるも本意なしと新坂のわらび餅をいざない出立れける、おれをせけんでせんにん〳〵といふげな、のふれんのかめにでもいつてゆかうか、其中に作夜の中山の名物あめのもちが一組は殊外仲満多にてどや〳〵とこそ出かけける此一例(列)は至ていやしひれんちうにて久しても葬當くふた〳〵と口の修覆にばかりかゝつてねから道ばか行ず、かわいゝあん口をたゝかふか、おかしがほしいナアと家からとてむめがへのおくちゐいふ どうやらむげんのかねのこんりうのやうな。

[右、第五丁表。圖は、右、安倍川五文取の入道、襠をきた御局風のわらび餅。凡てその物を頭に載せてゐる 左に、左の手に一重をさし上げ、右手で菜の一つを箸で挿んで、弟に見せてゐる兒、足下に風呂敷の上に重の殘りが見えてゐる。その二人の兄弟に即いて左、赤兒の手を引いて歩かせてゐる婦人姿、婦人の右手から肩に、中山

連中と大書した幟が長くある。さうして此の大小四人の頭上には、盆の上に一つづゝ餠を入れたのを載せてゐる。」

（二）爰に淸見そばは今度お老女の役にさゝれしが古き名物にして老衰ゆへ足腰もいたみ漸にとなりの淸見寺かうやくがせわにてそろ／＼跡より出かけ若葉に追付んと急いできよみが關／＼ぞゆく、おれがなりは高砂のほうきをわすれたやうなこれもひさしき名代ものかい、わたしやきよみのそばがよい、さんしよのせなどゝふるくさい事をうたひてなぐさむ。

「右、海岸、杖をつく老女風の淸見そば、名の如く頭にそばを髮の如く垂らしをり」――以上上之卷。

登場人物の輪廓を明かにするため、これまでは全文原文のまゝ載せてきた。各人物に就て說く所、凡てそれに假りた各地の名産その形狀性質等を謂うてゐるものと思ふ。その現存せるも少からずあらう。鄕土趣味通からは、一々首肯が出來よう。それらの興味のため、全文を載せたのである。以下は、梗概のみに止める。

こな吉と丸子は、互ひに人口を忍ぶ體となつたが、表向はわざと喧嘩をして仲惡に見せかけた。或日その見せかけ喧嘩が、度が過ぎて到頭本物の仲違ひとなつた（圖は、丸子の頭摺鉢からとろゝを浴せられてゐるこな吉）こな吉の言葉に、「たつたいまゆやからもどつたきれいなからだへしるをぶちかけるとはあんまりなとろゝくさいやつめが」とある。このとろゝくさいは、とろくさい、名古屋辯であつて、馬鹿らしいの意である。此點及び他の二三から、此の作者は、名古

屋者ではなからうかといふのである。

次ぎ、食氣の一門、かくて三河を過ぎ尾張鳴海潟有松しぼりの助が許に落着き、爰を旅宿とし來辰の正月福引の日限をぞ待ちかける。所がかねて仲惡くなつた浮島丸子の口論止む時ないは勿論、他の名物連も、家柄や持前を言立てゝ、仲間もめ小言が絶えない。次ぎ「此名物のうちにもかけ川は錢氣のあるものゆへ仲滿中の金元をして」ゐたが、浮島丸子に異見し仲睦じくさせんと、清見そばと共〲宥めたが聞かないから、掛川は葛の葉もどき、戀しくは尋きて見よゐんしうのかけがわじゆくのうらみくづのこと歌をかいて清見そばと連れ立ち身を隱す。錢金の事を缺せんとの積りである。二人は、三河八橋、燕子花の精へ來て、かくまはれてゐる。次ぎ、腰元のくらざは(鮑)は、氣晴しにと呼續が濱邊に遊んでゐたのを、志度の浦の海人に見つけられすでに船に連れ行かれんとする所を兩人(清見と掛川)の行衞を搜す爲、藥賣の姿となつてゐるうな吉が折よく來て助ける。(鮑と、棒持つて見えをきるうな吉。膝に敷かれた野郎、逃げる裸體の海女。)次ギ(左)八ッ橋燕子花の趣向で、清見と掛川を役者に仕入れて、女かぶきを始める。狂言外題は加賀見山舊卿(ママ)錦左樣に東西〲。(圖は、清見の岩藤、掛川の尾上の見え、草履打)

次ギ、お次衆の菊川は、仲間揉めの小言を嫌ひ、星崎の浦に出でゝ宥から舟ばつかり漕いで樂しむ。

其比小田原の名物清梅寺の尼公は、名物のさし揉めを宥めんと法席を開いて法文を說く。殊に丸子浮

島は、一旦契りを結んだ身、二世の機縁至つて深くして未だ盡きない。我天眼通を以て察つせりと敎化半ばへ、光明赫耀として、「彼の本の作者が信じ奉る觀世音の寶前に供へらるべき猿が馬場のかしわ餠、うつのやの十團子」現はれ、「各々心を改め中よくなりて早う福引を相勤よや云々」と告げる。次ギ、其年も暮て寛政第八辰の正月七日の福引の儀式も、いよ〳〵無事に相濟んだから、各々富士御嶽より恩賞を賜はつた。就中、丸子とうな吉のをかしみ拔群なりとて、三保の守の御仲人で、芽出度婚禮の儀式を取り結んだ。めでたし〳〵。『艶好畫作』といふのである。

―さて、肝心の道中記作者へのお禮の場面がさつぱり書けてゐず、尙ほその作者の所在もである。結局、その催しの前と、結末に一飛びに飛んで、纏りのないものであるが、名物の擬人、それに駿遠三尾に限つた所がをかしい。チンなものと思へるのである。

――昭和二年一月。

追記―此の作者の艶好は、名古屋の隨筆家猿猴庵（高力種信）かとも思へるが、それには人柄と年代が吻合せぬかと思ふ。尙、本年一月刊、駿遠豆叢書（靜岡縣茂林修竹山房刊）第三篇の此外題物は、自分藏本を底本にした複製本である。

――昭和三年七月。

三馬戲作「江戸の水」

解題

合卷風に成した三馬作國直畫の『江戸水』である。悉しくは『江戸水幸噺』。年代不詳ではあるが、末に至つて、「ことしはわきて馬（こは、例の三馬のうまさるの印、誠の馬に非ず。現にさると振假名せり。）のとし」とあれば、文化九年の中でもあらうか。尙、此本、後に國滿畫で六卷、『江戸水福話』と再版改題してゐるといふ。とにかく此本、三馬の『江戸水』の宣傳大に力めた自家廣告册子、柔出の隨一、標本である。體裁全く合卷と同じく、挿繪毎丁にあり、五丁一卷三卷一部合本、毎丁の輪廓も合卷と同じ寸、但し天地横をひろく開けて、半紙本風に製本してゐる。元表紙不明、貼外題も不明。江戸水自身の解說、並に戲作者にして商賈たる呼吸を最も巧みに心得た三馬の用意周到さ。一に戲作者副業生活の好資料とも謂ふべきものである。原本、花岡百樹氏藏、今その原文、圖柄の全部を共儘登載して、大方と共に鑑賞したい。內容、時に平凡なる賣藥化粧品の自家推奬、冗長の譏もある、がそれを巧みに危機を脫して、戲作ぶりに書き了せてゐる。そこに三馬の戲作者として商賈として語る物があり、

三馬の或る技倆—京傳と匹敵した—を示したものと思ふ。

倘、江戸の水の贋造品が、此の冊子によれば當時行はれたとある。時人に與へた冊子であるから、眞實事であらう。を以てしても當時此の江戸水が、如何に流行繁榮したかを語るものがあり、商業の盛衰如何を較べて、その聲價經營の技倆、京傳に勝るものあつたと謂ひたい。

例　言

以下大凡そ原文のまゝに記載。唯、餘りに煩しき假名を時々眞字に換へた。倘、括弧内の文字は、校者の補記である。毎丁挿繪は、說明を以て換へ、その標本として、第十一丁裏ヒラキを掲げた。(本著、卷頭口繪參照。)但し原文、最後の丁(第十五丁裏)は挿繪なく、賣品の廣告のみである。

刊行年代に就て

〔此本の刊行年代に就て。〕此の本、文化九とは、終りの「さるのとし」に一に據つた推定であるが、然るに國滿書の再版も文化九年也の一說がある。初版再版(摺の意味にあらず)が、同時に現れる事は、全くない。これは、再版本が繪を變へ、文は初版のまゝとしたよりの錯誤であらうかと思ふ。

「江戸の水」上卷

おしろいのよくのる薬

馬江戸の水

ひゞしもやけ
御顔のでき物
一切によし

箱入代四十八銅

本家　江戸本町二丁目　式亭三馬製

江戸町〳〵ゑさうし店小間物店又は國〳〵にいたるまで此かんばん差出し有之候もとよりよろしき方にて御もとめ可被下候

近來まぎらしき類藥あまた見及候間名印御改御求被遊可被下候

藥店を壽く

春興

千とせまで（松）請合賣にうそはない

（鶴）本町延壽丹頂の鶴

三馬

翠袖三千樓上下

黄金百萬水東西

五更ヨリ市販何ゾ曾絶エン

四遠方言總テ不レ動

式亭三馬錄

（以上、第一丁表）

金(きん)の鯱(しやちほこ)
(屋根に鯱の圖あり)

鐘ひとつ
賣れぬ
日はなし
江戸の春
晋子

下□(染カ)もせぬ
ゆるしの
色も
八百八町
御贔屓の
ありがたきを
思へば

江戸紫

紫の藤も
お江戸の
水の恩
七代目市川
三升

(コ、助六に扮せる三升、右手煙管を持ち、鏡立に向ふ。後ろ、筆やうい毛筋立で髪に水をつけをる髪結。)

江戸じまん

(以上、第一丁裏)

（江戸繪一名東にしき繪〇江戸仕立〇江戸本

江戸ッ子

一擲の靑
錢ハ
百萬の黃金
昨日の按摩ハ
今日の檢校

（コ、三枚蒲團の上に桝の小判を投げをる男、下に拾ふ幇間藝者など）

江戸氣

月令曰
四月袷衣
變而
爲松魚

（鰹の繪）

（花魁、二人禿道中の圖）

江戸のはり

江戸の水のうりぞめの日によめる　德亭三孝

賣出して水もま馬の
とくいをかどの
江戸の人ませば目印

（以上、第一丁表）

（以下ヒラキ。式亭正舗、馬と暖簾のかゝつた三馬店の體。右に、延壽丹の大きな看板用口除け。店前群集、御殿女中、下町女房娘、侍、町人など十二人。別に店に腰かけをる上下姿の侍一人、それに茶を出す小僧。右隅には、腰かけて包みを背負ひかゝつた男一人。店の者二三。奥の帳場は番頭か。日覆のうしろに、挨拶せる三馬らしき男と客一人、纔かに見ゆ。以下の文は、上欄、屋根の上。）

こゝに京都田中宗悦が製する煉薬に仙方延壽丹といふは、昔々元祿年中より江戸本町一丁目出店にて賣り始め來り、當時まで凡百二十年あまり世に聞えたる良薬也、すべて京大坂より江戸表に出店を出し、或は弘め所を出す類多けれども皆近比の事にて、此延壽丹を最初とするよし、古物好みの諸先生貴は古老の物語なり、これによつて此度本丁二丁目三馬方は本家に内緣あればとて、一丁目の店を引うつして以前の如く賣弘め來る、然るに關東筋は式亭の取次にて、諸國へ賣出す、勿論昔より國々にあまた取次所はあれども、戯作御ひいきの御恩澤にて、昔にまさる藥の賣高【次へつゞく】

（帳場の男）「ハイ〳〵唯今詰めます間、少しお待ち遊ばされませ　（職人風の男）延壽丹を二朱が下さい（以上、第三丁表迄）

（次ギヒラキ、或る家の奥の體、奥に臺所など見ゆ。火鉢を挟んで、舅と嫁、姑、右に亭主なり。嫁、姑の背にあつて睦じく囁く。庭に腰かけ、本を見る娘あり。）

【つゞき】なほ〳〵藥種を吟味して調劑する故、いよ〳〵功能著しく益々用ゆる人多きは誠に大みく

にの廣くゆたけく、誠ある大和魂のいさをしにして、又ありがたき事なりか、

「のぼせ引さげ、咳咳には即効あり、輕きは二百文にて忽ち効能あり、重きは三匁又は二朱ほども御用ひあれば、驗が見ゆるなり、第一腎を增し、精を強くす、脾胃を調へ瘠せたるを肥やし、胸をすかして腹の張りたるをすかす、○顏色おしく、ぶら〳〵病むによし。○氣のへり○きのかた○氣うつ○みゝなりてきこえぬ人○中風にて半身きかぬ人或は手足なえしびるゝ人○糯のつき○口中一切○あつささむさに負ける人○疝氣○すばく○り病○痳病○五ぢ○下血○小兒五かんにて瘠せ衰へるによし○婦人血の道、月やく不順○こしけにて腰膝痛み○ながち○しらちによし○産後血衰へて肌瘠せたるによし○常に氣弱く食すゝまず、瘠せる人によし○病後ひだちかぬるによし○頭痛めまいのたぐひはいふに及ばず、男女諸虚百損に用ひて此上もなき良藥なり、悉しくは能書に記す○さて又三馬が新製に江戸の水といへる化粧水を賣り出しけるが、能書の通り効能［つぎへつゞく］

(亭主、膝小僧を出して立膝。手拭を肩。)

「おらア此としでれこしきがやくにたゝねへから（以下、數行不明）あのおまが所へ行てもばんいちにすやだ人をつけへにした、ばかげきつてるぜへ

(暦を手にする男)

「おれが今に眼鏡がいらぬ、此暦がすら〳〵とよめるも延壽丹のおかげさ

「(不明)

「(猫を抱き上げた嫁の言葉カ)おめへの肝癪に

もいゝといふから、ひとまはりも嘗めて見なせへし
「(姑の言葉か)よわ〳〵とした生れつきは、あのお薬を持薬にすると違ふよ、持病のあるものは、持病の起らねへばかりもとくだはな
「(庭に腰かけた娘)三馬が引うけるほどのお薬だから、よつぽどよいお薬であらうにネエ、およしさん(以上、第四丁表)
(次ギヒラキ、髪結床の前。髪結の男と一人の客は、江戸の水の効能書を見る。今一人の客は天下一の鏡と毛拔を持つ。店前の路に、荷を背負うた江戸の水賣が効能をひろげて、藝者風の女に物云ふ。中、乳母と子供。左、効能を配る小僧、その相手の御殿女中、後ろに下女と奴)
[つゞき] うたがひなきゆゑ、御ひいきの御蔭にて賣れる事夥し、これは和蘭の薬法にて蕃名もあれど、女中がたにおぼえよきため江戸の水と名づけたり、いふ心はよく人の性にあひて流行することを思へばなり、すべて斯様なる珍しき方を弘むる時は、世の人不淨の薬を使ふなどと悪口をいひたがるものなれど、これはおほけなくも地名を取りて江戸の水と名づくる程の事なれば、汚れたる品にあらず、よつて疑なく人〳〵も用ひ給ふなり寒の水を以て製法するゆゑ、日かずを經るともくさることなく [次へつゞく]
(髪結の男)
「此水を用ひて此上へ色男になつては、命がつゞかねへ
(手拭肩に仲間風の客)
「男さんおめへも用ひる氣はなしか、ハ、ア何

だ第一きめをこまかにし、御かほのあぶらを□□常に白粉のおちつきあしき御かほなりともよくのりて、はぐる事なし、用ゆれば黒き顏も白くすツ、こいつは妙だ〳〵

「アノお子は色が白いから、藥を用ひてもはえやすあへ（江戸の水賣の詞カ）

「（藝者風の女）小つるさんの所で噂のあつたのだ、おいらもつけようや、おまきさんにもをしへてやらう

「（子供）ばゝあや、こゝは勇さんの床だのう、勇どこといふのう、おいらアよく知つてゐます

「（乳母）白銀丁の觀音さまへ參りませう、坊さんお出で〳〵

「（効能を配る小僧）御ひろうを御願ひ申ます

「（御殿）けしやう水か、これはよからう（以上第五丁表）

（次ギ、ヒラキッ右は、廓内の圖で、鏡二つに向ふそれ〴〵二人の妓、後ろより江戸の水らしき箱を捧げる禿。立つて見る妓一人。左〔卷之中〕は、茶屋辰巳屋の前の、茶屋女房とはおりの一人）

【ノドき】淸くいさぎよき藥水なり、きめあらく脂(あぶら)顏なるか、又は常に白粉をつけざる人、たまさかに化粧(けはひ)する人なりとも、きれいにのりて艶を出し鹿の子斑(まだら)にはぐる事なし、吉原の花魁などは生れ付き淸らかなる上に、朝夕擦(あさゆうす)りみがくゆゑ、白粉のりよく又しげ〳〵に化粧(けはひ)する故、はぐる事はなけれども、いつたいの美(うる)はしくなる藥なれば、日ごとに江戸の水を用ゆることゝなりぬ（以下卷の中）

なつは汗をかきてもはげず、冬は風に當りてもはげず、にきびはたけひゞ霜燒は忽ち治るなり、そばかすは餘程日數を用ひて治る、又化粧をすることの嫌ひなる御方、常に此藥水を塗り給ふべし、白粉つけずとも、顏に艶を出す、

○別して申上候、此藥水の色を似せて、おなじ物と見せかけ、江戸の水と稱は同じ事じや、など申すもあるやうに承り候、馬の目印江戸の水とよく〳〵御改御もとめ可被遊候、

（立つて居る妓）

「みどりやこれさ、おれにもひとつ取つてきてくりやよ

「(禿)山口巴の金藏どん所ではうり切たと申いすから、揚屋町の源藏さん所で取つてまゐりした

「にせぢやアねへかよ

「いゝへほんとうざいます

「(鏡に向ふ左の妓)わつちらは白粉のはげるといふことはありませんがネ、江戸の水をつけると朝の寢顏がいつそきれいざいます、朝起きて顏をふくと、薄化粧でもしたやうになりいすはな

（以下、卷之中、左の繪に附く）

「(はおり)生醉さんが四ツあきに來ては、困らせるのう

「おかゝさん今夜は寒いのう、此風はいやだよ

（はおり）

「化物の引込む時分に恐れるぜへ、しかし風にあたつてもの、江戸の水のおかげで、顏をなほせばよしさ、これだけがまうけものさ

(同カ)

「うさアねへ、これにもだの(茶屋女房カ)

(以下、第六丁表)

(次ギ、奥女中部屋。壁に役者繪が貼つてある。本両替町下村、住吉町松本の二個の到來物がある。通箱、本町二丁目江戸櫻といつた箱もある)

戯作の御ひいき強き御蔭にて、御邸の御女中様方は、別して御評ばんよろしく、御懇意様方へ御吹聴遊ばす故、いよ〳〵江戸の水〳〵と大評判になりしは、誠にありがたき御最屓の御力(ちから)なり、

(右の、眉のない女中曰く)

(よし〳〵そこへおきや、江戸の水は皆様がお待ちかねだ

(同じく、今一人の年増の女中)

「お宿から參じましたかへ、ヲヤ〳〵誠に感心

(以下、不明)……

(召使の女の○)

「江戸櫻のお使が歸りました、そして三馬の江戸の水も三十さんじました

(召使の女の△)

「源之助の短冊も貰ひました、イヽエ見せられません、何より大切だものを

(同じく□)

「まあちよつとお見せな、どうもいたさないよ

(召使の女の▲)

「ちよつと御覧あそばせ、おさつよりとうなすよりもけつかうな御品がまゐりました、これは白銀丁の東林だと申ます、ヲヽおいしかろ

(左の年増の女中曰く)

「なにをお騒ぎだ、チャ江戸の水が来たかへ、一つおくれ(以上、第七丁表)

(次ギ、右は橋の欄干に近づき、左の手を下げ右手の指を高く捧げた丁稚、橋下に引札散る。上に、引札をさらつた鳶。左は雲形になりて、天人二と、鳶。)

江戸の水の引札を配る丁稚、日本橋の上を通る時そゝつかしい鳶一羽飛び来り、かの引札の紙を見て、こいつ油揚を包んだなと大きに量見違ひで、ずつとさらつてゆく拍子に、片手に持ちたる引札を取り落す、折節さつと吹き来る風に、引札を吹きたてゝ、残らず川へまきちらしけり、

(丁稚)「おれがなりは、お釋迦様の御誕生、おかみ様も御繁昌がきいてあきれる、然しかう一時に散しては、天上天下よむが澤山、ア、わるい〳〵

「あれ〳〵遥かに鳶が見えるは〳〵ツ、チン〳〵かの鳶がさらひたる引札は、天に屆きて天人に弘まりければ、おの〳〵江戸の水をもとめて化粧をし給ふ。三馬按ずるに、天人の白粉をとく猪口を天人猪口といふてはまはり遠い故、しやれて天猪口とよびたりしを、今はおほぞらの惣名となるのみならず、天おくとさへよこ訛りぬ、天ちよこの天の川に白いものが流れたと、たしか萬葉集に見えたるやうに覺ゆ、則ち白粉の流れたるをいふ云々、

「天人はとかく、不精なもので、ねころびたがるが癖なり、合天井に引付いてゐてさへ寢そべつてゐるから、いはんや天上の事は、五臓もじ

(蔦曰く)
「天人さんのそのなりは、所作事ならば切落しへ落の來るやつだね
こちら向かしやんせ、エ、なアんぢやアいヒヒな、バン／＼、ナント豊前太夫はきつからう
(坐して、引札を見てゐる方の天人曰く)(今一人は雲に飛行)
「雲の上は風が强いから、白粉がはげてなりいせん、江戸へ行く序での時、買つて來てくんなんしト、天人の言葉は、どうやら聞いたやうな訛なり、(以上、第八丁表)
(次ぎ、龍宮の體。右の上、樓門の遠見。右は乙姬と同じ扮裝で、頭に魚を頂いたくろだひとかゞみだひ。左、鏡鯛の背の鏡に向ひ、左手に箱と右手に壺を持つたをとひめ。而かも此の三人、共に白き鯨の背に坐す。持てるは、江戸の水なるべし。)
さて又日本橋の川へ吹落したる引札は、水を潜りて龍宮界に至りければ、龍の都の乙姬君早速用ゐ試み給ふに、色澤うるはしくなりて、潮風に黑みたるも、顏玉を欺くばかりなれば、龍宮の鱗屑ども、我も／＼と江戸の水を用ゐければ、色の白き鯨も眞白になり、黑鯛も白鯛となり、烏賊の黑みも白みとかはりければ、誠に不思議の妙藥なりとて、龍宮までも專らの御評判に預る、
(くろだひ曰く)
「あとでお前の背中を、ちつとお貸し
(かゞみ鯛がいふ)
「うしろをつん向いてゐるはよいが、ひよつと

おならが出たらどういたさうのう、ヲヤ〳〵
かうした身は、きつと灸すえの看板だネ
〔乙姫は、鏡に向ひて化粧の水を使ひ給ふ（原文）

「そなたは濱の何がし殿か潮風にもまれて色の黒さよと昔のはやり唄があれど、此江戸の水を潮風にもつけさせたい

「鯨の白くなつたのは、版摺と版元の大きな仕合せさ、チト楽屋落だが、摺りやれが出ねへ

（校者曰ふ―此時分からすでにすりやれをいうたかと思ふと、面白い。）

「をと姫を龍神のだしと見れば、お祭の番附といふ繪組だと、どこからか悪口、

（以上、第九丁表）

（次ギ、白珊瑚の枝を振上げてゐる黒ん坊、風釆は、孫悟空の如し、即ち唐風。眞中、背を向けて止めてゐる女。左、妻。其のうしろ洞窟の入口、向ふ海の遠見）

かの引札水の上を流れ行て、こんろん國に着きけり、此國は世にいふ黒ん坊の住む嶋也、ある黒ん坊の妻、試みのため江戸の水をつけた所が、忽ち白ん坊となりければ、亭主の黒ん坊肝を潰し、あてこともない事をした、黒ん坊といふものは色が黒いのでもつたもの、白くなつてはかたは者も同然と怒り罵り、眞黒になつて腹を立つ所だが、黒ん坊だけに眞白になつて腹を立つ、

「はてさおめへも野暮なものだ、此國でこそ黒をうるし（れカ）だるけれど、一體黒は弱くて染がへしが利かねへはな、ハテおかみさんを白くしておいて、飽きたら何ぞに染めなせへ、紫者

茶かねすゞみのいよ粋にすれば、結構おはれをするはなト、此言葉、女房の事か白つむぎの事か、ねから分らず

「白くなつていやなら出してやんなせへ、こゝばかり日は照りやアしめへし、世界中が黑壁づくりだよ、百が米をかへば、くろ水を流すはな、何の事つたおもくろくもねへ、暗闇へ黑縮緬の頭巾を落したやうに、こんな又分らねへ亭主もねへもんだお黑さんうつちやつておきなせへ

（黑ん坊の亭主）

「茶の湯茶碗を鹽磨きにして賣るやうなものだ、黑ん坊が白ん坊になつては、値打が下るはい、餘り白つぽいことをしやアがる、あさぎ帷子黑小袖、いつもすたらねへうへに、此頃は黑うらのはやることを知らねへか、ナニ此白ん坊おまめが

○これを唐音できけば「こんろんこくふう
　こんろんぼうしんろんぼうぢやアすかま
　　ただあばあ〳〵

（黑ん坊の妻）

「いふ事があるなら、しづかにいひなせへ、何も珊瑚珠の投げうちをすることはねへはな

（黑ん坊の亭主、白珊瑚の枝を振り上げ、投げんとするが故也。すでに投げたるもの、妻の膝元にあり。）（以上、第十丁表）

（次ギヒラキ、右、大きな三方にのせた江戸の水の小箱數多。差出す馬印の衣を着た召使二人その前、黑主と黑塚、黑木賣、左（卷之下）は、九郎助稻荷、義經、半時、團七、鏡に向ふ秀藏）

江戸の水益々流行するに從ひ我も〳〵と求め給ふ

人〳〵は、大伴の黒主、黒塚のひとつ家の婆、八瀬や小原の黒木うり、九郎判官義經、九郎助稻荷、團七九郎兵衛、黒船の忠右衛門、半時くろ兵へ、くろだきの潮音、くろ本尊に目黒の不動尊、黒川道祐、黒」秀藏、おの〳〵前後を爭ひて數限りもなき黒盡し、皆江戸の水を求め給ふぞあり難き、

(召使曰く)

「箱入の歯磨きには、をかしい引札を添へて差上げます、ねだんしだいで(以下二行不明)ござりませぬ、いち〳〵に歯磨の製法が違ひます(以下、卷之下)

鏡立にいざ立よりて眺れば黒主は白主とかはり、團七九郎兵衛は團七しろ兵衛と變りければ、半時しろ兵衛、白船の忠右衛門、八瀬や小原の白木うり、しろ塚の婆皆〳〵白くなる程に、目黒の不動樣も目白のチツト待つたり それでは目白が二つになるから、これは作者の誤りか、但は傳へ誤る所か未だ詳かならず、

(團七九郎兵衛の語か)

「落ちつく所は、備中玉じまではねへ、江戸の水をつけた(以下、約七字不明)

(義經曰く)

「佐藤四郎忠信が身代りにたつて呉れてから、しろう判官となつたも滿更ではない

(以上、第十一丁表)

(江戸の水三馬店先の體。右、三方に山と積んだ江戸の水。荷造りをする店の者。上の端に腰かけてゐる仲間と飛脚。小女に江戸の水の小箱を渡す小僧。今一人の旅の客。上の雲間に、江戸の水の精、三個現はる。左、奥の帳場に算盤

を彈くは、三馬らし。下、江戸の水を括る番頭。庭に、女と子供など。）

江戸の水が賣れるは流行るはと問いにおつかぶせをしたがるは、世の中の人心、そこでもこゝでも何の水かの水を▲

「なんの水が出たとても、ありがたい江戸の水に叶ふものか

▲まぎらはしき化粧水を出しければ、江戸の水の精現はれ出て、樣々と評議する、

（右の荷造りの店の者）

「延壽丹を四匁、江戸の水を五つさし上げます

ハイ〳〵

（茶を飲みなる飛脚男）

「越後長岡の幾久屋行の荷物を、早速飛脚やへ出して下され

（左の、小箱を振りなる番頭）

「白川へ行く延壽丹は、飛脚屋へ出したかな、あしたは、しまやの出日だぞや

（右と左の二丁に跨がつた旅の者、腰かけてゐる）

「わしらが國では、一めんに江戸の水を用ゐます

（右と左に跨がつた、小僧の手から受けとる、子を負んだ女）

「詰めかへは三十二錢かへ、そんなら水ばかりおくれ

（左の子供）

「これから下村の白粉を買ふだ、江戸櫻のあぶらは、しろ物がよくて目方がおほいといふもんだから、むかふの店は繁昌する筈さ

（左の女）

「江戸の水をおくれ、五十のでは少ないから、
　百五十のをおくれ

（最右の仲間）（不明）　（以上、第十二丁表）

（右、江戸の水、出刃を持つてゐる。左、刀を提み、腰に尺八を佩し、蹲がんだ何とやらの水、眞中留女の恰で、御きやらの油　本町二丁目江戸櫻」七方にて製する花のつゆ。三人共に擬人で頭に壺を頂く。江戸の水は、勇みの風、何とやらの水は、俠客風）

江戸の水の精現はれたる内にも色々あり、通り者肌の江戸の水あれば、勇み肌もあり、當世風の短か羽織といふ精あれば、あだなる風俗の精もあり、男女の精色々に現れて、まちくに評議しけるが、勇み肌の江戸の水は、中にも氣の強き精にて、贋が出ては畢見ならねへと、人の異見をも用ゐず、にせの水のびいどろを提み拉がんとする、贋の水は、詞までおなまけあらした京だんにて、ねから骨のなき達引なりしを、花の露といふ女だて、双方を割つて入り、此喧嘩は貰ひやんした、一番わたしにくだんせと貰ひにするぞ頼しき、

江戸の水
つめかへ三十二文外□□
いれもの御持參あらば割
よくいたし差上申候
大びいどろ入　二百文

（何とやらの水カ）

「おうッぱらたちなんたらいふて、トッ卜相手にならねふきかい、よろしうお頼み申ます、
あれきかんせあの|?|くるぢやわいの

（江戸の水）

「出來合びいどろのはねものあら、俺が眞似をしやうとしてもあとから剝げる白粉水、ゐてへもしれねへ藥を混ぜて、本家の名まで汚すとは餘りないやすがたきめ、此方は鯱鉾の金看板伽羅の香のする江戸の水、だれだと思ふあゝつがもねへ

「きりおとしで成田やと賞めさうなものだが

（何とやらの水）

「贋の水ともいはゞいへ、御試が四十八文、ちよと箱づめまで出て賈をかい、サア江戸の水、したにゐたがなんでありや

（花の露曰く）

「お江戸に名高い油店、多くの中でこなさんとは向ひ合せの江戸櫻、花のお露が見てゐられず、女だてらにませたやつとお得意樣のお叱りをもかへりみじまいしかけた喧嘩、江戸の水さんにせ水さん、花のお露が賈ひやんした、いづれ化粧の水にして、ずつと流して下さんせいなア

「イヨ大和屋ア引　「これさ、むだないひツこなし

（何とやらの水）

「なんぢやい、へげたれめが、ゐらい痰火きりくさる餓鬼めぢやはい

（何とやらの水）

「にせるのぢやない、あとからおもひついたのぢや、逃げるのぢやない、引退くのぢやはい

（以上、第十三丁表）

（次ギヒラキ。眞中、仙方延壽丹の精、仙人風。

右、當世風の江戸の水（息子風）、その前に通り者風の江戸の水（名の如く）、左上に、人がらよき江戸の水（奥方風）、あだなる江戸の水（藝者風）、下に叱られてゐるいさみ肌なる江戸の水二人、一人は腕組み、一人は頭を搔く。）

通り者肌の江戸の水、これを聞いて早速駈けつけ、勇み肌の水を樣〴〵と異見して連れかへりければ、煉藥壺の中より仙方延壽丹の精現はれ出、勇み肌を教訓する、

「手前達は第一に量見が違ふ、此式亭の家は俺が家だから、俺に賣があつてはすまねど、手前たちにいくら賣があるとて構はぬことだ、手前たちには、廂を貸しておくのだから、母屋のおれが大切、手前たちは賣れても賣れいでも式亭は構はぬといふほどの事、お蔭で賣れるはありがたいとぢやと思ひ、隨分製法に氣を付けて、よいが上にもよくしてあげ申せ、世の中に賣の出るほどありがたい嬉しいことはない、なぜならば、江戸の水が賣れるによつて、おつ被せも出來るといふもの、これが賣れぬものならば、金を出してお賴み申ても、似せてはくれぬ人心、にせが出來るは本家の繁昌、たはけがあれば智者もあらはれ、夜鷹がある故、晝三のありがたみが知れる、きかぬ藥がある故に、きく藥が賣れるなり、人のことを構はずしてひたすら己れが身を愼み、諸人愛敬を心に忘れず、製法粗末のないやうに、淸らかにして然るべしと、中つ腹の江戸の水、大きに脂をとられければ、いよ〳〵淸淨潔白の藥水とぞなりにける、

當世風の江戸の水

「チトうすけつて見ゑばい人の所へ買はれてヘス、厚化粧では手柄が見えねへ

とほりもの「近頃おとなげないことだと異見をしても、とかく用ゐいせん、チト製法がまへ方と見ゑやす

（延壽丹の詞）

「人の顔の脂を取るものが、俺に脂を取られて濟むものか、チト氣をつけやれ、さりとは若い〳〵

（勇み肌の江戸の水の一人、頭を掻いてゐる）

「あやまり入ました

（同じく一人）

「能書の文句まで、おつかぶせますからさ

（以上、第十四丁表）

（次ギ、三馬師弟饗宴の圖、ヒラキ）

仙方延壽丹

關東筋 賣弘所

奥州 仙臺大町 島屋忠右衛門
同 白川横町 萬屋三四郎
同 本宮 井桁屋吉兵へ
常州 □(?)浦 大國屋勘兵へ
武州 八王子 小谷屋彦太郎
甲府 八日町 丸屋順五郎
駿府 新谷町 扇や半兵へ
相州 いせ原中町 加藤惣兵へ
同 藤澤 谷や惣右衛門
下總 佐倉 伊せ屋兵吉
上州 桐生 藤屋忠兵へ
同 高崎 大澤孫介
同 藤岡 いづみや卯兵へ
野州 小山 萬や源兵へ
武州 越谷 龜谷甚内
同 秩父田村 淺海傳兵へ
同 神奈川 きの國や源七
常州 水戸 井筒や作十郎
同 大田 井筒や彌一兵へ
下總 松戸 升や太郎兵へ
同 古河 ならや久兵へ
同 佐原 いせや新兵へ

此外取次所百廿五ヶ所東國諸所に有之候こゝに書記すもの所はいづれも古來方の取次所に御座候新規取次所の姓名あまたなれば略之

延壽丹江戸の水益々御ひいきの御蔭にて繁昌日々にいや増り、樣々の妙藥(みやうやく)れいちと効能を現はしければ、取次所も次第にふえて、多くの金銀山と積り、めでたき春のかきぞめにいつもかはらぬ馬の連中ことしはわきて馬(うま)のとしなればとて、式亭社盟の戯作者を集めて壽(ことぶき)の酒汲みかはしけるは、めでたかりける身の上なり、めでたし〳〵〳〵、

豐國門人

國直畫

日本ばしの
匠亭三七

「いづれもお骨折のかひあつて、斯樣なめでたい歳を迎へまする、これと申うすも御ひいきの御めぐみ、次には□□□□御連中のひきたてて下さる故ぢや、ありがたいことで御座る、

(此の饗宴の師弟、右は小石川の泉亭(少年風也)、日本橋の匠亭三七、小石川の德亭三孝、淺草の古今亭三鳥、下の黑紋附は三馬の意、その傍の兒童は小三馬の意か。左、日本橋の錦亭三友、虎の門の雪亭三冬(坊主頭)、日本橋の學亭三子、小田原町春亭三曉、□□町樂亭三笑。以上、第十四丁裏より第十五丁表)(なほ前頁下段の賣弘所の廣告は、原本にありては、十四丁裏ヒラキの上欄にあるもの也。)

金勢丸　酒の醉をさまし一切毒けしはら一道の妙薬

〇大包　百文　〇中包　五十文
〇小包　廿四文

三馬作

じやから細吟味
〇箱入り御歯みがき

箱入極製　四十八文
同精製　三十二文
同上製　二十四文
袋入吟味　十六文

目方の多少にかゝはらず製法の仕方と薬種の上下品によりて直段いろ〳〵有之候砂を用ひず至て細かなるを専らとす

馬　小兒百日せき妙薬

さとうゆにて用るゆゑ小兒にのみよく速に治す
一包代　五十文

式亭家法　**小兒丸**

五かんきやうふうはいふに及ばず小兒の諸病に用て其效自すみやかなり

御日あらひくすり
龍樹散

龍樹菩薩秘方の目ぐすり三馬年來用ゐ見てためしたる名方也
はやり目は一日にて治す
代　三十六文

經驗良方　**婦人の藥**

さん前後血の道によく婦人一切の妙藥忝しくは能書にしるす
代　百文　五十文

しやくの黒藥

うち身切きすニ即功あり
毎朝用ればしやくの根をきる
代　三十六文

（以上、第十五丁裏。此面、挿繪なし。大尾）

小三馬の「江戸の水」

三馬・小三馬の家業宣傳

三馬・小三馬父子相傳の江戸の水は、當時江戸婦女の間に愛用せられ、一方、坂本氏の仙女香などと共に、江戸風俗の或る中心を成した。京傳が、自家販賣の煙管烟草入等に就ても、宣傳—或は專用宣傳草紙に、他草紙中への書入に、或は一枚繪等に、—を怠らなかつた。同樣に、三馬も、此の江戸の水(及び其他自家營業の化粧品・藥品等)に就ても、自著他草紙への書入はおろか、專用宣傳冊子として、「江戸水幸噺」一冊、三馬作、國直畫(後年代不詳、再版して國滿畫、「江戸水福話」。)のものがある。此の「江戸の水」、大三馬の景物著作に就ては、既に拙著「江戸軟派研究」第三編第四冊第五冊に於て、其全內容を紹介した。(本著に複載。別揭)然るに、三馬死して、(三馬の死は、文政五年正月)彼の家業が、伜の小三馬に移るや、なほ小三馬に同樣の專用宣傳冊子を生んだ。中本一卷(五丁)「賑式亭福ばなし」といへるものである。題名さへ、親のを眞似てゐる。香蝶樓國貞畫(後の三代豐國)である。今、その內容を略述しながら、親子二代、宣傳に力めた「江戸の水」の、その流行の名殘を偲ばうと思ふ。

「賑式亭福ばなし」の體裁

「賑式亭福ばなし」一卷、表紙は錦繪摺である。式亭の圓形の印や、例の馬猿の印を散らして、右上

に羽子板を持つた娘、中央に、光氏もどきの當世蛭子(いまやうゑびす)が鯛を抱へてゐる圖、右下は、扇をひろげた福助、上の娘と中の蛭子とにかけて、〔おしろいのよくのる薬 江戸の水〕を上と下とで持ちあひ、下の福助は、小判形の小三馬作國貞畫とあるを肩にかけてゐる。下に、「新版景物」とある。

見返しの分半丁、こゝは、勇み肌の「江戸の水」と、地廻り破落漢風の「何とやらの水」との爭ひ半ばへ、留女に出た形の「あづま香」。凡て擬人で、あづま香は、女俠客でたちである。此の半丁の筋は、凡て親の「江戸水幸噺」をそのまゝ襲うてゐる。繪の上下、漢字まじりの細字にて詞を書ける事、凡て合卷の體。(以下、すべて此の體裁である。)

「同」梗概

第一丁より、本筋となる。以下は、全く小三馬の獨創である。がこれとても、筋は、下らないものだ。唯一興に、その梗概を書いつける。

「こゝに神田の八丁ほりに、かのふやふく助といふものあり、あるとしのはる、ねんしにあさくさのほうへでかけしつひで、ひごろちないのふくべんてんは、しんかうなればさんけいいし、みどうのもとにてすて子をひろひ、ふくすけ子なきゆへ、これまつたくべんてんさまのおさづけならんとこゝろづき、そだてあげてかゝりむすめにせんとおもふ」

云々で、(その圖あり。)丁稚を供にした福助、笊の中の子供を拾はんとしてゐる所。この娘を拾うて育てあげる。この娘、その面相は、所謂お多福そのまゝで、お福といふ名の如しだ。親の己惚、小町

そこのけ衣通姫と思うてゐるのに、一向貰ひ手が來ないので、ひろめのため「人立多き所へ水茶屋を出させ」、このお福の美人面を宣傳する。往來の男女、笑うて過ぐる體（その圖は、下部）。繪には、此の水茶屋をおたふくやとしてゐる。

親の欲目、「どのぐらゐねになるものか、めのきいた人にふんでもらはん」と、女衒を呼んで値ぶみをさせた所が、二そく三文につけたから、あつくなつて、いざこざを始める。と、始終を聞いてゐたおふく、につこりと笑ひながら、「あのぜげんがむごくねをつけたとて、かならずはらをたち給ふな、今のまによめにほしい、むこになりたいとはやりけいしやのくちのかゝるやうに、毎日〳〵そこらぢうからもらひにくるやうにして、お目にかけませう」と、やたらにげら〳〵と笑ふと、ふしぎや虚空から大判小判小粒二朱銀玉ふり來り、足の踏所もなき故、店實倉一ぱい詰めても足らず、「ものおきやあなぐらかしぐらをかりて」運び、金の置所に困る位ゐとなつた。（こゝ、ヒラキ、第一丁裏より第二丁表。上、お福の笑ひにより、小判の雨の體。下は、女衒と親子論判の體。）

げにやお福がいふに違はず、八百八丁といふが今は、町數もふえ人もふえ、三千と六町のうち、まづ嫁にほしいといふ爺や婆、夥しい數「むすめ見せ所といふ看板をかけ、町抱を賴んでますをたて、廿人三十人づゝはかつてだん〳〵にいれる。としまやで白酒をうるとおなじことなり。大屋さまは、たなこのことゆへ、せわをやく。

「なむさん、もうはねだそうだ
「チャ〳〵つえにすがつてやつときたのに、やれ〳〵つえない人だ
「ぢいさんは三分ださねばかはれぬが、ばアさんは廿七文でかはれる
「おびたゞしいぢいさんばアさん、けじうろく

といつた體。(この圖、第二丁裏より第三丁表ヒラキの上(うへ))嫁にほしがる面々、爺ぢ婆も年增も若後家も、押しあひへしあひ、お福に目みえをする。いつもなら、彼ら、よつてたかつて嫁のけちをいふのだが、今はうらはら、お福から舅や姑のあらをいはれて、大きに凹(へこ)んでゐる。(此圖、同の下(した))

次が(第三丁裏より第四丁表)お福を女房にとらうとする婿の候補連中、これもおしあひへしあひだが、同じくあらをさゝれて閉口。上欄に、無數の人の頭を描いて、下谷連、品川連、淺草連、日本橋連、吉原連、三田連、などの旗をたてゝゐる。ふざけたものである。

次ぎ(第四丁裏より第五丁表)は、この筋を、小三馬自身に結びつけてきた、一層ふざけた山である。がこれがまた當時の低級讀者(主に婦女子)などの喝采を博しただらう。この邊、なるべく原文を拔いてみる。

小三馬自身に結びつける

「こゝに本町二丁目北がは中ほど、しろきながのうれんかけたるくすり見世、江戸の水は本家式亭三馬が悴とらの助、うまれてよりおやのすねをかぢる事二十餘年、かほはひ

よつとこのめんににたるゆへ、ひよつとこ三馬とこぞのはる改名せり、不學のくせにしつたふうをしておやの名をよごすことをなんとも思はず、すきがいんぐわのげさくのみち、毎春はぢをかきあらはすきうしるいうんよくうれるでもつたものなり、どういふものだか、かのおふくは、よめにもらをう、むこにならうといふものをうるさがり、小三馬が不男をしたひて、どうぞ小三馬がみせへゆきたいとのぎよい、さいはひ、くわんをんのみどうのゑびすてんはおたふくべんてんとはべつしておこゝろやすいなかゆへ、三馬がいへなにのがれぬ西宮の先生、ぐつとのみこみ、おふくおやこをつれて小三馬がみせへきたりたまふ。おりしもふしぎや、おふくはたちまちすがたをへんじ、十二ひとへにひのはかま、まじめなおたふくのくわん女となり、むらさきでもふとんとちがつてのりごゝろのわるさうなしうんのうへにぶら〱して、いろ〱なごたくをあげたまふ。

「わらははこれ、あまのうずめのみことなり。ふく助ふうふが正直をあはれみ、また小三馬がのろまをふびんに思ひ、かんじんのものをもたせて、ふつきのみとなさんと、それそこにいるゑびすさんとひとまくかいたのなり。ふく助ふうふは、あきなひをかせぐべし。小三馬はおとくいだいじとみをつゝしみ、やくしゆをぎんみしたてまつれ。そこで一首うかんだ。（賣だしてとくるを江戸の水ませば人も馬の門の目印）」

といふのである。こゝ(第四丁裏・第五丁表)、右は、蛭子と福助夫婦、それにお福、畏つてゐる小三馬。左は、紫雲に乗つた十二一重のお福、小判が降つてゐる。下、說明してゐる蛭子と、振仰いでゐる福助夫婦と小三馬。最尾(第五丁裏)は、千兩箱の山の上に、お福の軸を懸け、下、祝ひ酒を飲んでゐる蛭子、右上下(かみしも)姿の福助、左り羽織袴の小三馬。小判が散つてゐる。

本文は、これで終つてゐるが、以下一丁半ほど、(最後の半は、裏表紙の見返し代用)の家製藥品目錄、江戸本町二丁目北側中程、式亭三馬といふのがある。江戸の水以下、約十一點。半丁の分は、全部、例の避姙藥「天女丸」の廣告である。

出版年次

因みに、此冊子の出版年次、それに就て明確な記入はないが、「小三馬と去年の春改名」と本文にあるから、彼の改名は天保五年である、仍つて此の本、天保六年稿、同七年の春版のものであらう。文化文政天保、弘化、嘉永とかけて、とにかく數十年の餘榮を保つもの、「江戸の水」の老舗であつたらう。小三馬の嘉永六年歿(享年四十二歲)までは、とにかく一世に雄飛、宣傳せられたものであらう。

親の「江戸の水」を手がけた關係上、子の「賑式亭福ばなし」も、此に披露に及んだわけである。江戸期ならでは生れさうもない(宣傳用冊子としては、現代にもその倫を見うけるが、內容の上から見て、その愛敬のある露骨な自家宣傳の意味に於て)ものだと信ずる。

―昭和二年春、彼岸中日の翌日―

補記

小三馬の宣傳册子目錄

再補

補記―其後、新修日本小說年表を見ると、小三馬は、此の自店宣傳用册子を數次刊行してゐるらしい。いづれも五丁（一卷）物であつて、年表には、左の如くある。

（小三馬見世賣物景物）賑式亭（國貞畫。天保七年）○（賑式亭）二編三馬叟黃金稱薛（同、同八年）○（同）三編馬商（同、同九年）○（同）四編馬商（同、同十年）○（同）五編福話（同、同十一年）全部小三馬の作。（合卷風）。とあるから、此の自分が問題にしたのは、その第五編のやうである。すれば、前に四編も同型物が出てゐた筈であるが、不審に堪へぬのは、「福ばなし」の版行年次である。即ち年表の十一年といふのと、「福話」本文の「去年の春改名」とは、矛盾するからである。どういふ意味であらうか。――昭和三年三月。

再補―石島薇山氏の「草雙紙書目正誤」（稿本）を見ると、此の馬商も、幕末まで、（小三馬の次の代に當る事は無論）續刊せられた。小說年表の五編如きではない。今それを、同稿本から、年代順に舉げる。石島氏一見本だけといふのである。九編（小三馬。三代豐國。弘化二年）○十一編（同。國輝。嘉永元年）○十二編（同。三代豐國。嘉永三年）○十三編（同。國輝。嘉永四年）○十五編（同。同。嘉永六年）○十六編（不詳。同。安政元年）○十八編（同。二代國貞。安政三年）○二十二編（同。同。萬延元年）○二十五編（同。同。元治元年）○二十六編（同。芳幾。慶應元年）。

――昭和三年七月補。

「吉原天秤」の體裁と全内容

はしがき

吉原評判記物もの丶一、「吉原天秤」といふものである。此本、種彥の「吉原書籍目錄」及び他の類似書目の中に見ぬ外題である。恰も此頃、予が寓目した「讃嘲記」と同用紙、同寸かと思はれる體裁、本文書體も頗る「讃嘲記」と似てゐる。序文等あれど、年次を示さない。恐らくは、讃嘲記と略同年代、讃嘲記が寛文七年刻といへば、これもその頃かと思へるが、はて確證はない。或は此本評語の中の、高尾・小紫などにより、その何代目であるかゞ擧證さるれば、随つて此本年代も類推される事とは思ふが。がすべては自他の後考に俟ち、今は、此の本紹介に急ぐ。

體裁

體裁。此の本、恐らく原寸の儘であらう。縦六寸三分、横四寸五分、用紙は粗雜な、纖維の多いものである。第一丁、序。次ぎ、本文、よし野より始まりて、第三丁を數ふ。以下第二十八丁まで、本文。最後に半丁、跋形式のものがある。卽ち序以下、追丁と見て、第二十八丁半のものか。(但し、此の原本、一の序より三の本文の間に、二の本文卽ち一丁分落か。)

挿繪 菱川風の挿繪が、三圖ある。第四ウ第五オ。第十一ウ第十二オ。第十八ウ第十九オである。

序文 序と跋は、稍細字。序は、三十一字位一行、十四行半丁。跋は、二十九字位一行、半丁に一行の餘白を殘して、全文十三行。序以下本文跋とも凡てに、一重の輪廓がある。丁數は、柱の下に打つてる。元表紙不詳、題簽また。

以下は、その全内容である。(原本、句讀點ナシ)

×

吉原天秤序

むさしの丶廣、うきなハたゝばたて、一寸さきハ夢のうき世そ(ぞ)、いかばかりしんほ(ぼ)うつ(づ)らをめさるとも、ついにはとて(ど)のけふ(ぶ)りとなら(ママ)ぬに、くすみてなにのせんかあらん、君か(が)心は淺草川の、なか(が)れにうかふ(ぶ)ろかひをはやめて、おせさゝさゝの一世のたのしミに、ちとせをさてのべんハうれしきに、ふ(ぶ)らりとなりさか(が)りたる身もはち(ぢ)らハこ(で)、たわと(ごと)つくハ、君にえにしやむ(す脫カ)ひ(び)しおひの、はじをいふよと、たうよりきゝの、ふとくでらるゝおてきたちハ、いよこのまとにかたはらいたくおほ(ぼ)すらん、しかしたかきいやしきこのさとに、うかれきぬれハ(バ)よしなかそ(ぞ)めのいろにそめ、やか(が)てとんぢやくのおもひにひかるゝ、しやミせんのこゑを聞てハ、あひしうのこゝろいつしかふかまといこんだと、うかれ心ひよくらひやうたんのまか(が)なる、まことにしゆんせう一こくあたい せんきん、

本文（以下全文紹介）

はなにせんしやう月にちわそ(ぞ)と、りんほうか(が)日す

さみたるも、むりにてハないそ(ぞ)、雨をも風をもう

わきものハ、りさ(ざ)んのあそひ(び)にことならねあけ(げ)や

のさ(ざ)しきにしとねをのべ、たつと(ど)からす(ず)してつう

ゐに(以上、一裏)まし(じ)わるも、たゝこれかねのと

くとかや、いそばたそゝりのやほ(ぼ)はんぐわんは、

ゆひまがおゐにもおとりたる、せばきつほね(局)にミ

をそは(ば)ゐ、たはに(煙草カ)むせび水をのミ、ひちなまけ(げ)て

まくらとし、またハさんちやのうすきなさけに、

ミをやつし、あるハおかしきかしは(ば)たの、あをのう

れんのかひまみて、かミのふすまをかさぬるも、

しなこそかわれ、たのしむところにもとつ(づ)きてハ

なにのへだてかあらん、こゝにいたつていくは(ば)く

の人か、へいせいをあやまり身をほろぼすと、し

ゆふ(ぶ)んこうのおしやるも、け(げ)にさるとそ(ぞ)かし、

(以上、一裏)

よし野　三浦内

このきみの御ありさまハ、なにしあふ花のかほ

りもいとふかみ、柳のこしつきしなやかにして、

ならべていはんかたもなし、御身のさかりもやゝ

すき(ぎ)給へバ、なにとなくいしやうのりやうもばし

ならす(ず)、ふんたいもかつて事とし給ハね共、てん

ねんとうるハしおもてに、すこしあばたのあめる

も、月のかつらにひとしく、いとしほらし、御し

ゆせきハくるハぶさうののうしよなり、一さ(ざ)のあ

いさつ、さかつ(づ)きのさしあい、たちふるまひのあ

ふき(ぎ)ので、いやはや、とこうハ申されまひか、

なんにいわく、はなのしたのびすき(ぎ)て、口もと

いやし、御心た(だ)てハうへゝぬわしのしやうをゐ

られしとそ(ぞ)、た(だ)うちうあしは(ば)やに、そりすき(ぎ)て
通らるゝハ、(以上、三表)惣太にあひとふおほ(ぼ)
しめすか、さい〳〵はらまるハ、おちやの事ハ、
いふもくだし(じカ)や、つとめもあきたるよしなれと(ど)
も、今に身ぬけのならぬハ、しうとめに中あし
からんとすもし(じ)して、さそふおてきのなきゆへ
にや、またハごふくやかゝやこまものゝ、たん
ざくのへんかならぬゆへにや、
ちかぶりて人をはるかにみくた(だ)すは
これぞ(ぞ)よしのゝはなのさきちる

ゆ　ふ　き　り　　新町　宗　玉　内

此きみの御よそおひハ、めんかうふはいの玉も
ひかりをうしなふべし、さればにや、このさとの
なさけをそふる夕き(ぎ)りに、たちいて(で)んかたもなき
なみた(だカ)よと、おてきのよみしもとハりじや、もと
よりもしんようせいの三ツを(以上、三裏)まんそ(ぞ)
くし給ふのみか、わかのみちまて(で)に心とめ給ふよ
しなれハ、(じ)た(ど)ゝよのつねのけいもし(じ)とハみえす(ず)、こ
れなん江戸のきみの衆生さいと(ど)のために、いまこ
のよしハらへしゆせましますかと、なさけのみち
いとたうとし、た(だ)うちうしとやかにして、さ(ざ)はい
心にくし、おみきも少しきこしめせハ(バ)、おちやあ
しからぬとそ(ぞ)、あはれ〳〵、
なんにいわく、めもとわろく、せい今すこしひ
くし、此君にぬらされしふかまのありしが、す
て(で)に身ぬけをもいそか(が)れしに、いかなる事にや
かれ〳〵になられたるよし、さそ(ぞ)〳〵ほゐなく
おほ(ぼ)さん、ことにつとめもやか(が)てあくときけは(ば)
なにとかなして、やハらけがいれてやりたいと

江戸軟文學考異

心なきしつ(づ)のゝまて(で)もおもわれ侍る、
心た(だ)てなにゝたとへて夕きりの
はるゝまもなきうきつとめかな(以上、四表)
(次ギ四裏五表へ、第一の挿繪。)

いまそかりせハ(バ)、あつは(ぱ)れ一いきさきにも、そな
ハりたまはんものをと、我ハおもハるゝ、
なんにいわく、めんていすこしけんそにして、御
物こ(ご)しわろし、ゐと(ど)ころもいてすき(ですぎ)たり、いま
た(だ)つとめに出たまわぬころより、つねならぬ人
とぬけめのならぬおもわく(以上、五裏)のよし、
八まんうらやまし、やかて(が)あとつき(ぎ)をまうけて
新丁のおきちやおしちにあやかり給へ、すべて
なにやらとやまひにはかたれぬとこそ申、また
いなか人に六と申人とふかきよし、この比は六
もぬけめのならぬおもわくあるよし聞、すこし
かせ(ぜ)心になりまいらせ(候カ)ゝよし、
た(ど)ゝならぬ人のおもわくふかけれは(ば)
よそのなさけはうす雲のきみ

うす雲　三浦の内

このさまの御ありさまハ、とを山にかゝるうす雲の、花にまか(が)れるなか(が)めあり、かのしやうわうの夢にみられしおもかけ(げ)も、もしこの君にてハあるまいか、しかるをありこし(ママ)なんどゝそしれる人あり、いとふつゝかなり、こしハそわうきうりのやなき(ぎ)のこ(ご)としと、たれやらか(が)ふせし詩ハ、美(び)人をほめたる、心ならぬもろこしのすへ(べ)らきハ、きうちうにこしのほそき女をのゝおかれたれハ(バ)、うへ死にする人おほかりきとかや、その比この君、

八　橋　　新町　宗玉内

此きみの御皃は(ば)せ、一めみたらハ(バ)、いかなるくすみた車そうも、こしうちぬかして、うこ(ご)きをとらし(じ)、かのむかしおとこが、なみだこほ(ぼ)し、かれいゐをほとばかしたるも、このきみのすゐの世にいて(で)たまはんとをすいして、そのがゝのなからぬかをかこち(以上、六表)たるものならん、た(だ)うちうしとやかに、ざはいけた(だ)かし、御しゆせきもあしからす(ず)、しよくわいのざはいなどハ、きのつまりたるやうなれと(ど)も、なし(じ)むにしたか(が)つて、なさけふかし、うれしや〳〵、

なんにいわく、御皃ながく、めもとすさまし(じ)、御心た(だ)て、すんとしてよりつきにくし、いかな

る事にや、おねき(ぎ)みと御あいだか(が)らよからぬよし、せうし、今のふ(ぶ)んにてハ、御ぜんせい、もしやうすくなる事もやあらぬと、それハ申さす(ず)とも、御心にとい給へかし、とかくゆふ女ハ、ゆう女のごとくに身もちする事、よからぬと(ママ)そ(ぞ)んし(じ)申事に候、

とりんばう戀渡りゆく八はしのなか(が)れにながすなそ(ぞカ)いとをしき

つ　し　ま　　江戸丁　伊右衛門内

此きみのか(が)んしよくハ、たいゐきのふようも色をうしなはん(以上、六裏)た(だ)うちうの御ありさまハ御たけすらりとして、ひようの柳になをまさりつへ(べ)し、さ(ざ)しきつき、ほ(ぼ)つとりとして、うつ(づ)たかし　されハ(バ)大(じ)しんとみらるれハ(バ)、つ(ど)ゝけふる事、か

す(ず)かき(ぎ)りなくすきなり、そのふられものか(が)、とこ(ど)やらにゝ(いカ)なとしていへるハ、いしゆならん、そうし(じ)て世の人のわか(が)あふきみハ、たとひあしき所か(が)ありても、ほむるものなり、またとし月しうしんかけてあひにしきみも、つゝ(ど)けてしゆひ(び)あはぬハかへつてぬれき(ぎ)ぬのなきなんた(だ)いをいふものなり人の口なれハ(バ)、とさ(ざ)しハならねと(ど)、あつは(ば)れ天のせめもおそろし、御心た(だ)てやわらかに、なさけふかし、御しゆせきもいとうつくし、御せ(ぜ)んせいはよしハらふ(ぶ)さうなり、

是なんせハ(バ)、御めもとねおきを見るやうなり、おつとせのやしよくゆへ、すき(ぎ)にしとし、御へいさんしたまふ、それもにくからぬわけあるよし、あわれ〳〵、

一天にふたりともなき月のかほ(以上、七表)
みてあこか(が)るゝあきつしま人

高尾　三浦うち

此きみの御名ハ、あきつ嶋ハくたしや唐てんち(ぢ)くまて(で)、かくれなく、やつか(が)れか(が)百里のむかい、松前と中所にすまひするゑそ(ぞ)まて(で)も、聞つたへはんへ(べ)る、御良は(ば)(皃)せのいつくしさハ、三千第一とほめたりし大しんもこれほと(ど)ハあるまひ、道中の御よそほひハ、さなか(が)らにまん月の海をいつるかこ(いづるがごと)し、そて(で)をつけられて、一きハうつくし、御心た(だ)こもさそ(ぞ)おもしからぬ(ママ)、三うらか(が)太夫にみたてたるも、け(げ)にことハりし(じ)や、

なんせハ(バ)、御良少ししもふくらなり、うわ口ひ(び)るをかミ給ふ事くせたり、道中にてかしらをすこしふらるゝ、さ(ざ)しき今少をもし、世の人あた

まに日のあきたるまゝに、いぬたかたの、くらる
たふれのといへるハ、めのなき人の言葉なるへ(べ)
し、(以上、七裏)たゝほひ(ど)なきハ、なきへ高尾
のわかかゑ(で)(やのしかカ)てによしか、あまり□(あカ)ハらへつけて
のころに、くた(だ)をきしゆへ、人みならうとゐて、
しは(ば)しせ(ぜ)んせいたるミしにより、かくなんさか(が)
なき世のそしりにあひ給ふこそ、しかしのち
〳〵に、かのめうしんにもおとり給ふましき(じ)御
きりやうと、おもハるゝ、ときにあはぬハ、せ
い(じ)しんさへも、せすやうかな、いそか(が)た(カ)つまと
いふおのこ、ふかくおもひをかけしか、いとま
あらぬ(ず)ゝにし侍れハ(ゞ)、いまた(だ)しは(ぼ)しのあふさも
なさす、いと(ど)ゝ思ひにしつ(づ)むよしのとりさたな
り、おらなきミにせ□(バカ)、もしさゝの一やのゑに
しあら(バ)ハ、むまふねゝさゝよとおもハるゝハ、

いかゝ(ど)〳〵、
あた(だ)人のうきな高尾と(が)い(ど)ひたつる
きみはみうらかやとにこそすめ

西尾　新丁　彦左衛門内

此君の御よそほひ白れんけ(げ)のつゆをふくめるか(が)と　(以上、八表)
し、道中(だ)のつとり(ぐ)として、さはいゐらしゐ(び)し、
御心たて、いとむくやかにして、一たひ此をたら
へ(べ)しやほ(ぼ)ハ、はなれき(ぎ)わをしらぬとそ(ぞ)、け(げ)にはも
つ(つとカ)もしや、すゑて此君にかき(ぎ)らす(ず)、みめかたちこ
そむまれつきたらめ、心ハなと(ど)かやさしきよりや
さしきに、うつ(づ)さハ(バ)うつらさ(ざ)らん、とかくけいく
んハ、よろつ(べ)しなやかに、なさけふかゝらんこそ
よろしかるへけれ、

なんにいわく、御たけつまりて、御言葉つきわろし、過にし比無二のふかまに別れ給ふ、さそ(ぞ)やちからおとされき、其人今そかりせは(ば)、今は身ぬきし給ふ事もあるへ(べ)きに、さて〳〵まゝならぬうきよ、せ(ぜ)ひなし、

すりきりハあさきゐにしをかこちけりそのまゝまかりしてきにあらねと(ど)

こむらさき　　三浦　うち

この君の御全盛、尤よしハらふ(ぶ)そう也、ようか(が)(以上、八裏)んのうるハしき事、かのげんし(じ)のうちこみ給ひしきみが、なにおふむらさきのうへも、これほどはあるまひ、道中の御よそほひ、いと櫻の風にしなへるがごとし、さ(ざ)しきつきしとやかなり、心だて

にくからす(ず)、

なんにいわく、道中あまりそり過て、へたのきぬ表具といふ人もあり、めんてい少ししやくミて、せゝこましき所あり、あばたも少あり、されと(ど)も、三方もてなしか(が)らなれハ(バ)、もつは(ぱ)らにはりつよし、これなん、しやくしくわほうとや申へ(べ)き、すへハしらぬ事じや、

聞しより見てうへもなきかほよ花
なさへいろさへこむらさきさま

唐　崎　　三浦うち

此君の御ありさま、もとよりなにおふからさきの松の、みと(ど)りのわかは(ば)へにたちならふへ(ぶべ)き、君しあるまひ、そて(で)を付られて(以上、九表)一きハおとなし、ざしきあしからす(ず)床のうちおもしろし

〳〵、
なんせハ(バ)、道中おとり(ど)馬のやうなり、心た(だ)てり
こうすき(ぎ)て、やゝもすれバてきをふらんとし給
ふ、これそ(ぞ)ひとつ松のつれなき御しんといひ、
またハあぶなし、ふるふらぬハ、てきをよくみ
さだめての事成べし、かへりをうけたまわぬや
うにたしなミ給へ、

ふた葉より松は太夫となにたてば
いま唐崎の身もちむつかし

新丁　久左衛門内

と　も　へ

この君のようほ(ぼ)うハ、たうくわ雨をおひ(び)、りう
はく風にゆらめくがごとし、御わらひ顔、今一き
ハうつくし、ざしきつき、わさ〳〵(ぐ)と御心だてや(ぐ)
わらか也、初會よりいとしミ〳〵とかたりなくさ
め給へハ(バ)、いかなるてきも、ころりとこしをうち
ぬかれて、またのあふせをまちかぬるとかや、床
のうち思入ハ、とふ(ど)ゝかふもいわれん事じや、
なんせハ(ば)こだけにして、御良ミじかし、道中
よけれと(ど)も、(以上、九裏)えりつきわろし、
どこやらにふかまおハして、まとのなさけ
をほとこし(ど)給ふゆへにや、さりし比へいさん
し給ふ、あわれその人に、つゆほどなりとも
あやかりたや〳〵、

つわものゝなにし(おカ)あひたるかひもなく
いまのともへはてきにまわれり

小　長　門　　芳順うち

此君は、りしやうの御よつきのよし、け(げ)にさも
あらん、御良は(ば)せあてやかに、らうたく、た(だ)うち

一うの御よふきおひ、とをめには女ともみえす(ず)、おとまた(だ)こまかにハ言はす(ず)、ほと(ど)よきふたりにたり、あ
一こなりひらもかくやハあらん、一さしゆへか、あとゝくわしくハ、玉のさかつ(こ)き(に脱カ)しるす、
ふき(ぎ)の手に、ほとけ御ぜんもちりを少しハひねらん、

うつせミ　三浦うち

なんせバ、道中かたはりてわろし、ざしき今少うす雲のとりたてなり、めんてい大かたなり、よ
うきやかならす(ず)、しかししつ(て、こ)はりとくらゐをふくいきぢをあねさまにならひ給へ、わや字ハいら
まへて、今さハ(在さバノ意カ)後にハはやるべきとのとりさたぬもの、新造のうち出來物也、
じや、きのと(ど)くや、もはや〳〵かうしにおりら
れたるよし、(以上、十表)

和泉　同隱居内

しほらしきたちふるまひのあふき(ぎ)ので此君のようは(ば)うハ、かの小町か(が)わかざかりもかく
おやハなひかやこのこなかとにやわとおもほ(ぼ)ゆ、道中けた(だ)かくふうりうにして、い
かなるやほめもさなか(が)らに、御の字のすか(が)たとお

ちさと　京丁　三郎右衞門内

もひしに、世もつまりたるゆへにや、かうしにお
めんていうつくしさ(ぞ)、月花にもたとへか(が)たし、こり給ふハほひ(ば)なし〳〵、御字(ぜ)にて(以上、十裏)お
の比のしんそう太夫のうちには、出來物なり、いハしまさは、ゆくすゑハ御せんせいにおハします

へ（べ）きに、さて〱残念〱、
なんせハ、ざは（バ）い今少おもく〱し、御心だてあ
ねこ（ご）ぜたちにになられさうで、きのどくじや、す（ず）
いぶんきをしと（ど）やかに、いひすつる言葉まて（で）、
なさけふかくするとになきやうに、かね〱（ぐ）た
しなみ給へ、世はなさけの下にすむといふ事を
ハ（バ）、よく〱こゝろへ給へかしや、

新町をふつて出らるゝいつ（づ）ゝさま
いつあひみてもいとしかるらん

河内　角丁　五郎兵衛内

此君の御貝（ぼ）はせハ、かのたかやすのさとの、たれやらが思ひものも、是（以上、十一表。此のウラより上ノ一に、挿絵第二）（以下、十二裏より）ほと（ど）にハまさらし（じ）とおもわる、道中のてい、さなか（が）ら梅香をさくらの花ににほはせて、柳の枝にさかせたるがこ（ごと）とし、又一ふしをうたひ給へる、しやミせんの糸もけた（だ）かき音にひかれて、一ど枕をかハせしやほ（ぼ）は、雨のふるよもふらぬよも、風のふくよもふかぬよも、かわちか（が）よひに身をやつすとこそ聞、源五兵衛がぼんてんこくへのぼりしも、此君ゆへか、御心た（だ）てにうわ（柔和）にして、ざはい床の内いふもくだしや、かく山いこく身ぬけの後ハ、ぜんせい此君にならふ（ぶ）ハなし、これなん鯉魚さまとや申さん、

松枝　二丁目　庄九郎内

なんせハ（べ）おかほのほくろめにたちて、わろしといへば、またしほらしとおしやる人もあり、やか（が）てねこき（ぎ）有ハきのどく、

此君の御よそほひ、御たけすらりとし、まついみと(ど)りの色はへて、千世をみせたるそのふせ(ぜ)いあり、た(だ)うちうさら〳〵として、つくろひなし、ざはいこうしや、御心だてにくげなし、むかしハ(以上、十二裏)おみきのなる事(カ)、てうはくりんもさかつ(づ)きをもちにけ(げ)給ふほと(ど)の御きさ(ざ)しにて、おわせしか(が)、この比ハたしなミまいらぬよし、ミぬけし給ふなら、さけハとかくついゐとおほ(ぼ)しめしとまり給ふか、おちやもことのほかむら(カ)きよし、おもわくの(カ)はなしち(ぢカ)や、しゆせき(手跡)もいとおさ〳〵し、尤つしまよしのしゆせきよしといへと(ど)、このきみのふて(で)にハおよはし(ばじ)、

なんに、とこ(ど)やら大名のおく方のやうなると申人あれとも(ど)、さやうにもなし、よしハらのてなられたるか(が)よし、つたらひしたくハ、この君になれたるかよし、つた

四〇六 ふと申おのことつれたち(だ)、おり〳〵さかつ(づ)きに預りし事有

うきはし　　新丁　九兵衛内

此君の御良は(ば)せ、いつもにこやかにして、ふちよひやうの梅花の春風にえ(ゑ)めるか(が)とし、小哥しやゑせんよしといへと(ど)も、なミ〳〵にて聞たる人もなし、ぜんせい日出なり、後ハしらぬ事し(じ)や、あはれ露のなさけに預りたきといふものあり(以上、十三表)

なんせハ(ば)、いろくろし、た(だ)う中もしやくミて、しさいらし、やと(宿)を出給ふ時に、かならす(ず)かたをひねり給ふ、さ(ざ)はいよけれと(ど)も、いつも極月の十三日のやう成り、心た(だ)てむくやかならす(ず)、されと(ご)もはりつよし、末ハ不知、

と　き　わ　　ほうじゆん内

この君のようぎ、いとあてやかにして、さなか(が)ら
ときわ木の、いつもかわらぬ御けはひ、もつとも
しのハし(ず)、り(カ)しやうかく山身らくの後ハ、御家の
白ねす(ず)ミなり、心た(だ)てすき〳〵ならん、
なんせハ(バ)、いろあひわろし、さ(ざ)はいうきやかに
してやりたや、されと(ご)もなし(じ)むにしたか(が)つて、
おもしろき所ありと、誰やらか(が)ものか(が)たり候、

新町

丹　　州　　三郎左衛門内

此君のめんてい、見るにおもひもふかみ草の、あ
かつきの露をふくミて、にほひをはくにことなら
す(ず)、さ(ざ)はいうき〳〵として、さかつ(づ)きのさしひき、
床入のそらた(だ)きハ、とかういはんもくたしや、む
かしのたんしうも、よもこれほと(ど)ハあらし(じ)とおも
ほゆ、(以上、十三裏)
なんせハ(バ)、今少しこたけなり、た(だ)う中のてい、
かひと(ど)りたかくて、すそか(が)れにみゆる、しゝつ
きよけれハ(バ)、おちやもあしからぬとそ(ぞ)、あわれ
〳〵一ふ(ぶ)く申うけたや〳〵

二町目

な　に　は　　山三郎内

此君のようは(ぼ)う、咲く此花冬こ(ご)もり、今を春へ(べ)と
かをはくににたり、た(だ)う中ほじや〳〵として、人
のいわらしぬきたり、ゐこくつとめの内ハ、なに
かとわる口いふ人もありけれと(ど)、ぜんせい今にめ
いりたまわす(ず)、あはれあねさまにあやからせたい
と、よそなか(が)らも思ハる、
なんせハ(バ)、物こ(ご)しわろし、されと(ど)も御心た(だ)てハ

きやしやとそ(ぞ)、

小太夫　三浦屋内

此君のかんは(ば)せ、大はくの菊花に、かめに(が)一本さしたるか(が)ことし、前ハ御字(ず)にてありしか(が)、おりられたり、さはいあしからす(ず)、さゝもつよし、なんせ(ぜ)ハ(バ)、御心たて(だ)あまりよからす(ず)、床の内あち(ぢ)す(ぎ)まて(ぎ)、つくろひか(が)ましし、おもてに白ふんぬりすきて、雪□(不明、母の如し。さりとて、上は、たしかに雪にて、雲母にあらず(だ)。)かとも(以上、十四表)あやしまる、たう中もとよりこたけなるに、こしからみて、なにとやらしさい(と)(ハ)らし、されともつハらはりつよし。

十三丁

せいしゆ　三左衛門内

せいすらりとして、さなから(が)五しやくのあやめに露をそ(ぞ)ゝきたる(ぎ)か(が)ことし、白躰もおもハしき(巧者)(ざ)ぜ(ぜ)いあり、さはいとしまゆへにこうしやなり。なんせ(ぜ)ハ(ば)、た(だ)うちうこしからみて、みにくし、心たてわるか(ぼ)しこくて、しかもてとりものなり、あハんとおほさん人、かまへて心ゆるしたまふな、もはやつとめもあきたるよしなれとも(ど)、なにやらくびたけおひ給ふゆへ、身ぬけか(が)ならぬよしのとりさたじや、

かしう　角町　九郎兵衛内

ようき(ぎ)、せいたかく(背)、もつたいよし、さしき(ざ)つきとしまゆへこうしや、たんせ(だ)ハ(バ)、かほたち(だ)(で)けんそにして、にくらし。心たてあくまていや(以上、十四裏)なところあ

り、てきをた(だ)ます事す(ず)いぶんじやうす(ず)也、おち
やハ、かたのごとくわろし、これもつとめハあ
きたるよしなれと(ど)も、すくせか(が)わろくて、みぬ
けか(が)ならぬとみえる、

はつせ　たてたし　伊左衛門内

ようき(ぎ)いとうるハしく、た(だ)うちうしとやかなり、
さ(ざ)しきこうしやめきたり、心た(だ)てにくけ(げ)なし、
なんせハ(バ)、今少しこたけなり、たれやらとおも
ハくにて、過しころ平産し給ふ、けいもし(じ)のう
へ(ど)にてしんじつの見つゝ(以下ママ。見え、頭痛カ)うハたのもしき心入な
れとも、かつうハ御せ(ぜ)んせいのさわりにやなら
んと思ふそ、いらさ(ざ)るせんしやうか、

はな野　三浦内

めんていきわめてうつくしとハいわれす(ず)、いにし
へ品川におわせしかど、このさとにしゆつせして、
やと(ど)やか(が)よひをし給ふ事、けいもし(じ)のめんほ(ぼ)くこ
のうへハあるまし(じ)(以上、十五表)
なんせ(ぜ)ハ(バ)、おとかいすほ(ぼ)りて、いろうきやかな
らす(ず)、床のうちこせりたり、うす雲とあひた(だ)か(が)
らよきやら、いつもつれたち給ふか、たゝ(ど)しハ
せのしか(じカ)〳〵、

ふちおり　二丁目　庄左衛門内

ようき(ぎ)大かたなり、さはいふしかふす(ず)、心入よし、
あまたの上ろうさんちやへ下られしに、松枝この
君ハ、たしろ(じ)き(ぎ)たまハん事、てか(が)ら、それか(が)しも
し御なさけにあつ(づ)かりたふ思ひ、十八さまをたの
ミ候へと(ど)も、か(が)つてんなされぬハ、とかくまつと(ど)

のに中ふ(ぶ)んあり、

よしだ　　新町　彦左衛門内

かほた(だ)ち大かたなり、ふとりつよし、もとハ御のじなりしか(が)、おりられたり、心た(だ)ておもしろき所あり、さゝをのまるゝゆへ、ざはいもあしからす(ず)、もはやつとめもあきたるよし、

たてたし

はつ雪　　伊左衛門内

（以上、十五裏）

ようき(ぎ)うつくし、口もと少しいやしく心だてやハらかなり、びやうじやゆへか、かつこうほそし、す(ず)いふ(ぶ)んやさしきふうなり、ねすか(が)たハよけれと(ど)、おちやハよからぬよし、

はつね　　すみ丁　七左衛門内

せいすらりとして、ふとりし(じ)ゝなり、ざはいあしからす(ず)、こうたしやミせんすく(ぐ)れたり、心た(だ)てすさまし(じ)き人なり、やほ(ぼ)はうつかとかゝるべからず、身おもくして、しハ(バ)らくひつこみたまふ、つとめもはやあきたるよし、

しつか　　三浦うち

かほた(だ)ちよし、少して(で)びたいか、心だてやわらかなり、ざはいとこのうちよし、たれもすくかたきなり、おちやハよからぬと(ど)ぞ、たゝし身ぬけし出たるよし、とりさた也、

よした　　京丁　三郎右衛門内

せひたかし、めんてい大かたなり、めもとしほらし、さ(ざ)しきつき（以上、十六表）小うたよし、心だていやな所あり、

きよハら　　新丁　九兵衛内

ようき(ぎ)おもハしからす(ず)、道中くびつきわろし、さ(ざ)はいすき／＼ならん、心た(だ)てすさまし(じ)き人なり、やほはうつかとかゝる事むよう、こうたしやミせんよし、おみきそこしらず、

とやま　　ゑと丁　四郎兵衛内

ようき(ぎ)大かた、いろ少しくろし、ざはいあしからす(ず)、こうたよし、心だてハいやといふ人あれと(ど)も、おもしろき所あり、

正つね　　同人内

ようき(ぎ)大かたなり、だうちうざはいよし、心入よし、たれやら口もとにほのじのよし、ことハり／＼

まんしゆ　　新町　三浦隠居内

せい今少しひくし、かほた(だ)ちあしからす(ず)、ざはい大かたなり、とこの内にてなにやらそつといふ、つねならぬふかまゆへにや、三月廿一日の夕に、（以上、十六裏）御へいさんおわしますよし、めて(で)たし、心入あまりよからす(ず)、

千代　　同人内

かほた(だ)ちを見れハ(バ)、天狗のむすめかとやあやしまる、ざはいよし、誠にたてくふむしもすき／＼か

とおもわる

いこく　同人内

みめよしからず、ざしきしさいらし、きた(だ)てあさ〳〵し、山三か(が)いこくつとめのうちハ、此人を犬いこくとわるくちいふかたもありき、

せいしゆ　同人内

かほた(だ)ちにきびふきいて(で)ゝ、あらびれたり、た(だ)うちうハこしか(ど)ゝみて、あしゝ、としまゆへかし、かし(マヽ)この人にあふてきの心ねがしりたい、もつともとをりものて(で)ハあるべけれど(ど)も、

たかせ　同人内

ようき(ぎ)ざはいよし、しやゝせんよし、小哥ハはなにかゝるやうて(で)、きゝにくし、た(だ)うちうしさいらし、さわき(ぎ)ものなり、おみ（以上、十七表）きもなるゆへにや、おちやもよしと、おてきのはなしじや、少しいけん申たき事あれと(ど)も〳〵、

唐さき　新丁　久右衛門内

かつかうよりかほ(貌)ちいさし、色白くざはいあしからす(ず)、おみきもよつほと(ぼど)つよし、心だてかしこくみゆる、

金太夫　同人内

かほた(だ)ち大かたなり、せいたかし、と(ど)こやらいやし、道中おもハしからす(ず)、ざはい床の内あしからず、心だていやなところあり、

あかし　同人内

めんていうきやかならず、ざはいおもハしからす(ず)、前はつきぢにおハせしが、今ハかうしへあか(が)られたるハ、ほゐ(本意)なり、床の内こせつきて、わろし、心だておもし、

たミや　すみ丁　吉兵衛内

かほ(だ)たちおとがいすバりて、さるまなこなり、とこのうちこうしや(以上、十七裏)なり、心たて(だ)わたにてくびをしむるやうなり、

ときハ　江戸町　伊右衛門内

こたけにして、ふとりし(じ)ゝなり、かほ(だ)たち大かたなり、た(だ)うちうおもハしからず、ざしきつきこうしや、ふられてめにたつ、床の内初からこちしだいなり、

いなは　同人うち

めんてい中なり、目もとしほらし、まへは太夫なりしが、おりられたり、心いとをしゝ、ざはい大かたなり、床の内あしからず、しゆせきもよし、

はな野　同人うち

かほだちくきやかならす(ず)、はなこゑ(ご)にて、ものごしわろし、心たこ(だ)やわらかなり、しよてからこまなるよし、

八千代　すミ丁　喜右衛門内

めんてい大かたなり、どこやらあいきやうありて、

挿繪第三

いとしらし、目もと（以上、十八表）（コノ次ギ、十八ウより十九オへヒラキ、挿繪第三）（以下十九ウより）よし、さ（ざ）しき心た（だ）てにく（げ）けなし、とこのうち初からこちした（だ）い也、

角丁

ちさと　長右衛門内

めんていあしからず、だう中しとやかにさ（ざ）しきよし、こうたしやミせんもあしからず、どこやらおもしろき所あり、

同所

ゐくち　權右衛門内

せいすらりとして、めんてい大かたなり、た（だ）うちうしさいらし、ざしきうきやかならず、こうたよし、よくねらるゝ、とゞ（どこノ誤カ）のまごかとおもふ、あけ（げ）や町の中ほどにふかまあるよし、

みかさ　同人うち

貞た（だ）ち中なり、じまんらしくて、いやなり、道中しとやかなり、心入ハすさ（じ）ましき、ざしき大かた、小うた吉、

京丁

小源太　三郎右衛門内

ひたいあか（が）りて、貞なか（が）くみゆる、ざしきつきよし、きた（だ）ておもしろき所あり、おちやハおもハしからぬ、（以上、十九裏）

とやま　同人うち

貞た（だ）ち大かた（だ）なり、だうちうなんなし、座敷あしからす、心たてハおもしろき所あり、

ていか　　同人うぢ

貞たちわろし、としまゆへ萬事こうしや(巧者)なり、しかし自飯米(じまゝの意カ)て(で)もあふ事ハ、しんしやくなり、とにおちやもよからぬよし、此人をあるもの、けいせいくだしといはれしハ、もつともじやと、我も思わるゝ、

新町

きちやう　　三郎左衛門内

せいひくし、貞た(だ)ちうきやかならず、道中もよからず、ざしきつき大かたなり、小うたよし、きた(だ)てやハらかなるよし、

花月　　同人うち

みめわろし、ひたいぬけあか(が)りたり、た(だ)うちうおもハしからず、心た(だ)てのとろにあつかまし、つりをとりてあふ事はいやなり、いやもちやうすのやくとみえたり、(以上、廿の表)

すミ丁

せきしゆ　　三左衛門内

貞(だ)たちよろしからず、道中ゐすほ(ぼ)らし、おひ(び)むなた(だ)かにて、いこくし(じ)んをみるやうなり、ざはいぬらりとして、おもしろげなし、心だてやハらかなり、とこのうちハ下されしだい也、

せんじゆ　　同人うち

貞だち大かた、道中わろし、ざしきおもハしからす(ず)、心だてやわらかなれと(ど)も、あつかまし、小哥よし、

さかた　江戸町　久三良内

めんてい中なり、道中よし、ざはいあしからず、小うたしやゝせんよし、さゝもつよし、よきたいこ上らう也、心だてかしこし、

さくら木　同人うち

かほたち(だ)、ひはんにおよばす(ず)、はなひくし、道中をよく〱(こ)みれハ、なきあまのおもてをかけたるとし(ごと)(ざ)、さしきよし、

はなさき　同人うち

めんてい中也、ざはいしとやか、心だてにくけ(げ)なし、いかなる事にや、世にあまりさたのなき人なり　（以上、廿裏）

まさつね　京町　蒲左衛門内

みめ中なり、はな今少しひくし、さしきうき(ざ)〱としてよし、心入おもしろき風也、道中おもハしからず、せいひくし、能たいこ女らう也、

こよし　新町　彦左衛門内

めんて(面體)いいろくろく、にくらし、せいひくし、心だてたれあつてよしといふ人なし、前ハ御のじなりしが、おりられたり、ざはいよし、こうたよし、

しのゝめ　角丁　庄左衛門内

かほたち(だ)大かた(だ)、しゝつきすぎたり、たう中(だ)わろし、心たてあつかまし、うた大かたなり、

はな野　同人うち

かほたち(だ)大かた、たう(だ)中よくもあらず、心だてかしこし、(以上、廿一表)

きんさく　京丁　孫兵衛内

かほたち(だ)よからず、たう(だ)ちうわろし、さけつよし、心だてやハらか成り、ざしき大かたなり、やほ(ぼ)をぬらすがしやうす(上手)成よし、

きちやう　同人うち

みめよからず(ず)、こづくりなり、たう(だ)ちういなかの(初手)なり、心だてよし、しやゝせん上手なり、しよてからてきにまハらるゝよし、

きさら木　同人うち

みめいつくし、たう(だ)中いゐのふうならめど、よろしからず(ず)、ざしきうきやかならず、きたて(だ)ハよけ(噂)れど(ど)、さい／＼のむしんにこまるとおてきのうわさじや、

はつしま　角町　喜三郎内

かほだち大かたなり、せひ今少ひくし、ざしきとこのうちよし、心だてかしこし、しゆせきよし、ぶんじやなり、まへハさんちや(散茶)なりしが(が)、あかられたり、ちんちよう(珍重)／＼、(以上、廿一裏)

いなは　同人うち

ようぎあしからず、道中よし、ざしきはけ(げ)山のと

し、心だてやハらかなり、とこのうちあしからぬよし、これもまへハさんちや(散茶)なりしが、あがられたり、

とやま　新町　宗玉　うち

かつかうよけれ(ど)とも、いろくろし、ゑりつきわろし、此ころ(ご)まて(で)御のじなりしが、おりられたるよし、もつともじや、また今まて(で)ハおそかつたとのさたじや、そうじて此一家の女らうハ、わるきくせありて、しりさがりをせうとそ(ぞ)、とりさだなり

はつしま　同人うち

かほだちおもハしからず、少ししやくゑたり、ざはいうきやかならず、あまりしげくむしんをいはるゝゆへ、すゑとけ(げ)てあふてきなきよし、さもあらん、(以上、廿二表)

かづらき　角丁　庄右衛門内

せいすらりとして、かほた(だ)ち大かたなり、ざしきとこのうちよし、心た(だ)てやわらかなり、まへハさ(散)んち(茶)やなりしが、あか(が)られたり、

よしおか　同人うち

さ(ざ)しきうきやかならす(ず)、心だてかわゆらしき人なり、た(だカ)うしんといふせか(が)れ、今少ふかきよし、

かつ山　同人うち

ふとりすき(ぎ)たり、かほた(だ)ちしゆきをさしたゑやうなり、た(だ)うちうわろし、ざはいしとやかならず、心だていやな所あり、前ハさんちやなりしが、あ

か(が)られたり、

はつやま　　京丁　權左衛門内

みめよからず、ざしきつきよし、小うたハお町一(五カ)は(ば)んのうたひてなり、いかなるしくむしも、一ふしきいてハ、あしが(以上、廿二裏)たゝぬよし、

わかやま　　三浦うち

こたけにして、かほしやくゝたり、色も少しくろし、物ごしよし、ざはいあしからず、と(ど)こやらにかくしまぶのあるよし、一だんの事じや、

みよし　　同人うち

めんていおもハしからず、目もとわろし、た(だ)うちうおよぎにんぎやうのやうなり、ざしきつき、口はしたなくて、きゝにくし、さけつよし、

こふじ　　同人うち

めんてい大かた、色少しくろし、きだてにくからず、さ(ざ)しきよし、さけもつよし、

さかた　　同人うち

かほた(だ)ちわろし、おとか(が)ひなか(が)し、ものこ(ご)しつくろひか(が)ましくてきゝ(以上、廿三裏)にくし、ざはいよし、床のうちにてうつといへと(ど)、さやうにもなし、ぬらししやうす(上手)なり、

さんしう　　三浦うち

かほた(だ)ち中なり、せい少しひくし、さ(ざ)はいよからす(ず)、きた(だ)てやハらなり、あまりこのもしからぬふ

うなり、

かほる　同人うち

かほまろう(ママ)として、まゆすゝ(ず)いろらし、たう(だ)ちう
べたくとして、みにくし、心たて(だ)やハらかなり、
なし(じ)むにしたか(が)つて、いやな事があるぞ、

さくら木　同人うち

かほた(だ)ちほそし、ざしきよし、床のうちおもハし
からず、こゝろたて(だ)おもしろきところあり、

ちよの　同人うち

かほた(だ)ちおもハしからず、ざはいよし、心たて(だ)お
もしろき(以上、廿三裏)ところあり、うたよし、

はつね　同人うち

かほた(だ)ちおもハしからず、ざはひよし、心たて(だ)か
しこく、ぬらしじやうす(ず)也、

小太夫　同人内

めんていよからず、ざしきよし、心だてやハらか
なり、いつもかうしのなすばかりなり、

柏木　ほうじゆんうち

めんていうるハし、ざしきとこのうちあしからず、
心だてすこしすけなき所あり、道中よけれど(ど)、し
りつきわろし、

はつはな　同人うち

めんてい大かた、ざはいしとやかならす(ず)、うきな(カ)
らす(ず)、口きゝすき(ぎ)てにくらし、心だてやほ(ぼ)ハいや
かるへし(がるべ)、

かつやま　同人うち（以上、廿四表）

かほた(だ)かいやし、まへハ御のじなりしが、おりら
れたり、きだておもしろき所有、ざはい大かた、
床のうちよし、

藤なミ　同人うち

かほた(だ)ちあしからねとも(ど)、いろくろし、心だてよ
し、ざはひうきやかならぬよし、かつてはやらす(ず)

かりう　すみ丁　半兵衛内

ようき(ぎ)大かたなり、きしき(ざ)しとやかなり、きたて(だ)
にくけ(げ)なし、しはせきもあしからず、おもやハあ
もハしからねど、下されしたい(だ)なるよし、

新丁　九兵衛

かしわざき

皃(だ)たちまるくいろ白し、だうちうしりひらめにて
みにくし、心た(だ)てやハらかなり、ものこ(ご)しつくろ
ひあるやうなり、さ(ざ)はい大かた、け(げ)いなし、

こさらし　同人うち（以上、廿四裏）

みめあしからず、たうち(だ)うしさいらしく、こゝろ
た(だ)てかしこし、床のうち(だ)おもハしからぬよし申も
のあり、いまたしんざうにおわしませハ(バ)、さぞあ
ら(マヽ)ぬもんと(ど)ころに、ゆかりと申(ママ)だらは、か(が)つてん
か、

玉かつら　角丁　吉兵衛内

めんてい大かた、目もとねをきを見るやうなり、心だてかしこし、こうたあしからす(ず)、ざはい大かたなり、

みなと　同丁　權郎(ママ)門内

かほたち(だ)ながし、ざはいとしよりとおなし(じ)、心だてにくからず、こうた大かたなり、

こゝのへ　同丁　吉兵衛内

皃たち(だ)おもハしからず、ふとりしゝ(じ)なり、めもとわろし、心だてこまさくれたり、よくまひをまわるゝよし、すこしのあいた(だ)御のじなりしが、おりられたる也、（以上、廿五表）はだへハわろし、

たかせ　すミ丁　吉兵衛内

皃たち(だ)わろし、たら(だ)中おもハしからず、小哥もよからす(ず)、

たまよ　同人うち

めんていひはん(批判)におよばす(ず)、たう(だ)中わろし、かうしにはおこりか、

つねよ　たてたし　伊左衛門内

みめうつくし、たう(だ)中よし、ざしきやわらかすぎたり、心たて(だ)よし、こうたゝ大かたなり、のち〳〵ハはやるへ(べ)し、きりやうなるほと(ど)よし、

わかまつ　芳順内

貝(だ)たちよし、ひたいあがりたり、かわゆらしき風
也、(だ)たう中よし、心入やわらかなり、

き よ 河　同人うち(以上、廿五裏)

(だ)貝たちよろしからす(ず)、心(だ)たてやはらかなり、は(じ)し
めハい(づ)つミといひしが、ひやうじやなりとて、な
をかへられたり、

し か の　同人 うち

(だ)貝たちよからす(ず)、(だ)たう中わろし、心(だ)たてむくやか
なり、

と き お か　同人 うち

めんていよからず、だうちうしよしんなり、心入
やわらかなり、

江戸丁

い つ ミ　伊右衛門

めんてい大かたなり、色少しくろし、御のじなり
しか(が)、おりられたり、ざしきとしよりおとなし、
心(だ)たてよし、

い く よ　同人 うち

めんてい中也、(だ)たうちうよろしからず、つ(ぼ)ほねに
ゐられしか(が)、かつらねごきのあとめにあか(が)られた
り、

新丁

げ き　久右衛門内

めんてい中なり、ざはいやわらかなり、心だてか
しこし、(だ)たうちうわろし、(以上、廿六表)

からまつ　同人うち

貝だちあしからす（ず）、たう（だ）ちうよし。心たて（だ）にくげなし、

えもん　同人うち

かほた（だ）ちよからす（ず）、ふとりし（じ）ゝなり、だうちうわろし、心だてやハらかなり、

とさ　同人うち

めんてい中なり、たう（だ）ちう大かた、心たて（だ）やわらか、さ（ざ）しきあしゝ、

つしま　三浦うち

かほた（だ）ち大かた、たう（だ）中よし、心た（だ）ていとしらし

ゝ、

いなは　同人うち

めんてい大かた、たう（だ）中よし、心だてあまりよからぬよし、

おのへ　同人うち

ようき（ぎ）大かた、ざはいおとなし、心だていとしらしゝ、

よしだ　同人うち（以上、廿六裏）

めんてい大かた、道中わろし、心はおとなし、

あつま　同人うち

めんていたう（だ）中あしく、心だてにくけ（げ）なし、

こよし　　同人うち

めんていおもハしからす(ず)、たう(だ)中大かたなり、心たて(だ)おとなし、

ふちなミ　　同人うち

めんてい大かた、だう中しよしん(初心)也、きだてやわらかなり、よき大じんつきしよし、珍重〳〵、

さころも　　同隠居内

めんていよし、たう(だ)ちうあしからず、心たて(だ)やハらかなり、

かしわき　　同人うち

めんていよし、たう(だ)中わろし、心だてよし、うたよし、いつさ(ぞ)やまど(ママ)いふものにあい給ふとき、わかミ(が)につゆのまはだへ(肌)をゆろし給ふハうれしや、いまにわするゝへ(べ)きとは、ぞんせず(存ぜず)候、ゆくすゑはやるへ(べ)き人なり、

（以上、廿七裏）

うきふね　　京町　彌左衛門内

めんてい水いたちのやうなり、口もとわろし、た(だ)ちうちう大かた也、ざしきよし、うたは中なり、

ちとせ　　同丁　三郎右衛門内

めんていよし、めつきわろし、だう中よからす(ず)、なにとやらひわずに見ゆる太夫なりしが、おりられたり、

あわぢ　　角丁　五郎兵衛内

めんていあしからす（ず）、た（だ）う中よし、心だてやわら
なり、よくあねさまにいきぢをけいこ（稽古）し給へ、

しのざき　同丁　喜三郎内

めんてい大かた、だう中よからず、心だてやわら
かなり、

こさつま　同人うち

か（だ）ほたち日もとわろし、だう中よからず、しやミ
せん大かた也。（以上、廿七裏）
（以下の分一丁分、丁數を打たず、書出しの體
裁上、或は、他の丁の紛れ入りたるかと思はるれ
ど、慥かにもいへず、しばらくこの儘にしつ。卽
ち假りの廿八、そのオウ也。）

はなさき　彦左（マヽ）門内

みめすいぶん（隨分）きめこまかなり、口つき十めん（澁面）つく
るやうにて、わろし、かつかう今少ほそめなり、
座敷つきやハらかなり、とこのうちさわがし、前
ハ御のじなりしか（が）、おりられたり、あるもの、
この君にあいしに、とのほかなる御なさけ、ま
とに二葉の松のちよかけて、かハらし（じ）とのおふせ
の、かたし（じ）けなきまゝ、ならぬ御身なれハ（バ）、せめ
てかたみともなれかしと、此おのこ日比てなれし
しやミせんをさゝけ（げ）給ふ、されハ（バ）君もあはれにお
ほ（ぼ）しめされけんが、いかゝ（かゞ）したる事にや、あすか
川となりゆき候、われ錢か（が）なふじさん（富士山）ほど〳〵、
なんをいはゞ、とこのうちしんそ（ぞ）うらし、はだ
へあらし、おちやハやふ（ぶ）れせうし（じ）、三うらのた

かをと此君きやうだいけいやく(契約)被成たるよし、
誰やらに聞たのもし〳〵、

松しま　たてたし　伊左衛門

めんていよからす(ず)、たう(だ)中わろし、少ふとりし(じ)、なり、心た(だ)てよし、

はつ野　同人　うち

かほた(だ)ち中なり、たう(だ)ちうよからす(ず)、きた(だ)てよし、

（以上、假廿八表）

よあらし　江戸丁　又三郎内

めんていよし、たう(だ)中大かた、うたひを少うたハる、心た(だ)てやハらかなるよし、

しら川　同丁　四郎兵衛内

めんていあしからす(ず)、たう(だ)中大かたなり、心た(だ)て雀めのなくをにせ給ふ事むやう、

たかはし　新丁　宗玉うち

めんてい大かたなり、たう(だ)中わろし、心た(だ)てわろし、かいしきうれす(ず)、かうしにおごり、

しらたま　角丁　喜左衛門うち

かほた(だ)ちあしからず、たう(だ)中大かたなり、心た(だ)てかしこし、小うたよし、

いつミ　新丁　彦左衛門内

めんていわろし、たう(だ)中しよしんなり、心た(だ)てに

くげなし

さらしな

すミ丁　太郎門内

めんていまろりとして、ふとりし(じ)丶、た(だ)うちうわろし、心た(だ)てやわらかなり、(次ぎ、一行分アキ)

(以上、假廿八裏)

右此一まきを、わたくしのおもひいた(だ)したるにてもあらず、もとよりそれかし(が)ハ、いなかのやでんよりも、はる〳〵と、はじめてこの花のお江戸へ上りつ丶、あさゆふの玉のを丶つなか(が)ぬやうのはべらんま丶、せめてはいとなミのわさ(ざ)にもとおもひ、びやうぶのしたはりなんして、からきよの中を渡らんとおもひ、ふるほうごをなん、かいあつめしに、ある時よそく此書物をもとめきたりぬ、たがひがきをみれハ(バ)、よしハらてんひ(ぴ)んとかや侍る、ふ(づ)つらしくおもて、しやうふのりのかわかた事をもいとわで、よみ侍れハ(バ)、こよなふおもしろさのまゝに、おてきたちのおほ(ぼ)しめさんもいかゝ(ど)なれと(ど)も、このまゝにても、むけのふおもひ、はん(版)にのするものなり、まことに見るにめのどく、さわるに(ぼ)ほんのうとハ、よくいひつたへ侍る、その日〳〵(欝)のいとたゝミさへおくりかねたるそれか(が)しか、見るとひとしくかきうつす、そのつい(費)ゑいか(ば)はかりとや、おもひ侍るものなり、あとよりくわしくハ、玉さかつ(づ)きにしるす者也、

(此次、一行分餘白。即ち此の跋形式のもの、廿九字位一行、正十三行也。)

(以上、廿九表)

(奥附缺クカ)

〇

以上が、全篇である。最後の、跋形式の言によると、此本、前篇であり、その後篇に、「玉なへ栗か寄カご」といふのがあるやうである。悉しくは、後考に俟ちたい。また、引かれたる妓女たち、その二代目なるもあり、初代二代の關係より、大凡そに、此の本年代を知りえられるもあらうが、今は詳らく措く。なほ此本作者は、跋に此の作の動機を色々と假作してゐるが。然しその作者身元は、此の跋のいふ通りであつて、即ち田舍生れのものであらう。

――昭和年十二月―昭和三年二月。

吉原本二種

種彥の「吉原書籍目錄」の類にも洩れ、又これまで誰人からもいはれた事がないらしいから、此の二種を解題しておく。一は、吉原不殘記、五卷の內初一冊。二は、吉原評判交代繁榮記、全三冊。共に洒落本型の小本である。

一、吉原不殘記

「吉原不殘記」解題

小本一冊、五卷の內、その初卷である。此の一冊、序以下追丁にて、三十一丁。（三十一丁裏は、跋の如き形式。）柱には、不殘太とある。挿繪二、第七ウ・第八オ。第二十一ウ・第二十二オ、共に鳥居風にして稚拙。序と斷はつてはゐないが、初丁より第二丁まで全部、その形式のものである。その全文を擧げる。

「同」序文

輕して淸ものはのぼつて太夫となり重して濁ものはくだつて次女郎となる評判是に極ム しかれとも大極また無極なり善も惡にはもとつきやすく惡をひるがへして善にきするも有りされは屋暮もいたつて通者ニ成事此里の德なり蓋シ女郎のよしあしを評判もうたてし

き事なから戀は觸にしたかつて思ひを増とかや兎に角に御名をしらしむるこそと何かし誰かしにゆひそゝなかされて五卷につゝるおこかましき事なから當初より評書數冊におよふといへと苗代水のすめるをもつてハ女郎の顏をあらい女郎花のくねる言葉にやつ男か心をやわらけ打見にはおひたゝしけれとも讀てつほいハ酒天童子　ちわや古き紙くす買も淺草紙に云なして其あらましを漉かへ價や十つゝ十の其内に二人三人かきあらハして多ハその名もしれかたし我思ふ君やありとたつぬる人も興をさましゆへに常磐の色かへぬ松の太夫の下葉よりかきあつめたるこまさらいつきぬきゑんの三味線はつるひんと成ル格子の内籠の鳥かや鶯の初音にまかふ一こゑを聞といよこのうか〳〵となぜにかぶろは出てあわぬとそゝる局の暖簾の影空にしられぬ秋風にたなひく雲のたへまよりもれ出る月とひとしき御粧はや濡そむる露時雨ふりゝふらぬか分かたき山茶の二階に日を暮し君が囁ほたし言人目もいかに翁草心からこそなかいして思ひそめにし元岸や次の女郎もいかてかわ情はおなし色の道和氣の手くたを搔のれん不殘記ならんかし

とあつて、次ぎ

吉原不殘記　　太夫格子之部

の一行があり、これにて二丁分は終つてゐる。第三丁表からは、右一行を受けて、高雄太夫　京町

「同」内容

三浦四郎左衛門内の評語に移つてゐる。

即ち以下、高雄（三浦四郎左衛門内）○薄雲太夫（同）○西尾（同）○大唐國（同）○濃紫（同）○御芳（同）○常磐（同）○右近（同）○衣紋（同）○河原崎（同）○山科（同）○定家（同）○靜（同）○小西（同）○路野句（同）（此の次ぎ追加として、九行の文字あり）○山登（新町山本助右衛門内）○清原（同）○津島（同）○八重霧（同町、龜田屋九兵衛内）○柏崎（同）○正常（同）○唐崎（同）○花佐幾（同）○松風（同）○八重菊（同）○和國（同町、巴屋三郎左衛門内）○初瀬（同）○初霧（同）○青柳（同）○數馬（同）○小柳（同）○小幡（同）○山吹（同）○薫（同）○千年（同町、長崎屋仁兵衛内）○和哥松（同）○千手（同）○清橋（同町、北川清左衛門内）○明石（同）○丹州（角町、藤屋三左衛門内）○初花（同）○芳野（同）○和哥山（同町、橋本五郎兵衛内）○幾代（同）○相倉（同町、□荷や吉右衛門内）○小源太（同）○濃若佐（同町、菱屋善兵衛内）○關珠（同）○小瀑（同）○小宰相（同）○知渡世（新町、菱屋久右衛門内）○和哥松（江戸町、巴屋吉兵衛内）○小西（同町、幡字屋七郎右衛門内）○白菊（同）○當世（同）○小太夫（同）○難波（同）○小櫻（同）○津川（同）の五十餘名の評である。

「同」跋

卅一丁裏の跋形式のもの。

「高尾を頭として此津川迄五十餘君數千の内をゑらミ容殊品位藝能を太夫格子に定ムい

かて評判あらんしかれ共釋氏の中に文珠ありはんどく有り目蓮ふるな等はまたこの妙有り儒に聖あり賢あり善内のまた古を云ものか　あとより白地にくわしくは」

で切れてゐるが、柱に終とあるから、これで切つた積りであらう。評判の例として、高雄を拔く。

「同」高雄の評話

高　雄　太　夫　　京町　三浦四郎左衛門内

三浦の花ちることなく高尾山の月ひかりをまして御代つきをてらし給ふハ女のたへなる御事是すなはち妙なりけにや一切鏡(マヽ)にも三千第一名とみへたり見ぬ唐國ハしらぬ事我町においては哺女郎の花のもと艶色美妙の御粧てんねん御位そなハり御心はへもうとからすしかれとも御全盛ハ中の上なり須世の人おそれてなるへし御一座の御しこなしさすかおふていにおハしますかしめうがのために吉原の日をたのしミ揚屋町の月をなかむる人たちはほのかにもふれたらんこそねかハしかるへけれ

　すこしつかもなき御心入あり御はうはい中よろしからす　あとから

とある。年代不詳、これも何代目の高雄であるのか。

二、交代繁榮記

「交代繁榮記」解題

交代繁榮記は、上中下の三冊。元表紙、青の厚紙、三方折込み、題簽は、吉原評判と一行に角書が

あつて、交代集を記上又は中、子持の輪廓を附してゐる。上卷は、全二十五丁。内、序三、以下本文中卷は、全二十六丁。下卷、全二十六丁、但し、下の二十三丁の次、相印一丁、を挿入、計二十七丁（下の二十四丁以下二十六丁表まで跋。二十六丁裏は、奥附である。）

「同」上卷序文

上卷の序文、如左。

四川の海浪靜にして諫鼓苔むし弓ハふくろに納り枕を高ふして腹つゝみうつ今寛德の御代にむまれ有かたひ事いやましに此里のはんゑひ立歸る春ことにさくらは四方ににほひたかく文月のとほし火ハ家毎にゆらくたまのをのひかりをあらそひ大門に市をなしかむろハまちているさやまの月雪花もおよぶましきよそほひは此さとのけしきぞかしけにや喜見城の都常樂我淨とたわれしもことはりやこの里に三ツのしなありといふことハはらバふ子も能知れる所也又ハ下りてつほねありそのしなわかちのある事ハ此門に入りてまなぶ人にあらずんばいかて知る事かたし、我付ひものむかしより今壯盛にいたりて此さとにはいくわいし遊女の人品よくしれるといへともその氣しつのうけたる事ひとしきにあらされハましてやしなかたちハいふにおよハすこゝろはへいかてひとしからんひとしからさる遊君の氣しつをわけてあたハさるハはぶき其能知れる斗を評して三ツの卷となすといへとも先哲の評にはおよふ事かたししかはあれどいつれの家いつれの君達を悉

頭巻抖といふ事をしらすまじへてわかたざるは此ちんにいるひと／＼貴もいやしきも
知るもしらぬもおの／＼その交ハりを得て吉原交代繁栄記といふものならし

時

寶暦四ツのとし

戌のきさらき日

廓露堂

樂　　水卯

「同」円寄

以下太夫たちの評判であるが、初め一丁半は、優待の意味か、上に太夫名、下に評言があつて、計六名、これだけには太夫名の右に、松、梅、竹、櫻、柳、楓の繪が、黄・紅の二色で刷込んである。書いたものである。但し、凡て江戸町壹丁目左側玉屋山三郎内の傾城で、此六名は、太夫花紫、格子尾上、格子清花、同たか花、同陸奥、若太夫小紫である（名の右の植物も、此の順序にあつて、即ち花紫は松、小紫は楓である）。花紫と尾上とで、半丁分（此分、上巻第四丁表）である。これを示す。

太夫 **花紫**　咲ふしの花むらさきや
　　　　　　よにゝほふらん
　　常磐なる松に契りて

うつすとらえこそさよはめ
檜尾子　上　春に匂ふおつへの梅の花の
ゐまひは

上卷第五丁裏からは、普通體裁の評判であるが、但し、その位附を、一々謡の名題によつてゐる。その位付と謡名題との相應が、下の終りにあるのであるが、例へば、高砂が極上上吉、西行櫻が上上といつたもので、謡名題は、高砂、盛久、松風、西行櫻、羽衣、老松、舟橋、はせを、鉢木、烏帽子折、難波、玉の井、湯谷、錦木、浮舟、養老、梅かえ、玉葛、富士太鞁、猩々の二十である。

所收遊君の名だけを示すと、上卷の上揭六名の次ぎ、○むらさき（新かつさや內）○なき里（同）○田むら（江戸町壹丁目あふきや內）○卷きぬ（同）○すき絹（同）○よしまき（大かつさや內）○玉芝（同）○はた卷（大かつさや內）○あふ夜（同）○そめ絹（同）○片岡（てんまや內）○通ひ路（同）○小式部（同）○豊浦（ともへ屋內）○その原（同）○豊佳（同）○よし野（同）○あふ里（同）○清玉（まんしや內）○まき絹（ゐひ屋內）○卷芝（同）○しゆん山（同）○はつ浪（江戸町壹丁目右側松葉屋內）○わかな（同）○その梅（同）○染之介（同）○はつ浦（同）○瀨川（同）○留川（同）○吉十郎（まんしや內）○やくも（同）○ひとへ（ゐひや）○山吹（同）○しか浦（三浦屋）○松風（同）○三保崎

(同)。

「同」中卷内容

中卷。みさほ(江戸町貳丁目右側つた屋内) ○紅井(同) ○花山(一もんしや) ○きやう山(同) ○若紫(つるつた屋) ○つしま(同) ○此いと(同) ○若松(ひやうごや) ○かほる(丁子屋内) ○染霞(同) ○みなと路(同) ○かつ山(同) ○しら玉(同) ○常磐津(同) ○こう山(同) ○しけ浦(同) ○ひな霞(同) ○てう山(ひらのや) ○うき芝(太田屋内) ○柏野(同) ○花世(同) ○哥浪(江戸町貳丁目左側龜甲屋内) ○花霞(同) ○妻菊(同) ○菊その(同) ○淸つね(きり屋) ○しつか(玉屋) ○志賀浦(同) ○若菜(わかなや) ○いさ□(はヵ)(家田屋内) ○いよの介(同) ○れん山(わかなや) ○うきしば(ともへ屋) ○あやめ(角丁右側山口屋内) ○菊その(同) ○小の川(竹まんしや内) ○しけ卷(ゑびや) ○ひとへ(同) ○江川(ゑびや) ○夕なき(角丁左側角まんしや内) ○右京(ひしや内) ○れん山(中まんしや内) ○たち花(同) ○こと浦(同) ○淸むら(京町壹丁目右側いせや内) ○東路(ともへ屋内) ○卷絹(せに屋) ○かつら木(せに屋) ○若松(たわらや) ○花崎(同) ○よし野(同)。

「同」下卷内容

下卷。そめきぬ(京町壹丁目左側三浦屋内) ○あけ卷(同) ○たち花(かしわや内) ○たまくら(同) ○初風(いせや) ○松風(同) ○春風(同) ○九重(京町貳丁目右側越前屋内) ○花その(同) ○春日野(かなや) ○かつ山(同) ○仁のへ(同) ○式部(同) ○通路(大ひしや内) ○ひとへ

（同）○あいつね（桐びしや内）○清つね（同）○住の江（中あふみや内）○雛鶴（同）○あふみ（同）○都路（同）○若草（同）○新井（同）○仁の野（同）○みち芝（同）○半太夫（中あふみや）○巻しめ（山本や）○かほる（ともへ屋内）○玉岡（同）○松風（京町壱丁目左側山城屋内）○おと鶴（同）○みへ浦（長崎屋）○通路（同）○浪江（大かなや）○さくら戸（大かなや）○直治（同）○小式部（同）○小むらさき（同）○島のすけ（同）。

跋と奥附、如左。

夫古人曰色をよくする事かたしかたひ親仁も此門に入ッて則うてうてんとなり道中の風流遊君の粧ひを見てはほさつのねり供養かとうつゝをぬかすいわんや壮盛の身として此門にいらずんばあるへからすされは祖兼好も色このまさるハ玉のさかつきの底なきかことしとつれ〴〵にもかゝれしなりしかしあまりにはまり給ふをは是を則かたよるといふかたよらさるを中といふ馴染てかわらさるを貴とす中を守るを色道の達人とし吉原の繁栄といふ物なり遊女の身持もまた〳〵かくのことしやほと見てあなどる事なかれすいにはまり給ふ事あるべからず美しきになづむ事なかれ悪しきを嫌ふ事なかれ是皆落る所ハ一ッ穴の狐も狸も高きも賤しきもやたら竈八とかけるもよしかけぬもよしのむもよしのまぬもよしたゝその中をとりて遊ひに興あれかしとハとつといにしへかたひ客衆のい

ゝおかれし言葉なり酒は一座の興もあり憂をわすれて鬱氣をさんじ血を廻らすを専一とすれどもすごすをもつてこれをいましむ、冷にて多く聞し召せハ肺氣をそこなふとふがらし酒ハ心氣をやぶる心肺の二ツをそんさし給ハ、袖の梅のかほりもとゝかぬ病のたねをうへ給ふべしいましめ給へたしなみ給へ此外いくらもいふべきあれども長をおそれて筆をすつる

金龍之

樂　永(印)

寶暦四ツのとし

彌生日

小傳馬町二丁目

大和屋長兵衛

○

成程、これらの小本吉原評判記の類を見てゐると、洒落本がその形式、これを學んだといふ一説も、幾分は肯けるかと思ふ。勿論内容からも此類の稍變化したものに、「遊婦地理記」「評判詳美撰」のある

こと。寧ろ、「吉妃地理記」は、寛文の「吉原總畫定」、半紙本三冊、などを承け、此種小本吉原遊女評判記を承けたもの、「讃嘲消美撰」かと、思はれる。

なほ、中本型吉原評判記の一冊、前掲小本二種本より更に古きもので、しかもこれを普通書目にその名を逸したる「吉原大秤」といふのがある。（一冊もの）。これは、既に他に紹介したから、此には略いておく。

――昭和二年十一月二十八日。

座敷操と正徳頃の東西二座

「遊女懐中洗濯」部之巻

正徳頃刊といふ遊女細見本體の無論小形枕本（評判記の大きさ）「遊女懐中洗濯」、の第四巻部の巻に此の座敷操がある。無論、名寄せの次の、小説體のもの丶中にあるので、その小説體は、鐘木町や奈良木辻やそれぞ〳〵一篇を爲してゐるが、これは、「つい吸付た乳守の色里」、即ち堺乳守の遊里の狀を主材とした、その小話の中にあるのである。挿繪（ヒラキ一丁分）も附いてゐて、それに、此の座敷操の景が出てゐる。先づ、此の座敷操に關した小話の本文の件を拔いてみよう。

座敷操に關した小話

「……ちもりの女郎の初心な所が有かたいと、毎日の大さはぎ、ある時やしほといふ女郎、あやつりしばいが見たいと遣助にねがへば、それこそやすき事と、大坂の西國方へ貰切つて行、旅しばゐの元じめをよびよせ、急に此家に手すりをかけ、人形をはしなして見せてくれよと、何がなしに是でよいかと二十はいつき出せば、とをい宮嶋へゆかふよりは、是添じけない御さはいと悦びいさみ、さつそく屋體をこしらへ、おこのみ次第に上るりは百段でもかたらしますと、三番叟よりして見すれば、おかけでよいなぐさみをいたしました、とてもの事にかぶきのおどりが見たいといふ、それ又心やすきせんさく

とだうとんほりよりあまたの役者をまねきよせ、時ならぬ盆おどり（下略）」

といふのである。挿図のヒラキの右は、此の座敷をすつかり開けた図であつて、大尽、遊女、禿、帮間などがをり、帮間の言葉「さつてもつかふたり」、遊女「上手でござんす」、禿の詞らしく「よう／＼」。とあつて、上に、「専らもりのあけや」、下に、「ござしきあやつり」とある。座敷の左を唐紙を取拂つて幕を張り、（その幕は、浪模様）その向う、丸に九枚笹の竹本揃ひの紋をつけた黒い幕を張り、上に簾が見えてゐる。手前の幕（浪模様の）が裙短かで、人形使ひの腰のあたりから下が見えてゐる。遊女買ひの體裁で、扇子で胸を煽いだ客らしい男の人形と、迎へる傾城の人形。人形使ひは二人で、卽ち一人形に一人附添の形である。が此の時分、人形に足が生えてゐていゝ筈であるが、此の繪は、男女とも足がないやうに見えるは、どうか。

人形の足

（人形に足の生えたのは、竹本豊竹對抗の頃といふから、旣に此の正德頃はあつた筈である。卽ち「竹豊故事」に、「元來足付人形などは曾てなかりしなり、其後次第に操芝居繁昌に付、道具建衣裳等漸々に向上になり、別して竹本豊竹兩座と成により、東は西に負けまじ、西は東に勝らんと（中略）人形の衣裳にて、縮緬、緞子、繻子、金襴等にて美麗を盡し、諸人形の外は、皆々足付と成り、出遣ひの外は、介錯足遣ひ立應り、歌舞伎役者の所作より增りて、天晴見事なり」云々。曉晴翁の「雲錦隨筆」卷四には、「木偶も往昔は今の如く委しからず、足などは無かりしを、山本土佐掾角太

人形の手

夫の時代、源氏烏帽子折の狂言に、藤七郎富長、澁谷金王丸等の二の人形に初めて足を付たり、「元祿年間より以前也。」而後、宇治加賀掾太夫の時、世繼曾我の淨瑠璃に、朝比奈の人形に足を付しより、諸流ともに寄つて立者の木偶には足を付る事となれりと云々」ともある。なほ、人形の手を付けたのは、先是、佐渡島日記に、「石井飛驒」、一說には、足が此の飛驒等だともある。）

突込

さうして、此の「遊女懷中洗濯」の人形遣ひは、二人ともに頭巾を被り、別に社袮も着てゐない。所謂これが突込（つっ）といふのであらう。高野氏『淨瑠璃史』八二頁に、「………國性爺合戰の如きは、加ふるに辰松・吉田の如き人形の妙手ありて、愈々世にはやされしならむ。當時、突込と稱して、下より兩手をさし込み、人形一つを一人して遣ひ、手摺の上へ首を出さず、力を極めてさし上げ」とある、此の突込ではなからうか。（尙、隨筆「飛鳥川」に、「操人形は、昔（むかし）は下より手を入れ遣ひし也。其後辰松八郎兵衛……の工夫にて、手足を別ち遣ふ事を始」としてもゐる。）

出遣ひ

社袮着用の、出遣ひが、辰松八郎兵衛から始まつたことは、諸書に一致してゐる。現に、「近代世事談」巻三、態藝門の中に、

「出づかひ、辰松八郎兵衛これをはじむ。惣體人形をつかふものは、黑き帳（とばり）の影にて、黑き頭巾たに被りて、己がかたちを見せざるは常也。かくする事は、人形の動くに從ひ、己れが身をもそのさまにうつすものゆへ、見苦しきゆへ也。辰松は、人形に手嫌

し、上下を着し、手摺をはなれて、無量の手づまを使ふに、全身少しもみだるゝ事なし。

古今人形の妙手といへり。辰松幸助これに亞ぐ。（下略）」

とある。これに依ると、此の「遊女懐中洗濯」のものは、無論、出遣ひではない。此の臨時雇はれの人形遣ひ連中、まだ辰松ほどには修練が積んでゐなかつたと見える。（或は、これは、出遣ひは當時まだ辰松一個のみで、一般は、昔の蔭操り―こんな稱へは無からうが。―であつたのだらう。とも思へる。）

人形に足がないらしい、人形遣ひの樣子も古來のまゝで、餘り工夫がないらしい。幕の紋こそ竹本風だが、これは、竹本の聲名を畫家が借りただけで、かうした第二流の人形遣ひ―それも旅稼ぎを時々したらしい、現に宮島へ行く所だつたと、本文にある。―が果して存在してゐたのかも知れない。或は、誠の、竹本の人形一座の寫實で、中には、辰松もゐたのだとすると、恰も「聲曲類纂」巻一の淨るり、樂屋の圖と殆ど同じで、その表を行つたものともいふべき此の原始的な挿繪がをかしい。或は此本寶永頃のもの、若しくは、辰松の新工夫以前のものかも知れぬ。

正徳頃の操

とにかく、正徳頃は、操の極盛期である。大近松まだ健在、大阪は、西に竹本、東に豐竹、兩座相對抗して繁昌を競うてゐた。作者には、竹に、大近松あり、豐に海音あり、太夫（淨るり）としては、西の竹には、義太夫改め筑後掾、座本は出雲に讓つたが、猶ほ太夫として存在、（彼の死は、正徳四

年、六十四歳）その死後と雖も、後繼の政太夫がゐた。同じく東の豊には、義太夫の舊門下豊竹若太夫（後の越前少掾）の名手がゐた。と、作者、淨瑠璃語りの名は、誰でも容易に口に上せ得るであらうが、然れば、肝腎の三拍子（作、語り、操り）の一たる操り手は、如何の對抗狀態にあつたか。今、淨瑠璃大系圖の類によつて、これを窺つてみよう。まづ、人名を擧げてみる。

▲西（竹本座）、人形遣ひ（但し正德頃）

○竹本三郎兵衛○辰松八郎兵衛○桐竹門三郎○桐竹助三郎○後の吉田文三郎

▲東（豊竹座）、人形遣ひ（同　）

○中村勘四郎　○豊松藤五郎　○若竹東九郎　○藤井小三郎

などの對抗であつたらしい。

各人形遣ひの年代

右の內、各人形遣ひの年代を一々吟味すると、先づ西座で、竹本三郎兵衛（初代）は、元祖山本飛驒掾の弟子で、竹本座創立（貞享二年）當時から入座、立役人形遣ひの名手として評判をとり、かねて同座の頭取役をなしたといふ。延享四年三月歿、次代の名人吉田文三郎は、その實子である。辰松八郎兵衛、これは有名な女形人形の遣ひ手であるが、（同人形の中祖とも讃めてゐる）天和の頃から天晴勸め、貞享二年道頓堀で竹本座興行の初めから櫓看板人形の立者である。元祿十六年癸未五月七日より前淨るり日本王代記、切に曾根崎心中おはつ德兵衛なり。（作者近松門左衛門、是操り歌舞伎ともに世

話狂言の始也」此の時、觀音巡り道ゆきのだん、始めて人形の出遣を致す、とある。正德四年十月、竹本筑後掾の歿後、門弟引連れ江戸へ趣き、彼地にて芝居興行御免有つて、櫓幕を上げ、辰松座と號る也。たより興行怠りなく、……享保十九年甲寅五月十日、江戸で歿したと。從つて此の正德頃は、辰松の大阪興行に於ける最後の筈である。それにしても、竹本座の中心筑後掾の歿後、間もなく江戸へ下つた事は、座に對して薄情冷淡のやうであるが、後進に地位を讓り、自分まだ活路を新興の江戸に求めんとの考であつたか。又は江戸ひいき客の熱望に動かされたのかも知れない。

桐竹門三郎は、勘十郎の門人で寶永正德とつとめ、享保の初めから立者となる、とある。同苗助三郎は、同じく勘十郎門人で、正德の頃より西（竹本）の座へ出勤、享保より寶暦の頃まで立者也とある。吉田文三郎は、竹本三郎兵衛の實子であるが、まだ此の正德頃は、現れなかつたやうである。彼の出座は、享保二年丁酉二月十五日から西の芝居に於て、（種は出雲産は薩土）國性爺後日合戰、此時始めて出座、此人おやま立役共、古今の名人にして、今人形遣ひの吉田姓を名乘る者、此人凡て元祖なりとある。

一方の豐竹座はどうか。

中村勘四郎、これは、元祿十五年、東座の開發から立役立者で、爾後出勤怠らず、享保十五年八月一日からの楠正成軍法實錄、此時和田七人形に眼を働く事を仕かけ、始めて大當りを致し、其後、陸竹座再興のため退座して、陸竹座座頭を勤め云々とある。豐松藤五郎、これも門葉の盛んな男である

が、この男も東座開發よりの立役の立者であつた。若竹東九郞、東座の立役座頭にて、正德元年の頃から出勤怠りなく、元文五年九月十日から武烈天皇纐、此時佐手彥の役にて、眉毛の動く事が仕始め、大當りをした云々とある。藤井小三郞、この男も正德の末から東座へ出勤、座頭をつとめたとある。以上は、主なる豐竹座の人形遣ひであるが、尙此外に、西の辰松の弟子の同小四郞といつた男も、反對に東の豐竹座に働いてゐたやうである。

當時一座の旅興行

さて、當時、大阪の此の連中が、旅興行に出たことがあつたらうか。此の「懷中洗濯」所說の如くに、今、邦樂年表 義太夫の部を見ると、

同竹本座

竹本義太夫（竹本）一座は、貞享四年三月より、中國地方、夏、大津地方、又伊勢。元祿二年夏、堺、紀州、同冬、京都。翌元祿三年夏より秋、堺、奈良、和泉。元祿五年春、京都。同年秋より冬、中國。翌六年秋より冬、和泉、美濃、尾張へ。翌元祿七年夏、京都。元祿八年、堺、奈良、和泉。翌九年、春、伊勢。夏、讃岐より宮島。元祿十年夏、堺、奈良。元祿十一年秋、伏見、伊勢。元祿十二年春、堺。同秋、備中宮内、安藝宮島へ。元祿十三年、夏、堺、奈良。同、秋、京都。元祿十五年春の末、伊勢へ。元祿十六年春、堺、奈良。寶永五年夏、奈良、伊勢。同、秋より冬、宮内と宮島。寶永六年夏、伊勢。同年冬、伏見。同七年、秋より冬、堺、伏見、大津。正德元、夏、和泉、伊勢へ。正德五年春、伊勢へ。（例の醜女が喜んで見物したらう）以上凡て竹本座である。勿論、歷史の古いせゐもあり、評判も地方的により多く響いてゐたのでもあらうが、豐竹座は、

同豐竹座

寶永三年の再興から、旅興行は、寶永四秋（堺、紀州）、正德元夏（堺）、正德三秋（京）、正德四夏（堺）に過ぎない。（二座共に、正德までの中。）

とすると、此の竹木擬ひの紋をつけた「懷中洗濯」中の人形遣ひどもが、宮島云々といふたのが、どうも唐突のやうに思へる。が、寫實的になつてゐた作風から考へても啌ではないらしい。年表の示す寶永五年の宮島行を思ふと、或は、此本、正德頃を、寶永に遡らせる必要があるかも知れない。

「懷中洗濯」鄙の卷の座敷操から、引張り出した、不得手な操の詮索、大方の是正を得たい。

——昭和二年六月二十三日夜。

豐後掾江戸下り年代考

宮古路豐後掾の江戸下りに就ての疑問、その年次如何に就てである。從來の諸說は、今一々これを引抄することを略くが、すべて享保十五年といふにあると思ふ。

「常盤種」等の十五年說

邦樂年表所引の「常盤種」には、十五年正月、名古屋芝居で睦月連理椿（一名、名古屋心中）を興行とあつて、此の記事から、間もなくこれを持つて江戸へ下つた、それが同十五年の事のやうに推定される。同所引の「役者五雜俎」も然り、きつぱり、十五年江戸へ下るとある。をかしいではないか。

寫本「夢のあと」の名古屋心中十八年說

これは、自分、數年來の疑問である。大正六七年頃であつたらう、「名古屋市史」の風俗篇を見てゐると、此の名古屋心中なるものの記錄が、寫本「夢のあと」其他を引いてある。それにどうしても享保十八年の心中と判斷される。享保十八年の心中が、先潜りして、十五年に淨るりに出來さうな筈がない。これがをかしかつた。で、此の「夢の跡」が誤りか、或は、筆寫の誤りかとかねがね思うてゐた。が、その後、見當つた寫本「夢の跡」などにも、享保十九年の前年夏即ち十八年の夏（一說、同十一月）の心中だといふのである。（なほ此の二人の心中、即ち疊屋喜八と遊女小さんとは、心中未遂後入牢、翌十九年春、廣小路にて三日晒され、後、乞食頭の配下となつたといふのである。）

或は十八年か（江戸軟派雜考）

で、私は、此の記錄も滿更否定が出來ないと思はれてきた。結局邦樂年表所引の「常盤種」こそ、誤りかと、仍而自分の著述「江戸軟派雜考」（大正十四年六月初版）には、彼の東下りを「享保十五年（或は十八年）」とした。（同書、四一六頁六行目）恐らく、豐後の東下りを、或は十八年と、此の十八年說を持ち出したのは、私が最初であつたらうと思ふ。がそれも此の名古屋心中そのもの丶年次記錄からの推定で、私一個の（或は十八年）であつたのである。が幾分まだ不安でないでもなかつたから、從來の定說を主にし、自分の一說は、或はとしたのである。其後、此の著（拙著）の讀者から、十八年說は何處から出たのだか、と問ひ越された音曲熱心な人々も二三あつた。それには、所謂「名古屋心中」の記錄年次を以て答へたのである。

卽ち若し名古屋心中（飴屋町遊廓の花村屋小さん―淨瑠璃の上では金村屋おさん、日置町の疊屋喜八―淨瑠璃の上では伊八。）が果して、十八年であるならば、豐後掾の「連理楂」の作年代も、無論此の「名古屋心中」をモデルにした以上、しかもこれを持つて江戸へ下り、これが彼の出世淨るり（從來の諸說）だつたといふ以上は、彼の東下りは、卽ちこの心中以後、卽ち十八年の當年か又はその次年あたりになるのである。唯、をかしいのは、「十七年三月、市村座「松竹梅根元曾我」なる芝居に、豐後が語つた」と「東都劇場沿革誌」四編下にあるが、（同書に、此時宮古路豐後と改名したともある。）然しこれは自分の十八年以後東下りとは、全く反逆する。（但し、十七年頃に江戸に居り、同年頃、京坂に歸り、十八年又は十九年春、再

三所其他遊廓の營業は十七年より

東下り、途次此の「名古屋心中」の新作を得て再び江戸に來たといふならば、無理はないのだが。)然し「歌舞伎年代記」等には、一向同一記事が見えぬ。「年代記」では、

享保二十年

中村座　睦月連理𢢫　金村屋小さんに姉川千代三、疊屋伊八に新五郎、宗十郎小さんが親にて、しうたんの所豊後ぶしにて珍らしく、大入大當りなり。

と、此の記事だ、享保十五年以後同二十年までの間に始めて現れてゐる。自分の或は享保十八年說からいへば、これは吻合する。

がこれを未だに疑問にしてゐた處、頃日、「紙魚」同人岡戸武平氏來訪、談の序でに、ふと此の問題に移つた所が、同氏は、名古屋三所其他の遊廓を宗春(當時の藩主)が許したのは、享保十六年八月末恐らく本當の營業は十七年春であらう。だから、十八年夏の心中とある「夢の跡」は、正しいといふのである。成る程、自分もこれにはうつかりしてゐたが、宗春の三所及び其他遊廓許可が、享保十五年でない限り、それ以前に金村屋おさん(實は小さん)の存在はない筈。さすれば、豊後掾の「名古屋心中」も、十五年には生れず、名古屋土産として、江戸へこれを持つて行く筈もない。

これまで胸に抱いてゐた定說への反逆であるが、岡戸氏の與へてくれたヒントにより、愈々こゝに先づその一端を洩らすことにした。

で、どうしても豊後掾をして、享保十五年に江戸に居らしめたいないならば、結局、豊後掾が十五年に江戸へ初下り、十七八年頃は、再び上方興行、「名古屋心中」を持つての江戸下りは卽ち二度目だといふ事になる。或は、豊後掾は、初めから十五年以來、江戸にゐ、十八年の末頃、名古屋から持ち來らされた材料によつて、（弟子の文字太夫でもが持つて來たとして）「名古屋心中」（連理捻）を唱つたといふ事になる。

十八年又は十九年也

がこれらは、凡て誤り、彼の正本集に、連理捻が、一名、名古屋土産で取扱はれてゐる以上、彼はたしかに、名古屋にゐて、此の際物の作を名古屋で語り、それを持つて、江戸へ下つたと見るべきだ。それが偶然、江戸の人氣に投じた、やつぱり初見參の折だつたとすべきである。卽ち享保十八年か十九年に、どうしても彼の江戸下りを繰り下げねばならぬ、と思ふ。

右、名古屋遊廓の設置年代のヒントにより、愈々斷決、嘗ての拙著「江戸軟派雜考」に、自分が「或は十八年頃」と獨斷的に書いた、その或はを、今は敢然削る次第の、をこがましいが、自辯のため右の如し。尙、博雅の後考を偏へに俟つ次第である。

——昭和二年九月十三日。

三所其他遊廓の設置年代

補——前稿に、三所其他の遊廓設置許可の年代を、享保十六年八月末の許可、翌年正月よりの營業としたが、實は、三所其他で、多少の年次の相異があるのである。（が一つだつて、此の享保十六年より早きはない。）今、三所の各箇所及び其他に就て、場所と年代とをいはう。名古屋心中の「花村屋（金

三所

西小路の年代、遊女總數と揚代

富士見ケ原の年代遊女總數と揚代

葛町の年代と遊女總數と揚代

飴屋町の年代と遊女總數と揚代

村屋)小さん(おさん)」は、三所以外のこれに亜ぐ下等店の集團たる飴屋町に屬するものなのである。

三所とは、西小路、富士ケ見原、葛町の三である。

1、西小路(現、名古屋市電、山王橋停留所より東入、北の一廓。現在殆ど舊形なし。)は、享保十六年九月許可、翌十七年正月より開業。京・阪・伊勢などより遊女來り、大樓多し。遊女屋約二十四、遊女總數約二百四十四人といふ。遊興代――天神銀三十五匁、平小供十五匁、晝夜三十匁。又間短(けんたん)(小見世の名)は、花代一匁より五匁まで。

2、富士見ケ原(現、中區小林町の南に當る、舊形なし。)享保十七年三月成る、六月より開業。遊女屋三十四、遊女總數約百九十人。花代、略々西小路に同じ。太夫は二分、其他は一分より、及び以下。

3、葛町(現、名古屋市電、山王橋停留所より東入、北側に屬する西小路遊廓より更に東、その南の一廓、山王稲荷を圍んで、その西・南に櫛比す。現在、舊形殆どなし。)享保十七年九月成り、十月中旬より開業。西小路、富士見に比して下等也。遊女屋約四十三、遊女總數約二百三十二人。花代は、一夜十匁より十二匁、一座二匁より五匁までなりしといふ。

飴屋町(三所の他の一部)「名古屋心中」の花村(金村)屋の小さんの屬する區劃。設置年代不詳なるも、以上三所と同時、恐らく享保十七年頃か。位置は、現、中區東別院の附近、飴屋町(現

小さんと喜八

に、此の名あり）。安遊女屋にて、遊女屋七軒、遊女約二十人。花代二百文より百文までといふ、此の七軒の中で「名古屋心中」の小さんのゐたる花村屋最も大きく、遊女七人を置いた。がとにかく、「名古屋心中」のモデル喜八（浄瑠璃では伊八）は、安直割の安女郎にである。それが心中未遂の恥さらし、が、豊後の天才によつて、それらしくなく、薄命の悲しき勝利者の如く、永生の名となつたのである。

三所其他の沒落

其他十數ケ所（名古屋市史「風俗篇」には、以上、三所及一の他に尚十七ケ處を擧げてゐる。）、公娼、准公娼、私娼、分布してゐたといふ。地勢は、大凡そ現在の名古屋市より考へて、舊市制當時の名古屋の四方諸處に亘つてゐる。

が此の一時の盛觀を更に風紀上見る所あつてか、享保二十年（十七年より四年目である。）一所に集中の縮少を命じたが、西小路は、間もなく（元文元年四月十八日夕）失火、大半燒失、翌（元文二年）秋よりは、巡視・檢案嚴重、翌々（元文三）年六月九日發令、一夜の中に一切停止、間もなく、三廓其他、廢地となつたのである。が、私娼類は、相變らず、跋扈してゐた。尚、此の公娼廢止が、城下は永く（幕末まで）續いたが、やがて、府外の熱田に限り、文化二年神戸・傳馬・築出等の旅籠屋に、飯盛二人宛を置く事を許した。是れ陰に遊廓の公許であつたのである。（尚、これに就ては別掲「都々一節起原考」・「宮のお龜考」などを參照せられたい。）

――昭和三年三月。

「江戸節根元記」の異本

（燕石十種本との異同）

江戸節根元記（悉しくは、江戸節根元由來記、一に江戸節根元集）が、誤謬に滿ちてはゐるもの丶、丁度「浮世繪類考」が未だに浮世繪研究上、數顧の値ある如く、此も音曲史上、價値少からざる參考資料として、よく繙かれる。但し原本、もと寫本。しかも數本あつて、異同甚しきことは、旣に先輩によりて謂はれてゐる如く、（「燕石十種」第二、解題參照）世間周知の事實である。然し從來飜刻されたもの、卽ち活字本としては、本の體裁上數種を見受けるが、而も殆ど否全部、同一系のものである。

根元記の三種本

卽ち左の三種本、

〇「聲曲自在」鼇頭のもの。（博文館舊刊、日用百科全書の中）

〇温知叢書第十編のもの。（博文館刊）

〇燕石十種第二のもの。（國書刊行會刊）

前二者は、共に江戸節根元記、後一者は、江戸節根元由來記と稱するが、共に此の三者、今之を比較するに、結局同一系の寫本から出たものと觀られ、項目に增減全くない、唯、商句の末に、僅かな

燕石十種本尤もよし

異同があるのみである。唯一箇、相違といふべきは、聲曲自在本、溫知本、共に著者可柳の跋を略けるに、(或は脫せるに)燕石本は之を載せてゐることである。他は、とりたてゝ謂ふ程のものはない。元來聲曲自在本は、溫知叢書本と、全く同一、こは、異時に二者に發表されたものと見てよい。故に、聲曲本は、殆ど此の比較からは略いていゝ。然るに、殘る溫知本と燕石本とであるが、これは、前にいうた通り、跋の有無くらゐで、其他は、さしたる異同はない。何れも脫字、誤寫らしきもの散見し、讀みにくき事同樣である。唯、溫知本では、著者の可柳が、「奈良柴」(一名、三絃根元記。原武太夫著、燕石十種第三所收)から轉載してゐる所の此著、冒頭の三項餘を、……云々として其の全文を略いてゐる。燕石本では、其儘正直に其の全文を載せてゐる。これくらゐの校訂上の差があるといふだけである。從つて、我等は、燕石本、溫知本、兩本を有する必要はない。結局、稍校訂正確、所據の原本も誤字少く見ゆる、それに跋を採り入れてゐる燕石本一本に依つた方が、煩ひもなく、また信用も置けるといつただけのものである。其の燕石本は、默阿彌家藏本に據つたと、その解題にある。(或は溫知本も、此の默阿彌家藏本の轉寫か。でなくとも無論同系のものであること、前述の通り一目瞭然たりである。)以上が、從來、我等の「江戸節根元記」なるものに對する、智識、使用材料の現在の凡てである。

然るに最近、自分は、これに關して或る喜びの機會に逢着した。即ちゆくりなく、自分が、その異

異寫本一冊の發見

著者、柳雅と改名

第一跋に寛政十三年とあり

本（寫本一冊）を發見するに至つたのである。同學山本直樹氏文庫に秘藏されてゐたものであるが、自分の懇望により、寄贈を有難くしたものである。それに據ると、少々ならぬ異同（主に燕石本との）が發見された。殊に、此の異本に據れば、此の根元記の著者は、この記作成後間もなく、可柳より柳雅と改名してゐる。（下掲、異本第二跋参照。此の跋、流布本になし。）而して、柳雅署名の下に、最後の跋を爲せる以上、此本寧ろ柳雅の著と謂はなくてはならない。是一個だも、從來諸書にない所で、紹介の意義は大にあると、倍々此の秘本を價値づけてきた。殊に面白いのは、燕石本にも見ゆる第一跋が、本文は殆ど同様なるも、年次の記載に於て、此は、燕石十種本の文化元年といふのよりは誠に早く、寛政十三年云々といへるにある。これだけでは、古いもの、原寫本、自筆本に近きものと強ち斷じも出來なからうが、尚、他に有力な信憑根據は、最後の寫本家二人の識語である。即ちそれに現れた年號と、原著者記入の年號との接近である。此點だけよりするも、年次の新しい河竹本に據つた燕石本（同系の温知本等）よりは、信頼の度が深さうに思へるのである。（下掲の識語、及其前段参照。）

とにかく、全くの僞作とは、いかに割引しても考へられない此の異本（以下此の異本の文字を使用）の、流布本との異同點を檢討することは、相當に意義あることと思ふ。即ち、今、主に燕石十種本との對照、異同の迹を列擧してみることにする。その以前、先づ此の寫本の體裁に就て、云ひ洩らした事を解題代りに添へて置く。

江戸節根元集　表紙外題は、竹露隨筆。一冊

この竹露隨筆の貼外題は、他に見ぬ外題であるが、是は、著者柳雅と改名後の改號竹露堂の竹露に據つたものである事は、無論。（下掲、此本、第二跋參照）著者は、竹雅の門人、畏性堂可柳、後に改め、竹露亭柳雅といふ。（竹雅の弟子たる事、跋（第二跋）、即ち此跋、燕石本に無し）に見ゆ。但し其他一切不明。寛政十三年當時、六十七、八歳なりし事、此の本跋（第一跋）によりて知らる。本文、冒頭は、江戸節根元集と銘記されてある。美濃紙本、本文跋とも五十三丁、外に前寫本者及び此の寫本作成者の二個の識語表裏一丁、總計五十四丁。即ち此の識語によりて、此の異本、原本以後二次の筆寫によつて成つたものである事が知れる。然るに、その識語の中、第一次寫本當時の年月が、享和二年九月であること明記され、しかもその享和二年は、原著者可柳改め柳雅の第二跋に記入せる享和元年霜月を隔つる。一年にも滿たざるものである事から推して、原本に最も近きものならざるやの、信賴的聯想が起るのである。第二次の寫本年號は、該識語の示す如く、嘉永三年とある。享和二年より嘉永三年では大分の隔りがあるが、結局底本となつたものは、この享和二年本である事を思ふと、字句の末の誤寫は論外として、大體に於て、享和二年本の（即ち原著者自筆本に最も近しと惟るゝ）面影を傳へてゐるものと見ていゝ。如何であらう。乃ち左に、その識語二個の全文を載せておく。

○

享和二壬戌秋九月九日友人披齋對校託姉君とま予所贈寫也吾家之子孫莫以未披俚鄙之書敢漫放擲焉

蘭軒主人記

同僚竹瓦子秘藏之書爲記念所贈于同遊東瓠生今茲嘉永三年庚戌之春借而寫之畢

陶谷

○

以下、いよ〱此の異本と、流布本の代表燕石十種第二所收本(「江戸節根元由來記」)との異同である。まづ、此の異本にのみ見えて、燕石十種本になき項を全部擧げておく。其次、類似の項の異同に及ぶ(勿論、或は、この異本の特出事項、その記事の中の或ものは、或は、之を燕石十種本に見るのがあるかも知れない。今、自分は、此の二本の對校を三度なしての執筆であるが、燕石本に於て、未だ見落し無きを保し難い。若し該遺失發見の方々は、示教を垂れて頂きたい)尚、此の異本の流布本との異同とに就て、特筆したいことは、顯著な有無記事を除くも、尚ほ各章の順序に於て、此異本、燕石本とは、其の過半數が相違してゐることである。(これが爲に、自分は、異同の檢索上、非常な勞を徒費したのである。)然し結局は、順序は違へても、同一、又は類似項目を何どかに發見する。此の各章の順序異同は何によつて生じたのであらうか。或は、燕石本自敍の年代が證明する如く、此の異

本を更に著者自ら校合し、改編したものが、燕石本であるかも知れない。それにしては、燕石本に於て、可柳竹葉と改名の第二跋を略けるは、何に由るのであらうか。今は、唯此等の疑問を提出するだけに止めておく。

燕石本との異同

「江戸節根元記」異本流布本の異同

燕石本に皆無の記事

（一）燕石本に皆無の記事

一、五人曾我三段目帯引上るり、中村勘三郎座にて初代半太夫語り、三絃青柳三左衛門、作者塚原市左衛門也、此時大當りなり。（此項、燕石本四五四頁下の「きぬた」の次あたり。）

一、池の端仲町に町醫師藤原宗壽といふものあり、此醫師娘にゑつといへる者岡安南甫の弟子にて手事の名人也、誠に江戸一也、後に本郷新町屋に石野次左衛門といふものあり、此もの妻になり、其後は淺草御書替屋敷住居ありける。（此項、燕石本四六七頁下の「抑々淨るりの三絃始りは」の次あたり。）

一、元祖河東は藤十郎といふ、小田原町魚屋なり、二代目河東は、庄右衛門吉原町大門外下駄屋也、三代目河東は宇平次、池の端茅町なり、四代目河東は傳之助本銀町也、五代目河東は平四郎本郷春木町也、六代目河東は忠次郎淺草諏訪町也、七代目河東は傳藏　此もの事忠次郎養子也、（前項

の直ちに次ぐ。）

一、元祖蘭洲は、新吉原江戸町二丁目蔦屋庄三郎といふ傾城屋なり、二代目蘭洲は佐倉屋又四郎といふ、同商賣なり、剃髪して志明と改め、三代目蘭洲は養子にて、池の端仲町龍岡といひし者の悴也、始は東爾と名乘、夫より蘭爾また蘭洲と名乘、少しの譯合にて剃髪して、其爪と名のり俳諧師となる。（此項、燕石本四六九頁上、二代目庄右衞門云々の項の次あたり。）

（以下、燕石本、四七一頁の七行目次に入るべきもの、二項）

一、秀彌弟子二代目秀彌、天明年中古人になり、弟子品川宿に鐵右衞門といへるものあり、此もの河丈相方となり岡安喜三郎と名乘る、

一、享和二戌年二月東爾事古人となり、此節迄市村羽左衞門座相勤ける也、、此の一項は、柳雅若しくは別人の書入ならん。）

（以下の系圖、温知本、燕石本等なし。（此項、燕石本の四七四頁、戒名列擧の箇處に相當す。）

（系　圖）

薩摩淨雲（次郎右エ門）　子ト無ハ弟子なり
- 薩摩太夫（次郎右エ門）
  - 大薩摩（次右エ門）（下り大薩摩）
- 丹後太夫
  - 外記太夫
    - 式部太夫
  - 土佐太夫（虎之助）
    - 土佐太夫
- 長門太夫
  - 近江太夫（語齋）
    - 手品市左衞門

丹波太夫
　├肥前太夫―半太夫（半之丞　後ニ梁雲）
源太夫（虎屋）
　└和泉太夫
永閑太夫（虎屋）
大源太夫（次郎兵衛、後喜元）
小源太夫（竹之助）
永閑太夫（金右エ門）
河東（藤十郎）―双
　├笠（半太夫同門ニ而有ケルカ河東ニ付　此者名人也芝居勤ル）
　│　├河笠（弟子）
　│　└古笠（弟子）
　└洲（宇平次　後河東）
河丈（庄右エ門）―河
　├丈（金次郎　後山手河東）―河
　├丈（新右衛門　同國ニ出）―河
　└丈（善五郎）
　河
夕丈（藤十郎　後蒙軒）―東
　└佐（次郎右エ門　後藤十郎）　富曉卜成
蘭洲（庄二郎）―蘭
　├洲（又四郎　後志明）―東
　└爾（又四郎　後蘭爾　又蘭洲）
傳之助（後河東）―河
　└洲（茅場忠二郎　後沙洲）
東
　└佐（藤四郎　後夕丈）

沙——洲（平四郎　後河東）
　　├東——洲（平五郎）
　　├東——爾（市郎兵衛）
　　├東——曉（七右エ門）
　　└文——雅（惣右エ門）
蘭——洲（又四郎）
東——佐（次郎右エ門　後藤十郎）
　　├藤四郎（後東佐）
　　└藤九郎（早世）
蘭——爾（忠二郎　後河東）
　　├沙——洲（傳藏　後河東）
　　│　　├東——爾（金七）
　　│　　├東——榮（庄五郎）
　　│　　└東——和（安兵衛）
　　├河——洲
　　├東——里（利左衛門　後沙洲）
　　└蘭——爾
東——爾（文二郎）

○

〔以下の御雅署名の第二跋は、他本一切無之。即ち、燕石本の可柳（可柳は、前名也）署名の跋の次ぎ也。但し可柳署名の跋も、年代のみは違へり。即ち燕石本の文化元年とあるもの、此は寛政十三

柳燕實名の第二跋（全文）

辛酉春とあり）

抑先師竹雅は、東都一流の音樂、殊に切なるものなりしも、河東其名に鳴り、普く門弟東の字を以て其流の佳名とす、我倩思ふに師の美名物換星移るにしたがひ、いつしか隠れ、其宗流を失んことを憂とす、頃しも霜月末つかた、嚴寒の難地、纔のあんかに寄そひ、破障子に風をいとひ、肱を枕してとろ／＼まどろむ折から、夢ともなく現ともなく予か庭前の柳に物音して、紫雲一むら舞下り、異香四方に薫す、こは何事と仰きみれば、雲上に忽然と辨才天三十二相の御形を現して立給ふ、たえなる御聲にてのたまはく、我は江の島明神なり、汝常に東都一流の音曲ある中にも志深く、しかも竹雅の流をくみ、其名聞ゆといへども、其職たる山彥河良我を常に念し願ふには、連中に可柳といへる物あり、同座會席の折柄河良可柳間違ある事互に迷惑なる事もあるへし、我倩考ふるに汝常に先師の佳名を續んとするの志ありとの事、是幸ひ河東か門弟に片名をつけしためしをもつて、今より汝師の片名をとりて、是より竹露庵柳雅と改名有へし、我音曲守護の神なれは、汝に此事告んと思ひあらはれし也、ゆめ／＼疑ふ事なかれと、御神體は忽紫雲に乘じて飛去給ふ、予夢覺てあら有かたの御告やとあたりを見れは、さいつころ戯作（本ハ誌）せし東都一流の音曲集取ちらしありしすへに、白紙の殘りありしは、是幸ひと、改名せよとの御神託なり、今柳雅と改名すとも是まで可柳と呼來りし名を、今更柳雅と誤呼ものも有まし、最早老年にも及ひし事なれは、其儘捨置へしと異見する族

もありしかと、前のをしえを背く事恐あれは、其儘に書しるしぬ

愚性堂可柳改
竹露庵
柳　雅

享和元年辛酉霜月廿八日

〔燕石十種の寫本は、文化元年の年次記入ありて而も可柳のまゝである。此の異本の第二跋、従来漠然たる可柳の正體に對する別にとりたてゝの資料には非れど、享和元年既に柳雅と本人自身では改名してゐた唯一典據である。辨天の夢告云々は、無論眉唾ものであるが。〕

○異同激しきもの

一、いの字扇は、いの字五十字あるゆへに、いの字扇子と名付しなり、文は八島にて那須の與市日の丸の扇を射落せし事を作りしなり、(燕石本四五九頁ノ上、一九行目以下参照。)

一、濡浴衣濡扇子、此淨瑠璃は、庄右衛門河東と元祖源四郎及破談し時、東古手附の三絃市・源四郎方にては今に不用、源四郎は夕丈藤十郎の相方と成、(以下四段ノ記事此邊類似ノ事、燕石本四六一頁ノ一二行ニ在。)柳の[illegible]・ひすゐ小町・藤の錦・富士筑波・一重裳、四段共節付至而宜敷大にはやりし也、濡浴衣の淨るりは、市村座にて菊五郎新勝兩人にて所作事(燕石本、菊新勝)あり、大當り也、濡扇子は、庄右衛門違背物也、藤十郎方の四段を淨る理は、皆芝居物なり、(燕

石本、四六三頁下ノ一七行以下參照。）

一、鶯籠布團二番目岩保の晝夜著灸する咎我狂言なり、此三弦（本ノマヽ）（くらく）前彈樂手なり、至て面白き手附なり、（以下、燕石本ト大差なし）節付は河東夕丈雨章也、此淨るり今にはやりし也、傳之助河東の頃仙臺樣へ被召、鶯籠布團の淨瑠理御好ニ付語るへしと被仰ける也、傳之助は畏（リ）語り出しけるに、おつな淨（燕石本凡テ東作ニ作ル）といへる處を、暮な淨と語りし故、御前にも悦ひ給ひて、御褒美有し由、元祖東作申聞し也、ケ樣なる事ともいつれの淨るりにも有し事也、常に心掛へし、（燕石本四五八頁下ノ三行目以下參照）

一、信田道行、此淨るりの内に、畜生言といへる處二ケ所有、次に釣り狐林の次郎友末といへるもの見（本ノマヽ）の側國人を討、都の住居難成、和泉の國岸和田と云處に引込逼塞して居たりしか、渡世には夜る〳〵狐狸を獵す、或夜羅に懸りける時小鍛冶宗近通り懸り、羅を切おとし、狐を助け逃しける、友末主從立腹して、宗近え過言を申ける故、友末肩先より打放れ（本ノマヽ）、夫より此かた獵するものなく、此原長三十六町横三十町、原中程に稲荷の社祭あり、夫より原下り口に信田大明神大社あり、別當幡松院稲荷社二ケ所有、八町下り信田村西裏に信田の森、安部葛の葉の社は是なり、（燕石本四六一頁下ノ二行目以下參照。）

一、四季の屛風、是は忠次郎河東名弘の淨るり也、（卷羽織以下、有迄の同文、燕石本四六二頁ニ在）卷羽織（本ノマヽ）といへる淨るりは、傳藏河東名弘、兩國柳橋河内屋半次郎方にて寛政十一未年夏興行有、忠二郎名弘は、安永年中淺草駒形駿河屋にて興行

あり、賑々しき事なり、(燕石本四六一頁下ノ一二行目以下参照。)(同四六二頁上ノ九行目参照。)
一、享和二戌年春狂言、松葉屋瀬川に鷺江、(イ鷺考)市川といへる突出女郎に鷺三郎、此出に松の内の浄るり、(燕石・温知本共ニ享保)以下、上記ニ諸本大差ナシ。)
河東沙洲東閑東永東和、三弦源四郎河良文四郎新九郎文二郎相勤大當、市村羽左衛門座にてなり、

(燕石本四七一頁ノ上ノ一八行目以下参照。)

○他の必要なる異同文字

(1)、燕石本四五三頁上ノ最尾、「右者夜半楽紅葉集鴉鳥十寸見要集より抜書」とあるのが、「……鴉鳥集……」と集の一字見え、(2)、同四七〇頁下ノ一四行目「一、明神河良弟子赤城にて文志、神田明神にて扇志」とあるのが、「二代目河良弟子替女赤城明神下文志、神田明神下扇志」とある。明神河良は、明神社内に住んだから、どうせ同じく二代目河良の意ではあるが、此の異本の方が分りいゝ。(3)、同四七一頁上ノ八行目「一、湯島切通し邊に平野氏といふ隠居異名竹雅」とあるのが、「……善三郎といふ……」と、名だけあつて、平野とはない。

(4)最後に注意することは、第一跋(燕石本では、此跋ばかり。可柳署名のもの)の、「亡」が年をいへる項が、左の如く著しい異同があることである。

(燕本)(前略)もはや七十次にもなれば、世をのがれんとし(下略)(燕石本、四八一頁ノ下)

(異本)(前略)最早七十にも、、、、二ツ三ツなれば、世をのがれんと(下略)

著者の年齢に就て

燕石本の此年次は、文化元年甲子五月である事、前にいうた。此は、(即ち異本、その第一跋)寛政十三年辛酉春である。こゝに著しい差がある。何れが正しいのであらうか。一方は、寛政十三年當時六十七、八歳といひ(異本)、一方は、享和を經て、文化元年に七十次といふのである。年齢そのものから、どうせ七十前後ではあるが、嚴密にいうと、なぜ此の二種の記載あるかを問はねばならぬ。七十次を、正七十にとれば。寛政十三年(此年、二月享和と改元)に六十七八歳であるもの、丁度文化元年には、七十一、二歳であるから、兩著とも記する己自身の年齢に於ては、畢竟相同じいとも謂はゞ謂はれよう。然し此の二樣の書分けは、疎却は出來ぬ。自分からは、どうも燕石本の方が、著者自身又は後人の手による修正のやうに思へてならぬのである。

燕石本のみの項

燕石本にのみ見ゆる事項　（異本になきもの）

此を綜合しておかう。此の異本が善本とも限らないが、年次が異本より新しいだけ、默阿彌本の燕石本(並に同系の溫知本)は、攙入、或はありやの懸念もないではない。(善意に解釋すれば、著者自身の後日(恰も文化元年頃)の增補とも思へる。)然し今は、唯、此の列擧だけに止めておく。

⊖燕石本四五八頁下、反魂香云々の項◎同四五九頁上、清見八景云々の項⊖同、四季の嫁の項⊖同頁下、天皇忍のだん云々の項⊖同、嫁入五人曾我の項⊖同、濡扇庄右衛門河東追善云々の項⊖四六〇頁上、千年の枝云々の項⊖同、常陸帶の項◎四六一頁上、禿萬歳云々の項⊖同下雛の磯云々の項

〇四六一頁上、隅田川の淨瑠理云々の項〇四六四頁上、由緣の江戸櫻云々より、四六六頁下の「同鐘の段文」云々迄、二十項全部無し。◎四六六頁下、終より二行目、助六廓の夜櫻云々の項◎四七〇頁下の一〇行目、文化四丁卯云々の項◎四七三頁の下、一三行目、古近江作云々の項◎四七四頁上、過去帳やうのもの、（恰も異本にては、こゝ、系圖也。前揭）全部。以上。

なほ、類似の項を記載しながら、燕石本特り多量の文字に亙りたるものが、一箇處だけある。それは同四五七頁下の、新世帶元祖河東節附云々の項である。これは、異本では、「新世帶出遣ひ續きもの也、新世帶淨るりの中に近江なるつくまの祭はつかしやといへる事は……」として、以下即ち燕石本の四五八頁上の九行目より十六行目の「恥しといふなり」まで載せてゐる。其他の部分は、異本に全く之を闕くのである。如斯く卽ち、芝居に關係した出し物の解說・字句の解義傳說めいた所が、異本には多く之を闕くやうである。然しこれが、異阿彌又はその以前の柳雅以外の書入だとも斷言はせぬ。

〇めりやす鳥羽屋三右衛門の項の溫知、燕石、異本の異同

鳥羽屋三右衛門に就ての三本異同

最後にこれに觸れておきたい。これは、嘗て新內節「藤葛」の評釋中で、（拙著「江戸軟派雜考」所收）述べたことであるが、今度の異本が、これだけは一番いゝやうに思はれるから、重複を厭はず載せておく。私議に旆まる、唯異同による諸賢の研索に訴へたい。

（溫知本）同書五五頁「東都にて上調子利安、初めは鳥羽屋三右衛門なり、其後豐後節も彈たり、三

右衞門事、後に東武專太夫と名乘、號は文五郎といへるも專太夫の三絃の弟子なり、東武の弟子にあらざるはなし。(下略)

(燕石本)(同書四七二頁ノ上)一東都にて長唄日利安諷ひ始めは鳥羽屋三右衞門也其後豐後節も彈始るなり三右衞門事後に東武專太夫となる唄は文五郎と云へるもの專太夫の三絃の弟子也東都に三絃弟子にならざるはなし。(下略)

(異本)一東都にて長唄日利安諷ひ始めは、鳥羽屋三右衞門也、其後豐後節も門人彈始る也、三右衞門後東武專太夫と成、號は文五郎といふ、東都の三絃專太夫の弟子ならざるはなし。(下略)

※

以上、異同の跡を要約すると、一、有無記事互に尠からざる事。二、跋の數、及び年代記入に相違ある事。三、各内容章句の順序、相違激しきこと。四、系圖等の有無。等である。

最後に、此の機會に於て——異本舊藏家山本直樹氏が、此の秘本を予に贈り、予をして此の發表を自由ならしめられた好學の高意に對し、予は感謝の微忱を表したいと思ふ。

——大正十四年十月

「未刊隨筆」本との對校

異本の特色を失はず

「未刊」本と異本との共通點

補記―右稿以後、最近刊行せられた三田村鳶魚氏校訂「未刊隨筆百種」第十卷所收のものに、「東部一流江戸節根元集」といふものがある。これは、可柳の江戸節根元記に、その弟子の有錢堂淸霞が增益して附錄せるもの、その改題といふ。（但し、原本の所在を記さず。）さて此の增益本を、小生藏書の右稿底本たる異本と對校してみた。想像してゐた通り、三田村氏の淸霞本は、燕石十種本と殆ど同じである。（燕石本の底本は、默阿彌本。）結局、燕石本と同一底本、或は同じく默阿彌本で、但し此本その廣本といふのかも知れぬと思はるゝ程である。勿論淸霞の附錄たる文化二年以後の記事は、燕石本にも小生異本にも無い。成程これ丈は、誠のとりえである。が、その正篇たる（未刊本にては、その一三九頁の中、一〇七頁の半）根元記が、燕石本と殆ど同樣では、困りはしないが、少々期待外れである。結局、根元記の異本として、家藏（舊山本君藏）のもの、天下に誇るに足りると思ふ。さて、しかるが故に、右拙稿に於ける家藏異本と燕石本との異同は、又延いて未刊本根元集の過半（即ち正篇の根元記）の異同と同じに見做していゝのである。唯、燕石本と未刊本（その正篇たる根元記）との相違は、未刊本、句讀を打ち、訓みよくなり、行の更へも確實に行はれてゐるといふだけである。但し、未刊本と小生異本との共通點が、一個のみある。（この一個が燕石本にはない。）即ち、系圖の場替である。拙稿の前揭系圖と、未刊本七十八頁以下とを參照せられよ。但しこれを對比してみると、同じではあるが、部分的には、拙稿のものゝ方が精しいのである。これ丈の共通は、燕石本以外、

本文は燕石本未刊本同じ　燕石本と異本との異同は未刊本と異本との異同に同じ

未刊本と小生異本とにある。其他では、燕石本、未刊本、全く同文同年月の可脚の跋。然るに小生異本は、この跋はあれど年月を違へ、更に右述べた如く、可脚改嘲雅の再跋がある。共に燕石本などより年月は古いものである。(拙稿參照)この小生異本の可脚改嘲雅の再跋なるもの、未刊本に、無論あらう筈なく、その代り、編者清信の自跋がある。これ丈の異同を他にしては、根元記の部分、即ち本文、燕石本未刊本殆ど同一である。即ち右拙稿に曰へる燕石本等に缺くものは、また未刊本の清信增補本に缺くものである。即ち拙稿の燕石本を底本とした小生異本との對校は、又、未刊遊筆本の根元記部分との對校に、直ちに應用出來る事を述べておく。

——昭和三年三月十三日。

めりやすの二つ

―きゞすの鳥盡し替歌と、新内明烏「昨日の花は今日の夢云々」の本歌。

めりやすに就て、その二者に關する智識である。一は、自分からは、昨年洒落本「三幅對」の原稿（此本、拙編「洒落本集成」（春陽堂近刊）第二卷に所收）校合當時氣のついた事で、今それを纏めたに過ぎないが、一は、最近未見の一氏から明快なる說明を送られたのによる。共に錄して、（聊か玉石同架）江湖の一粲に供へる。

「きゝす」

一、きゞす、に就てである。

きゞすは、めりやす豊年藏（寶暦七年）の續編かといはるゝ「歌撰集」（寶暦九年）に、その名と歌詞とを見受けるものである。

同年代

然るにこのきゞすは、僅かに樣を變へには變へたが、依然名曲化の如き觀の下に存在した。遠く文化三年に、卽ち其の年刻成かと見らるゝ「東風流、初篇」（三馬序）にこれを見るのである。とにかく、此のきゞすは、寶暦から明和。安永。天明、此の天明頃、猶、最も口近きものとして、人々通士に鑑賞せられたものであらう。――知らるゝ如く、天明の「江戸生艶氣樺燒」（京傳）の中にも、當時口近いめ

「同」もじり鳥づくし（洒落本「三幅對」）

りやすの一として、その名を擧げてゐるからである。——それが更に、此の文化にも傳はり榮えたものであらう。が、更に面白い一例が此にある。それは、寶暦から天明の中間、卽ち安永七年正月序、無學堂大醉著の洒落本「三幅對」（小本）の中にも、此の雉子がある。但し此の「三幅對」のは、その儘、又は若干の異同とは謂ひ難く、卽ち全く歌詞の語呂を藉りて、形は似せ乍ら、これを鳥盡しに作り替へたものである。元來「三幅對」は、通人がつた男の群と妓との對話、青物盡しなどの手紙のやりとりに興味があり、終りのめりやす「きどす」も、これを鳥盡しにしやれてゐるものである。無論、此の安永頃に、此の鳥づくしに變へられた「きどす」が、一種の通型として流行したといふのではあるまい。卽ち此の「三幅對」のみに現るゝ、「三幅對」作者の思案戲作であらう。が、とにかく鳥づくしの「きどす」として、「三幅對」の讀者には、本歌の「きどす」と對照の興味もあらう。本歌のきどすを知るもの、またそれが「三幅對」作者によつて、如何に鳥づくしに作り替へられたかを知るも、興味深からう。で今此の二者を對照してみる。尙、傍ら文化三年刻、「東風流」初篇に載つた「きどす」も對校しておかう。歌撰集に載つた寶暦頃のきどすとは、歌詞の末に僅少の異同を見受ける。寶暦と文化とでは、僅かながらも是だけの異同を生んだのである。が、「三幅對」ほどの別物の觀あるものではない。此のAの本歌、Bの鳥づくしの替歌、Cの文化三年「東風流」の物。此の三者を、共々對照してみよう。便宜上、Aを本位に、その右に、Cの異同を明らめ、別にBを物しよう。（尙、此のめりやすの「雉子」は、初期

本歌「きどす」の異同

もじり「雛子」

めりやすの多くが然りし如く、これも元は、上方唄である。即ち上方唄としての「雛子」は、――内容からも上方唄たる事が肯づけよう。即ち吾妻與次兵衛の情話に關したものである。――日本歌謡類聚、上巻所收の「長唄の部」きどす、其他に見えて歌詞としては平凡である。が、めりやす歌撰集のとは幾分の異同はある。序でに、左記、日とあるは、此の本々歌「上方唄」のとの異同である。）

〇きどす（日とあるは「日本歌謡類聚」のもの。東とあるは東風流のもの――以外は三者同一也。）

三下り〽きどすたゞく野べの若くさつみ捨られて　合人のよめなといつかきてこがれこがるゝ（コレ此一句ナシ、日ハアリ。）（コ、東、合）（日及ビ東、の）合くがいの舟のよるべ定めぬ身はかげろふにあづまが顔も見忘れてうついゝないぞや（東、てノ下ヵアリ、日ハナシ）（日ダケ、これのう男トアリ）これなふほんにあれなしさへもつがひ離れぬあげはのてふ我々とても二人づれ粋などうしの中々に春にもそだつ花さそふ菜種は蝶の花しらず蝶はたゞねのあおしらずしらずしられぬ中ならばうかれまい物さりとてはそなたのせわになりふりも我身のすへのはなれごきたがひ夜すがらひきしめてなかしがたりとあすか川（日ダケ、の蝶はトアリ）（東、コ、合）（東ダケ、むかしにはにぬ）（日ダケ、の）（徳川文藝類聚本歌撰集に據る。日本には、加茂川のしほ作・島野勘七若村藤四郎調とあり。）

雛子

三下り〽雛子靑野澄の若艸雀すてられて合鳩の雛と斑鳩鶍がるゝ合孔雀の羽のよ

ろへ雀奴身へかけろふにあづまが間も鶏で薄ないぞよこれのふほんにあれ鷂さへも燕はなれぬあけ羽の白鶺々とても鵜たりやれ水鶏どふしの鷹々に春にもそだつ花さそふ菜種は鶯鶏の花しらず鳥は菜種のあじしらずしらず鳴れぬ中なれば駕れまいものさりとてはそなたの鵜になりふりも鶫のすゑのはなれごま長い山雀鴻でむかし鴨とあすか川（洒落本「三幅對」の尾）

といふので、定に苦心惨澹、さりとてふざけたものではあるまいか。

新内の「昨日の花は、今日の夢」

次に尚、一のめりやす、それは、新内明烏の有名な文句、（有名でないかも知れないが、私の大好きな、秀絶と思はるゝ文句）「昨日の花は今日の夢」云々の本歌が、めりやすにあり、それが、「めりやす豊年蔵」に現れた「いもせ川」なといふのである。「めりやす豊年蔵」は、未見。高野斑山氏も、徳川文藝類聚第十俗曲には、未見として、めりやす校本としては、これなきを憾み、その續編とも見るべき「歌撰集」より以後を載せてゐられる。自分も無論未見であるが、幸はひ、原本所藏家の佐藤鳳二氏よ

めりやす「いもせ川」

りの指示によつて、その中の「いもせ川」が、この少くとも新内の明烏、「昨日の花」あたりのウタの本であること疑ひない。（單に、昨日の花は今日の夢のみではないのである。これ以下のウタと、此のいもせ川の歌詞とを對照せられよ。以下凡てその本と末、母と子たる事分明であらう）人口に膾炙、少くとも吾人の口に慣れた新内の名文句が、彼を巧みに借りたことも了知せられるであらう。に就て、右

の佐藤氏の書簡の一節を掲げる。

「（前略）それから高著江戸軟派雜考中「昨日の花は今日の夢」は、豫てより特に面白く拜見しました。これに就て御發行當時からお知らせしたいと考へてゐた事がありましたが、當時北海道へ行く事になり、少しばかりの藏書も置ぱなしに出かけましたので、其後暫く忘れて居りました。昨今歸つて來て藏書を整理して居る間に、又此の「昨日の花は今日の夢」が思ひ浮んで來ましたので、おくればせながら、氣づいた點をお知らせいたします。貴説に此の「昨日の花は今日の夢」の文句は「恐らく明和安永年間、或はそれ以前にすでに存在したものであらう」とせられた、今この名文句が、明和を遡る事七年即ち寶暦七年正月刊行の女里彌壽豐年藏に既に見えて居る事であります。こゝで私藏の女里彌壽豐年藏の刊行年代に疑問を抱いて居りますから、一寸記して置きます。

高野博士著日本歌謠史九五一頁に、「女里彌壽豐年藏、めりやすは、寶暦七年正月、始めて普通の江戸長唄と共に、女里彌壽豐年藏と題して、次の七十五首を收めて、刊行された」とあつて、次に七十五首の目次が掲げられて居ります。所が私藏のものは、さよ嵐の一首が脱落してゐます。而も奥付を佚して居りますから、刊行年代は不明ですが、自から兩者の間に刊行年代の相違がある樣に思はれます。この書に就ては、色々他の本も檢索して見ましたが、刊行年代の記してあるものを見出しません。前述の明和を遡ること七年としたのは、高野博士の歌謠史に依つたものであります。

さて此の七十四首の內の　妹背川（勿論、歌謠史にもあり）こそ、この「昨日の花は今日の夢」の文句を取入れた最初のものではないでせうか。左に全文を掲げて、御參考に供へませう。

「いもせ川」
（全文）

〇いもせ川

きのふの花はけふのゆめいまはわが身につまされてぎりといふじはぜひもなやつとめする身のまゝならぬ（す）わかれとなればいまさらにいなせともなき（い）はなれぎはいとしおとこに（好いた男に）わしやいのちでもなんのおしかろ（かろぞ）露の身のきへばうらみもなきものをなんぼたづねてもかげ淸がゆくゑ水のそこまであこやはしらぬどふでもしげさますいじやものカヘシのちのあしたの文ばかりつもるおもひのいもせがわ。

御承知の通り、豐年藏に所收のものには、上方歌を其儘用ゐたものが尠くありません。この妹背川も上方歌（新千代の壽、天保十三寅年十月增補）に同一の名前が見えて居りますが、歌詞は全く相違して居ります。

女里安壽豐年藏に收められた七十四首の內、前半の長歌を除き、後半の短歌の中には、言々味ふべき秀句が極めて多く、昨日の花は今日の夢の名句も、爰に收められてゐることは、餘りに偶然ではないやうに思はれます。

以上、ほんの氣が付いたまゝを述べさせて頂きました。倘、貴說（雜考四二七頁）に、「此の頃、當時

の流行唄であつたらうと思はれる。或はやはり「めりやす」などの勃興と殆んど時期を同じうした、恐らく此の明和前後の詞曲であらうか。」とせられたのには、誠に御卓見の程敬服致しました。」

以上で佐藤氏の書簡の要領は、盡きてゐる。成程、此のめりやす「妹背川」からに違ひない。此の妹背川が、上方唄か否かは今知るよしもないが景清と阿古屋、重忠とから見て、さうではないかと思ふ。景清が時次郎、阿古屋が浦里、重忠は、稍型を違へて、（但し浦里が、お情あるお詞なれど、と山名屋の亭主をいうてゐる所からは、似てゐること）山名屋となつた。新内の作者は、（恐らく若狹掾ではあるまいこと）境遇の似た歌詞を應用し、更に纏綿たる情緒に生かしたもので、上方化して江戸、吉原情調となつたのである。琴責が雪責、責は責で同一である。

佐藤氏の最後の、小生に對する推奨の詞は當らない。自分のは、まぐれ當りのさぐりである。であらうかが功を奏したのである。尚、佐藤氏は、途中で、御承知でもあらうがと謙してゐられるが、私はまだ、めりやす豐年藏なるものの細内容を知らない。從つてそれが多く上方唄のものかも。いづれ機を見て、同氏の原本膽寫の便を得て、公表の價あらば、その全斑を傳へ、且つその折再び謂ふ事もあらう。

なほ、此の妹背川、誠に、明烏の作者が、如何に巧みに此のめりやすを活用したかは、右の妹背川の詞句に附した私の圏點の跡を辿られたら、自から明らかであらう。右傍の括弧内に記したものは、明

鳥との相違點で、他はその儘である、定に、佐藤氏の指摘あつて、始めて此の明文句の出處を明らかにし得たのである。新內歌詞考究上の一ヒントでなくて、何でこれがあらう。

それにしても、此の明烏の新內作成當時、(今日こそ文獻埋沒、全く何人にも氣づかれなかつたもの)此の種めりやすの名作物が、妓樓に於て行はれ、また端的な挑情歌詞として、遊女嫖客の心膽をして慄へしめたものであらう。恰も新內それ自體が、短かく壓搾されたものゝ如くに。

上方唄の妹背川

尙、余言なほ一。佐藤氏の手紙の中に現れた、他の一妹背川(新千代の壽に所載といふもの)と同一か否かは不詳であるが、尙一、妹背川といふのはある。それは、日本歌謠類聚(上卷)にもあるもので、(その長唄の部。四六二頁)水木辰之助作、山本喜市調、佳川檢校改調といふもの、即ち本長唄(カ)の一、「口說は宵の夢なれや……」云々の唄がある。(例の、三勝半七酒屋の段の、お園が三勝の手紙を讀む件の、隣りから聞えて來る唄は、これであらう。)

豐年藏の年代

なほ、佐藤氏は、豐年藏の刊行年代を寶曆七なりや否やに、若干の疑問を藏してゐられるやうであるが、それは、やはり寶曆七年のものかと思へる。但しめりやす豐年藏の原本を見ないから、大それた事はいへない。が、その續編の「歌撰集」の叙に、

去る丑の歲新版めりやす豐年藏と題して、長歌座がゝり新古の書キ本を撰集して見やすからむがため假名書六行にして……。

「豊年藏」に就て

七十五首本は誤

刊行年代

云々とある、その丑の歳は、丁丑で、寶暦七年ではあるまいかといふのである。

補―其後、佐藤氏から「女里彌壽豊年藏」の原本を借りうけ、全文謄寫、既に其の校本も刊行（「江戸軟派研究」參編別册第一第二として）の緒に着いたのであるが、偖、此の原本を親睹するに及んで、私の斷言して憚らぬ事、及び其後、私の「豊年藏」發見に就てものした「讀賣新聞」への寄稿などが、動機となつて、波多野賢一氏によつて發見せられた奥附具備の、但し前半落丁といふ「豊年藏」原本（日比谷圖書館本）など、此等を照合しての結果を簡單に述べておく。

1 「日本歌謠史」の七十五首とは、誤。即ち佐藤氏本の七十四首正し。何となれば、寶暦九年の豊年藏の續編「歌撰集」に、さよ嵐を見るからである。且つ此のさよ嵐の劇場初演（即ち略は製作年代）は、豊年藏の編集梓行以後の年代に屬する。

2 豊年藏は、寶暦七年版に疑ひなし。日比谷圖書館本、此の奥附あり。

3 現在發見せられたもの丶中、「豊年藏」の原本として、唯奥附を遺失したの憾はあるが、少くとも最も完全に近きものは、佐藤氏本也。

右、先づ、前稿に引用した佐藤氏書簡の意味敷衍として、これだけを述べておく。

――昭和二年八月記。昭和三年三月補。

都々一節起原考

はしがき

以下の叙述は、自分が最近別刊しつゝある校本「江戸軟派叢書」の次編として、近く上梓の運びとなつた「どゝいつぶし根元集」(嘉永六年序、珍文館老人誌)の解題に云ひ盡さなかつた事、及び他に敷衍して云ひ度き事どもを併せて、此の篇となしたのである。間々、右「どゝいつぶし根元集」飜刻本の解題、並に附錄の自分が執筆「宮驛遊里沿革略、附都々一節の起原」と重複する箇處もあらうが、それは叙述の都合上已むを得ぬ事と恕して貰ひたい。即ち或る點まで、從來疑問であつた都々一節起原、及びそのもの創唱者の輪廓、當時の狀態が明らかにせられる事と思ふ。無論本記述と、「都々一節根元集」の飜刻本とは、併せ讀まるべきものであるが、此の記述のみにても大體は了知せらるべきやう、筆を運ぶ積りである。

都々一節の起原に就ては、少量ではあるが、「都々一節」(廣田星橋翁述、風俗畫報第二百六十二號)が、從來としては最も貴重な資料であつた。明らかに、名古屋の熱田(舊、宮)より都々一が生れたことを指摘されてゐる。その序に「已れ尾張の人某より聞得し一話に依り其他探求せし適說を掲げて、

「どゝいつぶし根元集」

参考の一資に供せんとす。」といはれてゐる通り、一は故老の言、一は翁の探求、(恐らく、中に說かれてゐる英山畫の錦繪の如きであらう。)此の二者に依られたもので、從來の漠然たる或は「都々一、天保に起る、扇歌より」などの妄說よりは、僅かに眞の措けるものなることは、言外に窺はれるのである。その廣田翁の叙述と主旨に於て殆ど同じく、しかもこれよりも傳へて悉しいものが、珍文館老人――尾府が生んだ幕末明治への雜學者、小寺玉晁の別號。――誌の「どゝいつぶし根元集」(嘉永六年五月の序あり)だつたのである。此の本、稿本一冊、舊狩野亨吉博士の藏書、現東北大學圖書館に秘藏されてゐる物。嘗て名のみを聞いて未だその眞形を觀ること能はなかつたものである。これが如何にして予の許に複寫本として屆けられ、それが上梓とまで運ばれたかは、右飜刻本の解題に詳記しておいたから、略くが、とに角斯界の爲、今茲に忠實なる勞力の奉仕を爲し得たと自分は欣懷措く能はぬものである。却說、此の珍文館老人(玉晁)誌の「根元集」(以下根元集とのみ書す。)は、廣田翁の聞かれた一故老の言とは別物ではあるが、而も符節を合はすが如き點から、當時名古屋若しくは宮に於ては、此等の都々一起原に就ては、殆ど時人の常識であつたらうと思ふ。時代を異にしてゐる悲しさ、此の名古屋に生れ、名古屋で事を爲しつゝある自分が、全く不知、尙且、飛び放れた仙臺の東北大の書庫深く秘められてゐるものを機緣として、始めて此の鄕土に生れた都々一の起原を知るといつた、迂濶な、しかし不思議な遇會には感少からぬものがある。

一 内容

「根元集」は、以下の如き内容である。〔この内容の摘示・原本にはなし。〕

〔宮驛宿中出女御免の事○傳馬町宿の圖○同宿名駒立の圖○尾上菊兵ヱ心中の事○大黒屋若竹屋柿屋所拂○「おかめ買ふ奴云々」の唄の流行（トドイツぶしの初め）○當時の流行唄四つ（よし〳〵節四つ）○おかめの起原と鶏飯屋の始終○鶏飯店の圖○鶏飯店後園之眞景（鶏屋女房お仲が事○於哥女根元記○お龜御免の高札（謡曲「度々逸」）○飯盛女の公許、上納金の事○はしりがね御免○おかめ駕籠願濟○脚本「心中操の相知濕」（淨るり「汐の別れ路」）○中島に三國出來の事○同、圖（妓女、熱田・高藏参詣御免○妓女惣踊の唄、同、衣裳）○柳屋黄花樓出來、同唱哥○囃子、船に連行事御免○鯛屋、揚屋と成る。以上

である。その中、白分が圏點を附したるは、都々一節起原に關して、最貴重な資料、他は、これに附隨して、當時「熱田遊里の沿革」に資する所多きものである。殊に、所謂「お龜」の考には缺くべからざるものである。畢竟、この著述は、見聞をそのまゝ順次にまとまりなく書留めて行つたものらしく、終りの脚本以後の如きは、都々一節には、無論交渉は尠いが、然しこれに附けて綴ぢたと思はれるものである。〔但しこの者、熱田遊里の變遷、當時の風俗を知るには、亦好個の資料〕したがつて、「都々一節根元集」といふ命題には、稍そぐはぬ、雜駁なもの、稍失望の感なき能はぬ。しかしこれらを綜合補足して來ると、一體の「都々一節根元」が朧ろ氣ながら築き上げられる。これに白分は至大の愉悦、

再誕の歡びを味はつたのである。今、その自分の築き上げた一體のものを左に項別にして記して見る。無論、校本「どゝいつぶし根元集」と參照さるれば、予の記述が一層明確に裏付けられると思ふ。

1 **都々一の名義**。寛政十二年(申)の秋より享和三年(亥)に至る、四年間に於て、恐らく享和三年頃に流行つた「おかめ買ふ奴、天窓でしれる、油つけずに二ッ折れ」(此唄の亂のはやし)其奴はどいつじや〳〵」の唄から來た。此のシマヒのはやしの、ドイツじや〳〵が、ド、と吃り、ド、イツドイ〳〵とかはり、浮世はサク〳〵と折返して囃すやうになつた。夫故、誰名づくるともなく、ドゝイツぶしといひ始めたといふのである。

2 年代の傍證。一、寛政十二年秋熱田の築出に、鶏飯屋なる茶店出來。その家の女中に、「おかめ」と呼ぶのがゐて、此の床臺が大に流行つた(「根元集、おかめの起原。鶏飯屋の始終」)二、此のおかめが、間もなく、即ち享和三年頃、宮宿神戸、傳馬、築出一般の賣女の惣名となつた。乃ちおかめ買ひが大に流行つた。(根元集、於哥女根元記に據る。この根元記に享和癸亥の記入あり。癸亥は同三年也。即ち寛政十二年秋より、享和三年に至る間に、一個のおかめが、賣女の惣名となつたのである。賣女の惣名となつたについては、於哥女根元記に悉しい)尙、前揭、都々一の名義の中の「おかめ買ふ奴」の唄の「おかめ」は、一個の茶店の女中時代の名稱ではなく、賣女の惣名となつた、享和期のおかめで無論あらう。故に、以上の判斷がつくのである。

同名稱の年代

2　都々一の名稱を生んだ年代。享和末、同四年二月、文化と改む文化のはじめ。（前條より類推。）

同創唱者

3　所謂後の都々一を最初誰れが唱つたか。寛政十二年秋、おかめ（一個女中の名としての）と同時に同じく鶴飲屋に女中をしてゐたお仲（熱田の須賀生れにして、後に神戸町鯛屋の女房と成る）、この女が唱ひ始めた。此のお仲が一流の節を唱ひ出して、それが、女中たちや、遊客に流行つた。おかめが賣女の惣名となつた享和末頃には、神戸傳馬の妓樓に於ても盛んに唱つた。これをお龜のふし（惣名のお龜が、酒間に唱ふからである。）ともいつた。（都々一の名稱の生れたのは、稍是より後。）（以上は、根元集の、鯛屋お仲が事、於哥女根元記、度々逸等にて類推せられる。）

お仲に關する疑問

【疑問】ここで、自分の疑問は、お仲を個人名のお龜と同一ではないかといふのである。しかし、よく考へると、お仲は、熱田の須賀生れ、中年以後、神戸の妓樓鯛屋の女房として榮えたに拘らず、お龜は、謠曲「度々逸」には、信州生れとあつて、その晩年は、歴としてゐない。殊に「度々逸」の中の、或る商人との「我は浮れ女の唄にうさをも紛れなん。君は商ひに御氣やつまるらん」というてゐることや、そのローマンスが遂げられなかつたといつた説話が、どうもこのおかめ自身の事に思へる。即ち一個名おかめの晩年は、悲慘であつたやうに思へるのと、一方お仲の榮達、晩年法體となつて天壽を全うしたのとは、相違してゐるやうに思へる。即ち別人だと斷定してしまつた。同人とすれば、信州生れの女が、須賀へ貰はれて、鶴飲屋の女中には、おかめと字して出

たともいへる。然しこれは全然採るに足らぬと決めた。即ち、自分のお仲。お龜の一聯に對する斷定は、お仲は、後のどゝいつを唱ひ出した者で、それが神戸で鯛屋の女房になつてから、晴に宣傳はしたらう。とにかく享和。文化頃、神戸、傳馬、築出の汎お龜に、この節が流行つた、お龜の方は、お仲のやうに榮達出來ず、唯、多少女として人氣があつた爲、汎お龜の基を成したに終つた。ローマンスも遂げず、晩年は不遇の中に終つたと、かやうに見るのである。即ちお龜も唄ひはしたが、始めた者ではない。然るが故に、從來、間々行はれる、「宮のお龜が唄ひ出した」といふ說は、全然誤謬で、宮の汎お龜が唄つて流行らした、その元は、鯛屋の女中のお仲(後の鯛屋の女房)だと改めねばならないと思ふ。」

以上が今度の「どゝいつぶし根元集」から得た歸納である。以下は、それ以後の事項に就て、他書、又は諸家の說を綜合した所のものである。

都々一東遷の年代

1 都々一が江戸に移つた頃。飯島花月氏は、嘗て(「江戸軟派研究」初編の第二十一冊)逸名の都々逸集(此本、後に外題判明。即ち「新板どゝいつ惣まくり」である。家藏本がある、中本一冊)の序「素々道人記」中の「ドドイツといへる小唄、江戸にて唄ひ始めしは僅か四五十年の往昔」(これを花月氏は享保元か文化元頃にあたると云はれたが、寛政初めか文化初めの誤であらうといふのを採つて、天保より三四十年前というてゐられるが、一方忠臣藏となぞ小浪道行常盤津の中の「ういていたこも

名古屋と變り、そしてどゝいつ鈍(どん)た洒落」の文政十年七月市村座上場を楯にとつても居られる。自分が思ふに、索々道人記の四五十年前は、實は四十年前であらうと思ふ。理由は、前にも述べた肝腎の宮（ひいては名古屋）の發生が、文化はじめといふ點からである。忠臣藏の文政十年では又餘りに遲すぎる。丁度、これに又一說として、朝倉無聲氏が、「風俗研究」第四十六號にて述べられたドドイツの話の中に、遊歴雜記（江戸叢書卷之三より同七までに分載。所要の五編は、同七にあり。）の五編の上（文政七年筆記）の、岡崎宿の本陣大津屋での話を元に、「當時、ドヾイツは、東海道筋を始め、江戸市中は素より、府外の大塚に至る迄、流行つてゐた」云々といはれた、卽ち文政說がある。卽ち此等の文政五六年說（忠臣藏の常盤津は、この遊歴雜記の文政七年より遲れて同十年）と、宮の文化はじめの流行とは、間(あひだ)の文化の十四年と、文政の五六年と計二十年は隔りがある。これが餘りに大きい。自分が思ふには、やはり、索々道人記にもいへるといふに據るのではないが、すでに文化の中であらうと思ふ。盛んに流行つたのは、文政からでもあらうと折衷したいのである。（尙、朝倉氏の同記文中には、文政九年版本の「風流稽古三絃」（古今亭三鳥作、三冊もの）の中を引いて、ドドイツの名義を解決しえたといはれてゐるが、これも同じく囃子詞であつたといふのであるが、それの元は、「どゝいつ節根元集」のドイツジヤ／＼たる事は無論である。

よしこのより早し

2　どゝいつは、よしこのより早し。これは、朝倉氏も、同風俗研究誌上に於て、小唄雜誌、（寫本、

小寺玉晁述）の中の「文政五壬午年冬、よしこの節はやり來る。此歌どゞいつ已來の大はやりにて、後々いろ〳〵調子もかはり候へ共、此の時はいまだ始り故、二上りのみにて、乙酉年（文政八年）迄はやり、酉年に至つて、本調子となる」を引いて、よしこのより古いといはれてゐるが、無論其の通りである。卽ち、同じく玉晁著の「どゞいつぶし根元集」に據つた、自分が都々一の名稱が生んだ年代を文化の初めとした、その歸納の迹を辿つても自明の事である。卽ちよしこのが、從來文政に起るといはれてゐるが、それが、鶉飯屋お仲の女中時代（寛政十二年末から享和初めに亙る頃カ）の此年代より古くに既に生れてゐたといふ反證が現れざる限り、永久に、どゞ一はよしこのより早きであるのである。

次に、此の宮のお仲の「都々一」は、その前生（前の系統）は何から來たか。潮來から來たかどうかといふ事は、飯島氏の言を藉りると、「都々逸は果して潮來から來たか、よしこのから變遷したか、よしこの都々一別個のもので其孰れが古いか」に惱んでゐられるが、然しよしこのは後と決れば、結局殘るのは、潮來と、都々一との二者のみである。これには、自分は、今いかに忠臣藏の「ういて潮來も名古屋とかはり」があつても何ともいへぬ。お仲の系統を突きつめるより外に仕方がない。それは、今度で最後に突當つてゐる自分の疑問である。突如として、お仲がこれを唄ひ出したのでは無論なからう。その父母があるわけだ。その唄の父母は、まだ疑問である事を遺憾とせざるを得ぬ。

都々一最初の節調如何

3　**都々一最初の節調**。これも自分には未決である、謂ふが如く、潮來の名古屋と變つたもの、それが二上り都々一であつたか、さうして江戸ではそつ二上りのまゝで流行つたか、又は何時頃、本調子と變つたか、これにはまだ何ともいへないのを悲しむ。唯、名古屋で流行つた都々一は二上り物であつたやうにも思ふ。（朝倉氏の引かれた「小唄雜志」に、よしこのが文政五年より八年までは、まだ二上りのみだつたとある。それによつてそれより早いどゝいつも、やはり二上りのまゝで流行つてゐたかと妄推するのである。「どゝいつぶし根元集」には、節調に就ては、記してゐない。）さうして、原始の都々一と、原始のよしこのと、果して如何程の相違があつたか、これも杳として自分は知る所がない。江戸での都々一とよしこのとの交渉、これも後日の事にする。（「忠臣藏の「浮いて潮來も名古屋と變り」の此の名古屋は、原始の都々一で二上り都々逸、そしてどゞいつどんな洒落のどゞいつは、江戸の都々一、卽ち本調子都々一と解していゝやうな氣がする。）尙、守貞漫稿第二十一、音曲中の「名古屋節、尾州にて行はるゝ小唄也。其始め何れの比なる事を知らず、今に至つて熱田驛家の娼妓は三絃に合せて專ら唱之也。其唱哥短く且つ卑陋の物多く、伊勢古市の音頭、宮の名古屋節一對のやうなれども、其品同じからず。云々。此節江戸にて三下り都々逸と云。」（こゝに三下りとある。すれば本場の宮では、此頃は三下りであつたのか。久彌）とあるのも、此の名古屋節は、無論原始の都々一、卽ち都々一と江戸都々一との交渉の一材料にはならう。

都々一の異名

最後に、都々一節の異名として、名古屋節「浮れ草（近世文藝叢書十一）に數首見ゆ。尚、前寫、守貞漫稿中の記事參照」お龜の節、唄といつたは無論であるが、神戸節ともいつたらしい。[illegible]、それは、校本「どゞいつぶし根元集」の標題、附錄にも自分が述べたが、神戸は、當時評判お龜の流行つた宮驛遊里の第一等地、こゝで唄ひ流行した故、乃ち神戸節と稱したといふのである。それには、自分が頃日——複寫本の「根元集」の入手と前後して購ひえた稿本「音曲神戸節」一冊、「いろは別になつた都々逸集（數百首あり）」といふものがあつて、その中の唄の五六が、「根元集」の「度々逸」の文句と並びに頭註の唄と類似又は殆ど同一のものであつて、その「度々逸」（根元集の端曲）の文詞を蒐輯して、後に都々一となした、（廣田氏說）といふに據つても肯づけるからである。潮來に流行つたから潮來節、宮の神戸で流行つたから神戸節。同じ事と思ふ。

神戸節

「音曲神戸節」

創始時代の都々逸の歌詞集。これが從來不明であつたが、家藏の稿本「音曲神戸節」が幸ひ自分の判斷にして誤らない限り、この命題に合した唯一の資料であらうと思ふ。此の本、稿成年代を明らかにしてゐないが、恐らく文化文政年間某氏の筆錄であらう。（高岡齋藤先生の署名はある）それは「根元集」收載の原始的都々一などと相應ずる歌詞を發見するからでもある。

——大正十四年一月。

お仲の遺聞

附たり、鯛屋お仲が遺聞

鯛屋お仲の傳說について、其後聞き込んだ事の二三を記すのである。

一、お仲は女房に非ずの說

お仲は、女房ではなかつたとの說である。即ち鯛屋の仲居だつた。さうして生れも伊勢だつたといふのである。（以下は、凡て本年一月上旬、友人酒井潔氏が、他より聞き込んで下すつた材料である。）晩年、大分の財産を拵へて、在所の伊勢へ歸らうとした、とその便船が難船して、再び宮へ戻つた、さうして神戸の鯛屋へ舞戻り、一生を終つた　女房と間違へられたのも尤もで、このお仲が殆ど一手で妓樓の事を引廻してゐた。現に女房ではないといふ證據は、他に正妻があつて、それに子もあり、その血統が續いて、今日に至つてゐる、といふのである。女房と仲居との差は、どゝいつぶしの根元に就ては、餘り重大な問題ではないが、然し何れであらうか。小寺玉晁の「根元集」にはきつぱり女房とある。この酒井氏に聞かしてくれた昔神戸で勤めをしてゐた老婆といふのは、其の七歲位ゐの時にお仲に逢つたのださうだ。しかしその子供の時の見聞（今日からは、多少の假想も混つてゐよう）よりは、嘉永六の序ある玉晁の記述に重きをおいたらどうか。しかし一方は廓内にゐた、子供乍ら事實に當つたといふのだから、信を措けぬこともない。迷つてゐると、偶然、用あつて、熱田に東北大助教授の古田氏を訪ねた處、その家の老人も、聞けば女房のやうに覺えてゐるといはれた。さて何方(どちら)か。

二、鯛屋お仲が裾で掃く

お仲は、着物をぞろり／＼と着て、だらしのないのが特徴だつたさうだ。それが爲、

神戸傳馬には桑箒（くわぼうき）や要らぬ
鯛屋お仲が裾で掃く

といふ唄が流行つたさうだ。（これは、酒井氏の聞き込みと、古田家老人と、一致した話である。）

三、お仲とよしこのに就て

酒井氏の質された老婆の言に依ると、都々一とお仲との事は少しも知らぬさうだ。たゞ鯛屋で、よしこのの會を時々やつた。その時お仲が、その中の秀逸に節付けをして唄つた、それが評判だつたさうである。（然るに、小寺玉晁記述の、最初唄ひ出したといふのは、全然よしこのに觸れてゐないから、玉晁の曰つたのは、都々一と見ねばならぬ。が此のよしこの云々の話をも事實とすると、お仲は、最初は都々一、それがよしこのと流行が替つてからは、（それは同じく玉晁の著「小唄雜誌」で、文政五年と定つてゐる。）それ以後は、よしこのをお仲が率先して唄つたのか。さうと取れぬ事もなからう。要するに、お仲は都々一及びよしこのの唄ひ手に適した程、美音で器用だつたのだらう。）

よしこのと名古屋

四、よしこのの流行について一說

よしこのの渡來流行に就ての一說。大丸屋（吳服商、京に本店を有した）の名古屋の隱居（恐らく分家の主人であらう）が、上方から將來して、この名古屋で流行した、よく神戸へ來ては唱つて聞かせた、その相手にお仲が出たと。これは、よしこの渡來に就て多少の眞實さがあらう。以上が、酒井氏から聞き込んだ主なるものである。

○

「ごゝいつぶし根元集」附錄補遺

以下は、其後、自分の見當つた他書の記載で、自分の考及び「根元集」附錄の補遺たるもの。

一、文政六年十一月、宮の傳馬町鶴屋の妓と府內駿河町の米屋某と心中した。その時流行した唄として「小歌志藥集」（玉晃編）に十五首、更に七首の數へ歌が出てゐる。その唄によると、妓は、おだい、男は、半兵衞のやうである。

名古屋節と神戸節と原始都々一、全く同一也

二、音曲神戸節（自分の藏稿本）の中に現れ、又根元集の「度々逸」の註にも現れてゐる都々一の數首が、浮れ草（松井讓屋編。近世文藝叢書俚謠所收）の中の名古屋節の項の中に、そのまゝ現れてゐる。これを以てしても自分の前揭「都々一節起原考」で說いた、都々一の異名が名古屋節だつた、又都々一の古い別名は、神戸節でもあつたといふ推斷に、證左とするに足りるものがあると思ふ。

――以上、大正十四年一月二十五日夜。

宮のお龜考

附、よし／＼節の事

「どゝいつぶし根元集」のお哥女根元記

宮驛（熱田）の賣女をお龜と稱したことは、前稿の「都々一節起原考」にも略方を説いたが、尙、その補かた〴〵、纏めて記述しようといふのである。

お龜が、賣女の惣名となつたのは、「どゝいつぶし根元集」のお哥女根元記が、享和癸亥の記入あり、從て同三年（癸亥）頃には、旣に宮一般賣女の惣名になつてゐたと自分はいうた。その傍證を更に他に發見したからである。その前に、おかめの起原に就て、尙、一言略方を述べておきたい。

「根元集」の記事

お龜とは、天狗の面が男、お龜の面が女の或るシンボルであることは、古くからいはれてゐるが、このお龜もそこらに起原を持つてゐはしないかといふ、自分で作る疑問である。これもあるが、然し自分は、「どゝいつぶし根元集」の記事を信じたい。それは、同書のおかめの起原や雜貨屋の繪箱に、確實に、一個お龜なる女性がゐて、それが熱田の東の出口、（東海道に沿つた）の鷄飯（茶飯に似たもの）茶屋の女中をしてゐて、人氣を得た、それが後に賣女の惣名となつた、且つお龜買ふ奴ドイツじや〳〵の唄まで生んだとあるあの記事に據るのである。尙、このお龜と汎稱したについては、此の個人名の

お龜の眞義

「羇旅漫錄」の享和二年六月の項に出づ

他に、二三の異說があるる。卽ち、一、宮の熱田を由來、蓬萊(蓬が島)といふ傳說があるにより、蓬萊に遊ぶ龜の義から來たのだといふのと、二、一般に醜婦であつたから、お龜を異名にしたといふ說の如きである。然し是等は、個人名のお龜といふ根元集の說がある限り、全く後人の附會、若しくは想像であらうと思ふ。偖、このお龜が、寬政十二年末の茶店開店當時から、僅かの間に賣女の惣名となつた事は、根元集のお哥女根元記にもある通りであるが、更に、その享和三年よりも早く、享和二年の記事を他に發見したのである。それは、馬琴の「羇旅漫錄」である。同書は、壬戌と外題にもある通り、享和二年五月九日江戸を立つて、京阪に遊び、同八月二十四日歸府した、馬琴羇中の漫錄である。卽ちその往路の宮に關する記事中に發見したのである。曰く、

「六月三日より雨ふらずして暑氣甚し。廿五日に至りて雨少しくふれり。近在みな雨乞す。予はこの時、名古屋にありき。廿七日の朝。桑名、四日市邊、朝四ツ時頃まで雨ふりけるよしなれど、宮は少しふりぬ。(以下二行書にて、久)宮と鳴見に一兩年前よりめしもりをおく事をゆるさる。吉田、をか崎には似ず、いづれも醜婦なり。名古屋人、これをおかめと渾名せり。妓樓あれど、旅人はその旅店へもよぶよし。廿七日に宮より乘船

(下略)」

とある、是である。卽ち享和二年六月、旣にお龜と汎稱した證であらう。すれば、寬政十二年秋の

お龜（個人名）茶屋より僅か翌享和元年、二年と、丸二年にもならないのである。お龜の流行の程度、以て想ふべしである。（この馬琴翁の筆法も、取りやうによつては、醜婦だから、お龜といつたのだとも取れるが、しかしそれは偶然の暗合と自分は解きたい。」

偖このお龜の汎稱が、いつ迄稱へられたか。それには、確たる文献がない。戯作、俚謠に基くより外にない。これには、幸はい、一九の「東海道中膝栗毛」が眞先にある。四編下の池鯉鮒の條、馬子唄に「宮で泊ろか、お龜にしようかナア、たゞしや岡崎、よい女郎衆ナア。ドウ〳〵。」とある。五編の上の始め、桑名の先の所に、「此頃旅人のうたふをきけば、はやりうた「しぐれはまぐり土産にさんせ、宮のお龜が情所、ヤレコリヤよヲし〳〵よし」ともある、是らである。この四編の下は、文化二年の刊。五編の上は、文化三年の刊、即ちこの當時、お龜と稱したといふ一資料である。（文化二年は享和二年より四年目）尚、當時、尾張鳴海の飯盛をお鶴と稱した。（これも一九の「金草鞋」二編東海道の部で、それに此意味の事がある。即ちやはり文化年間の事である。）但しこれは、宮のお龜に相應しての事か、又はそれ以前か、その先後明瞭でない。が、鶴と龜、起りさうな對照である。恐らくは宮以後の名稱であらう。扨お龜に關する文献は、それ以後に於ては、幸はひ、小歌志彙集（小寺玉晁著、近世文藝叢書俚謠所收）の中に、

○同年（文政三年）冬でんぐりぶし流行

「宮のおかめさんにしま縮緬の衣裳着せて、ながむれば、いかなお客さんでもお腹がた
よ〳〵なされますか、こいつもばいしてでんぐりまなこのぱい」

といふのがある。此のおかめである。即ち享和二年を距る十九年目の文政三年、尙、お龜が汎稱として續いた證左である。

それ以後にありては、尙、小唄のちまた（同じく小寺玉晁の著、近世文藝叢書俚謠所收）なる小唄雜記の中に、「天保元、庚寅年春、お影參りといふ事六十一年目の由にて、諸國の人類に伊勢へ參り、其節左の唄大に流行」といふがあつて、その唄の一つに、

おかめ〳〵とナア云ふておくれるな、わたしや新長屋の福の神よトコセ

といふのがある。是である。即ち天保元年（馬琴の羈旅漫錄の享和二年より二十九年目）に及んで、なほお龜の名のあつた證據である。但しこのお龜は、或は既に、神戸。傳馬（第一流と第二流）の遊女をいはずして、第三流の新長屋（元の鷄飯屋附近が遊里として發達したるもの、即ち、宮の東の出入口、一名突出（筑出）ともいひ、後に古町遊廓と稱し、明治四十四年まで存在してゐた。）を主に稱したものかも知れない。

この新長屋は、中々當時安値專門で持てたと見えて、この唄より少し以前の、文政十一年流行のどん〳〵節といふ中に、

「高い二階から新長屋見れば（しんながや）の、かさやひぜんの花ざかりの、ハリハドン〳〵〳〵。」

といふのがある。此の通りの繁昌さであつたのである。この唄なども、以前なれば、この新長屋もうつかり見逃す所であつたが、それがすぐ氣が付くやうになつたのは、偏に「どゝいつぶし根元集」のお蔭である。」これらに據つても、新長屋が、引續き（但し根元集には、一時廢絶とある。）この文政・天保、猶、競ひ迎へたことが分る。（以て「宮驛遊里」の、新長屋についての沿革資料とも謂へよう。）

それ以後に於ては、俚謠に現れた「お龜」は見當らない。唯神戸を唱つたものが、天保二年にある。曰く、

同年秋（天保二）東都よりはやり來る唄

〔前二略〕戀しき人をあとにして、埒定めぬ旅の空、心はにごり涙顏、上着の袖にまぎらして、小くびかたむけ行く足の、あとにひかるゝ後髮、さても永樂屋が氣にかゝる、コレけつまづくか、休み〳〵行かしやんしたがよいわいな。」

といふのが是で、即ちこの永樂屋は、當時神戸町の大樓であつたのである。（拙訂、「どゝいつぶし根元集」にくはしく出でたり。」

以後、お龜について確たる何物もないが、唯、宮の貴女に觸れた一戯作があるから、序でに附記しておかう。稿本「栗毛の人眞似」前編二冊、序に、干時天保十一庚子春、とあり、著者は、石亭山人（載

稿本「栗毛の人眞似」より

は石亭山猿。初編下の跋に、「山鳥都金城南下市隱　石亭山猿」とあつて石峯とよまるゝ印を捺す。即ち名古屋在住の人にありしならんも、身元不詳。」といふのであるが、その初編上のはじめ、宮を描寫した中に、

「…………。跡先かまわず、名古屋を立出、はやくも宮宿を過んとして、柳屋といふ酒妓家を通りすぎんとして、

けいせいの心柳屋　客は風
なびく枝あり　ふる枝もあり

徳「ハ、、、、けいせいも餘り名がもつたいねイ、飯もりがしよくぶんだぜへ　佐「めしもりといつちやふる枝もありが乘らねいからさ　徳「爰らのめしもりがふるもごていそふだ。誰がふられてだまつて居るものか。しかしおめいなら、ふるだろう、その面だア、夜鷹もことわるだろう　佐「こふおいらが名吟をはいたとて、そうねだむな（下略）」（この佐、徳とは、佐九利兵衛と、徳七なる二人の旅に記せる故也。）（この柳屋といふのは、「どゝいつぶし根元集」の附錄によると、傳馬町の妓樓で、天保十己亥年彌生、熱田傳馬町柳屋長右衛門、黄花樓出來と同書にある。」

幕末明治のお龜

却說、このお龜が、新長屋（後に古町といふ）方面の遊女の惣名として殘りゐたらしいのは、私が、

昨年末、此等熱田の古遊里遺跡探索の際、ある老婆から聞いた所「私の若い時分まで、古町のおやまに限り、お龜といつたのを覺えてゐます」といつたのを信ずると、明治前後まで猶ほ一局部に惣名として昔乍らの此名が傳へられてゐたのである（但しかうとも斷言が出來ないかも知れぬ。それは、幕末刊本淫水亭の「東海道五十三次」の附文、宮驛の中に、「此驛にては、飯盛の惣名をおかめと云ふ云々」とあるからである。）

以上は、既に「どゝいつ節根元集」の附錄に於て、自分の述べた事項もあるが、同じく玉晁編の俚謡雜著其他から偶然拾ひ出したものを基に、こゝに纏めて見たものである。

○附、よし〳〵節の事

よし〳〵節の事

よし〳〵節なるものが、名古屋に、丁度、都々一の生れる前後に流行つたことは、よし〳〵の調子を尻に附けた唄を數首、「どゝいつぶし根元集」にも載せてゐるから、分ることであるが、根元集に不備なその流行の年代が、偶然「小歌志彙集」によつて分つたのである。即ちそれは文化二年乙丑の名古屋流行である。小歌志彙集の冒頭に、「根元集」所載のよし〳〵節と同じもの、同じ數がそのまゝ載せられてゐる。そのよし〳〵節であるが、これは、其の頃榮えて（現に、文化二年刊行の、膝栗毛のお龜の唄（前記）も語尾によし〳〵とあるから、よし〳〵節の一であらう。）尙、遙か後の天保四年春にも、再

び流行したと見える。同小寺の著『小唄のちまた』に天保四年春の頃に、よし〳〵節流行として、

「正月二日の初夢に、あまた七福神寄集りて、四方を見渡す天保山、サ、寶の入船よし〳〵」

「同」流行

以下七首の唄を載せてゐる。丁度、唄の形も、初期、文化二年流行の、

本てらし「鶴が岡での神前に、あまたのかぶとの有る其中に、是が高貞さんの兜なり、サ、顏世が目きゝはよし〳〵」（小歌志彙集。風俗畫報の二六二號廣田翁の文。どゝいつぶし根元集。ともに同じ。）

とあるものと、似てゐるではないか。然るに、これは、名古屋で生れて、それが上方へ流行り、更に名古屋へ舞戻つたものゝやうに思へるのである。即ち、天保十五年辰之歳大新板の頭書のある「日本唐土二千年袖鑒」（大阪板）といふものの拾編に、文化六年、サ、よし〳〵ぶし（三十七年ニナル）と云ふのがあるからである。名古屋は、文化二年の流行である。それが、海を越えて、桑名に唱はれてゐた事、膝栗毛の示す通りである。そのこれが四五年を經て、上方で流行り、更に、大阪風の唄が天保期に名古屋に逆戻りした、かやうに見て差支ないかと思ふ（さうして、これが、或は、よしこのと何らかの因縁を持つてゐはしないか。しかし未考である。）（尚、風俗畫報の廣田翁の文には、これを吉之節といはれてゐる。是れ吉々の誤植か、又は同翁の明らかに思ひ違ひであらう。）　――大正十四年二月。

宮驛遊里異聞

稿本「幸好古事（よしくこじ）」といふもの一冊を見た。中本二三十丁。本文には、毎丁、妓女の樣々姿態の繪が着色で描かれ、その上に、都々一（無論創成頃のどゝ一）が書かれ、その裏には、そのどゝ一の文句の解釋がこじつけて説かれてある。無論正解のものではない。序文があつて、その筆者は、紫華玄不理痴（紫華玄は、屑書）とある。誰の匿名かは分らない。參考のために、この本全部に、解としては附會されながらも、抜かれてゐるどゝ一の文句そのものは、正のものであるから、その全部を、茲に登載しておく。無論、私は、どゝ一が宮で生れ、その生れた當時間（ま）もない頃の、即ち原始的どゝ一だとして、これを發表するのである。それは、私の校本「どゝ一ぶし根元集」附錄並に本文頭註、さては拙稿「都々一節起原考」及び「宮のお龜考」其他の、一個有力な傍證としてである。また家藏稿本で、宮驛原始どゝ一の大集本だと信ずる「音曲神戸節」との對照にも可なりと思うての事である。（附記—以上の中、校本「どゝいつぶし根元集」は、單行本、自費出版として既刊（非賣品）。他は、凡て本著に、補正收錄）

×

歸らしやんせと云ふたがむりかあれをきかんせあけのかね

客をねかして小庭を行（ゆ）けば月におまへの影法師

二本さしたとけむたいぶるなわしもかんざし二本あし
きつとだきしめ顔うちもかうもかはゆいものかいな
思ひだし〱またとりあげてふみの先をばかみしめる
朝の馴染に袖引留てしんほしなよと目になみだ
蟬とほたるを兩手に持てこがれさせたりなかせたり
△あかる障子にしら梅かいて客は鶯きてとまる
客をたゝしてそのあとみればにくや枕が二つ有
なまじなま中初會に出ずばこんなくろふはせまいもの
○松の葉のやうにせまいきをもつな廣い芭蕉葉のきをもちやれ
すかんおとこのしんじつよりはすいたおとこのうそがよい
△お龜買ふやつあたまでしれるあぶらつけずの二つ折
○橋の上から文とり落し水に二人りが名を流す
長い年季をわしや持ながら女房約束こけな事
わしが願ふはお聖天さまよぬしのこゝろのちらぬよふ
あんな男に氣をかきよよりは山の木にかきよ松の木に

おじやれはなそう小松の影でまつの葉よりもこまやかに
今の大童山は化物とうでないか貌はおく(ぐカ)らもち目は枇杷の目
いふなかたるないろにもだすな諸事はたがひのむねに有

これだけがその全歌で、跋が別に文をなしてをり、その跋の中には、當時神戸の大樓、永樂・駿河の二個の名がある。さて年代であるが、これは、右の歌の中の、大童山でも知れるが、跋に幸はひ、支がある。曰く「とらの正月」。さて此のとらであるが、恐らくは文化三年の寅であらう。その證は、大童山が番附にあつたのは、寬政七年より九年である。それに、この所謂お龜の源泉――例の宮驛築出の鶏飯屋は、寬政末であるからである。卽ち寬政・文化頃で、寅は、寬政六年と文化三年である。やはり「どゝ一ぶし根元集」にあつた、お龜が宮の賣女の惣名となり、且つ神戸などが榮え出したのは、享和二年頃であるから、此の寅は、それから四五年の文化三であらう。その頃まで、此の大童山の唄が、殘つてゐたのだらう。

右の「幸好古事」登載の全歌の中、()印を附したるは、例の「音曲神戸節」と符節を合するものである。(△印の二首は「どゝいつぶし根元集」に同一又は類似のものある謂である)卽ち此の本の文化三年頃はこれらの歌で、それより暫く後には、この三首くらゐが殘り、他は新しい唄を生んだ、それがあの「神戸節」だといふのではなからうか。卽ち「神戸節」の數百首は、文化以後、文政間の宮驛の流行歌、と

見るべきであらうか。としても、江戸のどゝ一の父祖たる資格は、年月に於て立派にある。

○

蓬萊娼妓位見立細見

尙、丁度、これと同時頃、卽ち文化二乙丑五月の記入のある、四六四倍大くらゐの大きさの、番附樣の摺物一枚を見た。それには蓬萊娼妓位見立細見、とある。蓬萊が宮を指すこと、いはずもがな。さて、その中の、妓名は省き、妓樓の名だけを擧げておく、以て宮驛當時の遊里殷賑を語るものであり、且つ「どゝ一ぶし根元集」などと對照の便あり、益あるを思うての事。

×

えいらく。たい。するが。

あふみ。てうちん。はまだ。しま。ふじ。さがみ。大にし。やましろ。こめ。いせ。たま。(まさき)すみ。なかね。ひした。あふた。かみ。みの。ぜに。まつしま。すみ。(このすみ、二軒を有したと見える。) やまと。やなぎ。

まつもと。もりした。やまだ。ちきり。しま。みうら。ながと。しん白木。みやくち。

と、以上である。

當時の妓樓

此の中、大樓、中樓樣々あることは、家號でもわかる。(どゝ一ぶし根元集を參照の事。)

尙、この細見のをはりに、左の豫告があつた。この角書によつても、當時、(文化二年)宮の娼婦を

おかめといふた確證である。

尾4獨 評判 案 内 此書右細見同様ニ近日出来

〇

右の宮驛遊里に關した自筆洒落本の一に、「浮れ鳥」といふのがある。家藏本は、その下卷小本一冊であるが、これは、お龜の賣笑生活を描いたもののうちでは、私個人では、最も江戸系洒落本に近いものかと思ふ。他の同種のものが、寧ろ滑稽本的であるに比して。何れ紹介の機があらう。

——昭和二年四月。

「金草鞋」二編の鳴海のお鶴

「鳴海のお鶴」再記。此の餘白に、鳴海のお鶴に觸れた「金草鞋」の二編(自分の認定した)の記事全文を抜いておく。「鳴見」の内にである。曰く、「このところにては、めしもりのそう名をおつるといふよしをきゝて、にぎやかさ三味せんたいこつゞみまで、なるみの鶴の舞ふも見えたり」とある。さうして此編の年次は序に、文化癸酉とある、癸酉は、その十年の事、即ち寛政末享和頃の宮のお龜の發生、それに照應して文化頃、鳴海のお鶴が生れたといふやうに思へるが、如何(此の「金草鞋」二編の他に、お鶴の事見當らず。)

——昭和三年八月。

校訂 音曲神戸節

解題

既刊江戸軟派叢書第一編「校本どゝいつぶし根元集」や、拙稿「都々一節起原考」などと相對の關係にあるもの、卽ち此の「音曲神戸節」である。此本、稿本一冊、半紙形の九行罫紙二十三葉にいろは別に集錄せられたものである。神戸とは、近世熱田三遊里の一、しかもその首座を爲した神戸の謂で、此の神戸を中心に榮えたものが、所謂後の都々一である。卽ち都々一は、當時名古屋及び宮の流行唄の亂の囃子から來た傳訛名、此の神戸節は、發祥の地名を借りた名である。卽ち此の神戸節の全內容は、都々一として宮及び名古屋、東海道の各驛、江戸、延いては他地方にまで及んだものの濫觴、起源である。現に、小寺玉晁の稿本「どゝいつぶし根元集」に所收の原始的どゝ一と共通なもの、數首を數へ、尙、他に宮(熱田)の地名事物を特殊に讀込んだもの數首を收めてある。從來他に、この神戸節なる節の所在を、我等は嘗て文獻上存知しない　それだけ、これが從來等閑視せられた、都々一發祥地の宮、殊に神戸一遊廓附近の當時の流行唄、その歌集として、最初にしてしかも有益多趣味な唯一記錄であらうと思ふ。

尙、幕末流行の都々一作者が、第三者として遊女の境涯を詠んだものとは違ひ、彼女ら自身の率直な感情流露そのまゝの創作が多きにゐることとも思はれ、また歌詞も幕末とは比較にならぬ純情味原始味、殊には惻々として我等の心胸を打つ悲痛味に滿ちてゐる。これらからも特殊な貴重味はあるかと思ふ。

勿論この「音曲神戸節」の全部が、宮驛神戸に於て創られたものではない。吾人が校本筆寫の際にも然らざるものを多く見受けた。これは無論、交通に便な宮の地理的理由からも、東西の唄を多量に蒐集してゐると思ふ。都々一發祥の寛政末より以前の諸記錄に載れる唄の記載も多い。又、變へ唄の如きものも。これらは、無論、新しく所謂神戸節（後の都々一）の節調によつて唄はれたものであらう。玉石同架、挿入創作叢載の觀があるが、とにかく此の稿本所載の全部を擧げておく。校本謄寫にあたり、二三の外は、全部原文のまゝとした。植字の都合上、原本一行一首のものを、二行となし、三段とした。尙、「どゝいつぶし根元集」に現はれしもの、及び宮驛及び名古屋に關する固有名詞の含まれたもの、卽ち神戸に純母胎を有してゐると思はれる唄の數首は、●を以て明かにした。（地名其他の解說は、「どゝいつぶし根元集」の頭註增補（自分の下したもの）に詳述せられてある。參照ありたい。）尙、追加の中、「お客つとめが一座の中で」の唄は、都々一が潮來から生れた事を示す傍證とも思へる。とにかく神戸に、潮來が流行つてゐた一例である。

音曲神戸節

高岡齋游鳧編集

い

○いろの戀のと扨やかましい人のせぬ事するじやなし
○いちごそをふと二世迄かけててうしあわする三下り
○いまのおきやくに誠があればたてしはしらに花が咲
○いきとはりなりやわしや淀川の水の流もとふて見しよ
○いわゝいいわんせかきねにしほりくさり繩とも思やせん
○いやなおかたにむりとはゆわねきれてよければ今までに
○いやよあいたぞ此家のつとめはよふねんあきぬしのつま
○いやな男になびこうよりもきれぬゐにしをきるがまし
○いろでやせるかしんぐ(マヽ)がますかたゞしつとめがくに成か
○いかにわたしがいたらぬとてもこふはたさるゝはづがない
○いきでしよしんで男もよいが情のないのが玉にきづ
○いやなおきやくもぬしどうぜんにしゆびをつくろふそのつらさ
○いつそやぼなりやのらうちやせまいやぼでないからのらをうつ
●いろがくろふて氣がきくならば御茶屋がらすはやぼでない
○いやな坐しきにいる夜のながさなぜかこよひのみじかさは

ろ

○ろうかづたへにぬけてはきた
　がこすにこされぬかべひとへ
○六十むくにでそわれぬ時は唐
　へいてなとそふてみしよ

は

○花といふじでさかぬもくやし
　さけばみがなるはづかしや
○はらが立かへ是しき事にかほ
　にもみじをまきちらす
○橋のうへから文とりおとし水
　にふたりが名をながす
○はをりかた手に帳面さげてか
　よいづとめはいつの事
○はらのたつ時はけんくわもす

るが跡であやまるほれしよふ
こ
●はよふやめたやかいどりづま
　をぬしのおそばではりしごと
○はよふ此家をめでたくかしこ
　女房がほしてくらしたい
○はよふこのやをめでたくかし
　こつまよきたかとゆわれたい
○はふよ此家をめでたくかしこ
　こわいさとじやとながめたい

に

○二世とかわせしつまさへかわ
　るましてつとめの身じやもの
を

○にしも東も南もやめてわしが
　おもいは北のかた
○西にさくはな南でひらく北に
　一トこゑほとゝぎす
○にくいやろめは夜る昼かよふ
　すいたたれかはまゝならぬ
○にげるしやんも手立もつきた
　もはやしぬより外もなし
○女房さらずとわたしものかず
　ぎりとせけんのたつよふに
○女房されとはわしやゆわなん
　だほかにしよふがないのやら
○女房去るよなうわ気な人にす
　ゑのやくそくなる物か
●女房たゝきだし子はふみころ

しふといごさいは是こゝに
○女房よばねば親へのふこうよ
こばたれかへぎりたゝず
○女房あるのも子のある事もし
よふちしながら腹がたつ
○女房あるのも承知でほれたと
どのつまりはどふ成と

ほ

○ほれて見せるはつとめのなら
いそれをうちこし女房がほ
○ほかにます花有のも承知おさ
きながらもすへなごふ
○ほれたしやうこにやおまへの
くせがみんなわたしがくせと

なる
○ほれたしやうこにやあいとて
ならぬ外にこさいはないわい
ナア
○ほれたせうこにとめとてなら
ぬかへらしやんすがぬしのため
○ほれていながら氣づよい事を
いふていなしてあとくやし
○ほれたかほすりやふんだりけ
たりまりのけいこじや有まい
し
○ほれたかほすりやふんだりけ
たり誠ほれたらころす氣か
○ほれてほれられてあいほれと
やらとゞのつまりはどふなさ

る
○ほれてみやんせかねこそなけ
れ金のかわりのこゝろいき
○ほれてつまらぬ他國の人にす
へはからすのなきわかれ
○ほれてつまらぬものとはしれ
どいろはしやんの外とやら

へ

○へだてられたる海川よりもこ
すにこされぬかべひとへ
○返事まつ身は日にせんたびも
みせやろうかにたちくらす

と

○としは卯のとし其名はさゝぬ
あわせおくれよ今いちど
○としは廿七その名はさゝぬま
ゝになるみがもたせたい
○としは三十だい其名はさゝぬ
ひろいどこかにたゞひとり
○となり坐しきでひく三味せん
はわしをまよわす五大りき
○とうにおちいでかたるにおち
るあくじせんりとしれやする
○とかくうき世がまゝなるなら
ばいとしおまへにかねもたせ
○とゞのつまりをあんじるよふ
な淺イほれよはせぬわいな
○とのごもつなら廿四か五六つ
ゞやはたちはうわのそら
○とてもそわれんあく緣ならば
髮をおろしてあま寺へ
○とらは千里のやぶさへこすに
越にこされぬかべひとへ
○どふでこよいはつぶさにやな
らぬすゑでおかほはたてゝみ
しよ
○どこかかよいをとめよもむり
かわしがたてつく人じやなし
○どてのかわづのなくのも道理
水にあわづにいるからは
○どこの土場でも長半ばでもさ
らし手拭こちの人

ち

○ちわのこたつになさけのふと
んいろをひきだすちやわん酒
○ちやうのはかまのひだとるよ
りもぬしの心がとりにくい
○ちわもりんきもくぜつのあま
り明のからすが中なをり

り

○りん氣せまいぞへはらたちや
せまいどふで女房に成じやな
し
○りこうだてすなさしでやしや
んな人がかれこれいふぞいし

ぬ

○ぬしのくる夜はよいからしれるしめたしごきがしやらどける

○ぬしをかへしてその跡見ればどちらむいてもよぎのそで

○ぬしににやわぬてくだとやらもぐちなわたしがあるゆへに

○ぬしはわたしを他人のよふにへだてさんして様といふ

○ぬしによふにたやゝでも產んで川といふじでねてみたい

○ぬしはわしゆへわしやぬしゆへに人にうらみはないわいナ

○ぬしはたち嶋（マヽ）ぬしあゝ花よ思ひなをして後の花（マヽ）

○ぬしのこぬ夜ははやねてゆめに逢ふて思ひがはなしたい

○ぬしがあるゆへおきやくはたへたまゝよおもへばなんのその

○ぬしのかんしやくひごろの氣しつ夫を苦にするわしじやない

○ぬしのおいでをいつじやと聞けばおそく此月すへつかた

る

○るろうさすのもみなわたしゆへあわせたまへよむすぶかみ

○るいは有まいどこかにひとりおせのたかさよはのしろさ

を

○をやもたいせつ此身もだいじけれどたれかにやかへられぬ

○おもしろいときやおまへとふたりくろふする時はわしひとり

○おもいだすまいとはおもへどもいろはしやんのほかとやら

○おつと承知〳〵五三の桐はどこのこうやがそめたやら

○親もとくしん此身もしよふち

ねんがじやましてそわしやせ
ん
○おまへそのよにきらずをくふ
てのどのつまりはどうなさる
○おもいさそよりころしてしま
へ死ねばどこかのつちとなる
○おまへ前髪とらんすならばわ
しもとめましよふり袖を
○男ぢくしよないぬよりおとり
いぬは尾をふるあとを見る
○おまへひとりをたてよとすれ
ば岩やつるぎの中にすむ
○おとこめうりかいんぐわのは（マヽ）
しか玉にほれゝば女房ある
○お竹しの竹心のやたけむねに
あり竹あかしたい
○おもふわたしにおもわぬおま
へおもわせふとはわしがむり
○おふて嬉しさわかれのつらさ
おふてわかれがなかよかろ
○おふてうれしさわかれのつら
さ夫れにじやけんな事ばかり
○おふた夢みてわろふてさめる
あたり見まわし泪ぐむ
○おもふまいとは思ひはすれど
またもみれんでかへすがき
○思ひ出す程泪がさきへおちて
ながるゝいもせ川
○おつるこのはにやかぎりもあ
るがかぎりないぞへ我おもひ
○親のいけんも聞かないわしが
ぬしにゆわれてあらたまる
○男よいのにほれたじやないか
ぬしの持まへ諸事萬事
○おふて嬉しさわかれのつらさ
わたしや心がぐちになる
○おふて咄そと思ふていたにお
ふてなま中なねせまる
○おふて間もなくはやしのゝめ
のにくやからすがつげわたる
○男ぢくしよなふたみちかけて
つとめすりやこそ聞わけける
○思ひきれとはしねとの事かし
ねば野山のつちとなる
○おもひきれ／＼あのきり／＼

すおもひきれ〳〵〳〵となく
○思ひきれ〳〵きらねばならぬ
かねのくさりもきりやきれる
○おふは玉さかかよふは毎夜あ
わで歸すはいく度か
○おまへへやずみわしや年〻の
内てんじよつかへてまゝなら
ぬ
○おまへへやずみわしやねんの
うち人目づゝみがまゝならぬ

わ

○わけのあるたけもの猶いわず
あらたまるほどかんがつく
○わしとおまへはをりのひも
よしかとむすんでむねにある
○わしはあふみで戀こがるれど
おまへあわずの氣まゝ酒
○わしが事かへ志賀から崎のひ
とつ松とはたよりない
●わしとおまへはよるふる雪よ
人にしらさずふかくなる
○わしはひとへにさく花なれど
つとめすりやこそやへにさく
○わしがけんしは此丁にやない（けんしは、古市の方言、情郎也。久彌）
ぞ二丁も三丁もかみの丁に
●わしがおもひはあの森下夕の
おつる木の葉のかづよりも
○わしがきものを鼠にそめて（マヽ）お
まへ猫にして飛付かせよ
○わしは七ツにいたねばならぬ（なゝつの訛。久彌）
内をいわずとその[illegible]
○わしがとのごでほめるじやな
いが色の小黒イ背のひくい
○わしによふ似たアノほとゝぎ
すなゐてあかして居るわいナ
○わしが思ひとそら飛とりはど
このいづくにとまるやら
●わしはどゝいつでまぎれもせ
うがさぞごちよあひお氣づま
り
○わしがむねでは火をたくけれ
どけむりださねばぬしやしら
ぬ

○わしが思ひは是より西になが
いのれんのそのなかに
○わしとおまへはあいをいの松
月を畫にしてかへり酒
○わしが事かへ川ばた柳水の流
を見てなげく
○わしはぬしない野にさく花よ
おらばおらんせちらぬさき
○わしはおまへにおまへはわし
にほれたげなぞへあいほれに
○わすれ草にと三味せんひけば
歌のもんくで思ひだす

か

○かねて手くだとわしやしりな
がらだまされてさくむろの梅
○かわいかいなのいれぼくろさ
へ今ははかない灸のあと
○かわす枕がものいふならばわ
たしやはづかしとこのうち
○風がうわ氣か柳があだかかわ
りやすきはひとごゝろ
○かみもゆふまいみじまいすま
いいとしたれかがあるじやなし
○かみもゆふまい夜げしよもせ
まいこんどおまへにあふまで
は
○かねがなるかへしゆもくがな
るかかねとしゆもくの合イが
なる
○かづさ木綿のじやうなしおと
こよくもだましただまされた
○かきののれんに何やとそめて
ふたりくらすはいつの事
○かきののれんに何やとそめて
なかで帳あいこちの人
○かぎりある身のかぎりをしら
で甲斐もなき世をうちなげき
○かねがいもりのくろやきなら
ばおもゝ、男をまゝにする
●かへらしやんせといふたがむ
りかアケノ大須の一番だいこ
●かわゆけりやこそ七りもかよ
へにくて七里がかよわりよか
○かみはばら〳〵いろ青ざめて

やつれすがたもぬしゆへに

○かほでわらふて心で泣くいや（マヽ）なさじきに居るばやい

○かへしともないわたしが心かへらしやんすがぬしのため

よ

○よいはまぎれてくらしもしよふがもはや九ツなんとしよふ

○よさへ明くればはやきぬ〴〵のにくやからすがつげわたる

○よごと〴〵にまくらがかわる枕かわらぬつまほしや

○よこに車なおまへの心それをかぢとる身のつらさ

○よいがさめたらかほあげさんせしんなはなしがあるわいナ

た

○ためになるきやくまたほれたきやくふたりきた夜のそのつらさ

○たとへかりんのどうなるとてもだいてねじめのたがやさん

○たとへせかれてほどふるとてもゑんとじせつのすへをまつ

○竹にすゞめはしなよくとまるとめてとまらぬ我おもひ

○たてよ〴〵の月日はたゝであだなうきなが先キへたつ

○たてよ〴〵の月日はたゝでたゝせともないきやくがたつ

○たまの御げんに逢ふ其夜さは噺するのもあとやさき

○たつはかみそりたゝぬはしんしよあるはしやくせんないはかね

○たとへいづもでむすんだゑんもむすびなほしてすいたどし

○たてばしやくやくすわればほたんあるくすがたはゆりの花

○たとへまさむねめいさくじやとてわしとたれかの中きれぬ

○たれもしるまいふたりがなかはかけごすゞりの筆がしる

○たゝみざんして待夜のながさぬしとねる夜のみじかさは

れ

○れん中じやけんにおまへのう(マヽ)わ氣じよしに心はゆるされぬ

○れんがはいくわい茶の湯のけいこあだな月日は送りやせん

○れんりひよくとちぎりし事もあだし枕のうき涙

そ

○そうにやそわれずきれるもいやよどうかはてしのつくように

○其日ぐらしの朝がほさへもかきにもたれてしやんがほ

○そめてくやしや江戸むらさきをもとのしらじにしてほしい

○そわれまいとはそりや氣がよわい石にたつ矢もあるわいナア

○そふてくろふは世上のならいそはぬ先キから苦勞する

つ

○つとめする身と帆かけたふねは人目らくそでくはたへぬ

○つとめする身に誠をいわせうそはおまへにせんこされ

○月はさゆれど心はぬしにまよいがちなるしんのやみ

○つとめする身とさげしましやんな諸国諸大名はみなつとめ

○つとめする身とお庭のとうろばんにやたがきてとぼすやら

○つとめすりやこそあのゝあめにもおきやく様じやと手をさげる

○つとめつらいかわ三味ねこのかわのたりおきやくはこけのかわ

○つれてゆかねばはてしがつかぬどうでぎりづくゆかりやせん([illegible]おりやせぬ)

なの部
ねの部

○つらい中にもおまへがあれば
わたしやくろふもわすれ草
○月もながれにその身をまかせ
くるわがよいのうか〳〵と
○つらいつとめもぬしさんたよ
り夫にうわ氣な事ばかり
○月夜がらすは夜にまよふてな
くわしはおまへにまよふてな
く
○つらいけふしをながらへいる
もすこしたくみの有ゆへに

ね

○ねてはかんがへおきてはしや
んこうもやるせのないものが
○ねんの內から女房じやけれど
なぜかだんなさんといゝにく
い
○ねてはかんがへ起キてはふさ
ぎ何をたよりのうきつとめ
○ねんをゆびをり（以下、原本ナ
シ）

な

○ないてくれなようたがいはれ
たかわゆけりやこそむりもゆへ
○なんのいんぐわで他人がいと
しそだてられたるおやよりも
●なくな庭鳥お茶屋のからすな
くも其夜のきやくによる
○何がなんでもそわねばならぬ
そふてくろふがして見たい
○なんぎ硯の海やま越してくろ
ふするすみ男いし
○何がふそくで枕をなげたなげ
た枕にとがはない
○ながる月日にみじかい命なん
のあくしよがやめらりよふ
○ながしみじかしふたこしきめ
てどこかかよいのりゝしさよ
○何のいんぐわでわしやしやば
へきたいきてそわるゝ身では
なし
○なぜかけふ〳〵はあいとてな
らぬいつにおろかはなけれど

も
○なんのかの辻口先キばかりころしもんくにこりた物
○泣てくらすといふてはわるいぶじで暮すとゆておくれ
○なんぼおまへが浮氣じやとてもしんにほれたがしれぬかへ
○ながのねんきを一まいがみにふうじこめたる身のいんぐわ
○ながゐのれんに何屋と書て中で帳合イこちの人
○なんぢやおかんせ其手じやゆかぬだましこまれたわしじやもの
○何がなるぞへくがいの身にはじつをいふても茶にせられ

ら

○らんじやさわぎじやこうなるからはどふで此家はかりのやど

む

○むりなくぜつをわしからしかけねさすまいとて夜もすがら
○むすぶいもせのしたひもといてぐちなせりふも戀のはな
○娘したがるその親たちはさせて見たがるしゆすの帯
○むかふかどみにわしやいゝわけの心からなりや腹がたつ
○むねになみだをわしや持ながらあいそづかしもすきの道
○むりは男のつねとはいへどこうはなさりよふはづがない
○梅はやへさく櫻はなゝへなぜにあさがほたゞひとへ
○梅はいろよく咲てはゐれどうぐひすがなかおかしかろ
○むかしじやわたしも花とも見たが今はかれ木の枝とみる
○むねと／＼とをむすんでおいてしらぬかほすりや猶いとし

う

○うちはかんどうくるはせかれどこに身をおくしまもなし

ゐの部

のの部

○うわ氣さんすなせけんの人が
浮氣物じやといふわいナア

○うでに我名をいれさせおいて
夫につまらぬむりばかり

○浮キ名たてられそわずにいて
はぬしも立まいわしは猶

○うそじやないのに茶にするお
まへほんにわたしはヱヽじれ
つたいわいナア

○うちでせくのはしよふばいか
らよきやくのせくのはわしや
つらい

○うき名たつとていまきれらり
よかするのとゝかぬ戀しても

○うちで大目に見やんすからは
するのつまらぬ事はせぬ

ゐ

○ゐつそあわねばこふした事も
ほんに有まいうさつらさ

○ゐとしけりやこそわしから先
へぬれてあまへてよるの雨

○いやでことわりいふではない
がなぜか今宵はおりわるい

○ゐまの今迄たがいのくろふく
ろふしたのも水の泡

○いきなおかたとおもふてほれ
て跡で情がなかおかしかろ

○ゐとし誰かはどこかにおいて
わしは此家のうきつとめ

●一の鳥井こし二のとりゐこし
てもはやあつたもちかくなる

●いせじでるときやなんだでで
たが今は吹來る風もいや

○ゐけんするほどこんじよがま
がゐつのりやするともきれは
せぬ

の

○のめやうたへや今宵がかぎり
あすは出舟の風をまつ

○のちに逢ふとわかれた儘で待
どくらせど便りない

○のでも山でもそわねばならぬ
思ひきる氣はさらにない

お

○おもひ出すぞへどこかの坐しき今にわするゝひまはない
○おもひだすのはわすれるからよ思ひ出さずにわすれずに
○おふてたつ名がたつ名の内かあわでこがれて浮名たつ

く

○くがいする身は浦山ぶきの花はさけどもみはならぬ
○くれのかねなら千里もひゞけ聞かせともない明けのかね
○ぐちがこふじてせなかと背中あけのからすが中直り
○くろふする墨身はすみぞめのぬしに命をかけすゞり
○くるか／＼とゆふつげ鳥の飛をながめてしやんがほ
○くもにかけはしかすみにちどりおよびないとはおもへども
○ぐちはゆふべのくぜつの殘りこよいまたきてむりばかり
○くにもところもへだてゝすめば夢のごけんをまつばかり
○ぐちな女ごの心としらでしんとふけたるかねのこゑ

や

○やがて行ぞへどこかをさしていやな此さとあとに見て
○やけとでかけてのむひや酒もすこしたくみのあるゆへに
○やけとでかけてのむ酒よわでたまにあいする酒に醉ふ
○やめておくれよばくちと酒をわしもやめませよ茶わんざけ
○やほなよふでもまさかの時は水の流もとめて見しよ
○やほなよふでもまさかの時はぬしにちじよくはとらしやせん
○やけじやどやけじや呑をれさわけどふで此家にいるじやなし

○やめろしやれるなじたばたするな下駄の工面もできやせまい

○やぼめ手なしといわんすよりもいやじやあいたとゆておくれ

○やぼなよふでもまさかの時はぬしのおかほはつぶしやせん

○やつれさんした三日月さんよおまへそのはづやみあがり

○やけじやどやけじやあふまでかよへすへでそふやらそわぬやら

○やがてみやんせせかれた人に物の見事にそうてみしよ

ま

○まゝになるなら何しにぬしを人にだきねをさせはせぬ

○まゝよいなかも又すみよかろぬしとふたりでくらすなら

○まゝになる身かなんぞのよふにきては泣たりなかせたり

○松の葉のよふなこまかい氣をもつなひろいばせうばに氣をもちやれ

○まゝにならぬは承知でほれてまい夜逢とはわしがむり

○まてばあわるゝ身をもちながらせいてせけんをせまくする

○まつがつらいかまたるゝよりもうちのしゆびしてでるつらさ

○まつがつらいか煙りがうゐかしん氣まくらのそらねいり

○まつがつらいかわかれがうゐかまつはたのしみわかれうい

○まぶとやほとをならべて見ればちがふ物かへゆきとすみ

○まゝにあわんす人さんがたを見るにつけてもはらがたつ

○まゝに氣まゝにあわるゝならばぐちやみれんはいゝはせぬ

○まてどくらせど便りのないは思ひきれとのしらせかへ

け

ふの部

○けんはみなもとはふじとよむなぜに吉のじよしとよむ

○けふはひとしほあいとてならぬいつにおろかはなけれども

ふ

○ふじの山でものぼれば下るそれにわたしはのほりつめ

○ふじの山ほどのぼらせおいて今はつるべのさかおとし

○ふつと目がさめだきしめ見ればぬしとおもへば夜着のそで

この部

こ

○こゝろぼそさをすいりよふさ

んせ木にもかやにもぬしひとり

○こよひ〳〵とまつ夜はあけて今朝はむかしのかねのこゑ

○こしにやたてを帳面もちてかよひづとめはいつの事

○心つくしてかいたる文もぬしは茶にしてまくら紙

○心ばかりをかよわせおいてせみのぬけがら身はこゝに

○こふはたがなす半氣ちがいにみんな誰かがなすわざよ

○こんの前だれ松ばのちらし松にこんとはわしやつらい

○これしおまへとこうなるから

はすへはめうとじや我つまよ

○戀にこがれてかほ三井寺のかねがわかれかまゝならぬ

○戀にこがれてなくせみよりもなかぬほたるが身をこがす

○ござれ斬ませよに松の木のもとで松の葉のよにこまやかに

○こゝとどこかどかごぬけならばぬけてあをものいま一度

○こんののれんに何屋とこめてなかにいさんすかほ見たい

○こんなわかれをせうとはしらず玉の御げんになくばかり

○こいで〳〵とまつ夜は來いでまたぬ夜にきてかどにたつ

○五大力ではわしやないけれど
ゑんとじせつのすへをまつ

○爰はてゐともどこかはくもれ
いとしたれかがひにやける

●ごうど傳馬丁にふた瀬がござ
ゐ思ひ切瀬ときらぬせが

え

●えんはいなもの是あじなもの
遠い三河といせ產れ

○榮はさかゆる彌はいよとよむ
なぜかたれかはよみがなひ

て

○てい女たてゝもわかれていれ
ぼうわきするかとうたがわれ

○てんのほしほどお人はあれど
月と見るのはぬしひとり

あ

○あきもあかれもせぬそのなか
を人のくちゆへとほざかる

○あだとじやけんを車にのせて
どこの誰かにつなひかせ

○あじな所でかんしやくおこし
夫を手にしてきれる氣か

○朝な夕なにまくらがかわる枕
かわらぬつまほしや

○明のからすとには鳥にくいか
わい男の目をさます

○あさぎ千筋あいびろどの羽織
あれがわたしのけんしぞや

○朝のかへりに袖ひきとめてし
んぼさんせと目になみだ

○あんな男にどうしたものじや
ほれた誰かが氣がしれぬ

○あんな男とゆびさゝれてもほ
れたやまいはなほりやせん

●ありがたいやのすゞしのかや
で中でするがや永らくや

○あさの六ッからやたてをこし
にざいごあるきはこちの人

○あるはいやなりおもふはなら
ぬまゝにならぬが腹がたつ

○あへば名がたつあはねばゆか

ししらぬむかしがましであろ
〇あくしよぐるいのなるたけな
されどふで此家(ママ)はかり
のやど
〇あめはしきりにふれどもはれ
るわしが思ひはいつはれる
〇あへばたがひにすてばちいふ
てあわざこがれて泣であろ
〇あすのわかれはいつよりつら
いあふてなま中物おもい
〇あいた見たさは飛たつばかり
みては泣たりなかせたり
〇あいたみたさはとびたつけれ
どかごの鳥かやまゝならぬ
〇あいたさにくる見たさにかよ
ふすがたかくしつきりがふる
〇あへば嬉しいかほ見るけれど
わかれおもへばまたふさぐ
〇あるが中にもへだてのふすま
あるにかひなき捨小舟

さ

〇さぞやさぞ〳〵さぞいまごろ
は淋しやかたに只ひとり
〇酒をのむなと御いけんなれど
酒はつとめのうさはらし
〇咲てくやしやせんほん櫻鳥も
かよわぬ山おくに
〇酒やたばこでわすれるよふな
淺イほれよはせぬわいナア
〇三味のみすじでまぎれていれ
ど哥のせうがで思ひだす
〇酒はさかやによい茶は茶やに
ぬしはどこかのどこやらに
〇三のいとよりきれよい人に心
つくして今くやし
〇酒じやおもひ出したばこじや
わすれとかくたばこはわすれ
ぐさ
〇さいた櫻になぜ駒つなぐこま
がいさめば花がちる
〇三味のいときへみすじにわか
るなぜにわからぬぬしの胸
〇さん里山みち貳り半かけてお
茶をひことてかよやせん

き

○きれていたとて何にくかろぞ
いやでわかれた中じやなし

○きせるかたてにひざたてなを
しわしがむりかと門に涙

○きれたおきやくにとちうで逢
ふてものもいわずになみだぐ
む

○菊にませがきゆいとめられて
今はしのぶにしのばれず

○きれてみれんで又たちかへり
こんどおふのは命がけ

○きせうせいしはほぐにもなろ
がいれたほくろはどうなさる

○きれていた迚何にくかろぞあ
つさ寒サもとふてやる

○木にもかやにもおまへがたよ
り夫にじやけんな事ばかり

○きりよのよいのとすがたにや
ほれぬ人はみめよりたゞこゝ
ろ

○ぎりもしらないわたしといほ
がぎりもせけんもいとやせん

○きれてしまへとみな人さんが
いけんするほど腹がたつ

○ぎりもせけんもいとわぬなら
ばなんのよしみに此つとめ

○きやくのきれるもいといはせ
ぬが内でよしあし聞つらさ

○きやくのおちるもいとゐはせ
ぬが跡でよしあし聞つらさ

○きじもなかずばうたれはせま
いわしもでやねばほりやせま
い

○きれてくりよならきれてもや
ろがいちどごけんのそのうへ
で

○ぎりといふじが是ないならば
あんな男に何のその

○ぎりをわきまへせけんを思ひ
死よりせつないいきわかれ

○きれてしまほと硯にむかいお
つるなみだがすゞり水

○聞ておそろしおにづたなれど

つけてやさしきもん所
○菊ときゝやうはどちらがいもと同じいせうについのくし
○ぎりのかすがいなさけのくさりひくにひかれぬ中となり

ゆ

○ゆわれまいとはおもひはすれどおまへゆへにはいろ／＼と
○ゆふじやなけれどたしなましやんせあじな噂があるわいナ
○ゆふておくれよことづけしたとないてくらすとゆておくれ
○夕し御げんはけんくわでわかれあとはつぢうらたゝみざん

○夕し御げんはうれしいけれどなまじあしたの物おもひ
○ゆふにゆわれぬわがむねのうち夫にわからぬむりばかり
○ゆふなかたるないろへもだすなやねでふる雪むねでとけ
○ゆふてこまそかいわずにおこかさきのしうちをみての事
○雪やこうりとへだてはあれどとけておつればおなじ水
○ゆふておまへの心がはれりやきゐてわたしがむねくもる

め

○めにはみねどもあなたのすがたむねにみぬ日はないわいナア
○めでもものいふ坐しきのばやひかほでかくふみむねでよめ
○めしも喰ふまいたばこもいやよ妾でひや酒二ツ三ツ

み

○みたいあいたい山ほとゝぎすすがたならずばこゑなりと
○みれば見わたすさほさしやとゝくなぜにとゞかぬ我おもい
○み月四月は袖でもかくすもはやなゝ月なんとせう

みてもみあかぬせんたく見てもたてしかゞみとぬしいかほ

○水の流はおろかな事よどこかかよいもとめて見せよ

○水にはなれぬおし鳥さへもなれしつばめに袖しぼる

○水の流と身の行すゑはどこのいづくにとまるやら

○みれんながらもいわねばならぬぐちとおもわゝおもわんせ

し

○しんのやみにもまよわぬわたしまよいますぞへぬしゆへに

○しんでくれなよわづろてくれ

なつとめさすのも今しばし

○しんぼしやんせしばしの内じややがておまへのまゝになる

○しんぼしなよと口ではゆへど朝のかへりにやばんにきな

○しんぼしよふよりどろぼふさんせくびのないのもいきな物

○しかとだきしめかほうちながめこうもかわゆく成ものか

○しばしあわねばすがたもかほもかわるものかへこゝろまで

○しんで花みはさかぬといへどいきて實のなる身ではなし

しんきしんくの心のたけを書ておくれとかたたより

○しやんしかへてのく氣はないかしよせんそわるゝみではなし

○しんじゆしましよかかみきりませよかかみははへもの身はだいじ

○したはおきせん二かいはおきやくのぼるはしごはしでの山

○じつも誠もみないゝつくしまくらならべてかほとかほ

○しよてははづかし中ごろゆかし縁のきれめはつらにくや

○しよふじ明ればもみじの坐(座)敷もはやお客も龍田川

○じつも誠もよにあるときよか

わりやすきは人ごゝろ
○しよせんあふ事はまゝにはならぬ文の便りをまつわいナ
○しよせんうき名がたつからまゝよせいだおかたとそふてみしよ
○しよふき大じんとこのまのかけじいやなおきやくをはらいたまへ
○しよふき大じんとこの間のかけじすいたお客をまねきたまへ

ゑ

○ゑじのたく火とほたるのむしはやくやもしほのみをこがす
○ゑんとじせつをまてとはいへどじせつ所かかたときも

ひ

○ひとがいふならひとまづきれてあとはたがいのむねにある
○人はちよいと見てちよいとほれなさるわしはしんそこみにやほれぬ
○人のいやがるどうらく男にれたわたしは又いんぐわ
○人がいふならひとまづきれてかわるまいぞや胸とむね
○人のそしりもせけんのはじもおまへゆへならいとやせん
○人のいゝなし北山しぐれくもらなき身は晴れてゆく
○人をたのんでこうじやとゆをかたどし打あけ咄そふか
○人がしらぬとおもふかしやれ(マヽ)か今はりこうでめでさとる
○人のとのごでほめるじやないがおせのたかさよはのしろさ
○人はうらめしいろこい花よわしは日かげのうすもみじ
○人にやしたゝかくろふをさせて捨ておまへはあだごゝろ
○人のいけんもわるくはきかぬ色はしやんのほかじやもの

○ひぐれ〱にあなたのそらを見ては思わず袖しほる

○ひざにもたれてかほうちまもりものもいわずにめになみだ

○ひろいよふでもどこかはせまい誰にあかさん人もなし

○ひろいせかいにわしやすみながらせまふたのしむすきのみち

○ひにちまいにちおかほはみれど物もいわれぬぎりとぎり

も

○もはやおまへも秋風なればすゝき尾花をまつばかり

○もしも道中で雨ふるならばわしが涙とおもわんせ

○もとはうわ氣であいそめ川のふこうなるほどあいにくい

○もんにつけたや何かの紋をつけて見たならさぞやさぞ

○もんの中でも何かがすきじやすいたたれかの紋じやもの

○もんは何かをつけてはゐれどいやなお客とねるつらさ

○もとは五本の此ゆびなれど

（以下原本ナシ）

○もとのおこりはみなわたしゆへ人に恨はないわいナア

せ

○せ田でわかれてあわづの此身いつかおかほを三井のかね

○せいであわさぬその親かたに戀のしよわけがしらせたい

○せいであわさぬあのみせばんにあだなドしがきかせたい

○せかれてもまたこうあいたいは神のばちかへおくゑんか

○せじでわらふて心でなゐてしゆびをつくろうそのつらさ

○せじでわろうて心で泣ていやなざしきにいるばやる

○せん兩万兩のかねもちよりも

わしはおまへの氣にほれた
○せきしよこへてもそわねばならぬあすはなわめにおよぶとも
○せん里はしるよふな虎の子がほしいたよりきいたりきかせたり

す

○すいた櫻や梅さへあるになぜに柳はみだれがみ
○すこしやすもとうたゝねすればぬしの夢見てまたふさぐ
○すそをとらへてこれ聞かしやんせ買じや誠じやエヽじれつたいわいナア
○すゑのやくそく心の儘にはなすまもなき夏の夜や
○すいな水仙わしや藤の丸心まよわすつたのもん
○すいたおかたとそわれぬ時はすみのころもであまでらへ

右凡計四百五十有四員

追加

○つらやはかなや勤の身なりやおほへない事うたがはれ
○くるか〳〵と沖へ出て見ればはまの松風音ばかり
○もみぢふみわけ鳴鹿の毛は戀の文かく筆となる
○ひとり來たぞへあの山中を谷でつま呼鹿の聲
○すゞり墨とはおもふてくれななきの泪で書た文
○硯墨とはわしやおもやせんまつよ涙でよむわいナア
○つれて退んせ東都のかたへ通(道)の路銀は胸にある
○月夜烏にふと眼が覺メて嘸や今頃寐てであろ
○いとしかわゆのせうこは今に殘す目黒のひよく塚
○かわゆがらるゝお客はいやであたまはらるゝぬしの側

○せめて一日つがいの女夫人のうはさも身のねがひ

○かどに立ゝんす悲しさつらさぬれて寒かろつめたかろ

○そらを見さんせ鳥さへつがひわしは獨りで夜もすがら

○ぬしをおもふてふさいで居れば日〳〵にうといと笑はんす

○心からとはわしやいゝ（マヽ）ながらやほな親御の御かんろふ

○せくな親かたなぜしよて出したしよてに出さねばほれはせぬ

○つらいなんぎな峠を越してなんのかわろぞ今更に

○わしはうたがふぬしやつゝまんす中をとりもつ哥と三味

○ぬしは水仙わしや玉椿ふたり根〆の床の花

○人のそしりもせけんのぎりも捨ておまへに情たてる

○おちよ半兵衛じやわしやなけれども親がそわさにや死ぬかくご

○なんぼおもふてもお庭の櫻垣の外トから見る斗り

○しんぼしてまたそわれぬ時はやもめ暮しの末をまつ

○ぬしにそわねばわしやいつ迄もねぐら定めぬやもめどり

○あいを隔てわしや居るけれど心ばかりはぬしのそば

○苦界しらねばあい眼、聞な（以下、原本ナシ）

○いわにせかるゝわしや瀧川のわれて逢夜の嬉しさは

○ひなら九十日月なら三月もふすまいぞへ何事も

○あまりつらさに山へ出て見れば雲のかゝらぬ山もある

○いとしあなたも小藪の雀（ママ）なるも落るも人しらず

○いやなお客の情に落てひくにひかれぬ義理よ（ママ）まつ

○むかし松の葉ふたりも寐たが

今は芭蕉葉に唯獨り
○せかれてもよいこう成からはぬしもしやんが有であろ
○しんで花實が咲ものならば比よく塚にも花が咲く
○月夜恨めしやみならよかろ御手を引合てしのぼもの
○お客日照りが百日してもいとし誰かに出ればよい
○お月樣さへりん氣が深イしのぶ共夜は猶てらす
○山のおくでもそわねばならぬ落葉薪にしてなりと
○いとしかわいの雪駄の音はもしや夫かと氣にかゝる

○逢ふてわかれは夢見たような夢の浮世に夢を見て
○ひく手あまたのおまへじやとても人にやなさけとぎりがある
○人めいとふも斯ウならぬ先キ今は浮名もたたばたて
○いかな惡日くろ日の日でもぬしにおふ日は天赦日
○綾やにしきで卷かるゝ迚もいやな枕がかわさりよか
○たとへ緣なきふたりが中もじつと／＼でそふて見せよ
○嬉し戀しのかさなるうへはつらやしんくな事ばかり

○ちへのつるべがみじかいゆへにぬしの心がくみにくい
○なまじなま中あはねばかほど今の思イはあるまいに
○じつなおまへとせけんの噂惚れたわたしははかられぬ
○いつもじやけんなアノ明烏玉に逢ふ夜を知りもせず
○ぐちをゆわずとよく聞わけよあわぬ此身は猶つらい
○戀の淵瀨と世上のぎりとつらい勤と三のいと
○文でこま／＼かいてはやれどあへば嬉しさ口へ出ず
○文は手管とゆわんすけれど胸

にない事書はせぬ

○ぬしがありやこそ故郷をはなれ今ははかなきしらぬさと

○雪はちらつく喘しはつもる今朝の寒さに歸さりよか

○女房有身に惚なといふはどこのやほめがいふたやら

○つみな事じやがまかせぬにつけ先キの女房がにくふなる

○女房ばかりか殊更子迄何を頼にほれたやら

○あふた共夜は誠とおもい跡はうたがふ戀の欲ク

○ぬしを待夜は人こそしらね時をかぞへて疊ざん

○ほかへ心をうつして見れどいつかおまへの事ばかり

○思ひ染川わたらぬ先キはかほど深イと露しらず

○枕ならべて寐る時よりもかげのそしりが聞かせたい

○ゐんがほれたかほれたが緣か花ももみじも手につかぬ

○すいな人さへ戀路にまよふましていたらぬわしじやもの

○お客つとめか（がカ）一坐のなかで心見らるゝいたこぶし

○月はまん丸ひへてはいれど心さへねばいつもやみ

○まさか思ひを汲わけさんせやぼなおまへじや有まいし

○すいもぶすいも共身になれば人をやぼじやとわらわれぬ

○あいそづかしも誠のたねよ何ンの思はぬ人といを

○くろうくるしみ浮かんなんも昔語りと成わいナア

○物や思ふと問人あらばせめて頼んぬしの事

○酒でつらさをしのぐと知らで呑なやめよと心ない

○月は傾く夜はほの〴〵ともはやせきなき（マヽ）いとま乞

○おもい出せば去年のけふしすへの事迄いゝかわし

○こがれ〳〵て待甲斐ながきあへばひそりの捨詞

○ぬしの事ゆへ内證へ呼れ又もいけんの共つらさ

○迚も添れざ三途の川へ浮名沈めて情たてる

○大事がらるゝお客はいやでぶたれ叩かれ主の側

○いけんする度思ひがましてけふも逢たいあすの夜も

〔音曲神戸節 畢〕

○人に野菊とわしやわらわれて操守りてひとへ咲く

○花にたんざく付なもよいがぬしの有枝手折まい

○ぬしはする墨わしや硯水戀も涙もぬしの胸

○人の戀路の枝折人はなさけしらずの山あらし

○ないた顔見りやまんざらうそもとかくみれんにひかさるゝ

○いけんまじりにはじしめられて顔をそむけて目に涙

○岩にせかるゝわしや瀧川のわれて逢夜の嬉しさよ

○ぬしは何所かにわしや此町に花じやなけれどちり〳〵に

○うらみますぞへいづもの神を縁のむすびがちがふてある

○はよふわたしに眉毛をとらせおらがお源といはしやんせ

——大正十五年九月。

江戸時代小說 女見立 並に 評

江戸時代小說類

はつ夏のひと夜、たわむれに、江戸時代小說類の、女見立を試みてみた。まづ、思ひつきを擧げてみる。

○假名草子　上　　　﨟　　○浮世草子　京島原、大坂新町の太夫
○洒落本　吉原てつぽう　　○咄　　本　町　女　房
○滑稽本　飯　盛　女　　　○人情本　深川げいしや
○黄表紙　踊　　　子　　　○草双紙(合卷)御殿女中
○讀　本　武家女房

間々窮したのもあるが、しかたがない。全部が全部に、適當な女が行き當らない。咄本と、黄表紙と、此の二つは、もつといゝ案じがあるかも知れない。其他は、動かすべからずと、自分では思つてゐる。次は、評語。

假名草子

浮世草子

假名草子が、上﨟だとは、誰も思ふだらう。又、江戸時代小說の中で、上﨟の氣分がするのは、これ一つだと思ふ。まづ無難ともいふところか。浮世草子も、八文字屋物になり下つて來ると、太夫よ

り成り下つたものも現れるが、然し、まだ何といつても上方氣分だ。品はあつても、甘味のない、それでゐて安つぽいやうな感じがする、安つぽいで無ければ淺つぽい（こんな詞はないが）やうな氣がする。深味がない。しつくり我らに滲み込まぬ。但し西鶴物だけは、除外、それに其磧も「禁短氣」ぐらゐのものは、である。丁度、上方女郎だつて、千が千、淺つぽいとも限らぬやうに。本當の太夫の格のある、（但しこの太夫、譯知り床上手たる事が條件。）江戸の花魁にも負けぬ太夫もあつた筈だから。

酒落本

酒落本。これは、吉原の鐵砲と格を下げた。隨分、酒落本も初期のものは、下品とも限らないが、無体に、品のわるさは爭はれぬ。が元來が情事の世界は、品ではうまくない。手も洗はぬ所に、面白味、超越感があるのである。松の位の格には、どうも思へぬ。やはり歌麿描くの「北國五色墨」のてつぽう、あの乳房あらはな、いやといふ程私を啖るあの嬌態——寧ろわじるし態が、酒落本の氣分といひたい。

噺本

噺本、これは、少々無理だつたが、が然し、町女房が描かれてゐ　それが多い事は、無論だ。がさりとて、此奴、花嫁御ではない。ちよつと浮氣つぽい、芝居も好きなりや、亭主が腎虚でもしさうな、氣の利いた、六感のよく發達した大年增だと見たい。迂濶な男どもは、このおかみさんに、いつも煙管でくらはされてゐるといつたものに。

滑稽本

滑稽本の飯盛女は、自分ながらうまい。卑しさと、しかし旅の恥は搔きすてで、誰でも見たがるところ、それに一九の「膝栗毛」などの聯想もあつて、わるくはなからう。

人情本

人情本は、「梅暦」があながちその代表作だから、といふのではないが、はおりで

黄表紙
草双紙
讀本

適當であらう。人情本の世界は、男は、カラ意氣地なしだ。女が意地張をつらぬく。そこに辰巳げいしやの味が多い。吉原では、だめだ。花魁にこきつかはれてゐるのが、吉原げいしやだつたんだから。黄表紙の踊子といふのは、一寸色氣があり、また俗つぽいところもありといつたためにつけたので、まだ適當なのがあるかも知れない、が、洒落本と人情本とに比較したら、やはり踊子ぐらゐだらう。草双紙の御殿女中は、これは、動かぬこと請合。需要者から云ふも、また描かれた書かれた世界から、いふもである。「田舍源氏」に囚はれたなどといふべからず。讀本（よみほん）の武家女房、これもたしかだ。馬琴は、怒るか、賞めてくれるか。荒婬ものには、迚も向かぬ、がさりとて案外、武家女房にも、不義を犯したり、心中に突つ走つたりしたものもあつた。それは、ちやうど、馬琴の堂々たる、こけ威（おど）しの（これは、馬琴に氣の毒だから、小さな聲で讀む事。）表面形式のなかに、案外ふしだらな、あくどい、好色の世界を描いたり、さうした女性――勿論それは武家のものとも限らないが――を描いたりしてゐる、即ち「八犬傳」の船蟲、「美少年錄」の嬌態は、如何。と考へて來たら、却つて假面を被つて隱現する、御守殿何とかの女賊をいうてよいかも知れない。といふと、馬琴に叱られよう。

筆者としては

以上、自選自評、かくの如し。筆者としては、洒落本と、咄本とだけを好（す）く事をいうておく。但し凡てが、年増で、たほで、氣が利き、手も利く事が、條件也。（昭和三年五月）

稿本（主に戯作もの）に就て

——附たり、家藏本十八種の解說

稿本の蒐集

最近、稿本が趣味的にも文献的にも認められてきて、これが蒐集に心がける人が多い。從つて、此頃、市場に現れても、思へばくだらぬ此種のものであつても、案外の高値を呼ぶことがある。成程、稿本を高値呼ばはりする譯は、慥かにあるとは思へる。自分だつて、その價値を相當に認めてゐる一人であるから、或は、自分贔屓の論になるかも知れないが、假りに、價値づける理由を、極の常識的に述べてみよう。（以下の稿本、本論では、凡て戯作物の謂に限つておく。）

未刊物の稿本

稿本は、本來いふと、天下一本である筈である。その作者（つまり筆者）が、有名にしろ或は無名にしろ、とにかくその男の書いた稿本といふ以上、天下にそれ一つの存在よりしかない譯である。これがために、蒐集欲を先づ唆るかと思ふ。それが、未刊に終つたものゝ稿本であれば、より以上である。刊本の在るもので、その稿本なれば、稿本以外　刊本によつて知られるのであるが、未刊物のその稿本とたれば、一層である。（即ち刊本物の稿本は、その作者の自筆に接するといふ意味だけのもので、又珍奇の趣味も唆りはするが、徹底すれば、その作者の手紙又は短冊でもいゝ譯である。即ち此

分は、文献的にいふよりも、一種の骨董癖であらう。（例へば、最近紹介せられた初代種彦の「田舍源氏」の第三十九編、第四十編の稿本の如きである。但しこれは、出版を豫期してのものであるから、稿本の中でも、嚴密には、草稿本といはねばならぬけれど。（草稿も稿も同じだといふ議論も起きようが、私は、これをかく區別したい）

有名作家より無名作家

が、性質上、未刊物の稿本といへば、無名作家のそれが多い。有名なれば、その稿本の存在が、そのまゝ未刊に終らしてゐる筈がない。生前に大抵は出版せられる筈である（京傳の「深川大全」の如き、死後、遙か後の年代に於て、豐芥子によりて出版せられた例もあるが、）先づ、有名作家の稿本に於て、出版せられなかつたといふのは、その作が作者自身も低下と認めて、出版を拒否したか、又は「田舍源氏」の如く、出版中絶の已むなきに至つた理由のものもあらう　したがつて今日、たしかに稿本として存在してゐるものの大半は、有名作家より無名作家のものが多いのである。

こゝで、私は、稿本にもつと委しく分類してみたい。一ごたなしに稿本といへない程、種類が生じて來ると思ふ。今日、古本屋のいふ意味の稿本と、我々の稿本の意味とは、もつと嚴密に區別せられねばならない。古本屋は書かれたものであれば、（刊本以外）それが寫本らしいものであつても、或は、單なる自筆寫本であつても、稿本だと決めてしまふ。それでは困ると思ふ。次は、私の下した稿本の分類である。

稿本の分類
一、稿本（未刊稿本）
二、草稿本
稿本と紛らはしき物
一、稿本の寫本

稿本の分類

一、稿本（分り易くは、未刊稿本）

これは、私のいふ純粋のものであつて、有名無名たるを問はず、その筆者の未刊のもの丶稿本の謂、しかも作者の自筆と見極められるものたる事。

二、草稿本

これは、刊本あるもの丶、その草稿となつたもので、即ち刊本の版下（筆耕の手に成つた版下本）の底本となつたもの。この作者の草稿（挿繪あるものは、挿繪の繪柄、人物の様子なども、大抵作者の粗筆で、その希望を現してゐる。）を得て、挿繪は畫家により、又文字は筆耕により、版下として淨書せられた。（それを彫刻して摺り出したもの、刊本である。）その基をなしたもの。即ちこの草稿本には、これと同様の、寧ろ整然とした文字と或は繪より成つた刊本ある事を豫期しての上のものである。

稿本として、私の下すものは、以上の二者よりないのであるが、偖、これに紛らふものが、數種ある。それに就いていはう。

稿本と紛らはしき物

一、稿本の寫本

これは、先づ最も紛らはしいものである。作者の自筆になつた稿本といふ物は、恐らく特別の事情のない限り、（或は、准刊本の意味で、今日の謄寫版といつた便宜な機械もない昔であるから、同一作者の自筆によつてなされた自筆稿本が一部以上在るかも知れない。さうして、發表欲の滿足を求めたのである。〔中には、これにより、利を得たものがあるかも知れない。〕但しこれは、無名作家の場合に、多く限られてゐる）一本より無い筈である。從つて、好事家又は、暇の多かつた且つ趣味者によつては、その無名作家の純粹の稿本に感激して筆寫して製本、一部を自分も貯へたかも知れない。刊本のものすら、丹念に筆寫した隱居爺などが、昔は多かつたのであるから、老後又は老年者と限らず、若くとも暇のあるもので、戲作の讃仰者は、稿本なれば一層これを筆寫又は、影寫したかも知れない。それが今日偶ゝ現れて、作者の自筆稿本と間違へられさうな事もあり得ると思ふ。

二、稿本の貸本用寫本

二、稿本の貸本用寫本

これは、右の分と同じである筈だが、目的が貸本であるから、二にした。これは私は、大惣（名古屋に於ける、近世の大貸本業。大野屋）本の如きに、好例を知つてゐる。即ち、貸本用として、何部も同じ物が拵へてあるのである。これは、作者の自筆になつたものもあらうが、大部分は、貸本屋御用の筆耕の手になつたものであると思ふ。

三、刊本の寫本

三、刊本の寫本

これは、無論、無名氏の閑餘のすさびに成つたものである。がそれが達者に寫してあれば、（影

寫本には、この達者の味が少い。何處かに、澁滯するからである。）一見して稿本と間違へさうなのが多い。がこれは、刊本の存在を知つてゐれば、容易に判別が付くであらう有ぐらゐのものであらう。版下本は、一見して、稿本と見違へられさうもないから、此の說明から略いておく。

倂、紛らはぬ方の、稿本にあつて、しかも私のいふ草稿本ではなく、純然たる稿本（刊本なきもの）に於ても、內容からは、左の如き區別がつけられよう。

內容上の分類
一、創作
二、剽竊本

稿本の內容上の分類

一、創作たるもの

二、剽竊本たるもの（多くは、題だけ更へてゐる。）

これは、案外、所謂稿本と稱するものに多いのである。即ち先人刊本の內容をそつくりそのまゝ寫して、稿本らしく見せかけ、作者名は、無論その先人ではなく、筆者（乃至は筆寫者）自身の名に更へ、年代もその筆寫了の年月と更へ、いかにも新しきものたるかの如く見せかけ、自分の虛榮を滿足させたもの。これは、刊本の寫本が稿本と間違へられさうなものより、一層厄介だ。此の贋創作的稿本は、序文ぐらゐは、自分の工夫で作つてゐるのが多い。（及び本文書き出しの一二丁）又、本文も影寫ではなく、筆致暢達、いかにも自分のもの〻如く見せかけてゐる。

從つて、その鑑別は、内容を讀まねばならぬ。が、その内容も、外題を更へた刊本に、これと全く同一なものがある事に氣が付かぬ限りは、一杯喰はされるのである。

三、燒直し

三、燒直しのもの

これは、半ば創作、半ば剽竊といつたもので、多くは年月を隔てた昔の大家の刊本その内容を半分拜借して、半分は、自分が肉を附けてゐる。ういふ内容のものである。半分剽竊といつても、筋や會話が大部分それを取つてゐるので、大抵は、人名を更へ、場所も更へ、又、ちよい〱新味を盛つて、自分の見聞を混へてゐる。これが幾分か才筆らしいものになると、そのツギハギの處がうまくごまかしてある。即ち錦と襤褸とのツギ口である。此の類になると、純創作か、半創作か、又は三分一創作かの鑑別が、中々面倒である。これは、まづ通讀して、思ひ當る所によつて、刊本のそれと類似したものと對校せねばならぬ。が刊本の全部に、迚も眼は通せないし、且つ眼は通し得ても一々記憶がないから、或は、創作的稿本だと信じてゐる中にも、よく調べると、此の三分一創作ぐらゐのものがあるかも知れない。

まづ、右の三個であるが、稿本として、その作の優劣はとにかくとして、一ばん價値のあるのは、無論第一の純創作のものである。

鑑別の困難

が、誠に、第二第三の剽竊又は燒直しの鑑別も、困難である。なぜかといへば、隨分、同じ刊本で

あつても、現に私の知る限りに於て、即ち洒落本の如きは、刊本同士で、此の第二、第三のものがある。くはしくいふと、作者を更へて、題を更へて全く同一のもの（序文も、本文は勿論）がある。これなどは、多くの場合、同一版木を用ひて、唯、題と作者とを彫り更へ埋木してゐるのである。第三の燒直しのものにも、ぶつかる。これは、序文を更へ、本文も、或部分まで更へて、然し大半は、昔の評判物をその儘借用したといふもので、その借用の部分は、舊版木と同一、即ち舊版木を用ひたり、又は全く彫り直したりしてゐるのもある。が全部新刻といふよりは、此の補足版木本の例が多い。これなどは、本屋（即ち舊版木所有者、又は舊版木買入者）と後の僞作者と共謀の上の仕事であらう。だから、刊本よりは、一般的ではない、即ち彼此の同一又は類似又は剽竊燒直しを氣づかれない程度の稿本形式のものに於て、これがあるのは、當然の事である。

私は、何も稿本本位では蒐集に心がけてはゐないが、たま／＼見當るものを、數年來買ひ求めてきた。が中々、稿本の全く稿本らしいもの（即ち純創作）は乏しい。大抵は、第二の剽竊本か、又は第三の燒直し本が多い。刊本の寫本を攫まされることは、滅多にない。これはまだ鑑別が、私に於ては容易であるからである。が無論、本屋は、これらも一括して稿本だというてゐるのである。

洒落本の稿本といへば、最近東京の天鈞居氏の和本類入札の折にも、此の洒落本稿本は、洒落本刊本の中に混つて、八種ほどあつた。即ち左の類である。

●傾城買杓子規（風月樓）。
●夜色のかたまり（玉守）。
夜慶話（嬉丸）。
花盛夢の春駒（一向）。
古物尋日扇香記（扇香）。
和嘉意業散財寶。
●四季の花（露曉）。
後要心身上八卦（玉守）。

私は、下見には行かなかつたが、入札後、二三の本屋の手を經て、希望どほり全部を見る事が出來た。買はうと思へば、全部が買へたのである。それが右の八冊のうち、頭に●を附した三點だけは、無理して購つたが、他はいくらにも我慢が出來なかつた。試みに、他の五點が、どんな品物であつたかを、私の判斷した程度で述べてみよう。これも何かの御參考にならうと思ふのである。（自分購入の三點は、こゝでは說かない。）

剽窃及び焼直しの例

「古物尋日扇香記」は、芝の扇香といふ男、無論芝全交をもぢつた名であるが、その男の作で、享和元年酉水無月の序のあるものである。一寸誠に創作稿本らしく出來たものである。初めに數丁の作者の序がある。これは、恐らく彼の創作であらうが、本文は讀んで行くと、直きに分る程度の剽窃である。というて、一字一句、その儘といふのではない、京傳の寛政三年の「錦之裏」の剽窃ではあるが、「錦之裏」に比べると、これは、文句のところ〲僅かに更へたり、又は人物會話事件を、順序を更へたりしてゐる。が結局、若干の修正、順序を更へられた「錦之裏」を出でない。勿論、作者にも多

少の良心があつたと見えて、その序文に、京傳の青樓書の世界（即ち「錦之裏」の事）に依つたとは書いてゐるが、依つたのではなく、盗んだのである。が盗んだと書いてゐない所に、作者の野望も窺へる。唯結末の二三丁分が趣向を更へて「錦之裏」と全く別物にしてゐる。即ち序文と結末の二三丁とが、彼の創作である。さうした物であつた。その癖、刊本の眞似をして、卷末には、堂々と爾餘の作目錄を三四點書き立てゝゐた。又冒頭には、作者の自畫像らしきものを描いてゐる。寛政三年から享和元年へ、僅かな距りで、かうだから恐れ入る。それに「錦之裏」だつて、寛政三年版のものは、絶版をうけて、稀であるにしても、當時、すでに似た僞版のものが、生れてゐた筈だ。（この京傳作數種の洒落本僞版本の話は、他の機會。私は、此の僞版の發生を、法令の寛になつた寛政八年頃か、九年には、その一部分が上司に知れて罰せられたと思ふ。或は、寛政十一年頃かと思うてゐる。）さうした時に、かうしたものを拵へて、人に自惚れてゐる作者の大膽さには、呆れ返る。

「和嘉意桑散財寶」は、これは京傳の「新造圖彙」の剽竊のやうなものであつた。「夜慶話」これは、全く刊本「夜慶話」嬉丸作、實は京傳の「傾城買四十八手」の補足改題再摺本で、「四十八手」の僞版本本文全部の版木を使用してゐる本。洒落本「比翼紫」の作者たる嬉丸としては、良心なきを責めていゝ本、この寫本である。影寫本ともいかない、が然しこれなどに、「夜慶話」が僞版「四十八手」の版木を全部使用したものといふ私の智識があるから、直ちにその寫本だと見極めがついたが、知らない

人からいへば、或は、婧丸自筆の「夜慶話一草稿かと見らるゝものである。これは、序文に、一九に心酔してゐるやうな意味の事が書かれてあつたが、此作の正體を明らかにはいうてゐない。矢張り創作顔をしたいずるさがある。これは讀むと、殆ど一九の「起承轉合」と同じものである。春の若いつれに岡惚れした女郎と、その相手の若い男、その若い男のもとよりの馴染女郎、及び、岡惚れした女郎の正客と、此の四つ巴の下に、岡惚れ女郎と若い男との情事が、眞劍なものになつてゆく、會話も推移も殆ど同じであるが、氣がさしたと見えて、人名だけは變へてゐる。

「後要心身上八卦」、これは、谷峨の「啞意妃思（あいがへし）」の剽窃である。但し此本、作者は、案外正直で、啞意妃思の吉原の世界を品川に更へた事、及び殆どそれによつた事とを扉に明らかにいうてゐる。さてこれも、人名と土地とを變更しただけで、本文は、のつけから「啞意妃思」である。

かういふ類である。誠に厄介なものである。

唯、私たちが認めて、容易に稿本だ、又は准稿本（摸倣なれど、新味も混りをるもの）だと分るのは、地方の材料によつたものである。地方といへば、京。大阪。江戸以外で、出版機關の不整であつた、且つその地方に、出版事業が行はれてゐたにしても、戲作類は少い、（例へば、名古屋の如きである。）さうした地方の主材になつた稿本らしいものは、まづ稿本と認めていゝと思ふ。即ち場所、人物、

事件が、その地方色を出してゐれば、たとひその作の內容が、江戶版などの大作家の、年代を昔にした刊本の摸倣ではあつても、まだ新味と特色とがあるのが多い。が中には、人名と場所だけを更へた全くの剽竊本にぶつかる事もある。

以上は、稿本（主に戲作もの）に對する私の概念である。さて左に書き足すのは、全く刊本のないもの、即ち純稿本で、しかも創作又は創作に近きものと思へるものである。數年來の自分の此種蒐集の中の、まづ無難に近いものである。洒落本、黃表紙、滑稽本の三に別ける。以下各作に就て、簡單な解說を下してみよう。まづ一括して、その書目を載せる。

（洒落本）　津國毛及（寬政十年）　○傾城買杓子規（文化元年）　○退屈酒落（文化三年）　○四季の花（文化十一年）　○夢の轆轤子（文化十五年）　○夜色のかたまり（天保三年）――以上の六種、江戶に關するもの。

南樓丸一之卷（享和二年か）　○驛客娼穿上下二冊　文化元年か）　○うかれ鳥下一冊（文化二年）○三狂人（文政十三年）――以上の四種、名古屋に關するもの

鄙風流眞垣　年代未詳――此の一本、信州湯田中の湯女を描けるもの。

（黃表紙）　きつひむだ枕春の日覺（寬政八年）――此本、駿遠三尾等に關するもの。

二世契約喫の鐵炮　寬政十一年）――此本、名古屋に關するもの。

（滑稽本）　碁目汁（文化九年）——江戸に關するもの。

副編ひざくりげ上下二冊（文政戊子〔十一年〕）——宮島參詣の副物で、備中井原に關するもの。

栗毛の人眞似初編上下二冊（天保十一年）——名古屋より豊川へ詣らんと、岡崎を經て、赤坂に至るもの。

樓中膝栗毛（年代不詳）——岡崎より吉田に至る。

七變人初編上下二冊　弘化四年　——名古屋に關するもの。

○酒落本津國毛及

○津國毛及　小本一冊　自烈亭一礎畫作　寛政十年春風日序。

七八山陰士大笑の序、花亭主人の序、及び自序、不思菴の跋、野暮亭野良の跋を添へたもので、酒落本の形式を十分具へてゐる。挿繪二個、一礎の自畫である　本文は、品川遊里本で、職人二人一坐、通人三人一坐の二章に分れてゐる。一寸、「南極驛路雀」（寛政元年版）に似たものである。作者はじめ序跋者とも凡て不詳（作者名が、じれつてい、いつその宛字たる事、謂ふまでもなし。）

傾城買杓子規

○傾城買杓子規　小本一冊　風月樓一枝畫作　享和四（文化元年）孟春序。

自叙と本文。吉原本である。白屋の宴、青樓の睡、の二章に分れ、二章とも、作者の一枝を人物として描いてゐる。一寸、刊本には餘りない形、稿本なればこそと思はれる。刊本でも一九のものなどは、時々ツマに一九自身の體驗を出すこともあるが、）草庵での集合、それから青樓行、形式は、酒落

本の型を行つてゐる。此本、天鈞居本の中。

退屈洒落

○退屈洒落　中本一冊　澁柿眞頂紀作　文化三年十月成。

叙跋なし、直ちに本文、初會五人一座、二人遊び、翌日の噂の三章。遊里小説なれど、北か辰巳か南か不明。翌日の噂といふのが、面白い。翌日の、女郎がする客の下馬評である。即ち樂屋裏をぶちまけた體である。その「翌日の噂」の章に、女郎どもがする退屈しのぎの尻つぎ（尻取）がある。これが面白く、この作者の當時、此の種の尻取文句が流行してゐたことを思はせられる。本文の末に、右悉、澁柿眞頂紀病中慰云々とある。作者の本名不詳。（此本、挿繪なし。）

四季の花

○四季の花　小本一冊　露曉畫作　文化十一年夏の日序

自序と本文。本文は、可なりの量。一、大門の事より、十七、女郎の嘘とまことに至る十七章。大門口の圖、かくれかご、二挺立の圖などありて、吉原大全類のものと、洒落本「白狐通」と「傾城買猫の巻」などの形を一つにしたやうなもの。それ〴〵初めに固い由緒書、總評の如き文字あつて、後、會話本位のその氣分打出の小説體の文、その末に狂歌或は川柳などを添へてゐる。材料は、凡て、吉原。露曉なるもの、無論不明（此本、元天鈞居本）

夢の艪拍子

○夢の艪拍子　小本一冊　花月庵堀舟作　千鳥畫　文化十五年陬月序

千丈應外　判によつて、菊池氏、號が蘭町といふのであらう。）の序、松堂千丈（千丈應外と同人。

同じ蘭町の印この後序、米兆の跋　本文は第一、宵の内、ゑいけ顔やの内の段。第二、夜明　船中の段。第三、夕方　向島田村屋の段の三章。遊里に直接關係がなく、七福神物の一つで、即ち七福神の擬人化、向島遊びの體。入浴の滑稽さなどがある。千鳥の日記は、寶暦、但し七神を當世風の男六人と女一人に作りかへたもの、作者不詳。

夜色のかたまり

(一)夜色のかたまり　小本一冊　算亭玉守作　天保三年戊講の日の序

此本、自分の稿本内容の分類からいふと、第三、即ち焼直しに屬するものであるが、まだ新味多く、且つ此の作者の該時代の事物や噂などを取入れてゐるから、稿本として取扱つたものである。即ち京傳の「四十八手」を、摸倣し、時々創意を混へてゐるものである。さうして世界を品川に變へてゐる。これと同一作者に成つた「身上八卦（天鈎居人札本）よりは、まだましなもの。却つて形式は、「四十八手」であり乍ら、情調は品川であり、配材も此の作者當時のものとして、私には、飜刻材料の中に入れてゐるくらゐである。さて此本、自序（此の序に京傳の四十八手に眞似た事を告げてをり、但し「趣向（すじ）は古體（むかし）にもとづきて、名の改（かはつ）たる新當世（いまようぶり）」と稍得意な所もある。）と本文、寶玉庵三箱の跋とである。本文は、京傳の四十八手の如く、世界は大見世、容はむすこ 女郎はへや持　尤も初會以下、四章。各章の終りに川柳を擧げ、又「四十八手」のやうに短かい評を載せてゐる。だが、文章は變つてゐる　作者玉守、不詳。

（南樓丸一之卷　小本一冊　胴樂散人序　戌の春序

　この戌の春は、享和二年の戌かと思ふ。作者は序者の胴樂散人であらう。名古屋本、くはしくいふと、宮の熱田の遊里本である。都々一原始文献と密接な關係にある宮の妓女の總稱おかめと交渉の深い作である。現に傾城と書いて、おかめと假名を振つてゐる。此本、新修日本小說年表では、刊本があると思うて、その中の年代未詳の部に擧げてゐる。が、題を誤つて、南樓丸としてゐる。但し此は、今此の原本のはしがきを讀むと全く誤りで、即ち南樓丸一の卷で、南樓は、名古屋から南の樓、即ち宮の神戸遊廓であり、且つ丸一とは、南樓では、丸（金錢の意）が第一ばんだ、丸が持てるといふ、しかる皮肉な意味なのである。これを南樓丸、で切り、一の卷と讀んだ誤りではなからうか。さうして、どういふ機會に、此の外題が故朝倉氏のノートに控へられ、さうして、此の年表に載つたかは不明であるが、全く刊本の無いものと思ふ。即ち地方的一局部、宮の遊里本であり、若し出版があれば、膝下の名古屋である筈であるが、これは曾て自分としては知らぬからである。又、年表では、作者も、銅樂散人と誤つてゐる。胴であるから、樂につゞいて面白いのである。然しこれも道樂の宛字ではあるが、無論、此の本刊本のないものと思ふ。さうして、家藏のもの、或は、作者自身の自筆本（正しい稿本）ではなく稿本の寫本かは知れないが、一見した所、私としては作者の自筆本、即ち胴樂散人識の稿本らしく思へるのである。借此本、廣小路夕景色、胴樂邪宗、初會間風俗の三章。胴樂散人

序、自序（此の自序に署名なし）、胴楽散人にも、作者の事全くなし、即ち此の二者同一と見るのである。）及び本文。作内容は、當時の名古屋及び熱田の風俗資料としても亦可。文またよし。胴楽散人、不詳。（此本挿繪なし）

〇驛客娼穿　小本上下二冊　撰釋舍作　畫不詳　子の春自跋

此の子とは、文化元年の子であらう。（尚、上卷見返しには、丑文化二年六月出と落書がある）同じく宮（熱田）の遊里本。おつま八郎兵衞に人名を假りてゐるが、要するに、名古屋の遊客と宮女郎との情事の纏末である。上卷は、第一回より第三回。下卷は、第四回より第六回まで。挿繪がある、上卷に一圖、但し無落欵。偖、此本、本稿底本上卷は、元所藏者不明であるが、下卷は、元、大惣本の貸本用のもので、大惣の印と、（貳百何番の番號とが打たれてある。さうして、此の下卷と對を爲す上卷は、これも大惣の印と番號とあつて、無論此の二冊が、同じ一部たる事を示してゐるが、此の上卷が、自分舊藏本の一本の零本上一冊と全く同一である事である。同一筆耕の手に成つたと見えて、同一筆跡、唯口繪だけは、（上卷のみに一圖ある。舊藏本の零本の方がいゝ。色ざしした、綿密なもの、一寸見ると泥繪のやうな感じの繪である。）即ちこゝに於て自分は、大惣の如き大貸本屋に於ては、抱置の筆耕があつて、准刊本風に、少くとも、五六部は、同文同筆の稿本紛ひのもの（くはしくは未刊本の同一筆耕の寫本）を作つてゐたことが自ら證明し得たのである。さて此作は、作としては、宮

遊里本中の上乘（自分の知る範圍の）洒落本らしきものである。上卷、道樂上人（南樓丸一之道のと同人か）序、挨拶舍もしやくしやの宿字の自序、目錄、本文。下卷、本文、自跋、古馬耳風の跋、在雅亭の跋、綠陰霜人の跋、增井山人跋を添へてゐる。此の在雅亭と增井山人とは、當時の知名　戯作者中の二人である。增井は、或る程度まで、自分によつて輪廓が明らかにせられた。本書「江戸軟文學考異」の別項、增井山人著作考參照。其他は、作者はじめ、凡て不明。

○うかれ烏　小本下一冊　菊亭香織作　畫家不明（自畫か）　文化二年初春成

下の一冊である。二冊物であらう。作者は不詳であるが、江戸の京傳の私淑者らしく、菊亭もそれに似せ、且つ山東の印を作つて押してゐる。（このため、本屋は、京傳の自筆本だと疑つてゐたつけ。）例の宮のおかめ本の一。當時宮の第三等遊里新長屋に材を採つたものである。自跋がある。卷末にはなほ、乙丑はつ春、女郎買心見の窓、女郎買嘘の卷などを、菊亭香織作として擧げてはゐるが、此等は、唯名だけのものであらう。

○三狂人　中本一冊　桀の綾成作　挿繪なし　文政十三年初春序

名古屋本（宮に非ず）で、しかも私娼買物の一。正月七草の前晩に、三人の男が、大津町（此の町、城に在り）の京屋といふので、私娼三人を迎へて、そのかさかきに辟易する、描寫巧緻ではあるが、ちよつと猥である。が中々素人ばなれのした筆。自序、本文、宇治の別儀五座内（印に蘭洲）の跋である。凡て

序、自序（此の自序に署名なし）、胴樂散人にも、作者の事全くなし、卽ち此の二者同一と見るのである）及び本文。作内容は、當時の名古屋及び熱田の風俗資料としても亦可。文またよし。胴樂散人、不詳。（此本挿繪なし）

驛客娼穿

○驛客娼穿　小本上下二冊　撰釋舍作　畫不詳　子の春自跋

此の子とは、文化元年の子であらう。（尚、上卷見返しには、丑文化二年六月出と落書がある）同じく宮（熱田）の遊里本。おつま八郎兵衞に人名を假りてゐるが、要するに、名古屋の遊客と宮女郎との情事の纒末である。上卷は、第一回より第三回。下卷は、第四回より第六回まで。挿繪がある、上卷に一圖、但し無落欵。偖、此本、本稿底本上卷は、元所藏者不明であるが、下卷は、元、大惣本の貸本用のもので、大惣の印と、（貳百何番の番號とが打たれてある。さうして、此の下卷と對を爲す上卷は、これも大惣の印と番號とあつて、無論此の二冊が、同じ一部たる事を示してゐるが、此の上卷が、自分舊藏本の一本の零本上一冊と全く同一である事である。同一筆耕の手に成つたと見えて、同一筆跡、唯口繪だけは、（上卷のみに一圖ある。舊藏本の零本の方がいゝ。色ざしした、綿密なもの、一寸見ると泥繪のやうな感じの繪である）即ちこゝに於て自分は、大惣の如き大貸本屋に於ては、抱置の筆耕があつて、准刊本風に、少くとも、五六部は、同文同筆の稿本紛ひのもの（くはしくは未刊本の同一筆耕の寫本）を作つてゐたことが自ら證明し得たのである。さて此作は、作としては、宮

遊里本中の上乘 自分の知る範圍の、洒落本らしきものである。上卷、道華上人（南楼丸一之志と同人か）序、摸稜舍（もしやくしやの宛字）の自序、目錄、本文。下卷、本文、自跋、古馬耳風の跋、在雅亭の跋、綠蔭霍人の跋、增井山人跋を添へてゐる。此の在雅亭と增井山人とは、當時の知名戲作半業の二人である。增井は、或る程度まで、自分によつて輪廓が明らかにせられた。本著「江戶軟文學考異」の別項、增井山人著作考參照。その他は、作者はじめ、凡て不明。

○うかれ鳥　小本下一冊　菊亭香織作　畫家不明（自畫か）　文化二年初春成

下の一冊である。二冊物であらう。作者は不詳であるが、江戶の京傳の私淑者らしく、菊亭もそれに似せ、且つ山東の印を作つて押してゐる。（このため、本屋は、京傳の自筆本だと疑つてゐたつけ。）例の宮のおかめ本の一。當時宮の第三等遊里新長屋（しんながや）に材を採つたものである。自跋がある。卷末には、なほ、乙丑はつ春、女郎買心見の窓、女郎買噓の卷などを、菊亭香織作として擧げてはゐるが、此等は、唯名だけのものであらう。

○三狂人　中本一冊　紫の綾成作　挿繪なし　文政十三年初春序

名古屋本（宮に非ず）で、しかも私娼買物の一。正月七草の前晩に、三人の男が、大津町（此の町、東に在り）の京屋といふので、私娼三人を迎へて、そのかさかきに辟易する、描寫巧緻ではあるが、ちよつと猥である。が中々素人ばなれのした筆　自序、本文、宇治の別儀五座内（印に蘭洲）の跋がある。凡て

不詳。此本、座敷茶番とその題簽に角書（つのがき）やうにあるが、滑稽本ならず、洒落本であつて、私娼買を座敷茶番と洒落たのであらう。

鄙風流貞垣

（鄙風流貞垣（ひなぶりまがき）　小本一冊　作者名なし　挿繪なし　年代なし

一切不詳のものであるが、内容は、信州湯田中の湯女を描いたもので、百姓兼業の茶屋の樣子がよく描かれてゐる。一體に地方色現れ、信州辯縱横に、松代のお役人や其他善光寺などの事物が噂に上る。湯女と客との會話も拙くはない。「道中粹語錄」系統のものではあるが、家藏稿本洒落本の中、私自ら最も價値を置いてゐる所のものである。自序（署名なし）と本文、跋なし。

次は、黄表紙二種。

（黄表紙

きつひむだ枕春の目覺

○きつひむだ枕春の目覺　中本十丁　艶好畫作　寛政八年正月

十丁（一卷）物である。作者の艶好は京の西村定雅では無論無い。恐らくは、名古屋の男か。此本、駿遠三尾に材を借り、主に駿遠の名物たべ物類を擬人化して、それが、尾三の鳴海八ッ橋附近まで來る、名物爭ひ物ともいふべきもの丶一。此の家藏本を底本として、今春、靜岡縣の雜誌「木道樂」で、原本より縮少、全丁凸版をもつて複製せられたから、くはしくは說かぬ。（木道樂「駿遠叢書」第三編として出づ。和紙和裝。）

（此の複製本の題簽は、家藏本の題簽であつて、私の拙ない文字だつた。即ち私の手で改裝しておいたものである。題簽を撮らる丶ならば、本文の序の文字を擴大せらるればい丶のに、私の注意も足ら

なかつた。（寛政八年正月との年代は、本文末に現るゝ所に據つてゞある。）

○二世契約埪の鐵炮　中本三卷物　祇宗畫作　寛政十二年春の序

名古屋鐵砲町の信濃屋彌兵衛といふ家の家つきの娘と、その子飼の奉公人との情事、これに入婿した某の腹立、とゞ離縁といふのを問題にしたもので、恐らくは、實事に據つたものであらうが、場所は、鐵砲町を鐵砲洲として、江戸のやうに拵へてゐる。祇宗二十五齡作と表紙にある。作としては、中の部である。跋に、椒芽（きのめ）田樂の自筆一丁分が附いてゐる。此の一丁分、田樂の自筆に疑ひなく、私としては、全くの拾ひ物であつた。跋の前、本文末に、祇宗などの著作目錄があるが、出たらめであらう。

傾城の出雲之當座帳　十偏舍一九先生作
緣者　草さうし　三册
半男女（ふたなり）略緣記　唼屋祇宗作
草さうし三册
ムスコミヤ　此書は息子部屋にたよりて著す　祇宗著
狂歌放屁百首　三藏樓主人撰　全

とあるが、皆出たらめであらう。が、これによつて、此の祇宗は、名古屋の三藏町に住んだ名古屋當時の狂歌の大家田鶴丸（三藏樓主人）と交涉のあつた氏名不詳の男で、一九や京傳に私淑し、かれに椒芽田樂とも交つたものだといふ事が分る。

〇滑稽本
恭日汁
副編ひざくりげ

次は、滑稽本。

〇恭日汁　中本一冊　笑門福來子作　畫家不詳　辛未（文化九年）の序

洒落本とも思へるもので、一、裏店穿鑿（うがち）、二、教坊（けいこやう）世界の二章に分れ、場所は江戸。が作者の福來は、名古屋男かといふ疑問がある。それは例言に、「江戸味噌ノ甘キモ、尾張臍（へそ）マヽ）ノ澁リガチナレバ」などゝあるからである。自序、果報寢待の序、敗鼓山人の題、不詳の口繪、例言、本文の順序。二編に簀玉水とあるのが豫告せられてゐるが、如何か。とにかく稿本らしい稿本。

〇副編ひざくりげ　半紙本上下二冊　月六齋市人　畫不詳　文政戊子（十一年）春王望の序

作者は不詳であるが、備中井原の住人、氏名不詳の男である。文辭の才ありと見え、相當しつかりした物である。一九の宮嶋參詣の副編の意味で、その歸路、備中井原に於ける滑稽で二冊を爲してゐる。追序（嘉永三年中冬の年月があつて、作者が、此本改裝の折の序である。）序（作者、これに文政戊子とある。）口繪（開帳の圖）同（彌次と喜多の肖像）同（これのみ雄義綾子寫意とあつて、松と櫻を描く。）次ぎ里俗言解として、方言解の精密なもの丶五丁分など。（此の五丁分が、獨立して、方言資料たる事、謂ふ迄もない）本文。（以上、上卷）。本文のつゞき、副白（作者）、奥附（二編三冊出來の旨など）（以上、下卷）無論膝栗毛の摸擬であるが、井原の物件を採り入れてゐるだけ、鄕土史の資料として、價値があらう。正直いふと此本によつて、私は始めて備中井原の存在を知つたのであるが、該地方の人々には、溫古の材料と

して、却つて私より尊いものがあらうと思ふ。

〇栗毛の人眞似　半紙本（初編上下）二冊　石亭山猿作　自畫　天保十一年春の序

やはり、膝栗毛摸擬の一。名古屋から三河赤坂への道中。二人の人物も膝栗毛の本筋を追つて、彌次と北ではないが、佐久利兵衛と德七といふのである。當時の實材を採つた所がとりえである。作者は、金城南下市隱とあるだけで不明であるが、とにかく名古屋に住んだ不詳の男。自叙、凡例、本文（上卷）。本文のつゞき、作者の後序、奥附（下卷）。

〇樓中膝栗毛　中本一冊　南舍遊照輪作　自畫　年代不詳

本文初めには、杜若樓中膝栗毛とある。作者は南舍云々（何ぢや言ふてるわの宛字）奇異亭野林下（聞いてやりんかの宛字）の校とあるが、後序によつて同一人である事が分る。從つて、畫も落款に奇異亭とはあるが、自畫である。岡崎より吉田（豊橋）に至る、飯盛買ひの情調、人物は、やはり彌次と北の二人になつてゐる。配材は無論作者の獨創。作者は、岡崎者らしく、その附近の事であるが故に、叙述正確味と精細味とを持つてゐる。序なし、後序（奇異亭野林下の署名）がある。その後序に「予、娼婦に云々、多く金錢を棄たり、云々。於爰而二冊の膝栗毛を記して、その見料の價を以て借錢の淵をうめむ云々」とある。誠に遊蕩兒にしては、人を喰つた態度、却つて垢ぬけがしてゐて面白い。此の二冊のとは、本文の末にある、吉田滯留中の戲言、二川白須賀濱松より府中に至る滑稽、

後編を待つて見給ふべしとあるその後編との二冊を指すのであらう。

七變人初編

○七變人初編　中本上下二冊合本　南窓山人作　桃園畫　弘化四年

趣向は、江戸版「八笑人」又は「和合人」を摸倣してはゐるらしいが、内容の細部からは、別物である。即ち侍町人醫者などの七人の遊樂人を拵へ、その七人交互の滑稽に材を採つた。その趣向は似てゐるが、本文としては全く別物、摸倣追隨剽竊の迹もなく、全く、當時の名古屋及び名古屋附近を背景にとり、一種の創作である。(但し梅亭金鵞の「七偏人」と命題は似てゐるが、「七偏人」よりは先である。即ち「七偏人」は初編安政四年で、此の後である。)作・大體に於て、先づ秀作の中で、桃園の畫も、桃園とは不詳であるが、巧みである。睦月の末つがた、七人勢揃ひして、名古屋本町通り、十一屋(現在は、町を變へて、やはり呉服店として存在、昔は小間物類も扱つたらしい。)で張形を買つたりする滑稽、巾下(はばした)町を通り、甚目寺(名古屋四觀音の一。市の西三里許)へ志す道中の、漫歩の交互の滑稽失策である。自序と本文(上卷)本文と跋 いさゝか戯畫を加へて山月亭桃園(下卷)此の本、二編以下十編まで出來てゐたやうである。が、家藏本は、初編のみ。家藏本別に、此本の二編零本がある。(此分、田面摘草の滑稽。)凡て名古屋及び其附近、四季の行樂に借り、編次も四季を推移させてゐるだらうと思ふ。

以上、誠に無用の紹介であつたかは知らぬが、稿本に對する管見披露の序でに、家藏本若干によつて、近世小說史の側面觀資料の提供を試みた譯である、と理由づけるのもをこがましい。唯、家藏本右掲の大半は、拙ながらも（それも近世文壇の刊本作者の第一流に比較してゞある。刊本と雖も、末流作者も多い、それとは同樣又は以上の者もあるといひたい。）無名ながらも、當時の都鄙風俗の逸資料として、文學的價値はとにかく、逸すべからざるものとして、翻刻の機會を俟つてゐると告げておく。

尙、隨筆物稿本に對しても、若干の材料を持つてはゐるが、これは他の機會に讓る。

（昭和三年五月）

「きつひむだ枕春の目覺」の作者發見に就て

稿本黄表紙

艶好畫作

「きつひむだ枕春の目覺」は、稿本黄表紙として、曾て自分の一人雜誌「江戸軟派研究」の昭和二年一月刊（參編第七册）に一寸紹介したものである。駿遠あたりの名物（主に食べ物）を擬人化して、それが今度東街便覽の作者の所へ、正月福引の景物に罷り出る。それが明けて寛政八年の春の福引とあるから、この作の年代は、寛政八年頃と推定した。（なぜ東街便覽の作者の所へ罷り出るか。それは、この本の世に出た爲、東海道の名物が世に知られた。その禮心をかねてといふのである。）さうしてその作者は、名古屋邊のものであらう。その譯は、駿遠の名物共が尾張へ來り、鳴海に逗留、明けて寛政八年の春には、作者の所へ推參とあるから、地理上名古屋と見た。名古屋で買つたせゐではない。

稿本に違ひない事は、所々紙で細かく糊貼りがしてあつて、それにまた文章の二三が修正してあつた。畫も、拙とも巧ともつかぬもので、慥かに作者の筆、卷末に艶好畫作とあつた。畫作の稿本ではあらうが、この艶好には弱つた。京の西村定雅にも同じ雅號があつたから、さうかと思つたが、まさかと思へた。それに右推定したやうに、作者は、名古屋者と思へたからである。が結局、「東街便覽」

なる書物の著者と、此の稿本黄表紙の作者とは、同一人だらうとは思へた。その以後、東街便覽なる著を、見當る毎、書目其他で、氣をつけたが、刊本には知る由なかつた。年代は、この稿本黄表紙から見て寛政頃のものでなければならぬ。が杳として知れなかつた。が江戸軟派研究に拙稿發表以後、乞はれて駿河の「木道樂」の西ケ谷氏に此の稿本黄表紙の原本を送り、やがて此の稿本は、氏の駿遠叢書第三篇として複刻せられた。その時の某氏の解題には、此作、尾崎は、寛政頃といふが、振假名付の漢字に假名の混りたる點、明治の草双紙に似てゐるから、明治初年の物かといはれた。私は、これは、問題にならぬ誤解と思うた。が訂正意見も述べなかつた。といふのは、刊本の概念から推していはれてゐるので、地方作者の稿本といふ事を忘れてゐられるからである。

猿猴庵か

後、軟派研究の拙記述を、後の拙著「江戸軟文學考異」に採錄するに方つて、その頃までに氣づいてゐたから、作者の名古屋者かといふ以外に、新しく名古屋の猿猴庵（高力種信）の作か、それにしては、年代が一寸若いがと疑問を入れておいた。猿猴庵は、玉晁（小寺氏）と同じく、名古屋幕末の生んだ雜筆家で、小寺氏程刻命ではないが、その二三は複刻せられてゐる。「鼠璞十種」所收など。その猿猴と發音相似たりであるからの推定疑問だつた。最近の「旅と傳說」（昭和五年一月號）に寄せた拙稿「東海道地方の稿本戲作」に於ても、此の作に觸れ、その梗概を述べ、作者猿猴庵かの疑問を入れておいた。が結局、東街便覽なる著述が發見さるればよいのである。刊本に見當らないから、こ

れも名古屋あたりの稿本作かとは睨んでゐた。それが、今年一月十八日正午頃、偶然的確に分つたのである。

想像してゐたやうに、「東街便覧」の作者と「きつひむだ枕」の作者とは同一であり、私の見當も略適中してゐた。無論名古屋者であつた。唯、年代に於て、少々自分の錯誤があつた。黄表紙作の寛政八年作は間違ひないが、作者の推定材料としての年代にである。話は、斯うである。その日その時分、懇意な名古屋市内の松本書店の前を通りかゝつて、折よく主人がゐたから、中へ入つて久し振りに話をしてゐた。何か珍本はと聞くと、別に何もないが、唯、猿猴庵の自筆寫本がある、といふ。どういふ物かと何の氣なしに訊くと、松本、「東街便覧」といふ物だといふ。私は、曉天に旭を見た思ひがした。すぐ取り出させて見ると、美濃紙本に丹念に書いたもので、着彩の繪が一卷數枚入り、内容は、東海道名所圖會に似て、それを更に稍調子を下げたやうなもの、寧ろ郷土的にしたといふか、ものだ。序文を見ると、藩老か、奥田某の序があり、自序もあり、それらを綜合すると、これは七卷本で、天明六年の冬十月、江戸から高力氏、名古屋へ歸府の途に、道中の舊蹟事物を繪入で認めた。廿一日ばかりの旅次の見聞である。更に面白い事は、君侯に、此の本一本を差上げて、御座右に供したが、それが寛政十一年に燃えたとある。(此の松本本は、これより後の文政頃の序である。)更に、此の東街便覧は、水戸侯に懇望せられて、水戸侯の家老中山氏の手を經て獻上したともある。と水戸文庫

「東街便覧」現はる

天明六年冬の旅

本もあらう。君侯へ、燃えた以後又差出したか、否かは分らない。此の松本本は、著者の最初の草稿本か、又は後の複本かも分らない。が序文により、最初の草稿本にしても、後の複本にしても、その製本は後の事である。此の松本本は、全部大惣の印があつた。貸本用にもしたらしい。すれば、後の乞はれての複本かとも思つた。が松本本は、惜しいかな、七卷のうちの五卷、殘缺である。外に祇園祭や其他の見聞錄の端本とりまぜ、計十一冊ばかりあつた。値はと聞くと、二千圓といふのに、二度目喫驚した。がとにかくこれで、東街便覽は、猿猴庵の未刊著作たる事分り、且つ家藏の稿本黃表紙も、彼だつた事が分つた。

唯、一寸をかしいのは、家藏黃表紙の年代が、寛政八年たる事は、疑ひないことすれば天明六年冬の旅行と、これでは、一寸距離がある。が、天明六年は東街便覽材料の旅行の折で、「東街便覽」全部脫稿の年代は、黃表紙と關聯した寛政七年頃かも知れない。松本本「東街便覽」にも、天明六年冬旅行の見聞を綴つて、君侯に獻ぐ、それが七卷、後寛政十一年燒失とあつて、脫稿の年代ははつきり書いてない。隨分の細字であり、また一卷數枚密書入のものであるから、滿九年（天明七年から寛政七年へ）位ゐかゝつたのか、一ヶ年以上に一卷づつ。がこれは一寸解し難い。

これは最後の疑問であるが、「東街便覽」は、天明六年冬の旅行見聞によつて、寛政七年頃までより〳〵起稿、その增補（最後の卷か。松本本に無いから、斷定は出來ぬ。）示指が、寛政七年一ぱいに完

不可思議の機緣

成。それで、その完成記念に、そのうちの名物譚を戯作風に、脈捧して作りあげたのが、「きつひなだ枕」ではなかつたらうかと自分は思ふ。それは、稿本黄表紙にも、「幸はひ彼作者道中記全部せしを祝ひて、來る正月福引を催す由承りぬ」とあるからである。さうしてそれが寛政八の正月である。

とにかく、自分で曾て發表し、自分でまた發見して、自ら告ぐるは不可思議の機緣といはねばならぬ。これによつて、駿遠叢書の讀者にも、あの第三篇は、全く猿猴庵高力種信の戯作にして、稿本「東街便覧」の戯作化略本とも謂ふべき物、而もこれも稿本である事の決定を告げておく。松本本「東街便覧」の文字と、繪樣と、同一作者と誰人も判斷する體であつた事謂ふ迄もない。(昭和五年二月)

稀覯本概論

稀覯本、稀本、祕籍、皆同じやうな意味である。私が使ひ慣れてゐるから、稀覯（こう）本といつたに過ぎない。珍本、祕本といふのもある、これも別に異りはないが、坊間、やゝもすれば、これにはある誤解せられた意味を附するものもあることを、告げておく。

小説を中心

さてこの稀覯本、私が取扱ひ、所謂親炙に慣れてゐるのは、主に江戸時代のものである。私の興味と學的欲求とは、これも小説を中心としたものである。

無論、稀覯本の概念に置くものは、小説ばかりとは限らない。廣い意味の江戸文學物といふのから謂へば、小説の外に、淨るり本や、狂言本などもである。

「稀覯本攷覽」

最近、私は、昭和四年以後私に移管寄贈せられた某文庫の稀覯本百二十五種を基本にした「稀覯本攷覽」なる一著を成した。案外諸方で好評を以て迎へられてゐる。この稿を思ひついた今日から數へて一昨夜（五月四日）の東日夕刊には、好書の大先輩徳富さんが、これ以上の過褒の辭は無いかのやうに、辭を盡くして述べてゐられる。誠に著者としては、恐縮でもあり又人情並の滿悦でもある。がこれ等の好評や過褒も、要するに私の取扱つた稀覯本なるもの、並すぐれた素質のよさに拘はつてゐることゝ思ふ。これの取扱ひ方の精密さなどは、私としては苟くも古典籍に親しむ者として當然た

る事であり、別に殊更問題とせらるべきではないと思ふ。

さて、本稿は、稀覯本攷覽の蒸し返しではない。あの拙著とは全く切り放して、一般稀覯本に對する私の概念を說いてみようと思ふ。例證として、二三、今度の拙著の內容にも觸れるが、大體において、一二の自他の文庫に局限せず、稀覯本の一般論として說きたい。

稀覯本の概念

先づ最初に、「稀覯本」といふ語の概念を、私自身說明してみよう。

稀覯本は、讀んで字の如く、我々が稀に見える本である。坊間ざらにあるといふ本ではないのである。然らば、この稀覯本なるものに對する、價値的批判は、如何。無論市場價の意味ではない。その物の持つてゐる學的價値である。これには、私は、私自ら疑ひがないではない。やゝもすれば、學的價値を放れて、骨董價値に趨らうといふ傾向を、私すら感ずる折があるからである。

西鶴物

江戸時代小說壇における現はれ、所謂小說著作として考へてみる。小說壇の產物としては、今日、誰しも稀覯本の首座に置くのは、西鶴物であらう。それも稀中の稀は、西鶴の好色物、そのうちでも、「好色五人女」、「好色二代男」、さらに「男色大鑑」の類である。武家物や町人物は、割合に、稀覯ではない。勿論他本に較べて市場價の高いことは無論だが、然し如何に金を積んでも、相手が無いといふのは、二三の好色物である。好色物以外では、「懷硯」なども、傳本の少い方のものである。町人物であつても、所謂初版本（嚴密には、初摺本と謂ふべき場合が多い。）の少い意味からは、「胸算用」

の如きもである。

「五人女」の如きは、初摺も、後摺改題も存在してゐる譯であるが、それでゐて本が少い。同じ西鶴の著作で、後世に於て、かうした比較的平凡と稀覯との差がつくのは、どうしたわけであらう。それはわかりきつた話である。當時に於て、摺出の多寡による事が、その最大原因である。即ち作以外から謂へば、當時需要の多寡によるのである。

平凡と稀覯の差

初摺本と後摺本

一般論から謂へば、初摺本、後摺本の多いものは、本として比較的に平凡である。此の初摺本後摺本を、普通には、初版本とか再版本とかいふが、版は、大抵同一である。年代を違へ、版元を違へて、舊版により新しく刷り出したのが多い。即ち求版新版元本である。餘程年數が經てば、すつかり改刻（改版）して了ふやうな例もあるが、西鶴物は、殆ど舊版木の再使用、その再摺で、求版の時、二三の部分を補版して新装したといふ例外の外は、年代版元の相違だけである。

補版

此の二三の部分の補版といふのは、求版の時その部分が紛失せられて、そのため舊版本による補刻といふのが多い。

學的價値と骨董價値

西鶴本には、かうした版木を同一にした、年代と版元だけを違へた同一の本が多い。これが學的價値と骨董價値との境ひ目で、學的價値からいへば、元摺本でも後摺本でも同じで、讀まれさへすれば、おなじ譯である。それが、骨董價値からいへば、初摺本を珍とし、後摺本を平凡なりとし、又懸

初版本と再版本

け放れた價値に置く。勿論、初摺と後摺とは、版木の新鮮と多少の磨滅との相違から、初摺本の文字が鮮明、後摺本の不鮮明なのは、謂ふ迄もない。又、用紙なども初摺と後摺とは、大抵違つて來てゐる。表紙の色目感じも違つてゐる。初摺は、仕事が念入にしてもある。後摺は、それが粗雜だと思はれるのは、あながち我々後人の僻目ばかりでもない。こゝに彼此、莫大な價値（市場の）差が生れる譯である。が、どちらも、原文には違ひない、そこに學的價値からは、同一な譯である。

此頃の洋本（明治以後の新刊物。歐字の本の意には非ず。であつても、所謂初版狂ひといふことは、よく聞くことだ。此頃のは、後版本ほど、誤植も減り、增補もある筈であるのに、それでゐて未だに初版本捜しを見うけるのは、無論一種の骨董趣味から來てゐるのである。骨董趣味とは、珍奇なるものに益々加はる欲望の烈しさである。

版を違へたものは、即ち眞正の意味の初版本と後版本とは、骨董價値は無論の事、學的價値にも動搖を來して來る。その譯は、後版本は、多く初版本の忠實なる再現ではない。初版再版と較べると、再版本に、初版本とは、總體に於て線が崩れてゐるのは勿論、やゝもすれば、初版本にある振假名を落したり、又は假名を誤り彫り、漢字を違へたりしてゐる。繪のあるもの、殊に烈しい。即ち挿繪の線が、全く拙くなつてゐることである。文章の一字一句もゆるがせにしない意味からは、再版本は、此點不信用の對象たらざるを得ぬ。今の、紙型による、全くの新古同版といふ譯にはゆかないからで

ある。

西鶴の小説では、西鶴作と普通に通つたものではないが、我々が西鶴作と信じて疑はぬものに、「色里三所世帯」といふのがある。これは、廣く西鶴物一般を通じて、最も稀覯本である。此の作、今日、活字本としては、平凡、新版帝國文庫の西鶴全集の上にも入つてゐる。藤村作氏校訂の名義を有するもの。その終りに、此の三所世帯がある。伏字だらけだが、とにかく入つてゐる。然るに此等の校訂本（他には、國書刊行會本の江戸時代文藝資料に收む）は一つとして原版本を知らない。藤村氏名義の新版帝國文庫は、國書刊行會本の踏襲である（あらうよりも、あるである）。國書刊行會本の江戸時代文藝資料のは、明らかに寫本に據ると斷つてゐる。誠に、明治大正昭和と、此の「三所世帯」こそは、原版本の所在を誰人も知らない。知つてゐる、見てゐる人といふのは、嘗て知らない。すべて轉寫本によつてゐるのである。古く名古屋の大惣（有名な貸本屋）の古本が、東京へ賣られた、震災以前の帝大にも入つてゐたが、その目錄には、三所世帯があるにはある。が果して實物が、版本としてあつたか否か、あつたと證明する人もゐない。あつたにしても、あの震災で燒失。

「色里三所世帯」刊本の稀覯

此の「三所世帯」こそは、學的にも骨董的にも珍奇。學的にといふことは、現在まで二三の活字本が、凡べて轉寫本を底本としてゐるからである。文意の通じかねる所の多いのは、當然である。

「好色兵揃」の存在

今度の拙著「稀覯本攷覧」に採り入れた「好色兵揃」といふ本がある。これが、現在發見せられ

た限りの「色里三所世帶」の原版本の面影に最も近いものである。即ち「兵揃」は、「三所世帶」の後摺増補本であるからである。後版ではない、後摺である。即ち「三所世帶」に使用した版木を全部使用して、外に若干の文と繪とを新刻補足したもの。くはしい叙述は、これには略くが、とにかく「兵揃」から新刻の部分を取除いた殘りは、全部「三所世帶」の元版木の後摺であるからである。唯、「兵揃」に至つて、章を前後させたり、卷を違へたりしてゐる。それを現存の「三所世帶（寫本によつたもの）によつて、原形に直せば、忽ち「三所世帶」の全貌が、浮び上る譯である。

此點から、今度の「稀覯本攷覽」所收、原本百餘種のうち、眞に海內一と、現在までに謂ひうるのは、此の家藏本「兵揃」だつたのである。

西鶴物などは、例外であるが、今日、骨董價値で市場價を呼んでゐるもの、（市場價は、骨董價値から來てゐるのが多い。）誠に多い。學的價値、學的と謂はなくとも、その物の鑑賞價値からは、誠につまらないのが多い。西鶴などの例外はあるが、――それも年代の古きものは、學的價値と骨董價値と相伴ふものが多いが――近世、主に享保年間以後、安永天明、寛政、文化文政天保などと來ると、骨董價値からのみ來る市場に於ける稀覯本が多い。勿論稀覯本と、大げさにいふのもをかしいが、とにかく案外、稀本即高價本として、比較的馬鹿な高値を生んでゐるのが多い。

かういふのを見てゐると、私の持論だが、例へば小說に於て、「珍本は、凡作なり」といふ事がいひ

得る。今程の發行能力は無いにしても、昔の木版木で手摺の技術を以てしても、一個の版木（初版木を以てして、最大限度二千部位ゐは、摺り出し得た。年代はあさいが、小說の滑稽本に於て、十返舍一九の「膝栗毛」など、或は、これ以上の數だつたかも知れない。勿論後年の後版木も二種以上存在してゐる。小說のうちの洒落本でいふと、山東京傳の「傾城買四十八手」の如きは、これも初版木と後版木とあつて、後版の方が殘存多いが、それでも、初版と後版と合計二千部や三千部は出てゐたらう。これは、それから現在までの年數と、散逸程度と現存程度との比較から來る、私の推定である。洒落本初期の作ではあるが、後來の人情本にも近い田螺金魚作「當世虎の卷」は、初版から四五版を重ねて江戸末期にかけて、五千や六千は出てゐよう。これも洒落本の谷峨といふ男の作の「二筋道」の如きも、二版以上ある。

名作の初版と後版

かうした洒落本滑稽本類にあつて、當時名作といはれたものは、初版の摺出しも多かつた、又二版三版と、全く版木を改刻して增摺してもゐる。つまり名作たるが故に、世の需要多く、從つて舊版木の增摺、その版木が使用に堪へなくなると（即ち磨滅すると）、改刻して更に摺り出す　即ち名作は、珍本ではないのである。

珍本即凡作

その反對、珍本即凡作といふ事は、古く假名草紙、浮世草紙、洒落本から草双紙の末にまで謂ひ得られる。今はなほ、假名草紙浮世草紙の類が、出版年代が最古の故を以て、珍本即凡作中の首位に居

洒落本と讀切合巻

るが、こゝ百年も經てば、或は洒落本も之と首座を爭ふやうになるかも知れない。誠に洒落本は、本も小形であり、又一冊の枚數も薄手のものが多いから、骨董價値に於ては、益ゝ他を凌駕するであらうと思はれる。

つひ此頃まで一部（上中下の三冊、又は上下の二冊）五六十錢であつた草雙紙のうちの文化文政頃の讀切もの（これを、書誌的にいはゞ、讀切合巻）も、今では殆んどその數倍の高値となり、また高値はいゝとしても、元表紙の、錦繪摺鮮やかな、本文の手擦れの少い、讀むにも鮮明なのは、少くなつた。これなどは、益ゝ骨董價を生まう。

小咄本

小咄本といふ一群もある。大抵、洒落本一般と同じく小本か中本（今の菊半截か、四六判位の大きさ）である。そのうちでも、小本のものは、初期の、年度の古いのに多い。この小本の小咄本も、益ゝ市場に現出するものすら少くなつた。但しこの小咄本は、凡作即珍本の例より稍異ると思ふ。いづれも、小咄の初期に於ける市井の諸作を編集したもので、比較的平凡な、後期の小咄本の小咄は、この初期の小本からの剽竊やら又は摸倣、燒直しが、多いからである。卽ち元の形を知るがためには、どうしても、この流布本の少い初期本によらなくてはならないのである。

凡作の價値

凡作即珍本、この凡作といへども、今日、學的には、無くてならないものもある。文學的の鑑賞には、つまらないものであつても、それを利用する、本質を放れた、ある分科的學問上の意味からは、

珍重すべきものもある。その一例を述べよう。

方言研究の資料

今日、方言の研究が盛んである。方言にも古今の變遷はある。古代流行した方言は、古代のものの主に記錄類によらなくてはならない。その一に、之を小說に採り入れた江戸時代の滑稽本がある。

此の滑稽本の中でも、現在の方言研究にとつて、その資料となるものは、寧ろ文學的價値の少い、凡作者の作した凡作である。一九などの江戸居住の一流作者は、机上の方言採取が多い。即ち聞書によつたものが多く、自身、その土地を踏査してといふよりもである。此の方言資料の幾分となる滑稽本は、刊本と未刊本とある。刊本でも、江戸以外の作者の作に成つたものほど、第二義的價値がある。例へば、東花元成といふ男の、名古屋で出版した名古屋見物の「四編之綴足」(一九の膝栗毛の四編の增補の意味)の四冊揃や、增井山人といふ名古屋土着の男の「津島土産」の前編後編の四冊揃など。京都や大阪には、又その土地の作者で、京籍大阪籍によつて成された刊本もかなりある。

洒落本の末期本だが、讃岐金毘羅の版で、金毘羅邊の雜踏と、賣女を取扱つた匿名の士の「金郷春夕榮」といふ作もある。つまり、江戸以外の地方の、作者によつて成された一二の刊本の例である。これらは作としては、當時の中央文壇の一流作家たるには、伍するに餘りに貧弱なる文學作品である。がその郷土の臭の著しいのは、やがて郷土の風物、郷土の言語(方言)を採り入れて、今日の第二義の研究資料とは、ならぬでもない。

匿名の人の作で、奥州と九州との二人の旅人（この形式は、例の膝栗毛の彌次と北八とから來てゐるが）の京見物を主材とした「井中水」といふ二冊物がある。田舍の粹の洒落で、又井中の蛙の意もかけてゐよう。作者は、京都の男と思ふが、丹念に奥州辯と九州辯とを書きわけてゐる。これなどは、忠實な方言の筆錄といふべきであらう。

郷土作者の未刊本

　かうした本は現存はすくない。勿論、需要が一般的でもなく、年代も百年か、せゐぜゐ百二十年位の昔であるから、時代からの骨董化もまだ左程でもない。それに作者も凡庸なのが多いから、それに地方版といふ所もあり、かた〳〵市場價はさほどでもない。が、本の少いことは少い。然るにこれが、また今日の方言研究や、郷土史資料には、滿更でもないのである。「井中水」などは、殊に稀覯ともいはばいへるものである「津島土產」の四冊揃の如きもである。この種の物の、郷土作者の未刊本（原稿本のまゝ、又はその寫本のまゝで傳はつてゐるもの）の、また稀中の稀たることは、いふまでもなからう。

假名草紙と浮世草紙

　かうした末期の、從來書賈からも、本いぢりからも、蔑視せられ、問題にせられなかつた滑稽本の地方版の如きがしかりであるから、年代の古い、內容からといふよりも、本の形や畫文の體裁からも、直ちに骨董價値を呼ばれるものに、凡作たるは當然ながらも、初期の假名草紙や浮世草紙の類がある。假名草紙でも、名作家たる鈴木正三のや淺井了意のは、割に骨董價を呼ばぬ。それは、增摺數

度、又は異版もあり、以て流布が比較して平凡だからである。

西鶴の跡に、文壇の首座となつた其磧物にもこの稀覯か否かの區別がある。これは、凡作ではないが、やはり年代の古いせゐといふのか、彼の作の中で、私の知る限り稀本といふのは、三味線物（この解說はぶく。我等の讀者には、此の位ゐの概念はあらう。）以外、なほ豆男物がある。

豆男三部作の稀覯

豆男物といふのは、支那小說の飜案でもあり、又貞享元祿年間以來の空想戀愛小說の變化と進步に伴つたといふ點もあり、今から思へば、左程のものではないが、とにかく全日本文學史の小說內容から、飛び放れて空想的な作といふのは、これである。或る男が、呪文により、好き勝手な男と魂が入れかへ、相手の女性に戀愛を遂行する。平常は、これも神通のせゐで、豆大の小男となり、人の袖にでも何處にでも隱れて行く。かうした隱現自在、換魂自由の筋であるが、それが、前編後編と、其磧の作である。前編は「魂膽色遊懷男」後、再版（?）本は「榮花遊び出世男」と改題した。）後編は、女男色遊（後、再版して「色道後日男」と改題した。）といふもの。再版本もある譯であるが、傳存は、この再版本すら揃つてゐるのはすくない。共に五冊づゝのもの。その續編は、これは江戶版で、江戶作者の嗣作であると思ふが、榮花遊び二代男」といふもの、同じく五冊本。つまりこの續編は、二代目豆男である。（前編後編の其磧作は、上方版、恐らく八文字屋版であらう。

此の三部作、共に傳本がすくない。まして前編後編の元揃元版本は、最も少い。大抵の人は、再版

本の改題を、本外題だと思つてゐる。例へば、「女男色遊」と「色道後日男」とは、共に我等の所載にあるから、兩者全く同文、前者初版、後者は再版（改刻、寧ろ改悪刻たり。「色道後日男」だけ讀んでゐると、意の通じかぬる彫り違ひがあること）だといふ事が、盲目でない限り斷言出來る。世間は、狭い、此の兩者同文、版の前後だけだと知る者は、恐らく私一個のみであらう。これまで、二三の人から謂はれたが、「色道後日男」と「女男色遊」を別物に考へたり、又は全く「女男色遊（いんやういろあそび）」が、豆男の後編の初版外題だといふ事を、知らぬ人ばかりだからである。

小說以外

小說以外でも、稀覯といふのは、限りない。淨るり物でいふと、所謂る金平本、金平（きんぴら）（公平とも書く）なる男を空想的に作り出した、武張つた即ち勇士傳奇淨るりであるが、これが年代の古いせゐもあるが、現存のものが、可なり版木が疲れて、多數摺られたと思はれながら、稀覯である。無論、經書類に比較して、輕く粗末に扱はれ、從つて散佚も夥しいのであらう。金平本とよく似たものに、繪入古淨るり本がある。即ち所謂丸本の前期に屬するもの。今日の研究では、丸本の出かかつた時に、なほ繪入淨るり本も同時に存在してゐたやうであるが、大抵は丸本以前のものである。つまり小說系統特にその假名草紙と因縁の深いものであるが、（その金平本との區別は、金平又は之に似た英雄勇士を中心にしたか、せぬかによつて、私は、區別してゐる。これも金平本同樣、殆ど玩弄物として粗末に扱はれ、そのため夙に散佚したのであらう。ところが、此等の金平本、繪入古淨るり本が、今日演

劇史戲曲史などの好參考であることはいふまでもない。後來の演劇へは浮るもの系統を知る上においても、彼此の比較が、材料が豐富なれば豐富なだけ、容易に微に入り細を穿つを得るからである。

（昭和八年六月）

増訂江戸軟文學考異

大尾

昭和三年九月十二日印刷
昭和三年九月十五日發行
昭和八年十一月十日増訂印刷
昭和八年十一月二十日増訂發行

増訂 江戸軟文學考異

定價四圓八十錢

著作者 尾崎久彌
東京區神田區錦町一ノ一九

發行者 岩田岩吉
東京市神田區小川町二三ノ四

印刷者 松田雅雄
東京市神田區小川町二三ノ四

印刷所 松田印刷所

發兌
東京市神田區錦町一九番地
振替東京五〇八八三 電話神田三五九三
文修堂